

荒砥二之堰遺跡

昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

見 本

— 1985 —

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

③ 図書販売時の見本に使用後
納本したもの。
図書室に

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-353
	調査事業団保管	2/3
NO. 62-115	昭和62年6月30日	(6)

荒砥二之塚遺跡正誤表 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行	訂 正	箇 所
P 8	16行目	H.P	H'P
P 11	3行目	正形	方形
P 21	10行目	平坦	平坦
P 28	下から 6行目	微隆起帯	微隆起帯
P 28	下から 4行目	"	"
P 32	10行目	区画円	区画内
P 44	21行目	微隆起帯	微隆起帯
P 50	下から 4行目	"	"
P 51	2行目	"	"
P 52	9行目	"	"
P 52	10行目	"	"
P 59	8行目	砂状土	砂壤土
P 69	下から12行目	欠損	欠損
P 82	下から 4行目	想定	想定
P 91	下から 5行目	黄白色土壌	黄白色砂壤土
P 98	15行目	半完型	半完形
P 98	21行目	"	"
P 144	9行目	4は	3は
P 160	24行目	堅い	堅い
P 181	2行目	平坦面	平坦面
P 182	4行目	隅丸	隅丸
P 183	8行目	跡切れて	途切れて
P 255	10番行目	井上唯男	井上唯雄
P 255	8番行目	菊地 実	菊池 実
P 255	17番行目	"	"
P 256	75~78番行目	称名寺土器	称名寺式土器
P 257	121番行目	園田芳雄	園田芳雄

群埋文

62-115

荒砥^に二^の之^{せき}堰遺跡

昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 8 5

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

雄大な裾野をひく赤城山南麓一帯は、県内でも有数の古墳密集地域であるとともに、かつてこの地で暮した人々の生活の跡も数多く残されている所であります。近年、農業の機械化、近代化に合わせて圃場を整備する必要性も増し、この地域でも土地改良事業が計画、実施されてきております。本事業団では、これら事業に伴っての埋蔵文化財の保護対策の一環として、発掘調査を実施してまいりました。二之堰遺跡もその一つで、本冊子は、調査の結果得られた多彩な資料の記録を記したものです。

二之堰遺跡では、この地域では比較的発見例の少ない縄文時代の住居をはじめ、古墳時代の住居、墓等様々な暮らしの跡が発見されました。特に古墳時代にあっては、初期の頃の墓制である方形周溝墓や住居、そして、この住居の上につくられた多くの古墳も調査され、この地が、集落地から墓地へと変遷していった様子を物語る貴重な資料を得ることができました。

これら貴重な資料を記録し、ここに報告書として公表することができましたのも、終始御指導、御協力をいただいた県農政部の関係機関、荒砥南部、城南土地改良区関係者と地元地権者の方々、発掘調査や整理に直接たずさわっていただいた調査担当者をはじめとする多くの方々の総力が結集された賜物であります。ここに厚く感謝申し上げますとともに、本報告が多くの県民、研究者の方々に有効に活用され、後の世に生かされますことを念じ序といたします。

昭和60年1月20日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は1980（昭和55）年度の県営圃場整備事業荒砥南部地区に伴う荒砥二之堰遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は群馬県前橋市飯土井町1176番地他に所在する。
3. 発掘調査は1980（昭和55）年5月7日より開始され、同年9月27日で終了した。
4. 発掘調査は、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県農政部および群馬県教育委員会と委託契約を締結し、実施した。
5. 調査組織は以下の通りである。

事務担当 小林起久治、沢井良之助、近藤平志、国定 均、山本朋子、柳岡良宏、吉田笑子、吉田恵子、野島のぶ江、並木綾子（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

調査担当 井上唯雄（群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究部部長）

石坂 茂（ // 調査研究員）

小島敦子（ // ）

徳江秀夫（ // ）

なお、石塚久則、飯田陽一、原 雅信、藤巻幸男（調査研究員）、内田憲治（嘱託員）の協力を得た。

調査参加者 阿久沢忠四郎、阿久沢敏江、石川忠三、石綿元一郎、石綿清太郎、石綿信雄、石綿みどり、板橋好子、岩上いし、内田三重子、太田英明、加藤今吉、加藤ふく、近藤蓮枝、鈴木勝代、須藤東亜子、関根いせ、関根権三郎、関根盛樹、関根辰雄、関根トヨ、関根久江、関根 雅、関根 汀、中沢芳次、原島さい子、原島伸治、原島とし枝、原島のぶ子、原島美明、原島芳子、原島玲子、松井千代枝、松井りょう、松井麗子、松村栄子、山田永治、山田ミヨ、吉田アツ子、吉田権十郎（地元関係者）、須長光一（国学院大学学生）
神奈川大学考古学研究会 青木公一、泉谷 薫、上野祥介、宇都宮雅彦、大塚登志夫、川端正隆、熊崎 薫、富永 盾、中島正義、永田 哲、永松聡子、中村忠寿
明治大学考古学研究会 石橋桂一、市川隆之、岩渕典子、大島克彦、大竹憲昭、越智浩治、金丸真紀子、菊地由利子、工藤久子、斉藤幸恵、清水常和、鈴木瑛子、須藤隆司、店橋初恵、千葉周二、塚原清美、中村正明、橋本園美、松村 篤、松村好教、宮田永子、矢口考悦

6. 発掘調査後の遺物・図面の整理は、1982（昭和57）年度に行い、1984（昭和59）年度に編集した。
7. 本書作成の組織は以下の通りである。

事務担当 調査時の職員の他に、白石保三郎、梅沢重昭、松本浩一、大沢秋良、細野雅男、神保侑史、定方隆史、笠原秀樹、吉田有光、今井もと子、（群馬県埋蔵文化財調査事業団）が関係した。

編集 徳江秀夫

本文執筆 第1章、第1節、第4節を井上唯雄、第2章、第1節、第2節を石坂 茂・徳江秀夫、第3章、第1節を石坂が分担したが、他は徳江による。

図版作成 青木静江、井野みゆき（事業団嘱託員）、大友幸江、小池信子、後藤和美、須田幸子、高橋順子、高橋フジ子、田村栄子、為谷美貴子、長井洋子、平沢あや女、皆川正枝、

山田きよ江（整理補助員）、宮田永子、㈱測研、中央航業株式会社

遺構写真 石坂 茂、たつみ写真スタジオ




遺物写真 佐藤元彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団、嘱託員）

遺物の科 浜野和宗作、伊能敬司、関 邦一、宮沢健二

学的処理 （群馬県埋蔵文化財調査事業団）

8. 出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。
9. 遺物の石材鑑定は田中宏之氏（群馬県立歴史博物館）飯島静夫氏（群馬県地質学協会）に依頼した。
10. 第2号古墳出土の鏝については小林重夫氏（群馬県工業試験場）にX線解析を依頼した。
11. 第13号古墳出土の人骨については森本岩太郎氏（聖マリアンナ医科大学）に鑑定をお願いした。
12. 本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略、50音順）
内田憲治、小野山 節、唐沢保之、小島純一、坂爪久純、桜場一寿、須永光一、中澤貞治、能登 健、前原 豊、松村一昭、黛 弘道、右島和夫、宮田永子、村田喜久夫、本村豪章、山崎克己、山村貴輝、前橋市教育委員会、前橋土地改良事務所、城南土地改良区

凡 例

1. 本調査は工事中基本杭を使用して遺跡全体に3×3mグリッドを設定し、東西をアルファベット、南北をアラビア数字で呼称した。各グリッドの名称は南西隅をあてた。グリッドの傾きは、磁北より西偏20°30'である。
2. 本書における遺構番号は、整理作業時に編集したため調査時に付されたものと異なる。
3. a. 第4図 周辺の遺跡分布図中の■と○は集落を主体とした遺跡、●▶●(○)は古墳・古墳群を表わす。
b. 第1表 周辺遺跡の一覧中の所在地の項で前橋市内は町名から記してある。
c. 遺構図中の数字は遺物図の番号と対応する。縄文時代住居址ではPが土器、Sが石器を表わす。
4. a. 遺構、遺物の実測図については紙面の都合上、縮尺の統一を図ることができなかった。挿図中のスケールと照合していただきたい。また、同一図中に縮尺率の異なる実測図を掲載したものは例外をスケールのところに記しておいた。縄文土器の拓影の縮尺は1/4である。
b. 実測図中のスクリーンは次のことを表わす。
 攪乱  炉址（古墳時代住居址）
 磨耗痕（縄文時代石器）
5. 土器観察表中の記載については次の通りである。
a. 法量の項目中の略語は、高=器形の高さ、口=口縁の直径、胴=胴部の最大径、底=底部の直径をそれぞれ表わす。()内の数字は残高、又は、推定復元による径の大きさである。
b. 色調については、農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖に基づいている。色票番号は省略した。
6. 遺物写真も縮尺が不統一である。図版中の番号は挿図番号と対応する。
7. 第1図は、建設省国土地理院発行の20万分の1地形図（宇都宮・長野）を、また、第3図は2万5千分の1地形図（大胡）を縮尺使用した。

目 次

序

例 言

凡 例

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1節	調査に至る経過	1
第2節	遺跡の位置と地形	2
第3節	周辺遺跡の概要	3
第4節	調査の方法と経過	7
第5節	基本土層	8

第2章 検出された遺構と出土遺物

第1節	縄文時代の住居址と出土遺物	9
第2節	縄文時代の土坑と出土遺物	117
第3節	古墳時代の住居址と出土遺物	143
第4節	方形周溝墓と出土遺物	177
第5節	古墳と出土遺物	189
第6節	溝と出土遺物	233

第3章 成果と問題点

第1節	縄文時代	236
1	住居址の時期について	
2	柄鏡形住居址について	
第2節	古墳時代	252
1	古墳時代前期の遺構と遺物について	
2	古墳時代後期の遺構と遺物について	
参考文献		255

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置	1	第 53 図	第18号住	平面図	47	
第 2 図	遺跡の位置と周辺の地形区分	2	第 54 図	第18号住	出土遺物	47	
第 3 図	周辺の遺跡分布	4	第 55 図	第19号住	平面図・断面図	48	
第 4 図	発掘区のご案内	7	第 56 図	第19号住	出土遺物 (1)	49	
第 5 図	基本土層とテストピットの位置	8	第 57 図	第19号住	出土遺物 (2)	50	
第 6 図	縄文時代前期住居址位置図	9	第 58 図	第19号住	出土遺物 (3)	51	
第 7 図	第 1 号住	平面図・断面図	10	第 59 図	第20号住	平面図	52
第 8 図	第 3 号住	平面図・断面図	11	第 60 図	第20号住	出土遺物	52
第 9 図	第 2 号住	平面図・断面図	13	第 61 図	第21号住	平面図・断面図	53
第 10 図	第 4 号住	平面図・断面図	13	第 62 図	第21号住	出土遺物 (1)	54
第 11 図	第 5 号住	平面図・断面図	14	第 63 図	第21号住	出土遺物 (2)	55
第 12 図	第 6 号住	平面図・断面図	15	第 64 図	第21号住	出土遺物 (3)	56
第 13 図	第 7・8 号住	平面図・断面図	16	第 65 図	第22号住	平面図	57
第 14 図	第 1～8 号住	出土遺物 (1)	18	第 66 図	第22号住	出土遺物 (1)	58
第 15 図	第 1～8 号住	出土遺物 (2)	19	第 67 図	第22号住	出土遺物 (2)	59
第 16 図	第 1～8 号住	出土遺物 (3)	20	第 68 図	第22号住	出土遺物 (3)	59
第 17 図	第 1～8 号住	出土遺物 (4)	21	第 69 図	第23号住	平面図	59
第 18 図	縄文時代中期住居址位置図	22	第 70 図	第23号住	出土遺物 (1)	60	
第 19 図	第 9 号住	平面図・断面図	23	第 71 図	第23号住	出土遺物 (2)	60
第 20 図	第 9 号住	出土遺物 (1)	24	第 72 図	第24号住	平面図・断面図	61
第 21 図	第 9 号住	出土遺物 (2)	25	第 73 図	第24号住	出土遺物	62
第 22 図	第 9 号住	出土遺物 (3)	26	第 74 図	第25号住	平面図・断面図	63
第 23 図	第 9 号住	出土遺物 (4)	27	第 75 図	第25号住	出土遺物 (1)	63
第 24 図	第10号住	平面図	28	第 76 図	第25号住	出土遺物 (2)	63
第 25 図	第10号住	出土遺物 (1)	28	第 77 図	第26号住	平面図・断面図	64
第 26 図	第10号住	出土遺物 (2)	29	第 78 図	第26号住	出土遺物 (1)	65
第 27 図	第11号住	平面図・断面図	29	第 79 図	第26号住	出土遺物 (2)	66
第 28 図	第11号住	出土遺物 (1)	29	第 80 図	縄文時代後期住居址位置図	67	
第 29 図	第11号住	出土遺物 (2)	29	第 81 図	第27号住	平面図・断面図	68
第 30 図	第12号住	平面図・断面図	30	第 82 図	第27号住	出土遺物 (1)	70
第 31 図	第12号住	出土遺物 (1)	31	第 83 図	第27号住	出土遺物 (2)	71
第 32 図	第12号住	出土遺物 (2)	32	第 84 図	第27号住	出土遺物 (3)	72
第 33 図	第12号住	出土遺物 (3)	32	第 85 図	第27号住	出土遺物 (4)	72
第 34 図	第13号住	平面図・断面図	33	第 86 図	第28号住	平面図・断面図	73
第 35 図	第13号住	出土遺物 (1)	33	第 87 図	第28号住	出土遺物 (1)	75
第 36 図	第13号住	出土遺物 (2)	33	第 88 図	第28号住	出土遺物 (2)	76
第 37 図	第14号住	平面図・断面図	34	第 89 図	第28号住	出土遺物 (3)	77
第 38 図	第14号住	出土遺物 (1)	35	第 90 図	第28号住	出土遺物 (6)	77
第 39 図	第14号住	出土遺物 (2)	36	第 91 図	第28号住	出土遺物 (4)	78
第 40 図	第14号住	出土遺物 (3)	37	第 92 図	第28号住	出土遺物 (5)	80
第 41 図	第15号住	平面図・断面図	38	第 93 図	第28号住	出土遺物 (7)	81
第 42 図	第15号住	出土遺物 (1)	39	第 94 図	第28号住	出土遺物 (8)	82
第 43 図	第15号住	出土遺物 (2)	40	第 95 図	第29号住	平面図・断面図	83
第 44 図	第15号住	出土遺物 (3)	41	第 96 図	第29号住	出土遺物 (1)	84
第 45 図	第16号住	平面図・断面図	42	第 97 図	第29号住	出土遺物 (2)	85
第 46 図	第16号住	出土遺物 (1)	43	第 98 図	第29号住	出土遺物 (3)	85
第 47 図	第16号住	出土遺物 (2)	44	第 99 図	第30号住	平面図・断面図	86
第 48 図	第16号住	出土遺物 (3)	44	第 100 図	第30号住	出土遺物 (1)	87
第 49 図	第16号住	出土遺物 (4)	45	第 101 図	第30号住	出土遺物 (2)	88
第 50 図	第17号住	平面図・断面図	45	第 102 図	第30号住	出土遺物 (3)	89
第 51 図	第17号住	出土遺物 (1)	46	第 103 図	第30号住	出土遺物 (4)	90
第 52 図	第17号住	出土遺物 (2)	47	第 104 図	第30号住	出土遺物 (5)	91

第 105 图	第31号住	平面图·断面图	92
第 106 图	第31号住	平面图	93
第 107 图	第31号住	出土遺物 (1)	93
第 108 图	第31号住	出土遺物 (2)	94
第 109 图	第32号住	平面图·断面图	95
第 110 图	第32号住	出土遺物 (1)	96
第 111 图	第32号住	出土遺物 (2)	97
第 112 图	第32号住	出土遺物 (3)	97
第 113 图	第33号住	平面图·断面图	99
第 114 图	第33号住	出土遺物 (1)	100
第 115 图	第33号住	出土遺物 (2)	101
第 116 图	第33号住	出土遺物 (3)	103
第 117 图	第33号住	出土遺物 (4)	104
第 118 图	第33号住	出土遺物 (5)	104
第 119 图	第33号住	出土遺物 (6)	105
第 120 图	第34号住	平面图·断面图	107
第 121 图	第34号住	出土遺物 (1)	108
第 122 图	第34号住	出土遺物 (2)	109
第 123 图	第34号住	出土遺物 (3)	109
第 124 图	第34号住	出土遺物 (4)	110
第 125 图	第35号住	平面图·断面图	112
第 126 图	第35号住	出土遺物 (1)	113
第 127 图	第35号住	出土遺物 (2)	114
第 128 图	第35号住	出土遺物 (3)	115
第 129 图	土塚	位置图	117
第 130 图	土塚	平面图·断面图 (1)	119
第 131 图	土塚	平面图·断面图 (2)	121
第 132 图	土塚	平面图·断面图 (3)	123
第 133 图	土塚	平面图·断面图 (4)	125
第 134 图	土塚	平面图·断面图 (5)	127
第 135 图	土塚	平面图·断面图 (6)	128
第 136 图	土塚	出土遺物 (1)	132
第 137 图	土塚	出土遺物 (2)	133
第 138 图	土塚	出土遺物 (3)	134
第 139 图	土塚	出土遺物 (4)	135
第 140 图	土塚	出土遺物 (5)	136
第 141 图	土塚	出土遺物 (6)	137
第 142 图	土塚	出土遺物 (7)	138
第 143 图	土塚	出土遺物 (8)	139
第 144 图	土塚	出土遺物 (9)	140
第 145 图	土塚	出土遺物 (10)	140
第 146 图	土塚	出土遺物 (11)	141
第 147 图	第36号住	平面图·断面图	143
第 148 图	第36号住	出土遺物	144
第 149 图	第37号住	平面图·断面图	146
第 150 图	第37号住	出土遺物	147
第 151 图	第39号住	平面图·断面图	148
第 152 图	第38号住	平面图·断面图	149
第 153 图	第38·39号住	出土遺物	150
第 154 图	第40号住	平面图·断面图	152
第 155 图	第40号住	出土遺物	152
第 156 图	第41号住	平面图·断面图	153
第 157 图	第41号住	出土遺物	154
第 158 图	第42号住	平面图·断面图	156
第 159 图	第42号住	出土遺物	156
第 160 图	第43号住	平面图·断面图	157
第 161 图	第43号住	出土遺物	157
第 162 图	第44号住	平面图·断面图	158
第 163 图	第44号住	出土遺物	158
第 164 图	第45号住	平面图·断面图	159
第 165 图	第45号住	出土遺物	160
第 166 图	第46·47号住	平面图·断面图	161
第 167 图	第46·47号住	出土遺物	161
第 168 图	第48号住	出土遺物	162
第 169 图	第48号住	平面图·断面图	163
第 170 图	第49号住	平面图·断面图	164
第 171 图	第49号住	出土遺物	165
第 172 图	第50号住	平面图·断面图	167
第 173 图	第50号住	出土遺物	168
第 174 图	第51号住	平面图·断面图	169
第 175 图	第51号住	出土遺物	170
第 176 图	第52号住	平面图·断面图	171
第 177 图	第52号住	出土遺物	171
第 178 图	第53号住	平面图·断面图	172
第 179 图	第53号住	出土遺物	173
第 180 图	第54号住	平面图·断面图	174
第 181 图	第54号住	出土遺物	175
第 182 图	第1号方形周溝墓	平面图·断面图	177
第 183 图	第2号方形周溝墓	平面图·断面图	178
第 184 图	第3号方形周溝墓	平面图·断面图	179
第 185 图	第4号方形周溝墓	平面图·断面图	180
第 186 图	第5号方形周溝墓	平面图·断面图	180
第 187 图	第6号方形周溝墓	平面图·断面图	181
第 188 图	第7号方形周溝墓	平面图·断面图	182
第 189 图	第9号方形周溝墓	平面图·断面图	182
第 190 图	第8号方形周溝墓	平面图·断面图	183
第 191 图	円形周溝状遺構	平面图	184
第 192 图	方形周溝墓	出土遺物 (1)	185
第 193 图	方形周溝墓	出土遺物 (2)	186
第 194 图	第1号古墳	平面图	189
第 195 图	第1号古墳	石室展開图	190
第 196 图	第2号古墳	平面图	191
第 197 图	第5号古墳	平面图	191
第 198 图	第3号古墳	平面图	192
第 199 图	第3号古墳	石室展開图	193
第 200 图	第3号古墳	石室構築状态断面图	193
第 201 图	第4号古墳	平面图	194
第 202 图	第4号古墳	石室展開图	195
第 203 图	第4号古墳	石室構築状态断面图	195
第 204 图	第6号古墳	平面图	196
第 205 图	第6号古墳	石室展開图	197
第 206 图	第6号古墳	石室構築状态断面图	197
第 207 图	第7号古墳	平面图	198
第 208 图	第7号古墳	石室展開图	199
第 209 图	第8号古墳	平面图	200
第 210 图	第8号古墳	石室構築状态断面图	200
第 211 图	第8号古墳	石室展開图	201
第 212 图	第9号古墳	平面图	202
第 213 图	第9号古墳	石室構築状态断面图	202
第 214 图	第9号古墳	石室展開图	203

第 215 図	第11号古墳	平面図	204
第 216 図	第11号古墳	石室展開図	205
第 217 図	第11号古墳	石室構築状態断面図	206
第 218 図	第10号古墳	平面図	206
第 219 図	第10号古墳	平面図・断面図	207
第 220 図	第12号古墳	平面図	208
第 221 図	第12号古墳	石室展開図	209
第 222 図	第13号古墳	平面図	210
第 223 図	第13号古墳	石室展開図	211
第 224 図	第14号古墳	平面図	212
第 225 図	第14号古墳	石室展開図	213
第 226 図	第14号古墳	石室構築状態断面図	213
第 227 図	第15号古墳	平面図	214
第 228 図	第17号古墳	平面図	214
第 229 図	第15号古墳	石室展開図	215
第 230 図	第17号古墳	石室展開図	215
第 231 図	第16号古墳	平面図	216
第 232 図	第18号古墳	平面図	216
第 233 図	第16号古墳	石室展開図	217
第 234 図	第18号古墳	石室展開図	217
第 235 図	第21号古墳	平面図・石室展開図	218

第 236 図	第19号古墳	石室展開図	219
第 237 図	第20号古墳	石室展開図	219
第 238 図	古墳	位置図	221
第 239 図	古墳	出土遺物 (1)	222
第 240 図	古墳	出土遺物 (2)	223
第 241 図	古墳	出土遺物 (3)	224
第 242 図	古墳	出土遺物 (4)	228
第 243 図	古墳	出土遺物 (5)	229
第 244 図	古墳	出土遺物 (6)	231
第 245 図	古墳	出土遺物 (7)	232
第 246 図	溝	位置図	233
第 247 図	溝	平面図・断面図	234
第 248 図	住居址出土土器の型式		237
第 249 図	住居址出土土器の型式		239
第 250 図	住居址出土土器の型式		240
第 251 図	群馬県内における柄鏡形 (敷石) 住居址の分布		242
第 252 図	二之堰遺跡の柄鏡形住居址		244
第 253 図	周縁部環礫および周溝をもつ柄鏡形住居址		246
第 254 図	神奈川県内の「環礫方形配石遺構」		248

表 目 次

第 1 表	周辺遺跡の一覧	4
第 2 表	土坑一覧表	129
第 3 表	第36号住 土器観察表	145
第 4 表	第37号住 土器観察表	147
第 5 表	第39号住 土器観察表	149
第 6 表	第38号住 土器観察表	151
第 7 表	第40号住 土器観察表	152
第 8 表	第41号住 土器観察表	154
第 9 表	第42号住 土器観察表	156
第 10 表	第43号住 土器観察表	157
第 11 表	第45号住 土器観察表	160
第 12 表	第46・47号住 土器観察表	162
第 13 表	第48号住 土器観察表	163

第 14 表	第49号住 土器観察表	166
第 15 表	第50号住 土器観察表	168
第 16 表	第51号住 土器観察表	170
第 17 表	第52号住 土器観察表	171
第 18 表	第53号住 土器観察表	172
第 19 表	第54号住 土器観察表	175
第 20 表	方形周溝墓 土器観察表	187
第 21 表	古墳 石室計測値一覧表	220
第 22 表	古墳 土器観察一覧表	225
第 23 表	第 3 号古墳 鉄釘計測値一覧表	230
第 24 表	第 3 号古墳 鉄釘計測値一覧表	230
第 25 表	荒砥地域周辺の方形周溝墓検出遺跡	254

写真目次

- PL 1 1 第1号住居址（東から）
2 第1号住居址遺物出土状態
3 第2号住居址（北から）
4 第3号住居址（南から）
5 第4号住居址（西から）
6 第4号住居址遺物出土状態
7 第5号住居址（南から）
8 第5号住居址遺物出土状態
- PL 2 1 第6号住居址（北から）
2 第6号住居址遺物出土状態
3 第7・8号住居址（北から）
4 第7・8号住居址遺物出土状態
5 第9号住居址（北東から）
6 第9号住居址遺物出土状態
7 第10号住居址（東から）
8 第10号住居址炉址
- PL 3 1 第11号住居址（東から）
2 第11号住居址（西から）
3 第12号住居址（西から）
4 第12号住居址炉址
5 第12号住居址遺物出土状態
6 第13号住居址（西から）
7 第13号住居址遺物出土状態
8 第13号住居址遺物出土状態
- PL 4 1 第14号住居址（東から）
2 第14号住居址炉址
3 第15号住居址（西から）
4 第15号住居址遺物出土状態
5 第15号住居址遺物出土状態
6 第15号住居址埋壔の状態
7 第16号住居址
8 第16号住居址炉址
- PL 5 1 第17号住居址（東から）
2 第17号住居址遺物出土状態
3 第19号住居址（北東から）
4 第19号住居址炉址
5 第20号住居址（南から）
6 第20号住居址炉址
7 第21号住居址（西から）
8 第21号住居址遺物出土状態
- PL 6 1 第22号住居址（東から）
2 第22号住居址炉址
3 第23号住居址（北東から）
4 第23号住居址炉址
5 第24号住居址（東から）
6 第24号住居址
7 第25号住居址（南東から）
8 第25号住居址遺物出土状態
- PL 7 1 第26号住居址（北東から）
2 （南東から）
3 張り出し部
4 周礫の状態
- PL 7 5 第27号住居址（西南から）
6 （南から）
7 張り出し部
8 炉址
- PL 8 1 第28号住居址（北から）
2 （東から）
3 周礫の状態
4 遺物出土状態
5 遺物出土状態
- PL 9 1 第29号住居址（北から）
2 （東から）
3 周礫の状態
4 炉址
5 第30号住居址（南から）
6 （東から）
7 周礫の状態
8 炉址
- PL 10 1 第31号住居址（南から）
2 （南から）
3 遺物出土状態
4 炉址
5 第32号住居址（南から）
6 （西から）
7 埋壔の状態
8 炉址
- PL 11 1 第33号住居址（南から）
2 （南から）
3 遺物出土状態
4 遺物出土状態
5 張り出し部（西から）
6 炉址
- PL 12 1 第34号住居址（南東から）
2 （南西から）
3 炉址
4 周礫の状態
5 張り出し部（南から）
- PL 13 1 第35号住居址（北から）
2 （北から）
3 （北から）
4 遺物出土状態
5 炉址
- PL 14 1 第1号土塚
2 第2号土塚
3 第4・5号土塚
4 第6号土塚
5 第8号土塚
6 第9号土塚
7 第10号土塚
8 第12号土塚
- PL 15 1 第11号土塚
2 第11号土塚遺物出土状態
3 第14・15号土塚

P L 15	4	第14・15号土壇遺物出土状態	P L 22	6	第47号住居址遺物出土状態
	5	第13号土壇		7	第49号住居址(西から)
	6	第16号土壇		8	第49号住居址遺物出土状態
	7	第17号土壇	P L 23	1	第49号住居址カマド周辺
	8	第19号土壇		2	第49号住居址遺物出土状態
P L 16	1	第21号土壇		3	第50号住居址(西南から)
	2	第25・26号土壇		4	第50号住居址カマド
	3	第22号土壇		5	第50号住居址貯蔵穴
	4	第22号土壇遺物出土状態		6	第50号住居址遺物出土状態
	5	第24号土壇		7	第51号住居址(南西から)
	6	第24号土壇遺物出土状態		8	第51号住居址カマド
	7	第27号土壇	P L 24	1	第52号住居址(南西から)
	8	第28号土壇		2	第52号住居址カマド
P L 17	1	第29号土壇		3	第53号住居址(南西から)
	2	第30号土壇		4	第53号住居址カマド
	3	第32号土壇		5	第53号住居址カマド土層断面
	4	第32号土壇遺物出土状態		6	第54号住居址(西から)
	5	第34号土壇		7	第54号住居址カマド
	6	第35号土壇		8	第54号住居址遺物出土状態
	7	第36号土壇	P L 25	1	第1号方形周溝墓(南から)
	8	第37号土壇		2	第2号方形周溝墓(南から)
P L 18	1	第38号土壇		3	第2号方形周溝墓遺物出土状態
	2	第39・40号土壇		4	第3号方形周溝墓(東から)
	3	第41号土壇		5	第4号方形周溝墓(南から)
	4	第42号土壇		6	第6号方形周溝墓(南から)
	5	第43号土壇		7	第5号方形周溝墓(西から)
	6	第44号土壇		8	第5号方形周溝墓遺物出土状態
	7	第45号土壇	P L 26	1	第7号方形周溝墓(西から)
	8	第46号土壇		2	第7号方形周溝墓遺物出土状態
P L 19	1	第36号住居址(北西から)		3	第7号方形周溝墓遺物出土状態
	2	第36号住居址遺物出土状態		4	第8号方形周溝墓(西から)
	3	第37号住居址(西から)		5	第8号方形周溝墓遺物出土状態
	4	第37号住居址遺物出土状態		6	第8号方形周溝墓遺物出土状態
	5	第37号住居址遺物出土状態		7	第9号方形周溝墓(南から)
	6	第38号住居址柱穴内遺物出土状態		8	円形周溝状遺構(南から)
	7	第39号住居址(西から)	P L 27	1	二之堰古墳群全景
	8	第39号住居址貯蔵穴		2	第3号古墳群全景(南から)
P L 20	1	第40号住居址(西から)	P L 28	1	第3号古墳石室構築状態(左壁)
	2	第41号住居址(北東から)		2	玄門の状態
	3	第41号住居址遺物出土状態		3	遺物出土状態
	4	第41号住居址遺物出土状態		4	遺物出土状態
	5	第42号住居址(北から)		5	遺物出土状態
	6	第42号住居址遺物出土状態		6	遺物出土状態
	7	第43号住居址(北から)		7	遺物出土状態
	8	第43号住居址遺物出土状態		8	遺物出土状態
P L 21	1	第48号住居址(南から)	P L 29	1	第1号古墳(南から)
	2	(南から)		2	第2号古墳(南から)
	3	遺物出土状態		3	第4号古墳(南から)
	4	土層断面		4	第5号古墳(南から)
	5	遺物出土状態		5	第6号古墳(南から)
P L 22	1	第45号住居址(西南から)		6	「前庭」状遺構
	2	第45号住居址遺物出土状態		7	第7号古墳(南から)
	3	第46号住居址(西から)		8	石室構築状態(左壁)
	4	第46号住居址遺物出土状態	P L 30	1	第8号古墳(南から)
	5	第47号住居址(南から)		1	羨道部

P L 30	3	第9号古墳(南から)	2	第28号住居址出土遺物
	4	遺物出土状態	3	第29・30号住居址出土遺物
	5	第10号古墳(南から)	4	第30号住居址出土遺物
	6	掘り方底面(西から)	P L 46	1 第31号住居址出土遺物
	7	第12号古墳(南から)	2	第32号住居址出土遺物
	8	石室構築状態(左壁)	3	第34号住居址出土遺物
P L 31	1	第12号古墳遺物出土状態	4	第35号住居址出土遺物
	2	遺物出土状態	P L 47	1 縄文時代住居址・土壇出土遺物(外面)
	3	第13号古墳(南から)	2	縄文時代住居址・土壇出土遺物(内面)
	4	玄室・人骨出土状態(西から)	P L 47	3 縄文時代住居址・土壇出土遺物(外面)
	5	第14号古墳(南から)	4	縄文時代住居址・土壇出土遺物(内面)
	6	遺物出土状態	P L 48	1 縄文時代住居址出土遺物
	7	第20号古墳(東から)	2	住居址出土遺物
	8	第21号古墳(南から)	3	住居址出土遺物
P L 32	1	第11号古墳(南から)	4	第2～8号住居址出土遺物
	2	「前庭」状遺構	P L 49	1 第9・10・12・14～16・23号住居址出土遺物
	3	石室構築状態(左壁)	2	第26号住居址出土遺物
	4	遺物出土状態	3	第28号住居址出土遺物
	5	石室構築状態(右壁)	4	第28号住居址出土遺物
P L 33	1	第15号古墳(南から)	P L 50	1 第30号住居址出土遺物
	2	第16号古墳(南から)	2	第30号住居址出土遺物
	3	第17号古墳(南から)	3	第27号住居址出土遺物
	4	第18号古墳(南から)	4	第25・29・32号住居址
	5	第19号古墳(西から)	P L 51	1 第31・32号住居址出土遺物
	6	遺物出土状態(石室の南側)	2	第33号住居址出土遺物
P L 34	1	第1・12・13号溝(南から)	3	第35号住居址出土遺物
	2	第3号溝(南から)	4	第28・32・34号住居址
	3	第4・6号溝(西から)	P L 52	縄文時代住居址出土遺物
	4	第5号溝(西から)	P L 53	縄文時代住居址出土遺物
	5	第4・6号溝(西から)	P L 54	縄文時代住居址出土遺物
	6	第11号溝(北から)	P L 55	土壇出土遺物
	7	第10号溝(北から)	P L 56	1 第1・2号土壇出土遺物
	8	第10号溝(南から)	2	第3・4・8号土壇出土遺物
P L 35		第1・4～7・9～11号住居址出土遺物	3	第8・10・12号土壇出土遺物
P L 36		第12～16号住居址出土遺物	4	第9・13号土壇出土遺物
P L 37		第17・19～21号住居址出土遺物	P L 57	1 第14・17・18号土壇出土遺物
P L 38		第21～26・30号住居址出土遺物	2	第19～21号土壇出土遺物
P L 39		第27～29・32号住居址出土遺物	3	22・25号土壇出土遺物
P L 40		第33号住居址出土遺物	4	第24・27・29号土壇出土遺物
P L 41		第12・27・28・34・35号住居址出土遺物	P L 58	1 第32・34・37・38・40・42～44号土壇出土遺物
P L 42	1	第1・3・4号住居址出土遺物	2	第44・46号土壇出土遺物
	2	第4・5・7・8号住居址出土遺物	3	土壇出土遺物(石器)
	3	第9号住居址出土遺物	4	土壇出土遺物(石器)
	4	第10・11号住居址出土遺物	P L 59	第36～40号住居址出土遺物
P L 43	1	第12・14号住居址出土遺物	P L 60	第41～45号住居址出土遺物
	2	第15号住居址出土遺物	P L 61	第46・48・49・51号住居址出土遺物
	3	第16・17・29号住居址出土遺物	P L 62	第50・52・54号住居址出土遺物
	4	第19号住居址出土遺物	P L 63	方形周溝墓出土遺物
P L 44	1	第22・23号住居址出土遺物	P L 64	古墳出土遺物
	2	第21・24・25号住居址出土遺物	P L 65	古墳出土遺物
	3	第26・27号住居址出土遺物	P L 66	古墳出土遺物
	4	第27号住居址出土遺物	P L 67	溝・遺構外出土遺物
P L 45	1	第28号住居址出土遺物	P L 68	第35号住居址

第1章 発掘調査と遺跡の概要

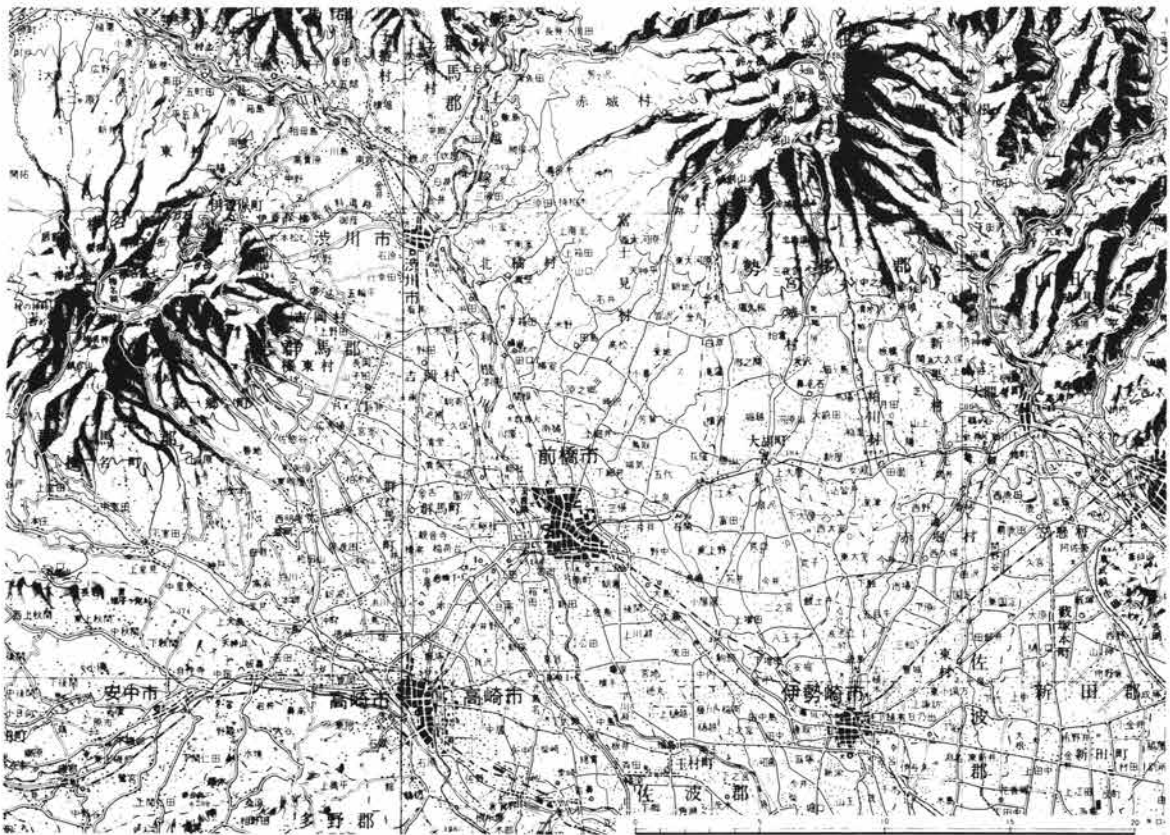
第1節 調査に至る経過

ここに報告する荒砥二之堰遺跡は群馬県前橋市の東部、旧荒砥村地域で実施された県営圃場整備事業の実施に伴って発掘調査がおこなわれたものである。

この荒砥南部地域における圃場整備事業は1975（昭和50）年度に発表された群馬県新総合計画に基づいた農用地総合整備事業の一環として行なわれたもので、約749ヘクタールの対象面積は県下でも有数の規模であった。当該地域は米、麦作、養蚕を中心とした農村地帯であり、事業の施行により生産性が一段と向上し、今後計画されている上武国道や、工業団地等の建設により様相の変革もたらされることが予想される。

圃場整備事業対象地内には、今井神社古墳や新屋遺跡、女堀遺跡等、周知の遺跡が多く存在し、考古学的に重要な地域とされていた。1974（昭和49）年度から県農政部と県教育委員会との間で文化財保護を前提とした協議がおこなわれ、事業実施にあたり工法上文化財を破壊しなければならない部分について事前に発掘調査を実施していた。発掘調査は原則として新設の道・水路と低・台地の切土部分を対象としている。

1980（昭和55）年度の圃場整備事業は、飯土井町、二之宮町、上増田町、今井町を中心に約92ヘクタールを対象とするものであった。発掘された遺跡は本遺跡のほかに荒砥島原・荒砥天之宮・荒砥宮西・荒砥洗橋の5遺跡で調査面積は合計で約50,000㎡に及んだ。



第1図 遺跡の位置

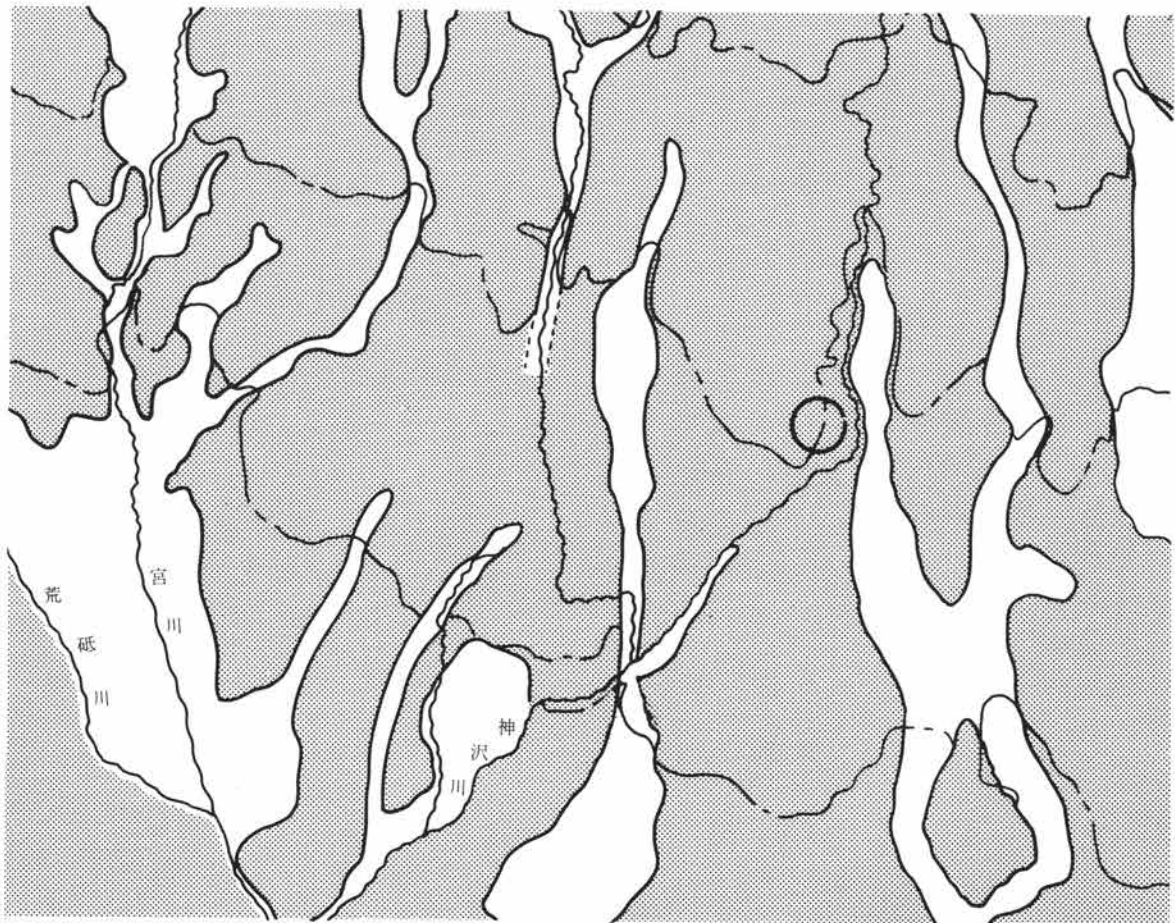
第2節 遺跡の位置と地形

荒砥二之堰遺跡は群馬県前橋市飯土井町1176番地他に所在し、国鉄両毛線駒形駅から北東へ約4kmのところに位置する。

県北部に位置する赤城山は複合成層火山で最高峰は標高1,828mの黒松山である。その山体は広大な裾野地形を形成しており、南麓では標高500m前後で山地帯から丘陵性台地への地形変換点がみられ、200m以下の地域は比高差の少ない低台地となっている。また、その末端は旧利根川の浸食によって形成された崖線で区切られ沖積地に接している。東は渡良瀬川によって形成された大間々扇状地である。

荒砥南部地域は赤城山南麓の端部にあたり、基盤層は赤城山起源の泥流層である。地表面はローム台地の原形面、砂壤土からなる微高地のほかに沖積地に分類される。地形は山麓を流下する河川、あるいは低台地から湧出する小支流などによって樹枝状に開析が進み複雑な谷地形が形成されている。

本遺跡は利根川の支川である神沢川の右岸台地とそれに付随する微高地上に立地する。この台地は、両側を河川をとまう沖積地により画されている。東側は、神沢川の流路に向って緩やかに傾斜しており、遺跡の中ほどに変換点をもち東半分はさらに緩やかに下っている。高位部の標高は92.5m。遺跡内の比高差は約5mである。台地を中心に縄文時代の住居址、土坑、古墳時代の住居址、方形周溝墓、古墳が検出された。微高地は神沢川沿いに遺跡北方にも広がっており、約0.9km北には奈良・平安時代の住居址を検出した二本松遺跡が立地する。また、神沢川をはさんだ左岸台地上にも牛伏・中畑遺跡、今宮遺跡等の遺跡が密集している。



第2図 遺跡の位置と周辺の地形区分

第3節 周辺遺跡の概要

荒砥二之堰遺跡の周辺には近年の調査により多くの遺跡が確認されている。また、三、二子古墳をはじめとする著名な遺跡も多い。主な遺跡の概要は以下の通りである。

(1)先土器時代 荒砥北三木堂遺跡においてはソフトローム層と暗色帯中から、牛伏・中畑遺跡ではソフトロームからハードロームにかけてと暗色帯中の2層から遺物が出土している。牛伏・中畑遺跡と近接して、ポイントを多数出土して著名な石山遺跡がある。

(2)縄文時代 遺跡は沖積地を臨む台地上に点在する傾向にある。前期の集落址は小規模である。中期も近接しては大規模集落の調査例はないが、赤堀村曲沢遺跡では中期～後期の110軒がある。荒砥北原遺跡では中期の住居址5軒が地形にそくして立地しており、荒砥前原遺跡においても同様の傾向が認められる。

後期の遺跡としては筑井遺跡・洞山遺跡・八坂遺跡等を上げることができる。筑井遺跡では敷石住居址、洞山遺跡では当遺跡と同様の柄鏡形プランをもつ住居址が調査されている。

(3)弥生時代 弥生時代中期後半の遺跡としては荒口前原遺跡、荒砥前原遺跡、荒砥島原遺跡があげられる。後期の遺跡は近年の調査例がやや増加している。沖積地の台地縁辺に立地する傾向にあり、出土遺物には他地域の様相をもつものも多い。これは縄文時代から奈良、平安時代をとおしての荒砥周辺地域の特色とすることもできる。

(4)古墳時代 弥生時代最終末から古墳時代前期の住居址の立地も弥生時代のそれと大差がない。石田川系、赤井戸系、櫛描文系の土器を出土する遺跡、遺構が混在している。近年の調査では、西大室遺跡群にみられるよう櫛描文土器（いわゆる樽式土器）と土師器を伴出する住居址や方形周溝墓の例が増加している。

後期の鬼高期の遺跡は前期、中期の立地を継承する形で拡大、あるいは進出している。宮川の沖積地に臨む荒砥天之宮遺跡では湧水を利用した溜井が検出された。この時代の新たな農耕技術の導入を窺わせるものである。

『上毛古墳総覧』によると旧荒砥村には、356基の古墳が登載されている。当遺跡にも今宮遺跡や宮貝戸古墳群が近接している。実数はこれをはるかに上回り、同周辺地域を含めると、500基を超える古墳が形成されていたと考えられる。今井神社古墳や赤堀茶臼山古墳をはじめとし、これに続く前方後円墳、あるいはこれらを中心とした古墳群や方形周溝墓群はこの時代を研究する上で集落分布の分析と密接不可分なもので、相互の関連性の追究が今後に残されている。

(5)奈良・平安時代 遺跡は各台地ごとにほぼ普遍的に立地するとともに台地内部まで進出しているが、掘立柱建物遺構の例は少ない。また、沖積地には浅間B軽石により埋没した水田址が多数の地点で検出され、諏訪西遺跡では微高地上も水田化していた。また、女堀の土手下を中心に畠址が検出されており、耕作土の下に浅間B軽石層（1108年一天仁元年降下と考えられる）が確認されている。

女堀は用水遺構で、当事業団による飯土井、東大室地区の調査をはじめとして数地点で調査が実施されている。女堀が未完成であったことが判明した他、当時の土木工法の実態を明らかにすることができた。

(6)中世以降 中世の城郭址としては単郭堡の大室元城をはじめとし、大室城、今井城、赤石城、新土塚城などをあげることができる。また、荒砥北三木堂遺跡では火葬墓が、富田遺跡群では多数の板碑や五輪塔と共に蔵骨器が出土しており、当時の埋葬形態を研究するための好資料が得られている。

第1章 発掘調査と遺跡の概要



第3図 周辺の遺跡の分布

第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	遺跡の概要	No.	遺跡名	遺跡の概要
1	荒砥 二之堰遺跡	本報告の遺跡	4	荒砥島原遺跡	弥生中期、古墳～平安住居址、方形周溝墓、浅間B層下水田址
2	荒砥前原遺跡	縄文住居址、土埴、弥生～古墳前期住居址、祭祀遺物、古墳	5	宮原遺跡	古墳時代前期住居址、後期古墳4基
3	青柳遺跡	奈良、平安時代住居址	6	宮川遺跡	古墳～平安住居址、古墳、浅間B層下水田址

第3節 周辺遺跡の概要

7	荒砥 天之宮遺跡	古墳時代後半～平安時代住居址、溜井4基、浅間B層下水田址	7	32	荒砥東原遺跡	古墳時代前期～平安時代住居址	26
8	荒砥宮西遺跡	古墳時代後半～平安時代住居址	7	33	大室小学校 校庭遺跡	古墳時代前期、奈良、平安時代住居址、近接して大室小農場遺跡あり	27
9	荒砥洗橋遺跡	古墳時代後半～平安時代住居址	7	34	荒砥 上諏訪遺跡	縄文、諸磯期、古墳～平安時代住居址、荒砥村第54号墳が近接	28 29
10	荒砥 大日塚遺跡	3地点を調査、古墳時代後半～平安時代住居址、浅間B層下水田址	8	35	荒砥 五反田遺跡	荒砥上諏訪遺跡と近接する。古墳後期～平安時代住居址	27
11	荒砥 上ノ坊遺跡	縄文前期住居址、弥生後期～平安時代住居址、方形周溝墓、古墳時代前期の畠址	9	36	荒砥 上川久保遺跡	古墳時代～平安時代住居址、方形周溝墓群	2
12	新屋遺跡	古墳時代前期住居址	10	37	西大室遺跡群 (梅ノ木地区)	古墳時代住居址	30
13	鶴谷遺跡	弥生後期～平安時代住居址、縄文土坑	11 12	38	西大室遺跡群 (第5次)	弥生後期～平安時代住居址、瓦塔片を出土	13
14	荒砥北三木堂 遺跡	先土器遺物、縄文前期住居址、古墳～平安時代住居址、古墳1基	13	39	西大室遺跡群 (第2・3次)	縄文前期住居址、古墳時代前期周溝墓、古墳、円筒埴輪棺	31
15	荒砥北原遺跡	縄文前期、中期住居址、方形周溝墓4基	13	40	西大室遺跡群 (第4次)	弥生時代後期～平安時代住居址、方形周溝墓群	19
16	荒口前原遺跡	弥生中期、平安時代住居址	14 15	41	向井遺跡	古墳時代住居址、平安時代掘立柱建物址	32
17	大道古墓	A・B2地点から石製蔵骨器出土	16	42	今井南原遺跡	縄文時代諸磯期、古墳時代住居址	33
18	荒砥前田遺跡	浅間B層下水田址とその下層の荒砥川の洪水により埋没した水田址を検出	13	43	川上遺跡	古墳時代、平安時代住居址、平安時代廃寺	34
19	荒砥宮田遺跡	縄文諸磯期、古墳～平安時代住居址、中世以降の土坑、前田遺跡と同期の水田址	17	44	洞山遺跡	縄文時代諸磯期、古墳時代住居址	35
20	荒砥 諏訪西遺跡	古墳時代住居址、古墳、浅間C層下畠址、浅間B層下水田址	17	45	五目牛東 遺跡群	縄文時代諸磯期、黒浜期、古墳時代住居址	36
21	荒砥諏訪遺跡	方形周溝墓群、浅間B軽石下の溝	17	46	石山遺跡	尖頭器100余点を初め多数の遺物を出土	37
22	富田遺跡群	弥生後期住居址、古墳群、中世墳墓群	18	47	二本松遺跡	古墳～平安時代住居址	38
23	柳久保遺跡	古墳時代後期、平安時代住居址	21	48	牛伏・中畑 遺跡	先土器、古墳時代後期の住居址と古墳	39
24	荒子小学校 校庭遺跡	奈良時代住居址、須恵器の窖窯	16	49	大沼上遺跡	時期は不明であるが住居址を検出	40
25	頭無遺跡	古墳～平安時代住居址、古墳2基	21	50	宮貝戸下遺跡	奈良時代	41
26	川籠皆戸遺跡	奈良～平安時代住居址	21	51	大沼下遺跡	古墳～平安時代住居址	42
27	堤東遺跡	前方後方形周溝墓、小鍛冶遺構	21	52	西稲岡遺跡	古墳時代中期の溝	42
28	荒砥中屋敷 遺跡Ⅰ・Ⅱ	古墳時代前期、後期住居址、浅間B層下水田址	22 23	53	中組遺跡	古墳時代前期の方形周溝墓	43
29	荒砥下押切 遺跡Ⅰ・Ⅱ	古墳時代後期～平安時代住居址、横穴式石室の古墳	22 23	54	八坂遺跡	縄文時代後期の配石遺構、晚期土器片	44
30	舞台西遺跡	荒子の砦と対峙する。井戸3基	22	55	西太田遺跡	弥生時代中・後期、古墳時代中期～平安時代の住居址	45
31	荒砥荒子遺跡	5世紀後半の方形区画の溝、古墳時代中・後期、奈良、平安時代住居址	24 25	56	塔心礎址	赤城神社境内にある。周辺の畑から布目瓦片を出土する	46

第1章 発掘調査と遺跡の概要

57	女堀	前橋市上泉付近の旧利根川を取水点とし、東村固定を終点とする幅15~20m、深さ3~7mの用水堀遺構	47 48	76	多田山古墳群	多田山丘陵の東斜面にあり、中里古墳は切石の石室を有する。	50
58	お富士山古墳	全長125mの前方後円墳、後円部頂に長持形石棺がおかれている。	49	77	南原古墳群	愛宕山古墳を中心に27基が存在した。	55
59	荒砥村第291墳	径15mの円墳、周辺に10数基が存在していたと考えられる。	50	78	片田山古墳群	石山南古墳をはじめ数基が群集する。祝堂古墳、牛伏1号墳も同一台地上にある。	40
60	つくば山古墳	一辺30mの方墳	50	79	宮貝戸古墳群	牛伏遺跡の古墳群と同一古墳群である。	60
61	今井神社古墳	全長71mの前方後円墳、周辺に円墳多数	51	80	今宮遺跡	宮貝戸古墳群の南にある。6世紀の古墳群である。	56
62	権現山古墳	全長70mの前方後円墳と考えられる。	50	81	蟹沼東古墳群	横穴式石室を有する円墳を主体に50基以上群集する。縄文、弥生、古墳時代前期の住居址、古墳時代前期の方形周溝墓	57 60
63	牛島古墳	円墳、周辺に4基が存在した。	50	82	地藏山古墳群	達磨山古墳、蕨手塚古墳をはじめ5~8世紀の55基が群集する。	61 62
64	伊勢山古墳群	伊勢山古墳は全長90mの前方後円墳	52	83	華蔵寺裏山古墳	全長40mの前方後円墳、前期古墳	63
65	西大室遺跡群(第1次)	荒砥村第68・70・72号墳が調査される。大稲荷古墳、横俵古墳群とも呼称される。	19	84	ツボロ古墳	径8mの円墳	50
66	阿久山古墳群	径28mの阿久山古墳を中心とする群集墳である。	50	85	新土塚城跡	宮川の左岸台地上に位置する	64
67	丸山古墳群	円墳群	50	86	赤石城跡	高さ4mの土居を周した本丸と腰曲輪	64
68	天神山古墳群	円墳を主体として60基以上が群集した。	50	87	城山遺跡	赤石城に近接	64
69	後二子付小古墳	全長30mの前方後円墳	50	88	今井城跡	荒砥川右岸、その支流との間に立地する	64
70	前二子古墳	全長95mの前方後円墳、横穴式石室	53	89	荒子の砦跡	東西80m、南北120mの単郭堡	64
71	中二子古墳	全長85mの前方後円墳	53	90	大室城跡	本丸、二の丸、さき曲輪等があった	64
72	後二子古墳	全長76mの前方後円墳、横穴式石室	53	91	大室元城跡	大室城跡の北西500mにあり。単郭	64
73	五料山古墳	三二子古墳の北東、小丘陵上に立地する	50	92	関屋敷遺跡	南北、東西ともに150m。土居が残る	64
74	丸山古墳	径40mの古墳	50	93	中屋敷遺跡	東西100、南北130mの範囲をもつ	64
75	赤堀茶白山古墳	全長45mの帆立貝型古墳。木炭櫛の主体部を有する。家型埴輪等を出土	54				

第4節 調査の方法と経過

荒砥二之堰遺跡は昭和54年度末に支線610号道路部分の遺構確認のための試掘と第4号古墳、第16号住居址、第44号住居址等、一部の調査が行なわれたが本格的な調査が開始されたのは昭和55年5月7日からである。

当遺跡は文化庁作成の『全国遺跡台帳（群馬県）』、『群馬県遺跡台帳（東毛編）』にも登録されており、古墳群の存在と縄文土器が濃密に散布していることは周知されていた。そこで最初に遺跡の限界と包含層の状況を把握することを目的とした試掘をおこなった。実施にあたっては圃場整備の工事用基準杭を利用して3×3mの方眼のグリッドを設定し、東西をアルファベットで、南北をアラビア数字で呼称した。試掘は南北3m東西1mのトレンチを東西に6mピッチ、南北3mピッチに、設定して実施し、部分的にその設定の密度に変化を与えた。トレンチにより試掘を実施した範囲は4,500㎡である。試掘調査によりℓライン以东は表土下に円礫を多量に含む黄褐色土が続き、遺構の存在が想定できないこと、支線611号道路の部分には縄文、古墳時代の住居址が存在することが確認された。その後表土は重機により掘削した。支線602号道路、支線607号排水路についても表土を重機により排除して遺構の検出をおこなった。

調査が開始された段階で、既に周辺の圃場整備事業も進行していた。古墳群の分布について『上毛古墳総覧』を参照したところ、当初予定されていた調査範囲外、支線607号排水路の北側にある高まりは総覧掲載の荒砥村第256号古墳の位置に近く存在することがわかり急ぎトレンチを設定して試掘を行った。

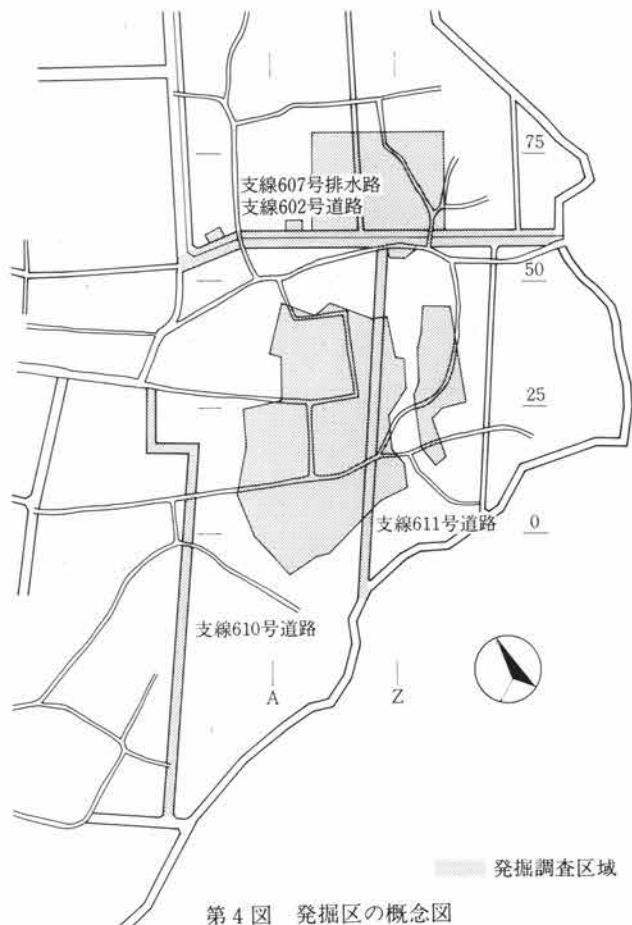
結果、古墳の封土と考えられたものは後世の土粒の移動により形成されたものと判明したが、方形周溝墓の周溝（第9号方形周溝墓）と縄文時代の住居址（第22号、第23号住居址）が検出された。県農政部との協議の上、5月中に支線602号道路以北の調査を終了することが決定され、方形周溝墓5基、縄文時代住居址2軒が調査された。

また、Z～eラインの間の未調査部分については工法変更により保存された部分である。

以後、V～Zラインの間の調査を進め、9月27日に全ての調査を終了した。

検出された遺構は縄文時代の住居址35軒、土壇47基、古墳時代の住居址19軒、方形周溝墓9基、円形周溝状遺構1基、古墳21基、溝状遺構12条である。

調査面積15,000㎡に対し、調査期間は5カ月であり、多期、多種の遺構の調査は極めて困難にならざるを得なかった。



第4図 発掘区概念図

第5節 基本土層

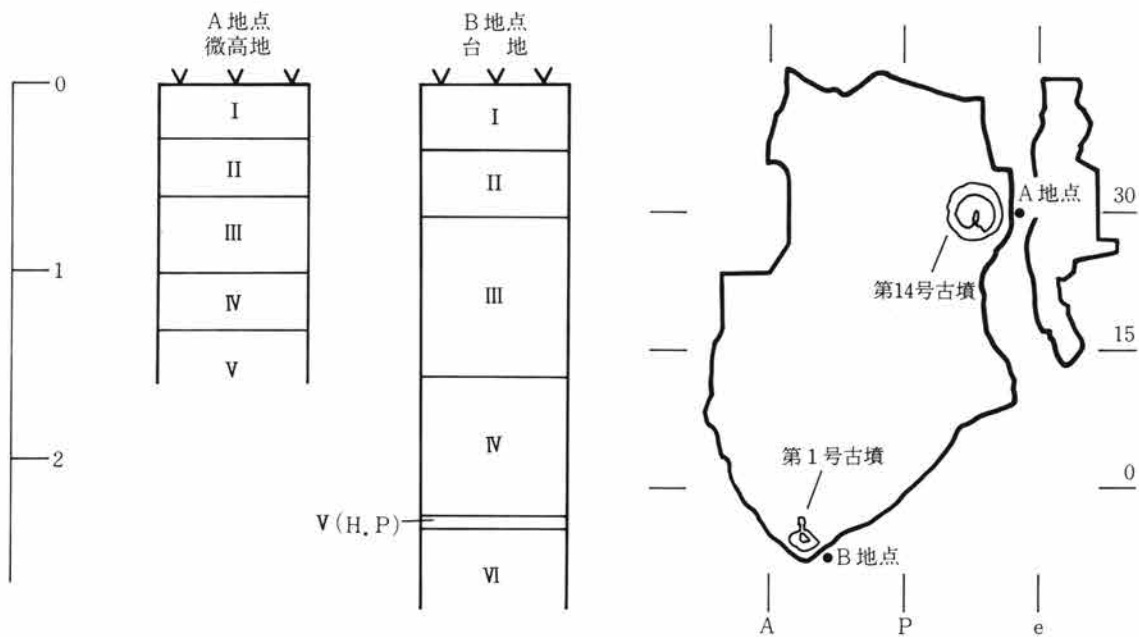
調査区域は地形区分でも記したように台地と微高地に分類される。台地は最高位をA-31グリッド周辺にし三方に緩やかに傾斜している。調査区域内に2カ所テストピットを設定し、基本土層を観察した。調査前の地目が桑園となっていたため土壌の攪乱が著しく、下位まで及んでいた。

A地点 第14号古墳の東側にあたり、微高地上に位置する。標高88.0m。比高差約4.5mである。

- I層 現在の耕作土層 暗褐色を帯びる。約30~40cm前後の厚さで堆積している。
- II層 黒褐色土層 軽石を含む。
- III層 黄褐色の砂壤土層 小砂礫を多く含む。約40~50cmの堆積をする。
- IV層 暗灰色の砂質土層 小砂礫を含む。
- V層 砂礫層 径1~5cmの小礫と砂粒が交互に堆積する。

B地点 第1号古墳の南側にあたり台地上に位置する。標高88.0mである。

- I層 現在の耕作土層 黒褐色を帯びる。約30~80cmの厚さで堆積している。
- II層 ソフトローム層 暗黄色を帯びる。
- III層 ハードローム層 下部はIV層へ漸移する。
- IV層 暗褐色粘質土層 いわゆる暗色帯である。
- V層 八崎軽石層（H、P）と思われる軽石の風化層。
- VI層 暗灰色褐色粘質土層。

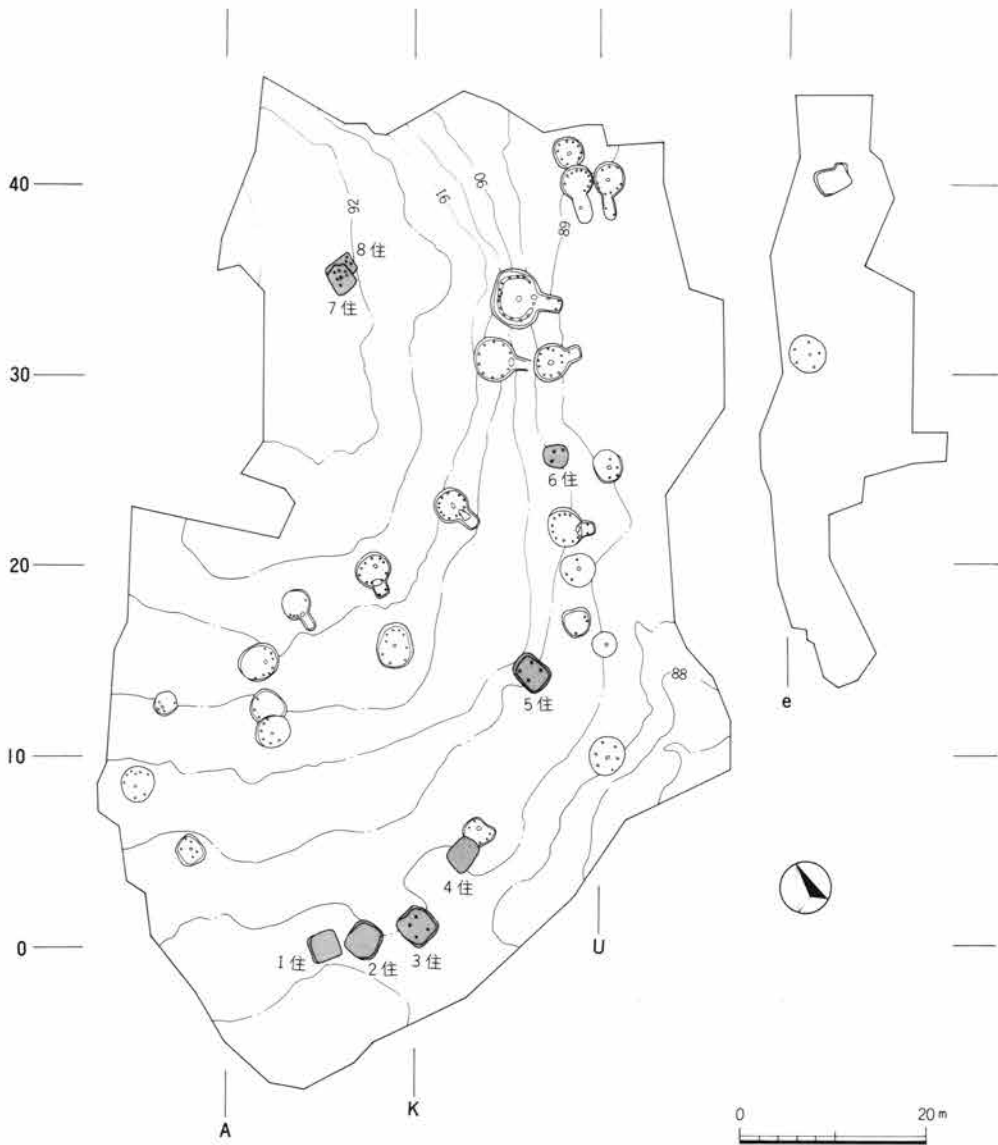


第5図 基本土層とテストピットの位置

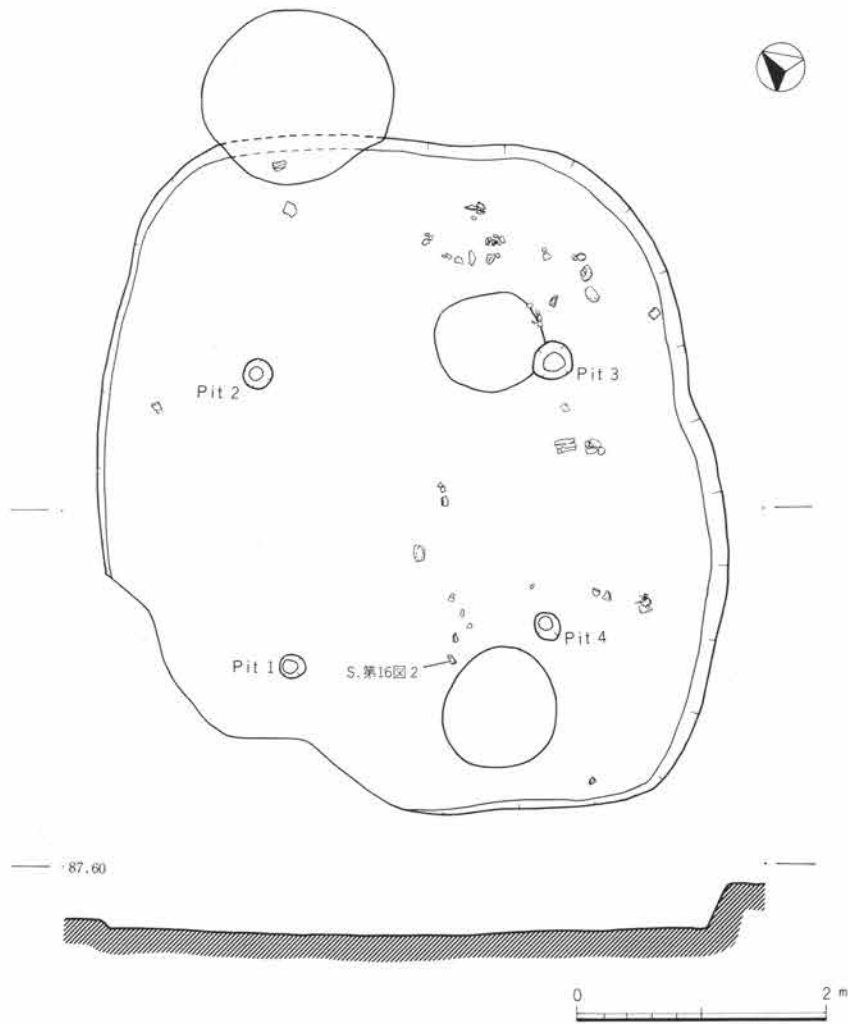
第2章 検出された遺構と出土遺物

第1節 縄文時代の住居址と出土遺物

縄文時代の住居址は35軒が検出された。詳細については第3章で述べるが前期8軒、中期18軒、後期9軒である。住居址の時期別の占地について簡単にふれておくと、前期は第7・8号住居址を除くと標高88.5~90mライン上に孤状に位置している。中期になるとその範囲は拡大し、第23・24号住居址のように調査区北東の微高地にも位置している。後期の住居址の床面プランは全て柄鏡形を呈しており、占地の範囲は台地の北側に集中し、地形に則した小さな孤状をなしている。



第6図 縄文時代前期 住居址位置図



第7図 第1号住居址平面図・断面図

第1号住居址（第7図、PL1）

調査区の南側、H-1グリッドに位置する。第45号住居址、第3号古墳と重複し、西側のコーナーが欠けている。

平面形は長軸5.30m、短軸5.02mの隅丸の矩形で、南辺がやや大きくなっている。長軸の方位はN52°Wであった。

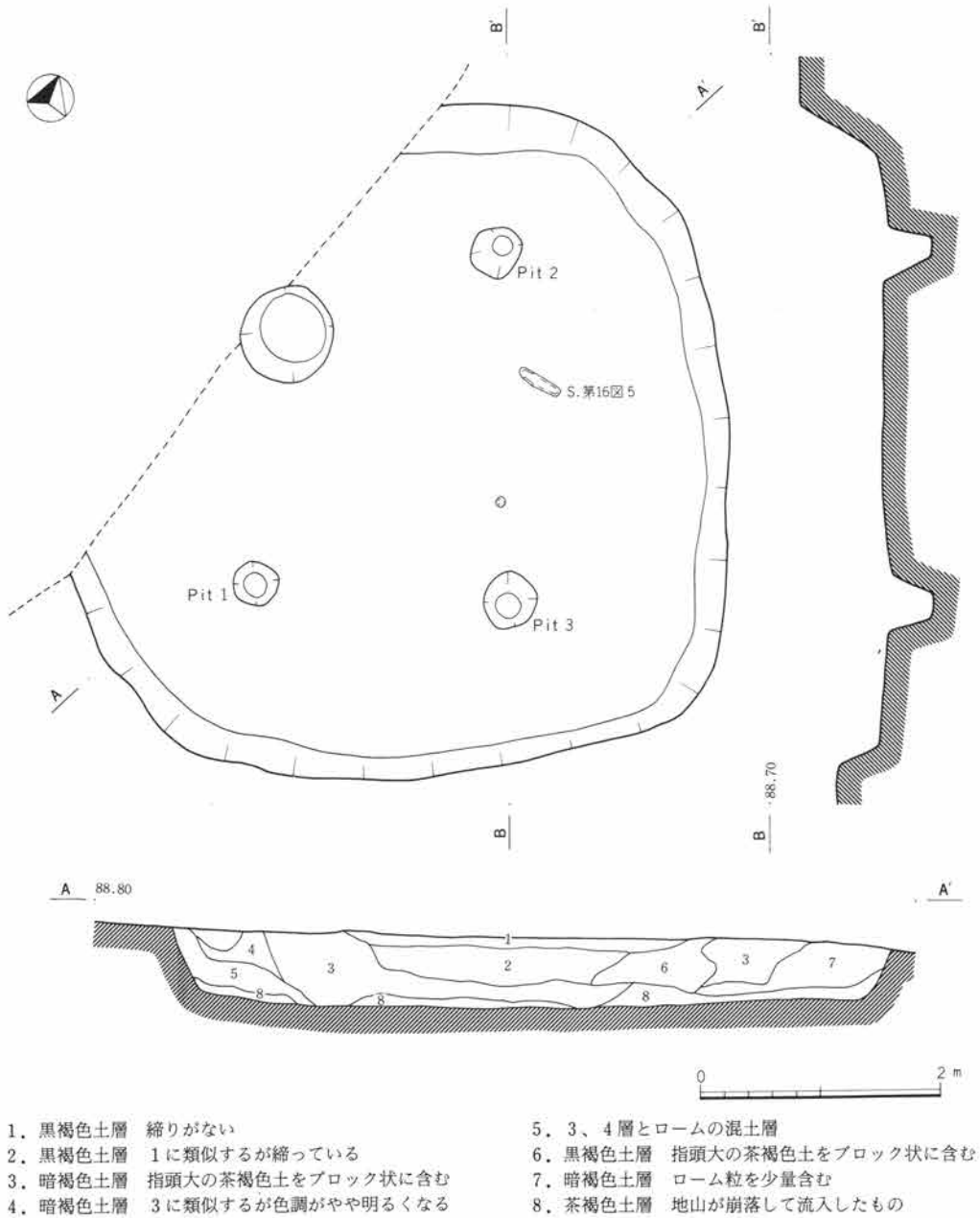
壁面はハードローム層を掘り込んでいたが、残存状況は他遺構との重複の関係から著しく悪く、最も残りのよい東側コーナーで35cm前後、西、南側では10cm前後であった。

床面はローム層中に構築されており、北から南に向かって下がっている。レベル差は20cmを測る。

柱穴は支柱穴と考えられるものが4本確認された。掘り方の規模は次のとおりである。ピット1は径22、深さ41cm、ピット2は径24cm、深さ54cm。ピット3は径32、深さ45cm。ピット4は径24×20、深さ48cmである。

炉址は確認できなかった。

遺物は東半分集中しているが細片が多数であり、床面から2～3cm離れて出土しているものが多かった。



第8図 第3号住居址平面図・断面図

第3号住居址（第8図、PL1）

K-1グリッドに位置する。第3号古墳の石室と重複しているため北西コーナーを欠失する。

平面形は南北5.43m、東西5.45mの隅丸正形に近い形をしている。南北中心軸の方位はN24°Wである。

壁面はハードローム層を掘り込み作られており上端がやや開いている。残在壁高は北側で64cm、東側で46cm、南側で34cmである。床面は南西コーナーが高く、北東コーナーとのレベル差は約10cmである。

柱穴は3本確認された。ピット1は径38、深さ32cm。ピット2は径43×40、深さ39cm。ピット3は径44、深さ34cmでいずれも主柱穴の掘り方と考えられる。柱間の距離はピット1とピット3の間が2.12m、ピット2とピット3の間は2.94mであった。北西の柱穴が位置する部分には径80cm、深さ24cmのピットがあるが、これ

第2章 検出された遺構と出土遺物

のつくられた時期、住居址との関係等を把握することはできなかった。

炉址を確認することはできなかった。

出土遺物は少なく床面直上からの土器の出土は全くなかった。ピット2とピット3を結ぶ線上、ピット2よりの床面からは石棒状の円礫がピット3よりから凹石が出土している。

第2号住居址（第9図、P L 1）

F-0グリッドにあり第1号住居址の西側に位置する。第3号古墳との重複により西壁を残して大半を欠失する。西側に第33号土壇、北側に同時期の第32号土壇がある。

南北軸は4.73mで隅丸矩形のプランが推定できる。

壁面の残高は南側で27cm、北側で45cmを測る。床面は北の壁際がやや高くなるが他はほぼ水平であった。

炉址、柱穴等の施設は検出されていない。遺物の出土も少なく、中央の西壁際から凹石が出土している。

第4号住居址（第10図、P L 1）

N-5グリッドに位置する。他時期の遺構との重複が激しく、残存状態は非常に悪かった。第16号住居址（縄文時代中期）第44号住居址、第4号古墳、第10号溝と重複していた。

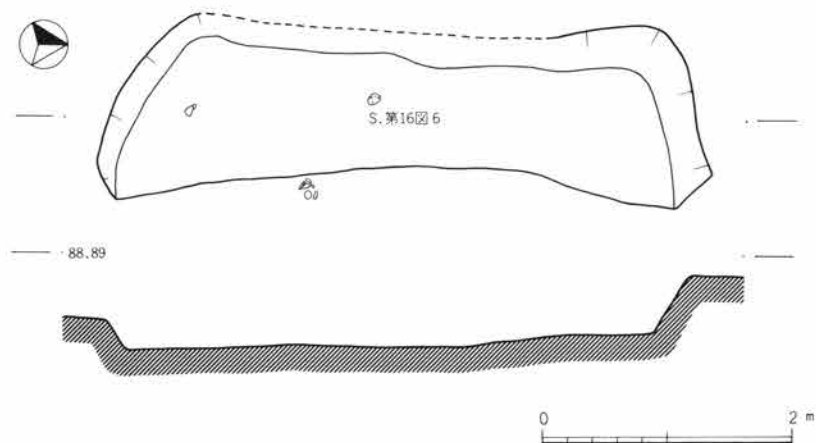
平面プランは北東のコーナーと思われる部分とその周辺のみを検出したが他の住居址同様、隅丸の矩形と考えられる。

壁はハードルーム層を掘り込んでおり、残存高は20～30cmである。また、床面はほぼ水平であった。ピットは11ヶ所で確認されたが支柱穴は4本ないし6本と考えられる。規模は以下のとおりである。

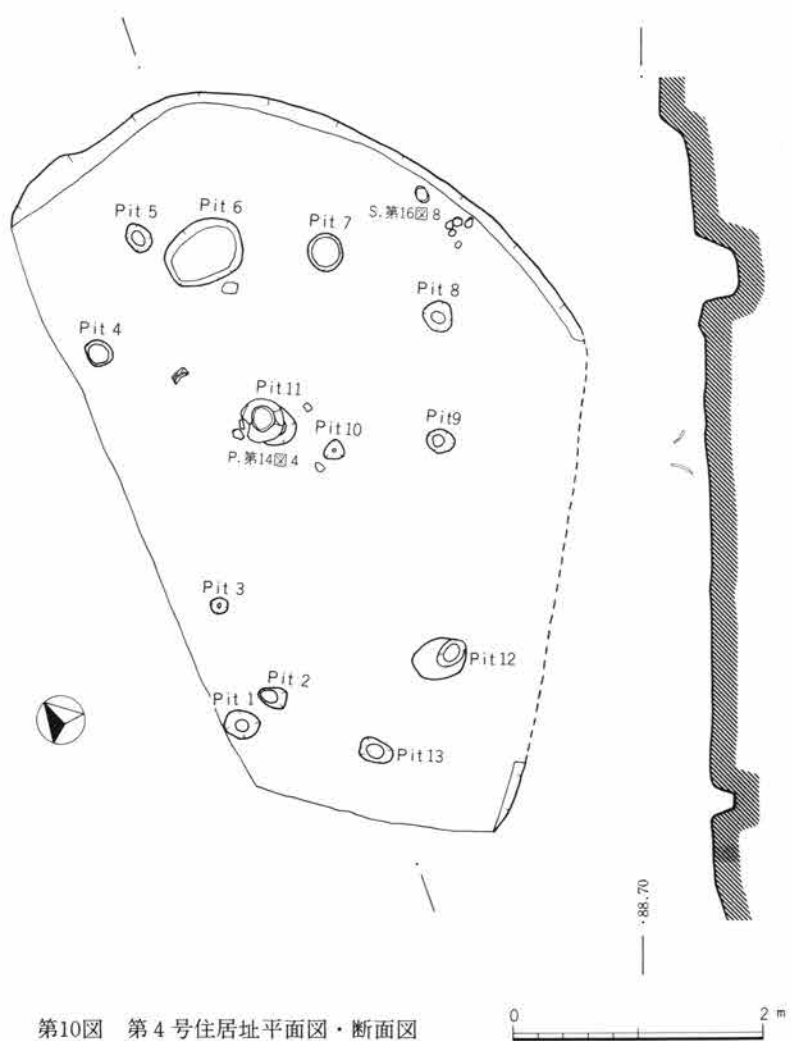
炉址の確認はできなかった。出土遺物は少量であり大半が床面から離れた状態であった。第14図4の深鉢は残存した床面のほぼ中央にあり、口縁部を下にして伏せられた状態で床面から14cm離れて出土している。この土器の下には径30cmのピット11がある。

石器は凹石（第16図10）が壁際から出土している。

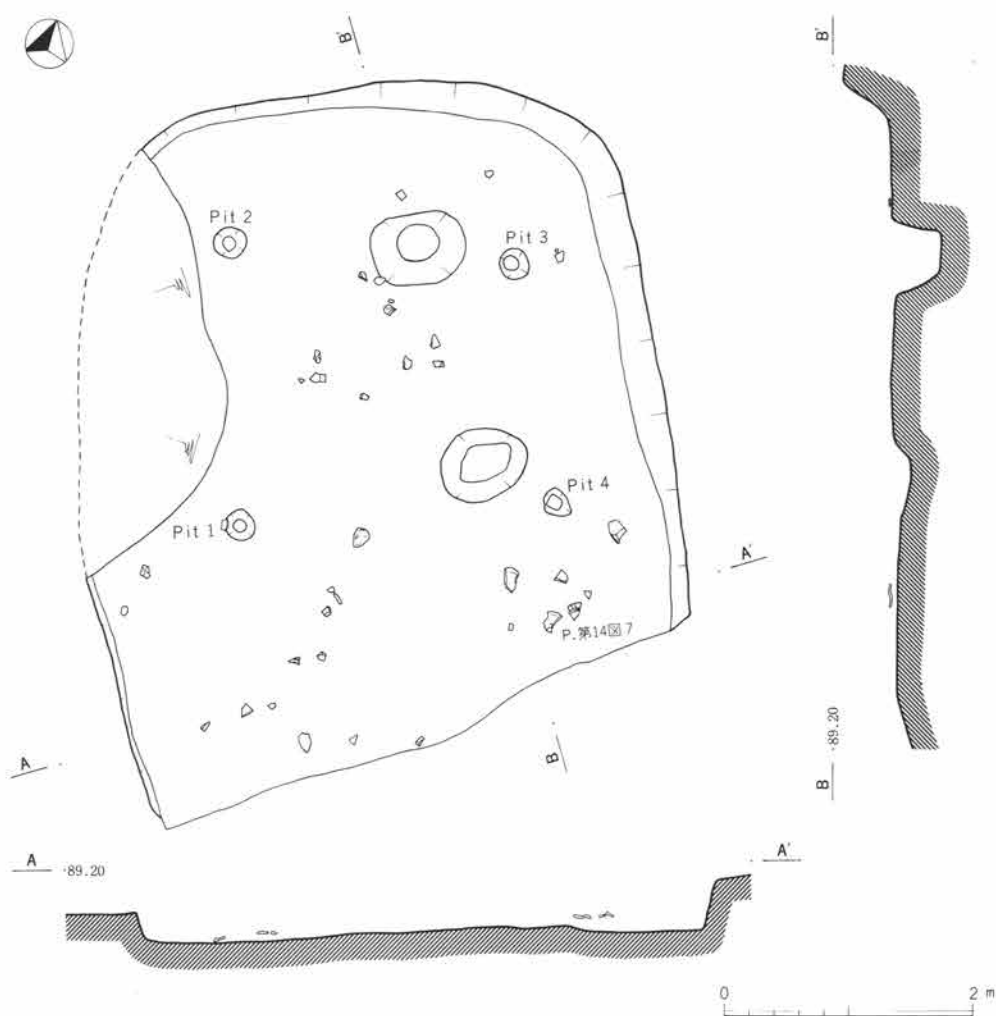
ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
長軸×短軸	28×22	23×14	15×13	22×16	23×18	64×50	28	24	23×20	16×14	30	26×18	28×19
深さ	19	14	18	23	19	29	12	30	34	11	30	45	19



第9図 第2号住居址平面図・断面図



第10図 第4号住居址平面図・断面図



第11図 第5号住居址平面図・断面図

第5号住居址 (第11図、P L 1)

Q-14グリッドに位置し、第6号古墳の「前庭」状遺構と重複する。

平面プランは、第10号溝との重複により南壁を欠損しているため全体を把握するに至らなかったが南北に長軸を持つ隅丸長方形のプランと考えられる。東西4.7m、南北の残存長5.3mである。南北の中軸線の方位はN23°Wである。

壁面は東壁の残存状態が良好で、北東コーナ付近で残高60cmを測る。床面はハードローム層中を切ってつくられているが南に向かって下っており、レベル差は約15cmである。各柱穴から中央部にかけては特に堅く踏みしめられていた。

ピットは4本確認されいずれも柱穴と思われる。平面プランと比較すると柱穴の位置は北側に偏っており、主柱穴の数が6本の可能性もある。柱穴の規模はピット1が径24、深さ24cm。ピット2、径25cm、深さ6cm。ピット3、径26×24、深さ33cm、ピット4、径25×20、深さ23cmである。

炉址はピット4に接してある。径70×56、深さ9cmと楕円形の平面形に皿状の断面形を呈する掘り方である。

出土遺物は床面密着のものも多いが土器は破片が大半であった。ピット4の南側からは小型の深鉢(第14図7)が数個の破片となり、床面から5cm離れた状態で出土している。

第1節 縄文時代の住居址と出土遺物

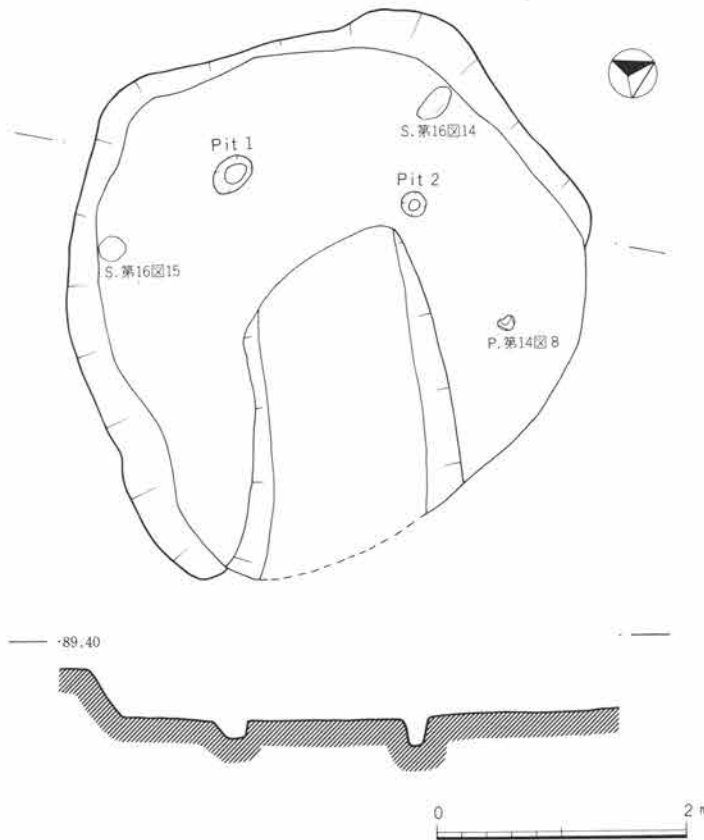
第6号住居址 (第12図、P L 2)

R-26グリッドに位置する。東西から東に向かって下がる台地の傾斜変換点にあたり、遺構の確認面も東側に下がっていた。確認面のレベル差は30cmである。

平面プランは他の住居址同様、隅丸の正方形に近い矩形と考えられているが、第5号溝、第6号古墳の周溝と重複関係にあり、形状が著しく歪められている。規模は南北4.12m、東西の残長で3.63mである。

壁面の残存高は南側で23cm、北側40cmである。床面は特に踏みしめられた部分もなく東側に向かって約10cm下がっていた。

ピット2本が確認されたが柱穴としての判定は困難である。規模はピット1が径36×25、深さ12cm。ピット2が径20、深さ20cmである。



第12図 第6号住居址平面図・断面図

遺構と直接の関連性を示す状態で出土した遺物は少なかった。第14図8は小型の台付土器で東南よりの部分で床面から約15cm離れて出土した。

また、南と北のそれぞれの壁際からは床面密着の状態ですべて多孔石 (第16図、14・15) を出土した。

第7・8号住居址 (第13図、P L 2)

G-35グリッドを中心に位置する。標高91.8mにあり同時期の住居址の中で調査区内の最高位に立地する。第4号方形周溝墓の台状部の南東コーナーと重複したため残存状態は不良である。2軒の重複関係は、土層の観察から第7号住居址が新しくつくられていると考えられる。

第7号住居址の平面形は矩形を呈すと思われるが、北東隅の壁はカギ形に屈曲する。残存壁高は27~53cm。セクションで110cmを確認している。

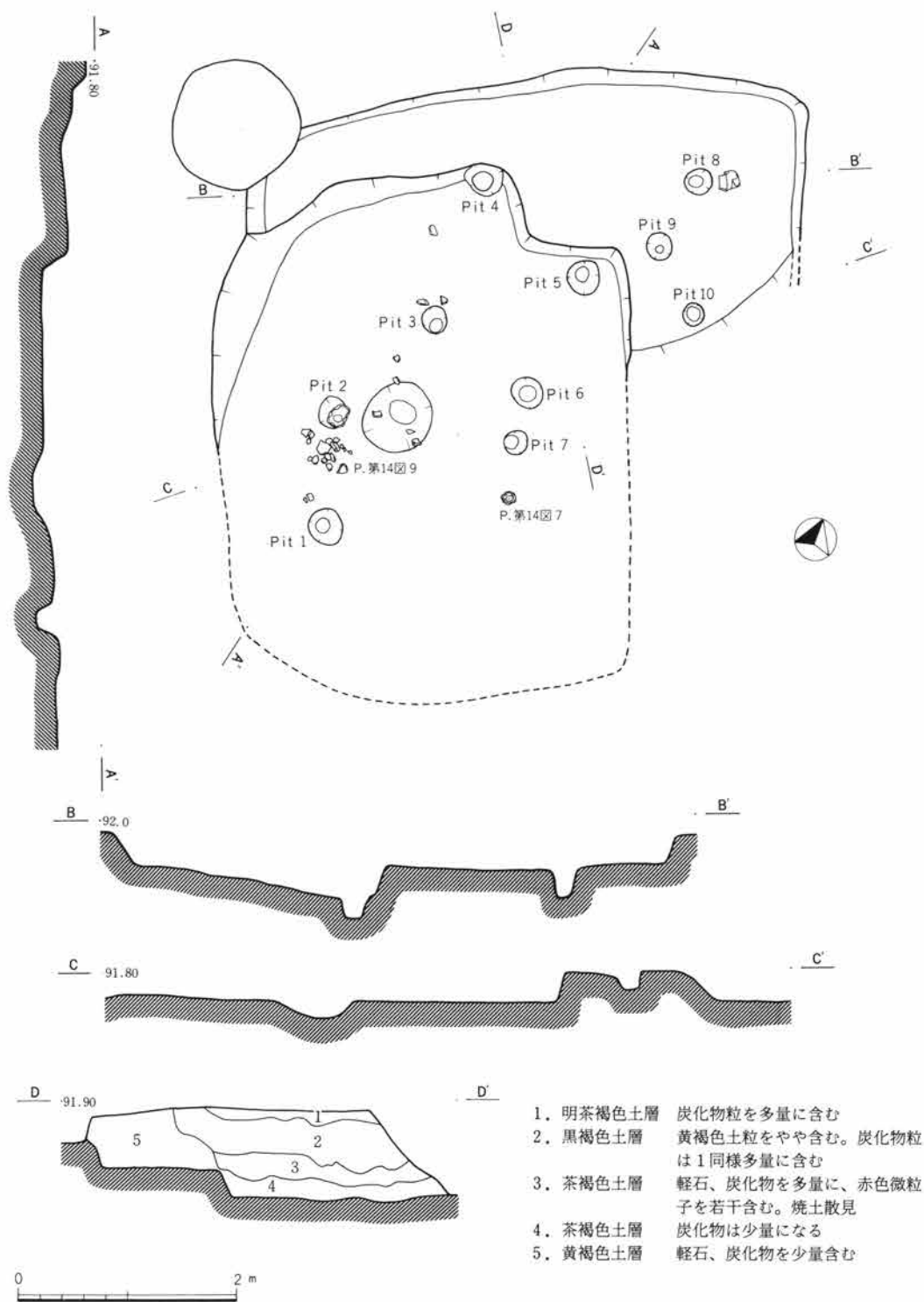
床面はハードローム層中につくられ、堅く踏み固められていた。

ピットは床面に6ヵ所、北壁と重複して1ヵ所検出された。主柱穴と判定できるものはない。また、いずれの住居址に所属するかも不明である。それぞれの深さはピット1が20cm、2が9cm、3が9cm、4が55cm、5が54cm、6が21cm、7が20cmである。

ピット2の東側には炉址がある。径0.66×0.6mの楕円形を呈し、焼土、炭化物が少量散見できた。

ピット2には第14図9の土器が埋置されていた。

第8号住居址も矩形を呈すと思われる。北壁の長さは5.3mである。ソフトローム層を切り込んでハードローム層中に床面がつくられている。ピットの深さは、ピット8が24cm、ピット9が23cm、ピット10が15cmである。



第13図 第7・8号住居址平面図・断面図

出土遺物

第1号住居址出土土器 (第14図1・2、第15図10~13、P L35・42) 1は深鉢形土器の底部である。底径22cm。R L縄文を横位に施した後に、半截竹管を施文具とする連続爪形文を2段施している。焼成は普通であるがやや脆い。2は小型の底部である。L縄文を施文した後に、平行沈線による縦位の曲線文が描かれている。10は口縁部破片。口縁が内折し、弱い波状を呈するものである。L縄文を縦位に施文した後に、半截竹管による集合沈線を器面のほぼ全面に施している。11も10同様沈線が横位に施文されている。下位の弱い稜部では縦位に施こされている。縄文はL Rが横位に施文されるが大部分が磨消されている。12は浅鉢形土器の口縁部。強く内折し、短く直立ぎみに立ち上がる。口唇には径1cm程の孔がある。13は波状口縁の破片。口縁部はくの字状に内折し袋状を呈している。R L縄文を施文した後に、頂部の上面には集合沈線による渦巻文が施され、コブ状の貼付文をもつ。下面は器形にあわせて沈線を山形に施している。

第3号住居址出土土器 (第15図14~17、P L47) 14は胴部破片。条線を縦位と斜位に組み合わせて施文している。15はR L縄文施文後に集合沈線により渦巻文を描いている。16は半截竹管による沈線施文後、これに連続して刺突文を加えている。

第4号住居址出土土器 (第14図4、第15図19~21・24・25、P L35・42) 4は口縁の先端が内折し、胴部がすぼむ器形である。最大径38.3cm。口縁は4単位の波状を呈し、それぞれにコブ状の貼付文が施されている。R L縄文を横位に施文した後、1.5~2.5cmの間隔で6本1単位の集合沈線を横位に施している。このため、縄文は大部分が消されている。19は波状口縁の破片。強く内折する。外面にコブ状の貼付文をもつ。R L縄文を横位に施文後、横位に沈線を施している。20も波状口縁の破片。集合沈線が施されている。21はL R縄文を施文した後、沈線を横位に施している。沈線の間には径5mmの円形竹管による刺突文が施されている。24は胴部破片。25と同一個体の可能性もある。R L縄文を施した後、半截竹管を用いた3本1単位の沈線が施されている。下位には縦位の孤状沈線文がある。稜部には径4mmの円形竹管による刺突文が1列施されている。25も縦位の孤状沈線が施されている。

第5号住居址出土土器 (第14図6・7、第15図18・22・23・26、P L35・42) 6は深鉢形土器の底部。平底の底部からやや内曲して立ち上がる。Rの縄文を横位に施文した後、半截竹管による集合沈線を横位に施している。7は口縁が4単位の強い波状を呈し内彎ぎみに立ち上がるもので、端部を欠損する。胴部中位には強い段をもち以下はすぼまっている。18と22は半截竹管による連続爪形文を施している。18は強い波状口縁を呈し、無文地に横位、斜位に施文されている。22は口縁部が内折し弱い波状口縁を呈する。地文にR L縄文が施されている。23は半截竹管により沈線を施文した後、これに刺突文を連続して施文している。26は胴部破片。横位の波状沈線文で文様構成がなされている。地文は無いが器面調整ナデの痕跡を明瞭に残している。

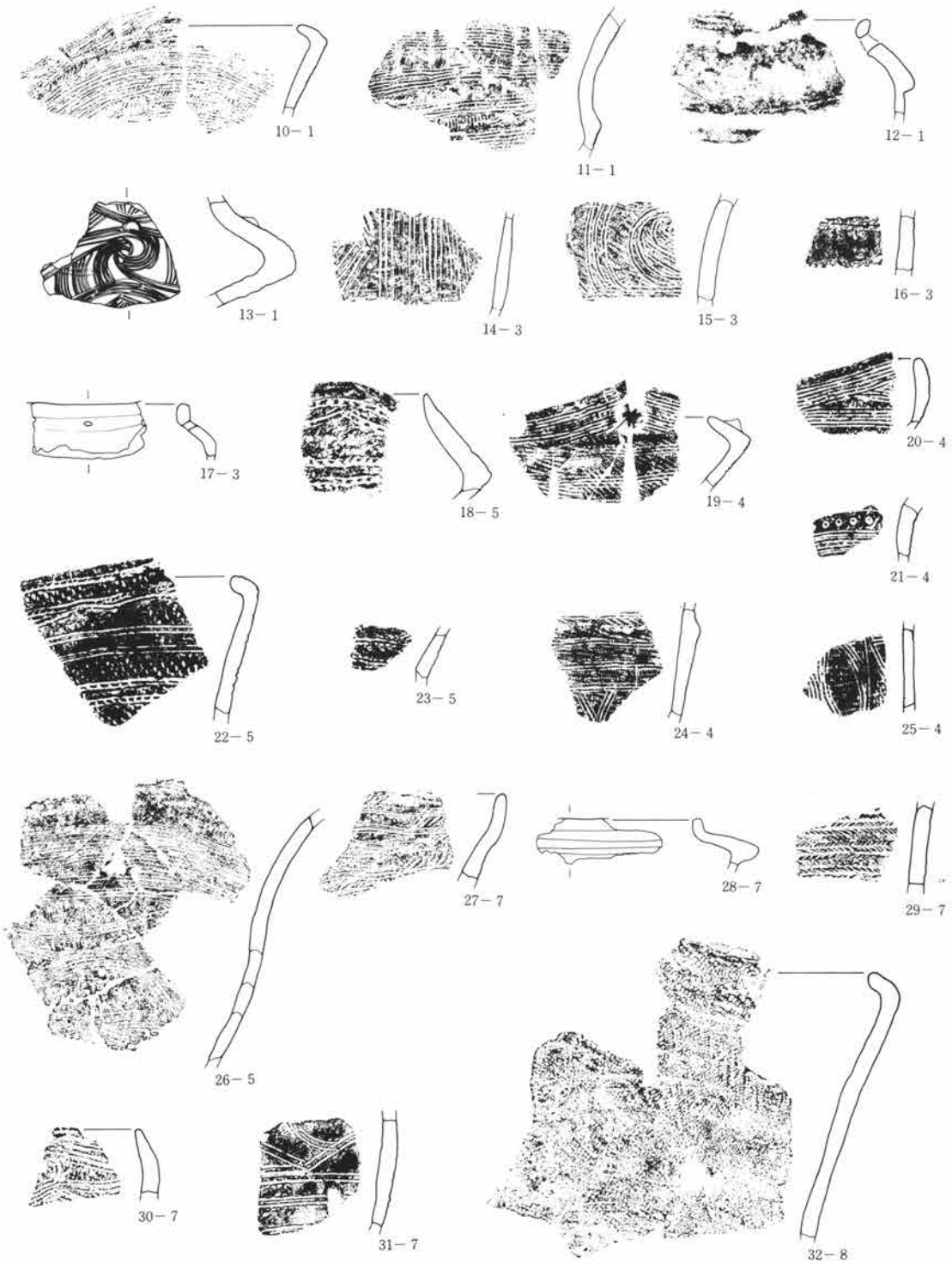
第6号住居址出土土器 (第14図8、P L35) 小型の台付形土器である。胴下半に強い段をもち、これより下位は急速にすぼまっている。欠失していたが4単位の脚台、または透孔があったと思われる。段より上位はR L縄文を施文後、半截竹管による集合沈線文を横位に3段施している。第1段と第2段の間には斜位、曲線状の沈線を組み合わせ菱形と渦巻の文様構成を施している。また、段より下位はL RとR Lの結束原体を横位に回転させて羽状縄文による菱形文が施文されている。焼成は良好で他に比してやや硬調である。

第7号住居址出土土器 (第14図5・9、第15図27~31、P L35・42) 5は波状の口縁を呈する。頂下、約1cmのところのコブ状の貼付文がある。Lの縄文を施文した後に、半截竹管文による集合沈線文を横位に施している。9は深鉢形の胴~底部である。半截竹管による1単位2本の有節平行沈線をやや間隔をおいて

第2章 検出された遺構と出土遺物



第14図 第1～8号住居址 出土遺物(1)

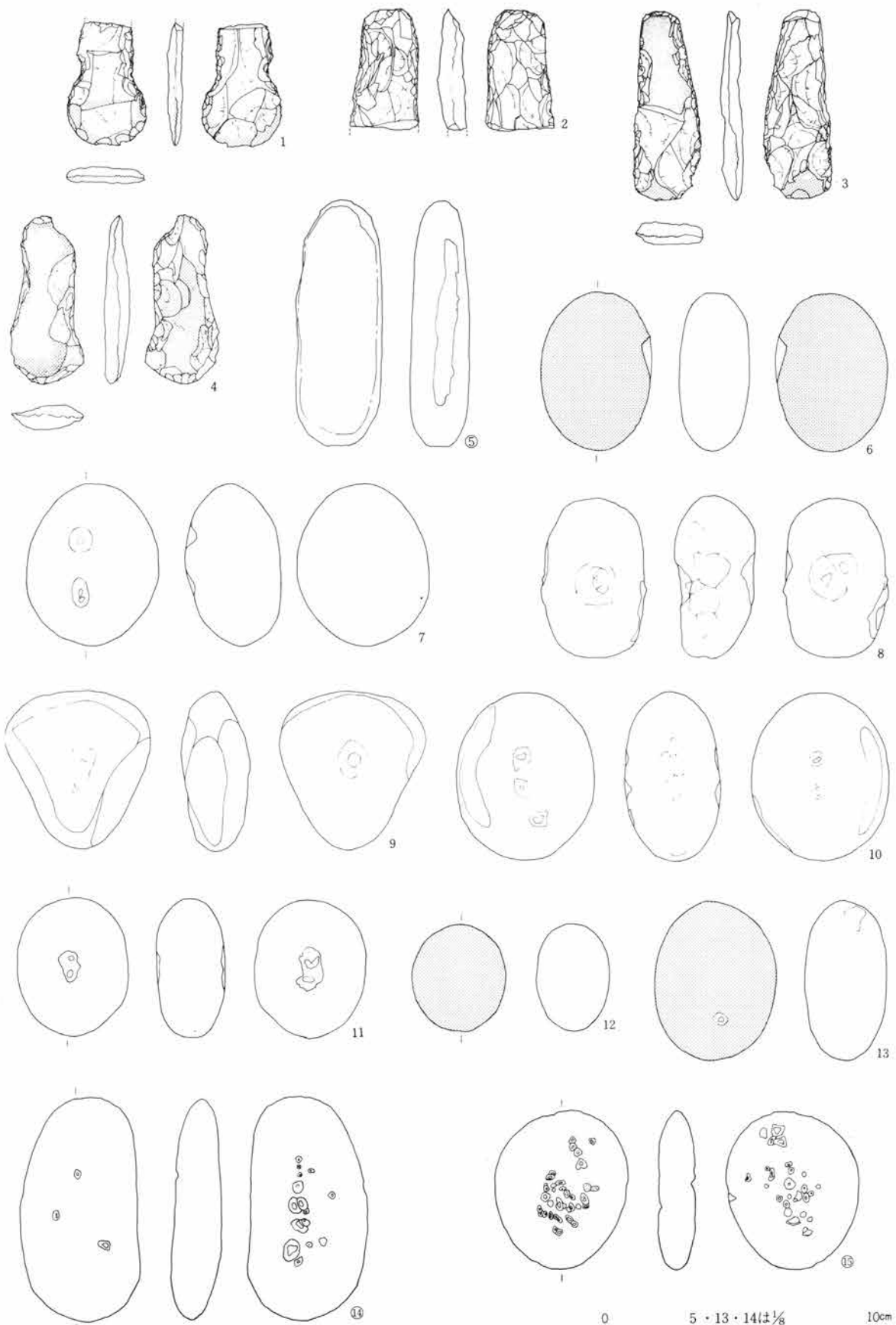


第15図 第1～8号住居址 出土遺物(2)

施文している。27は波状口縁の破片、横位に沈線を施す。縄文はLで横位に施文されている。28は無文の浅鉢形土器。強く内折し、短く直立ぎみに立ち上がる。29はRL縄文を施した後に、矢羽根を重ね合わせたように浮線文を横位に施している。30は口縁部の破片で、RL縄文を施文した後に、半截竹管による集合沈線が施文される。31も集合沈線が施されており、菱形と渦巻を組み合わせた文様構成である。

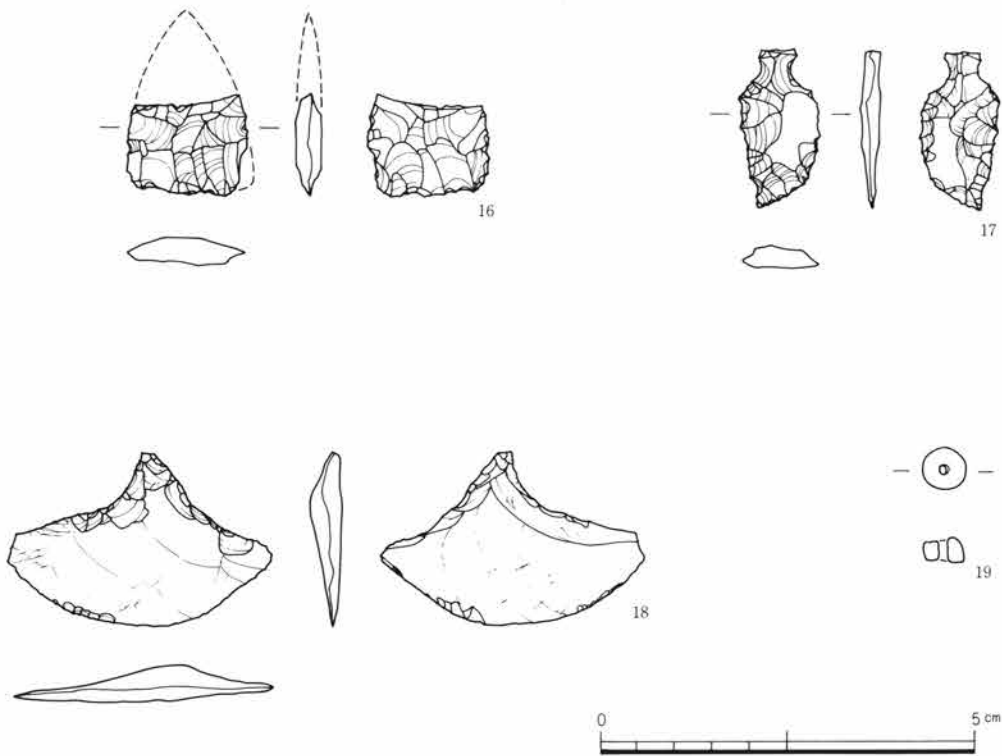
第8号住居址出土土器(第15図32、P L42) 口縁部破片で端部は短く内折する。RL縄文を横位に施す。

第2章 検出された遺構と出土遺物



第16図 第1～8号住居址 出土遺物(3)

0 5・13・14は1/8 10cm
0 20cm



第17図 第1～8号住居址 出土遺物(4)

第1号住居址出土石器(第16図1・2、第17図16・19、P L48・54) 1 打製石斧 基部から欠損する。残長84、刃部幅55mm、厚さ8mm、重量60gを測る。石質は黒色頁岩。刃部は両面とも磨耗痕が認められる。2 打製石斧 刃部を欠損する破片。残長83、幅83mm、重量100gを測る。石質は頁岩である。19 白玉、蛇紋岩製で、外径11、厚さ7mmである。16 石鏃の欠損品。無茎平基。石質は黒耀石である。

第2号住居址出土石器(第16図6、P L48) 磨石 長さ109、幅78、厚さ50mm、重量640gを測る。安山岩。両面に使用面が残る。側縁部には敲打痕が認められる。

第3号住居址出土石器(第16図3・4・5・11、第17図17・18、P L48・54) 3 打製石斧 長さ130、最大幅46、厚さ13mm、重量120g。石質は黒色頁岩。刃部は両面とも磨耗が著しい。4 打製石斧 長さ116、最大幅50、厚さ18mm、重量110gを測る。石質は安山岩。側縁形は表面に張る孤状をなす。両面とも刃部を中心に磨耗が著しい。5 石英閃緑石の円礫。長さ340、幅118mm、重量5.300gを測る。側縁の平坦面には磨耗痕が顕著に残されている。11 凹石 磨石としても使用されている。長さ96、幅78、厚さ48mm、重量520gを測る。安山岩。両面に敲打による凹みと磨耗痕がある。側縁部にも敲打と磨耗痕を残す。17 小型の石匙 縦型で長軸2.1mm、重量0.47gを測る。黒耀石。17 石匙 横型である。一部を欠損するが、縦45、横幅71mm、重量16gを測る。石質は黒色頁岩。

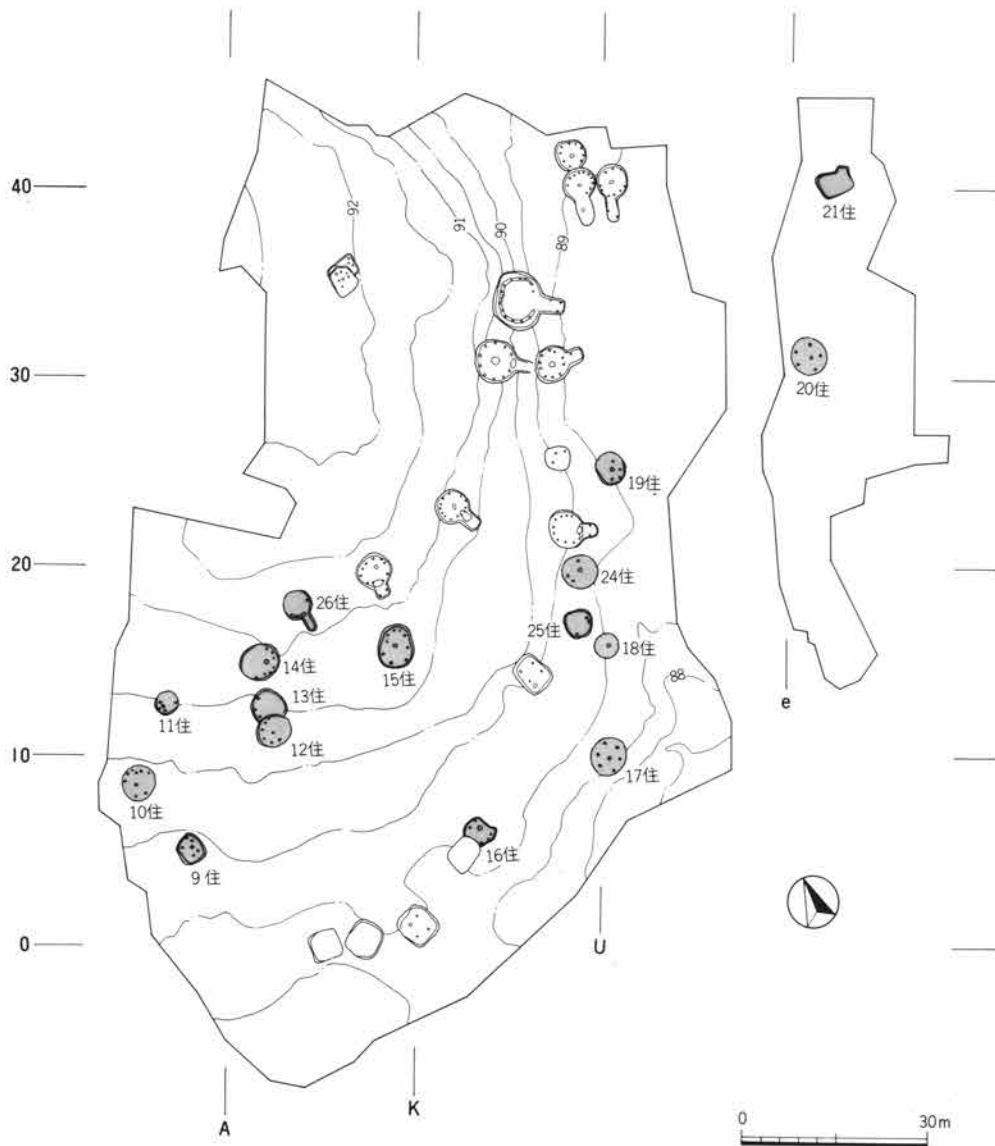
第4号住居址出土石器(第16図8・10、P L48) 8 凹石、長さ110、幅74、厚さ74mm、重量480gを測る。安山岩。側縁部は敲打による剥落が著しい。10 凹石、長さ115、幅96、厚さ66mm、重量920g。安山岩。磨石としても使用されている。側縁部には敲打痕がある。加熱を受け変質している。

第5号住居址出土石器(第16図9・12、P L48) 9 凹石 長さ110、幅102、厚さ56mm、重量490gを測る。隅丸三角形の安山岩である。12は磨石 長さ74、厚さ56mm、重量320g。安山岩。

第2章 検出された遺構と出土遺物

第6号住居址出土石器(第16図13~15、P L48・51) 13 磨石 長さ110、幅85、厚さ58mm、重量800gを測る。安山岩。中央からややはずれて浅い凹みがある。側縁部には敲打痕がある。14 多孔石 長さ307、幅163mm、重量5.000gの扁平な安山岩である。凹みは両面にあり、台石として使用した痕跡がある。15 多孔石 長さ216、幅184mm、重量2.800gを測る。石質は安山岩である。

第7号住居址出土石器(第16図7、P L48) 凹石 長さ112、幅92、厚さ67mm、重量920gを測る。安山岩。凹みの形状は多孔石のそれに近いものである。



第18図 縄文時代中期 住居址位置図

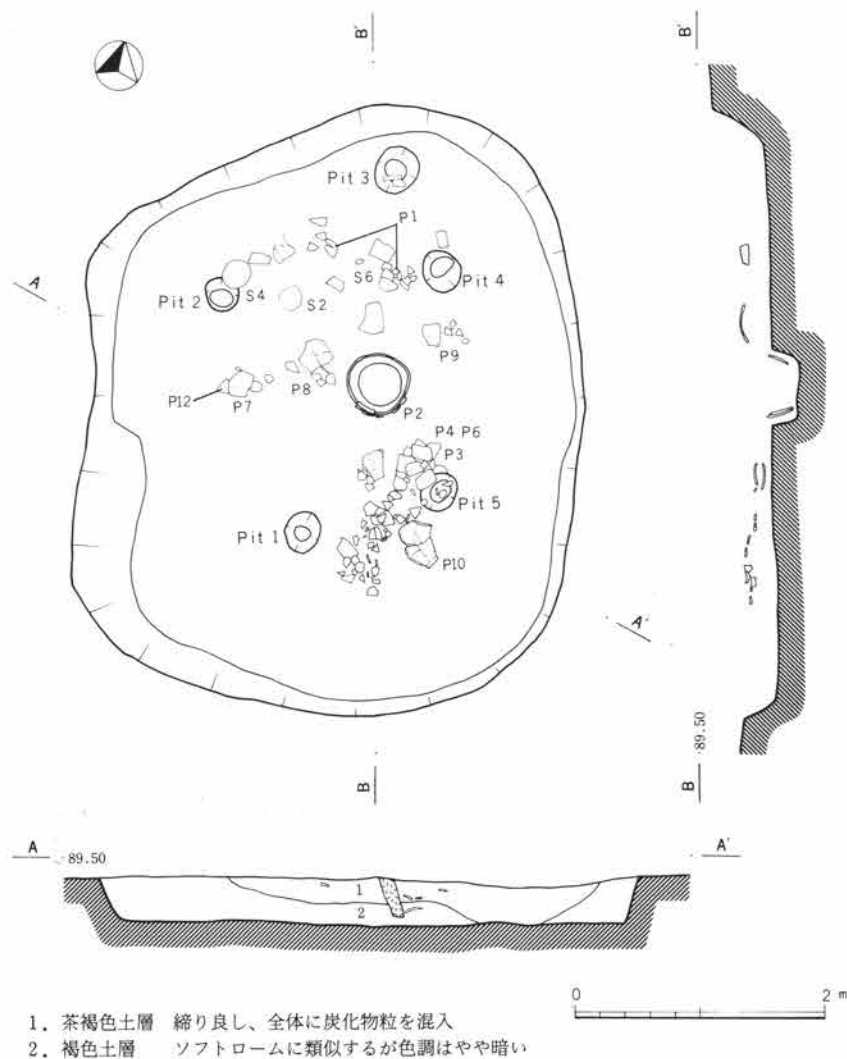
第9号住居址 (第19図、P L 2)

Y'-5 グリッドを中心に位置し、第10号住居址の南東13mにある。

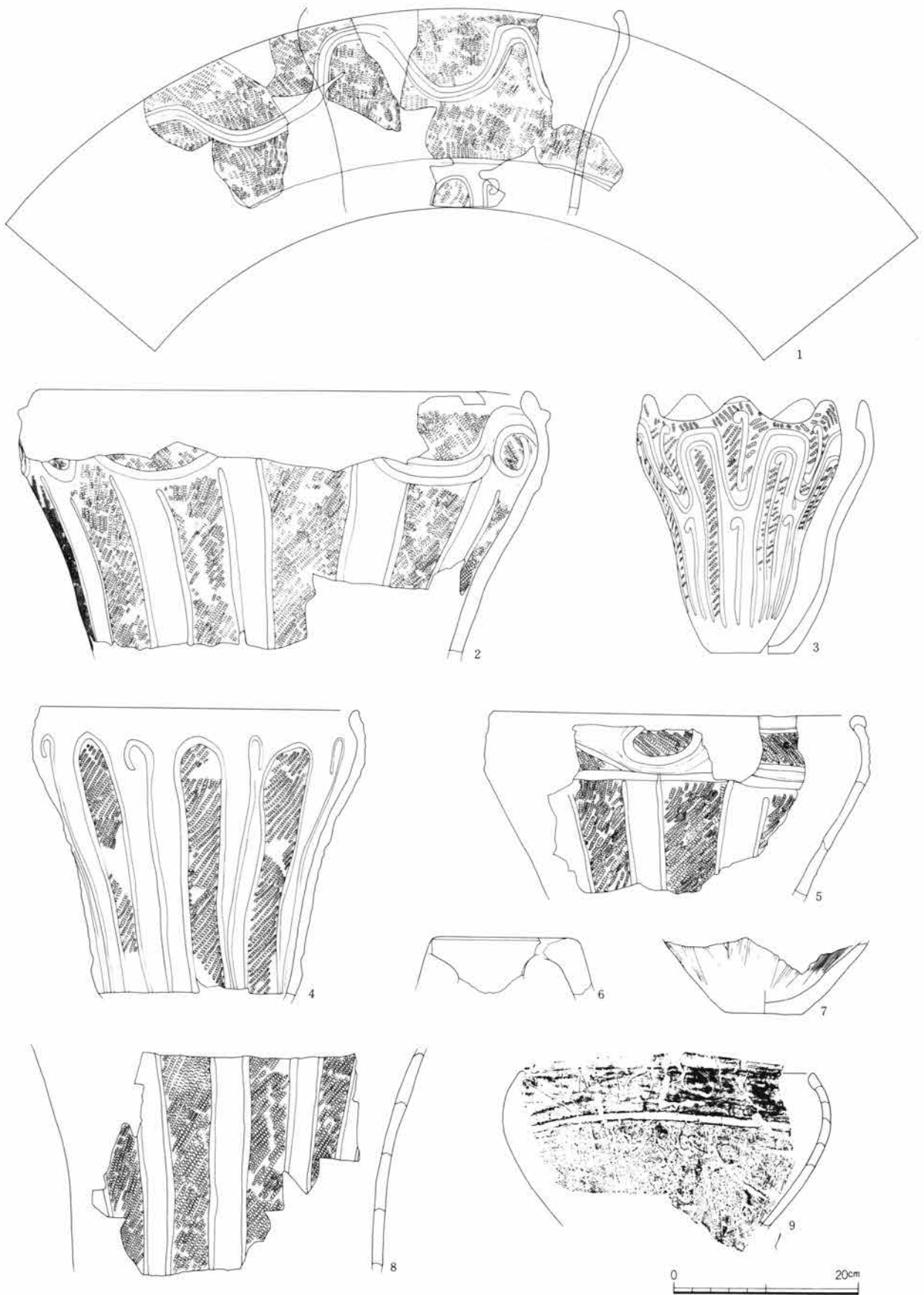
平面形は隅丸方形に近い小規模な竪穴。埋土が地山と非常に類似していたため壁面の検出に困難をきわめた。壁面はハードローム層に達しており、西壁はやや開きぎみに立ち上がる。残存壁高は北側で40~45cm、南側で30cm前後を測る。床面はほぼ水平。部分的に堅い面もある。柱穴はやや炉址よりに位置して5本確認されたが良好なものは少なかった。ピット1、径36×28、深さ33cm。ピット2、径27、深さ17cm、ピット3 径38×32、深さ40cm、ピット4、径34×30、深さ40cm、ピット5、径32×30、深さ14cm。

炉址は中央よりやや北よりにあり深鉢の上半部を利用した埋甕炉で同一個体の胴部を利用して補強していた。規模は径48cm、深さ48cm、掘り方は径60cm、深さ60cmであった。埋土は暗褐色土で焼土、炭化物粒を多く含んでいた。

遺物は埋土上層に多かった。土器の2は炉体土器、10が床直、他は14~28cm、床面から離れての出土である。石器の出土点数は打製石斧1、磨製石斧1、凹石2、多孔石2である。



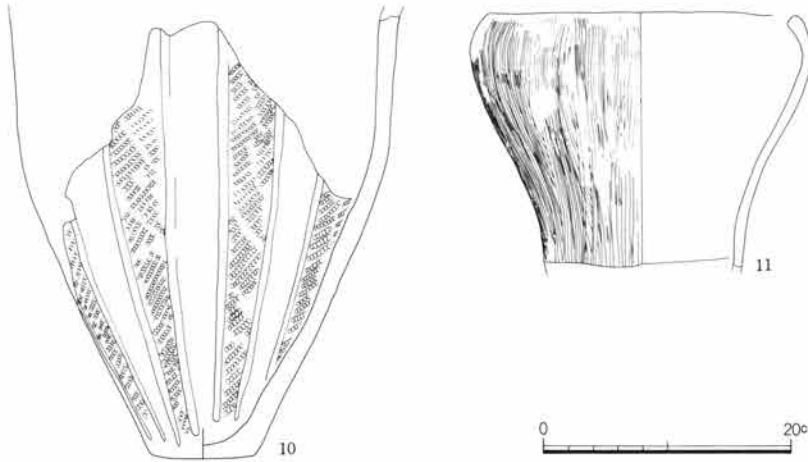
第19図 第9号住居址平面図・断面図



第20図 第9号住居址 出土遺物(1)

出土遺物

土器 (P L 35・42)



第21図 第9号住居址 出土遺物(2)

1、深鉢形土器 口縁部はやや内彎ぎみに立ち上がり、胴部はあまり括れない。R L縄文を地文とし、口縁では横位に、以下は縦位に施文している。胴部上半には2本の沈線による波状文が施文され、その間の縄文は磨消される。括れ部には1本の沈線が横走し、その下位に∩字状の区画文や蕨手状の懸垂文が施文されるが区画文以外の縄文は磨消される。

2、深鉢形土器 口唇部には沈線がめぐり、幅の狭い無文帯がまわる。口縁部には隆帯と沈線が組み合わさった渦巻文と楕円区画文が構成されている。胴部には2本の沈線を平行に垂下させている。縄文はL R縄文を施文し、沈線区画内の縄文は磨消している。

3、深鉢形土器 口径21.6、器高27cmを測る。5単位の波状の口縁で、口唇部は内側に肥厚している。口唇部と内面全体には煮凝り状の炭化物が付着する。R L縄文を施文とし、口縁部は横位、胴部は縦位に施文される。胴部上半部には8単位の波状沈線文がめぐり、波頂部には∩字文、波底部には蕨手状の懸垂文が施される。波状文と∩字状の間の縄文は磨消される。

4、深鉢形土器 胴部下半部を欠損する。口径35cm、残高31.5cmである。口縁部は内彎し、胴部であまり括れない。R L縄文を縦位に全面施文した後、口縁部から∩字状と蕨手状の懸垂文を交互に施している。

5、深鉢形土器 口縁部は隆帯によって渦巻文や楕円状の区画文を施すが、それに沿って施文される沈線文の意匠が強い。口縁の下位には沈線が全周し、文様帯を区画している。R L縄文を施文とし、口縁部は横位、胴部は縦位に施文される。胴部には沈線の懸垂文が施文され、その間の縄文が交互に磨消される。

6、台形土器 破片のため不明な点が多いが、裾部に半円形の透し孔を3単位もつと考えられる。胎土中に細砂粒が多量に含まれている。

7、深鉢形土器の底部 底径7.5cm。最下部を除き櫛歯状工具による条線が施される。

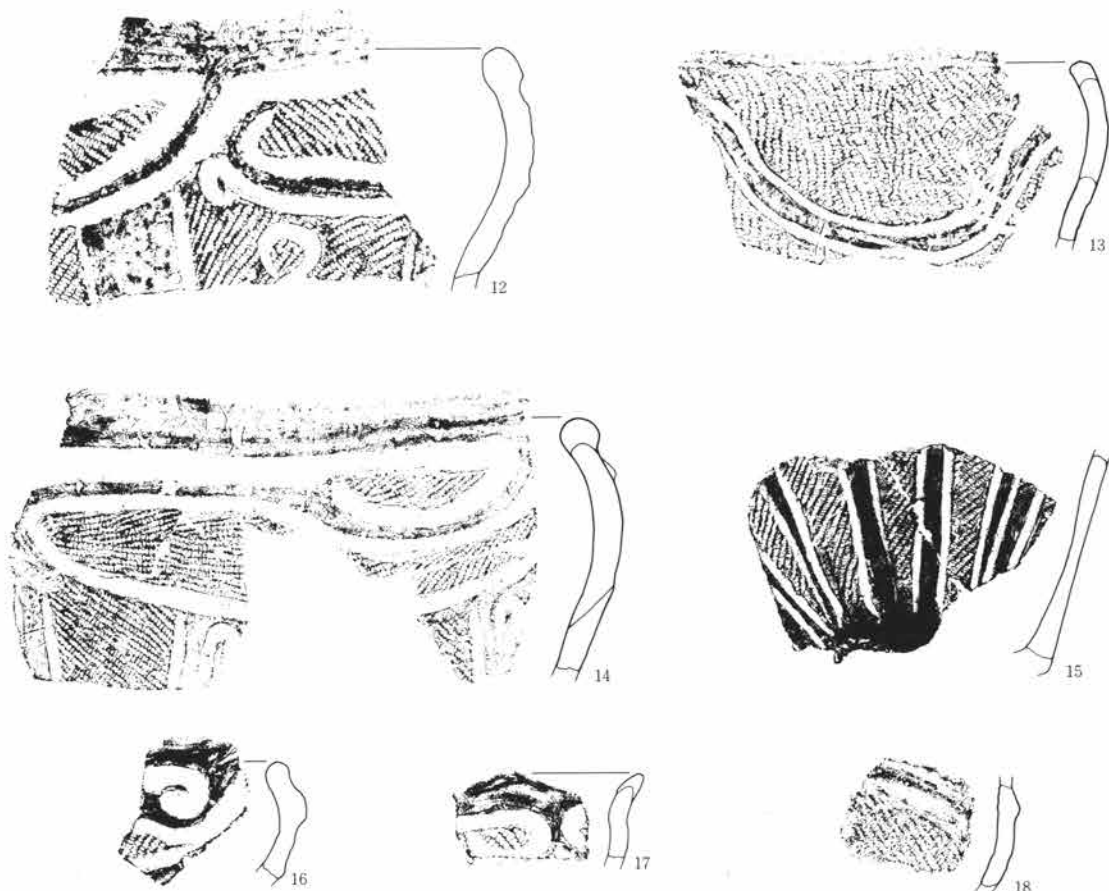
8、深鉢形土器 R L縄文を縦位に施し、沈線による懸垂文間の縄文を交互に磨消している。

9、深鉢形土器 口縁部は内彎してたちあがる。口唇は内側にやや肥厚する。口縁部には幅広い無文帯をもち、その下に沈線がめぐり。胴部には櫛歯状工具による条線が施される。

10、深鉢形土器 残高49.8cm、R L縄文が縦位に施され、沈線による懸垂文間は交互に磨消される。

11、深鉢形土器 口径24.2、残高20cm、口縁部は著しく内彎する。器面全体に4～7本の櫛歯状工具による条線が施されている。

12、深鉢形土器 口縁部破片である。内彎ぎみに立ち上がり、端部は肥厚する。口縁部は沈線による渦巻文と楕円区画文からなる。胴部には沈線による平行線と蕨手状の懸垂文が施され、平行線の縄文は0段3条



第22図 第9号住居址 出土遺物(3)

で、口縁部が横位、胴部が縦位に施されている。区画内の縄文は磨消される。

13、深鉢形土器 口縁部破片。1と同一個体である。口縁部は渦巻文と楕円文が変形した区画文により構成される。胴部は沈線による平行線と、蕨手状の懸垂文が垂下し、この区画内の縄文は磨消される。縄文はRLで、口縁部が横斜位、胴部が縦位に施されている。

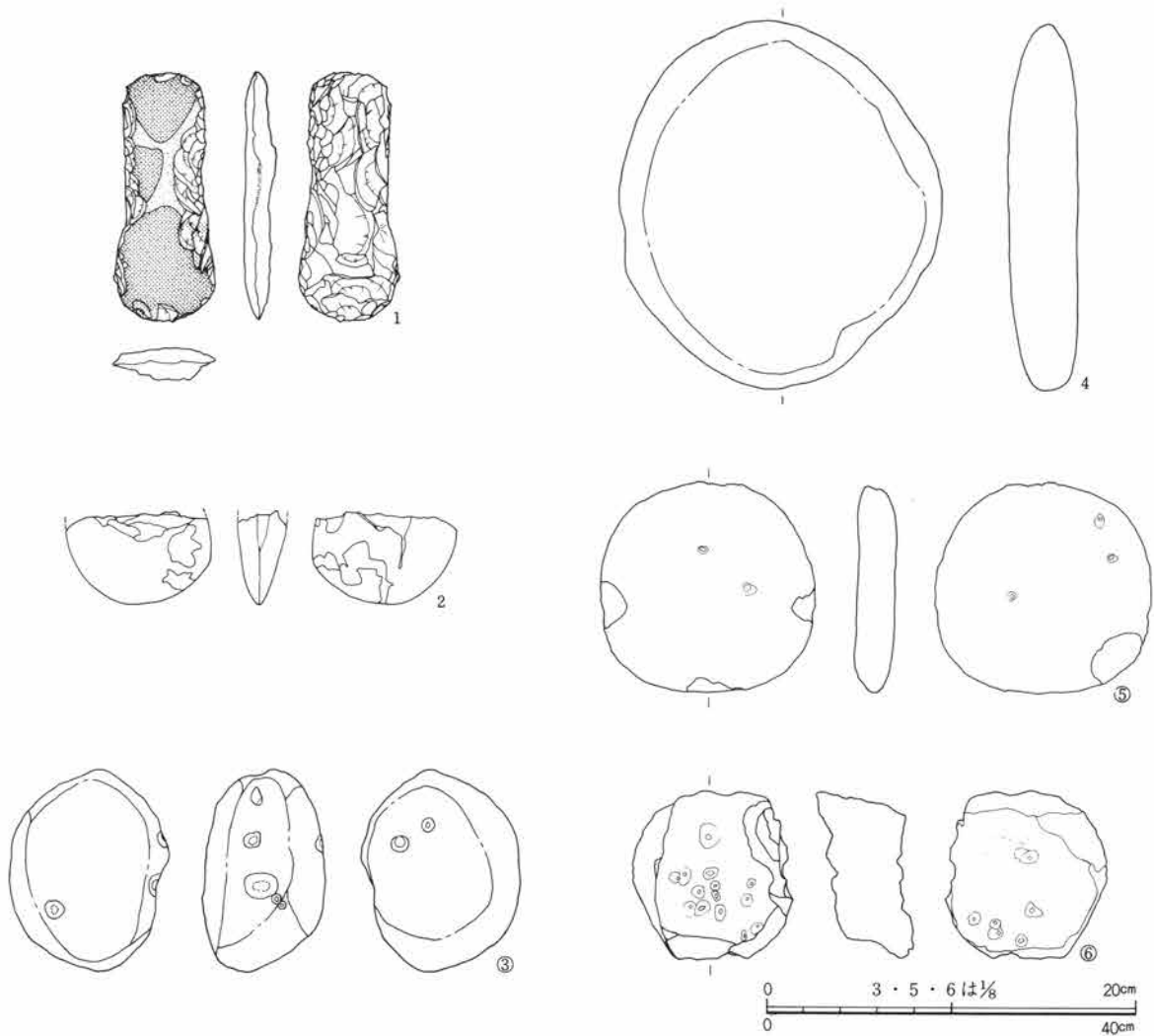
14、深鉢形土器 口縁部破片である。内彎ぎみに立ち上がり、口唇は肥厚する。口縁部文様帯は沈線による渦巻文と楕円区画文からなる。胴部にはLR縄文が施文され、その後、沈線による平行線と蕨手状の懸垂文が施される。区画内の縄文は磨消される。

15、深鉢形土器 胴下半部の破片である。平行の沈線が垂下し、区画内の縄文を磨消する。縄文は0段4条RLが縦位に施されているが、反撚の可能性もある。

16、深鉢形土器の口縁部破片である。渦巻文と楕円区画文で構成される。LRの縄文が横位に施文されている。

17、深鉢形土器 口縁部。小さな突起をもつ。沈線により渦文状の区画がつくられている。縄文はRLで、横位に施文されている。

18、深鉢形土器 口縁部破片、割れ口に細かな調整が加えられている。縄文は0段4条のRLで反撚の可能性もある。厚さ0.8cm。



第23図 第9号住居址 出土遺物(4)

石器 (P L 48・49・52) 1、打製石斧 長さ130、最大幅55、厚さ14cm、重量140gを測る。石質は安山岩である。表面は大部分に自然面を残す。刃部には磨耗痕を残す。側縁は直線的である。

2、磨製石斧の刃部みの破片 残長50、刃部幅78cm、重量140gを測る。石質は変輝緑岩である。刃部の角度は24°である。

3、凹石 長さ107、幅85、厚さ65mm、重量680gを測る。石質は安山岩。表裏両面の周縁部より浅い凹みがある。また、側縁部にも同様の凹みがある。

4、長軸197、短軸175、厚さ37mm、重量2.100g、安山岩の扁平な円礫である。両面に弱い磨耗痕がある。ススが付着している。

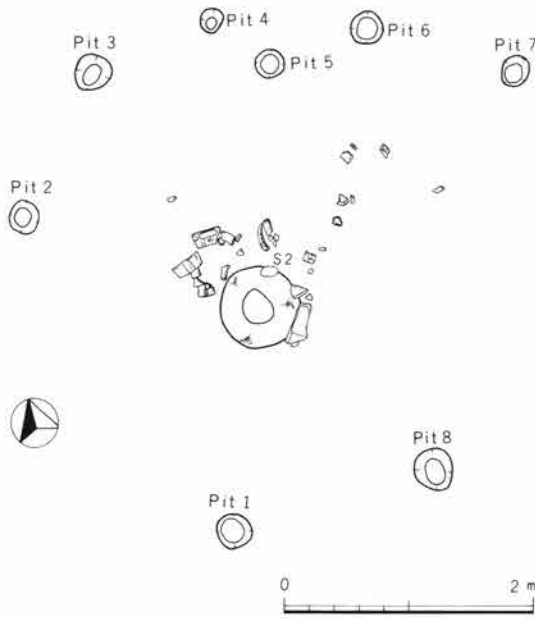
5、長軸233、短軸225、厚さ40mm、重量3.500g、安山岩の扁平な円礫である。表面が粗れているため磨耗痕については不明確であるが両面とも敲打による浅い凹みがあり、台石に使用されていたと考えられる。

また、多孔石と同様の形状の凹みもある。ススが付着している。

6、多孔石 長軸178、短軸167、厚さ82mmの安山岩の角礫からなる。

第10号住居址（第24図、P L 2）

V-8グリッドを中心に位置する。12m北側に第11号住居址がある。



第24図 第10号住居址平面図

平面プランは不明。埋土が地山と同色のため壁面を確認することが非常に困難であった。柱穴の位置から 径4.5m以上の規模を有したと思われる。

床面はソフトローム中につくられ、特に堅い面はなくほぼ水平であった。

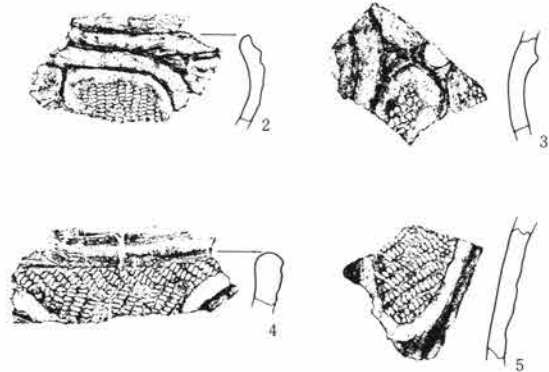
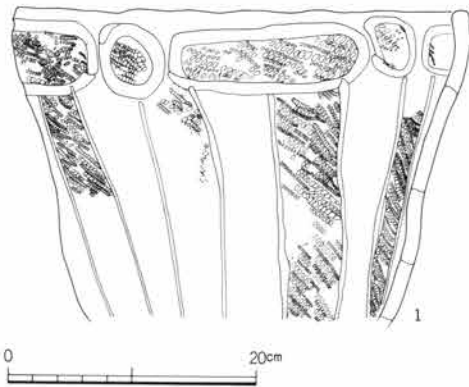
柱穴は8本確認されたが良好のものは少なく、位置的にも北側にかたよっていた。

炉址は径65cmの円形を呈した皿状の掘り込み。深さ15cm。側壁はやや焼けていた。東側に石組の一部を残す。

遺物は炉址周辺の床面に大破片があるが全体としては上層からの出土が多かった。

石器は打製石斧、凹石、多孔石各1。

No	長軸	短軸	深
1	28	28	21
2	24	24	19
3	30	30	31
4	20	18	27
5	23	23	25
6	28	25	33
7	26	23	20
8	33	32	31



第25図 第10号住居址 出土遺物(1)

出土遺物

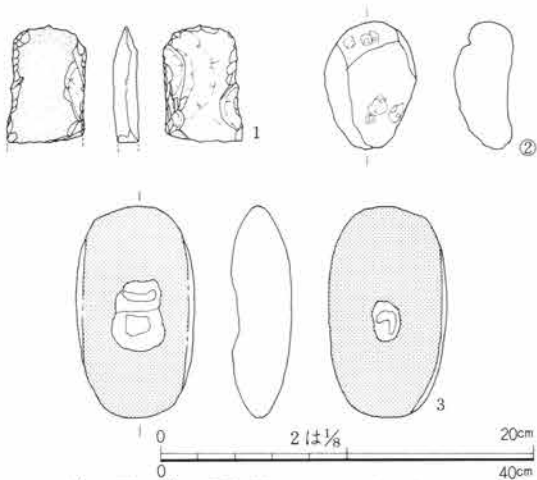
土器 (P L 35・42) 1、深鉢形土器 残存は約 $\frac{1}{4}$ で、口径36.9cmを測る。口縁部はやや内彎するが、胴部はわずかに括れる。縄文は異束のLRが口縁から胴部にかけて縦位に施文される。口縁部は沈線区画による楕円文と円形文を交互に4単位配している。縄文はLRを縦位に施している。胴部は沈線による懸垂文が施され、その間の縄文が交互に磨消される。

2、深鉢形土器 口縁部破片。微隆起帯により楕円状の区画文が施されている。縄文はRLで横位に斜位に施文される。

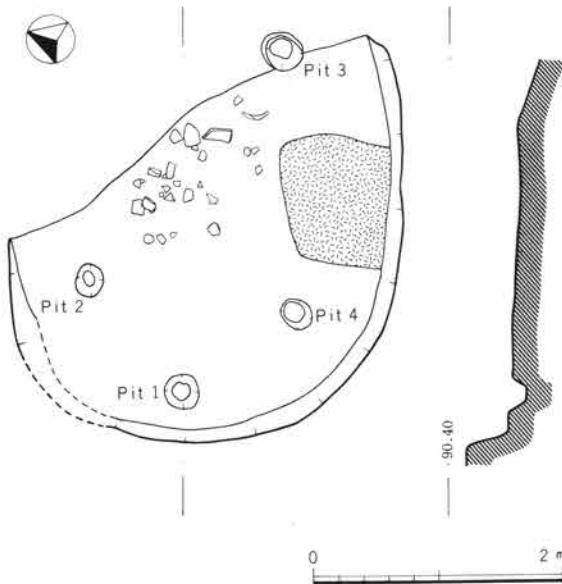
3、深鉢形土器 胴部破片である。微隆起帯状の隆線により区画されている。縄文はRLで、縦位に施されている。

4、深鉢形土器 波状の沈線が施されている。縄文はRLで、口唇部下に1段横位、他は縦位に施文。

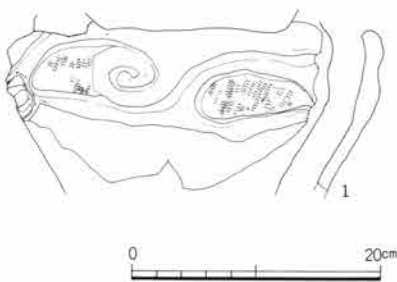
5、深鉢形土器 U字状の沈線区画文が施され、区画外の縄文を磨消している。縄文はRLである。



第26図 第10号住居址 出土遺物(2)



第27図 第11号住居址平面図 断面図



第28図 第11号住居址 出土遺物(1)

出土遺物

土器 (P L 35・42) 1、深鉢形土器 直立ぎ

みに開口する器形で、舌状の突起が4単位に配されるものと思われる。口縁部は隆帯による渦巻文と楕円区画文が施される。縄文はLRで、口縁部には横位に施文されるが、胴部上半は磨消されている。

2、深鉢形土器 口縁部は隆帯と沈線による区画文を施している。その下に横位の沈線がめぐり、これか

石器 (P L 48・49)

1、打製石斧の基部破片 残長60、最大幅43、厚さ16mm、重量60gを測る。石質は輝緑岩である。

2、多孔石 長さ136、幅96、厚さ56mmを測る。石質は安山岩。片面に凹穴をもつ。

3、凹石 長さ111、幅64、厚さ33mm、重量320gを測る。石質は安山岩。両面に敲打痕を残す他、著しく磨耗している。また、長軸の先端も敲打している。ススが付着している。

第11号住居址 (第27図、P L 4)

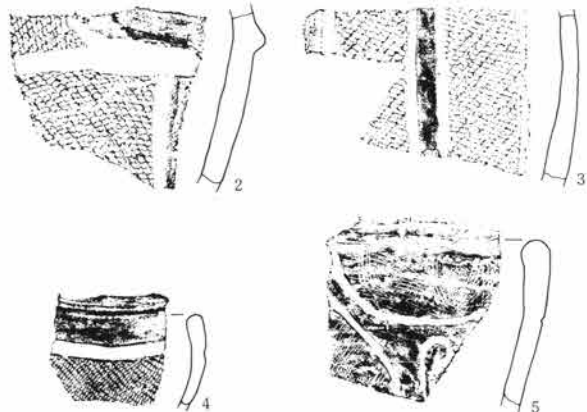
X'、W'-12、13グリッドに位置する。第1号方形周溝墓と重複し、北側の部分を欠失する。また、南壁の中央付近は攪乱を受けている。

平面形は東西に長軸をもつと考えられる長円形を呈する。規模は南北3.12mと小型である。

壁面、床面はソフトロームを掘り込み構築されている。残存壁高は南側で31cm、北側で36cmである。床面はほぼ水平で特に堅い面は存在しなかった。

住居址内にピットは4カ所確認できた。規模はピット1 径28、深さ15cm、ピット2 径26×22、深さ10cm、ピット3 径28、深さ16cm、ピット4 径28×22、深さ20cmであり柱穴と認定しがたいものであった。

遺物には石器が含まれず、多くは自然礫と伴に埋土中から出土している。



第29図 第11号住居址 出土遺物(2)

第2章 検出された遺構と出土遺物

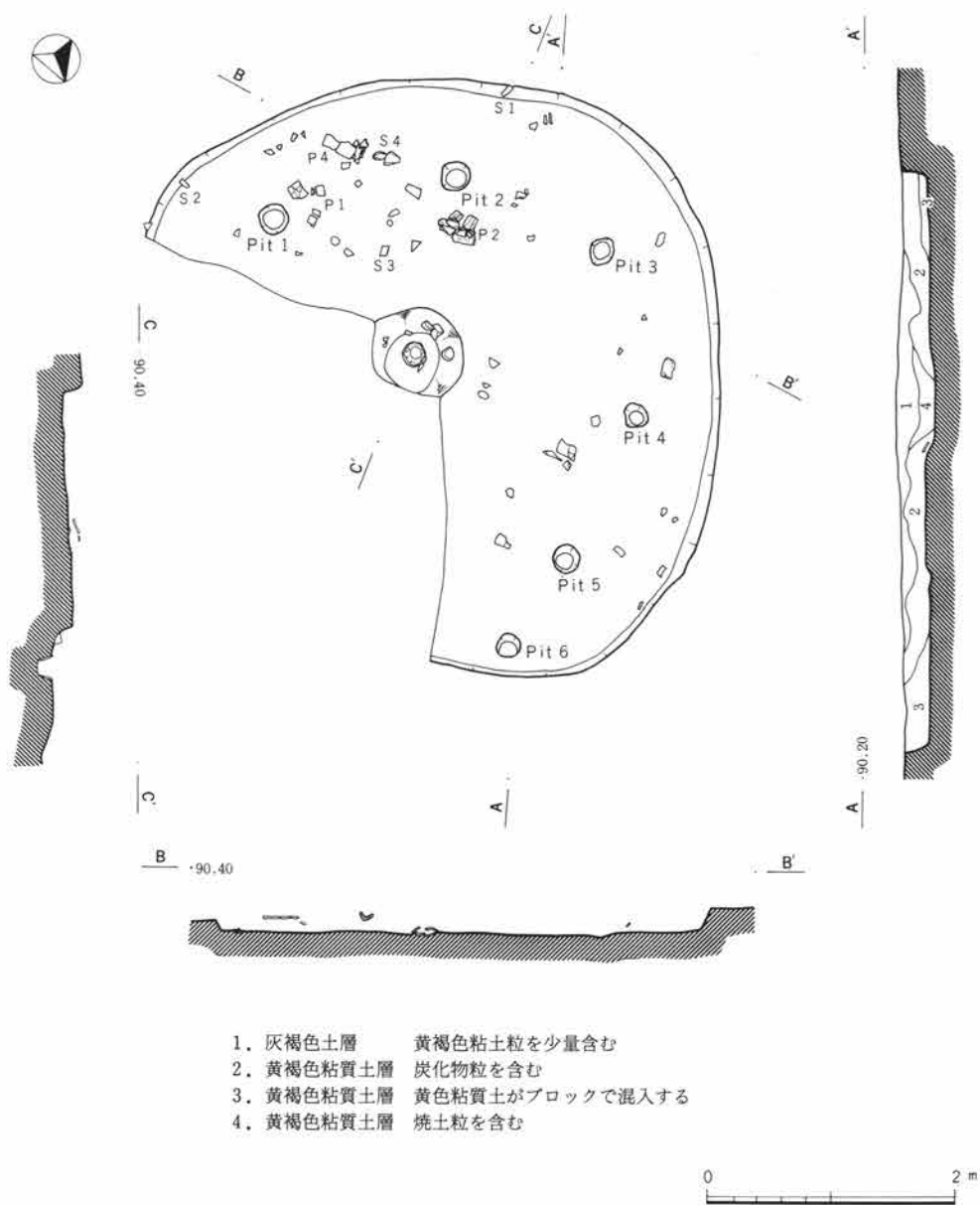
ら沈線が垂下し、区画内の縄文が磨消される。縄文はRLで、口縁部が横位、胴部が縦位に施文される。厚さ1.5cm。

3、深鉢形土器 胴部破片。平行の沈線が垂下し、その区画内の縄文は磨消される。縄文はRLRで、縦位に施文される。

4、深鉢形土器 口縁部には無文帯がめぐり、その下に沈線が施される。胴部はRL縄文を横位に施文後、沈線を垂下させている。

5、深鉢形土器 細い沈線により区画文が施され、その区画外の条線文を磨消している。器面には8本の櫛歯状工具による条線が弱いタッチで施される。磨消帯には蕨手状の懸垂文が施されている。

第12号住居址（第30図、PL 3）



第30図 第12号住居址平面図・断面図

C-11グリットに位置し、第13号住居址を切って構築されている。第8号古墳とも重複し北東部分を欠く。平面形は隅丸方形に近い円形で南北4.64mを測る。壁面はソフトロームを掘り込むほぼ垂直の立ち上がりであるが確認面が低かったため、残存壁高は12~20cmである。床面に堅い面をもたないが水平である。

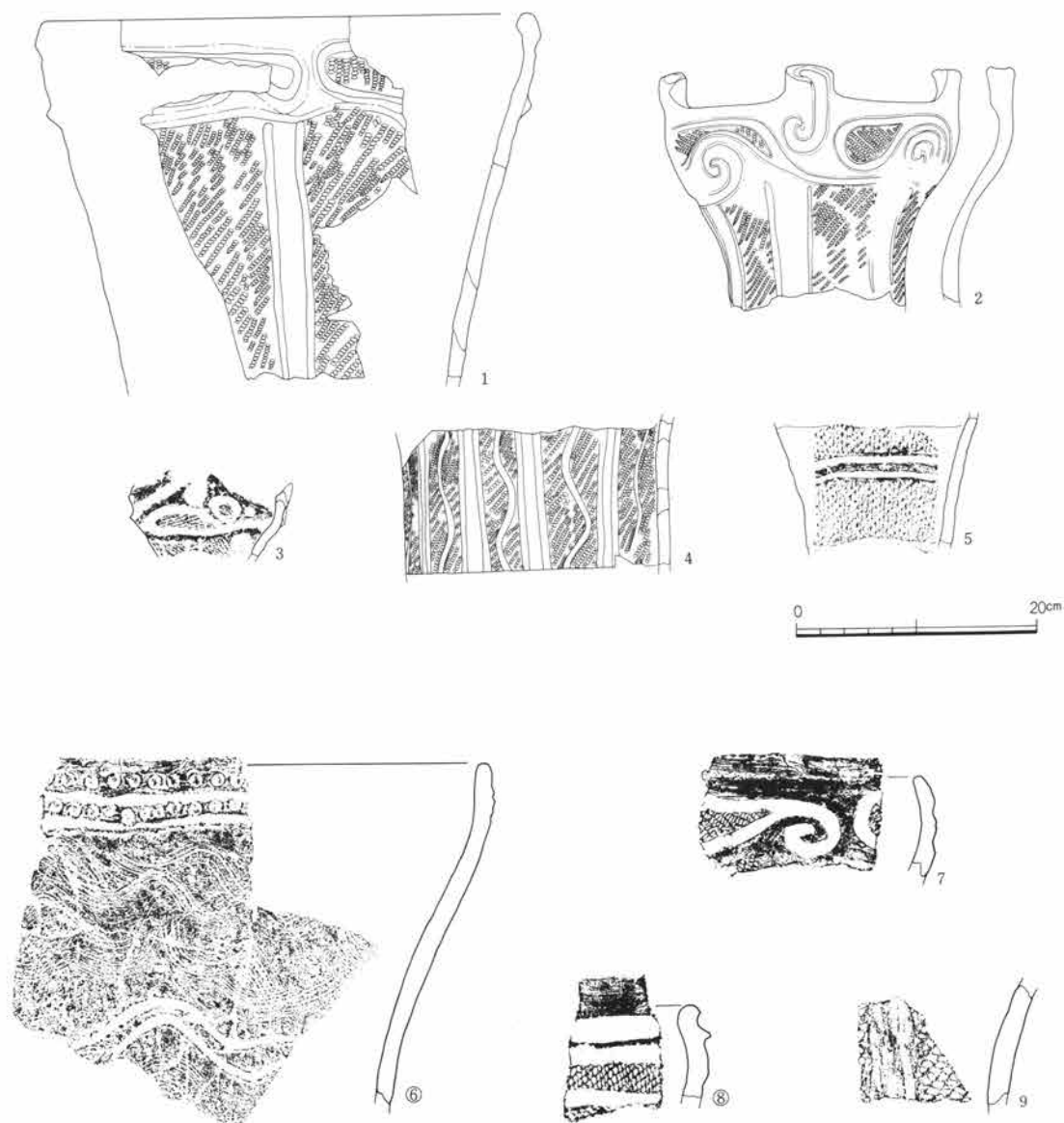
住居内には6本のピットが確認されたがピット6は第13号住居址に属するもので他の5本が柱穴と考えられる。良好な位置関係にあるがいずれも小規模である。

炉址はほぼ中央に位置し、石組を持つと考えられるが小石が残るのみである。深鉢の胴部(第31図5)を利用した埋甕があり、焼土も若干見られた。

遺物は床面から出土のものも少量見られた。第31図2はピット2と炉の間の床面から横倒の状態で検出された。1と3は床面直上、4は床面から10cm離れて出土した。

5は炉体土器である。石器は打製石斧3と凹石2が出土している。

No	長軸	短軸	深
1	24	22	14
2	24	22	15
3	20	—	11
4	18	—	19
5	22	20	21
6	20	18	46



第31図 第12号住居址 出土遺物(1)

出土遺物

土器 (P L 36・43) 1、深鉢形土器 大型破片。縄文はR Lで、口縁部が横位、胴部が縦位に施文される。口縁部は隆帯を貼付した楕円区画文と渦巻文により構成される。胴部は2本の平行沈線を懸垂させ、その中の縄文を磨消している。

2、深鉢形土器の上半部 口径24.7cmを測る。口唇には4単位の把手がつく。これの頂部からは太い沈線が垂下し口縁部で渦巻状の文様を構成する。口縁部には沈線による渦巻文と楕円区画文が4単位配置されている。口縁部文様帯の縄文はR Lである。胴部は沈線による懸垂文が7単位に施され、その間の縄文は磨消される。縄文はR Lで、口縁部が横位、胴部が縦位に施文される。

3、深鉢形土器 波状口縁を呈する。口縁部は隆帯と沈線により渦巻文と楕円区画文が施されている。胴部はL R縄文を施文した後に、沈線により区画文を施し、区画円の縄文を磨消している。

4、深鉢形土器 胴部破片。約 $\frac{1}{4}$ 残存。2本の平行沈線文と蛇行線文を懸垂させ平行沈線文間の縄文を磨消している。縄文はR Lを縦位に施文している。

5、深鉢形土器 上下両端とも接合部分で欠損している。Lの捺糸文を密着施文した後に、2本の平行沈線による無文帯をめぐらし、その沈線文で、区画された中の捺糸文を磨消している。

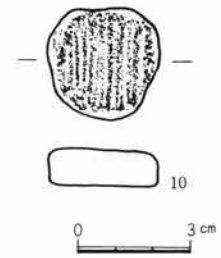
6、深鉢形土器 大型破片。器形は頸部で弱く括れ、口縁部はやや内彎ぎみに立ち上がる。口縁部には2条の沈線がめぐり、円形竹管を用いた連続刺突文が2段に施されている。括れ部にも2条の波状沈線が施され、器面は8本の櫛歯状工具による波状の条線で埋められている。

7、深鉢形土器 渦巻文と楕円区画文を施文する。縄文はR Lを横位に施文する。

8、深鉢形土器 口縁部に沈線と隆帯が施される。縄文はL Rが施文される。

9、深鉢形土器 R L縄文施文後に、沈線区画文を施し、その中の縄文を磨消す。

10、土製円板 径3cm。条線の施文された土器片を利用している。



第32図 出土遺物(2)

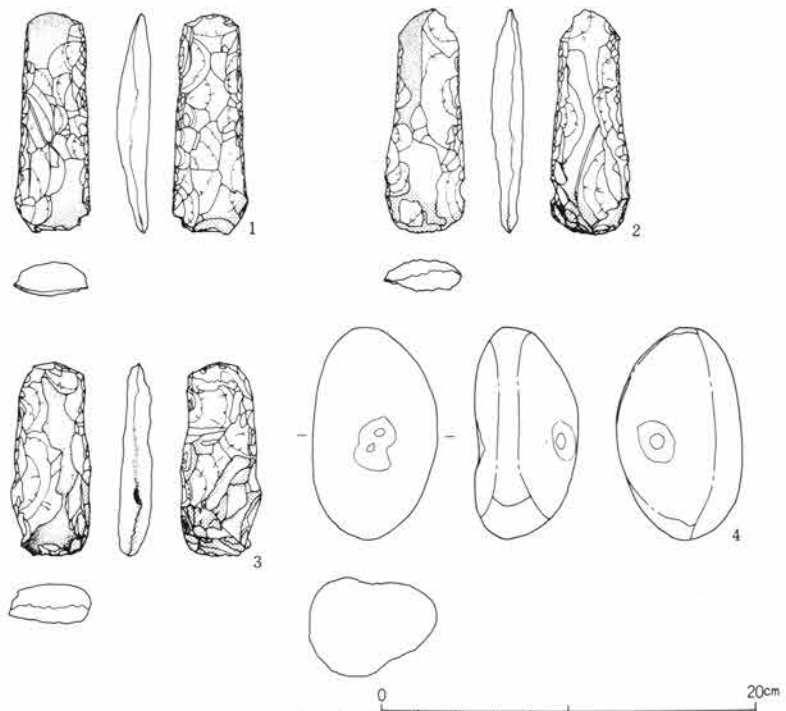
石器 (P L 48・49) 1～3、

打製石斧 1、長さ115、刃部幅40mm、重量100gを測り短冊型を呈する。石質は安山岩。刃部は磨耗している。

2、長さ117、刃部幅42mm、重量90gを測る。石質は安山岩。刃部には両面に磨耗痕を残す。側面部には刃つぶしが施される。

3、長さ101、刃部幅42mm、重量110gを測る。石質は安山岩。全体的に剝離の稜が磨耗しているが、刃部内側は特に顕著。

4、凹石 長さ112、幅67、厚さ55mm、石質は安山岩。側縁部には弱い磨耗痕が残る。



第33図 第12号住居址 出土遺物(3)

第13号住居址

(第34図、PL 3)

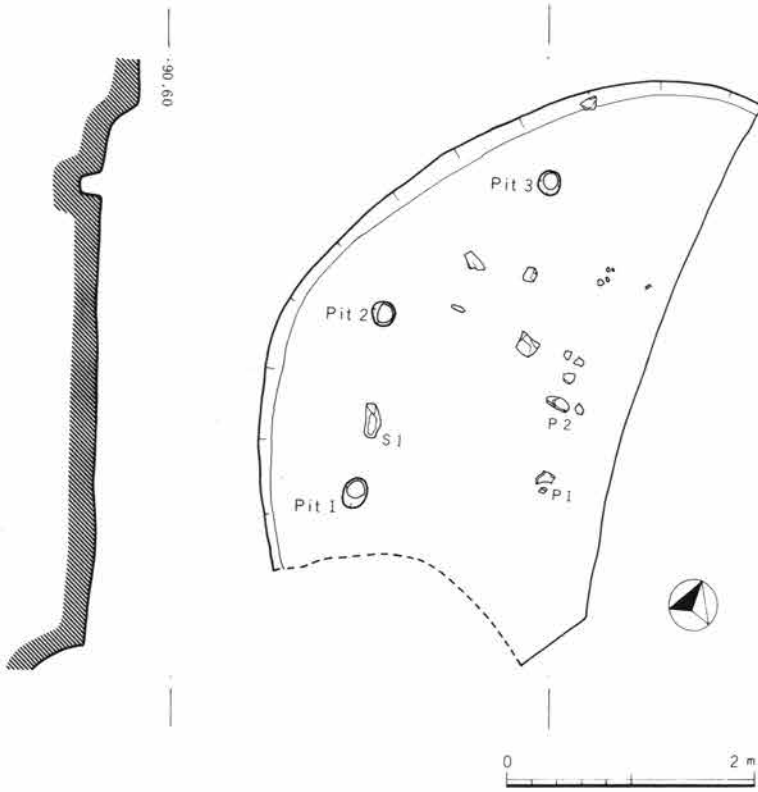
C-13グリッドに位置する。平面形は軸線の規模が4.8m以上の隅丸方形または円形と考えられる。

壁面はソフトロームを掘り込み構築されており、残高は20~25cmである。

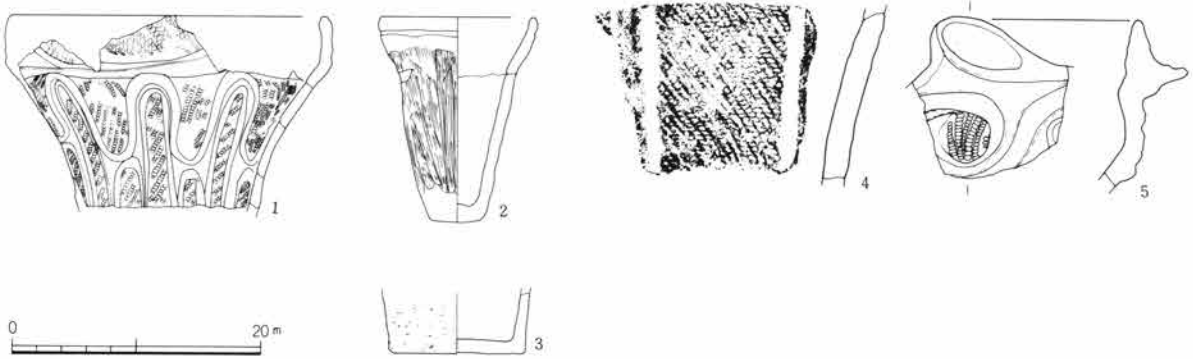
柱穴は3本確認され、ほぼ良好の位置にある。規模は次のとおりである。ピット1 径25×20、深21cm、ピット2 径18、深27cm、ピット3 径18、深17cm。

埋土は暗褐色土とソフトロームの混土層であった。

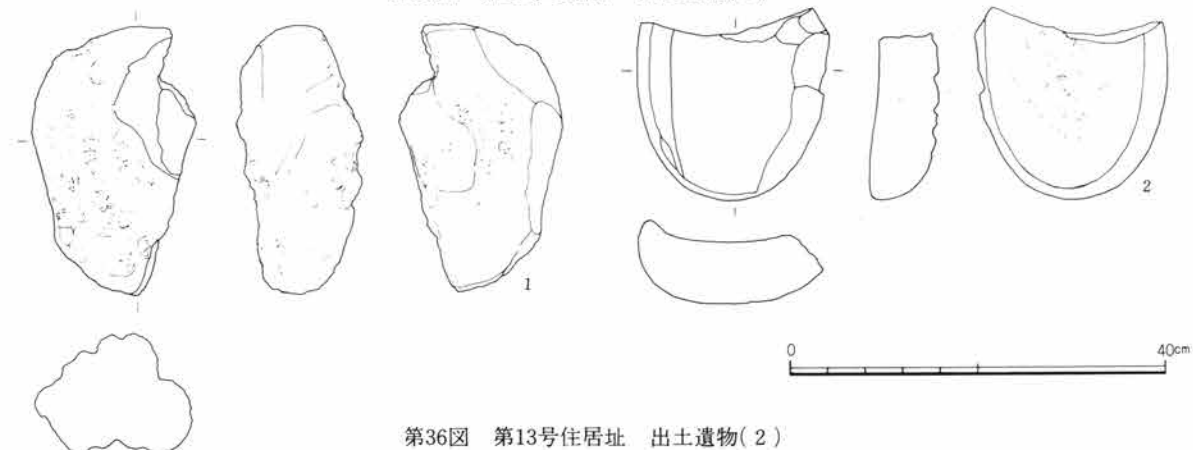
遺物は床面直上からの出土数は少なかった。1は床直、2は床上10cmからの出土である。



第34図 第13号住居址平面図・断面図



第35図 第13号住居址 出土遺物(1)



第36図 第13号住居址 出土遺物(2)

出土遺物

土器 (PL36・43)

1、深鉢形土器 上半部破片である。残存は約 $\frac{1}{2}$ 。口縁部は沈線による楕円区画文が施される。胴部は上半に波状沈線がめぐらされ、各波頂・波低部には \cap 字状の懸垂文が施される。

2、深鉢形土器 小型。口径12.3、器高16cmを測る。口縁部には一条の沈線がめぐり、その上位は無文帯となる。胴部には5～6本の櫛歯状工具による条線が施される。口縁部に炭化物が付着する。

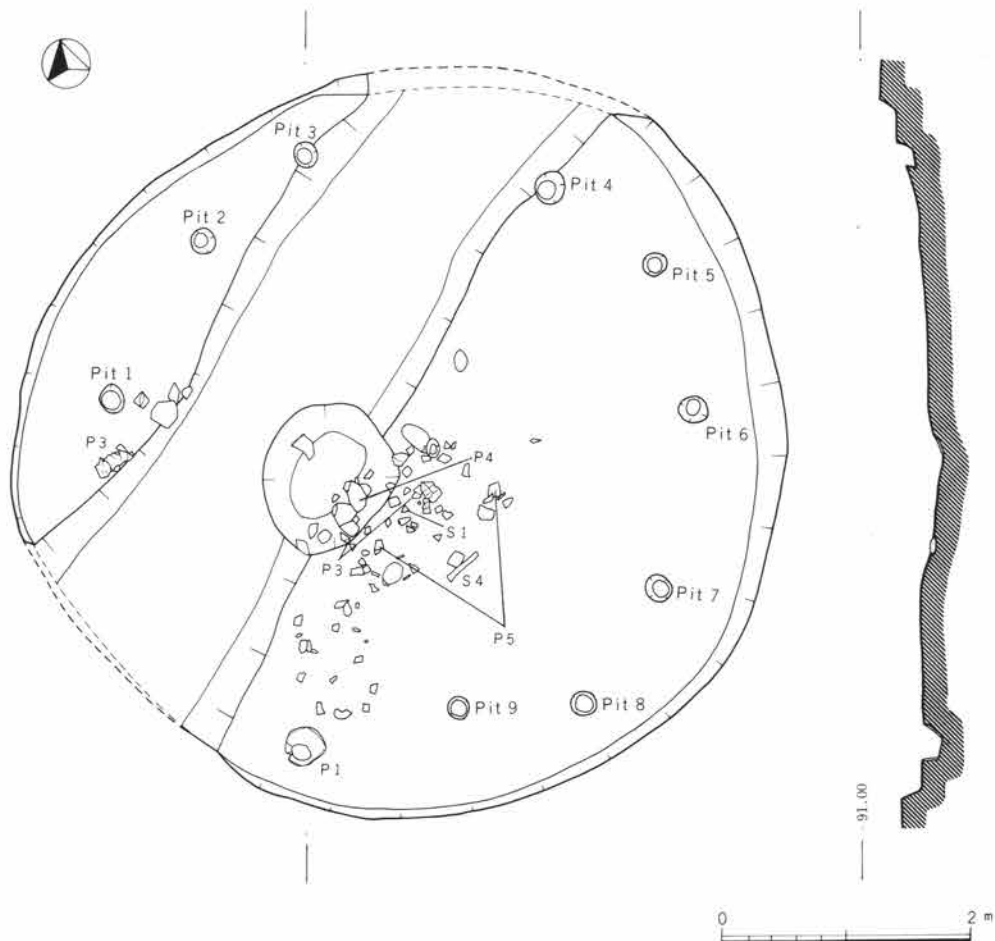
3、深鉢形土器 底部。2本の半截竹管による4条1単位の集合沈線が2段めぐり。地文としてRL縄文が横位に施文される。諸磯b期の土器である。

4、深鉢形土器 LR縄文を縦位に施文して後に、沈線区画文の中を磨消している。

5、深鉢形土器 口縁部は突起状を呈する。渦巻状の沈線・隆帯が施文される。縄文はRL。

石器 (PL52・53) 1、多孔石 長さ274、最大幅174、厚さ133mm、重量4,700gを測る。石質は安山岩であるが比重は軽い。表裏両面にのみ凹みがある。

2、石皿 $\frac{1}{2}$ の残存である。残長は173、最大幅202mm、中央部の厚さ63mm、重量3,100gを測る。石質は安山岩。磨面に2つ、底面に多数の凹み穴がある。



第37図 第14号住居址平面図・断面図

第14号住居址 (第37図、P L 4)

C-15グリッド、第1号方形周溝墓の東側に位置し、第5号溝と重複する。南側1.2mで第13号住居址と接する。平面プランは東西6.4m、南北5.8mと東西に長軸を有する長円形を呈する。壁面はソフトロームを掘り込んでつくられており、東側にやや傾斜している。残存壁高は良好な北側で32cm、南側は16cmである。床面はソフトローム中につくられているため堅い面は認められなかった。

住居址内には9本のピットが確認された。壁際を巡る柱穴と考えるがピット8はやや不自然な位置にある。小規模のものが大半を占めている。

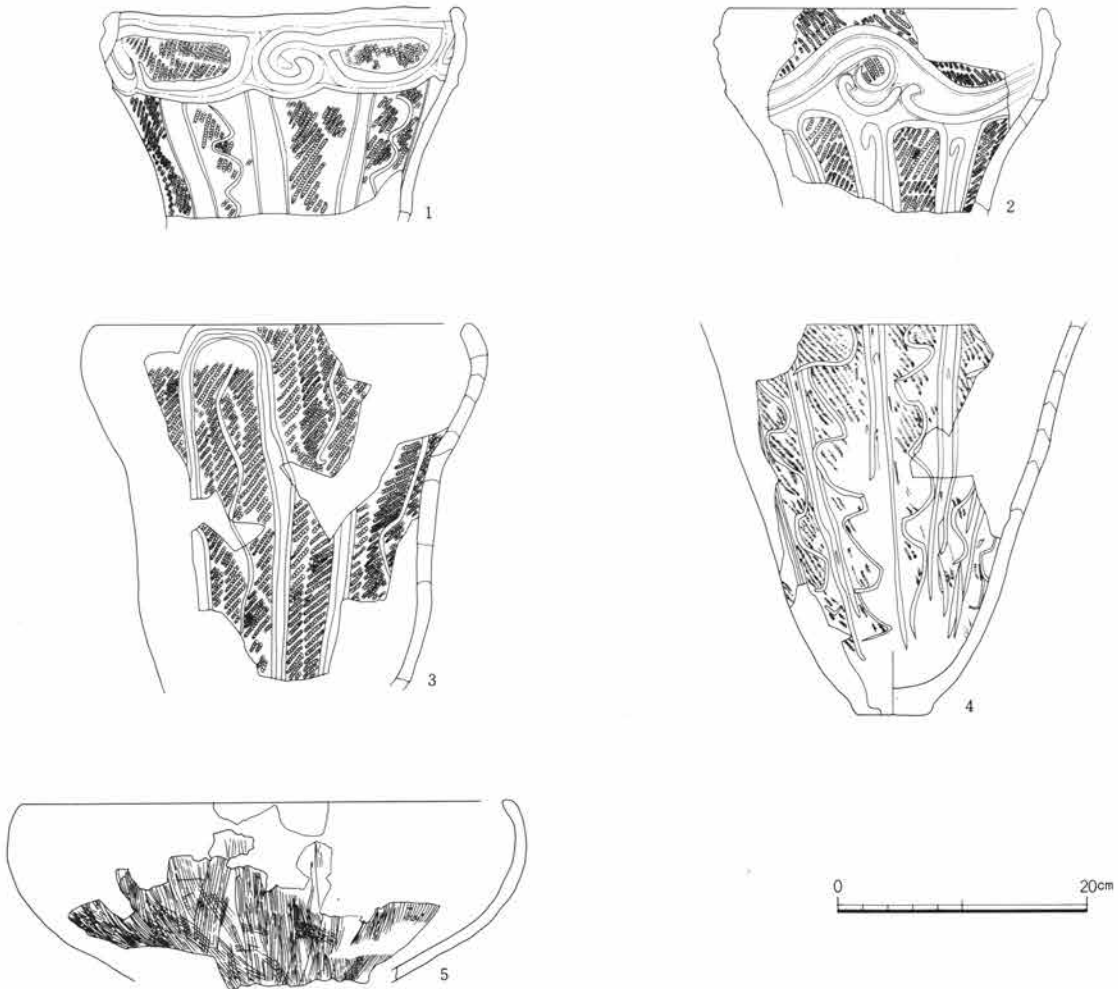
炉址は中央やや西よりにある。残存規模は南北1.2m、深さ8~15cmを測り、皿状の掘り込みを呈する。2、3の礫も見られ石囲い炉の可能性もある。

炉址の南側、壁面から約20cm離れて埋甕がある。深鉢の上半部(第38図1)を埋設している。土器の下端までは16cmを測る。埋甕と炉址を結ぶ軸線の方位はN18°E。

埋土はソフトロームに類似した暗褐色土であった。

出土遺物は炉址の東と南側に集中するが大多数が小破片であり、また、埋土中のものが多い。土器のうち1は埋甕、3は床直、4は炉内、2と5は埋土中の出土である。石器は打製石斧2、凹石1、石皿(破片)1、玦状耳飾りを出土した。

No	長軸	短軸	深
1	24	20	13
2	20	—	13
3	22	18	15
4	26	—	24
5	20	18	21
6	22	—	18
7	22	20	18
8	22	20	9
9	18	—	17



第38図 第14号住居址 出土遺物(1)

出土遺物

土器 (P L 36・43) 1、深鉢形土器 上半部。口径28.6cmを測る。口縁部文様は隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文で5単位に構成されるが、沈線文の意匠が強い。胴部は沈線により2本の平行線文と蛇行線文を4単位に懸垂させ、平行縄文の区画内の縄文を磨消す。口縁部にはススが付着する。

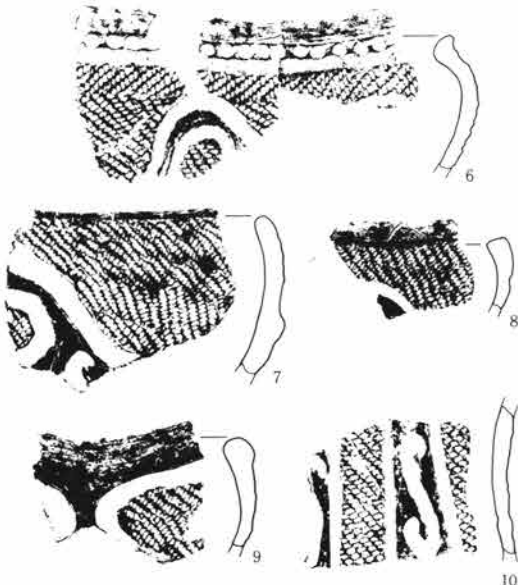
2、深鉢形土器 上半部。口縁部には波状の隆帯とそれに沿った沈線により文様構成される。波頂部下には沈線による渦巻文が配される。胴部には∩字状と蕨手状の懸垂文が交互に施され、区画外の縄文は磨消されている。縄文はRLで、口縁部が横位、胴部が縦位に施される。

3、深鉢形土器 上半部破片。キャリパー状を呈するがくびれが上位にあり弱い。口縁部は内彎する。RLの縄文を縦位に施した後、口縁から沈線2本による∩字状文とその区画内に蛇行線文を施文とする。各∩字状文間にはS字状の沈線が施文される。

4、深鉢形土器 下半部。残高30.4cm。Lの縄文を縦位に施した後、2本の平行線文と蛇行線文を交互に施文している。

5、浅鉢形土器 残存は約1/4である。口縁は無文帯をもち、その下位には横位の沈線が施されている。胴部には10本の櫛歯状工具による条線が施されている。

6、深鉢形土器 内彎ぎみに立ち上がり、口唇はやや直立する。指頭状の刺突文と沈線が巡る。口唇下にLR縄文を1段横位に、それ以下はLRL縄文を縦位に施文する。波状沈線内の縄文は磨消される。



第39図 第14号住居址 出土遺物(2)

7、深鉢形土器 隆帯とそれに沿った沈線により区画されている。縄文はRLで横位に施文されている。

8、深鉢形土器 口唇部には平坦な面がつくられている。LRL縄文を施文した後、沈線区画文を施し、その区画内を磨消している。

9、深鉢形土器 口縁部は1.5cmと著しく肥厚する。沈線により楕円文と渦巻文が区画されていると思われる。RLの縄文が横位に施される。

10、深鉢形土器 磨消縄文部には沈線によるS字状文が施される。縄文はLRLの縦位施文である。

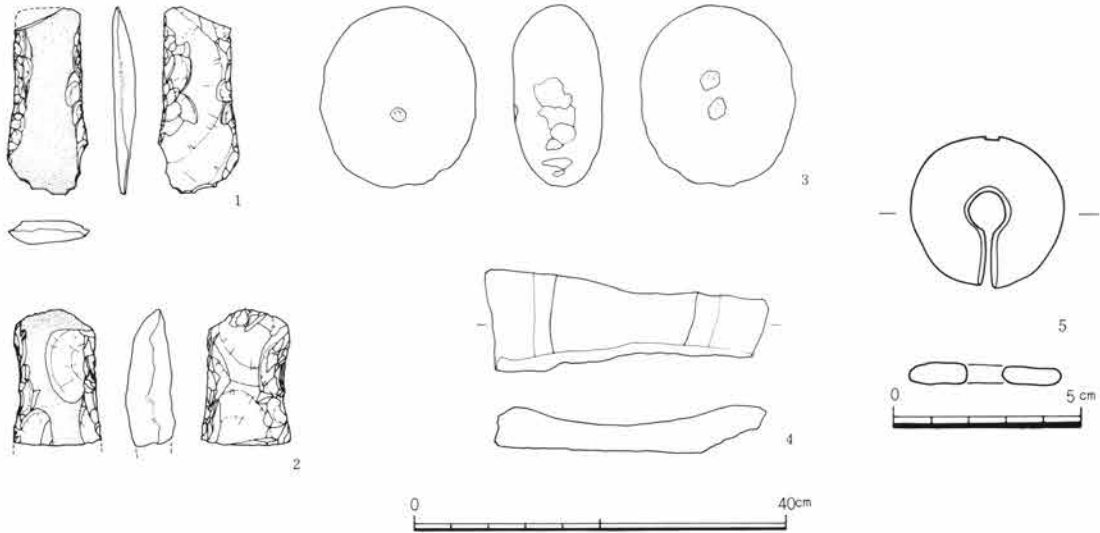
石器 (P L 48・49・53・54) 1・2、打製石斧 1は長さ97、幅44、厚さ12mm、重量70gを測る。石質は安山岩である。刃こぼれがあり若干磨耗している。側縁部には刃つぶしが施されている。

2、基部のみで残長72、厚さ23mmを測る。石質は黒色頁岩。表面は自然面を一部残し、円弧状に外反している。

3、凹石 長さ9.5、幅83、厚さ48mm、重量510gを測り、楕円形を呈する。石質は安山岩。両面の敲打痕は弱く、凹みは浅い。磨石として併用しており磨耗痕を残す。周縁部にも敲打痕を残す。

4、石皿 欠損品と考えられる。最大幅は304cm、厚さ27cmを測る。石質は点紋緑色片岩である。磨面は浅いが、磨耗痕を顕著に残している。

5、块状耳飾り 径は40mm、断面形は偏平で厚さ6.5mmを測る。下端に切り込みが入られているだけでなく外縁の対称部分にも加工痕が残る。重量は16g。石質は珪質準片岩である。



第40図 第14号住居址 出土遺物(3)

第15号住居址 (第41図、P L 3)

J-16グリッドに位置し、西側に22cmのところには第14号住居址がある。第7号古墳周堀と近接し、南西の壁は第46号土壇と重複している。

平面プランは南北に長軸をもつ長円形である。南北6.89m、東西5.68mを測る。調査時には2軒の住居址の重複を想定したためやや不自然なプランになっている。

壁面はソフトローム層を掘り込み、立ち上がりは垂直に近い状態である。残高壁高は東西で27cm、北側で30cmを測る。床面もソフトローム層中に構築されているため堅い面は認められなかった。

ピットは壁際を巡る11本を検出したが全体の位置関係からピット3、7、8は柱穴とは認め難い。規模は表のとおりであり、深い掘り方をもつものは少なかった。

炉址は中央やや北側よりに位置している。石組はなく、長軸78、短軸65、深さ25cmの掘り込みがあるだけである。側壁はやや焼土化していた。上端近くから土器片、打製石斧(第43図3)が出土。

炉址とピット1を結ぶ線上、壁面から85cmの場所に埋甕がある。完形の深鉢(第42図1)を埋設しており、深鉢(第42図3)が内部に入っていた。埋甕と炉址を接続した軸線の方位はN30°Eである。

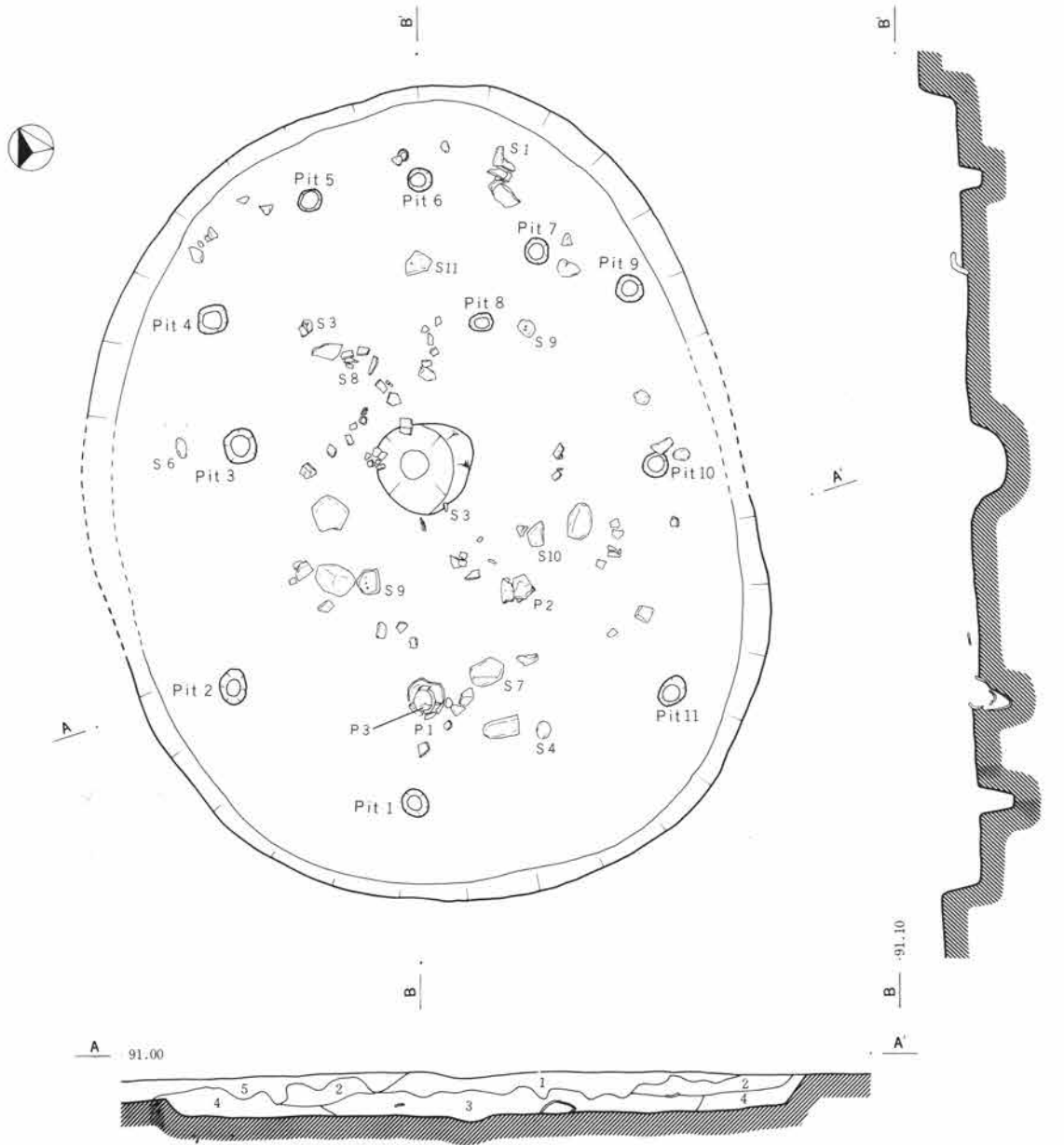
出土遺物は石器が多く、打製石斧3、石皿2、凹石2、多孔石4、軽石製品1が出土している。土器は1が埋甕、3が埋甕内、2が床直出土である。

No	長軸	短軸	深	No	長軸	短軸	深
1	26	24	32	7	22	—	21
2	26	24	28	8	18	—	19
3	31	30	25	9	22	—	16
4	26	24	28	10	22	—	32
5	20	—	33	11	28	22	11
6	22	—	20				

出土遺物

土器 (P L 36・43) 1、深鉢形土器 口縁部は内彎ぎみに立ち上がる。口縁部文様帯は隆帯が1条めぐらのみで、胴部文様帯は微隆起帯状の隆線により渦巻文が施される。縄文はLRで口縁部が横位、胴部が縦位に施されるが、胴部の括れ部には部分的に横位に施される箇所もみられる。

2、深鉢形土器 上半部である。口縁部は内彎しながら立ち上がり胴部で緩い括れを持つ。口縁部は1箇所だけ波状を呈している。口唇部は無文で下位に全周する沈線により胴部と区画される。胴部には沈線区画による「H」字状文が5単位配され、また、その区画外にはL縄文が部分的に充填される。口縁には煮凝り



1. 茶褐色土層 炭化物粒を含む
2. 茶褐色土層 1に類似するが締りにやや欠ける
3. 褐色土層 1と4の中間層、炭化物を少量含む
4. 暗褐色土層 炭化物を多量に含む
5. 明褐色土層 地山のソフトロームが流入したもの

第41図 第15号住居址平面図・断面図

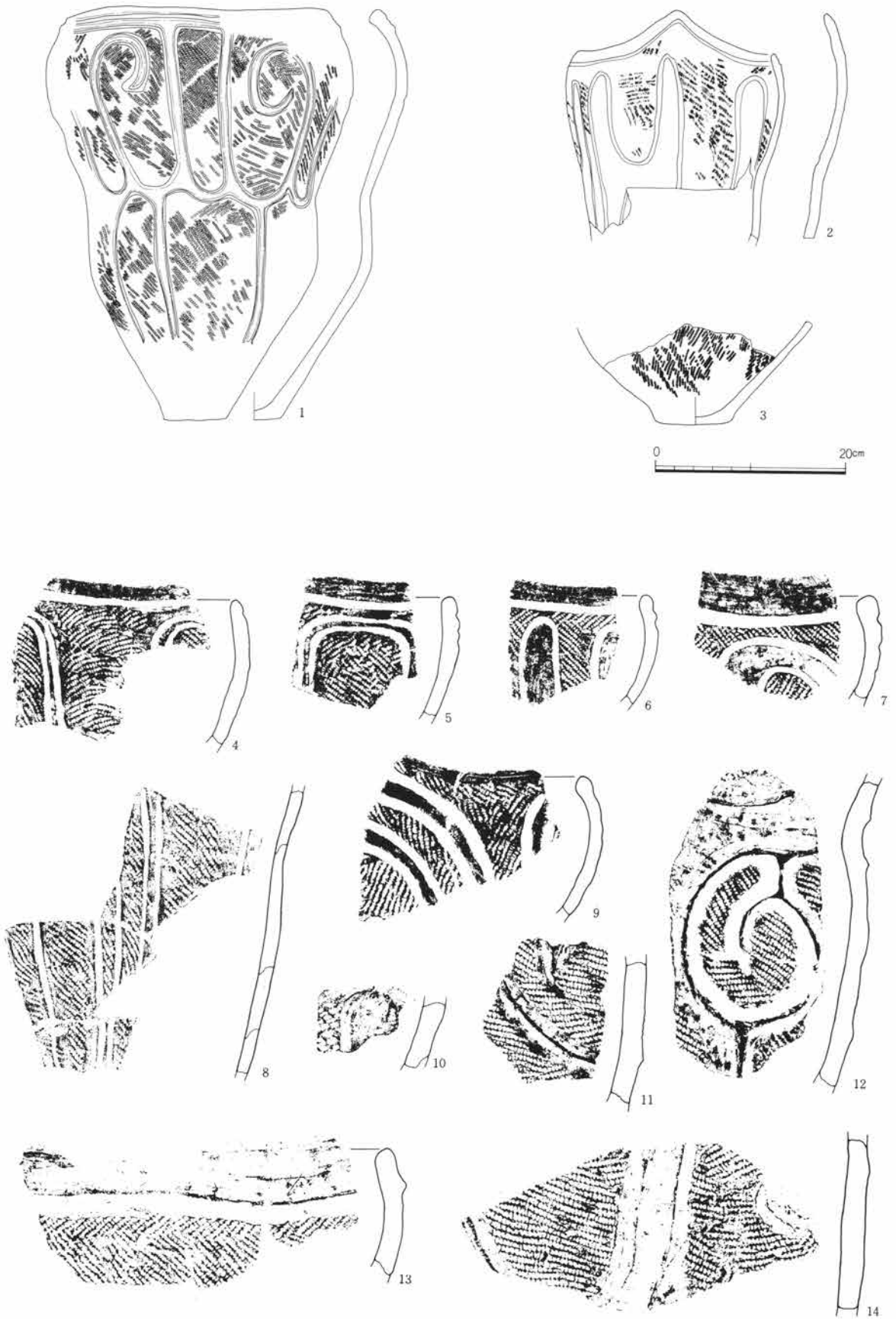
状の付着物がみられる。

3、深鉢形土器 底部。RL縄文を縦位に施文している。外面にススが付着している。

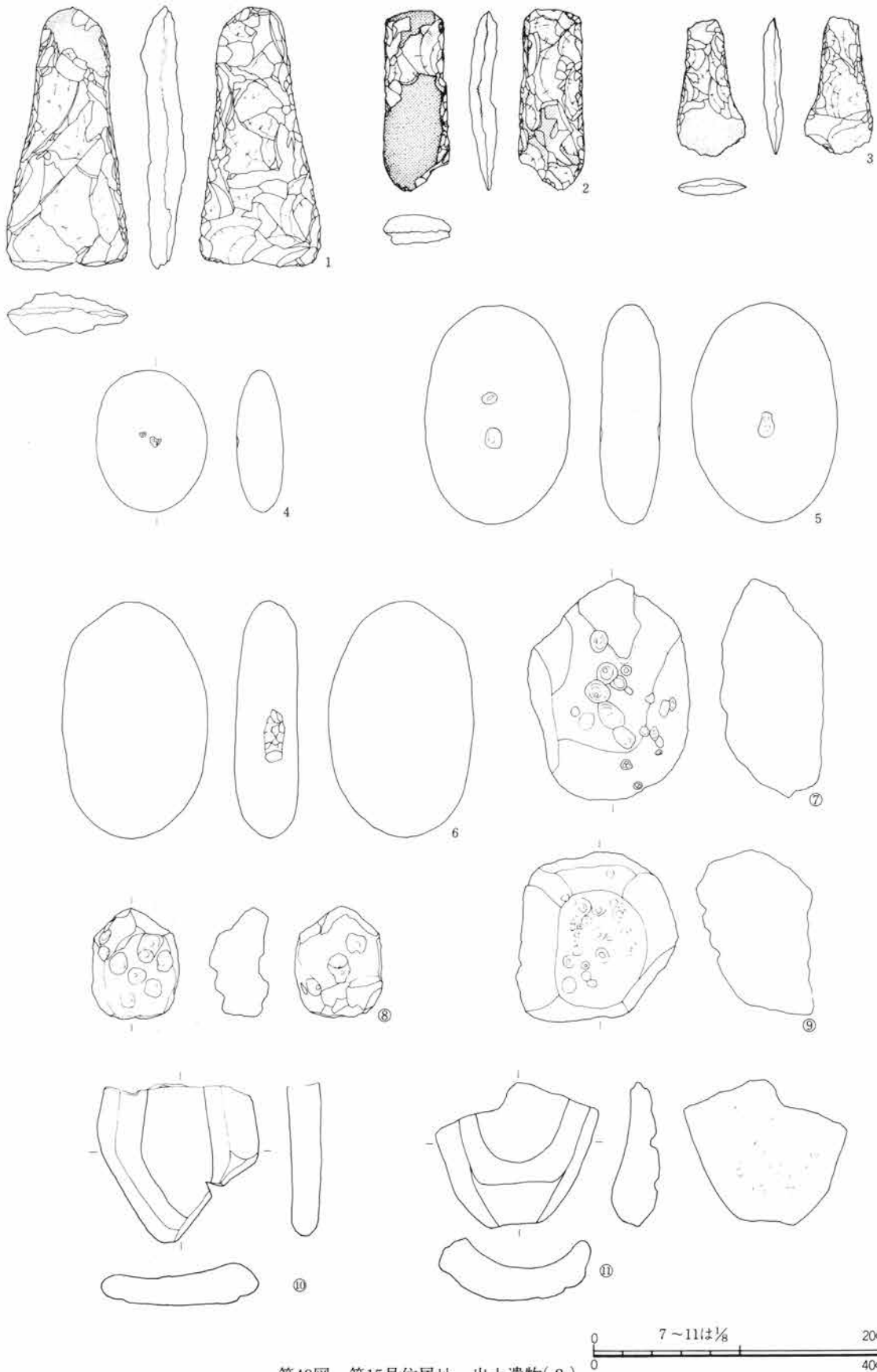
4、深鉢形土器 5と同一個体と考えられる。やや内彎しながら立ち上がり、口縁部には沈線が巡る。また、沈線により区画された内側にはLR縄文が充填されている。

6、深鉢形土器 口縁部には沈線が巡る。胴部には沈線による区画文があり、その区画内の縄文は磨消される。縄文はLRで口唇部のみ横位に施され、口縁部文様帯のなごりを止めている。他は縦位に施される。

7、深鉢形土器 口縁部に1条の沈線がめぐり、その上位は無文帯となる。その下位には沈線による区画



第42図 第15号住居址 出土遺物(1)



第43図 第15号住居址 出土遺物(2)

文があり、区画内の縄文は磨消される。縄文はRLで、口唇部のみ1段横位に、他は縦位に施文される。

8、深鉢形土器 沈線による懸垂文が不規則に施され、その区画内が部分的に磨消縄文となる。縄文はLRの縦位施文である。

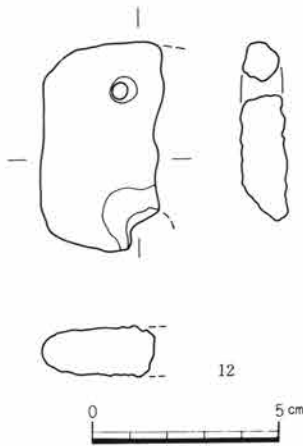
9、深鉢形土器 沈線による波状文が巡り、その区画内の縄文は磨消される。縄文はRLで、口唇下が横位、他は縦位に施文される。

10、深鉢形土器 胴部小破片。沈線の区画内は磨消縄文となる。縄文は異束のL $\begin{cases} R \\ R \\ L \end{cases}$ $\begin{cases} L \\ L \\ L \end{cases}$ (異束) である。

11、12、深鉢形土器 胴部破片で同一個体と思われる。微隆起帯により渦巻文が区画され、この区画内にLR縄文が充填されている。

13、深鉢形土器 口縁部破片。口縁部に無文帯が巡り微隆起帯により区画される。胴部はRL縄文が施されており、最上部のみ横位で、他は縦位にされている。

14、深鉢形土器 胴部破片。2本の微隆起帯により波状文が施され、その内側は磨消縄文となる。



第44図 出土遺物(3)

石器 (PL48・49・52・53・54) 1～3、打製製石斧 長さ175、刃部幅83、基部幅51、厚さ25mm、重量370gを測る。石質は安山岩。側縁部はやや内彎しており、基部に近い部分は刃つぶしが施されている。

2、長さ120、幅45mm、重量120gの短冊型を呈する。石質は安山岩。刃部は一部を欠失する。表面は大部分が自然面である。側縁部の形態は著しく内彎する。また中位には刃つぶしが認められる。内面ともに器面の磨耗が顕著である。

3、長さ92、刃部幅46mm、重量60gを測る。石質は黒色頁岩。基部と刃部の表面には自然面を残す。右側の側縁部は刃つぶしが顕著である。

4～6は磨石 5は長さ146、幅99、厚さ39mmの楕円形を呈す。重量は840g。石質は安山岩である。両面の中央部には弱い敲打痕を残し凹石としても使用されている。

6、長さ159、幅98、厚さ42mm、重量1,060gを測る。石質は安山岩である。両面とも磨耗は顕著である。また、敲打にも使用しており、中央部、側縁部、長軸の両端にはその痕跡が認められる。

7～9、多孔石 7は長軸296、短軸218、厚さ140mm、重量1,160gを測る。安山岩の角礫であるが器面の磨滅が進行し稜は丸味をもっている。片面にのみ凹みがある。

8、長軸148、短軸118、厚さ72mm、重量1,070gを測る。石質は安山岩。凹みは径25mm。大きなものが両面にみられる。

9、長軸222、短軸212、厚さ142mm、重量1,050gを測る。石質は安山岩の角礫であるが器面の磨滅が進み稜は丸味を帯びている。

10、石皿 最大幅213、厚さ32mm、重量3,100gを測る。石質は安山岩。磨面の凹みは著しく、磨耗痕を良好に残す。底面には多孔石と同様の凹みがある。

11、石皿 最大幅220、残長190mm、重量2,540gを測る。石質は安山岩。磨面の凹みは著しく、磨耗痕を良好に残す。底面には多孔石と同様の凹みがある。

12、軽石製品の欠損品 長さ55、厚さ12mm。短辺の一方に円形の掘り込みがある。また、その反対側の縁部際に穿孔が施されている。

第16号住居址 (第45図、P L 4)

N-6グリッドに位置し、第4号古墳の墳丘下にあたる。縄文時代前期の第4号住居址、古墳時代前期の第44号住居址と重複する。

平面形は隅丸方形に近い不整形。東西4.45m、南北4.7mを測る。壁面はやや上に開きぎみに立ち上がり残存壁高は東側で10cm、西側で20cm程である。床面は炉を中心として柱穴の内側に堅い面をもつ。

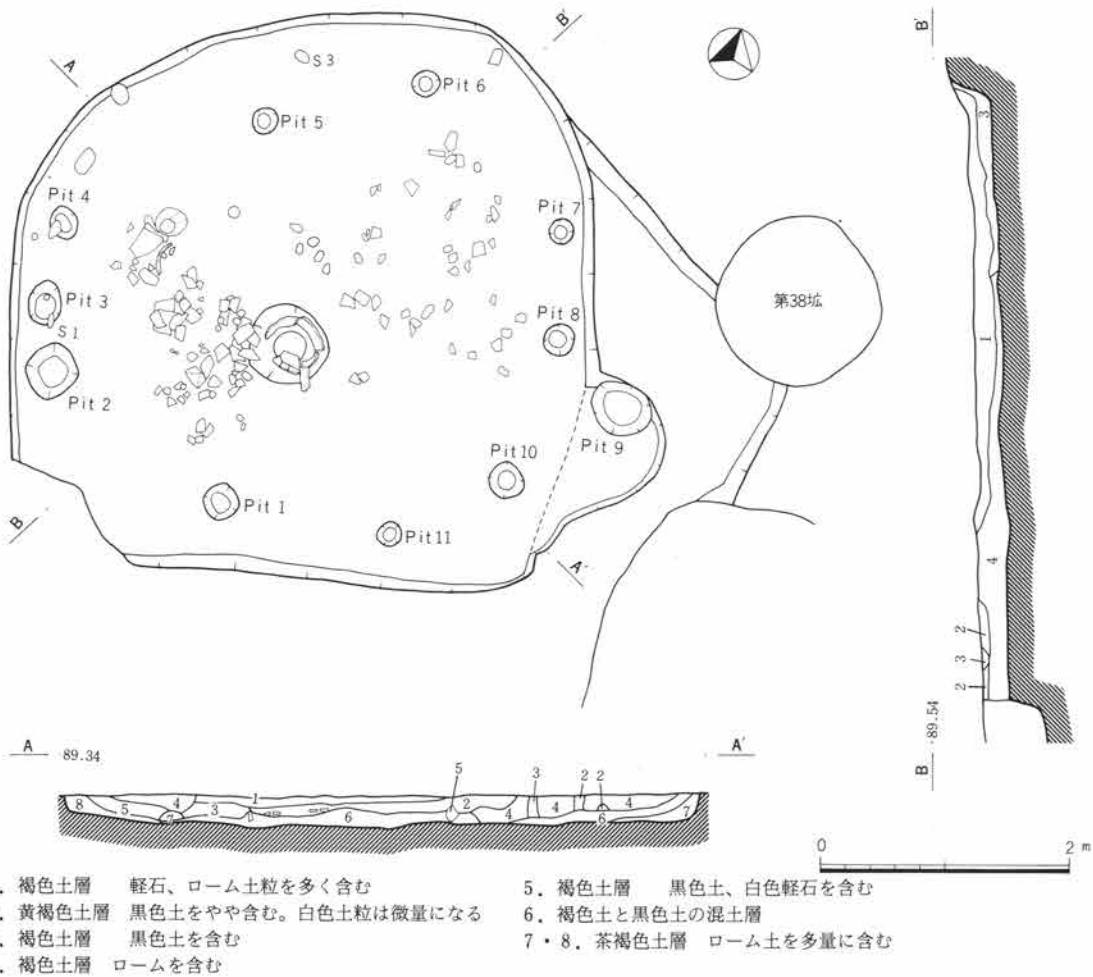
柱穴は壁際に9本が巡るがピット2～4の間隔が短いなどやや配置に乱れが生じている。規模はピット2が径45×40cmの他は径20～30cmである。

炉址は中央やや南よりに位置する。深鉢の口縁部(第46図2)を埋設した埋甕炉である。土器の内面は焼けただけれており、焼土も多く認められた。

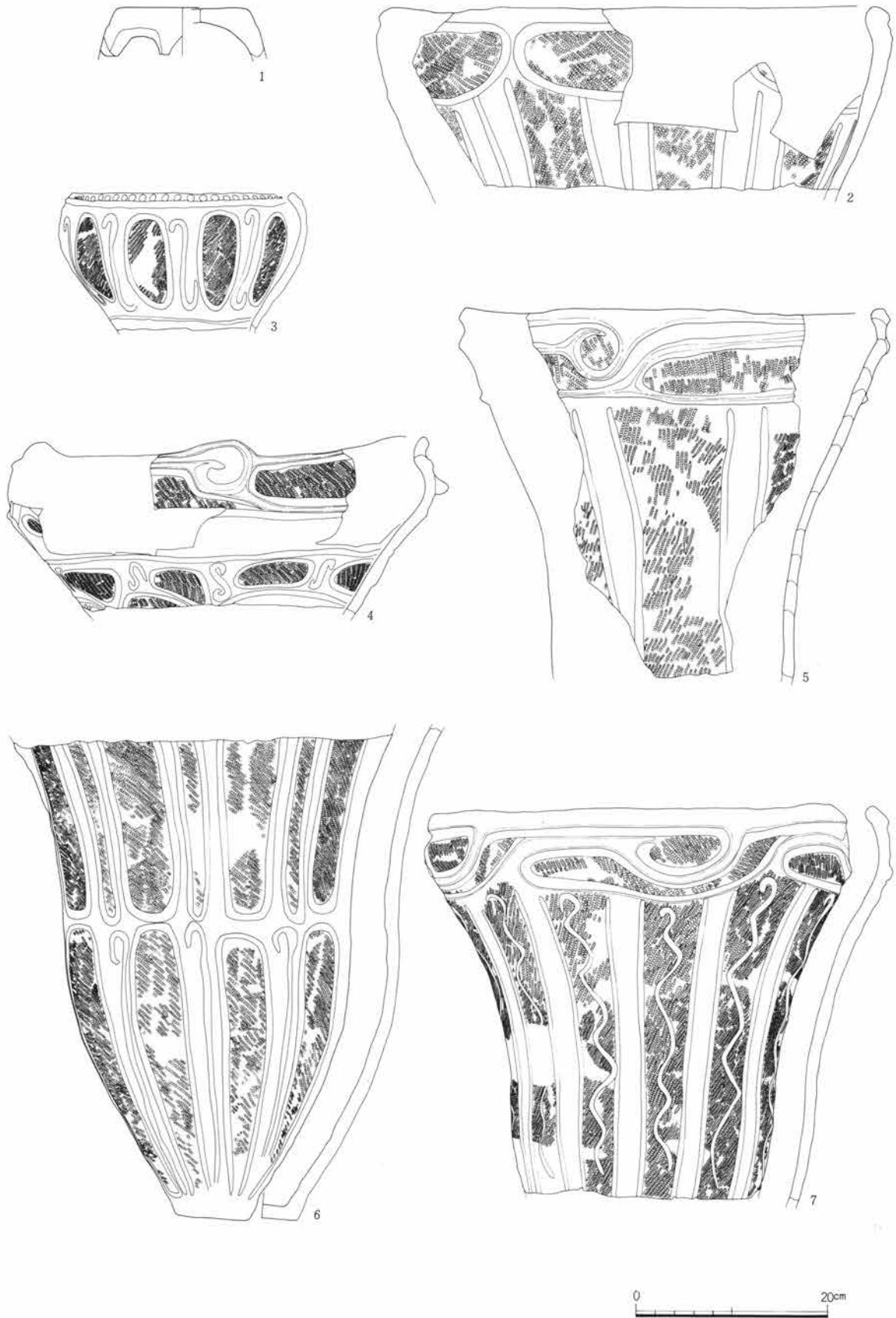
出土遺物のうち土器は完形に復元できたものも多いが、全体的には埋土の上層に多く見られた。石器は磨製石斧1、凹石1、多孔石1、装飾品大珠1である。

出土遺物

土器 (P L 36・43) 1、台形土器 天井部は凹状を呈している。裾部は半円形の透しが3単位配されていたと思われる。



第45図 第16号住居址平面図・断面図



第46図 第16号住居址 出土遺物(1)

第2章 検出された遺構と出土遺物

2、深鉢形土器 上半部である。口縁部の文様帯は狭く沈線区画の楕円文が7単位配されると思われる。胴部には3本の平行沈線を懸垂させ、この区画内の縄文を磨消している。縄文はRLで口縁部が横位、胴部が縦位に施文されている。

3、深鉢形土器 胴部上半部。口縁部は内彎ぎみに立ち上がる。口縁部と胴部の括れは沈線が巡り円形の刺突が施されている。胴部文様帯は沈線区画の楕円文とS字文が交互に10単位配されている。縄文はRLが横位に施文され、区画文の外側は磨消される。

4、深鉢形土器 キャリパー状を呈する。口縁部のみ残存している。口縁部の渦巻文が口唇までせり上り、小突起状となる。4単位の文様構成と思われるが、胴部文様帯との間に無文帯を挟む。胴部は沈線による渦巻や楕円状の区画文が施される。縄文は異束のRLが横位に施文され、区画文の外側は磨消されている。

5、深鉢形土器 口縁部には隆帯により渦巻文と楕円区画文が構成されるが、渦巻文は、崩れてきている。胴部は2本の沈線を懸垂し沈線の区画内の縄文を磨消している。縄文はRLで、口縁から胴部にかけて、横、斜位に施文されている。

6、深鉢形土器 胴部下半部。残高39.4cm。胴部文様帯は括れ部で上下に分離できる。上半部には大小の沈線区画の文様が交互に施文され、下半部にも上半の施文単位に合わせて∩字状の区画文と蕨手状の沈線文が交互に垂下している。縄文はLRが縦位に施文されているが、区画文の外側は磨消される。

7、深鉢形土器 上半部で口径41.2、残高40cmを測る。キャリパー形を呈するが胴部は上位でわずかに括れる。口縁部は内彎ぎみに立ち上がり口唇部は内側に肥厚する。口縁部文様帯は沈線により渦巻文と楕円区画文が4単位配される。胴部は2本の平行沈線と蛇行線が交互に懸垂しているが、平行沈線の区画内の縄文は磨消される。縄文はRLで、口縁部が横位、胴部が縦位に施文される。

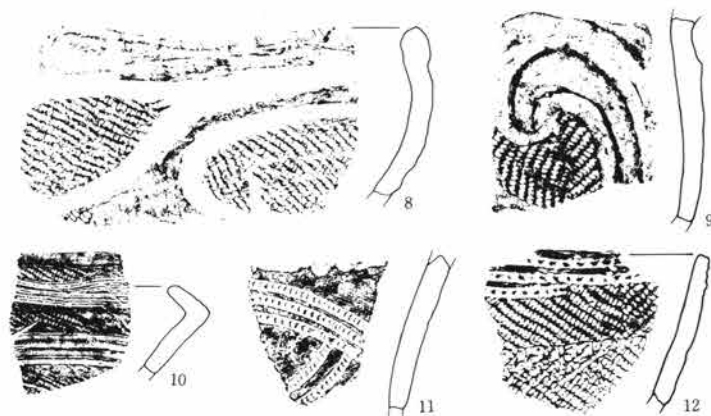
8、深鉢形土器 口縁部破片。沈線による渦巻文と楕円区画文である。RL縄文を横位に施文する。

9、深鉢形土器 胴部破片。微隆起帯の渦巻文を施文する。RL縄文を施文する。

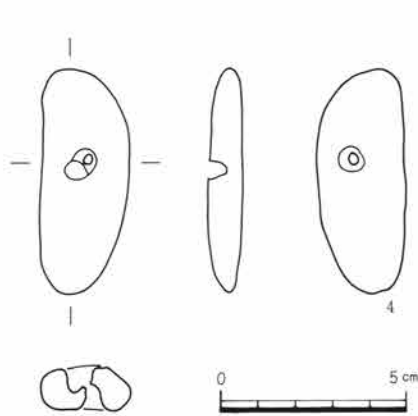
10、深鉢形土器 口縁部破片。口縁は短く内折する。RL縄文を施文した後、半截竹管による横位の集合沈線が施される。

11、深鉢形土器 胴部破片。半截竹管による連続爪形文が施文される。また、円形竹管の刺突列も認められる。10と11は諸磯b期の土器である。

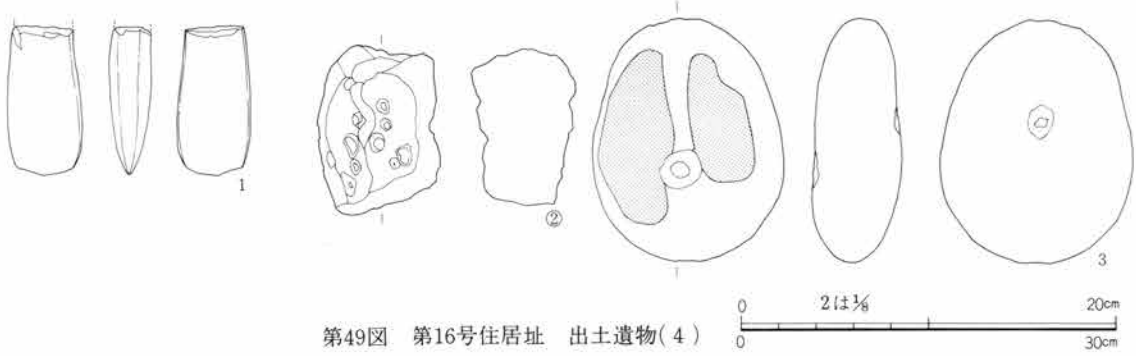
12、深鉢形土器 口縁部破片。口唇端部は平坦な面をなす。口唇下には半截竹管による連続爪形文が3条重なる。下位はRLとLR縄文を交互に施文し羽状を形成している。胎土に繊維を混入している。黒浜式土器である。



第47図 第16号住居址 出土遺物(2)



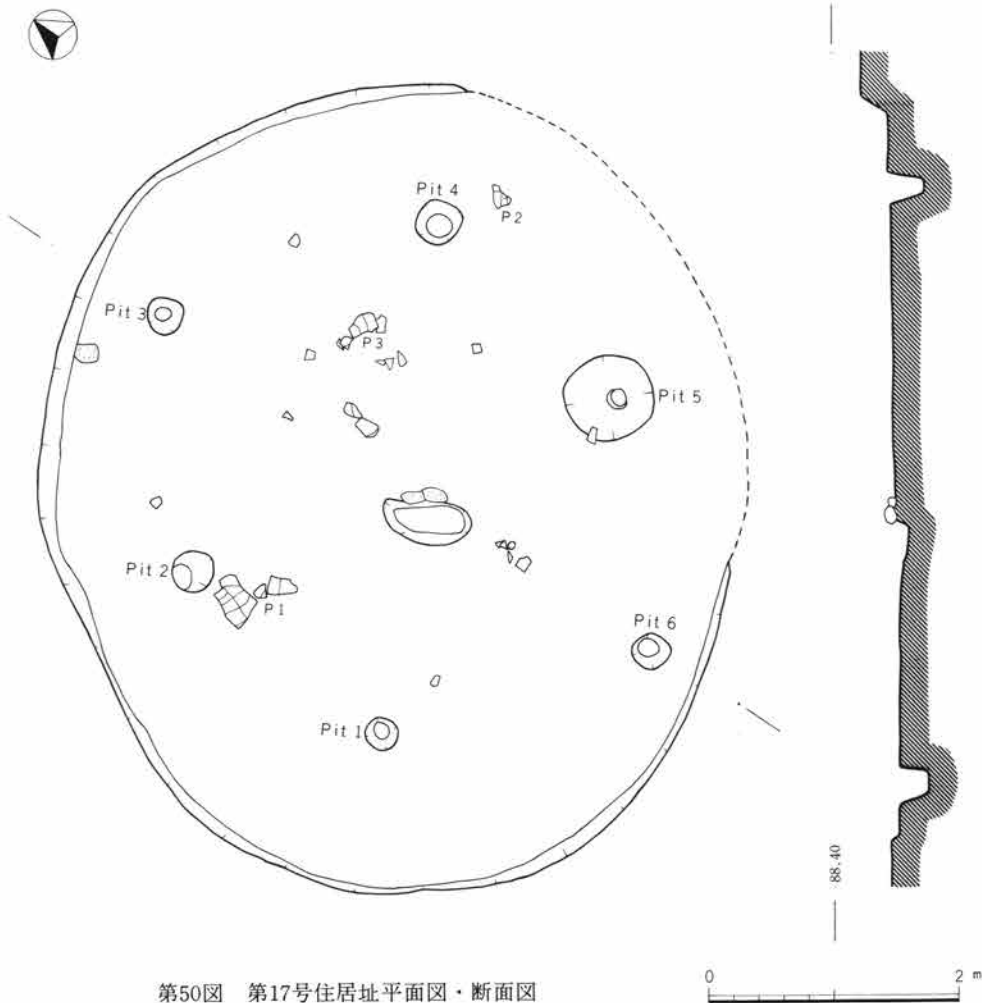
第48図 出土遺物(3)



第49図 第16号住居址 出土遺物(4)

石器 (P L48・49・52・53)

- 1、磨製石斧 基部を欠損するが残長78、刃部幅78mm、重量140gを測る。刃部の角度は22°である。石質は変質輝緑岩と思われる。側縁部の器面は粗れている。
- 2、多孔石 長軸180、短軸123、厚さ100mmの安山岩角礫。片面に凹みを残す。
- 3、凹石 長さ127、幅103、厚さ48mm、重量920gを測る。石質は安山岩、裏に各1つつつ敲打痕を残す。また、両面とも磨耗痕を顕著に残す。長軸の先端に敲打痕が認められる。
- 4、蛇文岩製の垂飾品 長さ60、最大幅23、厚さ9mmの半月形を呈する。重量は60g。穿孔は両側からおこなわれくいちがいに一部修正を加えている。



第50図 第17号住居址平面図・断面図

第17号住居址 (第50図、P L 5)

V-10グリッドに位置し、西側は第52号住居址と、東側は第5号古墳の石室と重複し壁面の立ち上がりを欠失する。

平面形は長円形を呈し、長軸6.4m、短軸5.55mを測る。長軸の方位はN46°30'Eである。壁面の残存状況は極めて悪く、北西部分が最長で37cmを測る。床面は東側に向かって下がり、レベル差は約10cmである。炉址を中心としてこれを囲むようにして柱穴までの間は堅く踏みしめられた面がひろがっている。

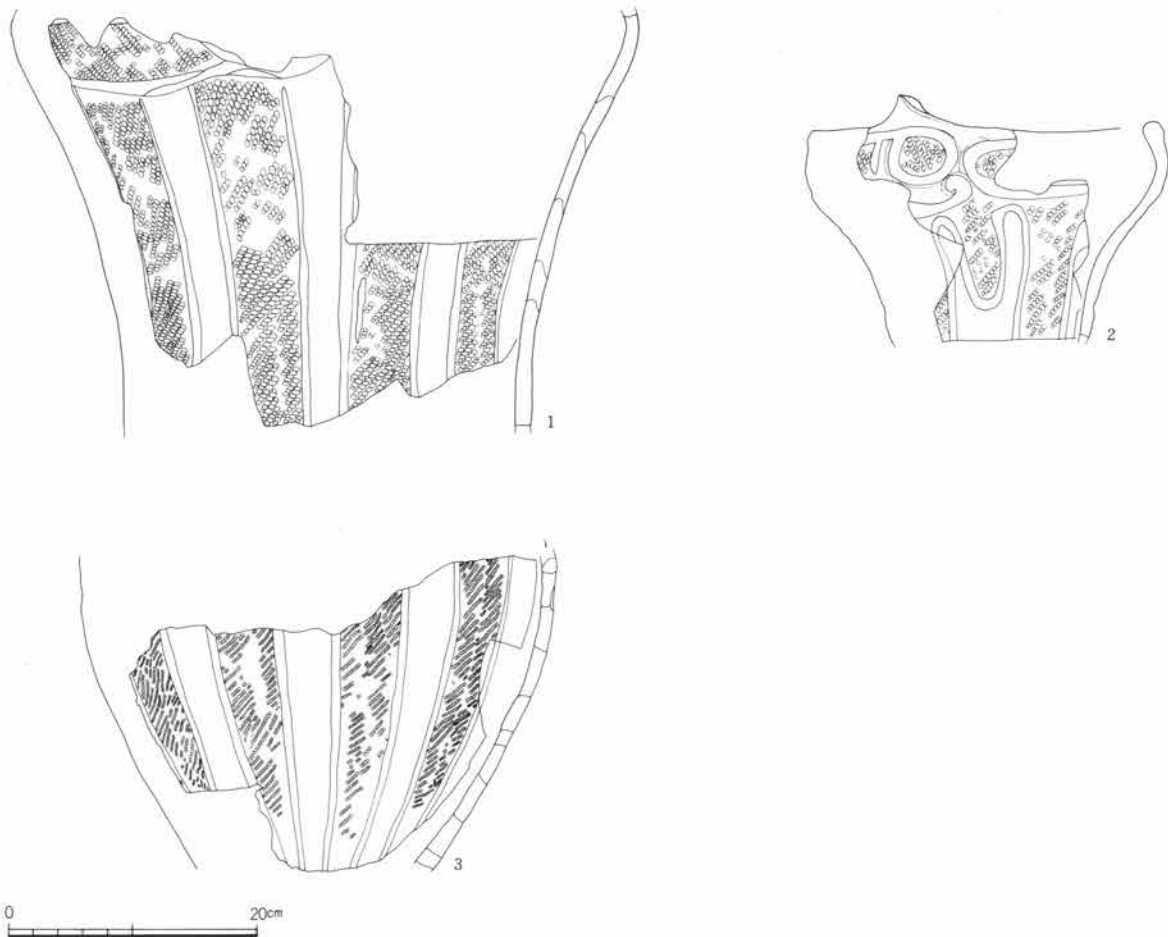
柱穴は6本確認された。ピット5は他に比して大きな掘り方を持ち、底面に円礫を据えていた。

炉址は中央やや南に位置する。長軸75、短軸35cm、深さ5～6cmを偏平で皿状の掘り込みである。焼土がやや少量散見できた。北側の上端に円礫が2石据えられており、石囲いのあった可能性もある。

埋土は地山に類似した黄褐色土であった。

出土遺物の量は少なかった。土器の1と3は床面出土の大型破片である。2は埋土中からの出土である。

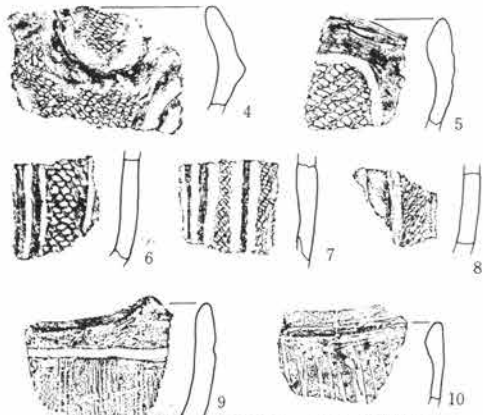
No	長軸	短軸	深
1	26	—	28
2	36	33	68
3	30	—	29
4	38	32	59
5	70	—	81
6	30	28	24



第51図 第17号住居址 出土遺物(1)

出土遺物

土器 (P L 37・43) 1、深鉢形土器 口縁部文様帯には沈線区画の楕円文が配されると思われる。胴部には平行する2本の沈線を垂下させこの区画内の縄文を磨消している。縄文はRLで、口縁部が横位、胴部が縦位に施文される。



第52図 第17号住居址 出土遺物(2)

縦位に施文した後、沈線が波状に施されている。

5、深鉢形土器 口縁部小破片で口唇は波状に盛り上がり、内側に肥厚する。縄文が縦位に施文され沈線区画文の外側は磨消されている。

6～8、深鉢形土器 胴部小破片。縄文は6がLRL、7がRL、8がRLRで、いずれも縦位に施文され、平行沈線文の区画内は磨消されている。

9、10、深鉢形土器 口縁部破片。9は波状口縁を呈する。口縁部は横位の沈線により区画され、上位には無文帯が巡る。下位には櫛歯状工具による縦位の条線が施されている。10は端部が内側にやや肥厚するもので厚さ0.6mmと薄い。口縁から縦位に条線が施される。

2、深鉢形土器の破片 波状口縁を呈する。口縁部には沈線による渦巻文と楕円区画文が、胴部には沈線区画のH字状が配されている。H字状文の区画内の縄文は磨消される。縄文はRLで、口縁部が横位、胴部が縦位の施文である。

3、深鉢形土器 胴下半部、2本の平行する沈線を懸垂させ、この区画内の縄文を磨消している。縄文はRLで、縦位に施文される。

4、深鉢形土器 口縁部、端部は一部分が残るのみである。隆線により渦巻文を構成すると思われる。RL縄文を

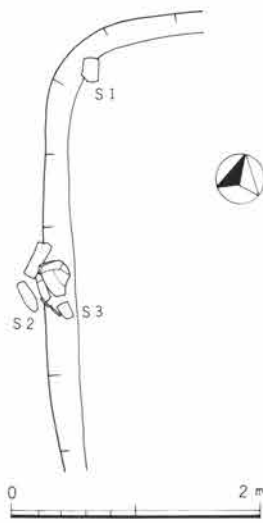
第18号住居址

(第53図)

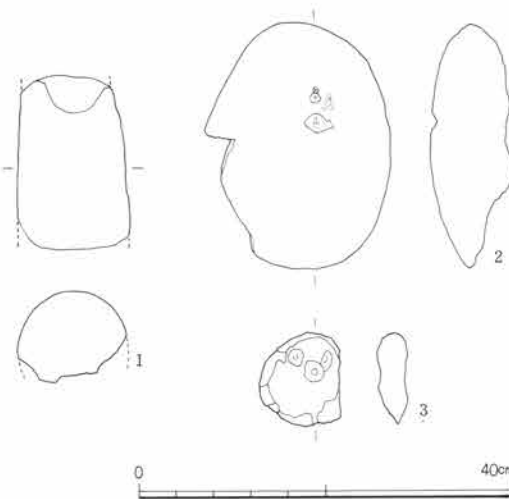
U-15グリッドに位置する。平面形は不明である。

炉址を確認することができたが第53号住との重複により半分残存していたのみである。自然礫、多孔石を利用した石囲い炉と考えられる。

炉址の北1.5mの所からは石棒の破片(第54図1)が出土している。



第53図 第18号住居址



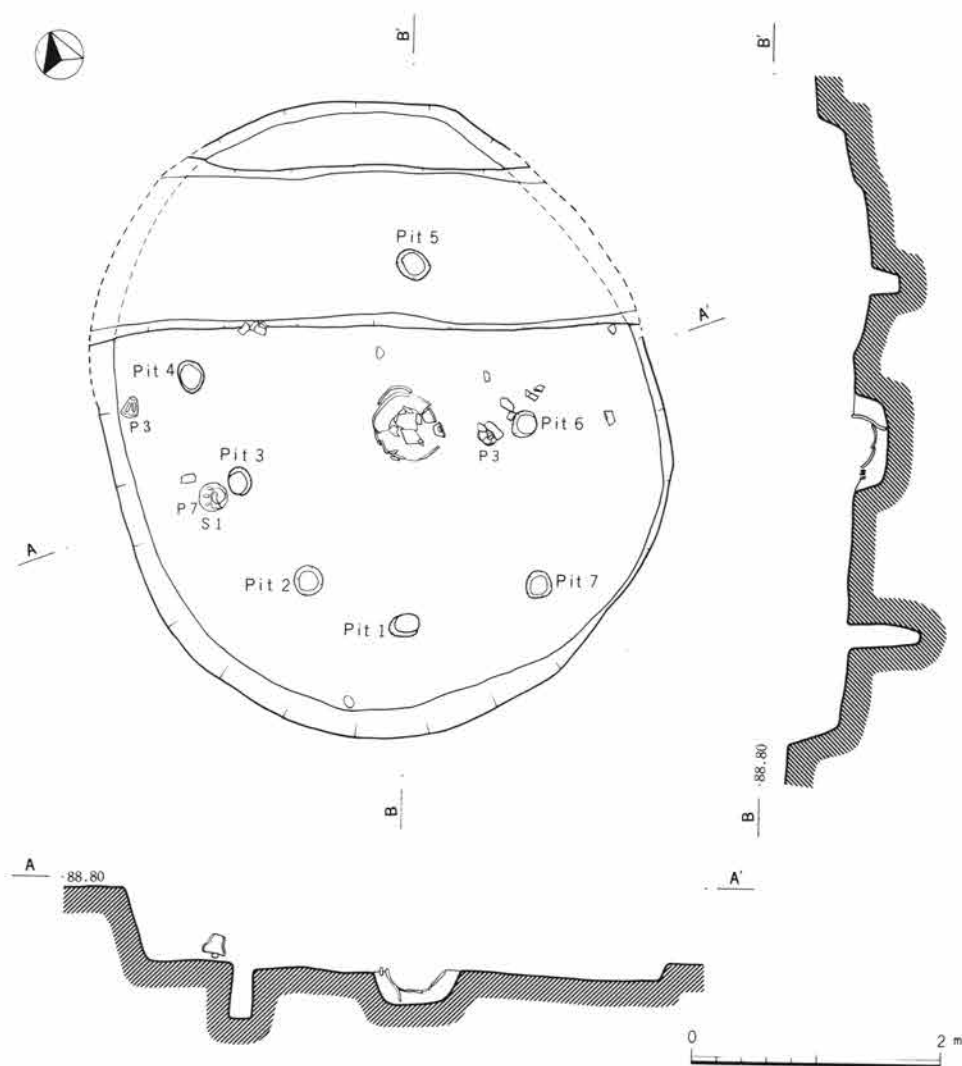
第54図 第18号住居址 出土遺物

出土遺物

石器 (PL52・53) 1、石棒の破片 残長183、最大径140mmを測る。石質は安山岩。炉址からの出土で、割れ口を含めた全面に火熱を受けた痕跡がある。

2、多孔石 長軸259、短軸197、厚さ76mm、重量4.800gを測る。断面形の扁平な安山岩の円礫である。器面にススが付着する。

3、多孔石と考えたい。長軸98、短軸86、厚さ27mm、重量330gと小型であるが、凹みの形状は凹石のそれとは異っている。石質は安山岩。



第55図 第19号住居址平面図・断面図

第19号住居址 (第55図、P L 5)

V-25グリッドに位置し、第43号住居址、第5号溝と重複する。

平面形は南北に長軸を持つ長円形を呈し、長軸5m、短軸4.4mを測る。長軸の方位はN1°Wである。壁面はソフトローム層を掘り込んでいるが南北部分を除いて残存状態が極めて悪く、残高は西側で55cm、他は10~20cm程である。床面は炉址を中心として柱穴に至る間に堅い面が残っていた。

柱穴は7本検出できた。いずれも良好な掘り方をしている。

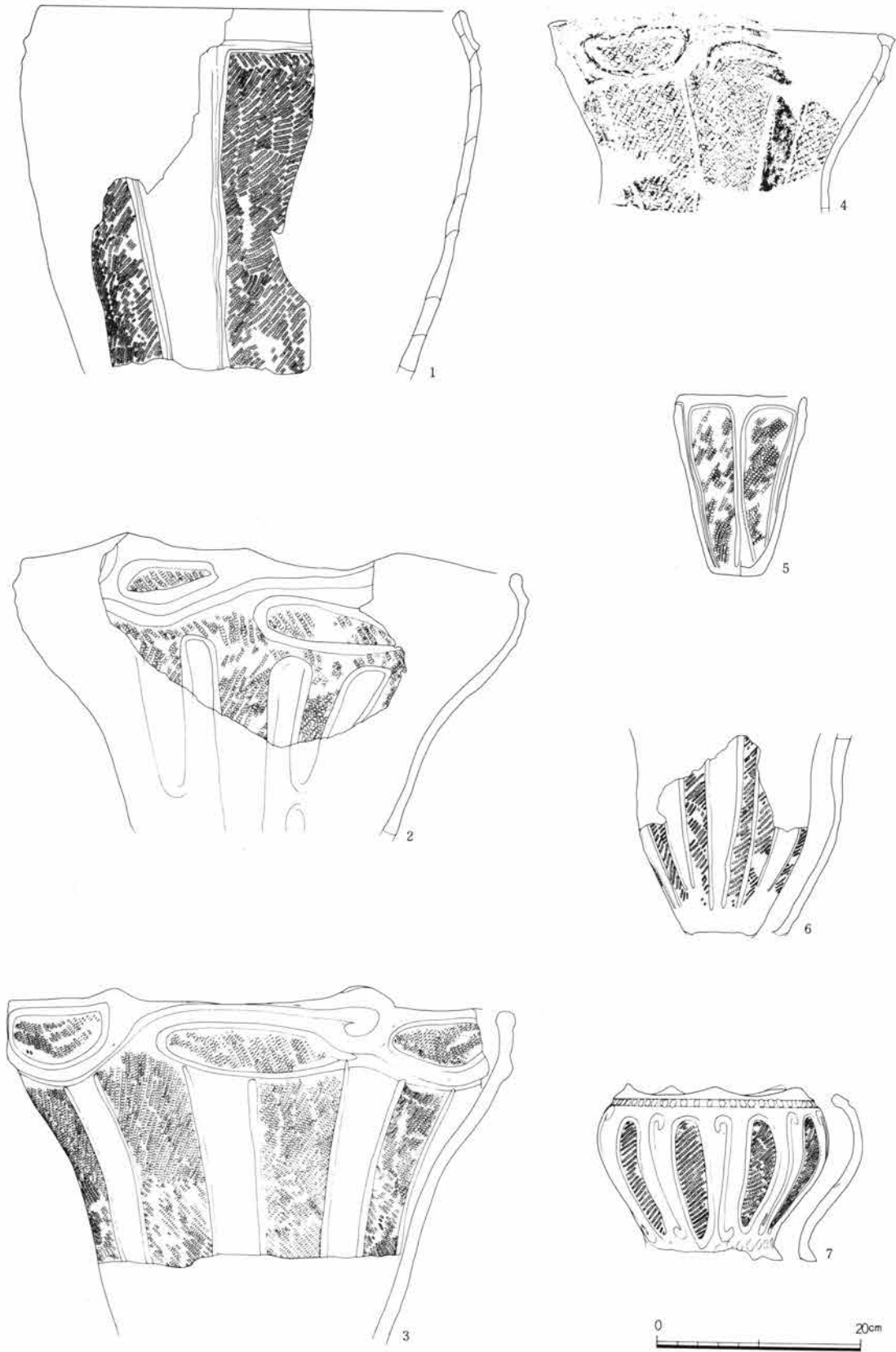
炉址はほぼ中央に位置する。深鉢の上半部を利用した埋甕炉で、埋設した1個体の深鉢(第53図3)の外側に破片の土器(1・2・4)を押えの様な形で補強に使用し構築していた。内部からは多くの焼土が出土している。掘り方の規模は径、80cm。

埋土は地山とほぼ同色の黄褐色土である。

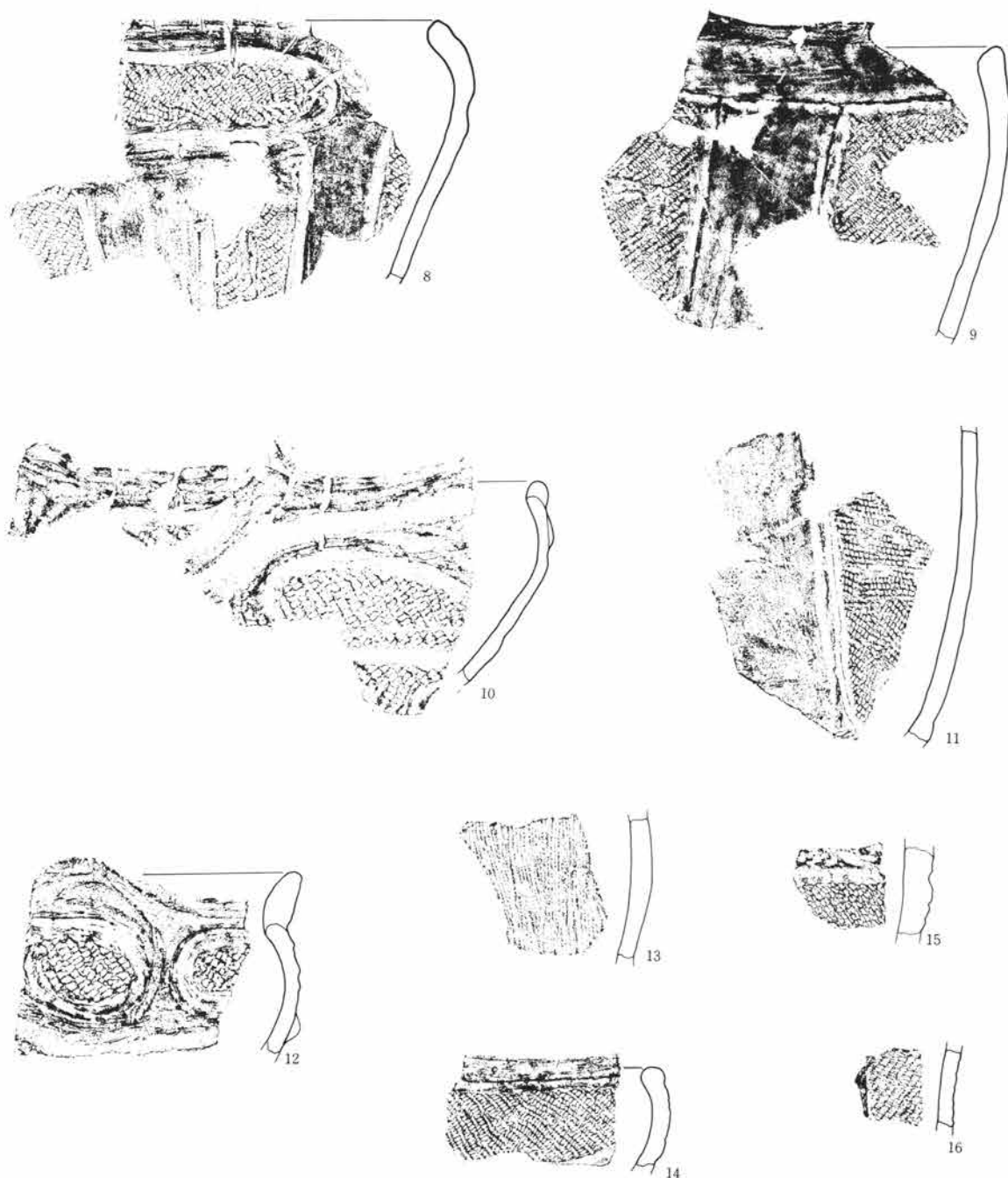
土器は床面直上からの出土は少なかった。第56図7は床面から9cm、4は29cm離れた埋土中からである。石器は打製石斧1点が埋土中から出土している。

No	長軸	短軸	深
1	24	20	60
2	34	33	46
3	22	20	43
4	26	19	35
5	27	24	27
6	28	—	53
7	34	22	69

第1節 縄文時代の住居址と出土遺物



第56図 第19号住居址 出土遺物(1)



第57図 第19号住居址 出土遺物(2)

出土遺物

土器 (PL37・43) 1、深鉢形土器 上半部破片。器形は内彎ぎみに立ち上がり中位に括れをもたないものである。口縁部に無文帯をもち、胴部には横走る微隆起帯により区画される。この下位には同じく微隆起帯による懸垂文が施され、その区画内の縄文は磨消される。縄文は0段3条RLを横位の微隆起帯直下のみ最上位の一段のみ横位、他は縦位に施している。

2、深鉢形土器 波状口縁を呈する。口縁部文様は沈線による楕円区画文がみられるが、渦巻文は楕円文

に変化している。胴部は同一個体の大型破片との照合から、沈線区画のH字文が配されていると思われる。この区画内の縄文は磨消されている。縄文はRLで、口縁部近辺が横位、胴部が縦位に施文される。

3、深鉢形土器 上半部の1/2ほど残存している。口縁部は降帯と沈線を組み合わせた渦巻文と楕円区画文が配されている。渦巻文や楕円区画文の一部コブ状に盛り上り、口縁が波状を呈する。胴部は2本の平行沈線が垂下し、この区画内の縄文は磨消される。縄文は上位がLRを横位に下位はLR、RLとLRの2種類を使用しているが、口縁部はRLを横位に、胴部は上半がRL、下半がLRをそれぞれ縦位に、施文している。

4、深鉢形土器 上半部破片。残存約1/2。口縁部の端部は内側に肥厚し、三角形の断面形をなす。口縁部文様帯は、隆線区画の楕円文が認められる。胴部はRL縄文を縦位に施文した後に、2本の沈線を垂下させ、その区画内の縄文を磨消している。また、縄文部の中央にも沈線が垂下している。

5、深鉢形土器 口径12.2、器高17.2cm。沈線により「∩」状の区画文を7単位に施文し、その区画外の縄文を磨消している。また一箇所に、蕨手状の懸垂文が施される。縄文はRLで、縦位に施文される。外面の上半部にはスズ状の付着物がある。

6、深鉢形土器 胴部下半部。RL縄文を縦位に施文した後、2本の沈線を懸垂させ磨消し縄文帯を構成している。

7、深鉢形土器 上半部。口径19.4、残高16.5cmである。器形は口縁部が著しく内彎して立ち上り、胴部は強く括れる。5単位の波状口縁を呈する。口縁部文様帯は指頭状の円形刺突文を付加した太い沈線が全周する。胴部の括れ部にも円形刺突文がめぐっている。この間の胴部上半には沈線区画文とS字状文が交互に10単位配され、この区画内の縄文は磨消される。縄文はRLを縦位に施文している。

8、深鉢形土器 口縁部破片。口縁部文様帯は渦巻文と楕円区画文からなる。口縁は突起状に高まり、波状を呈する。縄文はRLで、横位に施文する。胴部は沈線を垂下させ、その区画内の縄文を磨消している。

9、深鉢形土器 口縁部に無文帯をめぐらし、横位の微隆起帯で胴部との区画をする。胴部文様帯は微隆起帯を2本垂下し、その区画内の縄文を磨消している。

10、深鉢形土器 口縁部文様帯は渦巻文と楕円区画文からなる。口縁は突起状に高まり、波状を呈する。縄文はRLである。

11、深鉢形土器 隆線とそれに沿った沈線による区画文であり、その内側にはLR縄文が縦位に充填されている。

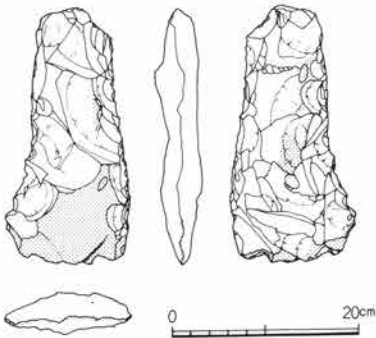
12、深鉢形土器 渦巻文と楕円区画文からなる。口縁は突起状に高まり、波状を呈する。縄文はRLで横位施文である。

13、深鉢形土器 胴部破片で櫛歯状工具による縦位の条線が施されている。

14、深鉢形土器 口縁部破片。縄文は異束のRLである。

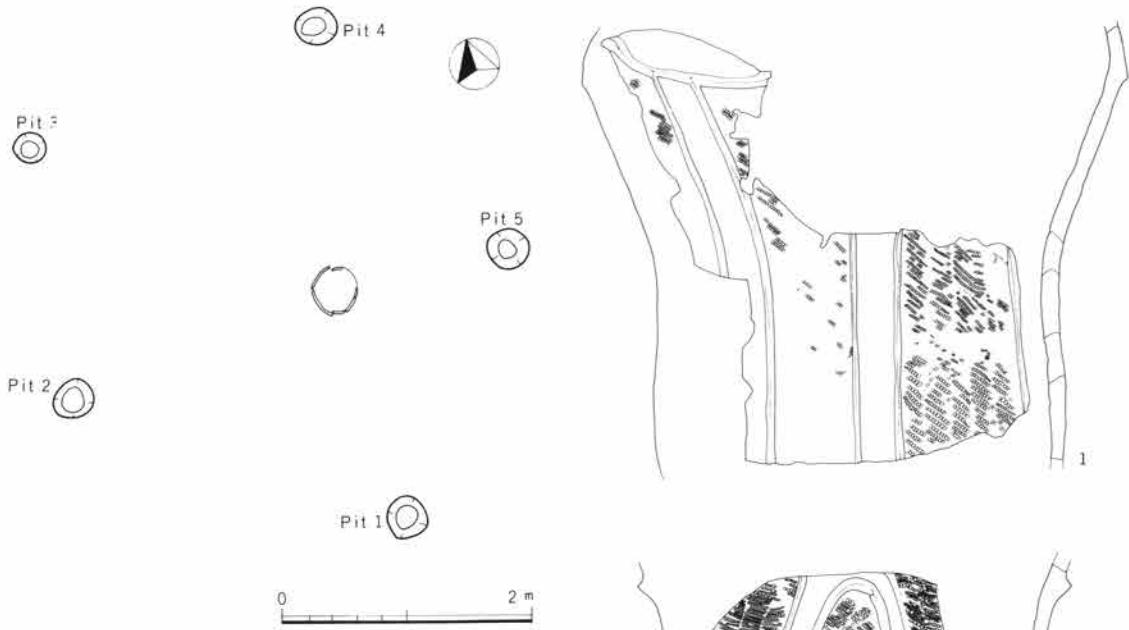
15、深鉢形土器 口縁部破片でLRLが横位に施されている。

16、深鉢形土器 胴部破片で縄文は0段4条のRLが縦位に施文されている。反撚の可能性もある。



第58図 第19号住居址 出土遺物(3)

石器(P L48) 長さ135、刃部幅66、基部幅40mm、重量200gの打製石斧である。石質は黒色頁岩。刃部表面には自然面を残している。また刃部の両面には線状の磨耗痕が顕著に残っている。



第59図 第20号住居址平面図



第60図 第20号住居址 出土遺物

第20号住居址（第59図、P L 5）

台地斜面の東下、平坦面上、f-31グリッドを中心に位置する。第37号、第38号住居址と近接する。北側にある第21号住居址との距離は約30mである。

平面形は不明。埋土が地山（砂礫を多量に含む黄灰色土）と同色、同質のため壁面が確認できなかった。柱穴は5本検出できたがあまり良好でなかった。規模は、ピット1、径32、深さ21cm、ピット2、径33、深さ17cm、ピット3、径24、深さ22cm、ピット4、径32、深さ27cm、ピット5、径32、深さ14cm。

中央やや東よりに複数の深鉢形土器、胴部破片を利用した埋甕があった。

出土遺物

土器（P L 37・43） 1、深鉢形土器 口縁部文様帯は残存部分が少ないが孤状の微隆起帯による区画文が施されている。この微隆起帯にはコブ状の突起がある。胴部は2本の微隆起帯を垂下させ、その区画内の縄文を磨消している。縄文は2種類を使用し、括れ部より上位がLを、その下位がLRを施文している。

2、深鉢形土器 微隆起帯によって波状文と∩字状文が構成され、各文様の区画内には異束のL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$ （異束）縄文が充填されている。縄文施文後のなぞりがみられる。∩字状文の区画頂部の隆起は、小突起状に盛り上っている。

3、深鉢形土器 波状口縁を呈し、口縁部には微隆起帯により区画される無文帯がめぐる。胴部は、微隆起帯により、V字状、∩字状の区画文が施され、区画内にLR縄文が充填されている。

第21号住居址 (第61図、P L 5)

g-40グリッドの微高地上に位置し、南側は第54号住居址と重複し切られている。また、床面の東側部分は、第13号土坑により切られている。構築状態に不明確な点も多く住居址でない可能性もある。

砂礫を多く含む黄灰色の砂壤土を掘り込んで構築されている。埋土も同様にプランの検出が困難であった。

規模は、東西5.64m、南北4.15mの不整形である。壁面の立ち上がりも不明確な部分が多かったが残存壁高は北側で35cm、西側で28cmを測る。床面は東に向かって下がり、堅い面はもたない。柱穴は確認されていない。

遺物は埋土の全層から大型の自然礫とともに多く出土している。また、床面からも大型破片が出土している。第62図1は1m四方の間に37の破片となり出土している。2・4～6は床直、3・7は埋土中の出土である。石器は石皿2、凹石1、多孔石1、石鏃2、石錐1で石皿・多孔石は床面からの出土である。

出土遺物

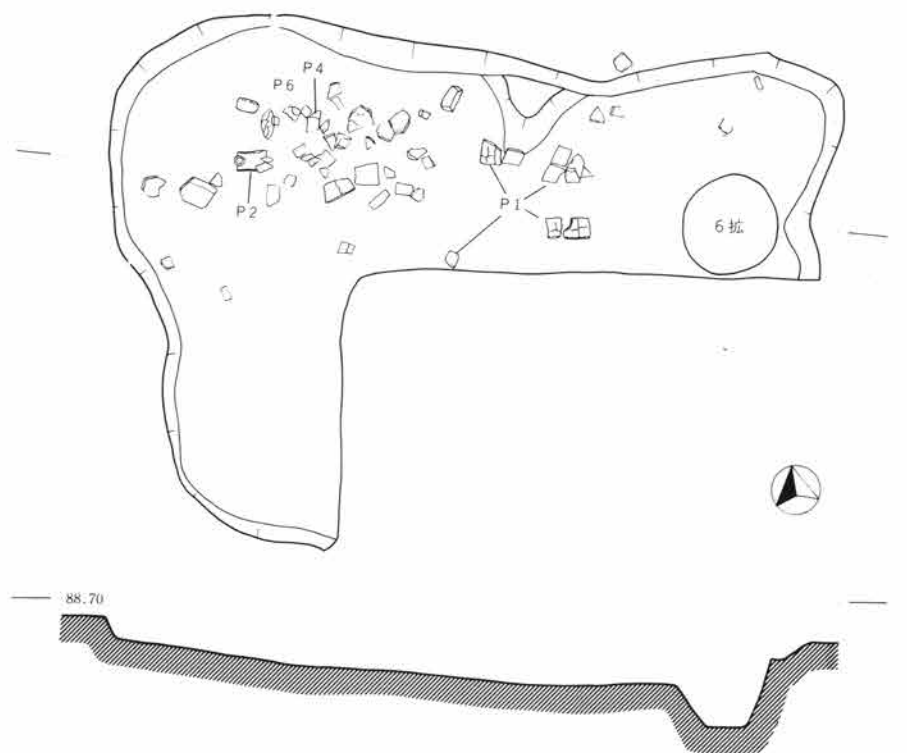
土器 (P L 37・44・47) 1、深鉢形土器 上半部である。径38.2、残存率である。口唇下に無文帯をもち、その下に巡る微隆起帯により、胴部文様帯と分けられる。微隆起帯上には4単位に渦巻文が貼付される。胴部はU字状や∩字状の区画文が、上・下位に分かれて配されているが、その区画内にはLR縄文が充填されている。

2、深鉢形土器 上半部、口縁に無文帯をもち、その下位に微隆起帯が横位に巡る。胴部にはLR縄文も全面施文しているが、上半は縦位であるが、下半は斜位施文となる。内外面にスス状の物質が付着する。

3、深鉢形土器 胴部はやや膨らむ。2と同様、口縁部に無文帯と微隆起帯が巡り、胴部にはLR縄文が縦位に施文されている。

4、深鉢形土器 下半部でLR縄文を縦位に施文している。

5、深鉢形土器 胴部で微隆起帯によってU字状や∩字状の文様が配される。縄文はLRを縦位に施文す



第61図 第21号住居址平面図・断面図



第2章 検出された遺構と出土遺物

るが、充填縄文の可能性もある。外面には炭化物が付着する。内面の剝離も著しい。

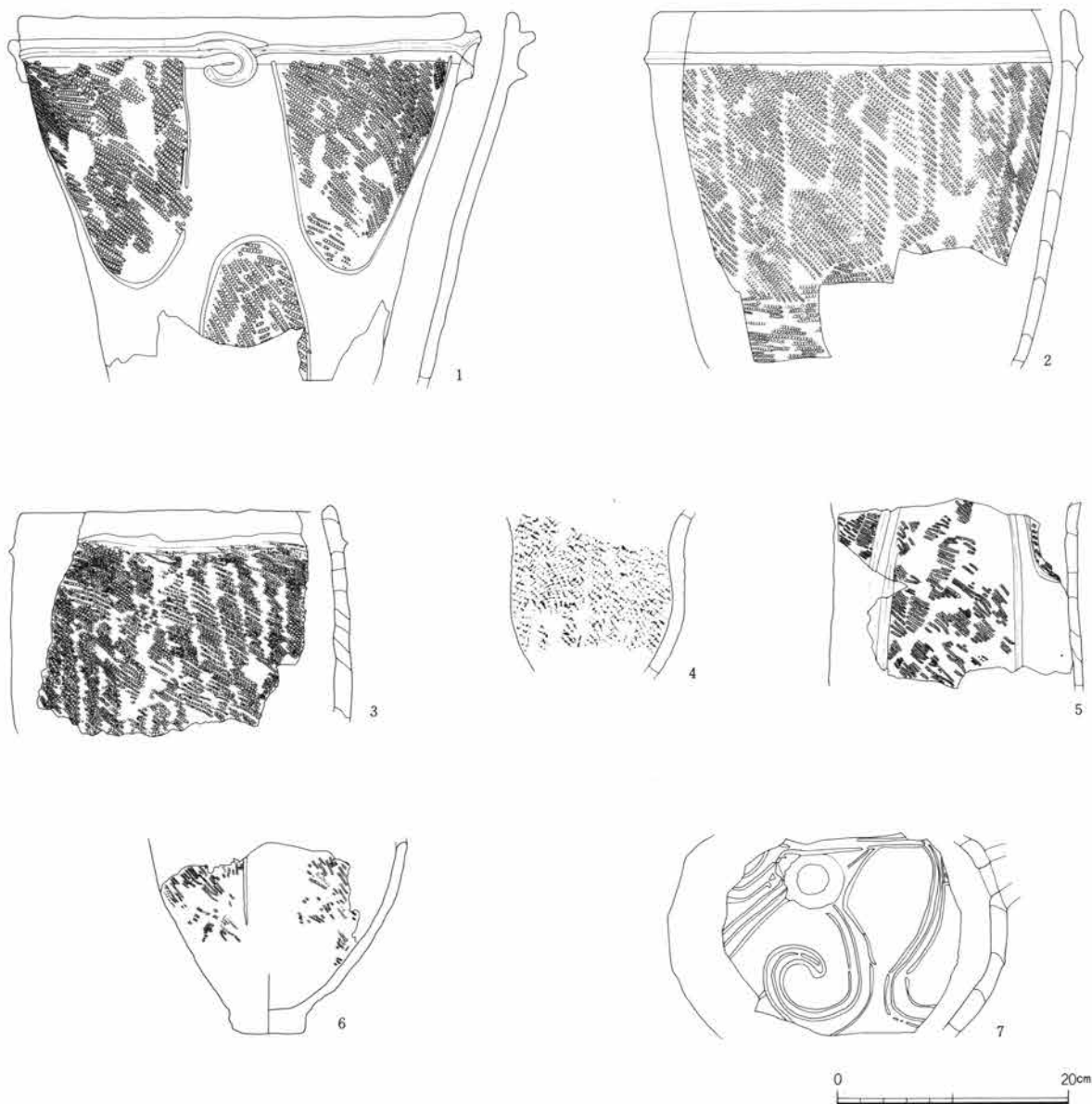
6、深鉢形土器 胴部下半部、底部63cm。胴部は微隆起帯が垂下している。縄文はLRを縦位に施文するが、充填縄文の可能性もある。

7、注口土器 胴部破片。注口部分は接合面から剝離し欠損している。整形のいきとどいた器面には3本1単位の沈線による渦巻文が描かれている。

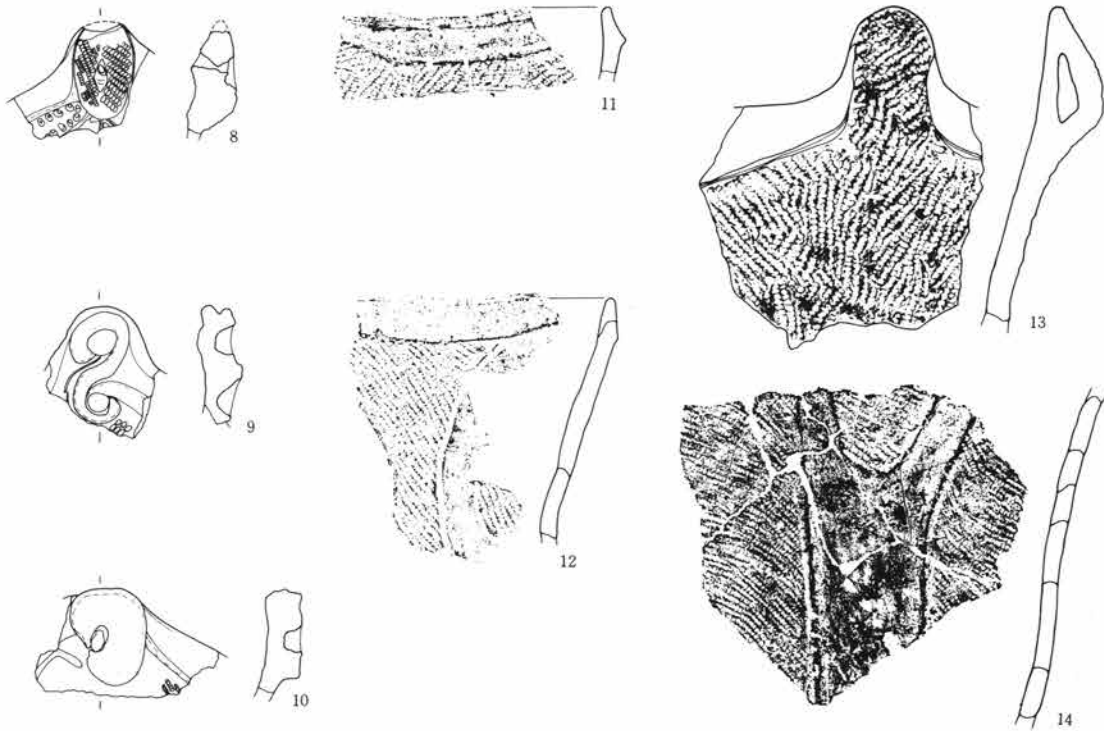
8、深鉢形土器 口縁部での波状の頂部は楕円形の貼付文があり、LR縄文が縦位に施され、中央は穿孔されている。これから斜め下に延びる2条の微隆起帯の間には、先端の尖った棒状工具による連続した刺突文が施されている。

9、深鉢形土器 突起の外面にS字状の貼付文が施されたもので、その内側は指頭状の押捺が加えられている。器面内側にも渦巻状の文様が構成されている。

10、深鉢形土器 波状口縁の頂部にC字状の貼付文が施されている。また、口唇下には微隆起帯が施され



第62図 第21号住居址 出土遺物(1)



第63図 第21号住居址 出土遺物(2)

ている。

11、12、深鉢形土器 破片で同一個体と考えられる。口縁部は隆線で区画された無文帯が巡る。胴部はLRの縄文施文後に沈線区画文の磨消文様帯が配される。

13、深鉢形土器 破片で波状口縁の波頂部には、橋状の把手を有する。口縁部には微隆起帯により区画された無文帯が巡る。把手の外面から胴部にかけては、RL縄文が不規則に施文されている。

14、深鉢形土器 胴部破片。微隆起帯により区画文が施され、その区画内にLR縄文が充填されている。縄文施文後に微隆起帯のなぞりが部分的に行なわれている。

石器 (PL48・52・53・54)

1、凹石 長さ114、幅65、厚さ55mm、重量530gを測る。石質は安山岩。両面に2対の敲打痕が認められる。また、磨石としても利用されており磨耗痕が顕著に残る。ススが付着している。

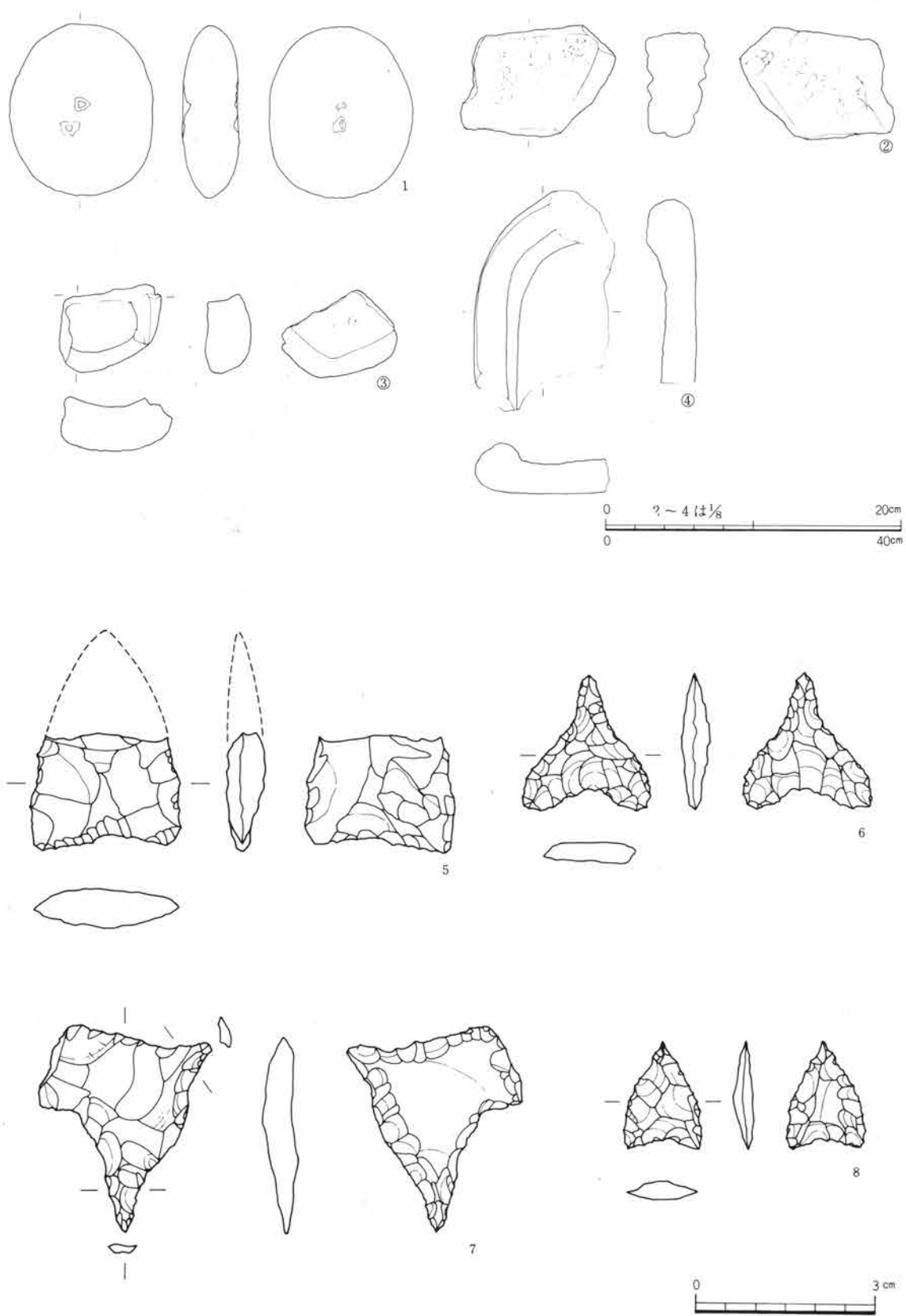
2、多孔石 長軸195、短軸144、厚さ276mm、重量4,800gを測る。石質は安山岩。両面に凹みがある。

3、石皿の破片 石質は安山岩。磨面は磨耗痕を顕著に残す。底面には多孔石と同様の凹みがある。ススが付着している。

4、石皿の欠損品である。残長245mmを測る。石質は安山岩。磨面には敲打痕を残し、製作途中のものと考えられる。(6片が接合された。)

5・6・8、石鏃 5は欠損である。無茎で基部にやや扶入がある。最大幅25、厚さ6mmを測る。重量3.5g。石質は安山岩。6も凹基無茎鏃である。長さ16、最大13、厚さ3mm、重量0.64gを測る。石質は安山岩。8も基無茎鏃である。長さ19、最大幅22、厚さ5mm、重量1.43gを有する。石質は安山岩。

7、石錐 長軸3.1cm、2カ所が機能するよう調整が施されている。石質はチャート。



第64図 第21号住居址 出土遺物(3)

第22号住居址（第65図、P L 6）

f-69グリッドに位置し、第9号方形周溝墓と重複する。東側を周溝によって切られ欠失するが東西に長軸をもつ長円形と考えられる。掘り込みが浅いこと、埋土が確認面の黄褐色土に類似していたことなどから壁面の検出が、不自然になっている。規模は、長軸の残存が8.48m、短軸が7.88mであり、長軸の方向はN74°Wである。

床面は特に堅い部分は認められなかった。柱穴は6本確認され、壁際を囲っており良好な位置にあったが、いずれの掘り方も浅かった。

炉址は中央やや南東よりに位置すると思われる。深鉢（第66図1）の上半部を利用した埋甕炉である。土器の内面は火熱により軟弱になっていた。埋土中には焼土、炭化物が多量に入っており、炭化物は炉址の周辺の床面にも認められた。

出土遺物は埋土中から多く出土している。床面直上の土器は炉址の周辺に多く見られる。第66図3は床面をやや掘り込んで据えられていた。4は、4個の大破片になり検出された。石器は多孔石が1個出土する。

出土遺物

土器（P L 38・44） 1、深鉢形土器 上半部。器面の剝離が著しい。口径58.2、残高31.5cmである。口縁にはコブ状の突起が6単位に配され、波状を呈する。口縁部は隆帯と沈線による楕円区画文が4単位配されている。胴部は、3本1単位の平行沈線が垂下しているが、その区画内の縄文はL R Lが、口縁から胴部上半まで縦位に施文され、胴部下半は、横位施文となる。

2、深鉢形土器 上半部。残存は約 $\frac{3}{4}$ である。口径28.6、残高20.1cm。器形は外傾しながら直線的に立ち上がり口縁部に達する。口縁部には無文帯と1条の沈線が巡る。胴部にはこれから3本1単位の沈線を7単位に懸垂させ、その区画内の縄文を磨消す。

3、深鉢形土器 胴下部。2本の櫛歯状工具による条線が縦位に全面施されている。欠損したものを接合部分で再調整し、浅鉢として再利用した可能性もある。

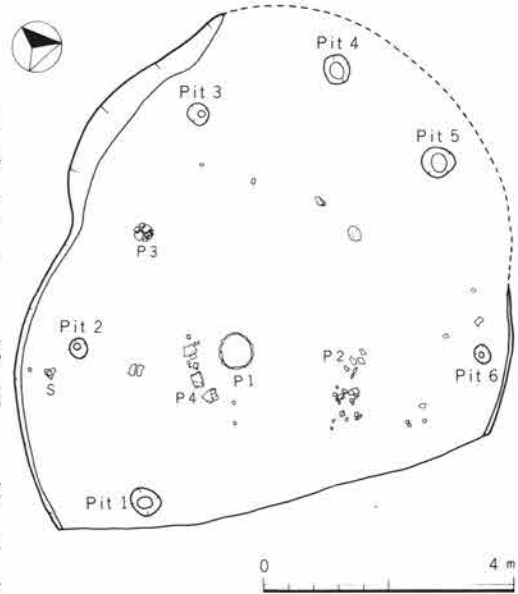
4、深鉢形土器 上半部。口径31.1、残高21.4cm。口縁部は内彎ぎみに立ち上がる。口唇下には沈線が巡る。口縁部は隆帯とそれに沿った沈線により孤状の区画文と渦巻文が4単位に構成される。胴部は2本の平行線と蛇行線が交互に垂下し、平行縄文の区画内の縄文は磨消されると共に、蕨手状の懸垂文が付加される。

5、深鉢形土器 胴部破片。沈線によりU字状や冂字状の区画文を施し、区画外の縄文を磨消している。また、胴部下位には蕨手状の沈線が施されている。縄文はR Lで、縦位に施文されている。

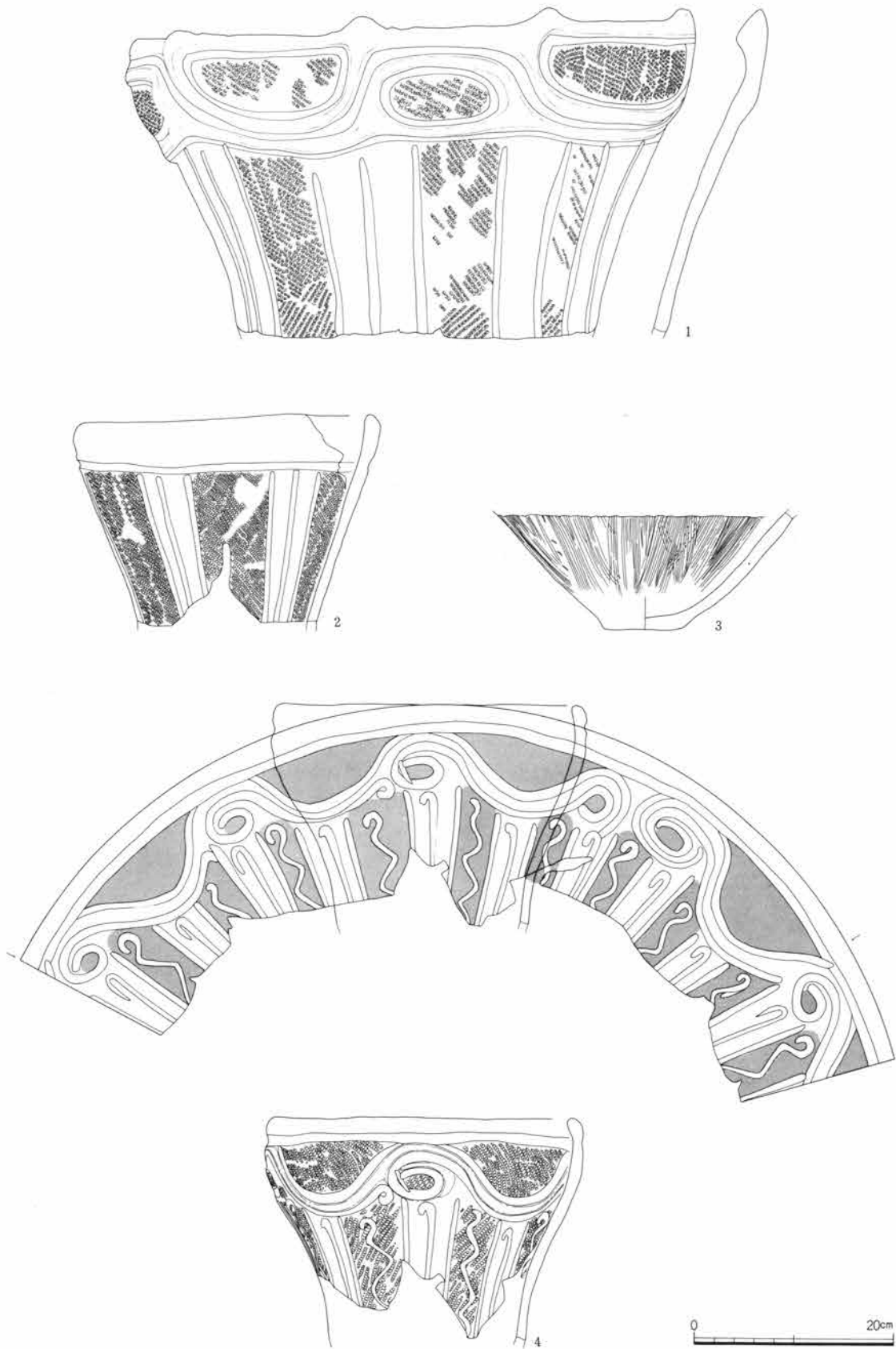
6、深鉢形土器 胴部破片。2本の微隆起帯により、渦巻文が構成されていたと思われる。異束のR L縄文を横位に施文する。

7・8、深鉢形土器 垂下する平行沈線が垂下し区画内は磨消縄文となる。縄文はともに0段4条R Lの横位縄文であり、反撚りの可能性もある。

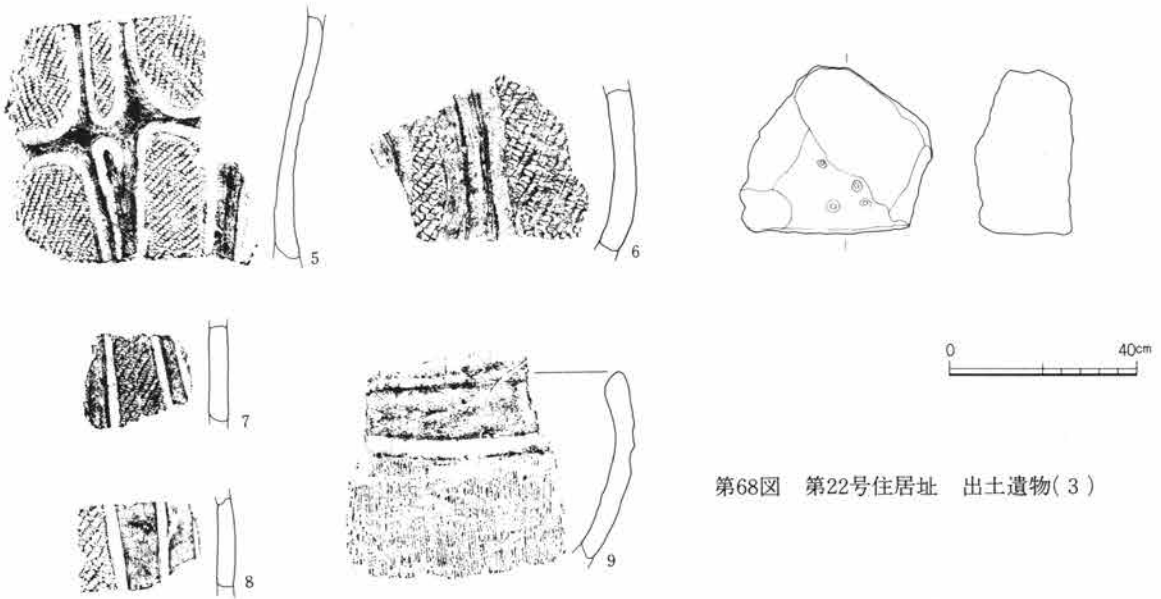
9、深鉢形土器 口縁部破片。口縁部は無文で横位の沈線により胴部と区画される。胴部には13~14本の櫛歯状工具による縦位の条線が施されている。



第65図 第22号住居址平面図



第66図 第22号住居址 出土遺物(1)

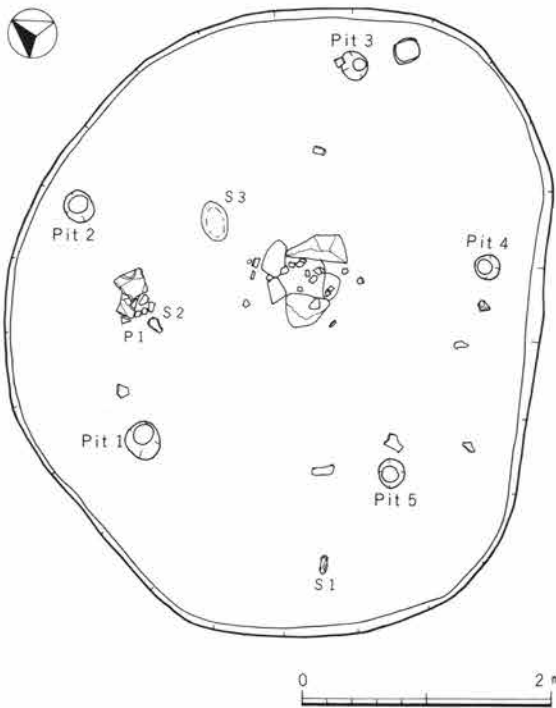


第68図 第22号住居址 出土遺物(3)

第67図 第22号住居址 出土遺物(2)

石器 (PL52) 多孔石 長軸187、短軸175、厚さ102mm、重量は4,500gを測る。石質は安山岩。

第23号住居址 (第69図、PL6)



第69図 第23号住居址平面図

g-71グリッドを中心に位置する。緩斜面北側の微高地上、方形周溝墓群中にあり、第9号方形周溝墓の東側周溝を挟んで第22号住居址と近接する。

平面形は、長円形に近く。長軸5.0m、短軸4.25mを測る。長軸の方向はN64°Eである。

遺構は黄褐色の砂状土を、掘り込んでつくられているが、確認面が低かったため、壁高の残存状況は5~10cmである。床面は堅い面が認められなかった。柱穴は壁際に5本確認できたがあまり良好でない。

炉址は長軸線のやや東よりに位置する。自然礫5石をつかった石囲炉である。内側の幅は35×28cmで、深さ25cmを測る。炭化物が底面近くに多く見られた。北側の礫の表面は多孔石と同様の窪みがあった。

出土遺物中、完形の土器はなかったが、炉址の北側から第70図1が出土している。石器は打製石斧2、凹石1、多孔石1が出土している。また、炉址の周辺と炉址内からは小剥片が多く出土している。

出土遺物

土器 (PL38・44) 1、深鉢形土器 器形は胴部中位で著しく括れて内彎ぎみに立ち上がり、口縁部に達するキャリパー形であろう。4単位の波状口縁で、口唇下には沈線がめぐっている。胴部文様帯は隆帯2

第2章 検出された遺構と出土遺物

本を平行させて渦巻文と四角形の区画文が構成される。縄文はRLを最上位のみ横位に、他は縦位に施文している。

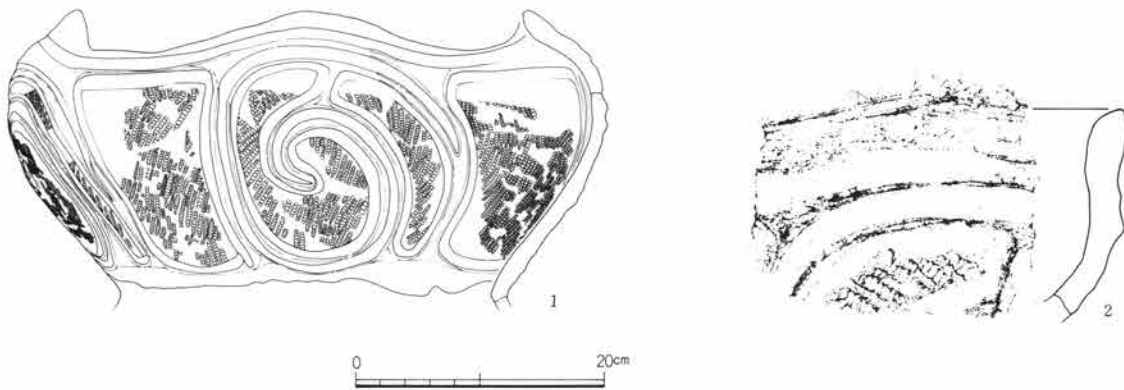
2、深鉢形土器 弱い波状口縁を呈する。2本の微隆起帯状の隆線による渦巻文が施され、その区画内にはRL縄文が縦位に施文される。

石器 (PL48・49・52) 1、2、打製石斧 1は長さ128、幅38mm、重量120gの短冊型を呈する。石質は黑色頁岩。側縁はやや弧状をなす。刃部と基部の表裏両面に磨耗痕を顕著に残す。

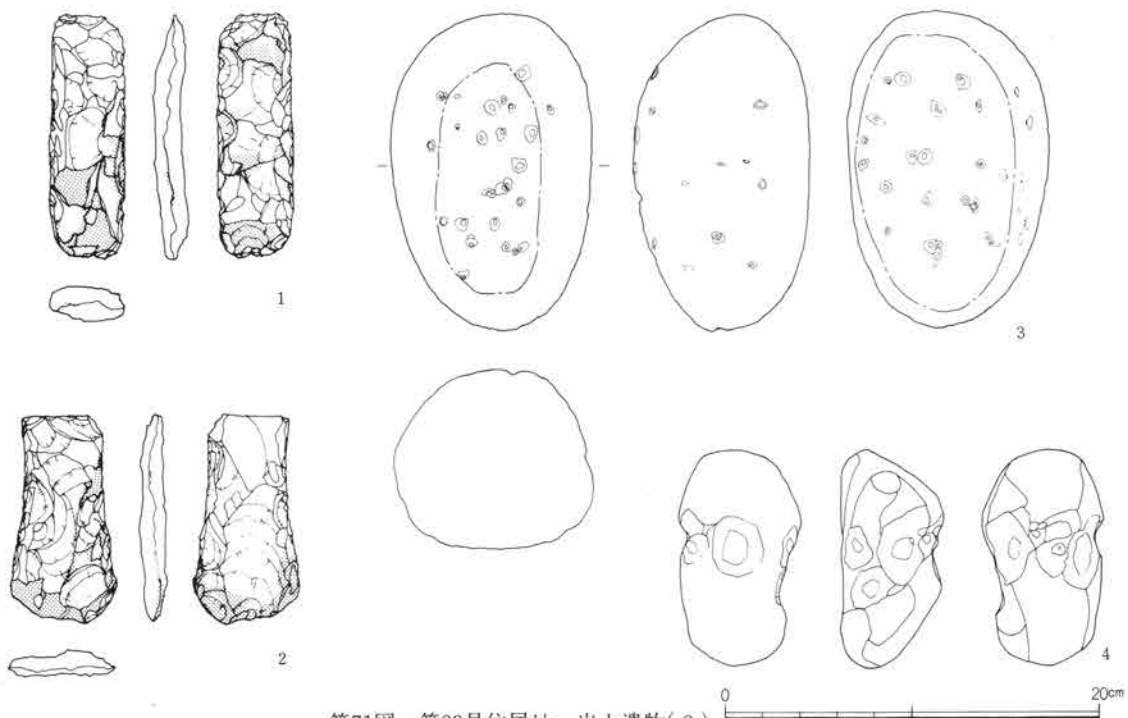
2は基部の一部分を欠損する。残長109、刃部幅57mm、重量110gを測る。石質は黑色頁岩である。側縁部は直縁である。刃部には線状の磨耗痕が顕著である。

3、多孔石 長軸333、短軸214、厚さ188mm、重量1,735gを測る。石質は安山岩。上下をはじめ、側縁を含めた全面に凹みがある。

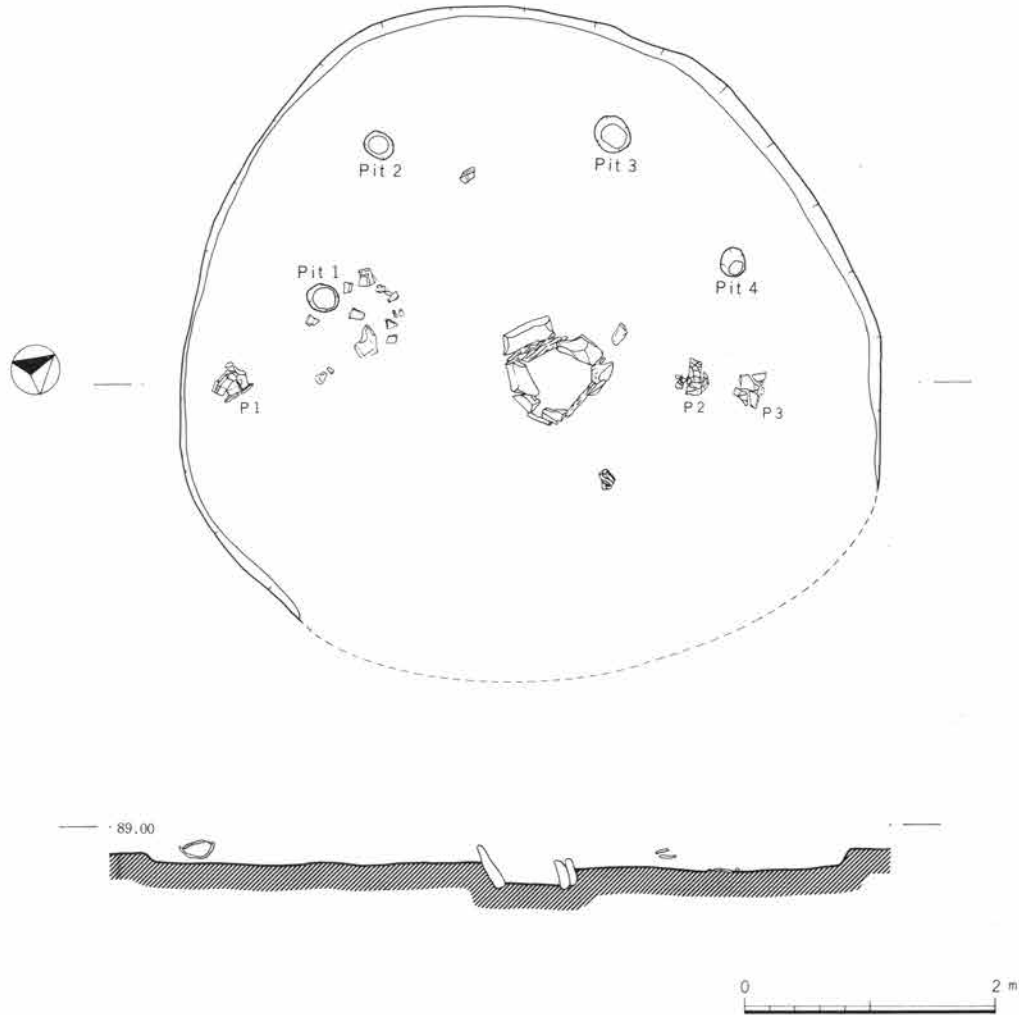
4は凹石と考えたい。長さ114、幅65mm、重量340gを測る。石質は安山岩。断面は三角形を呈し、それぞれの面に敲打痕を残すほか、稜の部分も敲ち欠かれている。



第70図 第23号住居址 出土遺物(1)



第71図 第23号住居址 出土遺物(2)



第72図 第24号住居址平面図・断面図

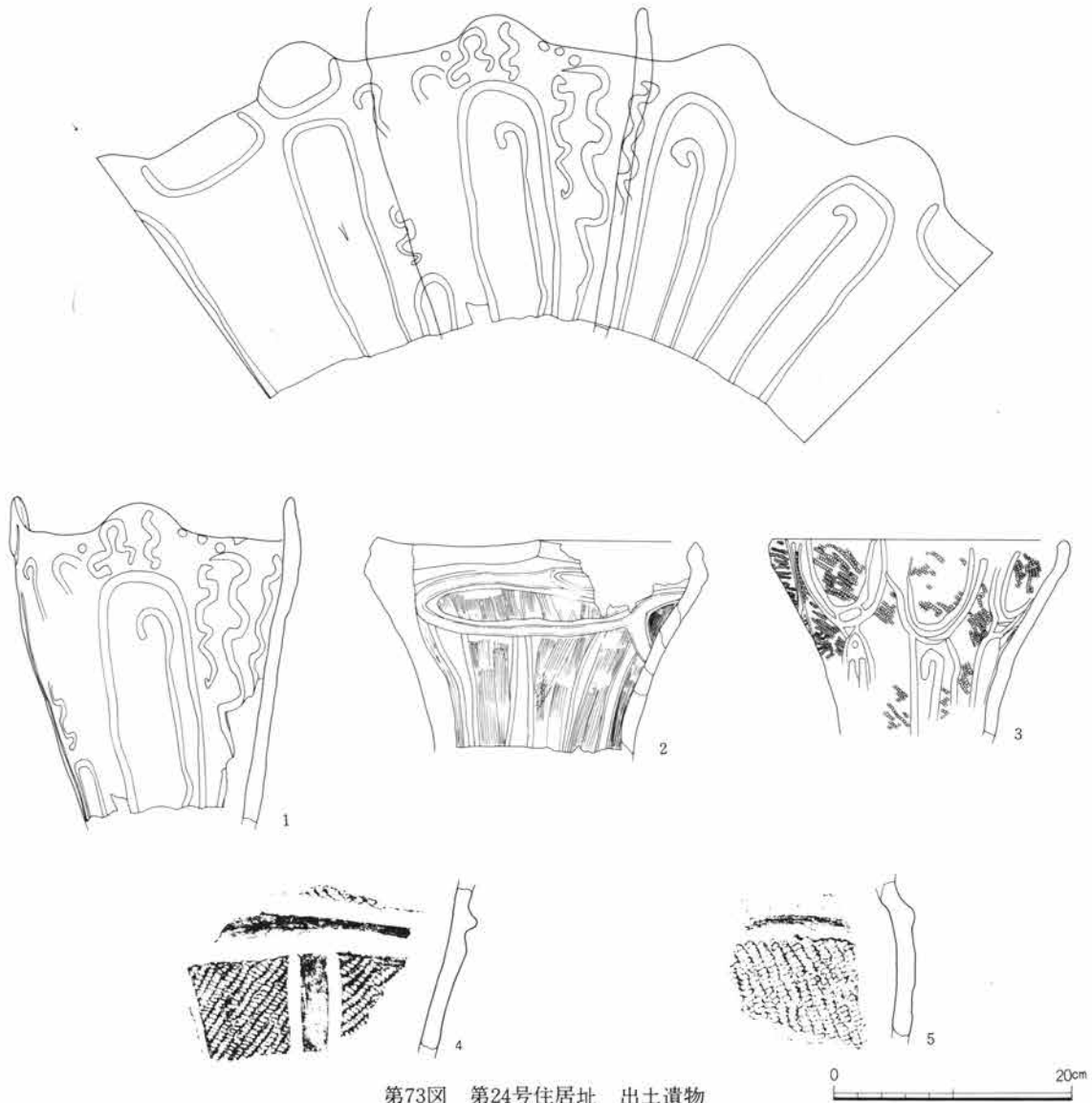
第24号住居址（第72図、PL 6）

緩斜面の東端、T-19グリッドを中心に位置する。南側、3 mに第25号住居址がある。西側の一部が第6号、10号古墳の周堀と、東側が第10号溝と重複し欠失している。

平面形は隅丸方形に近い円形を呈し、南北、5.35mを測る。壁面はソフトローム層を掘り込みつくられているが、残存状態は悪く、残高は良好な北側で27cm、南側で7 cm前後である。床面は東側に向かって下がっておりレベル差は約20cmである。炉址と柱穴の間は堅く踏み固められている。柱穴は4本検出されたが全体としては、不足している。規模はピット1、径26×23、深さ26cm、ピット2、径24、深さ25cm、ピット4、径22、深さ18cmである。

炉址は石囲い炉である。劈開性のある板状の礫を立位に置いて方形に巡らしており、内幅45cmである。

出土遺物は少量で第73図の1～3の土器が数少ない床面直上からの遺物である。1はピット1に近い壁際に横転していた。2、3は炉址の北側から出土している。石器は出土していない。



第73図 第24号住居址 出土遺物

出土遺物

土器 (PL 38・44) 1、深鉢形土器 器形はやや内彎するもののほぼ直線的に立ち上がり、筒状を呈する。4単位の波状口縁である。口縁部文様帯は、楕円文がくずれた弧状の区画文が一部に施される。胴部文様帯は各波頂下に沈線による∩字状の区画が配され、その区画内に蕨手状の懸垂文が施されている。他に、蛇行線状の懸垂文等が不規則に施されている。

2、深鉢形土器 波状口縁を呈すると思われる。口縁部は隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文が施され、その区画文は磨消される。地文は6本の楕歯状工具による条線文が縦位に施文される。

3、深鉢形土器 口縁部は沈線による弧状区画が施文される。また、胴部には平行沈線とその区画内に蕨手状の沈線が施文される。

4、深鉢形土器 胴部には平行沈線が垂下し、その区画内の縄文は磨消される。縄文はRLで、口縁部が横位、胴部が縦位に施文される。

5、深鉢形土器 隆帯と沈線によって、楕円状の区画文が施される。縄文はRLで、横位に施文される。

第25号住居址

(第74図、P L 6)

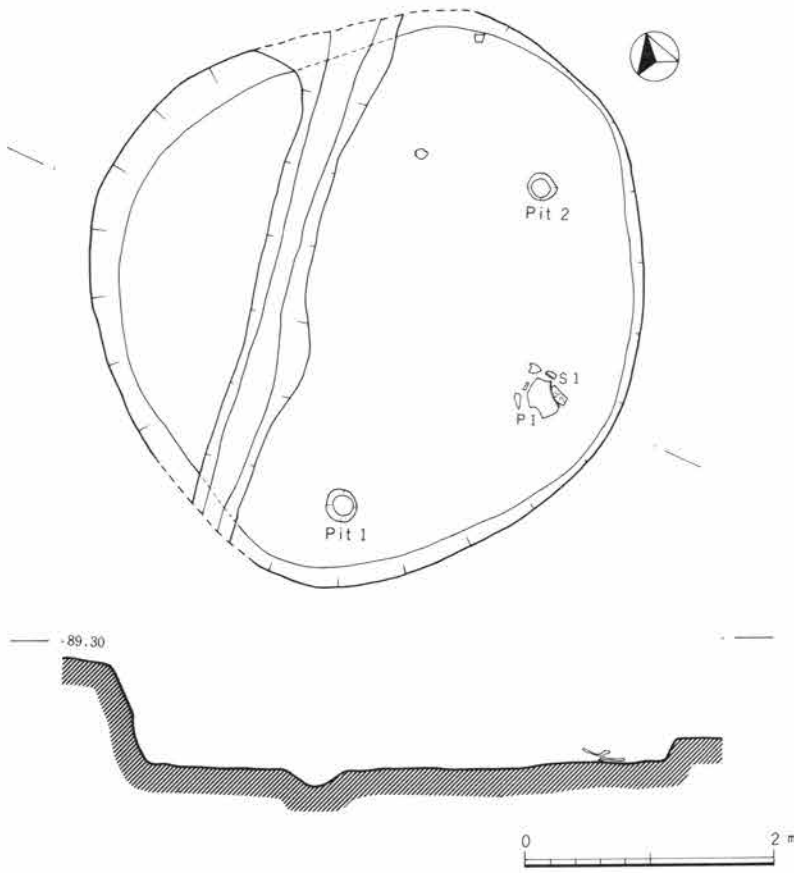
T-17グリッドに位置する。中央部を第6号古墳の周堀、第10号溝により複雑に切られる。

東西4.7m、南北4.5mの長円形を呈する。緩傾斜地の東端部に位置するため、ソフトローム層を掘り込んでいる。壁面は東側で19cmと低く、西側の良好な部分では70~80cmを測る。床面はハードローム層に達しているが特に堅い面はなかった。

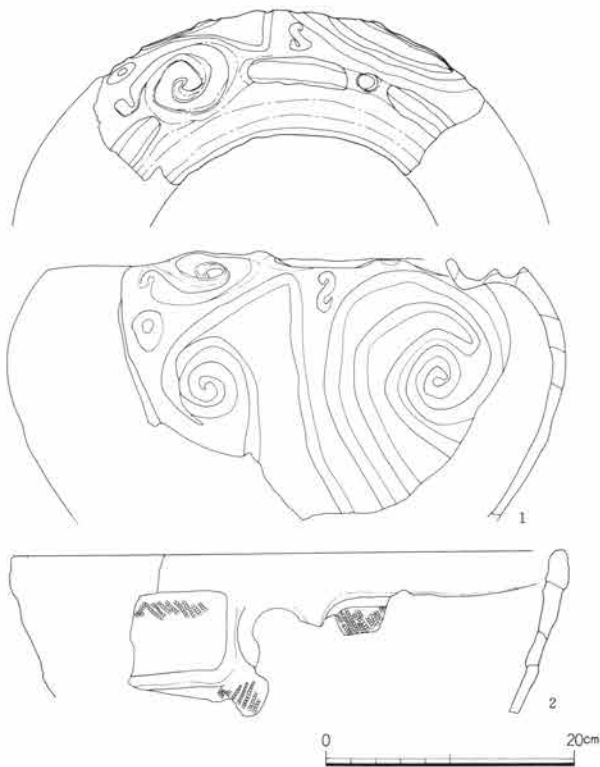
柱穴は2本だけ検出できたが、大半は不明であった。ピット1は径27、深さ22cm、ピット2は径22、深さ9cmである。

炉址は確認できなかった。

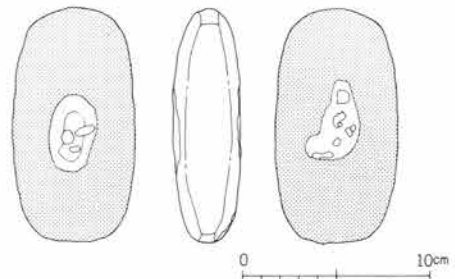
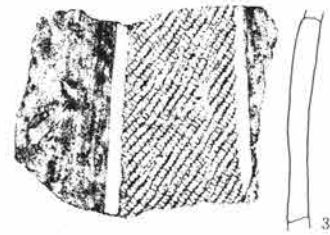
出土遺物は少量で、床面直上の遺物は浅鉢(第75図)と重なって出土した凹石(第76図)のみである。



第74図 第25号住居址平面図・断面図



第75図 第25号住居址 出土遺物(1)



第76図 第25号住居址 出土遺物(2)

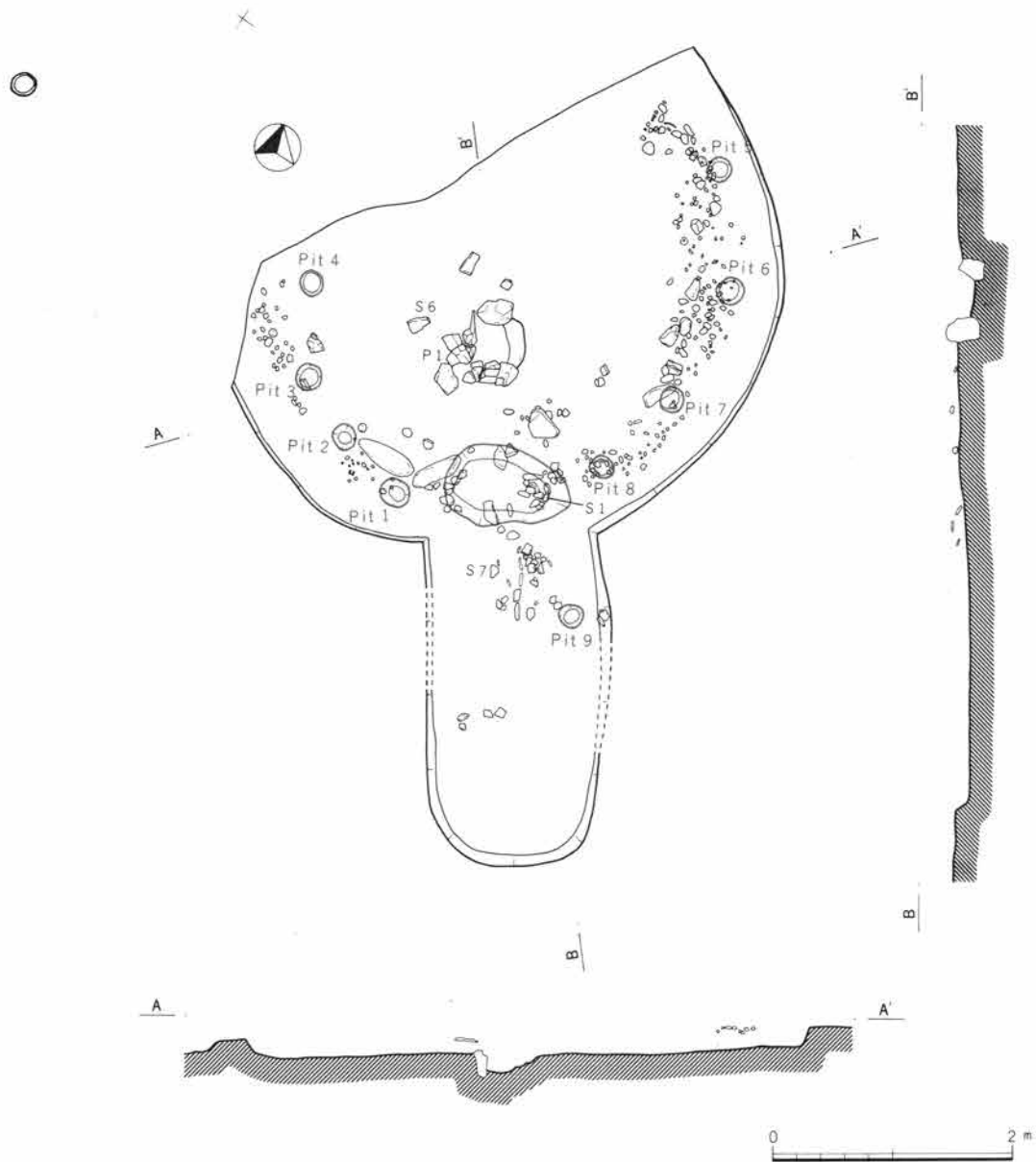
出土遺物

土器 (P L 38・44) 1、浅鉢形土器 口縁部は短く直立ぎみに立ち上がり、その外側に2本の沈線がめぐる。また、この沈線をまたぐ様に、小さな橋状の把手が6箇所につくと思われる。胴部では同心円状の渦巻文が施文される。

2、深鉢形土器 口縁部は隆帯と沈線の組み合わせによる渦巻文と楕円区画文が配されると思われるが、全体像は明らかでない。R L縄文が横位に施文されている。

3、深鉢形土器 平行沈線を垂下し、その区画内の縄文を磨消している。縄文はR Lで縦位に施文する。

石器 (P L 50) 凹石 長さ124、幅65、厚さ35mm、重量440gを測る。石質は安山岩。両面の中央部に敲打痕を残す。その痕跡の弱い片面は磨石としても機能しており、器面が磨耗している。側縁部には自然面が残っている。



第77図 第26号住居址平面図・断面図

第26号住居址 (第77図、P L 7)

Y-17グリッドを中心に位置する。緩斜面の上部にある。遺構確認面は北から南に緩やかに傾斜している。平面形は柄鏡形を呈するが、第5号溝と重複するために北側の一部分を欠失する。長軸の残存長は6.65m、短軸4.73m、張り出し部の幅1.45mを測る。張り出し部は他の柄鏡形住居址に比して長いが中程は攪乱を受けている。長軸の方向はN16°Wである。

壁面はソフトローム層を掘り込んで構築されているが残存状態は極めて悪い。残存壁高は、主体部の東側で約15~20cm、張り出し部の先端で10cm前後である。

床面はソフトローム層中につくられたためか堅い面はなく、張り出し部に向かってレベルが下がっている。ピットは主体部に8本、張り出し部に1本検出された。壁柱穴と思われるが全体的に規模が小さい。

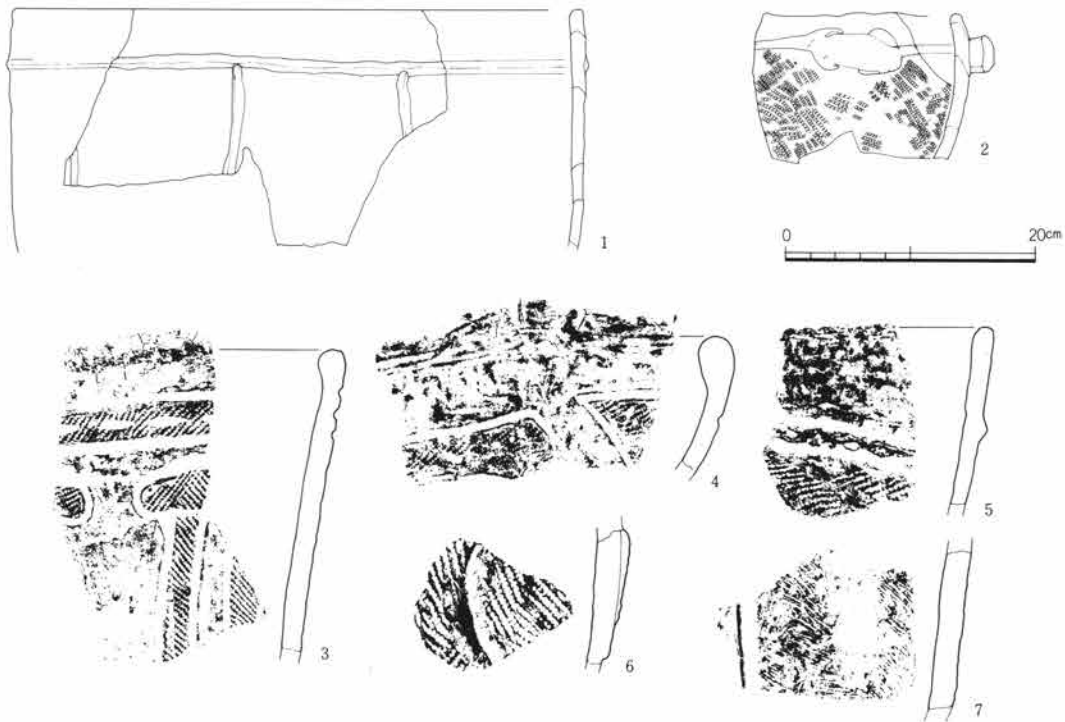
炉址は主体部の中央、やや張り出し部よりに位置する。角礫を利用した石囲い炉で内幅は67×52cmと南北に長軸をもつ。東側は礫が抜かれている。礫は火焼によるためかひび割れが著しい。炭化物がやや認められた。

主体部には柱穴と重なるように小円礫を主体とし、土砂と混ぜあわせて積まれた周縁部環礫（以下周礫と略す）がめぐる。西側は攪乱を受けてやや残存状態が悪い。幅は50cm前後、最高位に床面から25cm程離れている。小円礫に混じり土器の小破片、凹石、多孔石も含まれている。

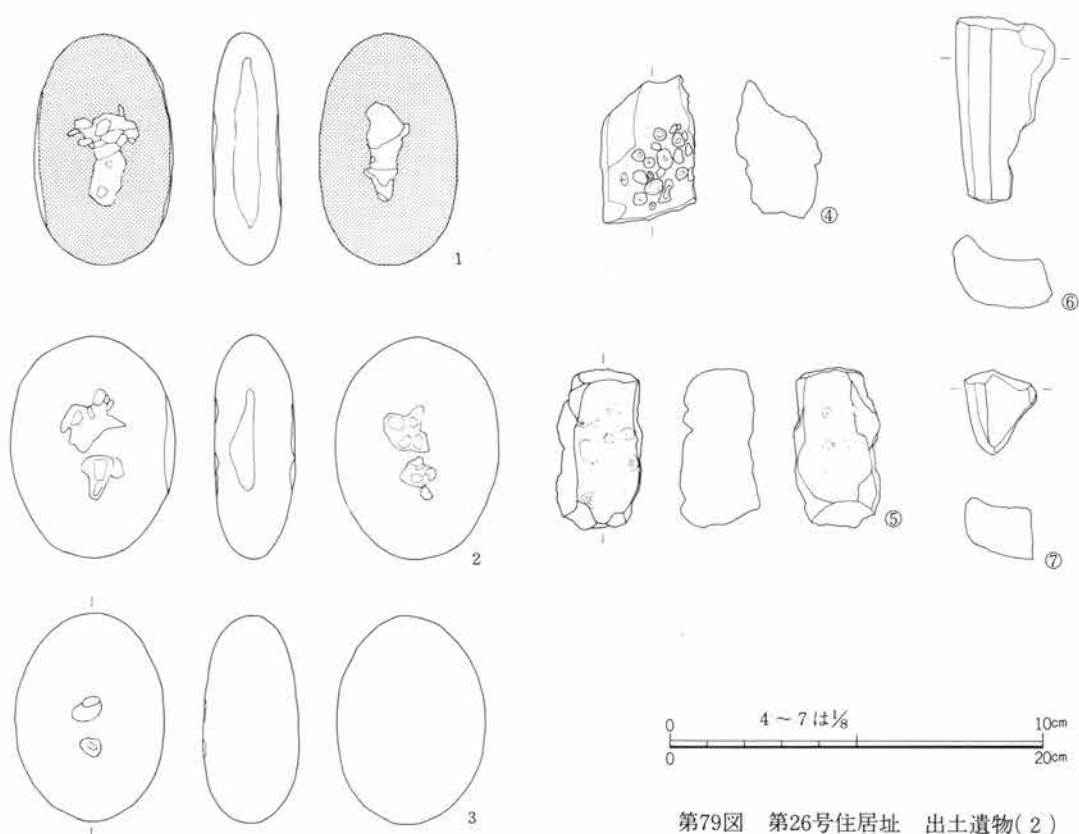
主体部の張り出し部との接続する部分、ピット1とピット8の間には径105×65、深さ10cmの皿状の掘り込みを有する。

出土遺物は少なく、土器は張り出し部に小破片が集中していた。炉址の周辺からは石皿の破片が検出された。石器は周礫中出土も含め石皿2、凹石3、多孔石2である。また、ピット1の北側からは、石棒状の河原石が出土しており、表面に磨耗痕が認められた。

No	長軸	短軸	深	No	長軸	短軸	深
1	24	—	29	6	22	—	40
2	23	20	31	7	21	—	64
3	23	—	27	8	20	18	29
4	20	—	25	9	20	—	34
5	22	20	11	10			



第78図 第26号住居址 出土遺物(1)



第79図 第26号住居址 出土遺物(2)

出土遺物

土器 (PL37・44) 1、深鉢形土器 口縁部は幅広い無文帯をもち、その下には微隆起帯がめぐる。胴部文様帯は同様の微隆起帯が垂下するが、縄文は施文されない。

2、深鉢形土器 口縁は内彎ぎみに立ち上がる。口縁部は無文帯をもち、その下に微隆起帯がめぐる。この微隆起帯上には横位の橋状把手がつく。胴部にはLR縄文が施文されている。

3、深鉢形土器 口唇下は無文で、その下に沈線による区画文が施され、LR縄文が充填されている。上位の区画文内には、縄文施文後に列点が施されている。

4、深鉢形土器 波状口縁を呈する。沈線区画文中にLRの縄文が充填されている。

5、深鉢形土器 口縁部は無文帯がめぐり、刺突文の施された隆帯により区画されている。胴部にはLR縄文が施文されている。

6、深鉢形土器 隆線が施され、その後、LR縄文が施文されている。

7、深鉢形土器 隆線が垂下し、L縄文を弱いタッチで施文している。

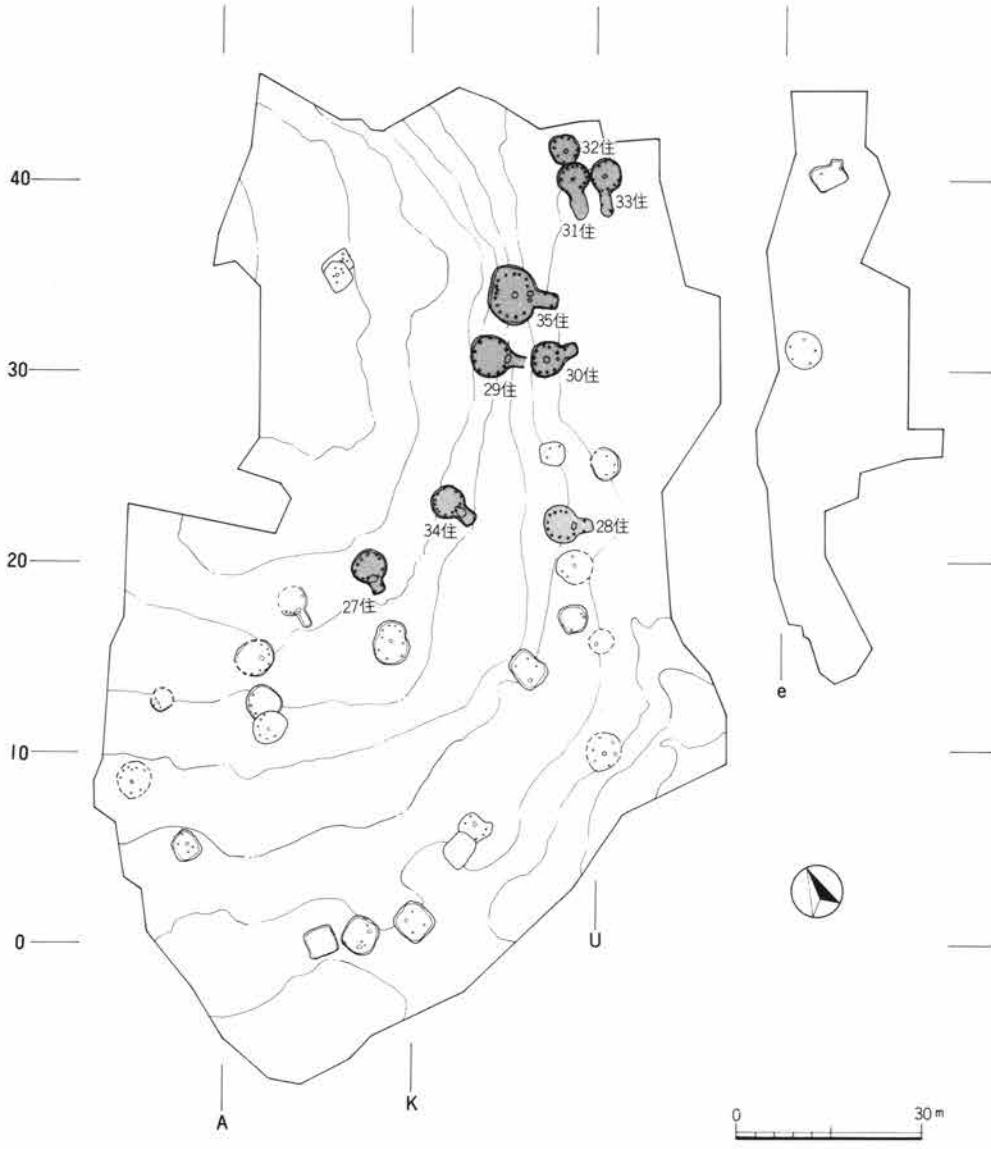
石器 (PL49・52・53) 1～3、凹石であるが、いずれも磨石としても使用されている。1は長さ122、幅74、厚さ35mm、重量520gを測る。石質は輝緑岩である。敲打痕は両面の中央に浅い凹みを作るとともに側縁部にも認められる。

2は長さ118、幅88、厚さ44mm、重量580gを測る。石質は安山岩。両面に2対の敲打痕が残る。

3は長さ110、幅80、厚さ51mm、重量690gを測る。石質は輝緑岩。緻密なためか敲打痕は非常に浅い。

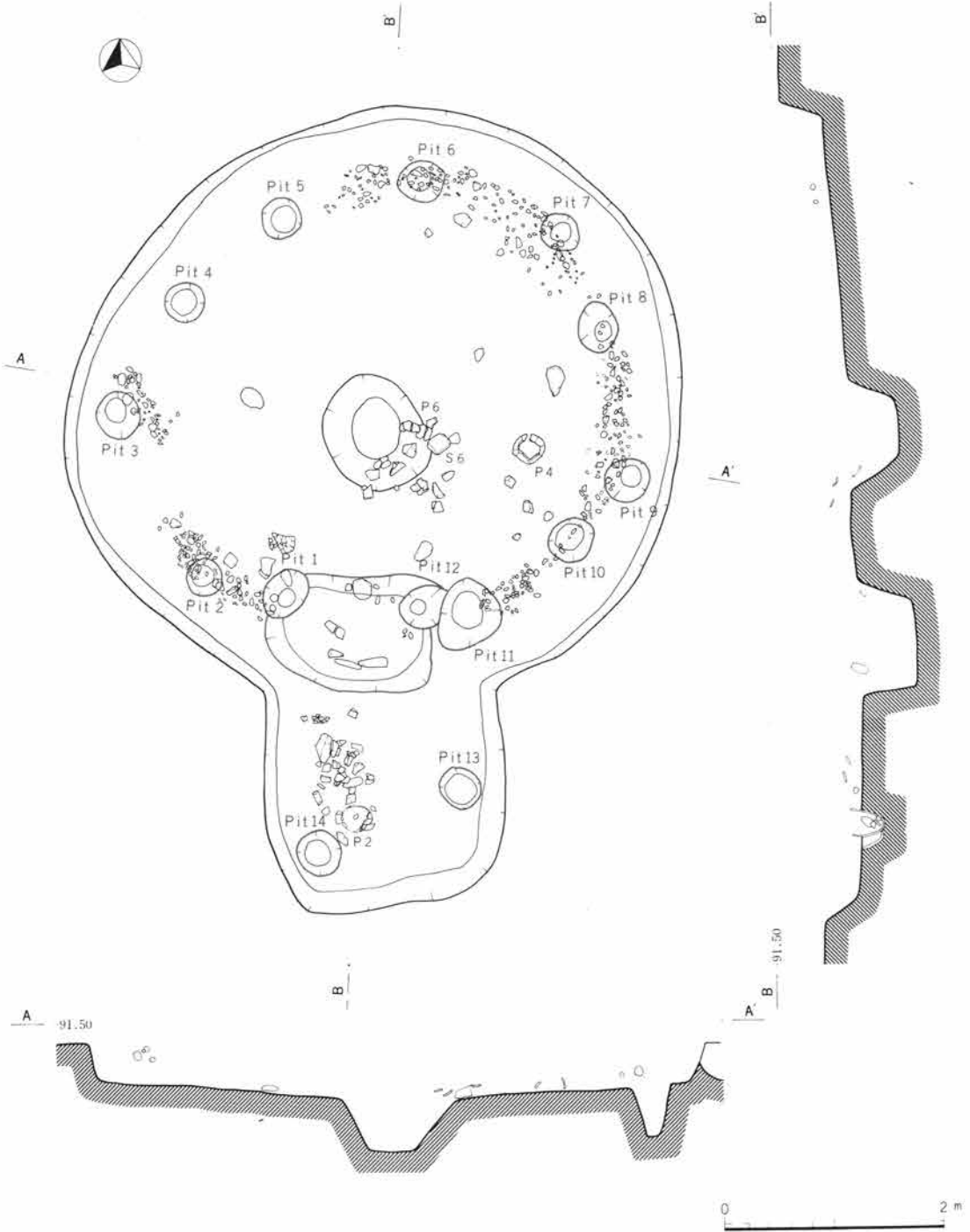
4、多孔石 長軸145、短軸99、厚さ87mm、重量1,640gを測る。安山岩の角礫で一面にのみ小さな凹みが集中している。器面は火熱を受けている。

- 5、多孔石 長軸167、短軸90、厚さ73mm、重量1,480gを測る。石質は安山岩。2面に凹みがある。
6、7、石皿の破片 いずれも安山岩でつくられている。7の磨面には磨耗痕が顕著に残る。



第80図 縄文時代後期 住居址位置図

第27号住居址 (第81図、P L 7)



第81図 第27号住居址平面図・断面図

I-20グリッドを中心にして位置する。東側は第9号古墳の「前庭」状遺構と重複する。本住居址の西、約9mの所に第26号住居址、東に約12mの所に第28号住居址がある。

平面形は張り出し部の短い柄鏡形を呈する。長軸7.28m、短軸5.6m、張り出し部幅2.2mを測る。長軸の方向はN3°Eであり、等高線の軸にほぼ直交している。

住居址の確認面は南に向って緩やかに傾斜しており、壁面の残存状態も北側が良好で40cm前後、張り出し部の先端では30cm前後となっている。

床面も南に傾斜しており、ピット6付近と張り出し部先端のレベル差は30cmになる。

ピットは主体部で12本、張り出し部から2本を検出した。壁際をめぐる柱穴列と考えられる。張り出し部の2本はやや浅い。ピット1とピット12は、いわゆる対ピットである。

炉址は、径107×90、深さ40cmの土壇状を呈し、主体部の中央に位置する。焼土は多くなかったが壁面は若干焼けていた。埋土の上層からは小型の土器片が多数出土した。土器の1も炉内の出土である。

主体部には小円礫を主体とした周礫が、囲繞していたが、西側の残存状態は極めて悪かった。幅は平均40cm、礫の最上部は床面から20cm離れて、下位は床面を掘り込んで置かれていた。

主体部と張り出し部が接続する部分に、対ピットと重複するように、長軸150cm、短軸105cm、深さ50cmの隅丸長方形の土壇が掘り込まれている。この土壇は埋土の最上部が貼り床に覆われていた。

張り出し部の先端、やや左壁よりに土器の2が埋葬として埋設されている。5は伏せられた状態で床面直上から出土した。石器は周礫内出土も含め、打製石斧2、凹石10、多孔石1である。

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
長軸×短軸	44×38	34×33	44×40	36×35	38×36	43×37	34	46×36	41×38	40	38	63×56	38	41×40
深さ	72	55	56	78	78	78	67	62	51	71	29	58	29	32

出土遺物

土器 (PL38・44) 1、深鉢形土器の胴下半部 器形は中位で強く括れ、以下は球形を呈し、底部にむかって著しくすぼまる。胴下半部の文様は、沈線のJ字文をモチーフとして描かれるが、乱雑な文様構成である。1箇所のJ字文の中央には円形の貼付文が施される。

2、深鉢形土器の胴下半部 上半部が全く失損しているため全体の文様構成は明らかにできないが、沈線による2段のJ字文が連続し、区画内に列点が施されている。

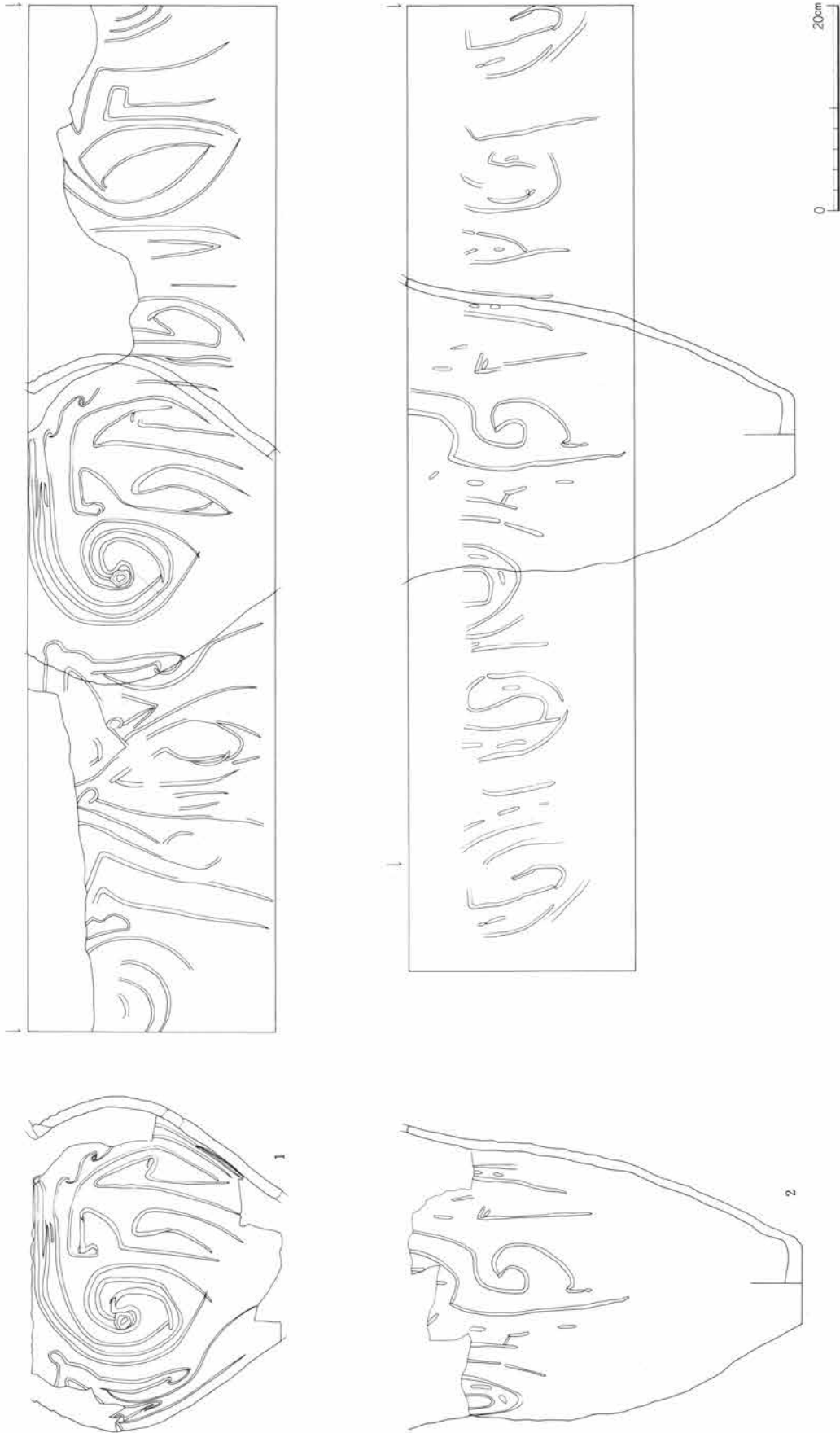
3、深鉢形土器の口縁部破片 口縁部に無文帯をもち、その下に微隆起帯がめぐっている。胴部にも同様の微隆起帯が垂下する。

4、深鉢形土器の口縁部破片 口縁部に無文帯をもち、その下に微隆起帯がめぐっている。胴部にも同様の微隆起帯が垂下している。LR縄文を縦位に施文しているが、画線内充填の可能性もある。

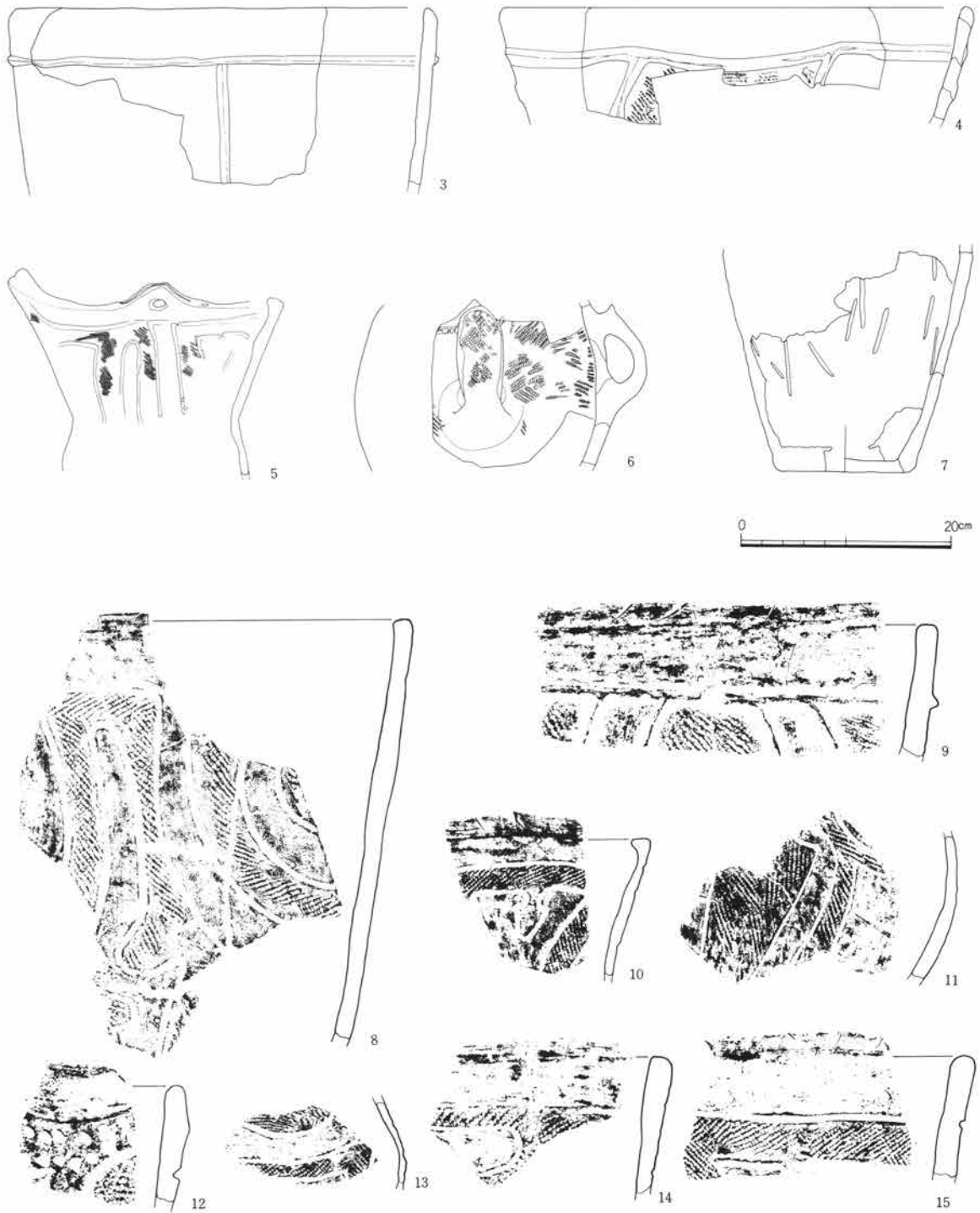
5、深鉢形土器の上半部 3単位の波状口縁を呈し、各波頂下には孔がけられている。また、その口唇上には沈線と刺突が施されている。胴部にはJ字文を主体とした区画文が4単位に施される。区画内にはLR縄文が充填されている。

6、両耳壺形土器の胴部 球形の胴部を呈し、橋状把手を有する。把手の基部から微隆起帯がめぐり、この上には刺突が施されている。LR縄文が不規則に施文され、把手の外面にも施文される。

7、深鉢形土器の胴下半部 底部は接合部分で剝離し欠失する。断続的な沈線が垂下する。



第82図 第27号住居址 出土遺物(1)



第83図 第27号住居址 出土遺物(2)

8、深鉢形土器 沈線によるJ字形のモチーフを主体とした区画内にLR縄文が充填されている。

9、深鉢形土器の口縁部破片 口縁部に無文帯を持ち、その下に微隆起帯がめぐっている。胴部には、微隆起帯によるV字、∩字状の区画文が配され、その区画内にLR縄文が充填される。

10、深鉢形土器の口縁部 口唇は内側に突出し、三角形の断面を呈する。沈線による区画文内にLR縄文が充填されているが、カギ形の部分には施文されていない。

第2章 検出された遺構と出土遺物

11、深鉢形土器の胴部 沈線により文様が描かれ、その区画内にはLR縄文が充填されている。器面には炭化物が付着する。

12、深鉢形土器の口縁部 波状口縁を呈し、無文帯がめぐる。その下に微隆起帯がめぐっている。胴部は沈線による区画内にLR縄文が充填されている。また、微隆起帯にそって、2段の刺突文がめぐる。

13、深鉢形土器の胴部破片 小型。沈線による区画内にLR縄文を充填している。器厚0.3cm。

14、深鉢形土器の口縁部 口縁部に無文帯をもち、胴部には沈線による区画内にLR縄文を充填している。

15、深鉢形土器の口縁部 14と同様、沈線区画内をLR縄文で充填する。

16、耳栓 表面は凸レンズ状を呈し無文。中央に中位までの穿孔が施される。

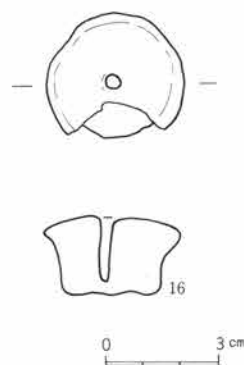
石器 (P L 48・50・52) 1、打製石斧 基部を欠損する。残長92、刃部幅64、厚さ13mm、重量100gを測る。石質は安山岩。表面は自然面を多く残している。刃部内面に磨耗痕を残すが非常に弱い。

2～4は凹石 2は一部を欠損する。残長104、幅81、厚さ43mm、重量540gを測る。石質は安山岩。敲打痕は片面にのみ認められるが非常に浅い。磨石としても使用されており、磨耗痕は側縁部にまで及ぶ。

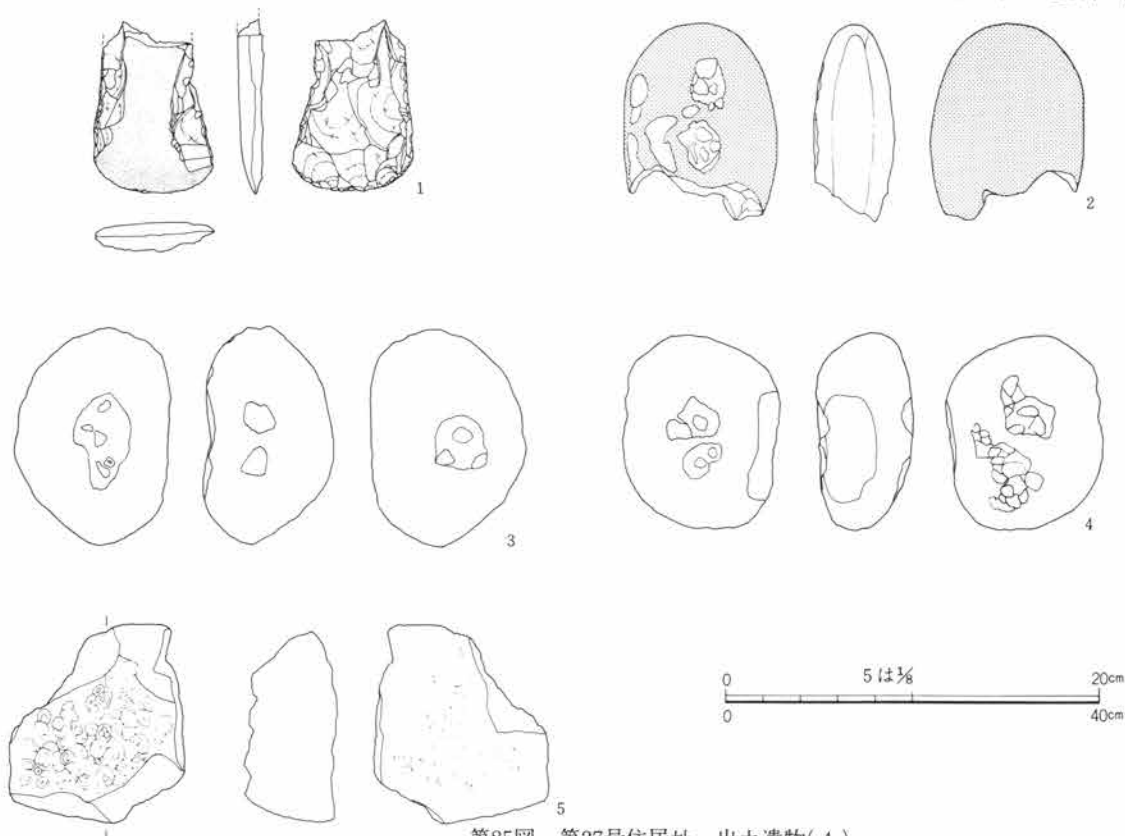
3、長さ115、幅82、厚さ65mm、重量730gを測る。石質は安山岩。側面を含めた3面に敲打痕がある。また、長軸の端部も敲打している。

4、長さ103、幅83、厚さ50mm、重量450gを測る。石質は安山岩。両面に敲打による凹みを残す。側縁部も敲打痕が残る。

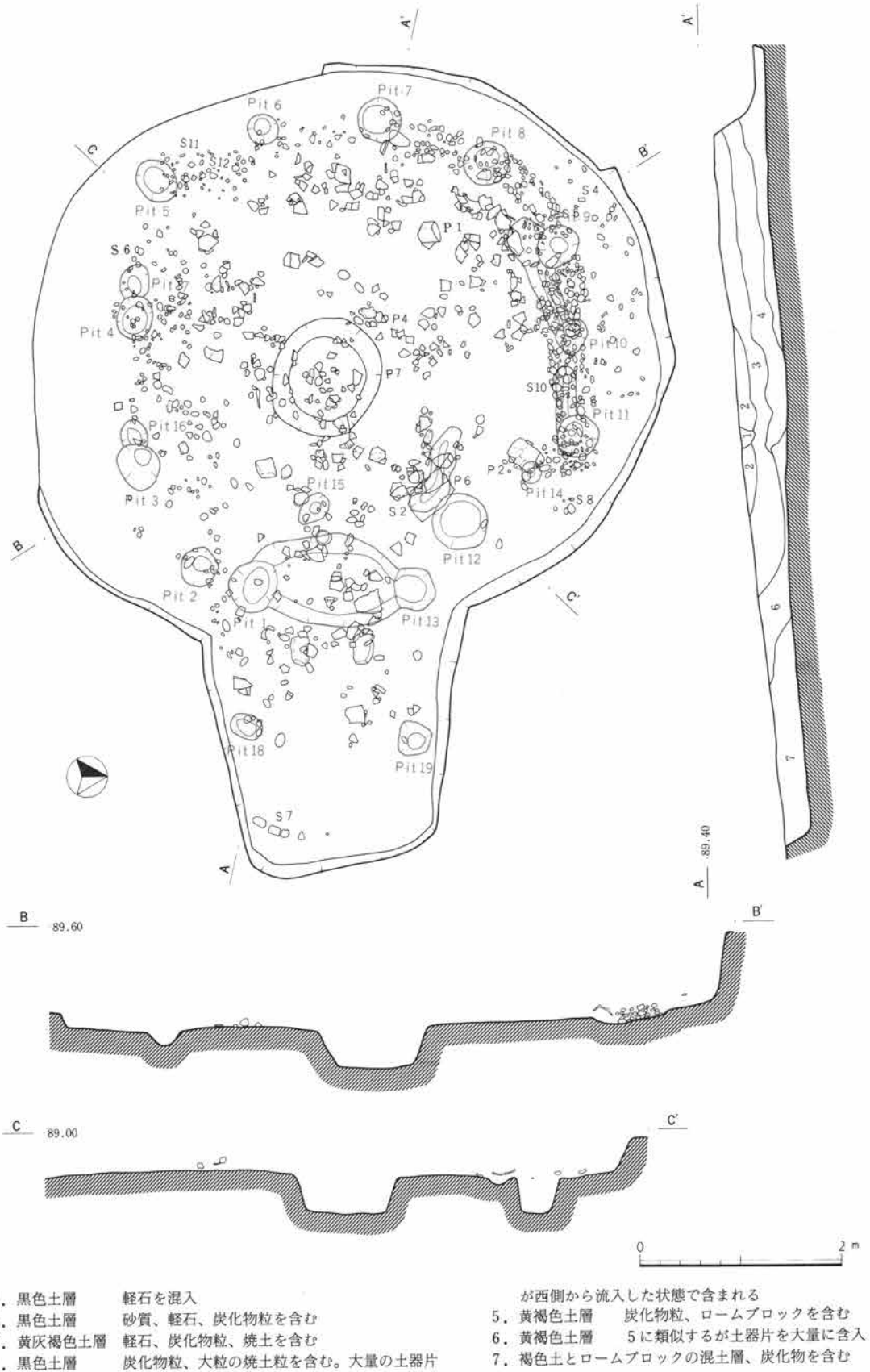
5、多孔石 長軸206、短軸182、厚さ94mm、重量3,550gを測る。偏平な安山岩の角礫の2面に凹みがある。



第84図 出土遺物(3)



第85図 第27号住居址 出土遺物(4)



第86図 第28号住居址平面図・断面図

第2章 検出された遺構と出土遺物

第28号住居址（第86図、P L 8）

緩斜面の端部、東傾斜変換点にあたりS-22グリッドを中心に位置する。主体部の南側は第10号古墳の「前庭」状遺構が存在していたため、壁面を検出することができなかった。また、張り出し部の先端も第10号溝により攪乱を受けている。

平面形は張り出し部の短い柄鏡形を呈し、長軸7.92、短軸6.15、張り出し部中位の幅2.34mを測る。長軸の方向はN70°Wで等高線とほぼ直交している。

壁面は北側の残存が良好で高さ30~50cm、張り出し部先端で25cmを測る。床面は部分的に堅い面があり、炉址の周辺でやや低くなっている。また、張り出し部に向って傾斜し、ピット7と張り出し部先端のレベル差は38cmである。

炉址は主体部の中央に位置し、径120×104、深さ34cmの長円形を呈す。側壁が著しく焼けており、埋土には焼土の堆積が20cm程認められた。

主体部には周礫の圍繞が認められた。周礫は崩落が著しく小円礫を主体に土器片、凹石などの石器類も含んでいる。幅40~50cm、床面から最高位までのレベル差は40cm程である。礫は床面を掘り下げて積み上げた様で、ピット9~10の間には柱穴を連結する様に幅20cm程の溝状の掘り込みがある。これらの円礫は柱穴の掘り方内にも混入していた。

主体部と張り出し部の接続部分には、ピット1と13に重複して南北に長軸をもつ土壇状の掘り込みがある。規模は146×45、深さ36cmを測る。床面に覆われていたと思われるが貼り床の有無は確認できなかった。

また、対ピットの東側、張り出し部の基部には床面をやや掘り込み長軸30cm程の角礫が40cmの間隔をおいて平行に裾えられている。同様の状況は第35号住居址にも認められた。

遺物は土器が収納箱に15箱分が出土したが埋土中のものが大半であった。1は床面から32cm、2、3、6は7cm、4は5cm離れて出土した。石器も多量に出土しており、周礫内出土も含めて打製石斧6、磨製石斧1、凹石22、小型砥石1、軽石製品1を数えた。

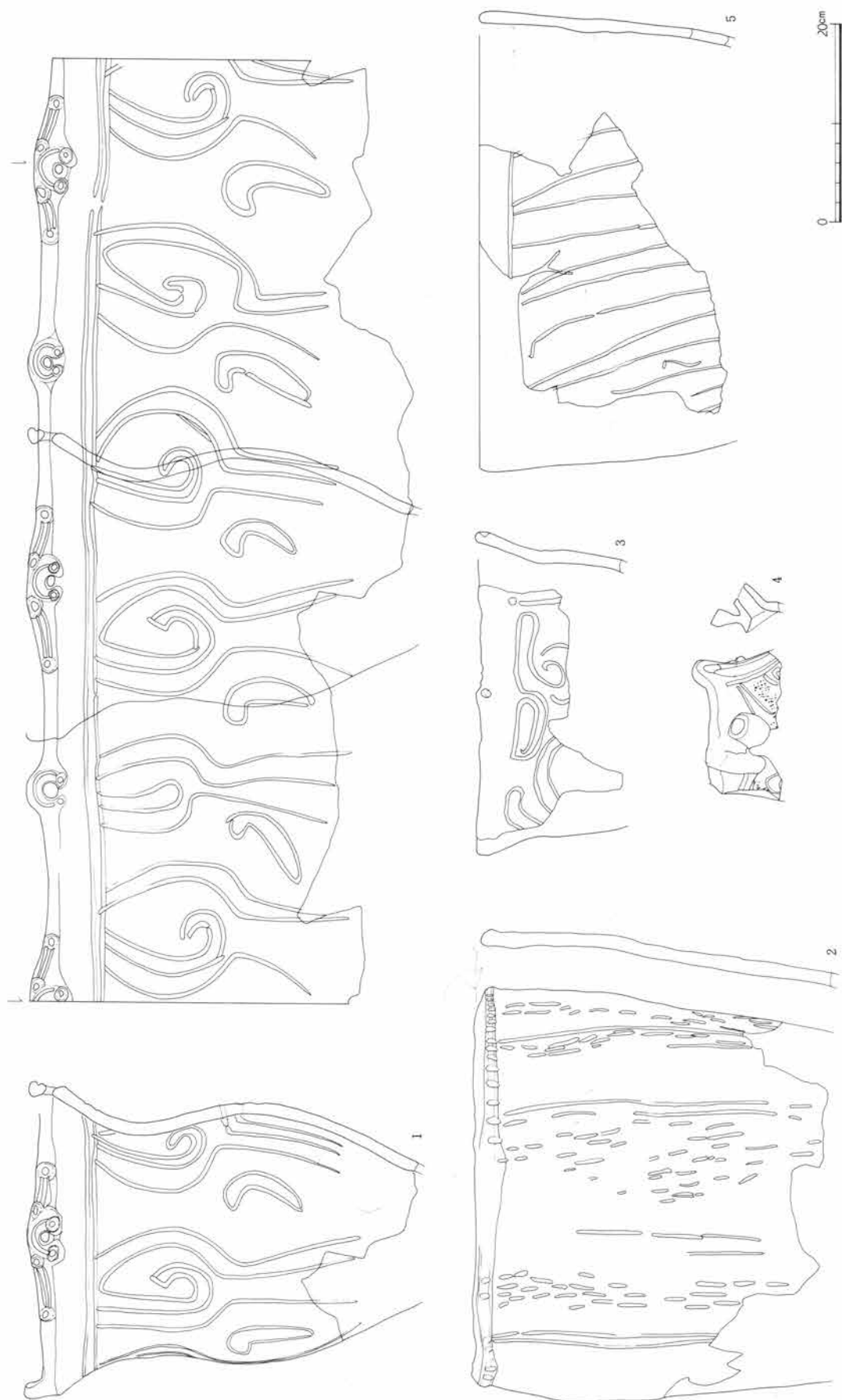
ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
長軸×短軸	48	39×38	45×42	34×43	40	30	44×43	45×43	40×42	32×34
深さ	117	11	44	26	45	45	56	57	60	58

ピット番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19
長軸×短軸	41	55×40	42×40	22×20	28×27	27×24	30×28	31×26	36×34
深さ	44	36	46	6	9	8	10	23	24

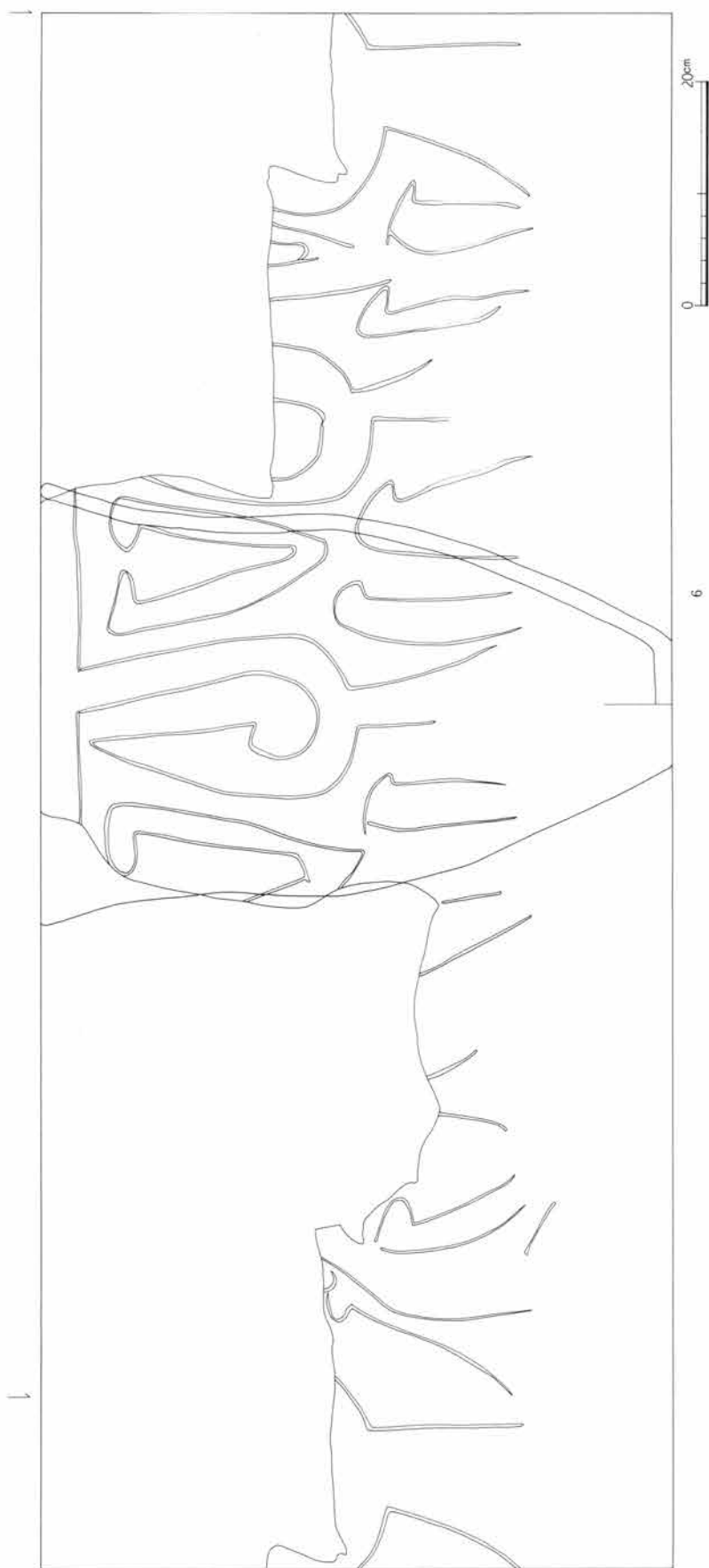
出土遺物

土器（P L 39・41・45・47） 1、深鉢形土器 口縁部は内折し、胴部は外反ぎみに立ち上がり上位に括れがある。口縁部には沈線と刺突によるC字文が4単位つき、その部分が盛り上がり波状口縁を呈する。また、C字文のうち対角線の一对には文様の左右に2つの円形貼付文と沈線が施されている。胴部上位には2本の沈線がめぐり、その下にはJ字文を主モチーフとして5単位に配されている。

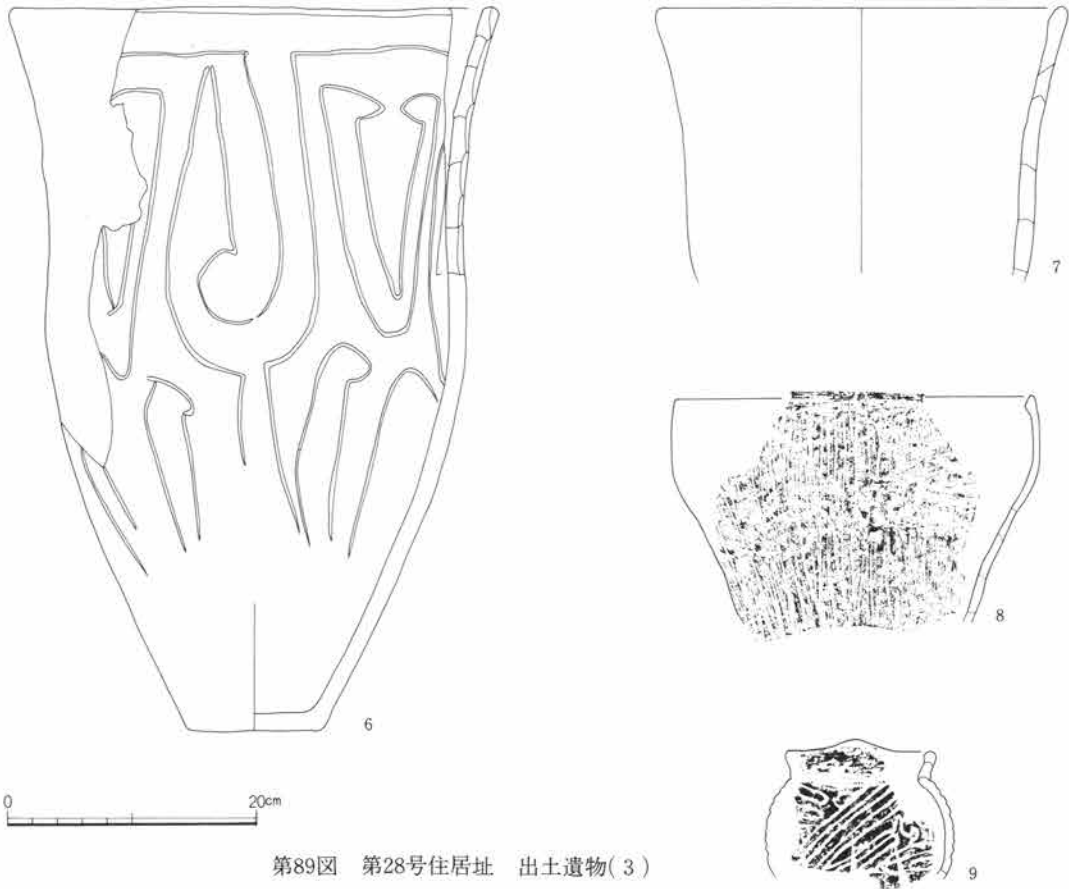
2、深鉢形土器上半部 口唇下に隆帯をめぐらし、これに指頭状の円形押捺文を施している。胴部には2本の平行沈線文を垂下させ、その区画外に列点文を充填させている。



第87図 第28号住居址 出土遺物(1)



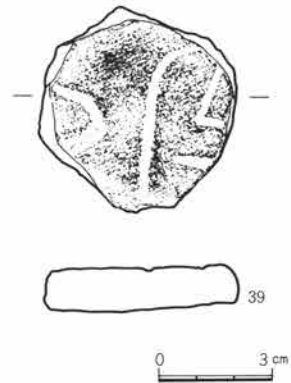
第88図 第28号住居址 出土遺物(2)



第89図 第28号住居址 出土遺物(3)

3、深鉢形土器 弱い波状口縁を呈し、その波頂下に、外側1箇所、内側には横位に3箇所、また、口唇にも2箇所、刺突文が施されている。胴部には沈線により渦巻状のモチーフが施されている。

4、注口土器 上半部の破片で全体の形状や文様構成については把握できない。器肉は厚く、平均1cm前後である。口縁部は内折し、外側に稜部をもつ。口唇と注口をつなぐ橋状の把手を有する。注口は短く、仰角も大きい。内面の注口の孔の上位には隆線上の凸帯がめぐっている。体部の文様は隆帯と沈線、刺突文により構成され、口縁部の内折する下位には隆帯区画の無文帯がめぐる。部分的にL縄文が充填されているが、縄文施文後の沈線文のなぞりがみられる。



第90図 出土遺物(6)

5、深鉢形土器 口縁部に無文帯をもち、その下に沈線がめぐっている。胴部には沈線による区画文が垂下している。

6、深鉢形土器 胴部には沈線により、J字文の反転したM字状の区画文が描かれている。

7、深鉢形土器 無文で、内外面にはナデが施されている。

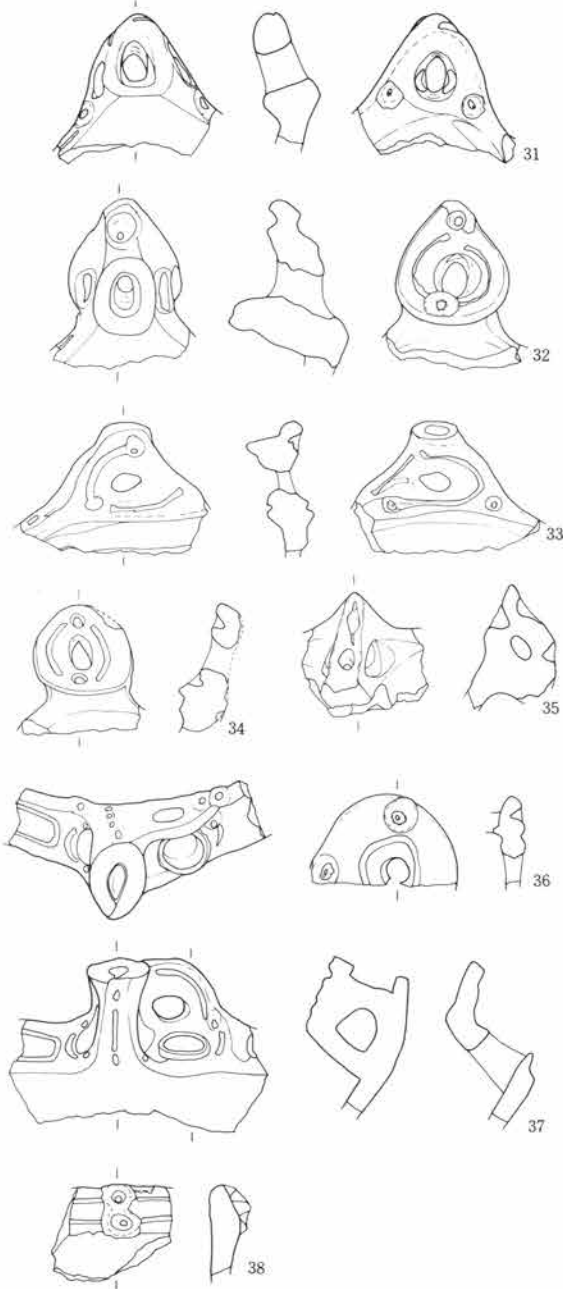
8、深鉢形土器 口縁部は内彎ぎみに立ち上がる。器肉は薄い。櫛歯状工具により縦位に条線が施される。

9、壺形土器 小型の精製土器である。口縁部は短く、波状口縁を呈する。くの字状に強く外反する。胴部は球形を呈し、深い沈線で文様構成されている。器面は内外面とも良好に研磨され、砂粒は胎土中に沈んでいる。焼成も堅緻である。



第91図 第28号住居址 出土遺物(4)

- 39、土製円板 深鉢形土器の胴部を再利用している。径5.2cm。
- 10、深鉢形土器 波状口縁を呈する。口唇は内側にくの字状に突出している。頂部にはC字状の貼付文が施され、その中央は穿孔されている。沈線による区画文の中にはLR縄文が充填されている。
- 11、深鉢形土器 波状口縁を呈する。口縁には2箇所につまみ状の小突起がある。突起の内側部分には刺突が施される。口縁部は隆帯と沈線から構成され、沈線による区画文の中にL縄文が充填されている。
- 12、深鉢形土器 弱い波状口縁を呈する。口縁部はくの字状に内折し、隆帯の貼付によって小突起状に肥厚するが、その両端に円形の刺突文を施している。この下には隆帯を貼付して、C字状の文様を構成していたと思われるが、剝離している。胴部には沈線による区画文が施文されている。
- 13、深鉢形土器 胴部破片である。くの字状に強く括れる。上下2段のJ字文が反転した区画文であり、区画内に列点が施される。
- 14、深鉢形土器 強い波状口縁を呈する。口縁部はくの字状に内折し、波頂部には把手を有するが、欠損し詳細は不明である。また、把手の横に円形貼付文と沈線文が施され、内側にも貼付文がある。胴部には沈線による文様が構成されている。
- 15、深鉢形土器 波状口縁を呈する。口縁部は内折し沈線が施される。胴部は中位で強く括れる。括れ部には8字状貼付文が施され、これから口縁部に向けて、2本の平行沈線が施され、その区画内には、LR縄文が充填される。
- 16、深鉢形土器 胴部破片である。沈線区画内にLR縄文が施される。
- 17、深鉢形土器 口縁部はやや外反し肥厚している。一部に円形貼付文の突起があり、その中央は穿孔されている。口唇には2本の平行沈線がめぐり、胴上位には無文帯がめぐり、沈線により区画されている。
- 18、深鉢形土器 口縁下位に並列して刺突文が施される。胴部は沈線による楕円状の区画文が施される。
- 19、深鉢形土器 口縁部は強く外反する器形である。胴部には沈線による楕円状の区画がなされている。
- 20、深鉢形土器 21と同一個体である。口唇は三角形の断面を呈する。胴部には2本の平行沈線により、渦巻文が構成されている。
- 22、深鉢形土器 口縁部に幅広い無文帯をもつ。その下には隆帯が貼付けられ、指頭状の円形押捺文が連続する。胴部は無文である。
- 23、深鉢形土器 口縁部は外側に肥厚し、沈線により楕円形に区画された中に列点が施されている。また、区画文の間には2列の刺突文が施されている。胴部は2本の平行沈線による区画文が施される。
- 24、深鉢形土器 口唇にはコブ状の隆起がみられる。胴部には2本1単位の列点状に断続する沈線が垂下しているが、全体のモチーフは不明である。
- 25、深鉢形土器 胴部破片である。横位の隆帯には列点文が施文される。胴部には沈線をX字状に配する。
- 26、浅鉢形土器 くの字状に内折する部分には、横位に沈線と列点文が施される。
- 27、深鉢形土器 胴部の小破片である。斜行する2本の沈線と列点文が施される。
- 28、深鉢形土器 底部破片。列点が施されている。
- 29、深鉢形土器 強い波状口縁でくの字状に内折している。口縁部には沈線と刺突が施されている。頂部の内面にも刺突が施される。
- 30、深鉢形土器 弱い波状口縁で、隆線によりつまみ状の小突起をもつ。内面にも刺突列が加えられる。
- 31、深鉢形土器 波状口縁の上部に4つの窓状に穿孔された把手がついたものである。先端には刻み目状に2本の沈線が施され、口唇の外面には円形貼付文が施される。内面の穿孔脇にも貼付文が施される。



第92図 第28号住居址 出土遺物(5)

32、深鉢形土器の把手 ラッパ状に立ち上がる端部には上下2つの円形貼付文とそれをつなぐ沈線が施される。中央の孔は外面に貫通し、側面からの孔とあわせ4つの穿孔が施されている。頂部の外面にも円形貼付文がある。

33、深鉢形土器の把手 沈線と隆線を組み合わせてC字状に形づくっている。把手の頂部に円形に隆線を貼付し、左右に沈線を施している。

34、深鉢形土器の把手 32に類似するが厚みがなく環状を呈する。内面には上下2つの刺突文がある。外面は剝離が著しいが、基部の左右に一对の刺突文が施されている。

35、深鉢形土器 波状口縁の外面に橋状把手が連結したものである。把手の下位は欠損する。口唇内面に刺突文が施される。

36、深鉢形土器の把手 下半を欠損する。内面には円形貼付文が施され、内縁に沿って沈線がめぐっている。

37、注口付の浅鉢形土器 口縁部はくの字状に強く内折する。把手は橋状を呈するもの2つが結合している。1つは内折部から口唇についておりその外面には上下の刺突の間に沈線が施されている。頂部には粘土紐が貼付されている。注口は内折部よりに付されているが、環状の盛り上がりがあるだけで退化している。把手の内面にも刺突文が施される。

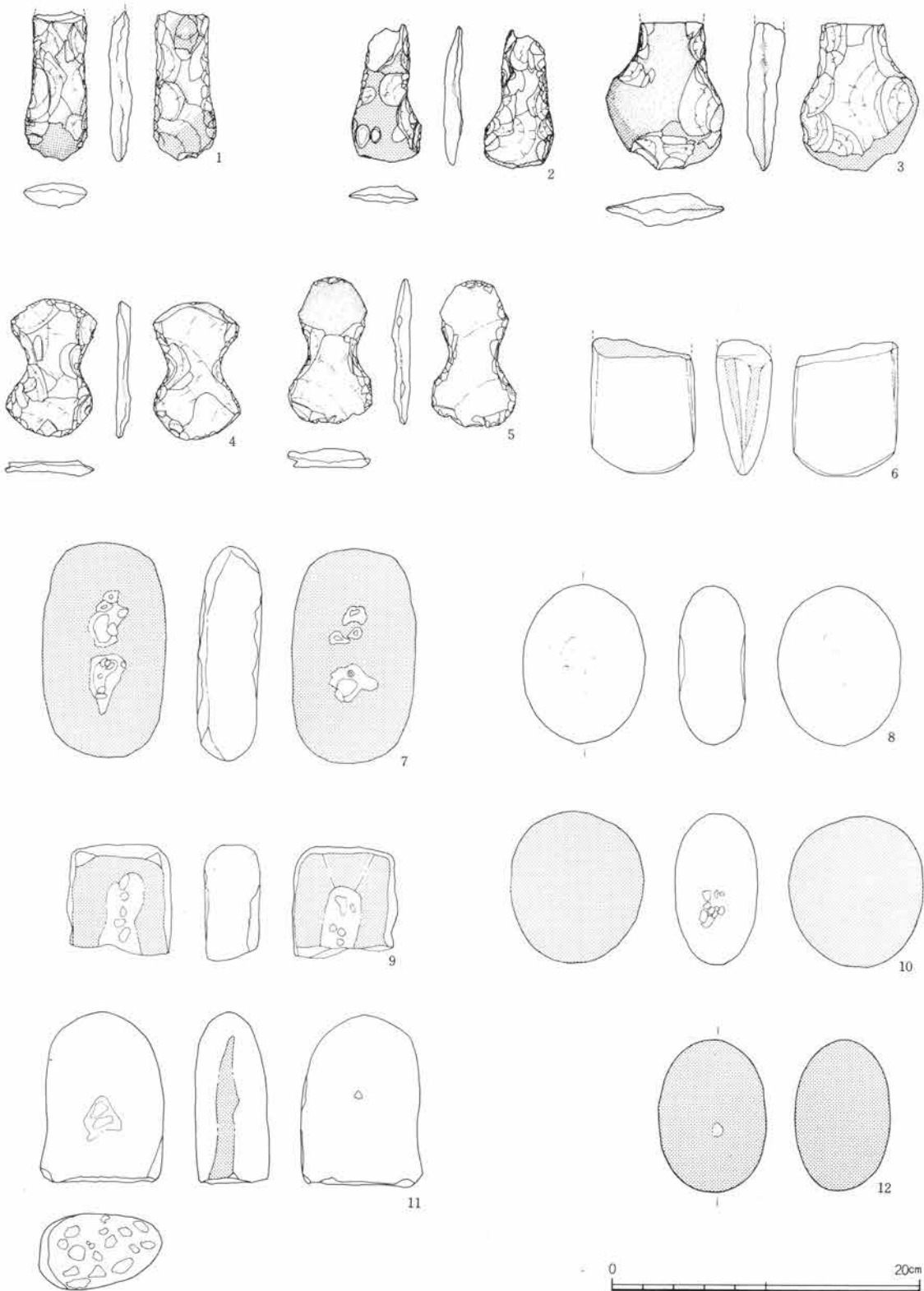
38、深鉢形土器 やや肥厚した口縁部には2条の平行沈線が施され、その上に8字文が貼付されている。

石器 (P L48・49・51・54) 1～5 打製石斧 1は短冊型、2は撥型、3～5は分銅型を呈する。1は頭部を欠損するが残長96、刃部幅40mm、重量70gを測る。石質は黒色頁岩である。器面は磨耗痕を顕著に残すが、特に刃部外面には線状の痕がみられる。

2も頭部を欠損するが、残長89、刃部幅46mm、厚さ11mm、重量50gを測る。石質は黒色頁岩。背は大部分が自然面である。刃部の磨耗痕は顕著である。

3は約 $\frac{1}{2}$ の残存である。残長95、最大幅77、装着部幅42、重量180gを測る。石質は安山岩。片側には自然面を多く残している。刃部は磨耗痕が著しい。装着部は細く刃つぶしをおこなっており断面形は楕円に近くなっている。

4は長さ88、最大幅35mm、重量60gを測る。石質は黒色頁岩。刃部の片面には自然面を残す。



第93図 第28号住居址 出土遺物(7)

5は長さ94、最大幅55mm、重量70gを測る。石質は黒色頁岩。刃部には弱い磨耗痕が残る。装着部には刃つぶしが施してある。

6、磨製石斧 破片である。残長87、刃部幅66、刃部角度23°を測る。重量は330gである。側縁部の稜と刃

第2章 検出された遺構と出土遺物

部の先端には細い磨耗痕が残る。この磨耗痕は割れ口の部分にも認められる。

7～9、凹石 7は長方形に近い楕円形を呈す。長さ136、幅81、厚さ40mm、重量670gを測る。敲打痕は両面に残る。また、この面は磨石の使用面でもあり磨耗痕を残している。

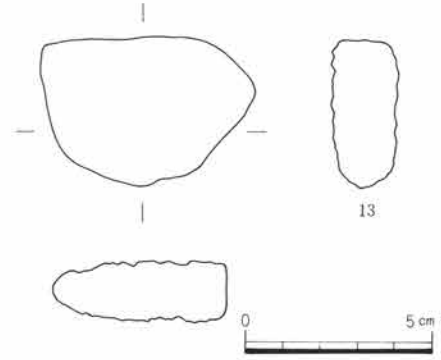
8は長さ102、幅80、厚さ44mm、重量520gを測る。石質は安山岩。敲打痕は両面に残されている。磨石としても使用されており、弱い磨耗痕を残す。

9は欠損品である。平面形は長方形に近い形である。残長71、幅68、厚さ36mm、重量200gを測る。器面の粗い安山岩である。磨石としても使用されており、平坦な面をつくりだしている。

10、12、磨石 ともに石質は安山岩である。10はやや扁平で680gを計る。側縁部には弱い敲打痕が残る。12は俵状を呈し、620gである。これは中央部に敲打による凹みが残る。

11はスタンプ形石器である。扁平な石英閃緑岩を打ち欠いてつくった面には粗い敲打痕が残る。長さ109、幅76、厚さ47mm、重量720gを測る。磨石・凹石としても使用されている。

13、軽石製品 長軸56、短軸40、厚さ12mm、重量は15gである。側面も加工している。



第94図 出土遺物(8)

第29号住居址 (第95図、P L 9)

O-31グリッドを中心に位置する。緩斜面の中位にあり、本住居址の確認面は東に向って著しく傾斜している。東側3mに第30号住居址が、北側3mに第35号住居址が近接する。

平面形は東西に長軸をもつ柄鏡形を呈すると考えられるが、張り出し部を欠失している。長軸の方位はN 66°W、等高線とほぼ直交する。

壁面は他の遺構との関係から残存状態は著しく悪くなっており、良好な南から西側にかけての残高が約40cm、張り出し部に近い部分では10～15cmである。床面は傾斜に則して張り出し部に向って下っておりレベル差は38cmになる。状態はやや踏み固められた面が全体に広がっている。

柱穴はで10本確認できた。規模、位置関係とも良好である。

炉址は主体部のほぼ中央に位置し、長円形で東西に長軸をもつ土壇状の掘り込みである。規模は径125×105、深さ49cmを測る。側壁は熱を受け焼土化している。下層には焼土を多く含む黒褐色土が10～20cm堆積していた。埋土からは同一個体の土器片(復元不可能)が多く出土している。

主体部の壁際には、小円礫を主体とした周礫が圍繞する。その幅は70cm前後、特に北側では100cmと広がっているが、他の住居址のものに比べて礫の密度が薄い。床面からの高さは約20cmと低くなっている。小円礫は床面から離れた状態のものが大半であるが、若干は床面下に埋没した状態のものも認められた。柱穴間には第28号住居址の様に明瞭でなかったが浅い掘り込みがある。ピット1と10の間には対ピットが接して存在する。2つを合わせた東西の規模は135cm、左のピットは深さ80cm、右は69cmである。

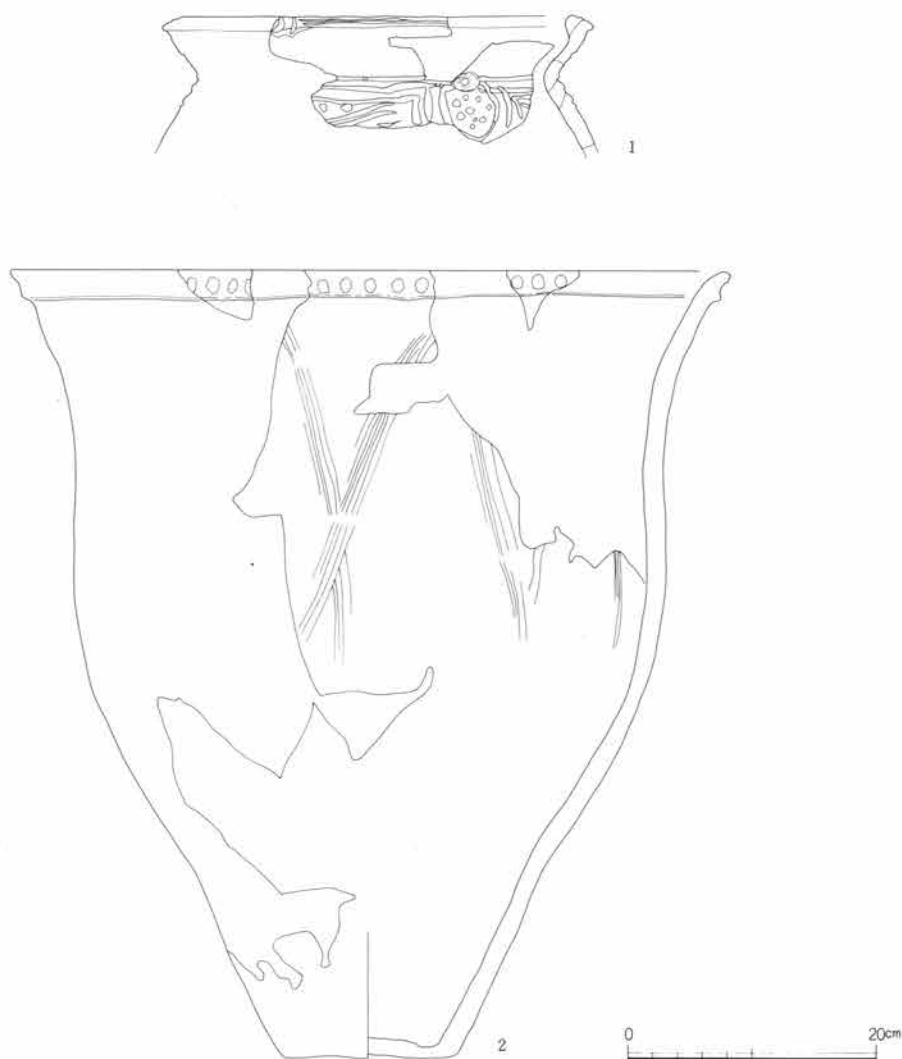
張り出し部を相定できる場所に第28号住居址と同様の礫が認められた。左側は上記のピットの掘り方内に位置する。長軸36cmの角礫、右側はピット10の東78cmにある長軸36cmの円礫である。

土器の出土量は少ない。ピット2と3の間の周礫上面、床から15cm離れて2が出土している。石器は凹石3、石錘1である。



第95図 第29号住居址平面図・断面図

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
長軸×短軸	46×44	40	40	38	36×34	45×42	42×40	42	46×45	46×40
深 さ	73	64	61	112	67	65	63	68	59	59



第96図 第29号住居址 出土遺物(1)

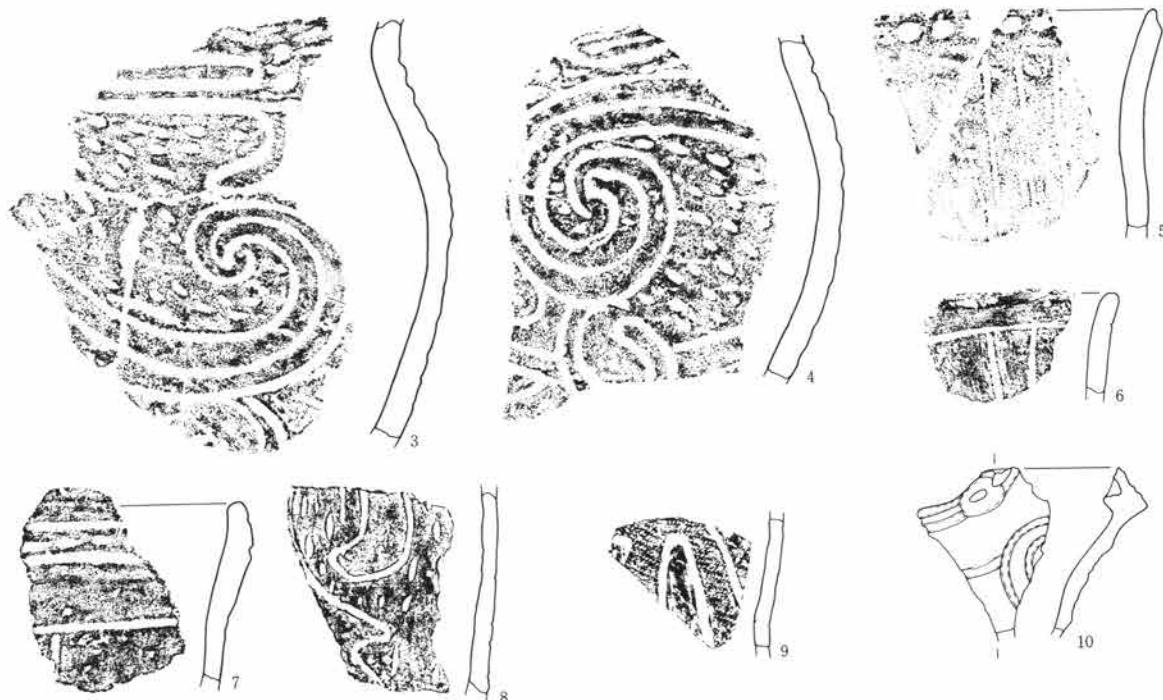
出土遺物

土器 (PL39・45・47) 1、深鉢形土器 口縁部の破片である。口唇は内側に突出し、くの字に内折する。口縁には2本の沈線がめぐっている。口縁部の外面には無文帯をもつ。胴部文様は3本1単位の沈線で描かれている。括れ部の同心円状の文様には円形の貼付文が施され、区画内には刺突文が充填される。括れ部には沈線文が横位にめぐる。

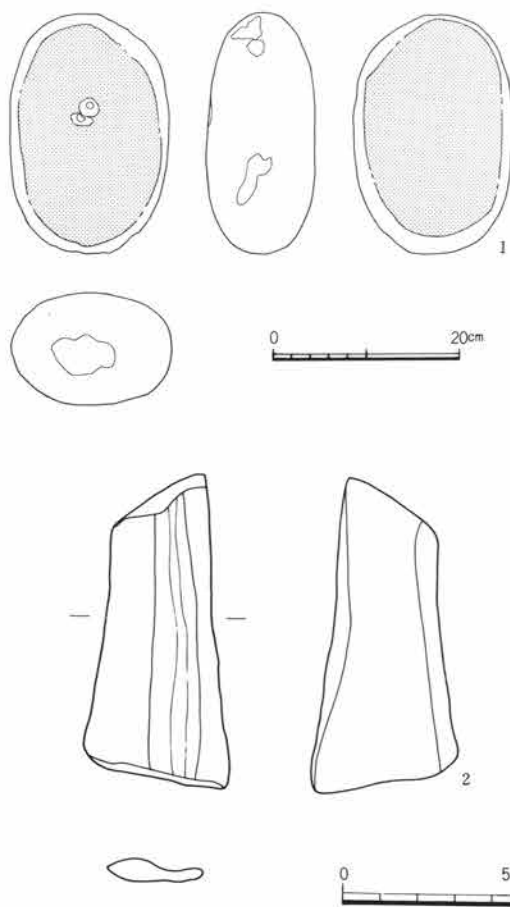
2、深鉢形土器 口縁はラッパ状に開いて立ち上がる。口縁部は肥厚し、指頭状の円形押捺文が連続して施される。胴部は上半部にのみ櫛歯状工具による条線をX字状に施文している。

3、深鉢形土器 4と同一個体である。括れ部には3本の平行沈線が施され、縦位に刺突文が並ぶ。横位の沈線の下には、3本の沈線による渦巻文が施され、その区画外には列点文が充填されている。4は渦巻文が反転している。

5、深鉢形土器 口縁部の破片である。口縁はやや肥厚し、指頭状の円形押捺文が連続して施される。胴部には3本1単位の懸垂文が施される。



第97図 第29号住居址 出土遺物(2)



第98図 第29号住居址 出土遺物(3)

6、深鉢形土器 口縁部には沈線が横位にめぐり、これから沈線が懸垂している。

7、深鉢形土器 口縁部には沈線による区画文があり、その区画内に刺突文が施されている。区画文の下位には沈線が施されており、区画文が施されていると思われる。

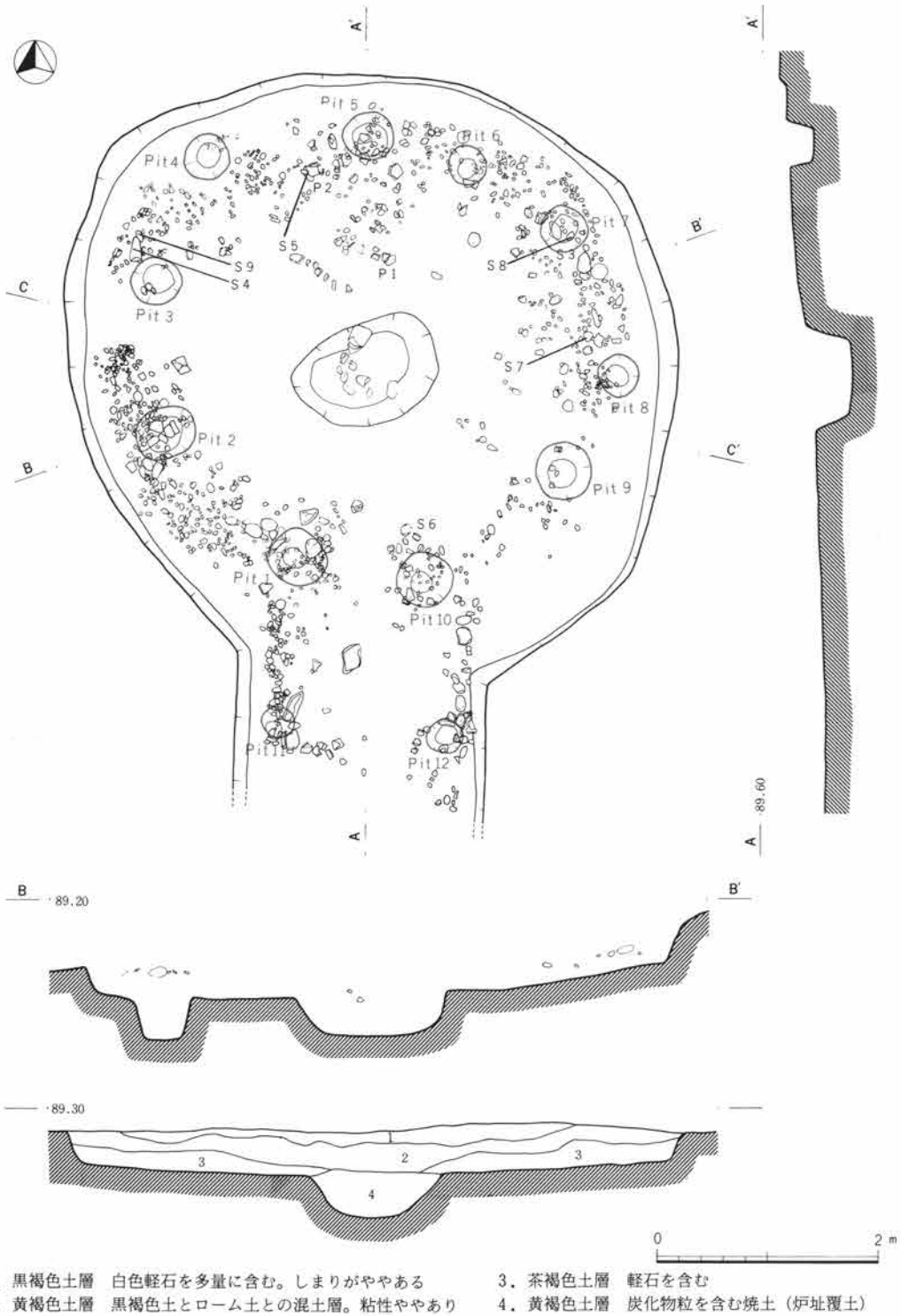
8、深鉢形土器 胴部破片である。沈線による区画文が施され、その区画内に列点文が施されている。

9、深鉢形土器 胴部破片である。沈線による区画文内にLR縄文が充填されている。

10、深鉢形土器 口縁部は波状を呈し、端部は内折している。波頂部には把手がつくと思われるが欠損している。口縁部には沈線が、その上に円形貼付文が施される。

石器 (PL50・54) 1、磨石 長さ126、幅86、厚さ56mm、重量1,010gを測る。石質は閃緑岩。凹石としても使用されており、側縁部には弱い敲打痕が認められる。

2、石錘 長さ83、最大幅39、厚さ6mmを測る。重量24g。石質は黒色頁岩である。片側の平坦面に細長い溝状のくぼみがある。長軸の両端は割れ口であるが底辺の割れ口には磨耗痕を残す。



第99図 第30号住居址平面図・断面図

第30号住居址（第99図、P L 9）

S-31グリッドを中心に位置する。緩斜面の東端、地形の変換点にある。第29号住居址の東3mに近接するが、第29号住居址の張り出し部が不明確なため重複関係は不明である。

平面形は東西に長軸をもつ柄鏡形を呈すると思われるが張り出し部は基部を残して欠失する。これは、第

10号溝と重複すること、遺構確認面が東に下がっていること、埋土が地山に類似することなどに原因する。長軸の残存長は6.8m、短軸5.42m、張り出し部の幅2.28mを測る。長軸の方向はN49°Wである。

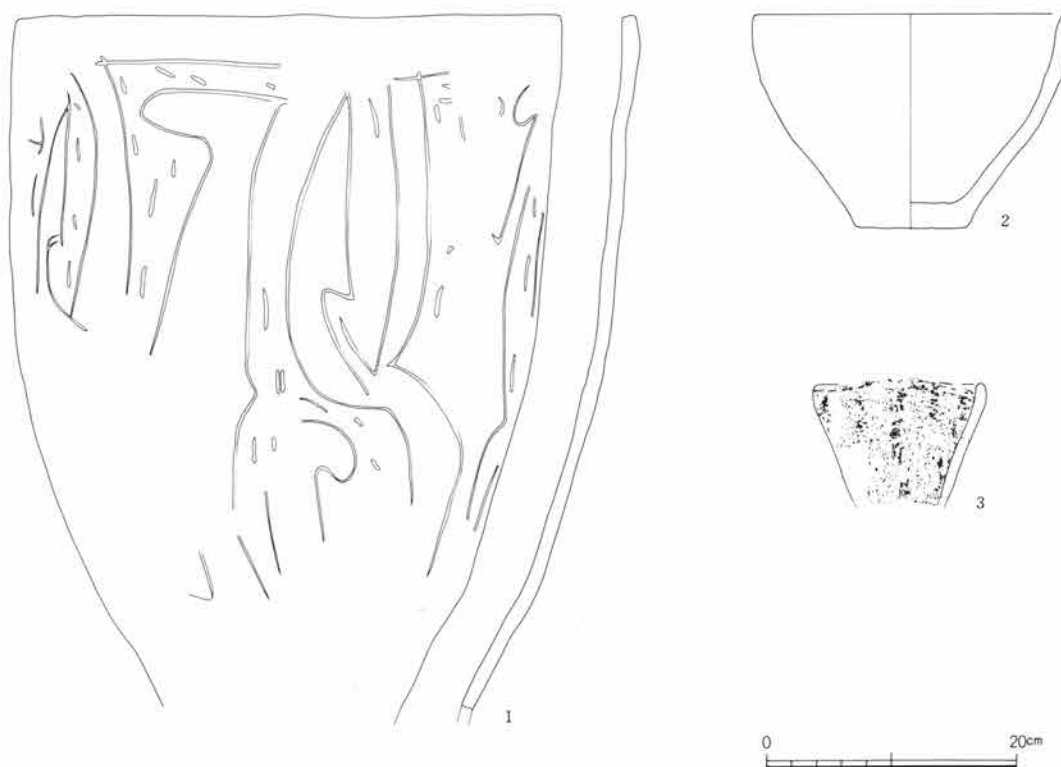
壁面の残存状態は他遺構との関係から著しい差がある。南西部分の残高は48cm、張り出し部の基部は30cmを測る。床面は茶褐色土中につくられており、特に堅い面は見られなかった。地山の傾斜と関係すると思われるが、張り出し部に向って下がっており、レベル差は36cmである。

柱穴は主体部に10本、張り出し部に2本確認できた。張り出し部のピット11・12は左右対称の位置にありやや小規模であるが良好な掘り方をしている。ピット1と10はいわゆる対ピットと思われる。

炉址は主体部の中央に位置し、東西の長軸132、短軸90cmの土壇状の掘り込みである。側面は著しく焼けており、深さ37cmの掘り方の埋土中には10～15cmの焼土が堆積していた。

主体部には周礫が認められほぼ全周している。圍繞の幅は状態の良好なピット1～2周辺で50cmである。礫の最高位と床面との比高は約50cmである。床面に密着しているものは少ない。小円礫が主体となっているが、土器片、石器も多く含まれている。ピット1から張り出し部の壁面に沿っては周礫が直線的な配列を示しており、これは反対側のピット10にも同様の傾向が認められる。土器は1が床上10cmから出土した。石器は打製石斧2、凹石12、多孔石1、石錘2、軽石製品1、表面に研磨を受けている石製品1が出土している。

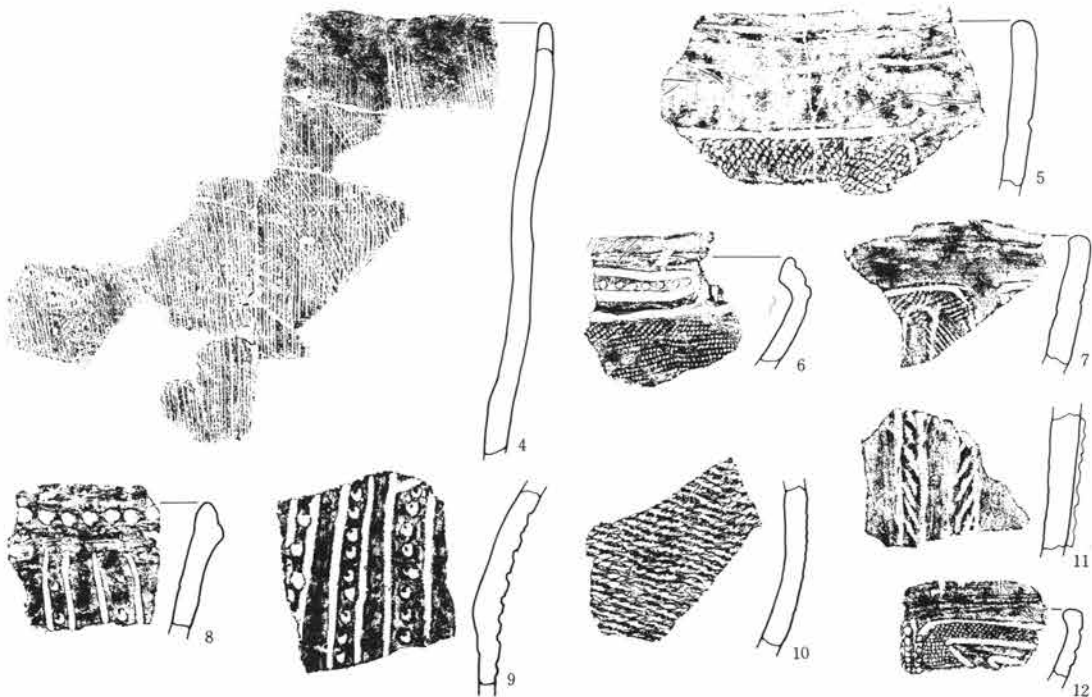
ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長軸×短軸	54×51	54×45	47×41	42×40	46×42	37×34	42	37	50	50	28×26	33×30
深さ	50	33	50	37	24	21	51	40	49	118	50	50



第100図 第30号住居址 出土遺物(1)



第101図 第30号住居址 出土遺物(2)



第102図 第30号住居址 出土遺物(3)

出土遺物

土器 (P L 38・45) 1、深鉢形土器 胴部には沈線によりJ字文の反転したM字状の区画文が描かれ、その区画内に列点文が充填されている。

2、浅鉢形土器 底径が小さく口縁部はやや内彎ぎみに立ち上がる。口唇は尖る。無文である。

3、深鉢形土器 小型である。胴部には6本の楕歯状工具による条線が波状に懸垂する。

4、深鉢形土器 12本の楕歯状工具による条線を縦位に施している。

5、深鉢形土器 口縁部に無文帯をもち、胴部は沈線の区画文内にL R縄文を充填している。

6、深鉢形土器 口縁部はやや内折し、沈線区画文内に棒状工具による列点文が施される。胴部にはL R縄文が不規則に施文される。

7、深鉢形土器 口縁部に無文帯がめぐり、胴部には沈線区画文内にL R縄文が充填されている。

8、深鉢形土器 口縁部が断面三角形に肥厚し、段をなしている。また、この上には円形の刺突文が連続する。胴部には沈線による懸垂文が施され、その間に列点文が加えられる。

9、深鉢形土器 胴部破片で、沈線が狭い間隔で垂下し、その間に円形竹管による列点文が施される。

10、深鉢形土器 胴部破片。L R縄文が縦位に施されている。

11、深鉢形土器 胴部破片。懸垂する2本の隆帯には棒状工具による刻み目が矢羽根状に施されている。

12、深鉢形土器 口縁部は内側に突出している。沈線による区画文内にはL R縄文が充填されている。また、垂下する沈線には刺突文が連続して施される。

石器 (P L 48・50・52・53) 1、2 分銅型の打製石斧 長さ120、最大幅61、最小幅32、厚さ16mm、重量140gを測る。石質は黒色頁岩。片面には自然面を部分的に残す。刃部に弱い磨耗痕を残す。

2は長さ96、最大幅50、最小幅29、厚さ9mm、重量60gを測る。石質は安山岩。装着部の側縁部は刃つぶしが施されている。片面には自然面を残すが両面とも磨耗が著しい。

3、多孔石 長軸203、最大幅134、厚さ98mmの安山岩円礫である。両面に凹みがある。また器面は磨耗し

第2章 検出された遺構と出土遺物

ているようにも思われる。

4、凹石 磨石に併用している。長さ94、幅77、厚さ52mm、重量520gを測る。石質は安山岩。敲打による凹みは浅い。側縁部にも敲打痕が認められる。

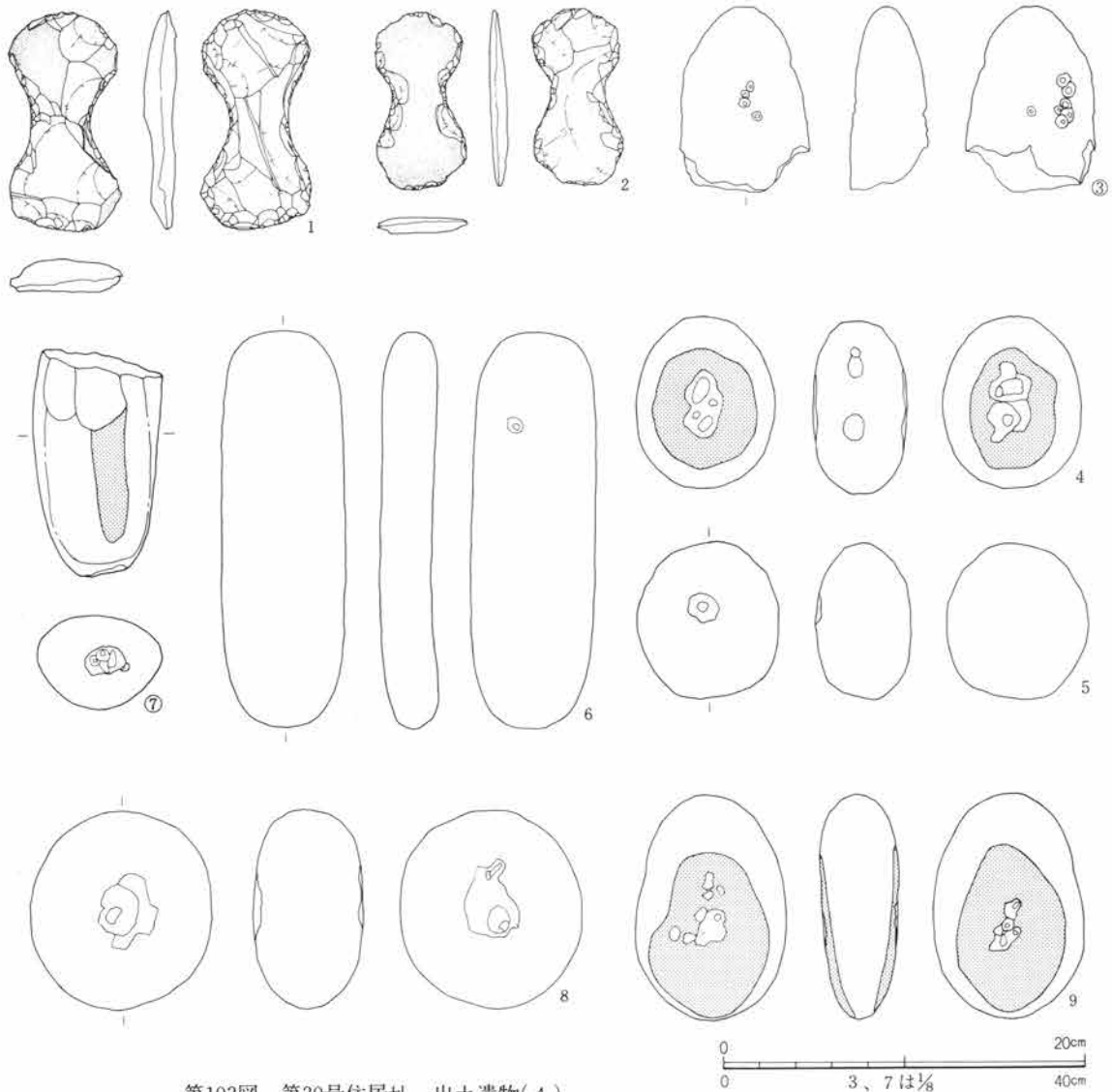
5、凹石 これも磨石に併用している。長さ85、幅79、厚さ52mm、重量は530gを測る。石質は安山岩。長軸の先端は敲打に使用している。両面とも磨耗が著しい。

6、磨石 長軸216、幅69、厚さ29mm、重量650gを測る。石質は安山岩。磨面はやや彎曲しているが、全面が磨耗している。反対の面には敲打による凹みがある。

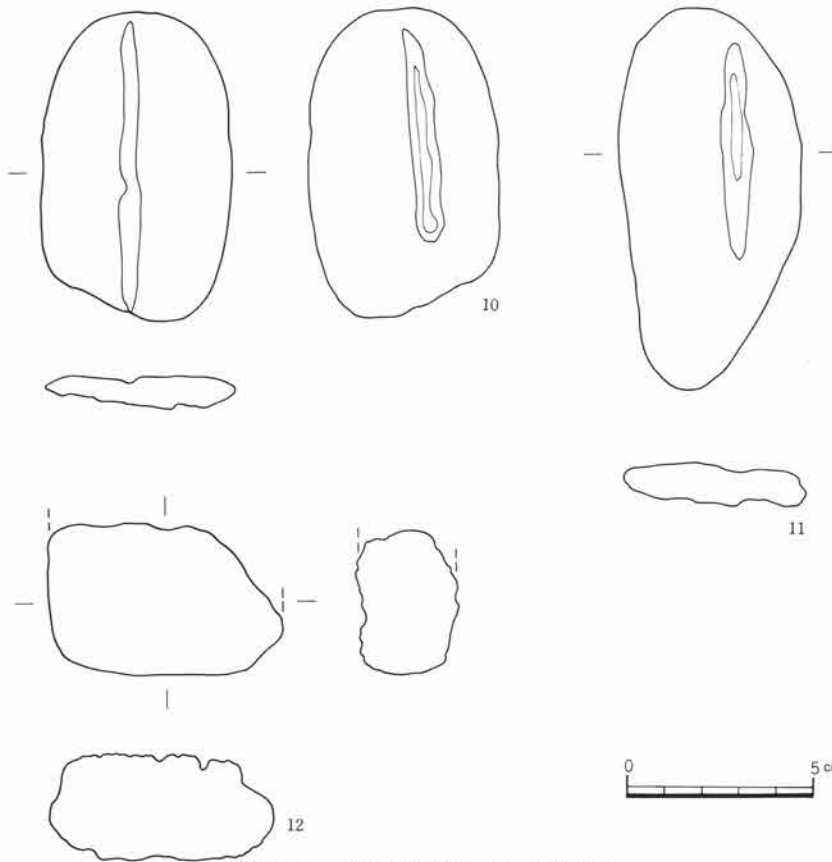
7、閃緑岩から成る円礫 中位で割れているものであるが器面には磨耗痕を顕著に残している。また先端は敲打をうけて潰れている。

8、凹石 長さ109、幅100、厚さ60mm、重量800gを測り円形を呈す。石質は安山岩。

9、磨石 凹石に併用している。長さ122、幅84、厚さ43mm、重量620gを測る。扁平な安山岩。両面の敲打痕の凹みは浅い。



第103図 第30号住居址 出土遺物(4)



第104図 第30号住居址 出土遺物(5)

10、11、石錘 10は長さ82、幅50、厚さ8mmを測る。断面の扁平な小円礫である。表裏の平坦面の石の目にそって溝状の磨耗痕を残す。重量66g。石質は緑色片岩。11は長さ100、幅50、厚さ10mmを測る。片面に痕跡を残す。重量88g。石質は緑色片岩である。

12、軽石製品 欠損品である。幅62、厚さ26mmを測る。重量21g。残存面は全て平滑である。

第31号住居址 (第105・106図、P L10)

T-40グリッドを中心に微高地上に位置する。北側の第32号住居址の張り出し部を切っている。東側にも柄鏡形の第33号住居址があり軸線の方向がほぼ一致する。実質的には重複関係にある。

平面形は柄鏡形を呈するが、主体部、張り出し部の西壁、張り出し部先端は第4・6号溝との重複により欠失する。残存部の計測値は長軸7.96m、短軸5.68mである。長軸の方位はN20°30'Eである。

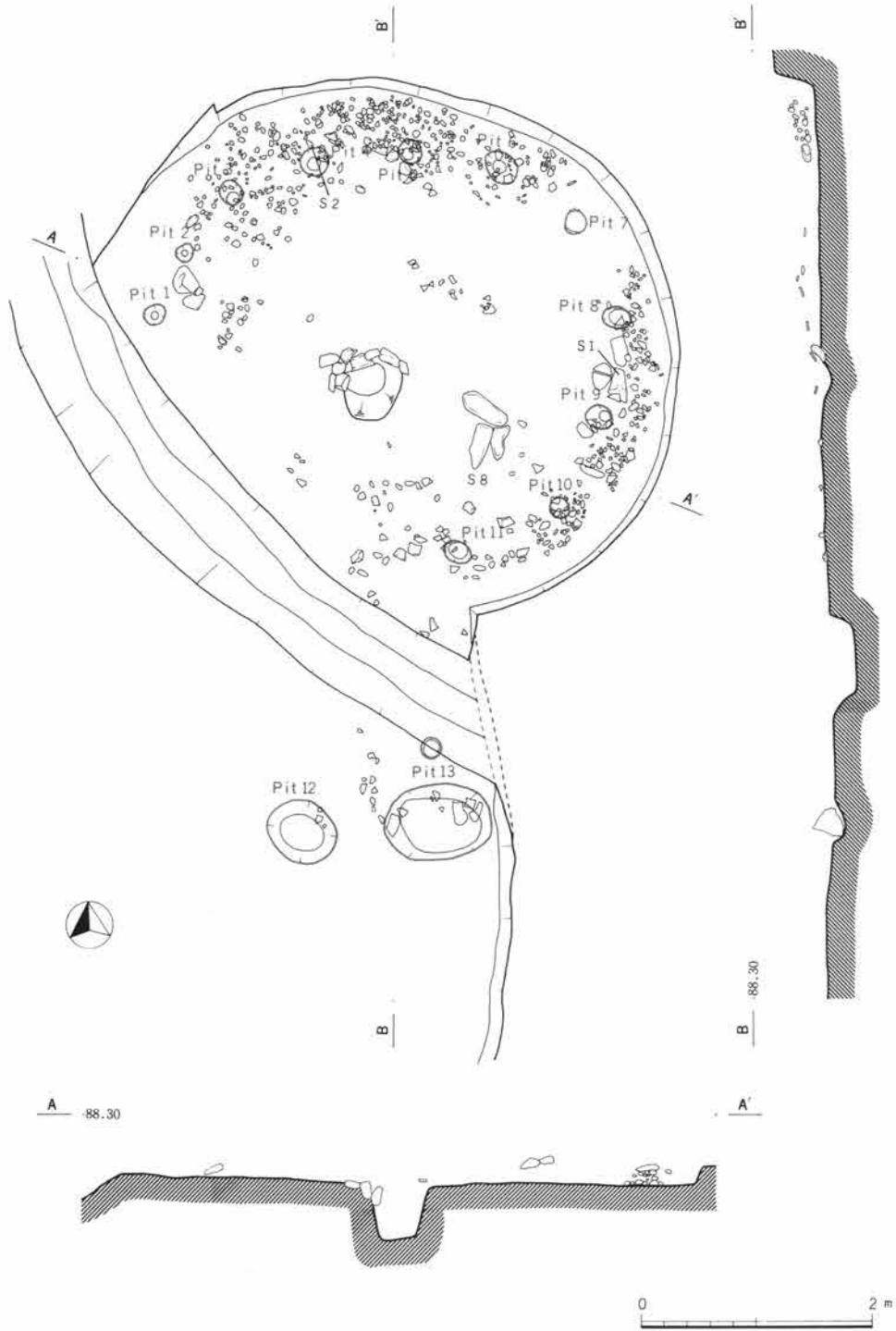
壁面は黄白色砂壤土を掘り込んで構築されており、残存壁高は、主体部で30~35cm、張り出し部で15cmである。床面も黄白色砂壤土中につくられており堅く踏み固められた面は見られなかった。

ピットは主体部に11本検出された。間隔の狭い状態で配列される。幾つかを除いて良好である。張り出し部には1本確認できた。

炉址は主体部のほぼ中央にある。南北60、東西52cmの石囲い炉であるが、北側を除いて石組が崩落しており、残存部分も炉内に傾いていた。石皿、石棒が利用されていた。壁はあまり焼けていなかった。

主体部の壁際には周礫がある。東側の残存状態は悪い。小円礫と黄白色壤土が混土状態をなしてつくられており、大部分の礫が床面から離れているが、ピット3~6の間の床面直上の礫は壁面の彎曲に側した配置が認められる。

土器は大部分が小破片であり、周礫と炉址の間の埋土中から出土している。石器は打製石斧、磨製石斧各1、小型磨製石斧1、凹石6、石匙1、表面の研磨されている円礫がある。



第105図 第31号住居址平面図・断面図

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長軸×短軸	20×16	14	22×18	25	21×19	30×24	22×17	24×18	22	20	23×20	57
深さ	23	17	37	42	40	18	31	41	34	16	47	27

出土遺物

土器 (P L46) 1、深鉢形土器 沈線による区画文が施されている。

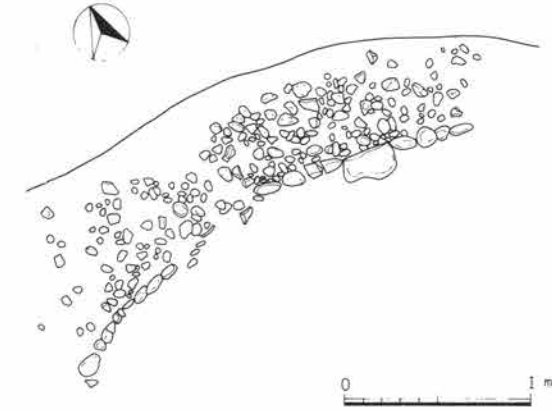
2、深鉢形土器 波状口縁を呈する。沈線による区画文が施され、区画中にはLR縄文が充填される。

3、深鉢形土器 波状口縁を呈する。沈線による区画文内にLR縄文が充填される。

4、深鉢形土器 沈線により区画文が施され、区画中にLR縄文が充填される。

5、深鉢形土器 口縁部破片で、沈線により区画文が施され、区画中にはLR縄文が充填される。

6、深鉢形土器 口縁部には幅広い無文帯がめぐり



第106図 第31号住居址平面図

その下には微隆起帯が横位にめぐり、また、微隆起帯の途中にはコブ状に突起している。胴部にはLR縄文が縦位に施されている。

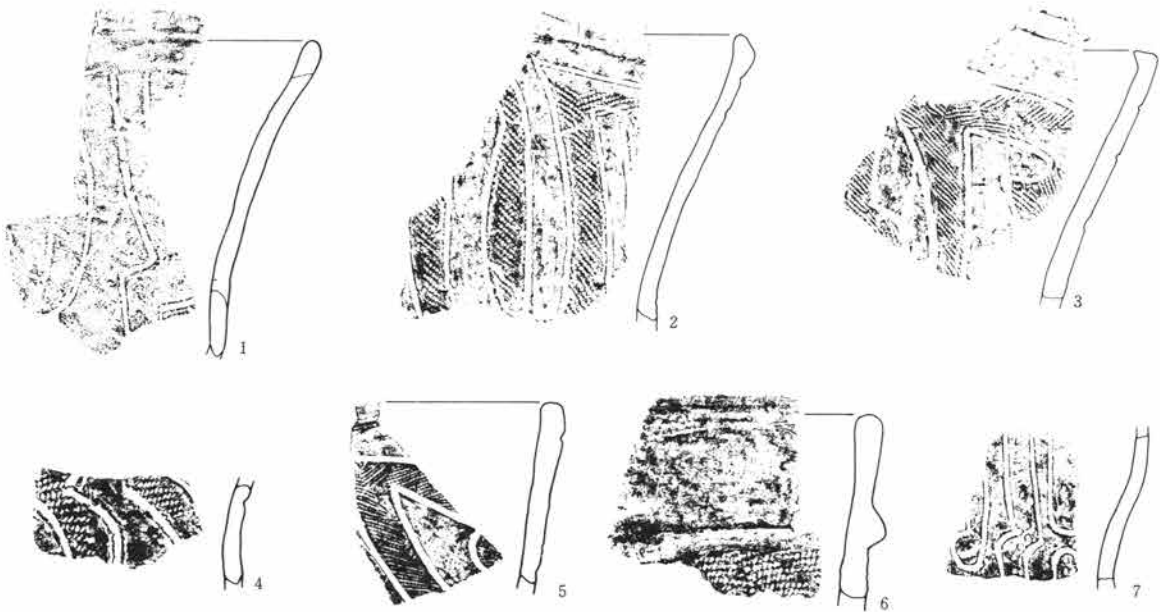
7、深鉢形土器 胴部破片。中位で弱く括れる。沈線区画の中には列点文が施される。

石器 (P L48・51・52・53・54) 1、打製石器 欠損品である。残長91、最大幅82mmを測る。重量は210gである。石質は安山岩。使用による磨耗痕はほとんど認められない。

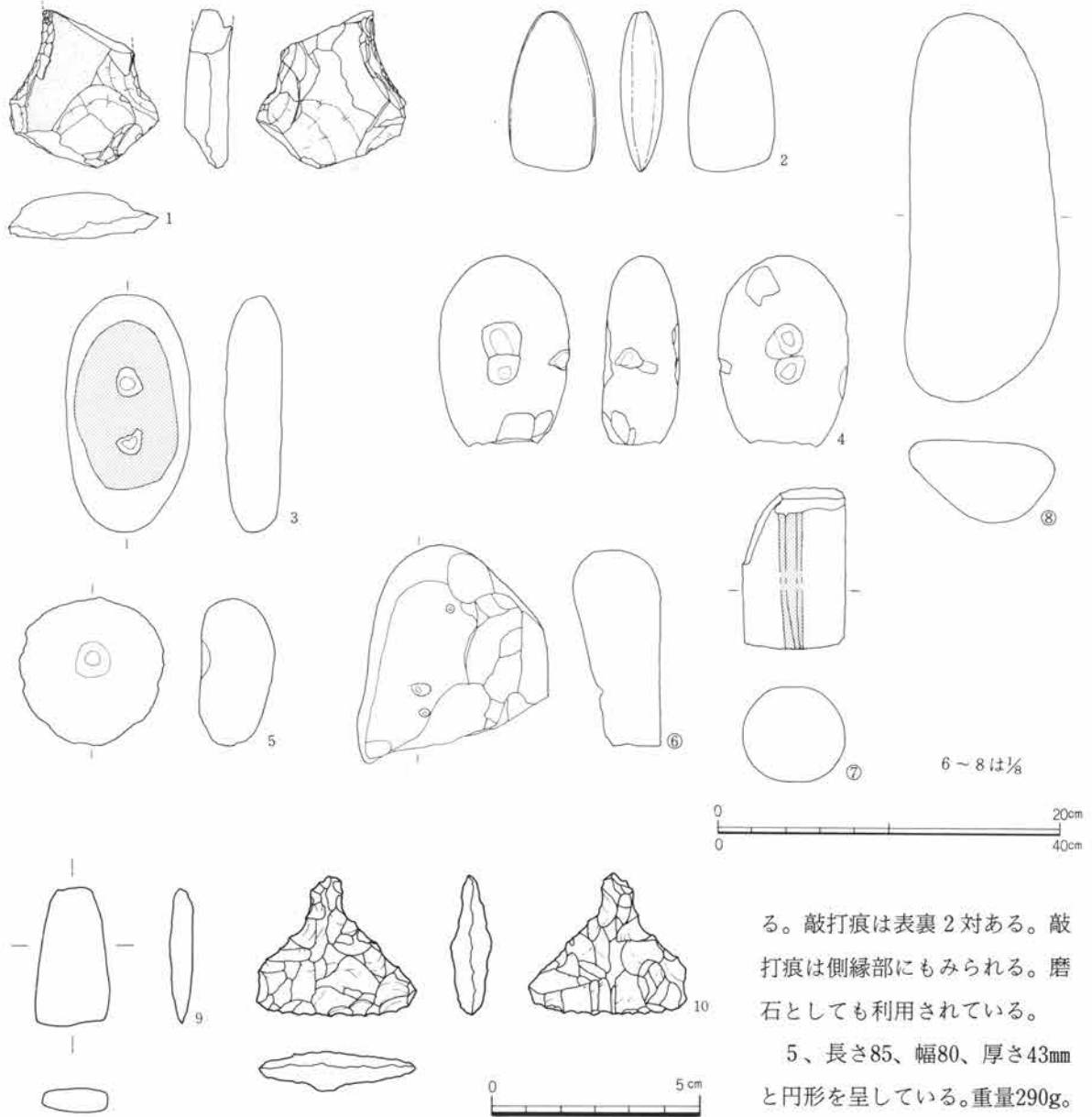
2、磨製石斧 長さ92、最大幅49、最大厚25mm、刃部角度31°を測る。重量200g。石質は輝緑岩である。刃部は片べりしている。頭部先端には敲打痕が残る。

3、磨石 長さ137、幅75、厚さ34mmの楕円形を呈する。重量は530g、石質は安山岩である。凹石としても併用されており、弱い敲打痕を残す。

4、5、凹石 4は長さ108、幅75、厚さ44mmを測り、楕円形で扁平である。重量500g、石質は安山岩であ



第107図 第31号住居址 出土遺物(1)



第108図 第31号住居址 出土遺物(2)

る。敲打痕は表裏2対ある。敲打痕は側縁部にもみられる。磨石としても利用されている。

5、長さ85、幅80、厚さ43mmと円形を呈している。重量290g。石質は粗い安山岩である。

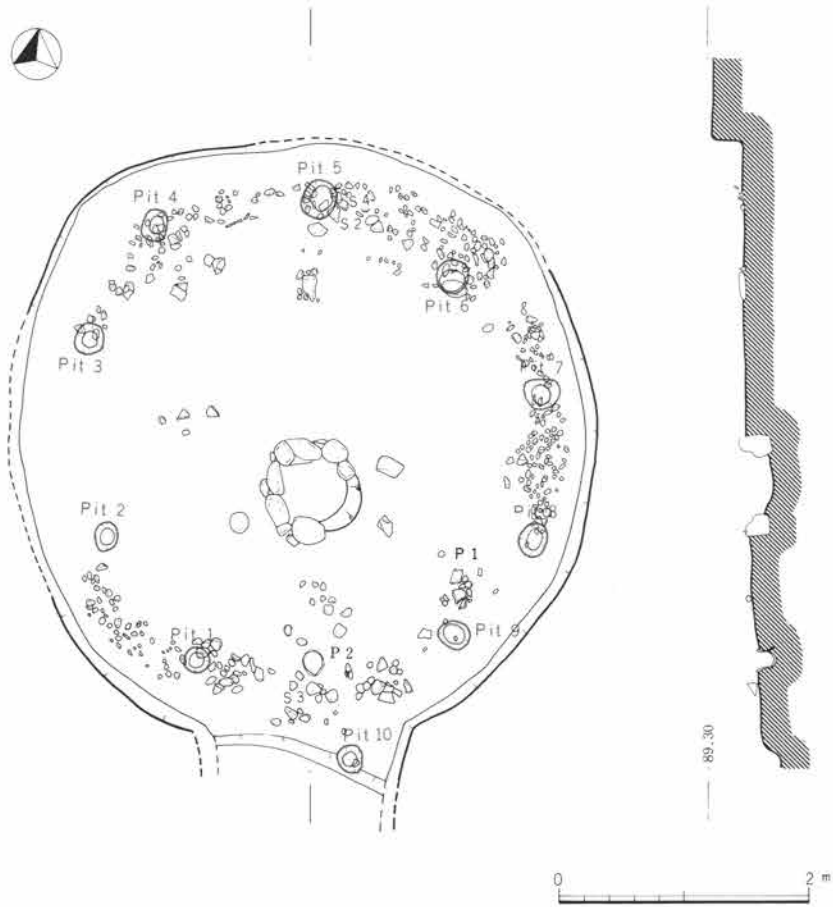
6、安山岩円礫の欠損したものである。長さ228、最大幅208、厚さ84mmを測る。片面には多孔石と同様の凹みがある。また両面とも磨耗痕が認められ、石皿として使用されていたと考えられる。

7、石棒 欠損品である。残長185、最大径120mm、重量3,980gを測る。石質は安山岩。側面の対応する部分にフラットな面を持つ。図示した上端の割れ口は細い調整が加えられ、稜と割れ口の面は磨滅している。

8、長さ445、最大幅173mmの石英閃緑岩の自然礫である。重量は11,500gを測る。短軸の断面形は三角形を呈するがそのうち一番広い面には磨耗痕が残っている。

9、磨製石斧のミニチュアである。長さ40、最大幅21、厚さ7mm、重量10gを測る。石質は流紋岩と思われる。

10、横型の石匙 一部分を欠損している。長さ40、幅47、最大厚12mmを測る。重量は14g。石質は安山岩である。平面形は三角形である。刃部は直線的で先端はやや丸味を帯びる。剝離面は磨耗している。



第109図 第32号住居址平面図・断面図

第32号住居址 (第109図 P L10)

第31号住居址の北側、S-42グリッドを中心に位置する。

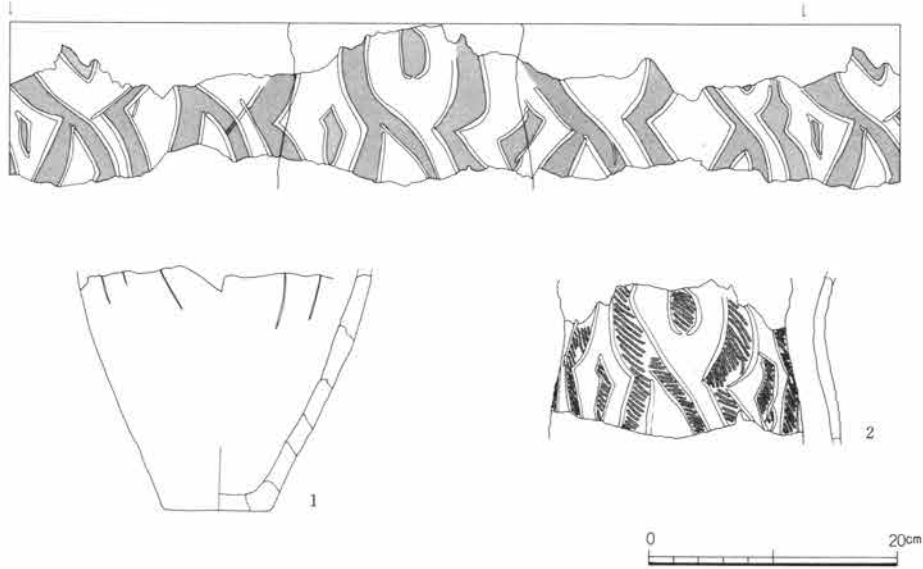
平面形は柄鏡形を呈するが、張り出し部は大半を欠失する。長軸の残存長は5.05m、短軸4.68mを測る。長軸の方位はN 3°20'Wで、第31号住居址のそれとほぼ一致する。遺構確認面が低かったため、壁面の残存状況は良好でない。残存壁高は20cm前後である。床面は黄白色砂壤土中につくられており、張り出し部に向かって15cm下がっている。全体的にやや固い面であった。

主体部には柱穴が9本ある。掘り方の規模がやや小さいが、相互の位置関係は良好である。張り出し部の基部からも1本検出した。

炉址は中央やや南よりに位置する石囲い炉で、内幅50cm、深さ20cmの整った方形を呈する。東壁は石組が欠ける。炭化物の堆積が認められた。

炉址の南、ピット1と12を結んだ線上の中間に埋甕がある。小型の深鉢の胴部(第110図2)を埋設している。

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
長軸×短軸	21	23×18	24	27×21	30×28	27×26	29×25	28×24	26×23	22×20
深 さ	37	33	40	38	48	59	61	58	54	37



第110図 第32号住居址 出土遺物(1)

主体部の壁際に小円礫を主体とした周礫が圍繞するが残存状態が極めて悪い。幅40~60cmで、床面をやや掘り込んでいる部分もあるが大部分の礫は床面から離れている。

遺物は大部分が埋土中からの出土である。土器の1は床面上8cmから出土した。石器は周礫内を含めて凹石5、多孔石2が出土している。

出土遺物

土器 (P L39・46・47) 1、深鉢形土器 胴下半部のみ残存している。底径は9cmである。全体の器形は不明であるが、胴部であまり括れを持たない器形と思われる。断面円形の工具による沈線が、胴下半まで施文されている。器面の内側は良好に研磨されている。

2、深鉢形土器 胴部中位が輪切り状に残存している。胴部中位で緩く括れ、胴下半部でやや膨らみを持つ器形と思われる。文様はJ字文を反転させたM字状の区面文を4~5単位施し、その中にLR縄文を充填している。また、縄文を施文したためにつぶれた沈線を、再度描き直す「なぞり」も部分的に見られる。沈線文は、断面が円形状の工具によって施文されている。器面は内外面ともスス状の炭化物が付着している。

3、深鉢形土器 胴部には沈線による区画文が施され、区画文中にLR縄文を充填している。

4、深鉢形土器 5の胴部破片と同一個体である。沈線による区画文中にLR縄文を充填している。

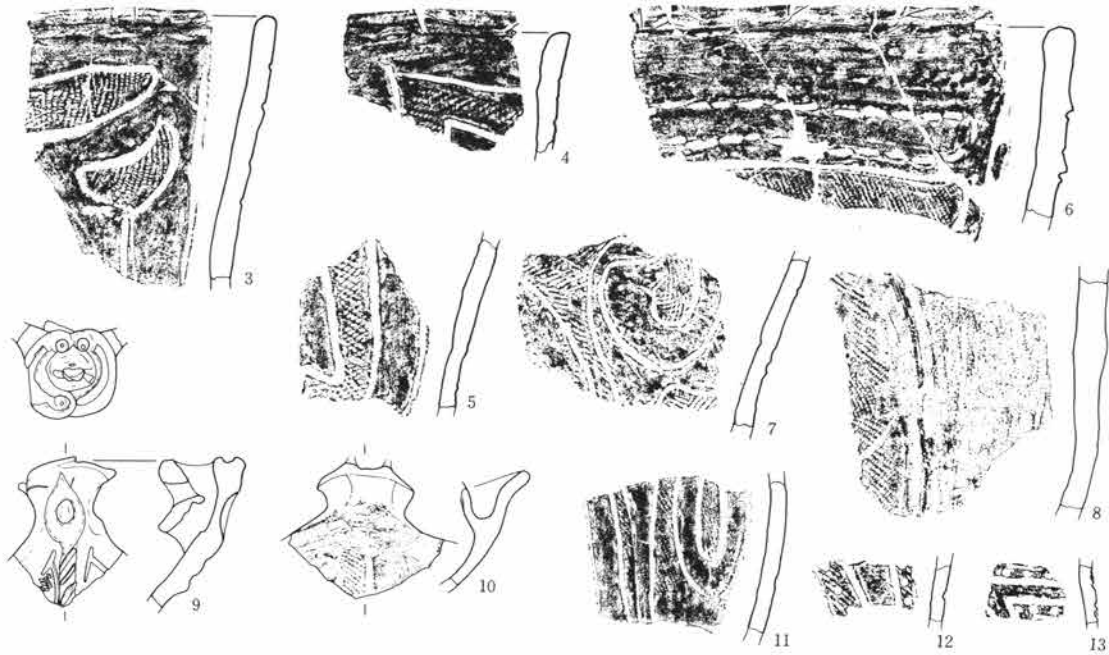
6、深鉢形土器 口縁から垂下する隆帯が施され、これと横位の2本の微隆起帯により帯状の区画が構成されている。区画の内側には微隆起帯に沿って列点がめぐつている。また、下段の微隆起帯の下には、これに沿って沈線による区画文が施され、RL縄文が充填されている。

7、深鉢形土器 胴部破片である。沈線の区画文中にLR縄文が充填されている。

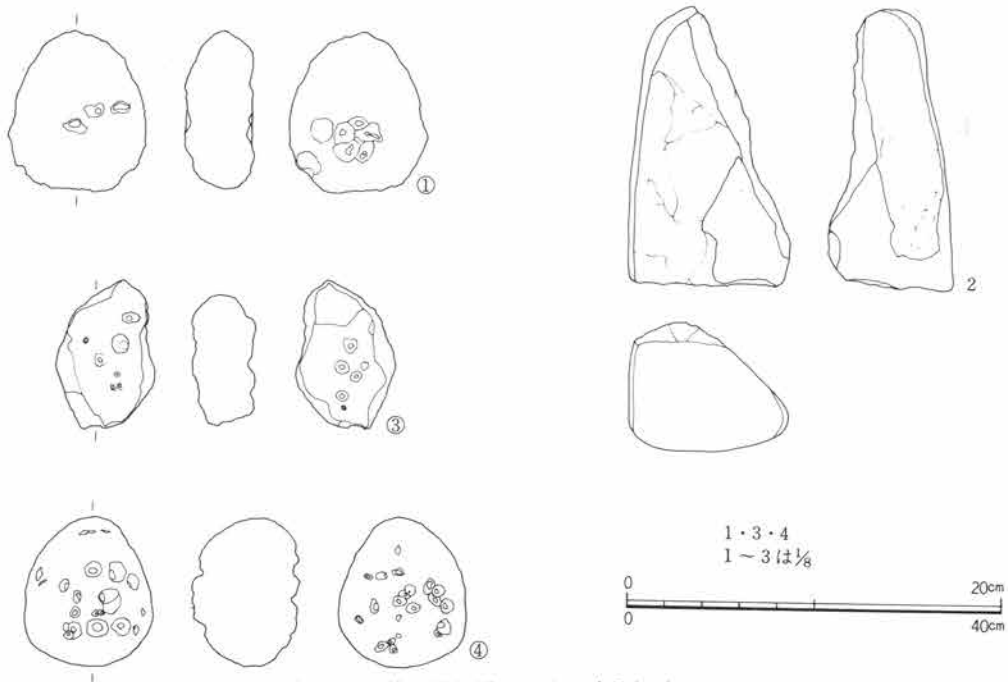
8、深鉢形土器 垂下する微隆起帯により区画文が施され、区画内にはLR縄文が充填されている。

9、深鉢形土器 口縁部の把手である。筒状を呈し、先端は沈線と刺突によりC字状文を重ねあわせたような文様となっている。外面には隆帯を貼付し、棒状の工具により刻み目が施されている。隆帯の両側には沈線による区画文が施され、LR縄文が充填される。また、側面には3つの窓状の穿孔が施されている。

10、深鉢形土器 口縁部の把手である。ラッパ状を呈するが先端は欠損する。外面には沈線による区画文が施され、区画文中にLR縄文が充填される。



第111図 第32号住居址 出土遺物(2)



第112図 第32号住居址 出土遺物(3)

11、深鉢形土器 胴部破片。沈線の区画文中にLR縄文を充填している。

12、深鉢形土器 沈線による区画文中にL縄文を施している。

13、深鉢形土器 沈線による区画文中にLR縄文を充填し、区画外に棒状工具による刺突文を施す。

石器 (PL51・52) 1、凹石 長さ84、幅70、厚さ35mmの安山岩から成る。重量220gを測る。

2、スタンプ型石器 長さ146、最大幅85、厚さ65mmを測る。重量は960g。石質は石英閃緑岩である。長円形の円礫の先端付近の自然面を打ち欠き握る部分をつくり出している。

3・4、多孔石 3は長軸115、最大幅98、厚さ62mmの角礫で上下の自然面に凹みがある。重量1,270g。石

第2章 検出された遺構と出土遺物

質は安山岩である。表面は火熱を受け変質している。

4 は一部欠損するが、長軸159、短軸131mmのやや扁平な球状を呈する。重量1,730gを測る。石質は比重の軽い安山岩である。

第33号住居址 (第113図、P L11)

U-40グリッドを中心に位置する。西側の第31、32号住居址と近接する。

平面形は長柄の柄鏡形を呈し、長軸9.16m、短軸5.32mを測る。張り出し部は中程で第4号溝と重複している。先端でやや幅を増し、1.98mである。長軸の方位はN17°Eである。壁面は黄白色砂壤土を掘り込んでい。残存壁高は平均25~30cmであった。床面は特に踏み固められた痕跡は認められなかった。主体部の床面は周壁から炉に向かって播鉢状に傾斜する。張り出し部は先端に向かって緩やかに傾斜する。

柱穴は埋土と地山の色調が類似し検出が困難であったが主体部で9本、張り出し部で3本確認できた。主体部のそれは壁面に近接してめぐっており、シンメトリーの位置関係にある。

炉址は中央部のやや張り出し部よりに位置する。深鉢の上半部(第114図6)を利用した埋甕炉である。径87、深さ32cmを測る。炉壁はあまり焼けていない。

張り出し部のほぼ中位、やや左壁よりに埋甕がある。半完型の深鉢(第115図7)であるが第4号溝により上半部を欠失する。

主体部には周礫が圍繞する。主体をなす小円礫は黄白色砂壤土と混土状態をなし、大部分が床面から遊離している。西から北壁にかけての残存状態が良好であった。接続部周辺には石棒状の円礫が含まれていた。

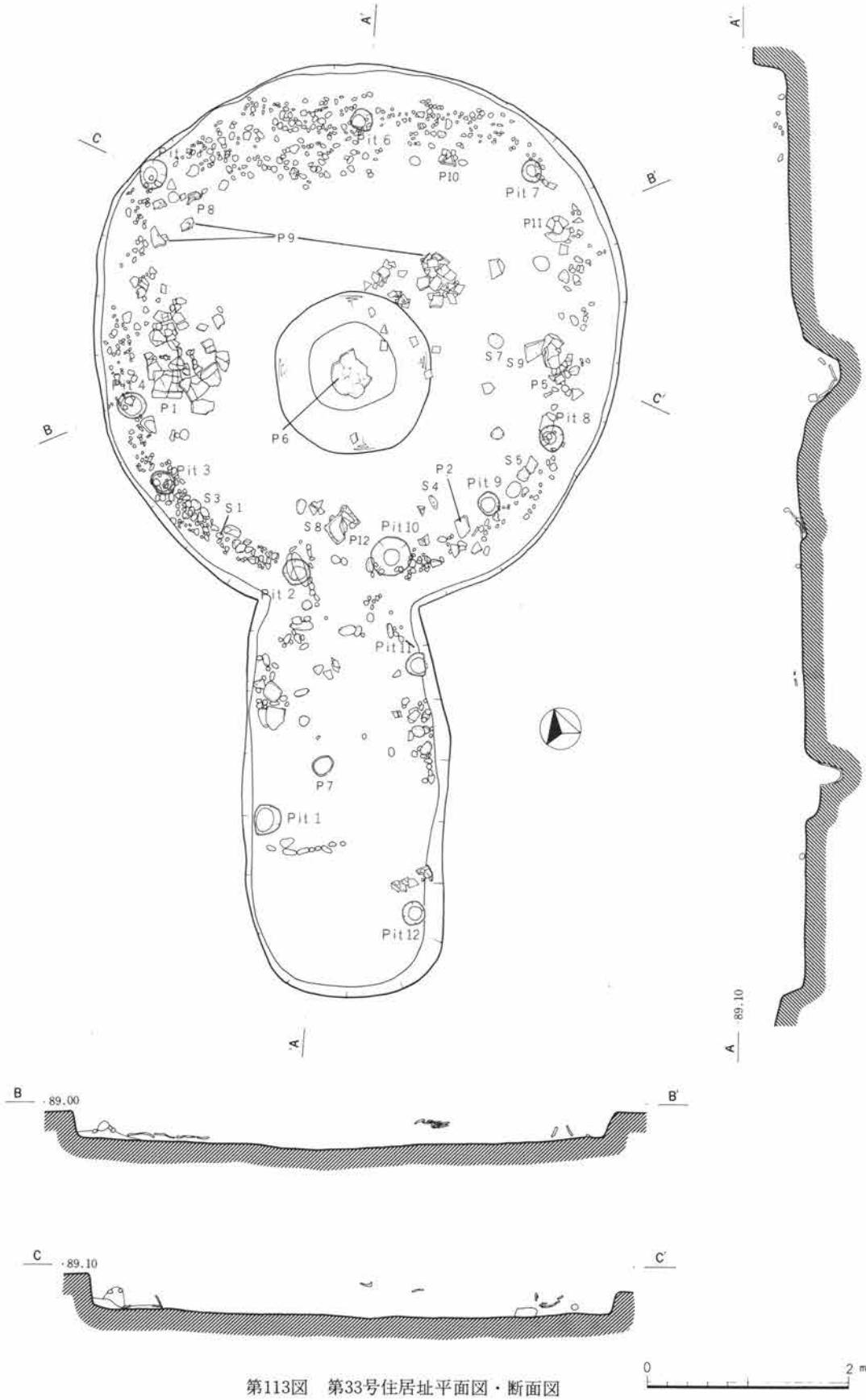
埋土はほぼ2層に分けられ、上層の黒褐色土は主体部中央にレンズ状に堆積、炉址の埋土上層にも入りこんでいる。下層は地山に類似した黄白色土である。

出土遺物の中で完型、半完型に復元できた土器は11個体、これと炉址と張り出し部の埋甕が加わる。第114図1は炉址の東側、周礫との間に横転した形で壊れていた。床面から4cm離れて出土した。接続部近くからは12が出土している。12・5・8は床面直上の出土である。炉址の北東から9が、横転した形で出土している。これは床面から約15cm浮いた黒褐色土中であつた。周礫の最上部からは10・11が出土している。石器は周礫中のものも含め、打製石斧4、石皿1、凹石8、多孔石2、石錘1が出土していた。

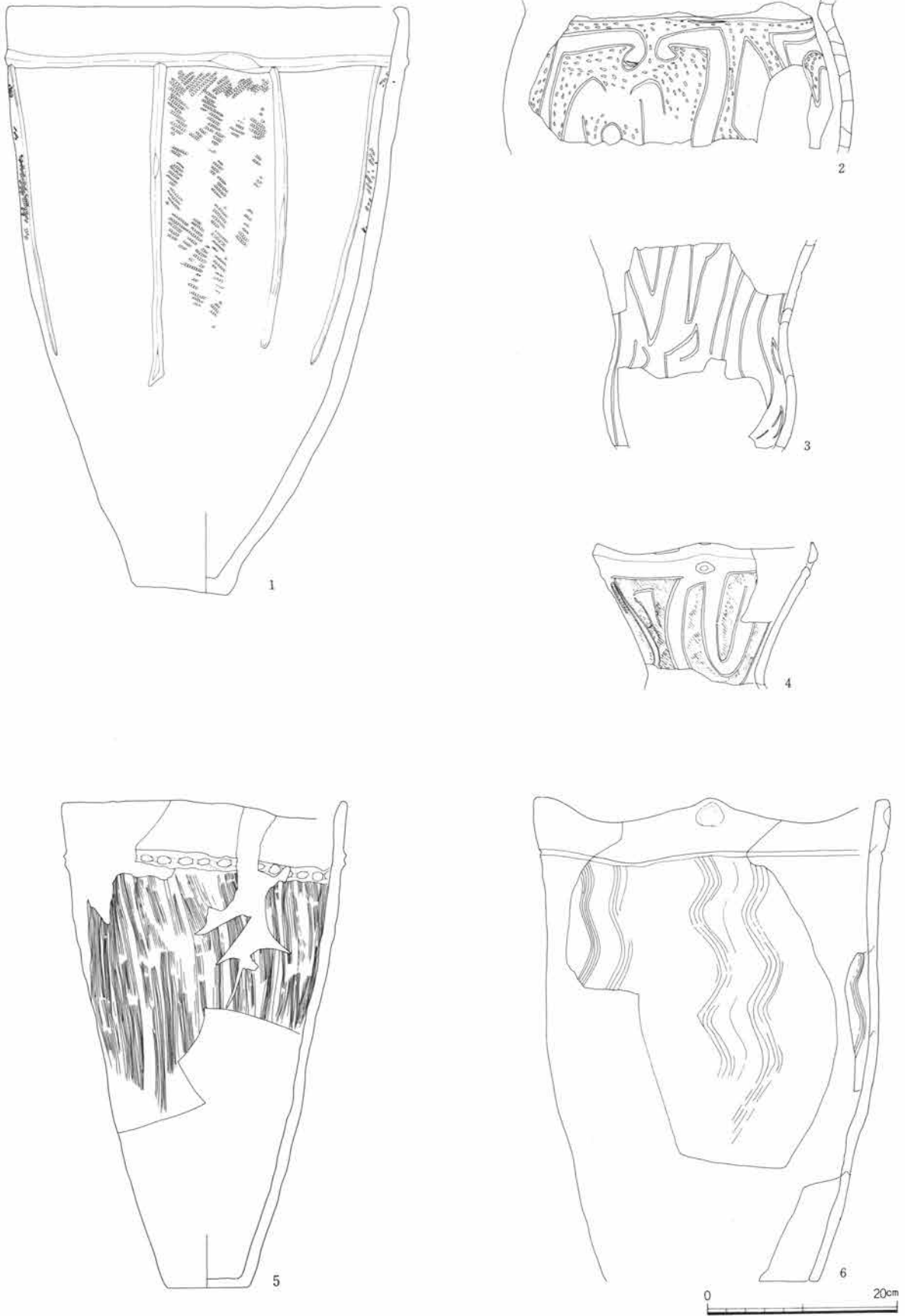
ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長軸×短軸	26	24×21	28×26	31×30	24×22	22×20	26	21×20	39×38	29×28	24×20	23×22
深さ	27	28	16	28	16	20	20	11	36	18	13	16

出土遺物

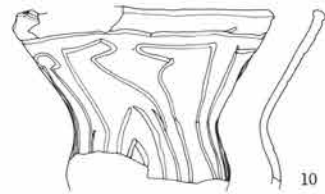
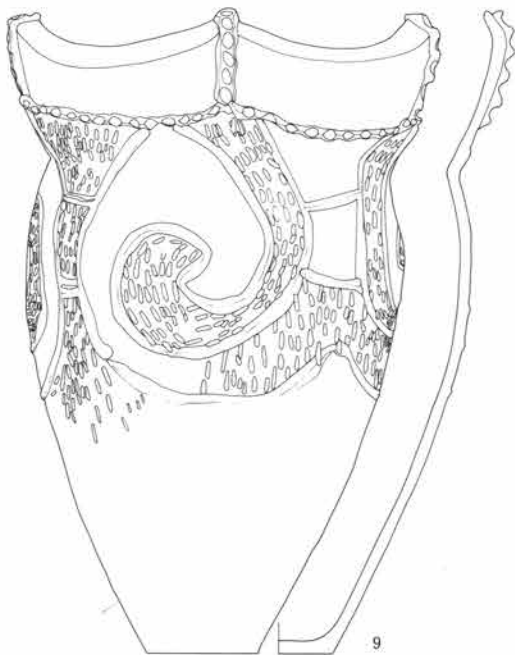
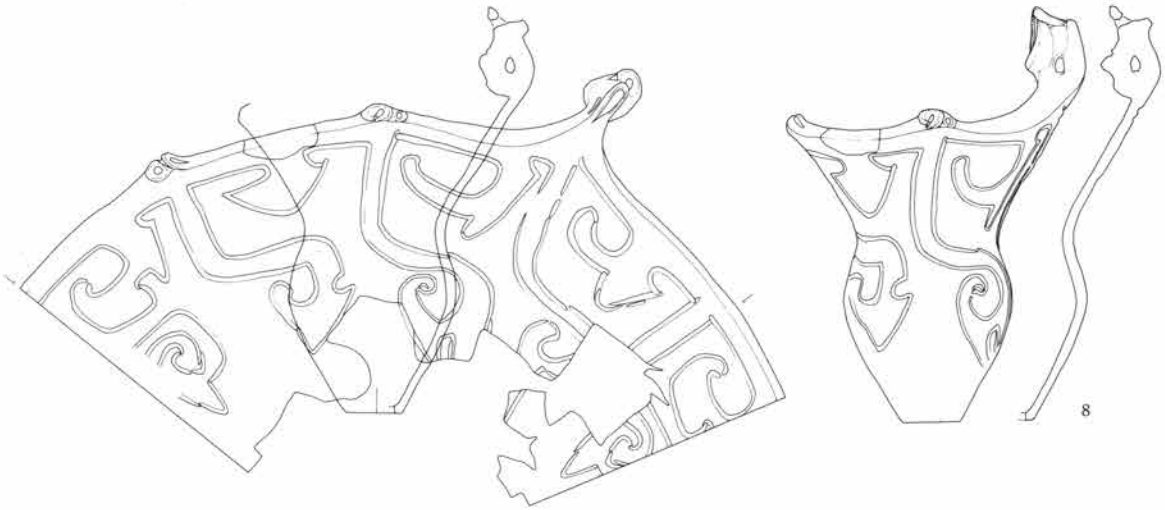
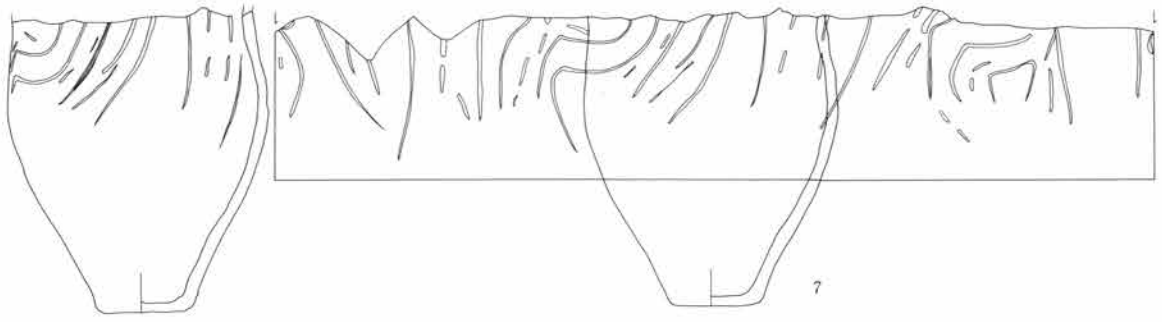
土器 (P L40) 1、深鉢形土器 ほぼ完形で、口径42.5cm、器高60.5cmを測る。口唇内側はくの字状にわずかながら突出し、内彎ぎみに開口する口縁から胴部にわずかに膨らみをもちながら小さな底部へと移行する。口縁部に1条の微隆起帯がめぐり、それと接続して2条1単位の微隆起帯による懸垂文が4単位施される。胴上半部にはLR縄文が施文されるが、各懸垂文単位間、および、口唇直下の縄文は磨消されて幅の広い無文帯となっている。また、口縁にめぐり微隆起帯直下の縄文は横位に施文され、それ以下の縦位の縄文と施文方向を異にして、羽状縄文を表出している。器面の外側は使用時の加熱を受けて無数のヒビ割れが生じ、粗れた状態を呈している。



第113図 第33号住居址平面図・断面図



第114図 第33号住居址 出土遺物(1)



第115図 第33号住居址 出土遺物(2)

第2章 検出された遺構と出土遺物

2、鉢形土器 胴部破片である。胴上半が外傾しながら開口し、胴中位でやや強く括れて球形の丸みをもった胴下半へと続く器形である。沈線でM字状に区画された中に、底部から口縁方向へと刺突された列点文が充填される。沈線文と列点文は、先端のやや尖った棒状の工具によって施文されている。器面は内外ともに良く研磨されている。

3、深鉢形土器の胴部中位の破片である。外反ぎみに開口する口縁部から胴部で一坦括れ、胴下半で膨らみをもつ器形である。全体的な文様構成は不明であるが、沈線の区画文中は無文となっている。器面の内外とも良く研磨されている。

4、深鉢形土器 胴部上半の破片である。口縁端部でくの字状に内折し、口唇が薄くやや尖っている。4単位の波状口縁をもち、胴部中位で強く括れる器形である。沈線による区画文の中にはL縄文が充填されているが、縄文施文時に沈線の一部がつぶれている。また、口縁の各波頂下には楕円形の孔が外面よりあけられている。器面は内外面とも良く研磨されている。

5、深鉢形土器 大型で、胴部下半が欠損している。ほぼ完形に復元されており、口径30.5cm、器高50.5cmを測る。胴部で括れをもたず、口縁部から底部へゆるやかな曲線を描いて移行する。口縁部には連続した指頭状の圧痕をもつ。1条の隆帯がめぐり、その上位は幅広い無文帯となる。この隆帯より下位には、12本歯の櫛歯状工具による沈線が施文される。器面の外側はやや荒れているが、内側は良く研磨されている。色調は、レンガのような赤橙色を帯びている。

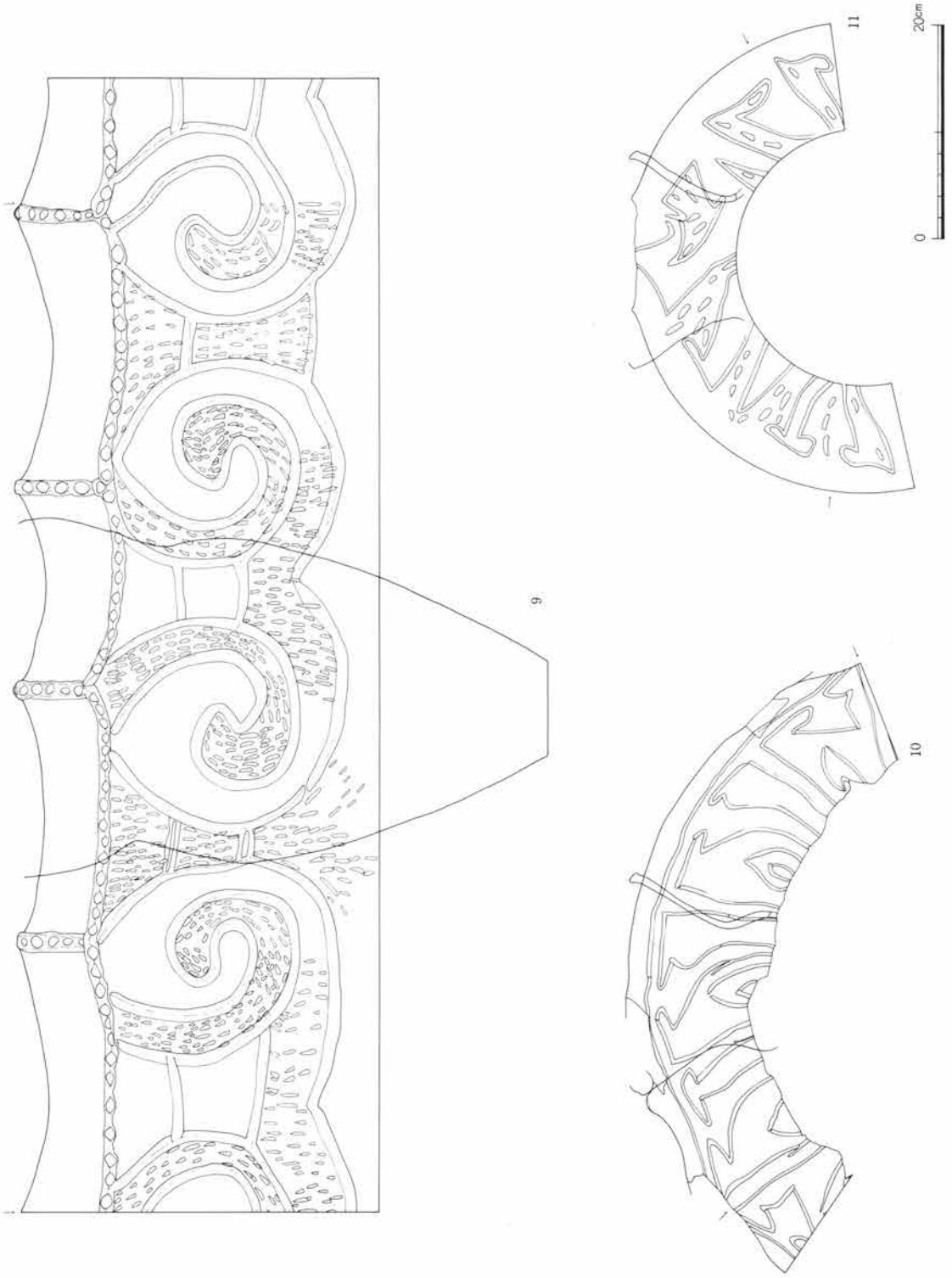
6、深鉢形土器 大型である。口縁は直立ぎみに開口し、胴部中位で若干の膨らみをもちながらゆるやかに底部へと移行する。単位は不明であるが、波状口縁を呈し、口縁部の器肉はやや肥厚している。口縁部の文様は、1条の沈線がめぐり、その上位は無文帯となる。また、口縁波頂下には指頭状の圧痕が施文されている。胴部では5本歯の櫛歯状工具による波状沈線文が垂下している。器面の内側はやや荒れているが、外側は良好に研磨されている。

7、深鉢形土器 第4号溝の掘削時に胴部上半が壊され存在しない。胴部中位で一坦括れ、その下位で若干膨らみをもって底部へと移行する。全体的な文様構成は不明であるが、沈線による区画文はその下端閉じない文様である。区画文中には列点文が充填されている。

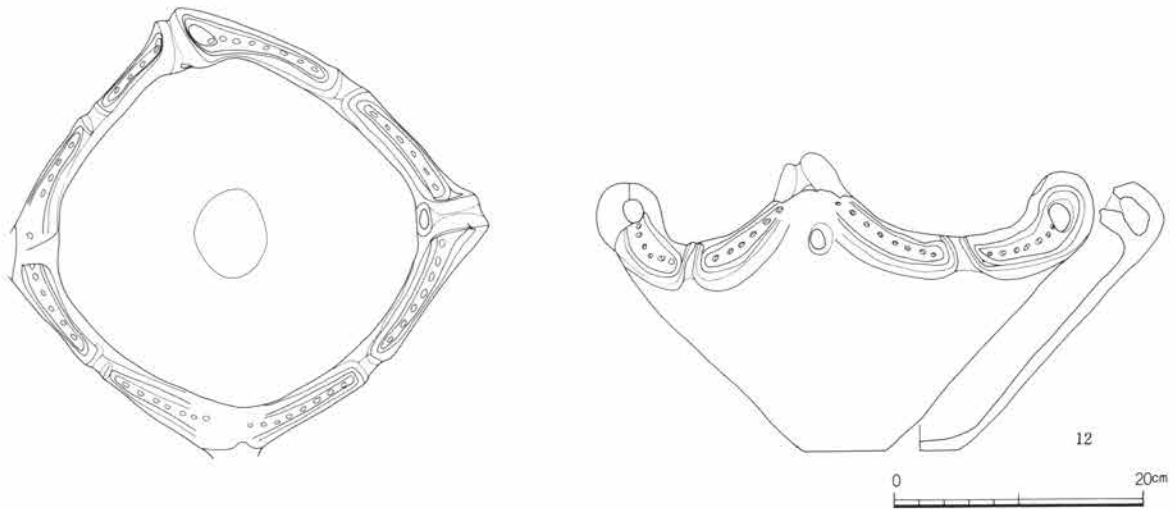
8、深鉢形土器 ほぼ完形であるが底部の一部を欠損している。口径22.5cm、器高33cmを測る。口縁はくの字状に内折し、口唇も内側に突出する。口縁部は外反ぎみに開口し、胴部中位で強く括れた後にその下位で球形の膨らみをもちながら、小さな底部へと移行する。また、口縁部の内折する部分に、貼付文が2箇所と把手が1個付けられ口縁が波状を呈する。把手の内側には沈線によるC字文が描かれている。文様はJ字状の区画文を主体として4単位の施文されているが、区画文中に縄文や列点は充填されない。器面は内外とも良好に研磨され、堅緻に焼成されている。

9、深鉢形土器 完形である。口径37.5cm、器高48.6cmを測る。口縁部はくの字状に内折し、胴部上位で強く括れた後にやや膨らみをもってゆるやかに底部へ移行する。4単位の波状口縁を呈し、各波頂下には指頭状の圧痕をもつ隆線が縦位に貼付される。また、これらの隆帯をつなぐように同様の連鎖状の隆帯がめぐり、胴部でも各波頂下に、微隆起帯で区画されたJ字状の文様が4単位の施文される。各J字文は横位の微隆起帯で相互に連結されている。また、J字文の区画内には口縁から底部方向へと刺突された列点文が充填されるが、部分的に変則的な施文となっている箇所もみられる。胴部下位は無文となる。器面の内外とも良好に研磨され、外面の胴下半部に炭化物が付着している。

10、深鉢形土器 胴下半部を欠損する。口径21.5cmを測る。口唇が内側にわずかに突出し、胴部中位で強



第116図 第33号住居址 出土遺物(3)



第117図 第33号住居址 出土遺物(4)

く括れる器形である。把手が1箇所、小突起が2箇所に付くと思われるが、欠損している。また、小突起の付される箇所の口唇には、棒状工具による沈線文と押捺文が施文される。胴部には、連続したM字状の区画文が4単位に施文されるが、その区画中は無文となっている。器面は内外とも良好に研磨されている。

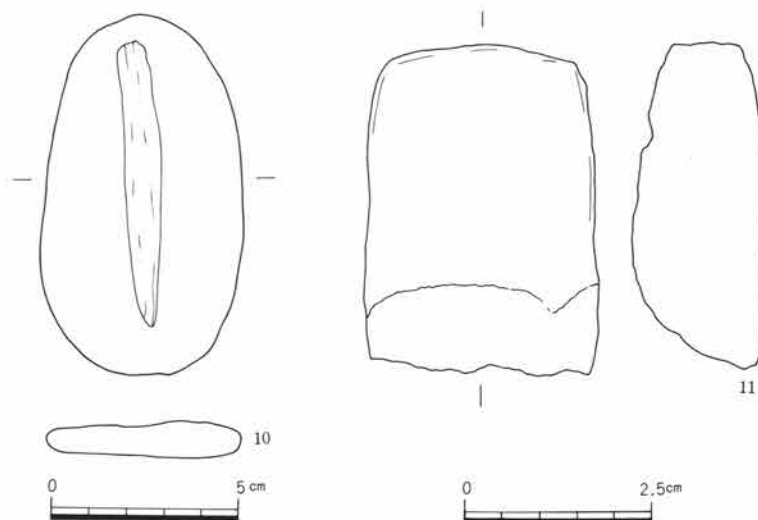
11、深鉢形土器 胴下半部を欠損する。口径20.4cmを測る。口唇は内側にわずかに突出し、胴部中位で強い括れをもつ。口唇上には把手が付くと思われるが、欠損している。胴部には沈線によって区画されたY字状の文様が施文されるが、その区画文の外側に口縁から底部方向へと刺突された列点文が充填される。沈線文、列点文ともに半截竹管状の工具によって施文される。器面の内側は良好に研磨されているが、外側はやや荒れている。また、外面には炭化物の付着が認められる。

12、浅鉢形土器 完形である。口径40.5cm、器高23.4cmを測る。口縁がくの字状に内折し、4単位の橋状把手が付けられている。この把手の直下に注口の付されていた痕跡が1箇所認められる。口縁部には、隆帯に楕円状の区画文が貼付され、その区画内には棒状工具による刺突が充填されている。器面の外側は良好に研磨されているが、その全面にわたってスス状の炭化物が付着している。

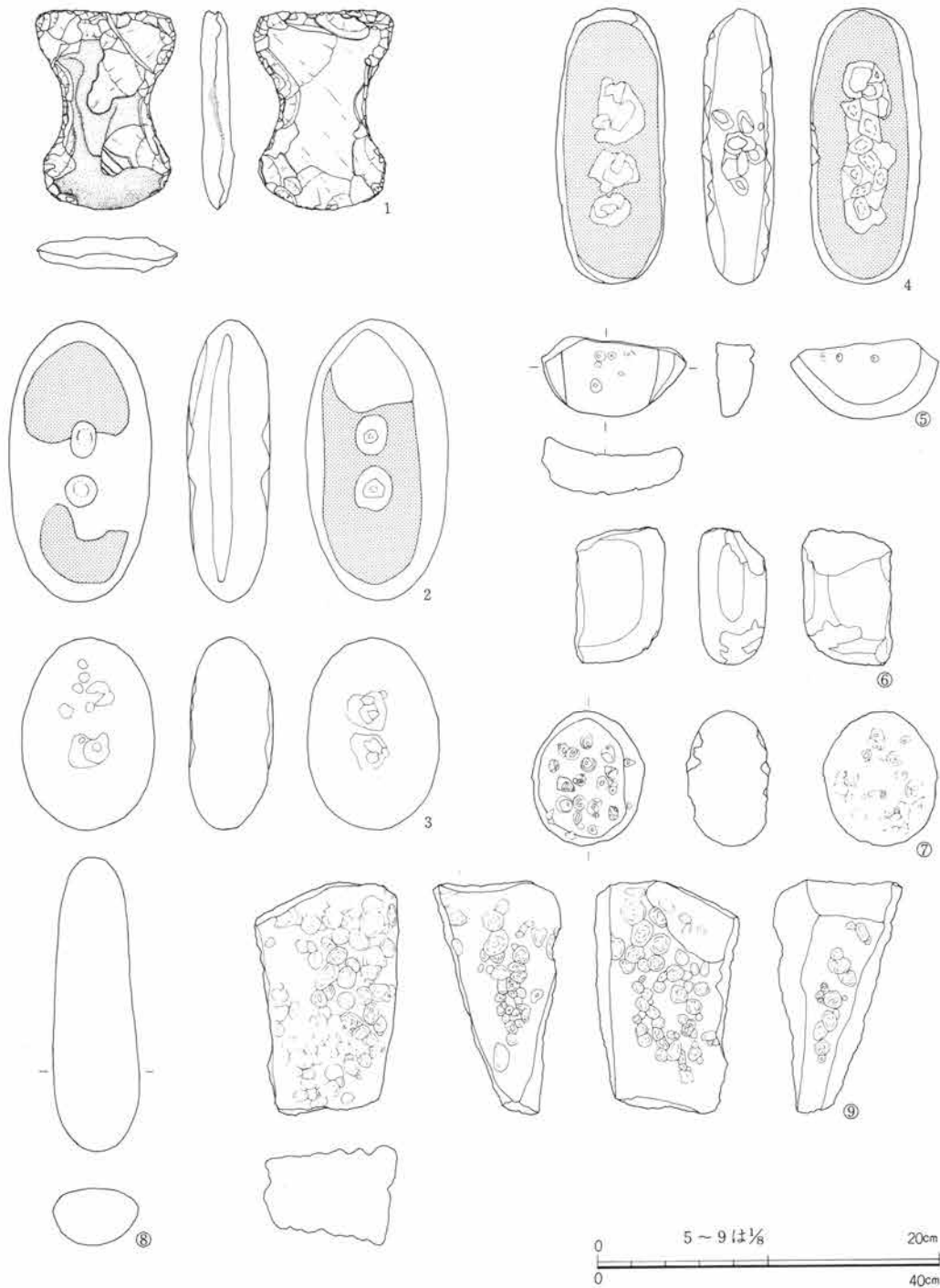
石器 (P L 48・51・53・54)

1、分銅型の打製石斧 長さ114、最大幅75、最小幅50、厚さ18cmを測る。重量は210g。石質は細粒砂岩である。装着部の側縁部には刃つぶしが施してある。一方の刃部は直線的にもう一方は弧状の端部をなす。

2～4、いずれも凹石と磨石に併用している。2は磨石として主体的に利用している。長さ164、幅83、厚さ48mm



第118図 出土遺物(5)



第119図 第33号住居址 出土遺物(6)

を測る。重量820g。石質は安山岩である。敲打による凹みは表裏に2対ある。側縁部は敲打に使用した痕跡を残す。3は2よりも長軸の短い楕円形を呈す。長さ110、幅78、厚さ49mmを測る。重量820g。石質は安山岩である。敲打による凹みは表裏に2対ある。側縁部は敲打に使用した痕跡を残す。4は隅丸の長方形に近く側縁に面を有している。長さ160、幅65、厚さ44mm、重量530gを測る。石質は安山岩。凹石としても利用しており広い範囲を敲打しているが表裏4カ所に集中している。

5、石皿 欠損破片である。残存の最大幅は168mmを測る。石質は安山岩。磨面には磨耗痕を顕著に残している。また、磨面、底面の両方に多孔石と同様の凹みがある。

第2章 検出された遺構と出土遺物

7、9、多孔石 7は長軸155、短軸132、厚さ93mm、重量1,640gを測る。やや偏平な球状の安山岩である。9は長軸263、短軸152、最大厚112mmを測り、石質は安山岩である。重量は5,430gを測る。4面に凹みがある。

8、棒状の閃緑岩の自然石 長さ339、幅90、厚さ65mm、重量3,630gを測る。断面形は半円形に近い。器面には部分的に強い磨耗痕を残す。

10、石錘 長さ95、幅53、厚さ8mmを測る。重量99g。石質は準片岩である。表裏の平坦面全面に磨耗痕が残るが表面の中央は溝状になっている。

11、軽石製品 長方形の短辺の一端は鋭角をなしている。重量75g。

第34号住居址 (第120図、P L12)

緩斜面の中位、M-22グリッドを中心に位置する。

柄鏡形の平面形を呈するが、主体部は南側に強く弧状をなしている。また張り出し部は長さに対して幅の広いものである。主体部の奥壁は第5号溝との重複により残存状態が悪かった。張り出し部の先端は第16号土坑により切られている。規模は長軸8.03、短軸5.25、張り出し部の幅2.44mである。長軸の方位はN19°Wで、等高線とほぼ直交している。

壁面はソフトロームを掘り込んで構築されており、残存壁高は平均35~40cm。主体部西側の良好な部分で55cmを測る。床面は張り出し部に向かって傾斜しており、レベル差は20cmになる。

ピットは主体部の壁面の近くに14本検出された。それぞれの柱穴の掘り方の径は、やや小さいが良好な掘り方をしている。張り出し部では確認できなかった。

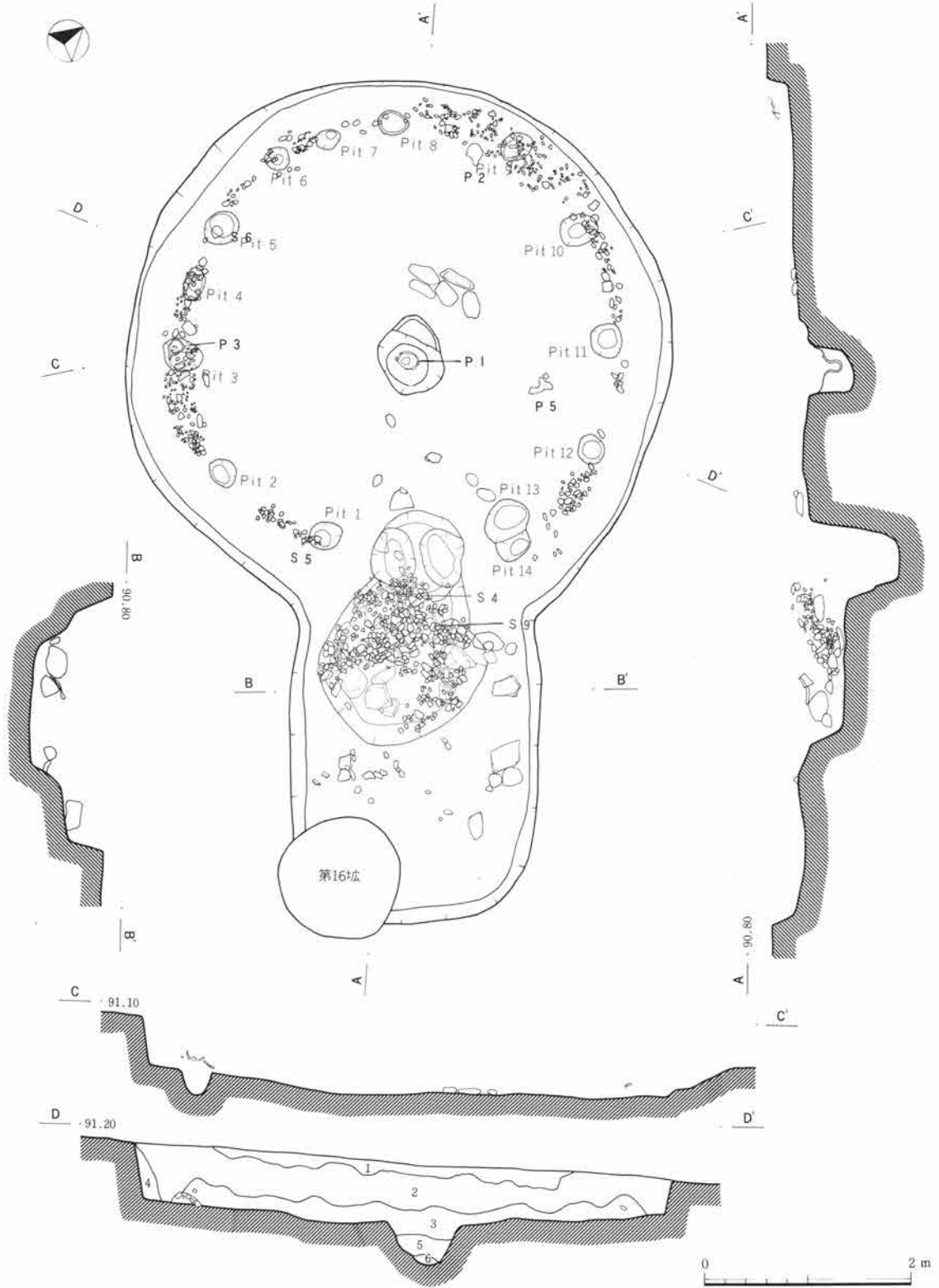
炉址は主体部のほぼ中央にある。上端の径が78×68cmの土坑状の掘り込みである。底面の中央を更に掘り込み小型の深鉢(第121図1)を埋置している。土器の上端までの深さは14cm、掘り方の最下面までは44cmを測る。埋土の下層には炭化物が上層には焼土が厚く堆積していた。

周礫は小円礫を主体につくられており主体部をほぼ全周していたが、残存状態は極めて悪かった。ピット2から4の部分の幅は30~40cm前後である。炉址の北側の床面には30cm前後の長円形の円礫が5個まとまっていた。最高位と床面との比高差は15~20cmである。また、周石に重なるように炭化物の細片が多数検出されることや、ほぼ床面の全面に焼土や炭化物が認められることから焼失家屋と判断される。

主体部と張り出し部の接続する部分、ピット1と14の間には2つの土坑状の掘り込みが重複して存在している。北側の掘り込みは径90、深さ60cmを測り底面には更に2つのピットが掘られており底面まで83cmを測る。これと重複するものは、長軸205、短軸157cmであるが深さ35cmと浅い。中には周礫と同規模の円礫が多量に含まれる。底面には20~30cmの礫が見られ多孔石もこれに含まれていた。この土坑の上面はこれらの礫で覆われていたものと思われる。P5は詳細不明の圧痕である。(P L41)

遺物の出土量は少なく、周礫の上面から第121図P2、3の土器が出土している。石器は打製石斧1、石皿1、凹石7、多孔石3、軽石製品1である。

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
長軸×短軸	30×28	27×26	41×30	62×18	37×33	24×23	23×21	30×24	28	36×34	32	28×24	40	36×28
深さ	60	69	77	67	73	51	39	71	71	62	73	69	51	55



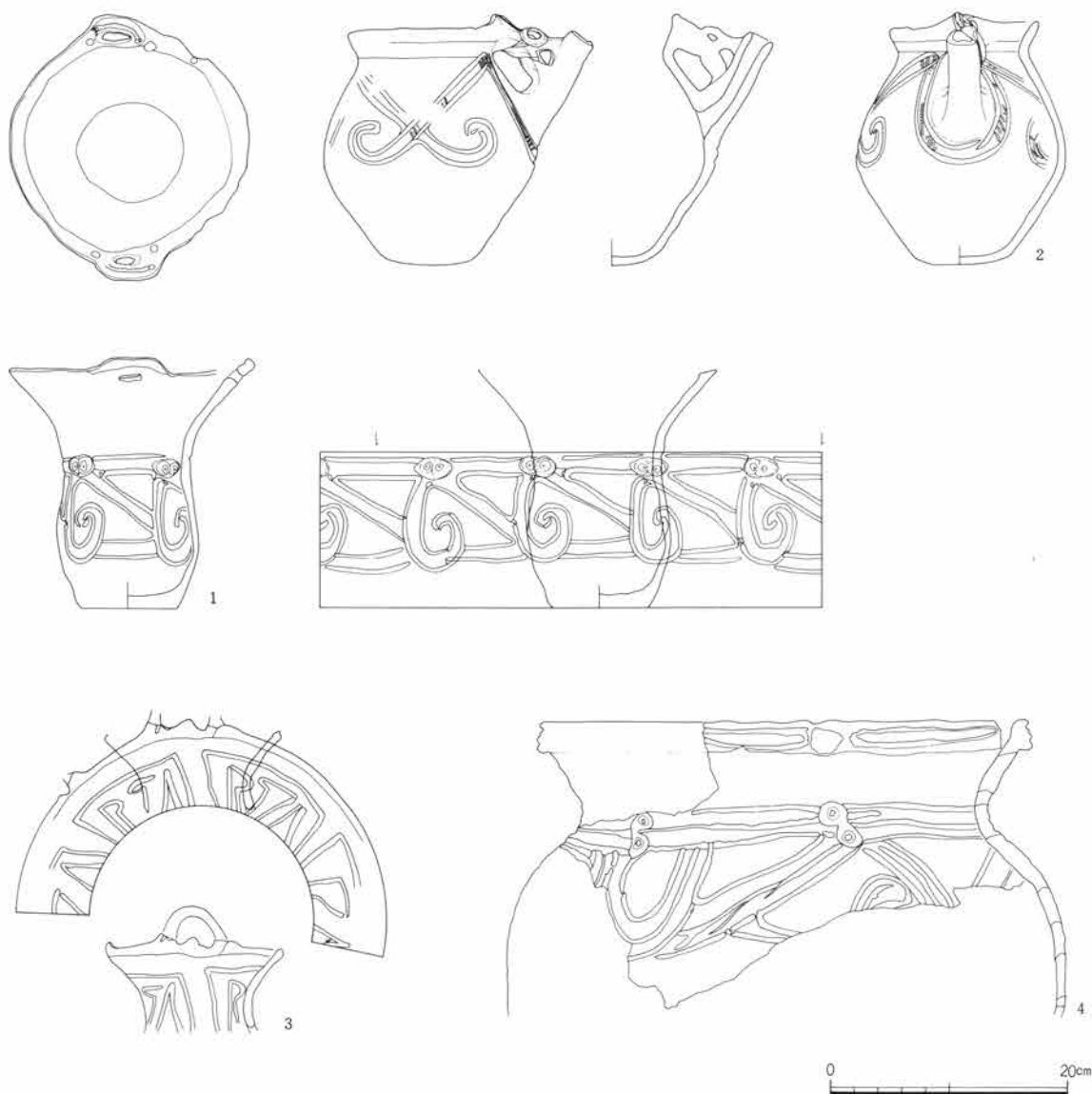
- | | |
|---|--|
| <p>1. 暗褐色土層 締りが悪い</p> <p>2. 茶褐色土層 ソフトローム漸移層に類似するが炭化物粒、暗褐色土のブロックを全体に含む</p> <p>3. 黒褐色土層 炭化物、焼土塊を多量に含む</p> | <p>4. 褐色土層 地山が崩落したもの</p> <p>5. 暗褐色土層 灰褐色の粘土粒を散見。壁際に焼土粒が多い</p> <p>6. 炭化物の層 焼土をまばらに含む</p> <p>5・6は炉址の覆土</p> |
|---|--|

第120図 第34号住居址平面図・断面図

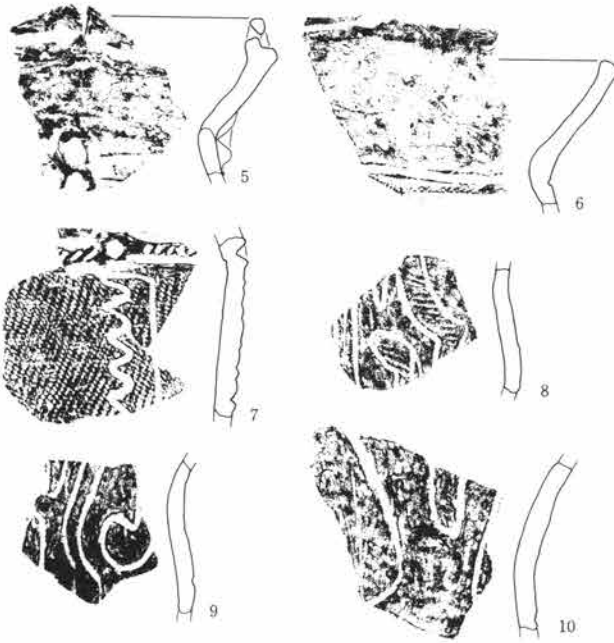
出土遺物

土器 (P L41・46) 1、深鉢形土器 完形である。口径21cm、器高20.7cm、底径18.5cmを測る。口縁がラッパ状に強く外反する器形で、胴部で若干の膨らみをもつ。口唇は内側にわずかに突出し、1対の突起が付されている。突起は、その内側に円形竹管状の工具によるC字文や刺突文をもち、またその直下に孔を開けている。胴部の括れ部には8字状文が横位に貼付され、その直下に施文される沈線によるJ字状の区画文とともに4単位の文様構成となる。また、これらの文様をつなぐように横位、斜位の沈線文が施文される。刺突文、沈線文ともに円形竹管による施文である。炉埋設土器であるため、加熱による変色で黄白色を呈している。また、器面の風化が著しく、器壁の剝落も認められる。

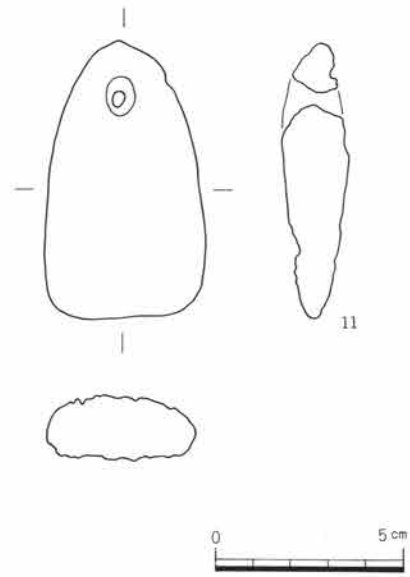
2、注口土器 完形である。口径12.5cm、器高21.0cm、底径7.5cmを測る。口縁がくの字状に外反し、胴部中位で膨らみをもつ。底部が丸底ぎみで、安定の悪い器形である。注口は胴部の膨らみより上位に付き、口縁と橋状に連続する部分は、蔦のからみ合うような状態に粘土紐を撚り合わせて貼付している。胴部にはX



第121図 第34号住居址 出土遺物(1)



第122図 第34号住居址 出土遺物(2)



第123図 出土遺物(3)

字状に交差するJ字文が2単位に施文され、また注口部にも環状にめぐる区画文が施文されている。各区画文中には、0段3条LRと思われる縄文が充填されている。器面は内外面とも風化して荒れており、砂粒が表面に露出している。

3、深鉢形土器 胴下半が欠損している。口径15.0cmを測る。口縁部は外反ぎみに開口し胴部中位で強く括れる器形である。口唇には環状の把手が3箇所につけられるが、このうちの1箇所はやや小さめの把手となる。またこの把手の内側のつけ根部分に、棒状工具による刺突文が施される。胴部の括れのやや上位から、沈線によるM字状の区画文が3単位に施文される。区画文の中は無文となる。器面の内外とも良好に研磨されている。

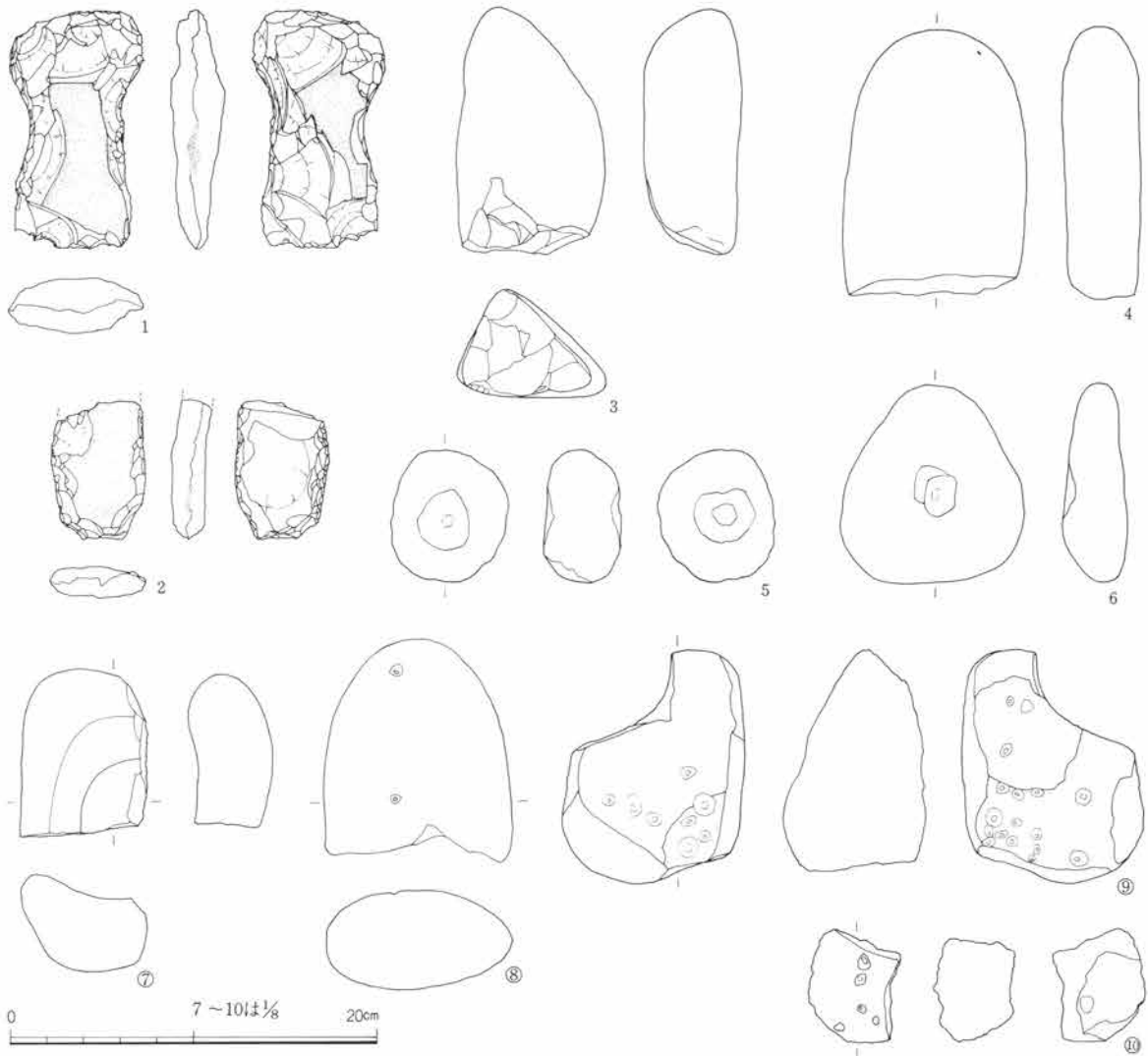
4、甕形土器 口縁部の破片である。推定口径は41.5cmを測る。口縁が内傾ぎみに直立し、頸部でかなり強く括れた後に胴部中位で膨らむ器形である。口縁部には、隆帯が貼付され、その上に円形竹管による楕円状の区画文と指頭状の圧痕文が、交互に施文されている。括れ部には3条の沈線がめぐり、推定5箇所に8字状の貼付文が施される。また、胴部文様は3本1単位の沈線によって、J字状の文様やそれをつなぐ斜線文によって描かれている。各沈線文や刺突文は、円形竹管状の工具によって施文される。器面は内外面ともに風化して、やや荒れた状態となっている。

5、深鉢形土器 波状口縁を呈し、口縁部は弱く内折する。口縁頂部の刺突は内面まで貫通する。その横にも刺突が施され、それぞれから沈線がのびている。胴部は中位で著しくくびれ、8字状の貼付文と沈線を2条めぐらしている。胴上半部は無文。

6、深鉢形土器 弱い波状口縁を呈し、口縁部には刺突と沈線が施される。胴上半部は無文。くびれ部の沈線区画文内にはLR縄文が充填されている。

7、深鉢形土器 胴下半部の破片である。円形あるいは8字状の貼付文から横に延びる隆線には、斜位の刺突が刻目状に加えられ、その上下に沿って沈線が施される。その下はLR縄文が縦位に施文され、波状と直線の沈線が懸垂する。

8、深鉢形土器 胴部破片である。沈線により区画文を施し、その区画内にLR縄文を充填している。



第124図 第34号住居址 出土遺物(4)

9、深鉢形土器 胴部破片である。沈線により区画文を施す。

10、深鉢形土器 胴部破片である。沈線により区画文を施す。

石器 (P L48・51・53・54) 1、2、打製石斧 1は長さ125、最大幅63、最小幅50、厚さ26mmを測る。重量は290g。石質は安山岩である。両面に自然面を一部残している。刃部先端に弱い磨耗痕を残している。2は欠損品で頭部のみ残っている。残長75、幅48、厚さ16mmを測る。重量110g。石質は安山岩である。背面には自然面を残している。内面の剝離は磨耗が著しい。

3、スタンプ形石器 輝緑岩の円礫の長軸端を打ち欠きフラットに近い部分をつくり出している。長さ130、幅81、厚さ54mmを測る。重量は820gである。敲打面の使用痕はそれほど明瞭でない。

4、磨石 欠損品である。残長140、幅98、厚さ43mmを測る。偏平なものである。重量は1,060g。石質は安山岩。両面とも使用しており、長軸の先端は敲打している。割れ口を含めてススが付着している。

5、6、凹石 5は小円礫の両面に敲打痕がある。長さ70、幅63、厚さ42mm、重量は200g。石質は安山岩である。やはり火熱を受けている。6は三角形の平面をもつ偏平な石である。長さ106、最大幅100、厚さ35mmを測る。重量は370g。石質は安山岩である。表面の中央部に敲打痕をもつ。

7、凹面をもつ石英閃緑岩 長軸176、短軸136、厚さ80mmを測る。重量は4,090gである。凹面には強い磨耗痕を残す。石皿のような機能を果たしたと考えられる。

8～10、多孔石 8は半ほどから欠けた偏平な自然石で長軸215、短軸101、厚さ105mm、重量5,430gを測る。片面の2カ所に凹みがある。石質は安山岩。9は長軸250、短軸192、厚さ140mmを測る。稜の丸くなった角礫である。一部欠損する。表裏2面に凹みがある。10は欠損品で長軸121、短軸94、厚さ79mmの小片の角礫である。石質は粗い安山岩。

11、軽石製品 長さ73、最大幅43、厚さ16mmを測る。重量は13g。形状は磨製石斧に類しており、石斧基部にあたる部分に穿孔が施してある。

第35号住居址 (第125図、P L13)

Q-34グリッドを中心に位置する。緩斜面の東端にあたり、遺構確認面は東に向って著しく傾斜する。第29・30号住居址が南北に近接している。

この住居址は、長軸11.32m、短軸8.96mの柄鏡形を呈し、本遺跡では最大の規模を有するものである。張り出し部の幅にはほとんど変化がなく、基部で2.72mを測る。長軸の方位はN60°Wである。

壁面はソフトローンを切り込んでおり、上端でやや開いている。残存壁高は主体部の西壁で103cm、張り出し部で10～20cmである。床面は全体的に叩き締められているが北側にはやや軟弱な部分がある。壁際はやや高くなっている。張り出し部に向って傾斜しており比高差は54cmを測る。

柱穴は主体部で16本、張り出し部で4本確認できた。ピット14を除く15本が支柱穴と考えられる。ピット15、16はいわゆる対ピットである。張り出し部の4本は壁際にシンメトリーの位置にある。炉址は主体部中央からやや東よりにある。径1mの円形を呈し深さ60cmを測る。側面は焼けており、下部に至るとよりそれが顕著になる。底面には焼土が多く堆積していた。埋土中より局部磨製石斧(第129図2)が出土している。

主体部には周礫が圍繞している。小円礫を主体に土器片、石器類をも含んでいる。長円形や偏平の大形円礫もまばらにみられピット11の西側には特に集中している。最上位の礫と床面との比高差は10cm前後と低い。

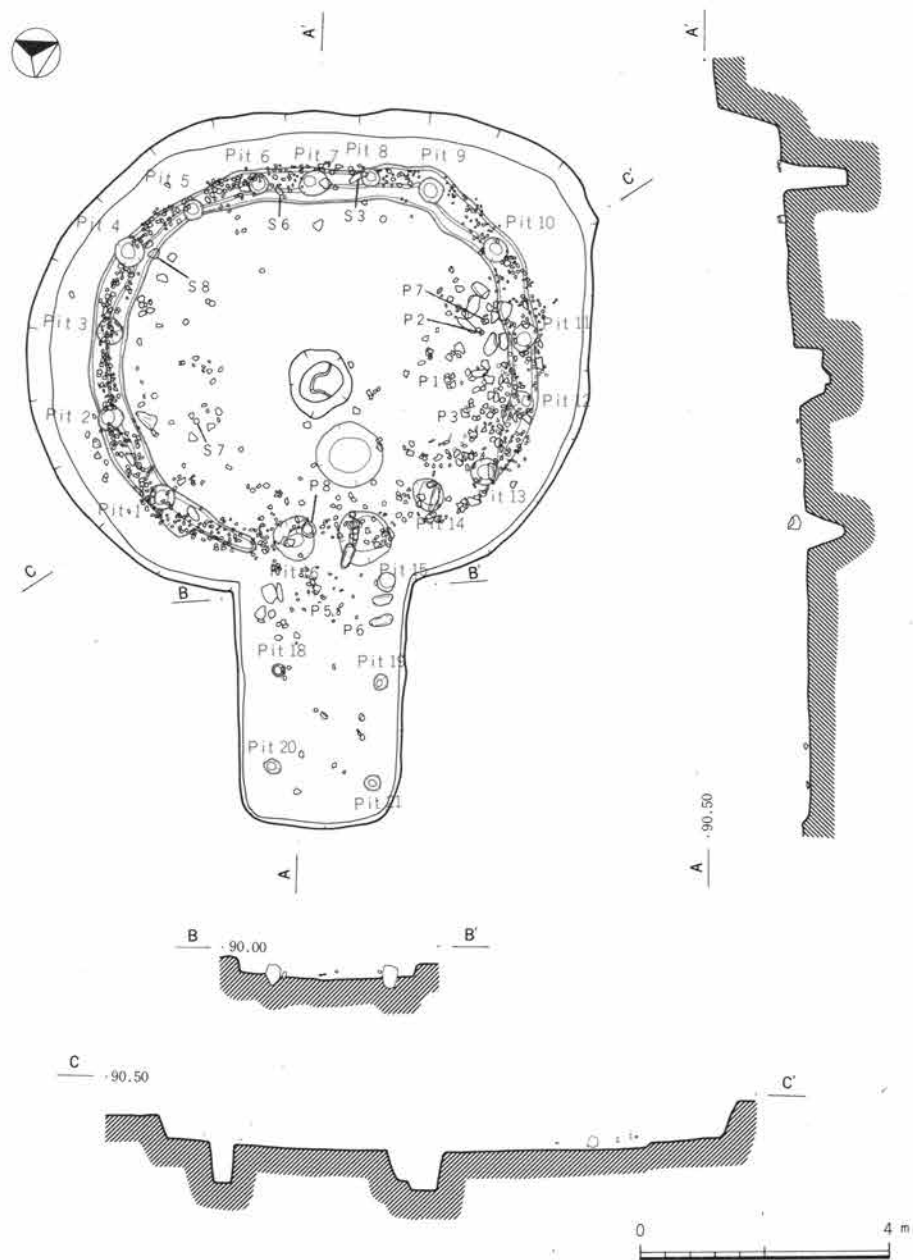
これらの礫は床面を掘り込んで置かれており、ピット1から13に至る床面には各柱穴を連結するように溝状の掘り込みがみられる。

張り出し部の基部、左壁よりにはB-B'のエレベーションに図示したように角礫が据えられている。また、反対側の右壁よりも、先端の欠損した円礫がある。この円礫の上端部、欠損部は敲打により磨耗している。この礫の前には長円形の円礫が2石並べられている。

遺物は埋土の全層から多く出土したが圧倒的に破片が多かった。土器はピット10～14周辺の周礫より床面直上出土のものが多かった。6を除いた1～5と7は床直上出土である。ピット16の掘り方の部分には床面から10cm離れて8が伏せられた状態で出土している。石器は多くが周礫中に含まれていた。打製石斧2、磨製石斧1、凹石9、多孔石2が出土している。

出土遺物

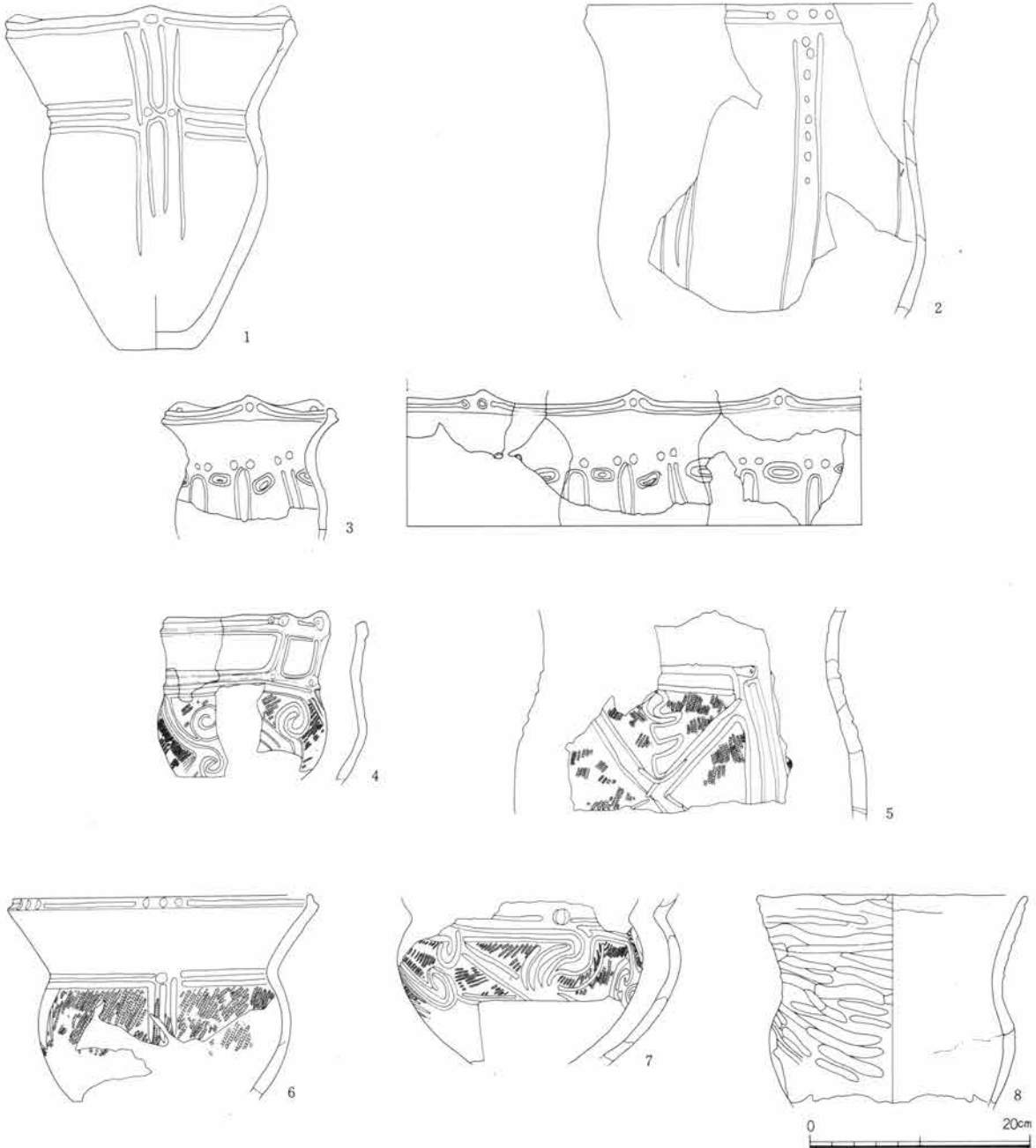
土器 (P L41・46・47) 1、深鉢形土器 完形である。口径26.5cm、底径7.2cmを測る。口縁はくの字状に内折し、口唇もわずかに内側へ突出する。胴部中位で強く括れ、下半で膨らみをもつ器形である。3単位の波状口縁で、各波頂下には刺突文が施され、更にその下位にH字状の沈線が垂下する。口縁部は1条、括れ部は3条の沈線がめぐる。



第125図 第35図住居址平面図・断面図

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
長軸×短軸	21×20	21×20	22	24×23	16	15	23×21	17×16	20×19	20	23×18
深 さ	34	55	77	75	83	72	109	77	87	78	66

ピット番号	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
長軸×短軸	20×18	22	28×22	44×43	33×32	51×50	9	12×11	13×10	14×13
深 さ		81	16	63	66	21	21	21	37	16



第126図 第35号住居址 出土遺物(1)

2、深鉢形土器 口縁はくの字状に内折し、口唇は尖る。括れや張りの小さい器形である。口縁部は刺突文と沈線文が施され、胴部は沈線文と列点文が垂下している。ともに半截竹管状の工具を使用して施文している。器面は内外ともにやや荒れている。

3、深鉢形土器 胴部下半が欠損する。口縁が直立ぎみに内折し、胴部中位で強く括れる器形である。3単位の波状口縁であり、各波頂下に円形竹管による刺突文が施される。また、口縁部には同一工具による沈線文が施文される。胴部では、楕円区画文や∩字状の懸垂文、刺突文などが施文される。

4、深鉢形土器 口径15.6cmを測る。口縁は直上ぎみに開口し、胴部で若干の膨らみをもつ。口縁部は沈線文と刺突文が、口唇内側は刺突文が施される。胴部上半は隆線による窓枠状の区画文がみられ、下半には

沈線による渦巻状の文様が描かれる。また、下半の空白部にはLR縄文が充填される。

5、深鉢形土器 胴部の括れや張りの弱い器形である。沈線によるX字状文や蛇行線文が施文され、空白部にはLR縄文が充填されている。5mm大の砂礫を多く含んでいる。

6、甕形土器 口径29cmを測るが、底部は欠損する。口縁は短く内折し、胴部の括れや膨らみの強い器形である。口縁部には刺突文と沈線文が交互に5単位に施文されるが、胴部の懸垂文もこれに準じて5単位の施文となる。胴部の縄文はLRの横位施文で、縄文、次に沈線という施文順序となる。

7、甕形土器 胴部の中位で強く括れ、その下部が球形の膨らみをもつ。括れ部には横位の沈線と刺突文が、胴部には渦巻状の沈線が施される。沈線で区画された中にはLR縄文が充填され、縄文施文時につぶれた沈線をなぞっている。

8、深鉢形土器 胴部下半が欠損する。口径24.5cmを測る。無文土器であるが、指による横ナデの痕跡が明瞭に残っている。器面の外側は粗雑に整形されているが、内側は研磨されている。

9、深鉢形土器 弱い波状口縁を呈し、波頂部外面に円形押捺文が施され、左右に沈線が施される。胴部には3本1単位の沈線がX字状に配され、それと交差するように懸垂文が施されている。

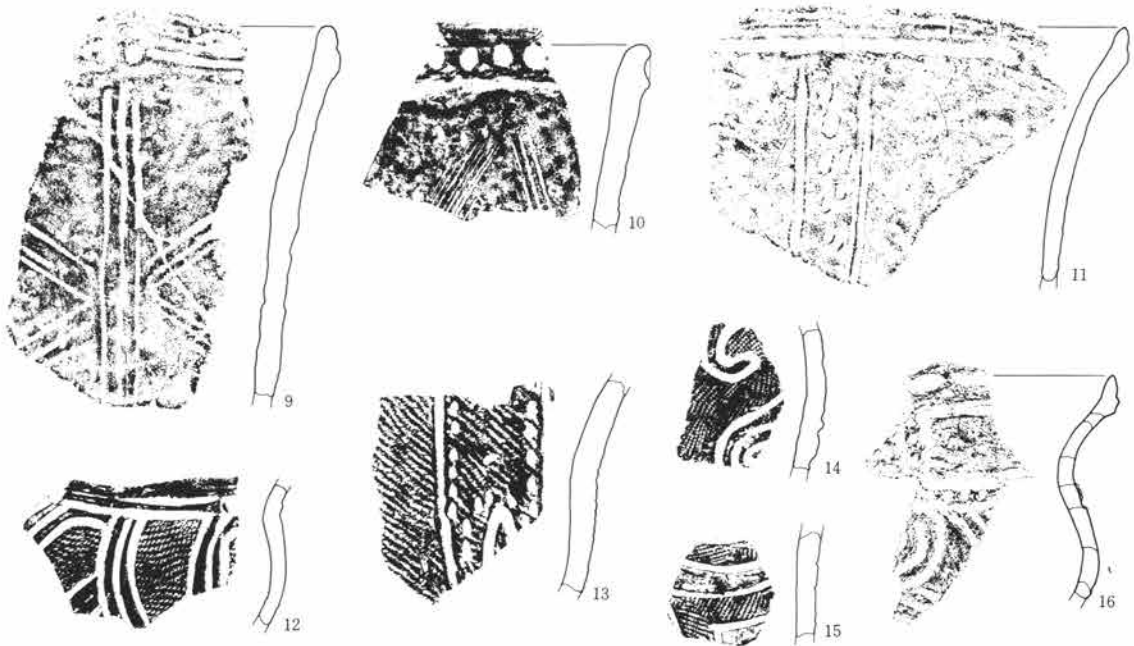
10、深鉢形土器 口縁部は肥厚し、段のついた器面に指頭状の楕円形押捺文が連続して施される。胴部には6本の楕歯状工具による条線が斜位に施されている。

11、深鉢形土器 口縁部は外面に肥厚して断面三角形状を呈し、沈線がめぐっている。胴部には2本1単位の沈線による懸垂文があり、その間に列点文が施されている。

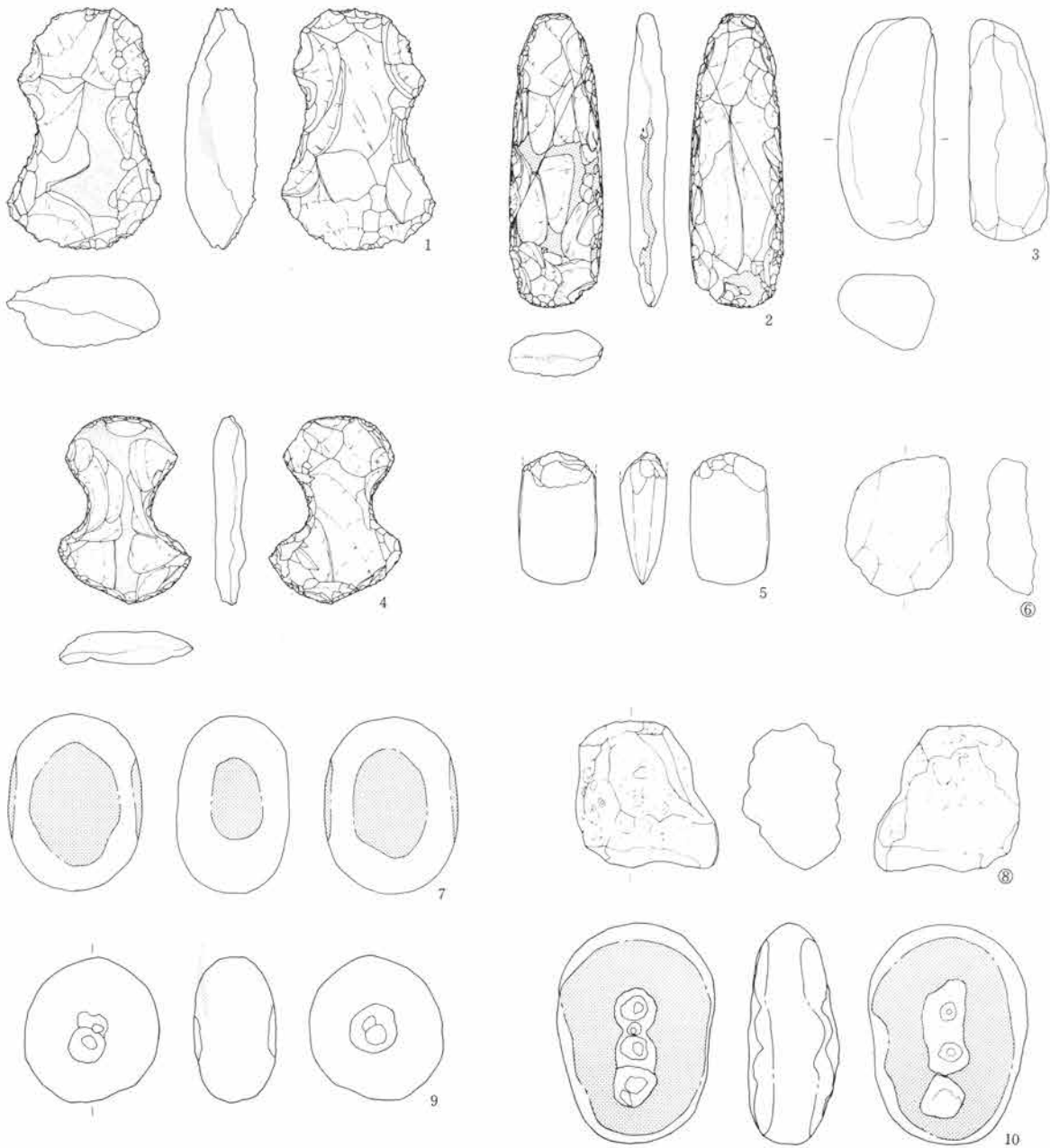
12、深鉢形土器 3本1単位の沈線を横位、あるいは弧状に垂下させ、区画文を施し、区画中にLR縄文を充填させている。括れ部には円形押捺文が施されている。

13、深鉢形土器 LR縄文を縦位に施文した後に、沈線文を縦位に施している。また、沈線にそって列点文が施される。

14、深鉢形土器 沈線による区画文内にLR縄文が充填されている。



第127図 第35号住居址 出土遺物(2)



第128図 第35号住居址 出土遺物(3)

15、深鉢形土器 沈線による区画文内にLR縄文が充填されている。

16、深鉢形土器 波状口縁を呈し、口縁が肥厚し段をもつ。この上には沈線が施される。括れ部は隆帯が横位にめぐり、口縁から隆帯が垂下している。また、これらには刻み目状の刺突が施されている。下部には3本1単位の沈線により、渦巻状の文様が施されている。

石器 (PL48・51・52) 1、4、打製石斧 1は長さ141、最大幅93、最小幅61、厚さ42mmの橄欖石である。側縁部の中央には刃つぶしが施してある。4は分銅型を呈し、長さ172、最大幅79、最小幅38mmを測る。重量は370gである。石質は安山岩。刃部には刃こぼれがみられる。装着部には刃つぶし加えられている。

2、局部磨製石斧 長さ172、最大幅54、厚さ24mm、重量340gを測る。石質は黒色頁岩。短冊型を呈し、表裏両面には部分的に磨き加えられている。側縁部も同様である。刃部は潰ぶされている。

第2章 検出された遺構と出土遺物

3、石英閃緑岩の自然石 長軸255、幅113、厚さ89mm、重量3,600gを測る。側縁部の一方は平滑な面を持ち、その部分には磨耗痕を顕著に残している。

5、磨製石斧 欠損品で刃部のみ残存する。残長77、刃部幅44、刃部角度28°を測る。重量150g。石質は安山岩。刃部には刃こぼれがみられる。

6、8、多孔石 6は長軸156、短軸120、厚さ49mmを測る。不整形な角礫である。重量は3,500g。石質は安山岩である。片面に凹みがある。8は長軸271、短軸184、厚さ86mmを測る。重量6,120g。石質は安山岩。凹みは全面にみられる。

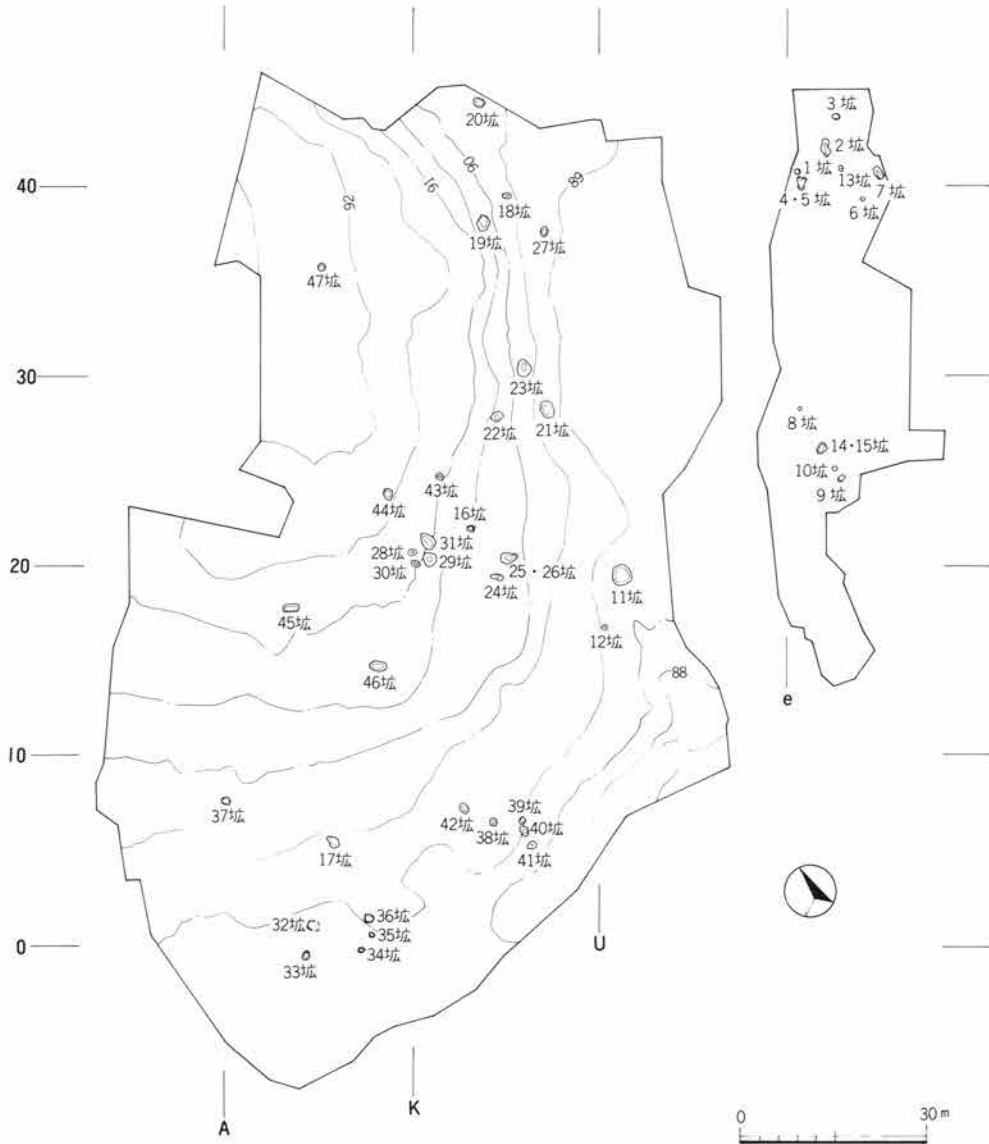
7、磨石 長さ105、幅80、厚さ66mmの楕円の球状を呈する。重量は870g。石質は安山岩。器面は擦すつたために4つの平滑な面をつくっている。また、長軸の両端は敲打に使用されている。

9、10、凹石 磨石に併用している。9は円形の平面で扁平である。長さ85、幅79、厚さ49mmを測る。石質は安山岩。10は長さ129、幅94、厚さ54mm、重量700gを測る。石質は安山岩。側縁部にも敲打痕を残す。器面に火を受けている。

第2節 縄文時代の土壇と出土遺物

台地及びその東側の微高地上に立地する。出土遺物についても土器の完形品、半完形品は極めて少なかった。このため時期の判定が困難であったが、住居址と同様の縄文時代各期の構築と考えられる。

占地を概観すると、前期は住居址と同様の立地をしながらも住居址の間を埋めるものもみられる。中期は住居址とほぼ同様である。後期は微高地上にも分布し住居址よりもやや広がりをもって占地していたことがわかった。



第129図 土壇 位置図

第2章 検出された遺構と出土遺物

第1号土壇 (第130図 P L14)

e-40グリッドに位置し、南に第4、5号土壇が近接する。南北に長軸をもつ楕円形を呈し、規模は上端で101×82cm、下端で80×62cmを測る。残存壁高は72cmの深さで黄白色砂壤土層を掘り込んでいる。埋土上層から土器片を多く出土している。

第2号土壇 (第130図 P L14)

g-41グリッド、第21号住居址の北側に位置する。平面形は南北に長軸をもつ不整形である。規模は280×92cm、深さ78cmである。壁面は黄灰色砂壤土を掘り込んでおり、2つの小ピットを重複している。

第3号土壇 (第130図)

h-43グリッドに位置し、長軸を南北方向にもつ112×92cmの楕円形を呈する。壁面は黄白色砂壤土を掘り込んでおり、やや開く立ち上がりである。深さ39cmを測る。

第4、5号土壇 (第130図 P L14)

f-39グリッドに位置する。4号は隅丸の長方形を呈し、204×90cm、深さ34cmを測る。長軸の方位はN44°Eである。立ち上がりは垂直で底面は南向きにやや下がっている。埋土中から少量の土器片と打製石斧片を出土している。5号は4号の西壁で重複する。更にピットを重複して平面形は複雑になっているが、隅丸長方形を呈していたと思われる。長軸の方位はN19°E。長軸の残存長は110、短軸は64cm、深さ35cmである。2つの土壇の新旧関係は不明である。

第6号土壇 (第130図 P L14)

i-39グリッドに位置する。東西に長軸をもち72×60cmを測る。底面の形状は円形。灰褐色砂壤土を掘り込み断面形はコップ状を呈する。深さ64cm。

第7号土壇 (第130図)

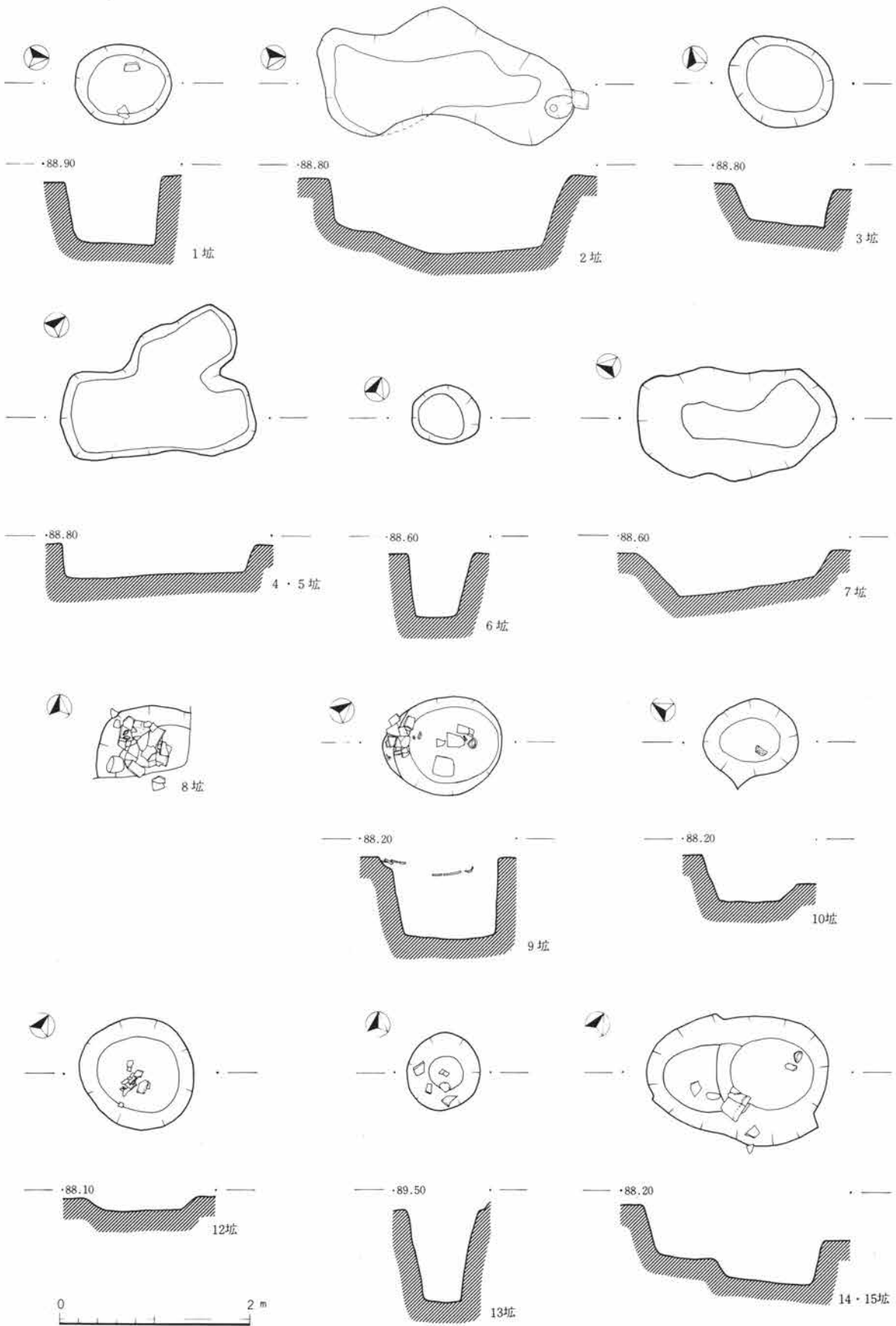
i-40グリッドに位置する。長方形に近い不整形で、2つの土壇が重複している可能性もある。規模は、208×112cm。長軸の方位はN13°W。灰褐色砂壤土を掘り込んだ壁面は緩やかに立ち上がり残存壁高は54cmを測る。

第8号土壇 (第130図 P L14)

h-25グリッドに位置し、円形周溝状遺構、第38号住居址により切られている。円形を呈していたと考えられ残長は東西で92、南北で68cm、残高は5cmを測る。第136図2の深鉢が出土しているが、これは裏面を上にして潰れていた。一部の破片は円形周溝状遺構の埋土中にも入り込んでいた。

第9号土壇 (第130図 P L14)

h-24グリッドに位置する。円形の土壇。第40号住居址内の北西コーナーに重複する。長軸を南北に持ち、128×96、深さ22cmを測る。壁は灰褐色土と小円礫の混土層を切り込んでいる。全層をとおして土器細片を出土しているが特に上層に集中していた。また、凹石、多孔石、各1出土している。



第130図 土壇平面図・断面図(1)

第2章 検出された遺構と出土遺物

第10号土坑 (第130図 P L14)

g-25グリッドに位置する。円形周溝状遺構と重複し、北側の半分は攪乱を受けている。9号土坑が南1mに近接する。平面形は確認面で100×64、底面で80×44cmの楕円を呈し、長軸の方位はN30°Wである。壁面は、小円礫を多量に含む灰褐色土層を掘り込んで作られている。

第11号土坑 (第131図 P L15)

U-19グリッド、緩斜面の端部に位置する。南北298、東西300cmの円形に近い形を呈する。壁面は灰褐色砂壤土層を掘り込んでつくられており、西側は確認面に向ってやや開いている。埋土は、遺構確認面と類似した灰褐色砂壤土であった。底面から深鉢の上半部が伏せられた形で検出されている。

第12号土坑 (第130図 P L14)

U-17グリッドに位置する。第53号住居址に近接する。平面形は南北122、東西116cmのほぼ円形を呈する。遺構確認面の茶褐色土層と埋土の識別が困難であったため残存高は5cmと浅い。皿状の出土遺物は底面から30～35cmの高さに集中している。

第13号土坑 (第130図 P L15)

h-40グリッドに位置し、第21号住居址内にある。南北80、東西76cmで円形を呈する。灰褐色砂壤土を掘り込み、深さ94cmを測る。埋土上層から土器片を出土する。

第14、15号土坑 (第130図 P L15)

g-26グリッドにあり、2つとも北半分が5号溝と重複し欠失する。14号は円形を呈し、東西へ残存長は120cm、深さ76cmを測る。壁面底面は、灰褐色土層を掘り込み、砂礫層に達している。土器は上層から出土している。15号は東西116cm、深さ99cmを測る。壁面は14号と同様である。土器は底面から20cm程の高さから出土。石皿、凹石を出土している。

第16号土坑 (第131図 P L15)

N-22グリッドに位置する。第34号住居址の張り出し部先端と重複する。径118cmの円形、深さは61cmを測る。底面はほぼ水平で、中央に自然礫3石があった。壁面はソフトロームの層を掘り込み、ゆるやかな立ち上がりをする。

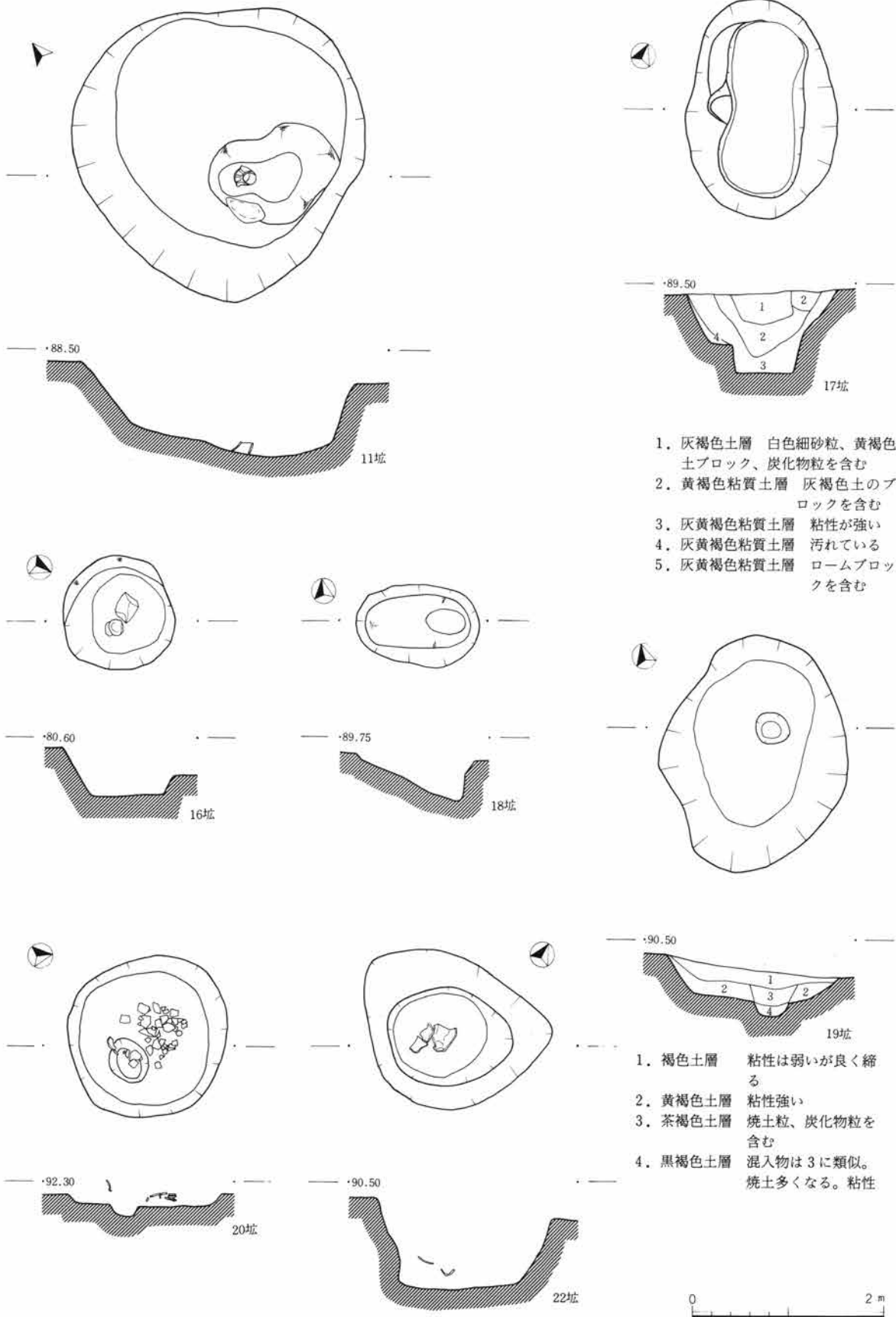
第17号土坑 (第131図 P L15)

F-5グリッド、第2号墳の周堀の内側に位置する。確認面での平面形は224×160cmの楕円形を呈するが底面は隅丸長方形を意識した掘り方で180×60cmを測る。長軸の方位はN21°Wである。壁面の残存高は78cmで、中位に稜をもち、それから上方は著しく外反する。埋土はソフトロームに類似した茶褐色土である。

第18号土坑 (第131図)

P-40グリッド、緩斜面の北側端部に位置する。128×80cmの楕円形を呈する。長軸方位はN77°W底面は東側に向って著しく傾斜しており、東側の壁面は垂直に近い立ち上がりをする。

第2節 縄文時代の土壇と出土遺物



第131図 土壇平面図・断面図(2)

第2章 検出された遺構と出土遺物

第19号土坑 (第131図 P L15)

O-38グリッドに位置する。244×182cm、深さ40cmの楕円形を呈する。長軸の方位はN21°Wである。ソフトローム層中に掘り込まれている。皿状を呈す底面の中央やや北よりには径32、深さ14cmの小ピットがある。

第20号土坑 (第131図)

N-44グリッド、緩斜面の調査区域北端部分に位置する。168×160cmのほぼ円形で深さ10cmを測る。ソフトローム層中に掘り込まれているため埋土との識別が困難であった。遺物は小破片で底面から5～30cm程の高さから出土している。

第21号土坑 (第132図 P L16)

S-28グリッドに位置する。確認面での平面形は264×190cmの楕円形に近いが底面は170×60cmの隅丸長方形を呈する。壁面から直立に立ち上がり中位で稜を持った後大きく外反している。壁高は100cm。

第22号土坑 (第131図 P L16)

O-27グリッドに位置する。確認面では東西に長軸をもつ196×160cmの不整形、底面では150×104cmの楕円形を呈する。壁面はソフトロームを掘り込んでおり、下半部は垂直に近く、上半で大きく外反する立ち上がりをなす。床面から約15cm離れて深鉢の半完形が出土している。

第23号土坑 (第132図)

Q-30グリッド、第29号住居址の張り出し部と重複する。平面形は250×194cmの楕円形を呈す。底面は124×68cmと小さく中央部分が更に一段下がっている。

第24号土坑 (第132図 P L16)

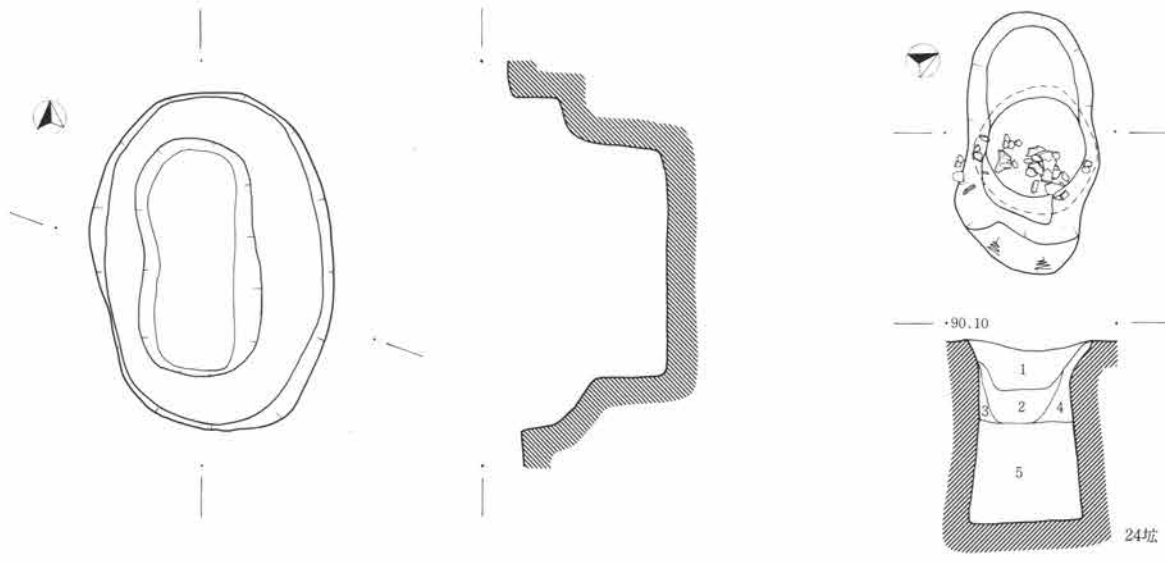
O-19グリッドに位置し、西端の一部が第6号古墳の西側周堀と重複する。確認面の形状は204×106cmの楕円形を呈し、中位に稜をもちそれに至るまではソフトローム層を掘り込んだ皿状の底面である。稜から下位の形状は径80cmの円形を呈す。壁面はオーバーハグしており底面の規模は径100cmを測る。埋土の上層には南側から流れ込んだ状態で土器片が多く出土しており、凹石、剝片も含まれていた。

第25、26号土坑 (第132図 P L16)

P-20グリッドに位置し、26号は第6号墳の周堀と重複する。25号土坑は南北188の円形で、深さ92cmを測る。壁面の掘り込みはハードローム層に達しておりやや開きぎみの立ち上がりを呈す。底部の中央に径18、深さ32cmの小ピットがある。埋土は下層と壁際にはソフトハードロームを多く含む茶褐色土がみられ、中層、上層には暗褐色の粘質土が含まれていた。26号土坑の南部分で重複している。平面形は径114cmの円形である。深さは確認面が南側に傾斜しているために61cmであるが2つの土坑の底面は25号土坑が2cm程深いだけである。壁面の状態は25号土坑と同様である。底面から10cm程の高さで自然礫が出土している。

第27号土坑 (第133図 P L16)

R-37グリッドに位置する148×122、深さ16cmの不整形の土坑。底面は緩やかに凹んでいる。底面から5

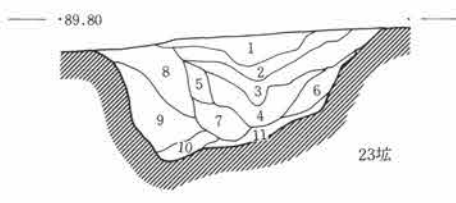
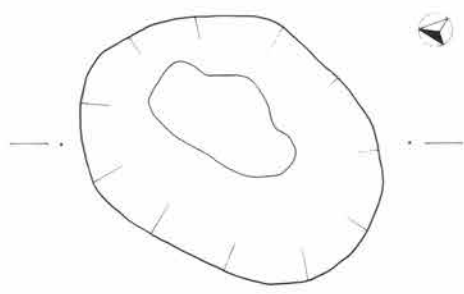
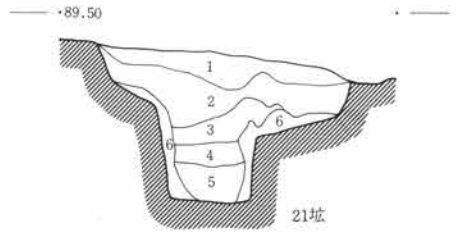


21坑

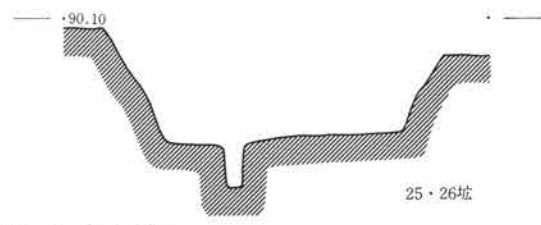
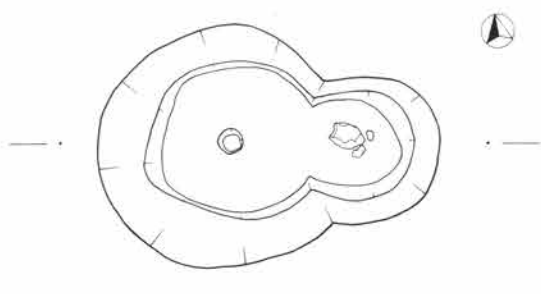
- 1. 灰茶褐色土層 白色軽石、炭化物粒を含む。自然堆積土で遺構にも延る
- 2. 茶褐色土層 茶褐色土と黒褐色土がブロック状に混在する
- 3. 黒褐色土層 褐色土の小ブロックが斑状に含入する
- 4. 茶褐色土層 色調は2より暗く、軽石、炭化物粒が少量認められる
- 5. 茶褐色土層 混入物はない
- 6. 褐色土層 ロームブロックがしみ状に入り込む

24坑

- 1. 灰褐色土層 黄色粘質土、炭化物粒を含む
- 2. 灰褐色土層 1に類似するが炭化物粒の混入が多くなる
- 3. 灰褐色土とロームブロックの混土層
- 4. 茶褐色土層 地山の崩落したもの
- 5. 茶褐色土層



- 1. 黒色土層 粘性、締め共になし
- 2. 黒褐色土層 黒色土を多く含む粘性あり
- 3. 明褐色土層
- 4. 暗褐色土層 炭化物を少量含む
- 5. 暗褐色土層 良く締っている
- 6. 暗褐色土層 黒色土を多く含む黒味が強い。炭化物、軽石少量含む



- 7. 暗褐色土層 軽石を多く含む
- 8. 暗褐色土層 7に類似するが粘性は強くなり、軽石の含入量は減る
- 9. 褐色土層 黒色土を少量含む
- 10. 明褐色土層 軽石を含む



第132図 土坑平面図・断面図(3)

第2章 検出された遺構と出土遺物

cm程の高さから小円礫に混ざり土器片を出土している。

第28号土壇 (第133図 P L16)

K-20グリッド、第9号墳の「前庭」と重複する。29・30号土壇が近接する。確認面における平面形は著しく変形しており東西134、南北118cmを測る。底面は径84cmの円形である。壁面は中位に稜をもち、上半は大きく外反している。埋土中層、底面から50cmの高さに土器片が出土している。

第29号土壇 (第133図 P L17)

L-20グリッド、第28号土壇の東側に位置する。平面形は確認面で216cm、底面で72cmの円形を呈す。断面形は播鉢状で残存壁高は128cmを測る。遺物は埋土の上層に集中している。底部近くには黒色土の堆積が5～10cmの幅で確認できた。

第30号土壇 (第133図 P L17)

K-20グリッドに位置し、第9号墳の「前庭」と重複する。平面形は著しく変形していたが東西で158cm、南北で104cmを測る。残存壁高は125cmで底面から62cmの埋土中から礫を出土している。

第31号土壇 (第133図 P L17)

L-21グリッドに位置する。確認面では292×196cmを測る楕円形を呈するが、底面においては214×72cmの隅丸長方形に近い形になっている。長軸の方位はN28°Wである。深さは103cmを測り、壁面は北壁で中位に稜をもつ他はやや開き気味に立ち上がる。

第32号土壇 (第133図 P L17)

E-2グリッドに位置する。第2号住居址と近接する。平面形は隅丸方形を呈していたと考えられ、南北104cmを測るが、第3号墳の周堀との重複により東壁を欠失している。底面は中央に向かって傾斜し皿状を呈している。残存壁高は50cm。底面から5cm程の高さに離れて大小2個体分の深鉢大破片を出土している。

第33号土壇 (第133図)

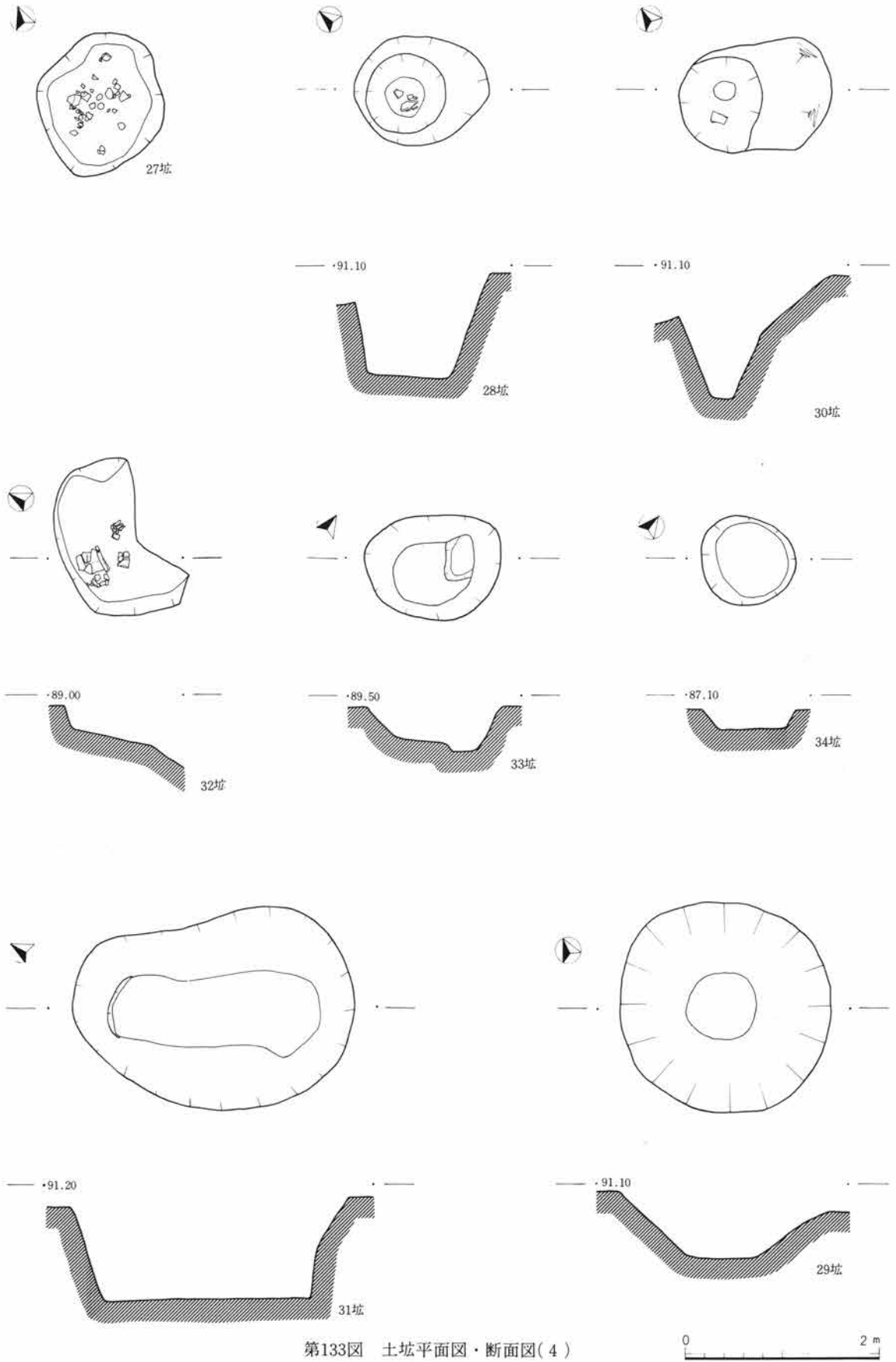
E-1'グリッドに位置する。141×108cm、深さ50cmの楕円形に近い不整形である。ソフトロームを掘り込んでおり、プランの確認が困難であった。壁面の立ち上がりは緩やかで底面は北東壁よりの径44×30cmの小ピットに向かってやや下がっている。

第34号土壇 (第133図 P L17)

I-1'グリッド、第1号住居址内に位置する。北2mに第35号、更に2mに第36号土壇がある。平面形は97×93cmのほぼ円形を呈する。壁面は垂直に近い立ち上がりで、残存壁高は21cmを測る。

第35号土壇 (第134図 P L17)

H-0グリッドに位置する。第1号住居址内にあり、ピット3と重複する。87×78cmと東西に長軸をもつ楕円形を呈し、壁面は垂直に近い立ち上がりをなす。残存壁高は28cmである。



第133図 土壇平面図・断面図(4)

第2章 検出された遺構と出土遺物

第36号土壇 (第134図 P L17)

H-1グリッドに位置し、第1号住居址の北壁と重複する。東西152cmの円形を呈していたと考えられる。残存壁高は69cmを測る。埋土中から凹石を出土する。

第37号土壇 (第134図 P L17)

A-7グリッドに位置する。120×110cm、南長に長軸をもつ長円形を呈する。壁面はソフトローム層を掘り込み緩やかに外反する。残存壁高は47cmを測る。南壁際の底面20cmの高さの埋土中から底部を欠失した深鉢が横倒した状態で出土している。

第38号土壇 (第134図 P L18)

P-7グリッドに位置し、第16号住居址に近接する。平面形は確認面で径128cm、底面は径70cmの円形を呈する。壁は残高83cmで中位に弱い稜をもつロート状の断面形である。底面は西側にやや傾斜する。

第39号土壇 (第135図 P L18)

Q-6グリッドに位置し、第40号土壇の北側にある。平面形は東西156cmの円形を呈すると考えられる。残存壁高は17cmを測る。

第40号土壇 (第134図 P L18)

Q-6グリッドに位置し、164×122cmの長円形を呈する。長軸の方位は、N 6°Wである。壁面が緩やかな立ち上がりをなすため底面は102×60cmと小さな面となる。残存壁高は58cmを測る。

第41号土壇 (第134図 P L18)

Q-5グリッドに位置する。確認面での規模は東西152、南北108cmを測る。北側の確認面のレベルが低く、平面形は著しく歪んでいる。

第42号土壇 (第134図 P L18)

N-7グリッドに位置する。第10号溝と重複するため北側の一部分は攪乱されている。南北160、東西140cmの長円形である。壁面はハードロームに達し、ロート状の立ち上がりをなし、残存壁高は83cmを測る。

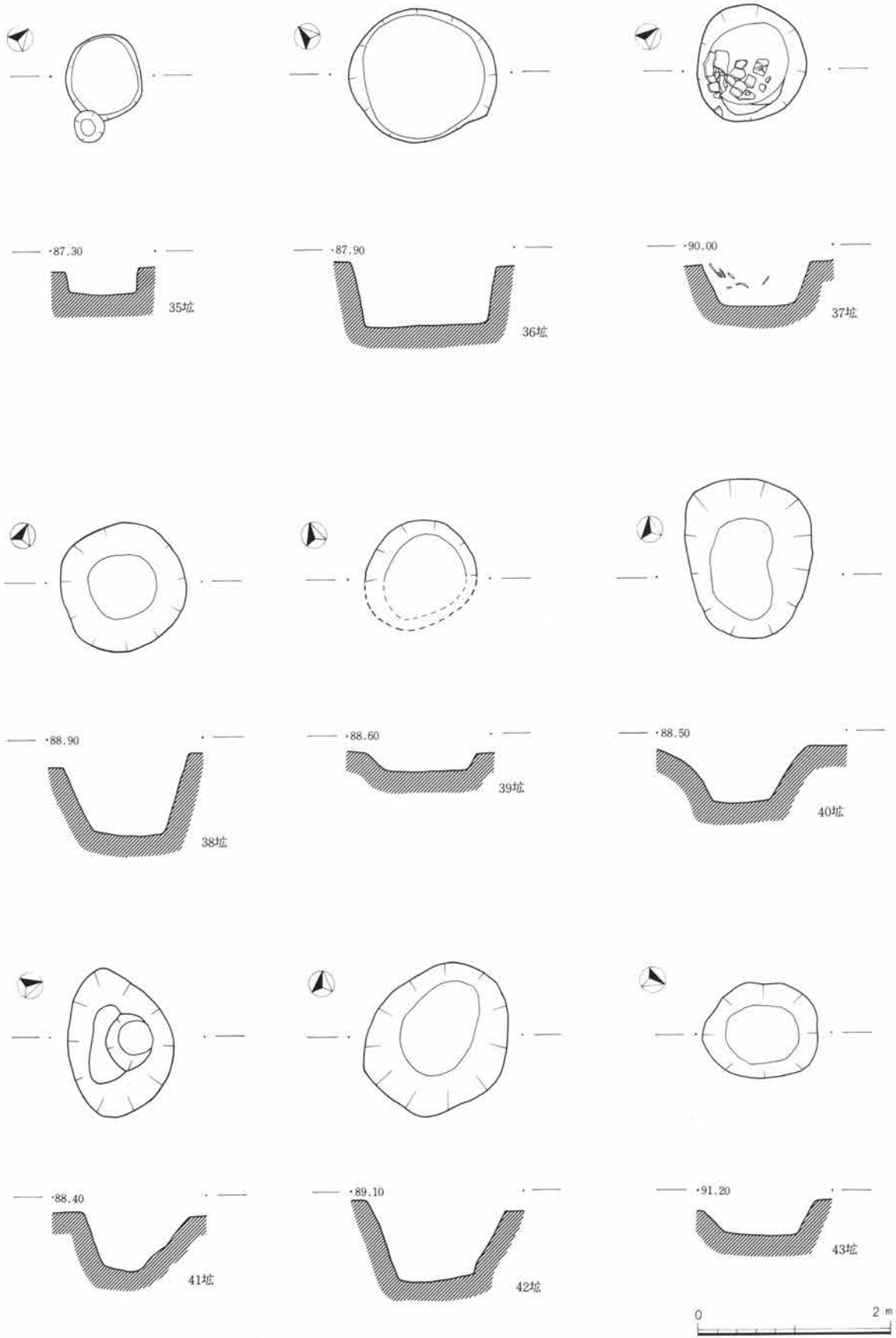
第43号土壇 (第134図 P L18)

M-24グリッドに位置する。118×96cm、南北に長軸をもつ長円形を呈する。長軸の方位はN22°Wである。残存壁高は36cmを測る。

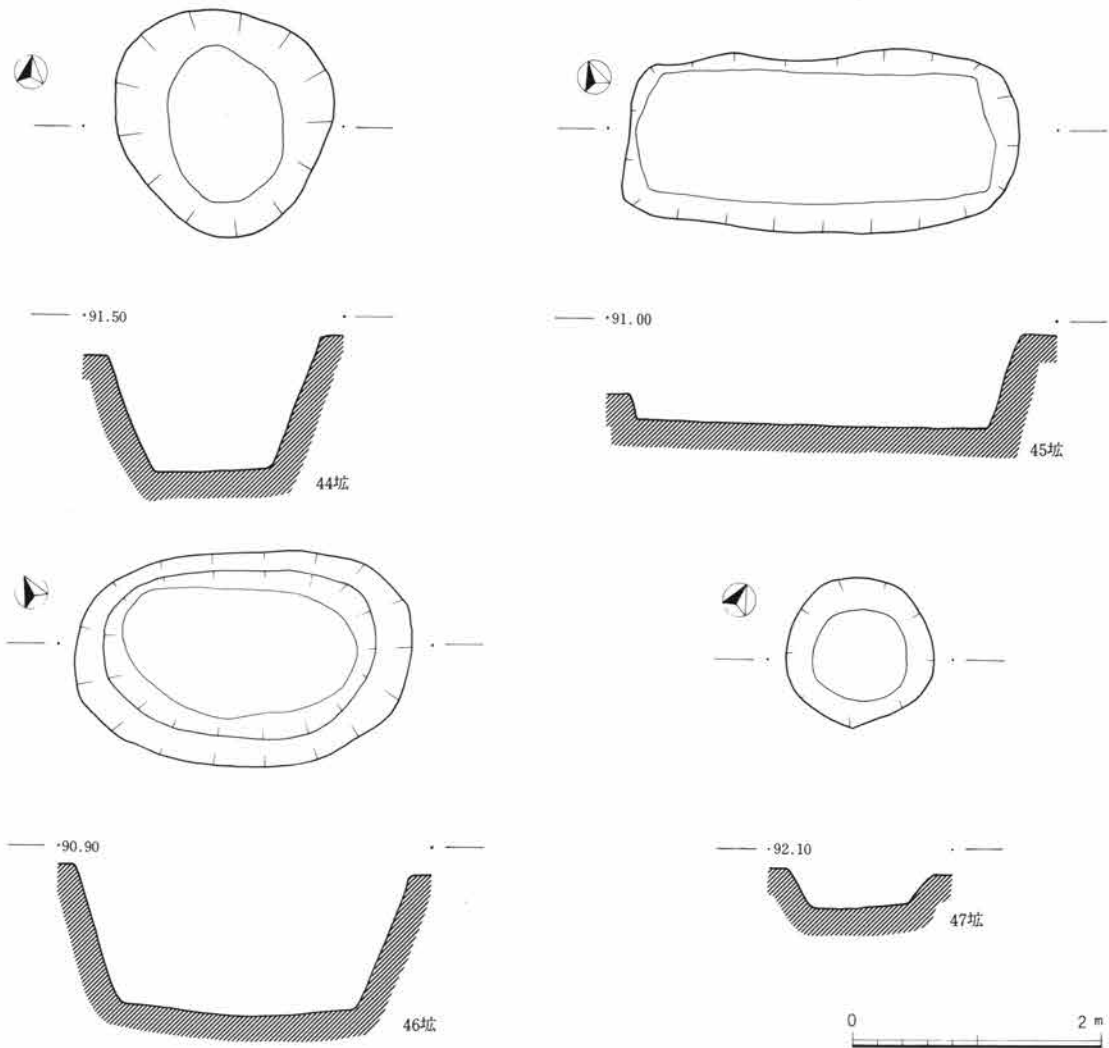
第44号土壇 (第135図 P L18)

J-23グリッドに位置し、第5号溝と重複する。確認面は180×174cmと卵を潰した形をしているが底面は124×92cmと南北に長軸をもつ楕円形を呈する。残存壁高は112cmを測る。埋土中から石匙を出土する。

第2節 縄文時代の土壇と出土遺物



第134図 土壇平面図・断面図(5)



第135図 土坑平面図・断面図(6)

第45号土坑 (第135図 P L18)

E-17グリッドに位置する。第26号住居址と重複する。また、西壁は第5号溝との重複により一部を欠失する。平面形は310×138cmの隅丸長方形を呈し、長軸方位はN70°Wである。壁面はハードロームを掘り込み垂直に近い立ち上がりをなし、残存壁高は65cmを測る。埋土はソフトロームに類似した茶褐色土である。

第46号土坑 (第135図 P L18)

K-14グリッドに位置し、第15号住居址、第7号墳と重複する。平面形は268×168の長円形であり、底面と184×120cmと同様の形を呈する。長軸の方位はN61°Wである。底面は中央にやや深く丸味を持っている。残存壁高は120cmを測る。土器細片と打製石斧を出土する。

第47号土坑 (第135図)

F-35グリッドに位置する。南側が第8号住居址と重複する。径118cmを呈し残存壁高は30cm。壁面はソフトロームを掘り込んでおりやや傾斜する。

第2節 縄文時代の土壇と出土遺物

第2表 土壇一覧表

(加E→加曽利E式 称→称名寺式 堀→堀之内式)

No	位置	規模 (cm)			形状	遺物出土状態 その他	埋土中出土の土器	遺構図面 番号	遺物図面番号
		確認面	底面	残存壁高					
1	e-40	101×82	80×62	72	楕円形	埋土上層に集中	加E4	第130図	第138図14～16
2	g-41	280×92	216×52	78	不整形		加E4・ 称II	〃	第138図17～25
3	h-43	112×92	84×64	39	楕円形		堀I	〃	第138図26・27
4	f-39	204×90	184×75	34	隅丸長方形	5号土壇と重複	堀I	〃	第139図28～32
5	f-39	110×64	102×50	35	隅丸長方形			〃	
6	i-39	72×60	50×48	64	円形、コップ状の断面		称I	〃	第139図33～35
7	i-40	208×112	142×30	54	長方形に近い不整形			〃	
8	h-25	92×68		5	楕円形と考えられる	深鉢半完形出土	加E4 称I	〃	第136図1・2 第139図36～39
9	h-24	128×96	114×80	22	南北に長軸をもつ円形	埋土上層に集中 凹石、多孔石	加E4 堀I	〃	第136図3・4 第139図40～42
10	g-25	100×64	80×44	16	楕円形		加E4 称I～II	〃	第140図43 第144図107
11	v-19	300×298	244×224	110	円形に近い不整形	底面から深鉢出土	加E4	第131図	第136図5
12	u-17	122×116	88×76	5	円形、底面は皿状	底面の30cm程上に 集中、石斧出土	諸b	第130図	第137図8 第140図44・45
13	h-40	80×76	36×34	94	円形、断面は筒状	埋土上層に集中	加E4～ 堀I	〃	第140図46～52
14	g-26	120×72	68×56	76	東西に長軸をもつ楕円	15号土壇と重複 石皿、凹石出土	称I～ 堀I 諸b	〃	第136図6・7 第140図53～56
15	g-26	116×84	76	99	〃		称I～II	〃	第144図108
16	N-22	118	82×76	61	円形	34号住と重複	堀I	第131図	第140図57
17	F-5	224×160	180×60	78	楕円形、底面隅丸矩形		諸b	〃	第140図58
18	P-40	128×80	88×52	48	楕円形、底面、傾斜		加E4～ 堀I	〃	第141図59～61
19	O-38	244×182	176×120	40	楕円形底面に小ピット		加E4	〃	第141図62
20	N-44	168×160	136	10	円形、底面に小ピット	埋土下層に集中	加E4 称I	〃	第141図63～66
21	S-28	264×190	170×60	100	楕円形、底面隅丸矩形		加E4 称I	第132図	第141図67・68・70
22	O-27	196～160	150×104	92	不整形		加E4	第131図	第137図10
23	Q-23	250×194	124×68	54	楕円形	29住張り出し部	称I～ 堀II	第132図	第141図71・72
24	O-19	204×106	168×100	146	楕円形とコップ形が結 合した形	埋土上層に集中凹 石	称II	〃	第143図80・82
25	P-20	188×172	120×118	92	円形、底面に小ピット	凹石出土	称II～ 堀I	〃	第143図74～79・81
26	P-20	114×108	68×66	61	円形	25号土壇と重複	堀I	〃	第137図9

第2章 検出された遺構と出土遺物

27	R-37	148×132	128×108	16	不整形	埋土下層に集中	称 I～II	第133図	第144図107
28	K-20	134×118	84×80	130	底面は円形	埋土中層に集中		//	
29	L-20	216	72×68	128	円形、断面は楕円形			//	第143図86
30	K-20	158×104	22×20	125	長円形、底面は円形			//	
31	L-21	292×196	214×72	103	楕円形			//	
32	E-2	104	126	50	隅丸方形	大型破片を出土 3号墳と重複	諸 b 称 II	//	第137図12 第142図 第143図83
33	E-1'	141×108	82×68	50	楕円形に近い不整形			//	
34	I-1'	97×93	78×70	21	円形	1住内に位置する	称 II～ 堀 I	//	第137図11
35	H-0	87×78	80×69	28	円形に近い	1住内に位置する		第134図	
36	H-1	152×137	125	69	円形	1住と重複		//	
37	A-7	120×110	84×76	47	南北に軸をもつ長円形	深鉢の半完形	加 E 3	//	第137図13 第143図88
38	P-7	128	70×65	83	円形、断面はロート状		諸 b	//	第144図98
39	Q-6	156	84	17	円形			//	
40	Q-6	164×122	102×60	58	長円形		諸 a～b	//	第144図 89～92
41	Q-5	152×108	36	53	不整形		諸 b	//	第144図97
42	N-7	160×140	100×72	83	長円形		諸 b	//	第144図93
43	M-24	118×96	74×60	36	長円形		諸 b	//	第144図94・95
44	J-23	180×174	124×92	112	不整形、底面は楕円形	石匙出土	加 E 3	第135図	第144図99
45	E-17	310×138	282×104	65	隅丸長方形	26号住内に位置す		//	
46	K-14	268×168	184×120	120	楕円形	打製石斧出土	加 E 3～4 称 I～II	//	第144図100～102
47	F-35	118	75×72	30	円形	8号住と重複		//	

出土遺物

第1号土壇出土土器 (第138図14~16、P L56) 14は口縁部破片、やや内彎ぎみに立ち上がる。R Lの縄文を地文とし、沈線で区画した内側を磨り消している。隆線の下には刺突が連続して加えられている。15は縦位の微隆起帯で区画した後、その区画外にL R縄文を施文している。16は微隆起帯区画にL R縄文を施しているが、充填縄文の可能性もある。

第2号土壇出土土器 (第138図17~25、第144図106、P L47・56) 17は平縁の口縁部破片である。横位の微隆起帯を施した後にL R縄文を施文している。縄文は1回の施文幅が小さく施文方向にやや乱れが生じている。18も口縁部破片である。横位の微隆起帯と沈線が施されている。縄文はL R縄文である。19は胴部破片である。沈線により渦巻状の区画文を施した後、その区画外にL R縄文を充填している。20は口縁部破片である。口縁の肥厚した部分に沈線による区画と刺突が施されている。21は波状口縁の破片である。口縁にはC字状の隆帯を貼付し、口唇内側には沈線や刺突文を加えている。中央には貫通孔がある。また、垂下する隆帯には刻み目状の刺突が加えられている。胎土には輝石、石英などの鉱物粒が認められている。焼成も良好で、内外面ともていねいな調整がなされている。22は胴部破片で沈線により文様構成がなされている。23は同様である。24と25は沈線により区画した中に列点を施している。106は波状口縁の先端に環状の把手が付けられている。胴部には沈線が施されている。

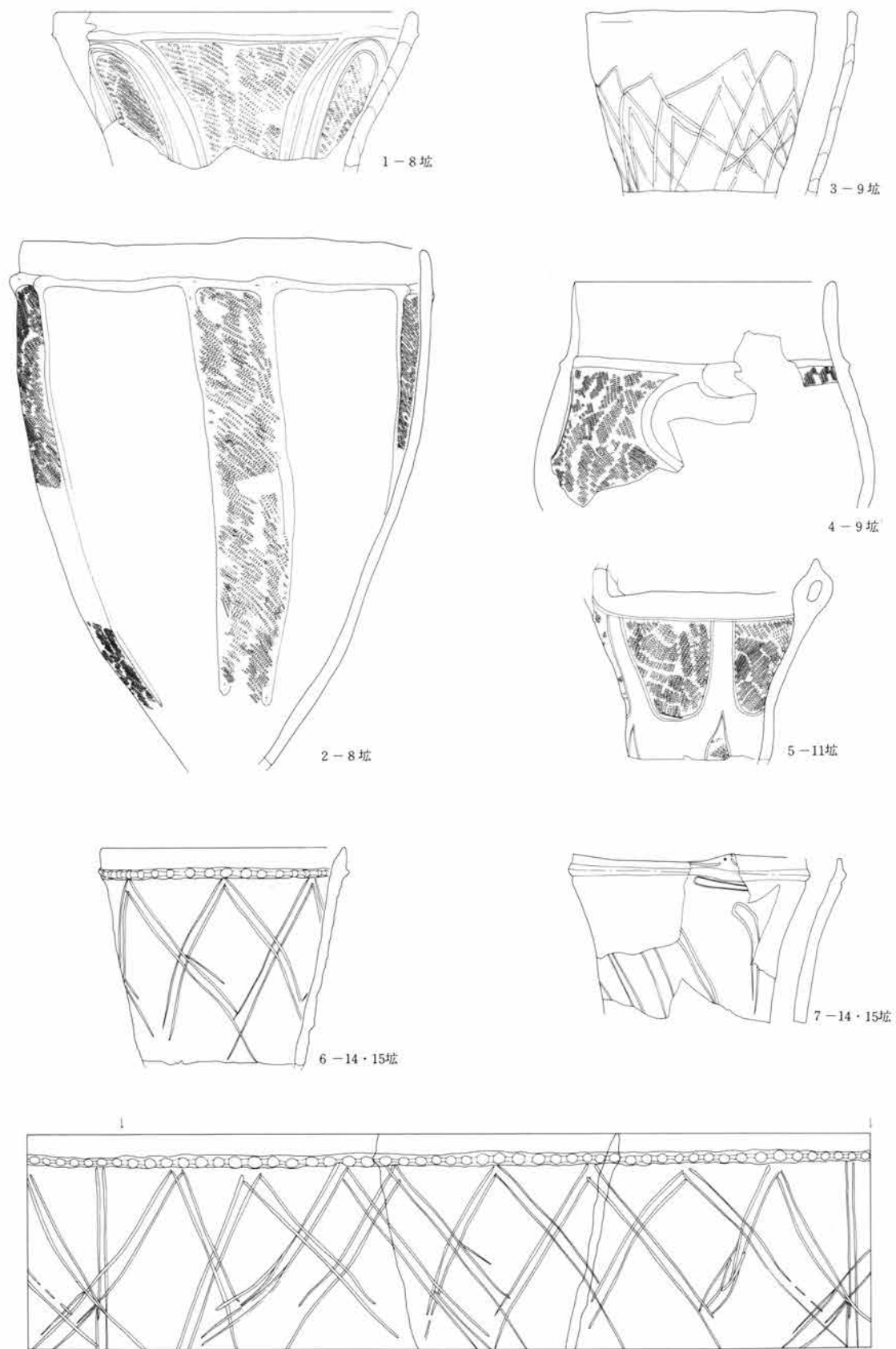
第3号土壇出土土器 (第138図26・27、P L56) 26は環状把手でその内面は沈線と2つの刺突によりC字状の文様が構成されている。以下は無文で内外面ともていねいな器面調整がおこなわれている。27は胴部破片である。沈線によって文様構成され括れ部には8字状の貼付文が施される。沈線の条間には列点が施されている部分もある。

第4号土壇出土土器 (第139図28~32、P L56) 28は口縁部の破片で、L Rの縄文を横位に施文する。やや肥厚した口縁端部には2条の沈線が横走し、その間に刺突が施されている。29はL R縄文を横位に施文した後に、沈線文を施している。30は頸部から胴部にかけての破片である。L R縄文を横位に施文した後に太い沈線を施し、縦位の8字文を貼付している。31は沈線にのる2本の曲線文が施されている。小破片であるが1.2cmと器肉が厚い。32は口縁部の破片である。口唇はやせて尖形を呈する。横走する沈線とこれに接し、縦位、斜位に垂下する複数の沈線である。外面には炭化物が付着している。

第6号土壇出土土器 (第139図33~35、P L56) 33は口縁部の破片である。沈線区画内にL R縄文を充填させている。34も口縁部の破片であるがやや内彎ぎみに立ち上がり、口唇部は内折する。沈線区画内にL R縄文を充填させている。35は胴部破片である。無文地に隆帯を貼付し、これに竹管状の施文具で刺突を連続させている。外面にはススが付着している。厚さ1.1cm。内外ともていねいな調整が加えられている。

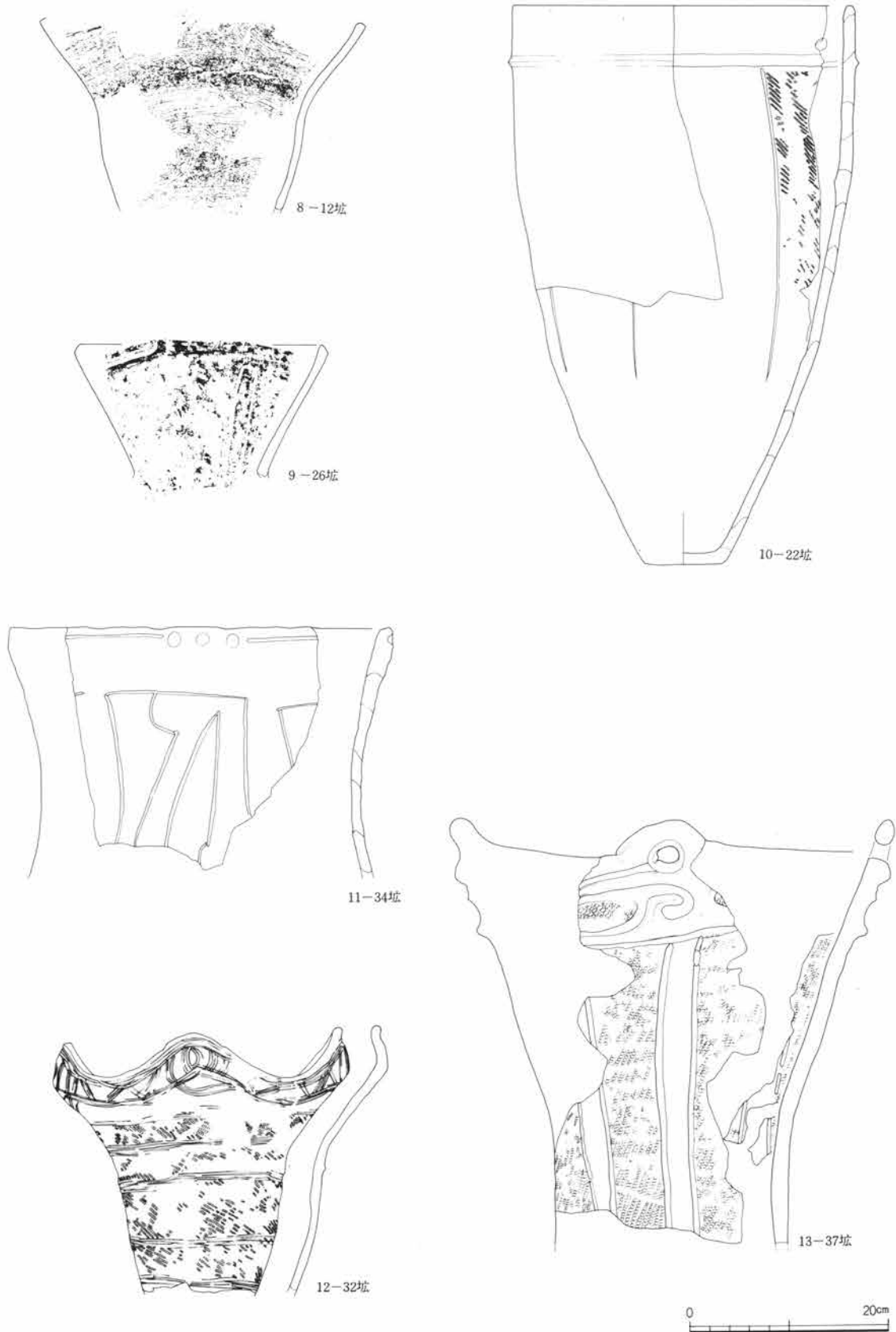
第8号土壇出土土器 (第136図1・2、第139図36~39、P L55・56) 1は深鉢形土器である。口縁部に無文帯をもちその下に微隆起帯が巡っている。胴部には微隆起帯によるV字状、∩字状の区画文が施され、区画外の縄文は磨り消される。口縁部の微隆起帯は∩字状文と接する部分が小突起状に肥厚している。縄文はL Rで横位に施文される。2も深鉢形土器。底部を欠損する。口径41.4cm。口縁部に無文帯が巡りその下に微隆起帯が巡る。胴部には平行の微隆起帯による区画文が5単位配され、その区画内にはL R縄文が充填されている。口縁部下の微隆起帯の交点部はコブ状に盛り上がっている。36は沈線区画文の中に列点文が充填している。37と38は同一個体と考えられ、胴中位で強く括れる大型の深鉢形土器と考えられる。L R縄文を縦位に施文している。口縁端部には幅の狭い無文帯があり、横走する微隆起帯により区画される。胴部にはV字状、∩字状の微隆起帯による区画文が施され、その頂部はつまみ上げられて突起状をなしている。39

第2章 検出された遺構と出土遺物

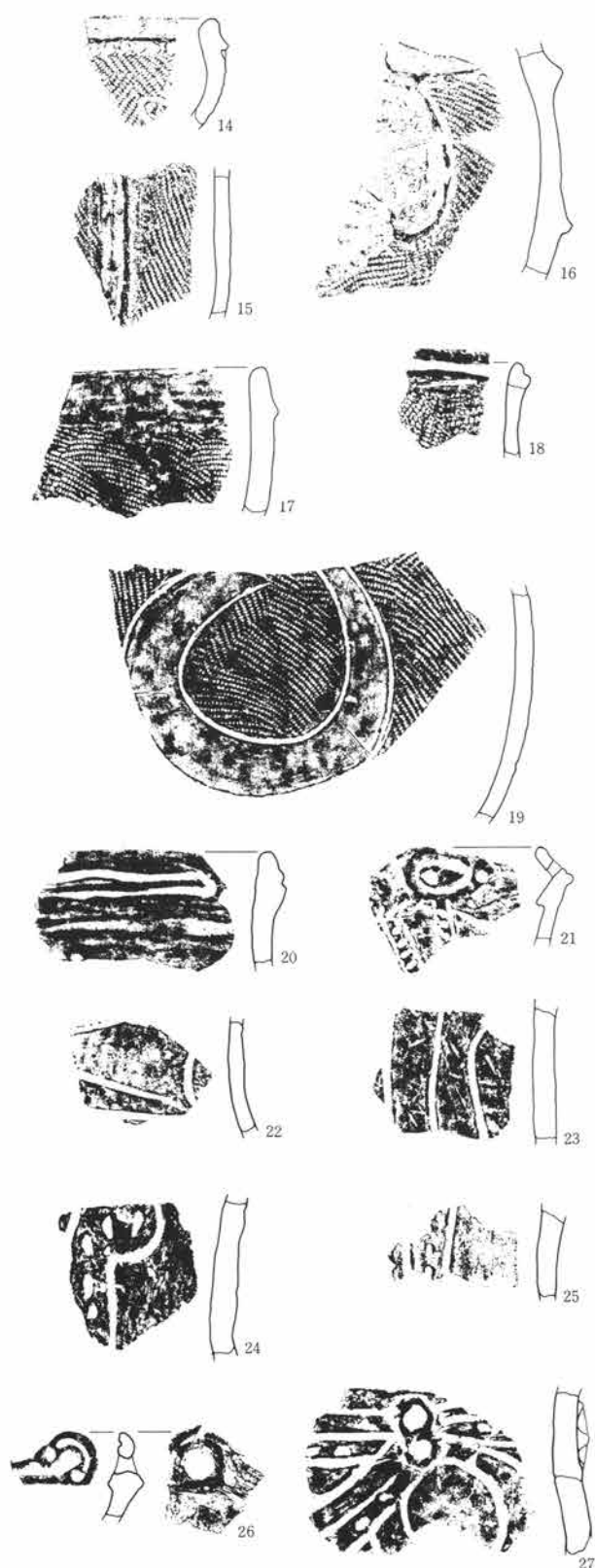


0 20cm

第136図 土坑 出土遺物(1)



第137図 土壇 出土遺物(2)



第138図 土壇 出土遺物(3)

は深鉢形土器の破片でLR縄文を横位に施文した後、沈線を横位にめぐらせ、磨り消し縄文帯を交互に配している。精製土器である。

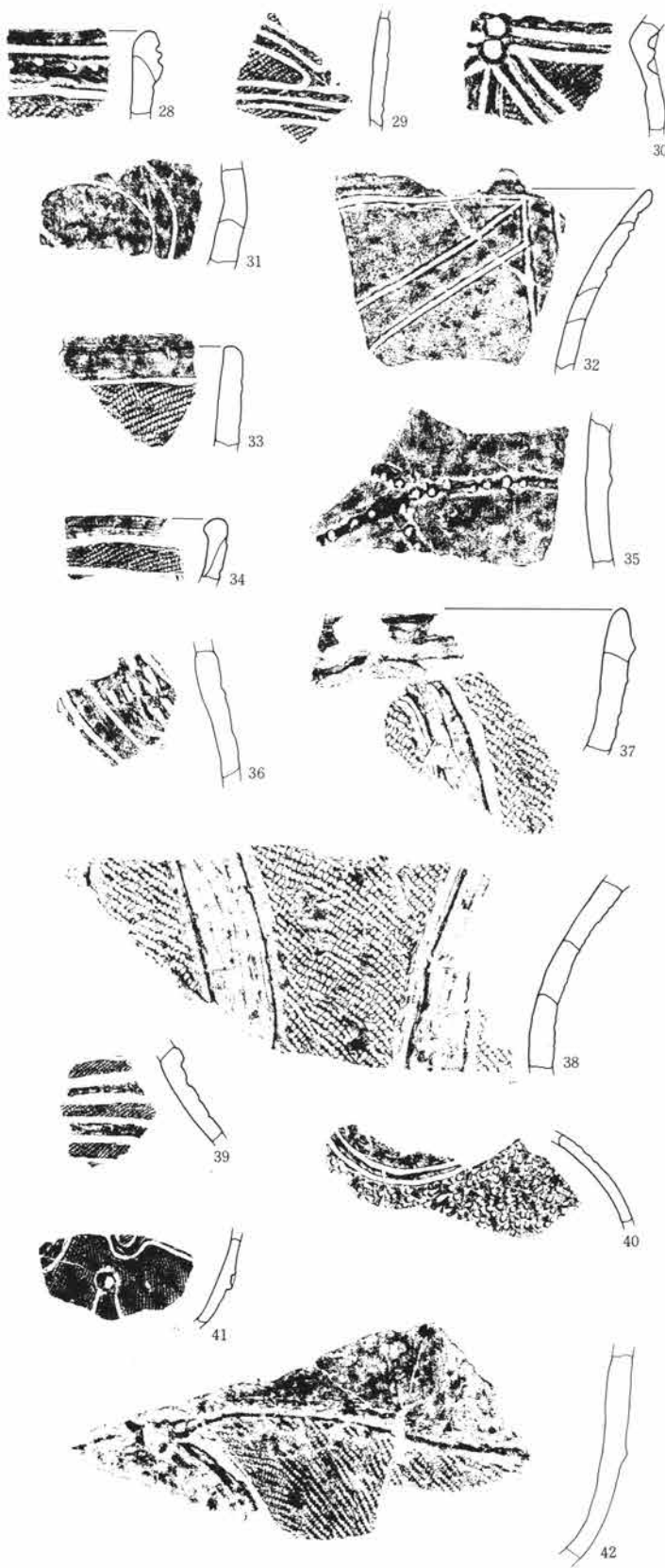
第9号土壇出土土器(第136図3・4、第139図40~42、P L55・56) 3は深鉢形土器。口縁部は無文で、胴部には沈線により、山形文を1段めぐらせ、その下位に格子目状に交差する斜行沈線を施している。4は両耳壺形土器である。橋状の把手をもつ。口縁部は長く直立気味に立ち上がり、胴部は球形を呈する。口縁部には無文帯をもち、その下には微隆起帯がめぐる。胴部には微隆起帯の区画文が施され、その区画内の縄文は磨り消されている。縄文はLRを縦位に施文している。40・41はともに壺形土器を呈すると思われる。40は胴部下位に最大径をもち、厚さ0.5cmの小型精製土器である。2条の横走る沈線を境に上位は無文で、下位は列点を充填している。外面は暗褐色、内面は黒色をなす。41は残存上位に最大径があると思われる。RL縄文を横位に施文し、区画内を磨り消している。鋸歯状の区画文上位には円形の貼付文が施されている。厚さ0.6cm、内外面ともに黒色を呈する。42は胴部破片である。弧状の微隆起帯による区画文が施され、口縁は無文となっている。区画内にはLR縄文が充填されている。

第10号土壇出土土器(第140図43、第144図109、P L47・56) 43は厚さ0.5cmの小破片。微隆起帯で渦巻文を描いたと思われる。109は深鉢形土器の把手。偏平で楕円形を呈し、2つの透孔がある。胴部には沈線が施されていたと思われる。

第11号土壇出土土器(第136図5、P L55) 口径25.2cm。口縁部には無文帯をもち、その下に沈線がめぐっている。また、口唇部には橋状把手を1対もつ。胴部にはU字状や〇字状の沈線区画文を6単位施している。縄文はRLを最上位のみ1段横位に、以下は縦位に施文しているが区画内充填の可能性もある。

第12号土壇出土土器(第137図8、第140図44・45 P L55・56) 8は胴部の中位を括れ、上半は強く

第2節 縄文時代の土壇と出土遺物

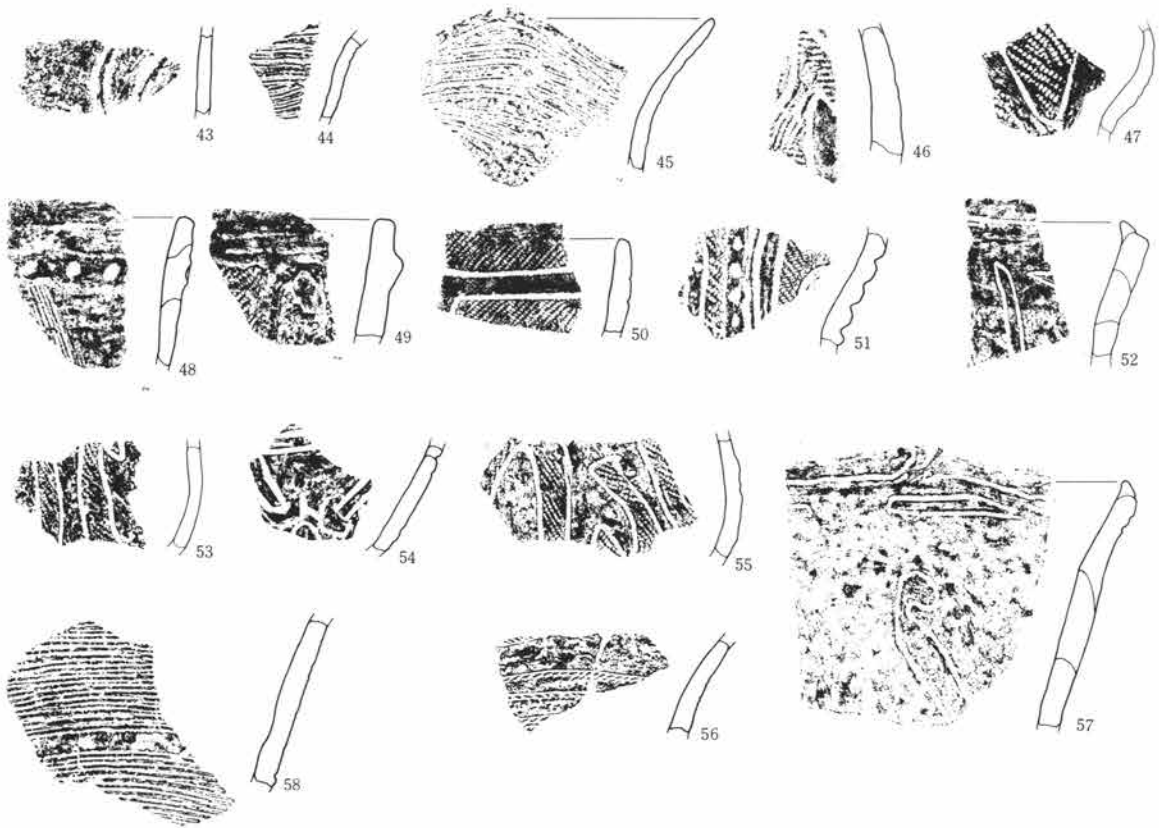


第139図 土壇 出土遺物(4)

外反する。波状口縁を呈すると思われる。文様は半截竹管による集合沈線を施す。口縁部は波状と横位の組み合わせである。その下に狭い無文帯をもつ。下半には横線にはさまれた渦巻や弧状の沈線によるモチーフも見られる。44は半截竹管による集合沈線で条線文を呈している。45は強い波状口縁を呈する小型の深鉢形土器の破片でラップ状に外反する。半截竹管による集合沈線が横位に施文されている。RL縄文が横位に施文されているがほとんどが消されている。

第13号土壇出土土器(第140図46~52、第144図105、P L 47・56)

46は沈線による区画文内にLR縄文を充填している。47はやや丸味のある胴部破片である。LR縄文を縦位に施文し、波状の沈線区画文の外側を磨消している。48は平縁の口縁部片。隆帯を貼付し、口縁部無文帯と下位文様帯を区画する。隆帯には刺突が連続する。下位には5本の櫛歯状工具による条線が垂下する。49も口縁部に無文帯をもつ破片。微隆起線によって波状の区画文が施され、その区画内にLR縄文が充填されている。50は沈線で区画した後に、LR縄文を充填している。51は胴部破片である。指頭状の圧痕をもつ隆帯が垂下し、沈線の区画文内にはLR縄文が充填されている。52は口縁部破片。外反ぎみに立ち上がり、口縁は内折して尖る。また、口唇上には沈線が横走する。105は弱い波状口縁の波頂部にS字状の貼付文があったと思われる。波頂下には円形状の貼



第140図 土塚 出土遺物(5)

付文があり、これから左右に2本の微隆起帯がめぐっている。また、微隆起帯の間には刺突が連続する。

第14号土塚出土土器(第137図6・7、第140図53~56 P L47・57) 6は深鉢形土器。口径25.2cm。口縁部に無文帯をもち、その下に指頭状の押捺文が連続した隆帯がめぐっている。胴部には平行する2本の沈線を斜行させることにより、格子目状の文様が描出されている。7は深鉢形土器。波状口縁を呈すると思われる。口唇は尖り、外面に沈線と刺突文が施される。その下には隆線がめぐり、口縁部と胴部を区画する。胴部には、沈線により区画が施されている。53・55は同一個体の破片である。微隆起帯の胴部。沈線によりJ字、H字状の区画文を施し、その区画内にLR縄文を充填している。54は2本の平行する沈線とU字状の貼付文が施される。56は口縁部破片で52に類似する。口縁部には弱い波状の突起があり、中央に刺突が加えられている。端部をめぐる沈線も、波頂部でと切れている。

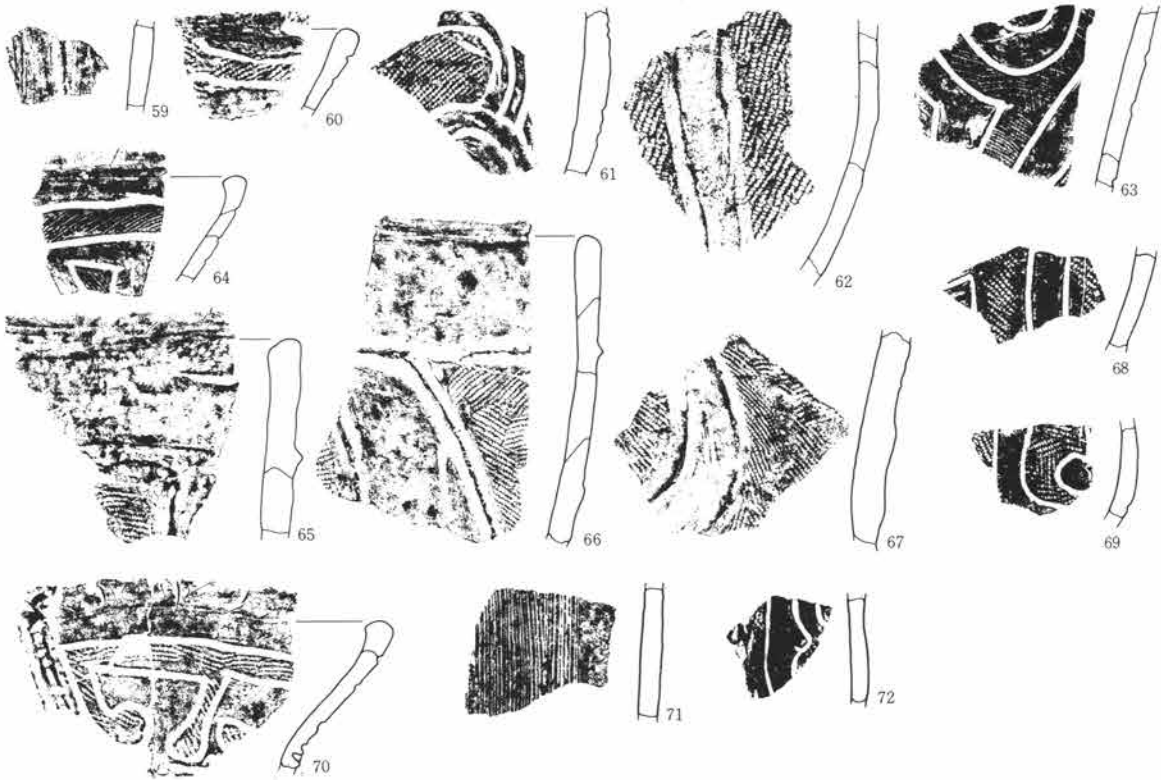
第15号土塚出土土器(第144図108、P L47) 把手である。内側にはC字状の沈線が施され、その中央は穿孔されている。

第16号土塚出土土器(第140図57、P L57) 半截竹管による平行沈線を横走させ、その上に刻み目状の刺突を加えている。

第17号土塚出土土器(第141図58、P L57) 胴部破片。中位に1cmほどの無文帯をはさみ、半截竹管による横位の集合沈線が施されている。

第18号土塚出土土器(第141図59~61、P L57) 59は胴部の小破片。垂下する微隆起帯と条線による施文がみられる。60は口縁部の破片で、口唇がやや肥厚する。横位の沈線で区画し、LR縄文を充填している。61は胴部破片で、沈線によって区画文を施している。区画内にはLの縄文が充填されている。

第19号土塚出土土器(第141図62、P L57) 胴部破片である。2本の太い沈線を垂下させ、その後、RL



第141図 土壇 出土遺物(6)

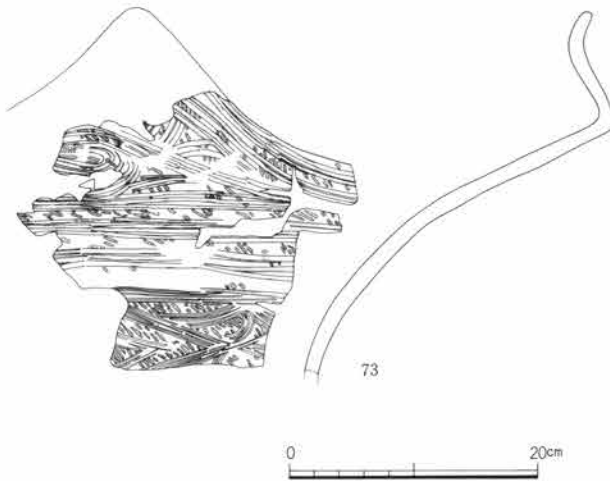
縄文を縦位に施している。厚さ1cm、にぶい橙色を帯びている。

第20号土壇出土土器 (第141図63~66、P L57) 63は沈線の区画文内にL R縄文が充填されている。64は口縁部の破片である。やや内彎ぎみに立ち上がり、口唇は内側に突出する。沈線により区画し、L R縄文を充填している。65は口縁部破片である。横位の微隆起帯により区画され、口縁部は無文帯となる。胴部も微隆起帯により区画され、その区画内にR L縄文を充填している。66は大型の深鉢形土器の破片である。口縁部に幅広い無文帯がめぐる。胴部は微隆起帯による区画文が施され、その区画内にL R縄文が充填されている。

第21号土壇出土土器 (第141図67・68・70、P L57) 67は深鉢形土器の胴部破片である。微隆起帯による区画文の中にL R縄文が充填されている。68は沈線で区画した後にL R縄文を充填している。70は深鉢形土器の口縁部破片である。口唇は内側に突出する。口縁部から胴部にかけて、押し引き状の連続刺突文をもつ隆帯が垂下している。胴部には同様の隆帯が横位にめぐっている。口縁部は無文帯となり、この下には釣手状に区画文が施され、L Rの縄文が充填されている。

第22号土壇出土土器 (第137図10、第141図69、第144図104、P L47・55・57) 10は大型の深鉢形土器である。口縁部は無文帯をもち、その下に微隆起帯がめぐる。胴部は沈線を懸垂している。縄文は胴上半部のみに、L R縄文を縦位に施しているが区画内充填の可能性もある。口縁部には補修孔と思われる焼成後の穿孔が施されている。69は沈線区画文内にL R縄文が充填されている。104は把手のみの残存である。透孔の周りにはC字状の沈線文や貼付文が施されている。

第23号土壇出土土器 (第141図71・72、P L57) 71は櫛歯状施文具による縦位の条線を施しているが、無文帯もみられる。72は刻み目の施された隆帯が垂下し、沈線区画文内にはL R縄文が充填されている。



第142図 土壇 出土遺物(7)

部は尖り、外面には刺突文が連続する。下位には縦位の沈線が施されている。81は沈線による区画文が描かれ、内側に列点が加えられている。80は胴部破片で79と同様列点が施されている。76~78も胴部破片でいずれも沈線により区画文が施されている。76・77は沈線により渦巻文を描出している。76は区画内に刺突も施している。78は厚さ0.7cmの小破片である。沈線区画文の中にLR縄文を充填している。

第26号土壇出土土器 (第137図9、P L55) 口唇には豆粒状の貼付文と沈線が施されている。胴部には沈線による区画文が間隔をおいて施文されている。

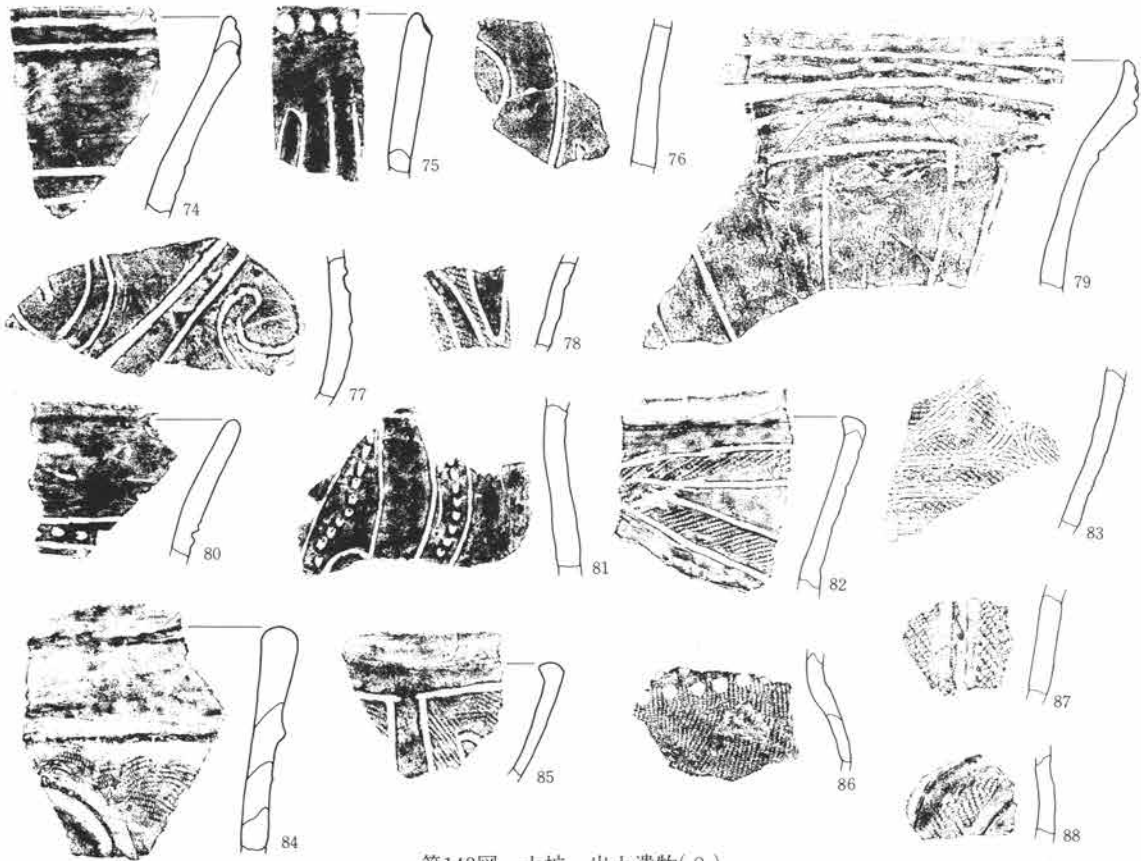
第27号土壇出土土器 (第143図84・85、第144図107、P L47・57) 84は口縁部破片である。口縁部は横位の微隆起帯がめぐり、この上位は無文帯である。胴部は微隆起帯によりV字状の区画文が施され、区画内にRL縄文が充填されている。85は口唇が内側に突出する。沈線で区画文を施し、内側にLR縄文を充填している。107は筒状の把手で、先端には2本の粘土紐が組み合せてアーチ状に渡架している。下位には両側面と内側から穿孔が施されている。胴部には沈線が施されている。

第29号土壇出土土器 (第143図86、P L57) 胴部の括れ部下位の破片である。RLの縄文を施し、括れ部は磨消し、横位に2列、押捺状の刺突を加えている。

第32号土壇出土土器 (第139図12、第142図73、第143図83、P L55・58) 12は深鉢形土器である。4単位の強い波状口縁を有する。口縁部は上半が直立ぎみに内折し、外面に稜をもつ。胴部は下半が筒状を呈するが中に隆線状の稜部をもつ。口縁部には半截竹管2本1単位の平行沈線がめぐり、波頂下を中心として弧状の沈線が縦位に施される。胴部はRL縄文を横位に施文した後、間隔をあけて平行沈線を横位にめぐらせている。83はRLの縄文を地文とし、半截竹管を2本1単位とした集合沈線により文様構成されている。73は深鉢形土器の口縁部破片で、波状口縁を呈する。口縁部がくの字状に内折する。半截竹管による集合沈線で文様構成され、渦巻文や弧線文なども描かれている。縄文はRLが横位に施文されている。

第34号土壇出土土器 (第137図11、第144図97、P L55・58) 11は深鉢形土器である。口縁部はやや肥厚する。指頭状の円形押捺文が横位に3点施され、その左右には沈線が引かれる。胴部には沈線による区画文が描かれている。97は横位のRL縄文を地文とし、半截竹管による集合沈線が施されている。

第37号土壇出土土器 (第137図13、第143図88、P L55・58) 13は大型の深鉢形土器である。口唇には環状把手を有する。口縁部文様帯は隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文である。胴部は2本の平行沈線が垂下し、その区画内の縄文は磨消される。縄文はRLで、口縁部が横位、胴部が縦位に施文されているが、乾



第143図 土埴 出土遺物(8)

燥の早い段階で施文したためか、縄文の節は不明確である。88はLR縄文を施文した後に微隆起帯が貼付されている。

第38号土埴出土土器(第144図98、P L58) 口縁部の破片である。棒状工具による結節沈線を横・縦位に施文している。

第40号土埴出土土器(第144図89~92、P L58) 89・90は同一個体である。弱い波状口縁を呈し、口縁部はくの字状に内折する。端部には半截竹管による平行沈線を2単位施し、結節沈線状に刺突を連続させている。下位も同様の沈線によって文様を構成している。91は半截竹管を施文具にした弧状沈線のモチーフが描かれている。92は底部の破片である。RL縄文を横位に施文している。横位の浮線文上は矢羽根状に刺突され、各沈線文間に1条の連続した刺突文が施されている。

第41号土埴出土土器(第144図97、P L58) 胴部破片。櫛歯状の施文具によりタッチの弱い横線を施している。

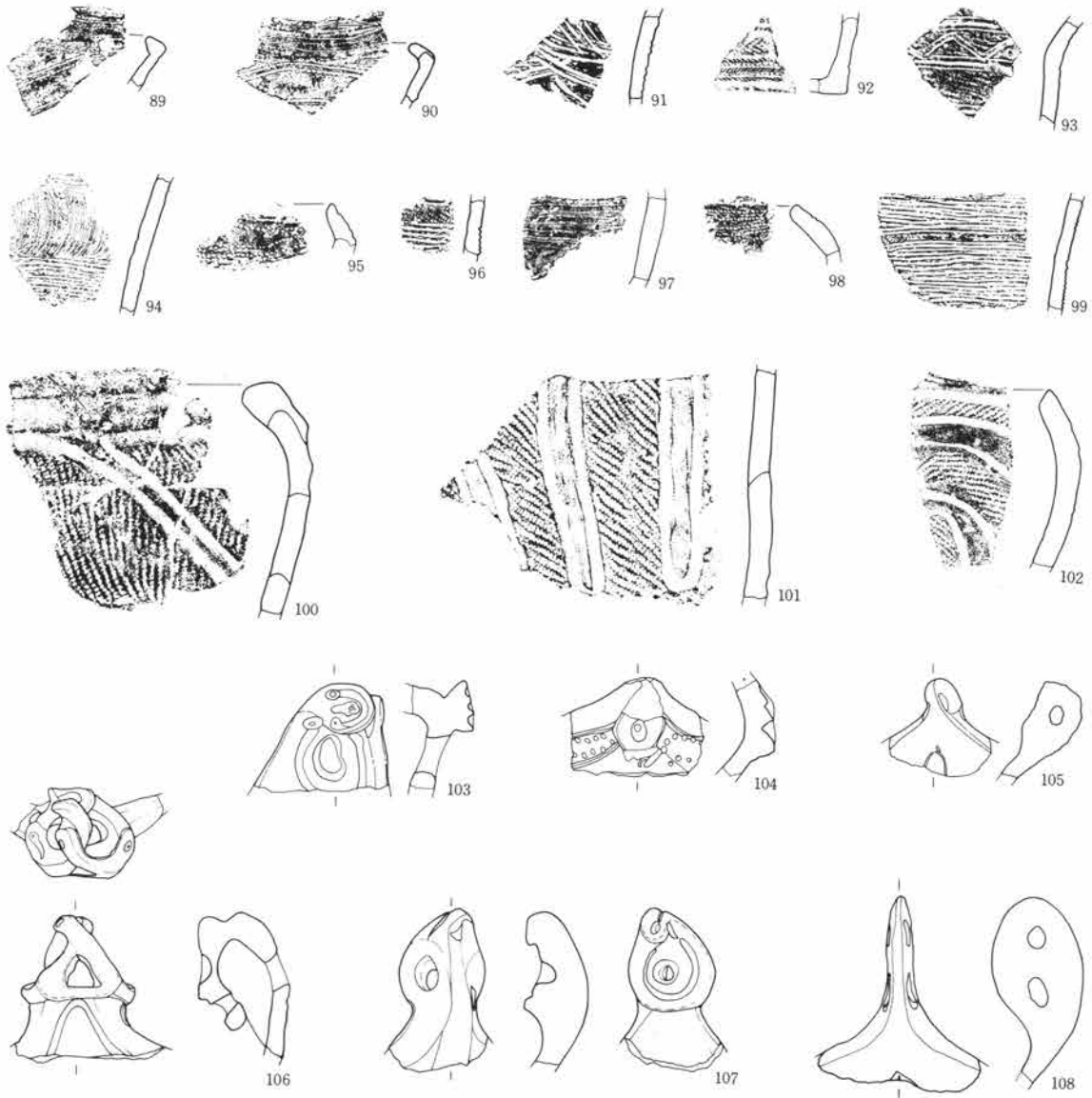
第42号土埴出土土器(第144図93、P L58) 胴部の括れ部下位の破片。LR縄文を施文した後、半截竹管による平行沈線を数段横位にめぐらせ、その間に山形文を加えている。

第43号土埴出土土器(第144図94・95、P L58) 94は半截竹管による弧状の集合沈線をはさみ、上下に集合沈線を横走させている。95は弱い波状口縁の端部である。細い棒状工具により連続した刺突文を施している。

第44号土埴出土土器(第144図99、P L58) 深鉢形土器の破片である。半截竹管による集合沈線が全面に施されている。

第46号土埴出土土器(第144図100~102、P L58) 100は口縁部破片である。やや内彎ぎみに立ち上がり、

第2章 検出された遺構と出土遺物



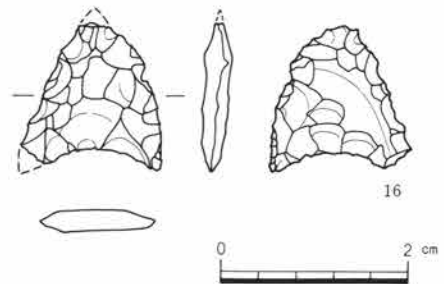
第144図 土塚 出土遺物(9)

端部の肥厚が著しい。口唇下には無文帯がめぐり、横位の微隆起帯により区画される。この下位はRL縄文を施した後に微隆起帯とそれに沿った沈線が斜行する。101はLRの縄文を縦位に施した後、沈線によるU字状の区画文を施し、その区画内を磨消している。102は口縁部破片、内彎ぎみに立ち上がる。沈線により渦巻状のモチーフが描かれ、その区画内にLRの縄文が充填されている。

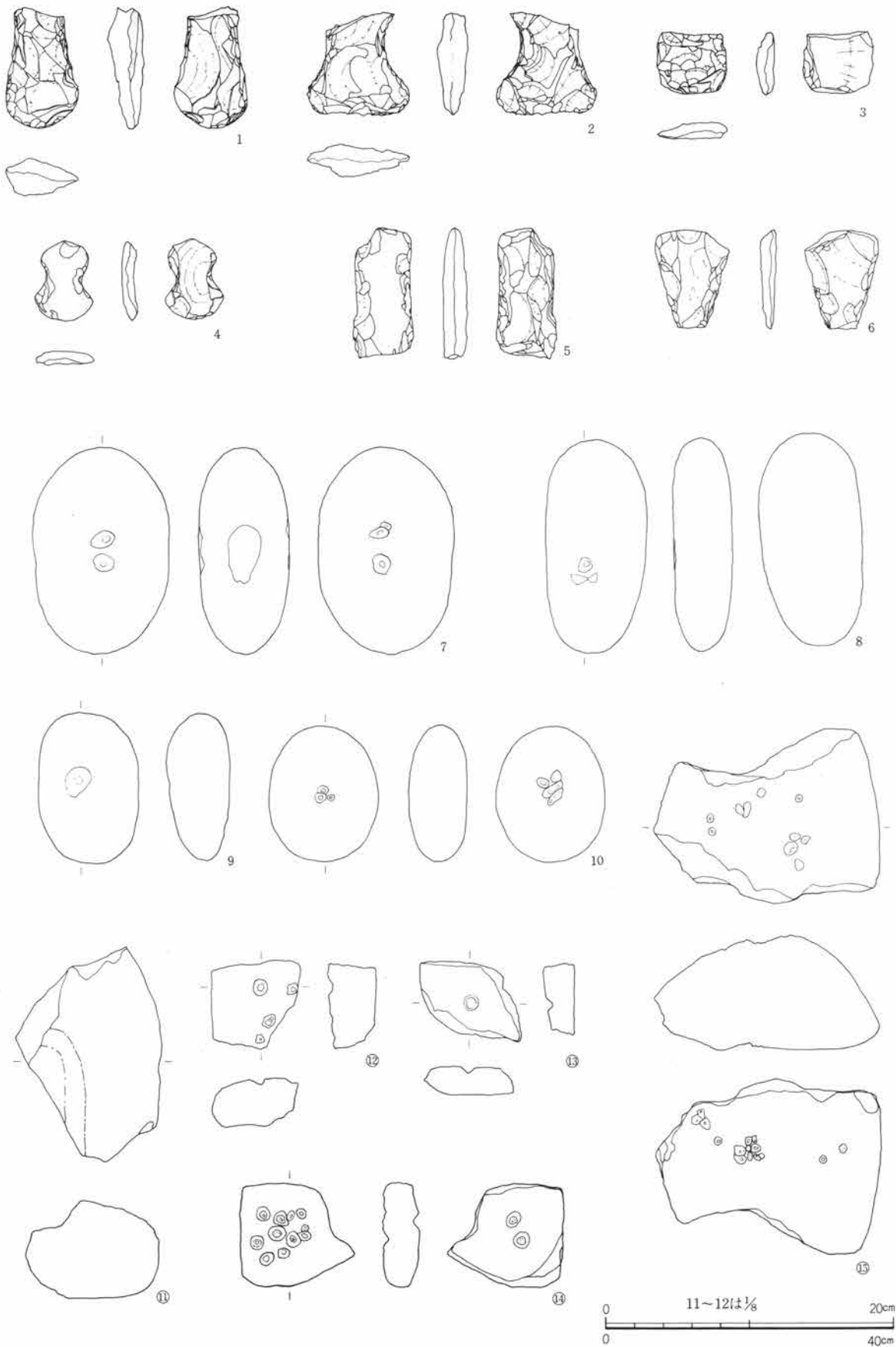
第1号土塚出土石器(第145図16、P L58) 石鏃。無茎で基部に扶入がある。長さ1.9cm、重量1.3g。先端と基部の一部を欠失する。

第4号土塚出土石器(第146図1、P L58) 打製石斧。刃部の幅50mm、厚さ20mm、重量110gを測る。石質は黒色安山岩。刃部の使用痕はあまり明瞭でない。基部を欠失する。

第7号土塚出土石器(第146図12~14、P L58) 12は多孔石。長軸120、短軸116、厚さ61mm、重量1,300gを測る。



第145図 土塚 出土遺物(10)



第146図 土壇 出土遺物(11)

第2章 検出された遺構と出土遺物

石質は安山岩。片面に凹みがある。表面は加熱を受けて変質している。13も多孔石。長軸169、短軸104、厚さ42mm、重量570gを測る。石質は安山岩。片面に単孔の凹みがあるが形状は凹石のものと異なっている。14は多孔石。長軸140、短軸122、厚さ67mm、重量1,580gを測る。石質は凝灰岩質の砂岩である。両面に複数の凹みがある。

第9号土壇出土石器（第146図10・15、P L 58） 10は凹石。長さ93、幅69、厚さ40mmを測る。石質は閃緑岩。形状は楕円形で、両面に弱い敲打痕がある。また、磨石としても使用されており、両面とも磨耗痕がある。15は多孔石。安山岩の円礫の両端が欠損したもの。長軸320、短軸220、厚さ155mm、重量10,350gを測る。断面は半円形を呈し、自然面の部分に凹みがある。

第12号土壇出土石器（第146図3、P L 58） 打製石斧。短冊型を呈するが破片である。幅47mm、重量25gを測る。石質は黒色頁岩である。

第15号土壇出土石器（第146図11、P L 58） 石皿の破片。残存長148mm、重量940gを測る。石質は安山岩である。磨面は細く敲打をして整形してつくられているが使用痕は顕著ではない。底面には自然面が残っている。

第26号土壇出土石器（第146図4、P L 58） 打製石斧。分銅型を呈する。長軸55、短軸40mm、重量40gと小型である。片面には自然面が残る。

第38号土壇出土石器（第146図6、P L 58） 剝片石器。二等辺三角形の長辺に刃部がつくられている。残存長68、最大幅52mm、重量50gを測る。石質は黒色頁岩である。

第46号土壇出土石器（第146図5、P L 58） 打製石斧。短冊型を呈する。残存長88、幅37mm、重量100gを測る。側縁の形状は直縁である。器面の調整は周縁部にとどまり、自然面を多く残す。表裏面とも剝離面の稜はやや磨耗している。

第47号土壇出土石器（第146図8、P L 58） 凹石。長さ148、幅71、厚さ41mm、重量620gを測る。石質は安山岩。片面に弱い敲打痕がある。

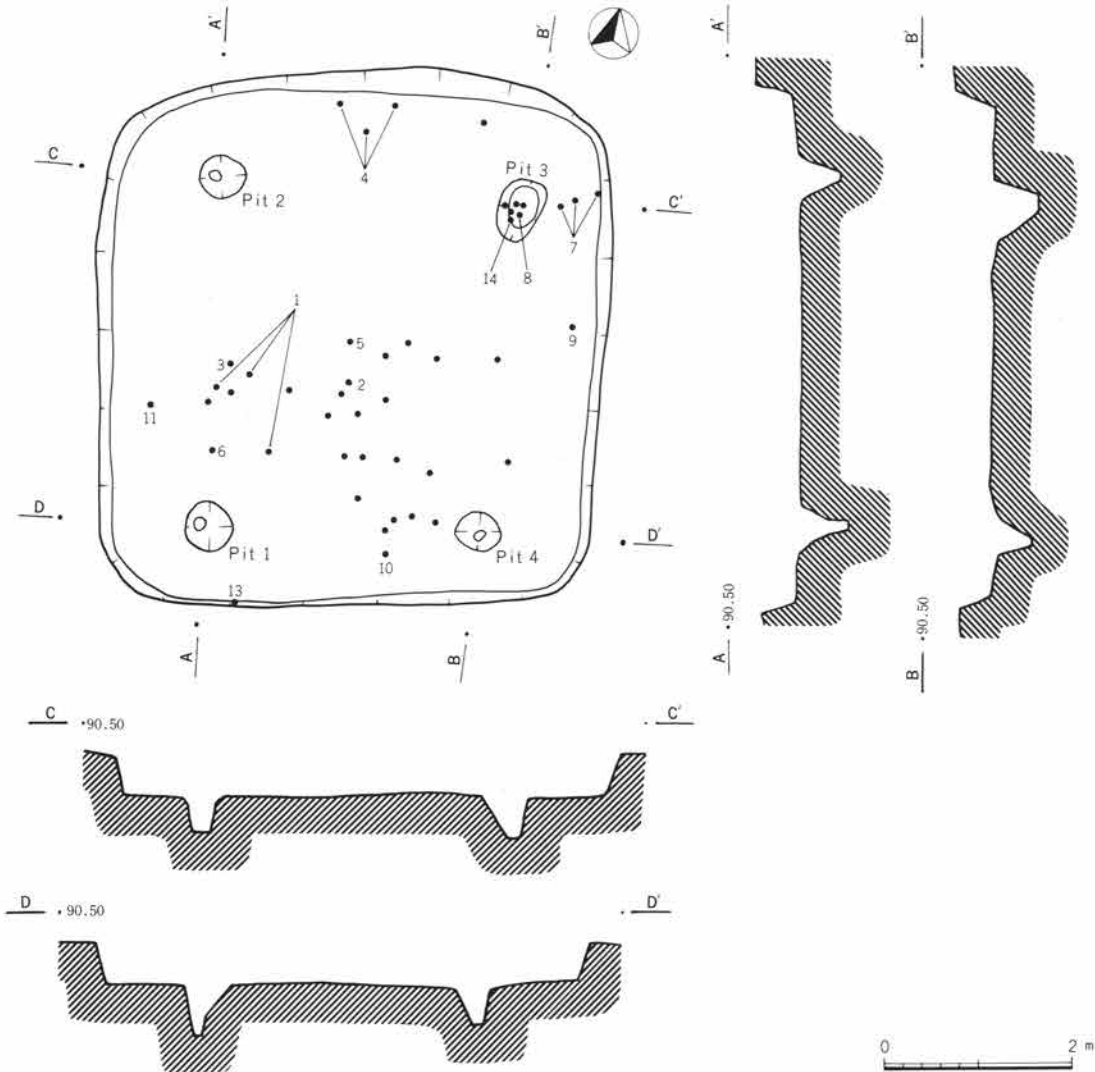
第3節 古墳時代の住居址と出土遺物

古墳時代の住居址は19軒が検出された。前期が13軒、後期が6軒である。

前期の住居址は台地、微高地ともに検出されたが、立地的にみると台地縁辺部に集中しており、標高89m(遺構確認面の)以下にある。第36号住居址は他の住居址と距離をおいている。重複関係にあるものはない。同時期の遺構として方形周溝墓があるが、重複関係はなく、最も距離の近い第48号住居址と第1号方形周溝墓でも17mを測る。形状は多くが隅丸の矩形を呈するが他の遺跡同様、第36・38・39号住居址のようにやや大型のものと第43・47号住居址のような小型のものが併存している。

後期の住居址も前期と同様の占地傾向を示しており、縁辺部に帯状に立地すると思われる。古墳の築造との時間差を把握することが困難であるが、4軒が重複関係にある。大型のものはなく、一様に東壁にカマドが構築されている。

第36号住居址 (第147図 P L19)



第147図 第36号住居址平面図・断面図

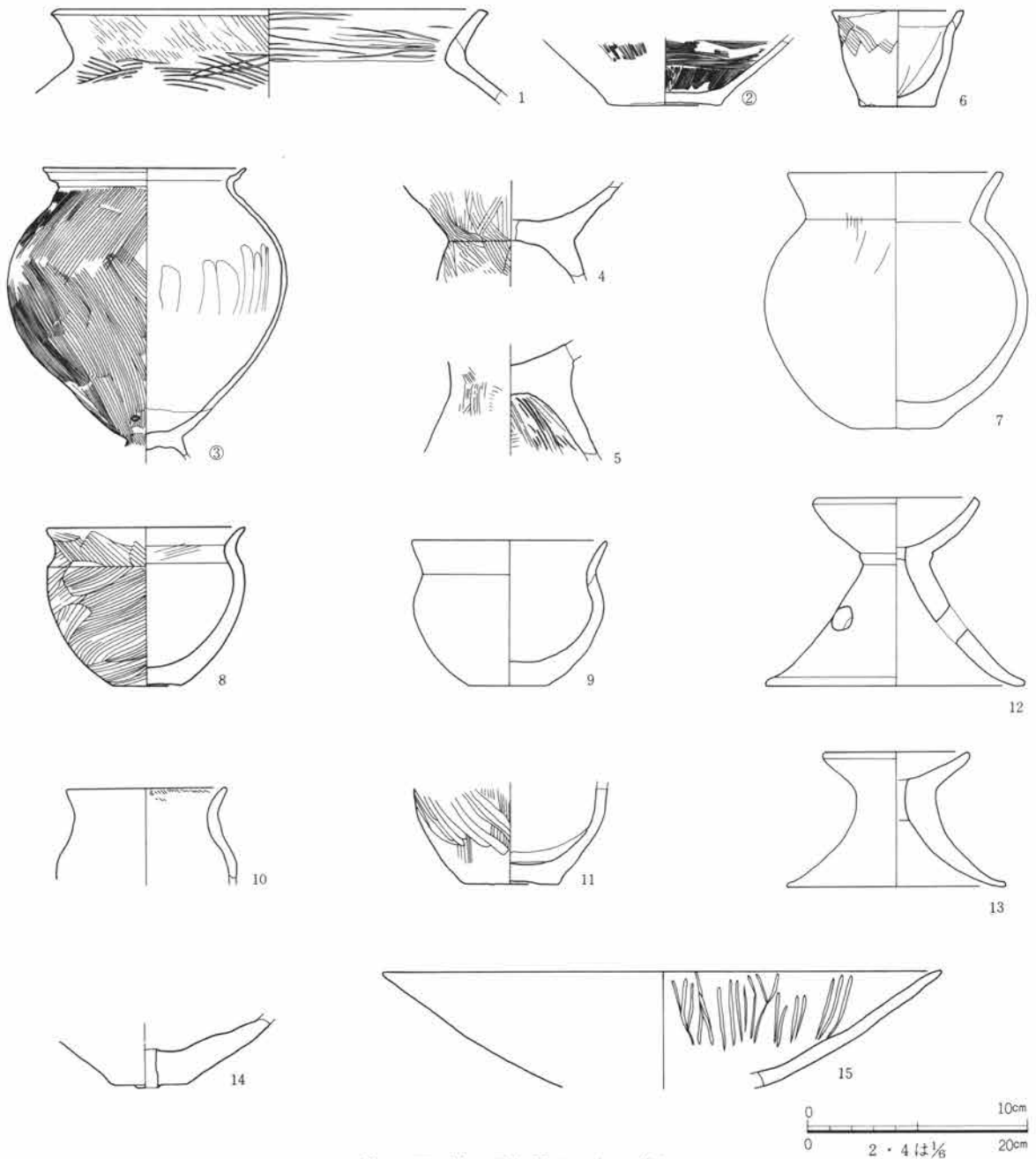
第2章 検出された遺構と出土遺物

O'ー58グリッドに位置し、南から北側へ下る斜面が平坦面に移行する部分にあたる。支線622号道路と支線607号排水路部分の試掘調査中に検出した。

隅丸方形の住居址は長軸を南北方向にもち、5.60×5.43mの規模をもつ。壁面は小円礫を多量に含む砂壤土の層を掘り込んで作られており残存壁高は0.34～0.42mを測った。

床面も壁同様、砂壤土中につくられていたが貼り床や踏み固められた部分は検出されていない。柱穴は主柱穴と思われるピットが4本検出された。掘り方は土層の関係からか上端が著しく開らいていた。深さは次のとおりである。ピット1 50、ピット2 43、ピット3 36、ピット4 48cm。

埋土は全層が黒色土層であり、テフラの純層はみられなかった。遺物は全層から出土しているが細片が多数を占めていた。4は台部を欠く甕形土器で壁際に倒立した状態で潰れていた。



第148図 第36号住居址 出土遺物

第3表 第36号住居址 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	単口台付甕形	口高 (19.9) (4.0)	軽石を少量含む にぶい褐色 軟調	口縁部はくの字状に外反 端部は外側に面をもつ	外 口縁部ハケメ↑後ヨコナデ、胴部、 不定方向のハケメ 内 口縁部ヨコ方向のハケメ、胴部ナデ	炭化物を付着する
2	壺形	底高 10.5 (5.8)	細砂粒を多く含む 明褐色 軟調	胴部はヨコに張ると思わ れる。底部は凹状	外 ハケメ(1単位幅1.5cm)後ナデ、最 最終的にミガキ 内 底部付近はハケメ放射状に下から上	底面に木葉痕 残存率 $\frac{1}{2}$
3	S字台付甕形	口高 18.5 胴高 24.5 (25.8)	砂粒を少量含む にぶい褐色 軟調	無花実状の胴部、口縁部 は屈曲部より先端が長く 大きく外反。胴下半部に 台部との接合痕を明確に 残す。	外 口縁部ヨコナデ、胴部は下半分を2 ~3回に分けてハケメ(4~5本/cm)へ、 上半部ハケメ 内 口縁部ヨコナデ、胴部は下半部ヘラ ナデ、上半部指痕によるオサエ、頸部粗 いナデ。	胴下中部に焼成後 の穿孔を試みている (径7mm) 表面には炭化物が 付着する。
4	S字台付甕形	高 (4.4)	砂粒を含む にぶい褐色 軟調	基部	外 胴部ハケメ↑、台部ハケメ↓ 内 胴部、台部ともに指頭によるオサエ	内面には砂粒が多 く付着されている 破片
5	単口台付甕形	高 (5.0)	砂粒をやや含む にぶい橙色 軟調	台部はハの字状に外反す る。	外 弱いハケメ、部分的に消す。 内 胴部ナデ、台部左回りにハケメへ、	
6	鉢形	口高 6.0 高 4.3	砂粒をわずかに含 む にぶい橙色 軟調	平底の底部からやや内彎 ぎみに立ち上り、短かい 口縁部がつく。小型	外 ハケメへ後ナデ 内 胴部の内面ヘラナデ↑、左回り	残存率 $\frac{1}{2}$
7	壺形	口高 (9.8) 胴高 (12.0) 高 8.5	細砂粒を多く含む 底部に特に多い にぶい橙色 普通	胴部は最大径を中位にも つ球形、口縁部はくの字 に立ち上り、内面に稜を 明確に残す。小型	外 口縁部ヨコナデへ、後ナデ 内 ナデ、下半部へ、上半部へ	
8	鉢形	口高 (8.9) 底高 3.0 高 7.1	石英、長石、雲母 を多く含む にぶい橙色 軟調	口縁部は胴上部と同径で 体部に比して短く緩やか に外反する。平底。小型	外 口縁部ハケメへ、胴部ハケメへ 内 口縁部ヨコナデ、胴部ナデへ、頸部 にはハケメが残る。	残存率 $\frac{1}{2}$
9	鉢形	口高 (8.9) 底高 3.5 高 6.5	細砂粒を含む 浅橙色(内面) 軟調	最大径を口縁部にもつ口 縁部は短く、直線的に立 ち上る。平底。小型	外 口縁部ヨコナデ、胴部はハケメ後ナ デ、ヘラミガキ 内 斜方向のナデ	口縁部の内外面と 胴部外面は明褐色 褐色土の化粧塗 残存率 $\frac{1}{2}$
10	鉢形	口高 (7.4) 高 (4.1)	細砂粒をわずかに 含む 浅黄橙色 軟調	球形の胴部に短い口縁部 がつく。頸部には稜をも たない。小型	外 ハケメ後上下方向のミガキ 内 ハケメ後ヨコ方向のミガキ	残存率 $\frac{1}{2}$
11	鉢形	胴底高 (8.8) 4.3 (4.3)	細砂粒を含む にぶい橙色 軟調	球形の胴部、他に比して 底径が大きい。小型	外 ハケメ↑後斜方向のミガキ 内 下半部指頭によるナデ、上半部ヨコ ナデ	残存率 $\frac{1}{2}$
12	器台形	受部高 7.2 脚部高 11.8 高 8.5	細砂粒を含む 明赤褐色 軟調	受部は内彎ぎみに立ち上 り、端部外側に丸い面を もつ。脚部は裾が大きく 外反する。基部には突帯 をめぐらす。透孔は3孔	外 受部ヨコ方向タテミガキ、脚部タテ 方向のミガキ 内 受部、放射状のミガキ、脚部透孔よ り上部はナデ↓、以下ナデへ	脚端部の器面はあ れている。 受部 $\frac{1}{2}$ 欠
13	器台形	受部高 6.5 脚部高 9.9 高 6.1	細砂粒を含む 明赤褐色 軟調	受部は浅く皿状、脚部は 裾にゆき外反する。透孔 はなし	外 受部ミガキへ、脚部ミガキ↓ 内 受部ミガキ、脚部ミガキへ	南壁の上端近くか ら検出

第2章 検出された遺構と出土遺物

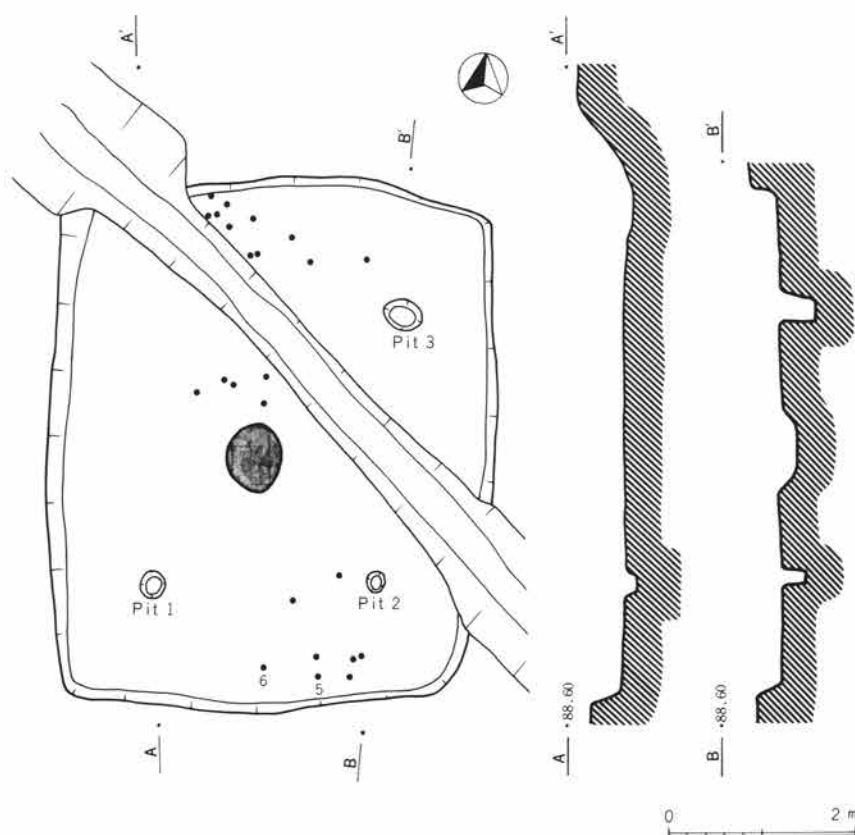
No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
14	瓶形	底高 3.5 (3.0)	砂粒をわずかに含む にぶい橙色 軟調	底部に内面から外面に向けて径9mmの穿孔がある	内・外とも丁寧なナデ	
15	高杯形	受部(25.4) 高 (5.2)	輝石をはじめ砂粒を含む にぶい橙色 軟調	杯部はやや内彎しながら大きく開く、先端は丸い	外 ナデ後ミガキ→ 内 ミガキ→後放射状にミガキ	破片

第37号住居址 (第149図 PL19)

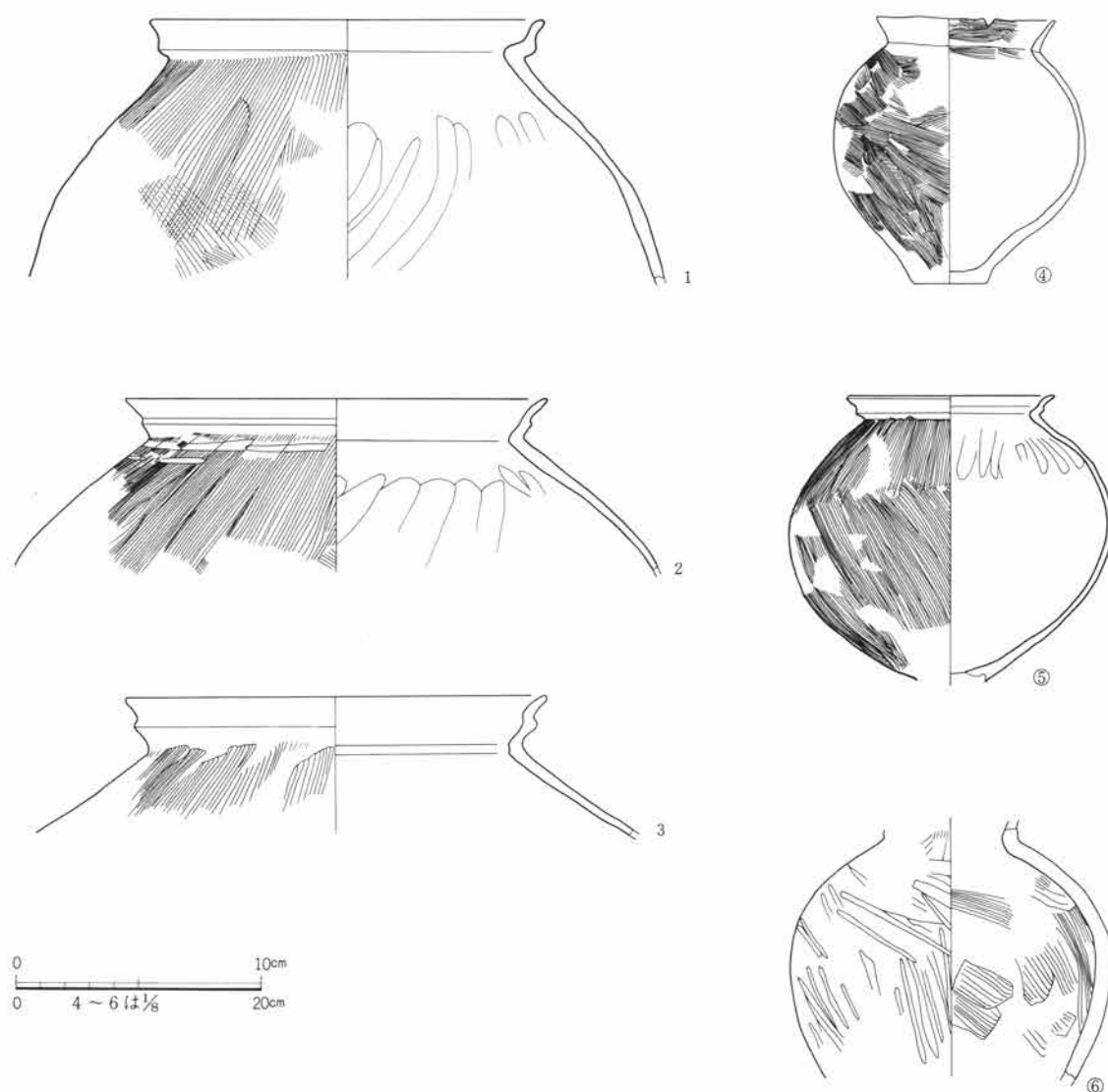
f-35グリッドに位置する。遺構は西から東に下がる斜面が平坦面に移行する部分に位置する。第6号溝との重複で中央部分を切られていた。

南北5.68、東西4.84mと南北に長軸を持つ隅丸方形の平面形状を呈する。長軸の方位はN5°Wである。壁は黄褐色砂壤土を切り込んでおり残存壁高は0.34mである。

柱穴は3本検出されたがピット1が13cm、ピット2が26cm、ピット3が38cmと浅いものであった。炉址は砂壤土からなる床面のほぼ中央で検出された。皿状の浅い掘り込みで焼土が散見された。



第149図 第37号住居址平面図・断面図



第150図 第37号住居址 出土遺物

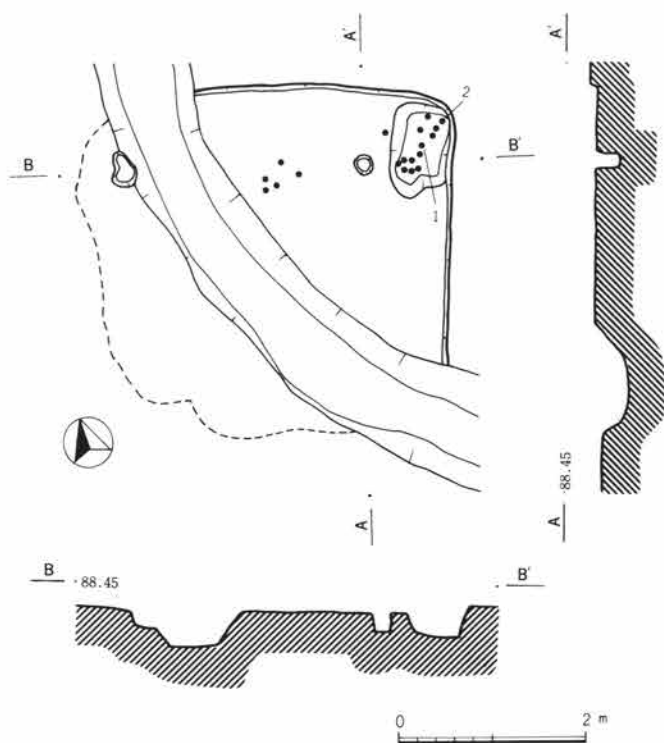
第4表 第37号住居址 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	S字台付甕形	口 (16.1) 胴 (25.8) 高 (10.5)	細砂粒を含む にぶい赤褐色 軟調	口縁部先端は直立ぎみに立ち上り、口径も小さい 胴部の張りも弱い。	外 口縁部ヨコナデ、胴部のハケメ(4~5/cm)は軟らかい 内 口縁部ヨコナデ、胴上半部ナデ、下半部は指頭によるナデ	炭化物を付着する 残存率1/2
2	S字台付甕形	口 (17.1) 高 (7.0)	細砂粒を多く含む にぶい赤褐色 軟調	口縁部先端の器肉は薄く屈曲部より先は長く大きく外反する。屈曲部の内側の稜は弱い。	外 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ(7~8/cm、1単位13本)、上位には口縁部整形時についたと思われるヨコナデがある。内 胴部に指頭によるナデ	炭化物を付着する 残存率1/2

第2章 検出された遺構と出土遺物

3	S字台 付甕形	口 高 (17.2) (5.8)	細砂粒を多く含む 橙色 軟調	口縁の段部内面の屈曲は 外側に比して不明瞭である。 端部は外反が著しく丸みがある。	外 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ (4 ~5本/cm、1単位11本) 内 口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、胴部指 頭によるオサエ、ナデ	残存率 $\frac{1}{2}$
4	甕形	口 14.5 胴 20.8 底 5.9 高 21.5	砂粒を多く含む 淡橙色 普通	口縁部は短く直線的に立 ち上がる。胴部は中位やや 上に最大径をもち著しく 張り出す。下半部は急速 に細くなり底径も小さい	外 口縁部指頭によるナデ、オサエ、胴 部のハケメは上半部へ、下半部へ、(8本 1単位) 内 口縁部右回りニハケメ、胴部は上部 にハケメが残り、他は丁寧なナデ	器形は著しく歪む
5	S字台 付甕形	口 16.9 胴 26.1 高 (22.6)	砂粒を多く含む にぶい赤褐色 軟調	口縁部の屈曲部より先端 が長く大きく外反してい る。内側の屈曲は不明瞭	外 口縁部ヨコナデ、胴部は2回に分け てハケメ (6本/cm) 内 口縁部ヨコナデ、胴上半部は指頭による オサエ、下半部はナデ	台付部は接合部から きれいに欠ける。
6	壺形	胴 (13.0) 高 (10.2)	細砂粒を多く含む 暗黒色赤褐色 軟調	球形の胴部をもつ。器肉 もほぼ一定している。	外 粗いヘラミガキ、上半部へ! 内 上半部と底部付近はナデ、中位は左 回りにハケメ↑	残存率 $\frac{1}{2}$

第39号住居址 (第151図 P L19)



第151図 第39号住居址平面図・断面図

f-25グリッドに中心をおく。第37号住居址同様、斜面下の平坦面上に位置する。円形周溝状遺構と重複し、周溝の外側にも黒色土が広がっていたが全体の形状を確認することは困難であった。重複の新旧関係は不明である。

北東の隅を中心に北壁、東壁を検出した。全体的な規模は不詳であるが残長は南北で2.92m、東西で3.6mであった。

床面は砂壤土中につくられていたがやや踏み固められていた。残存壁高は0.1mである。

柱穴は北辺の2本を検出した。深さは東側が18、西側が11cmである。北東隅には貯蔵穴があった。長軸83cm、短軸53cm、深さ25cmを測る。埋土中からは細片ではあったが台付甕形土器を出土している。

第38号住居址

(第152図 P L19)

g-28グリッドに位置する。南側は円形周溝状遺構と重複していた。新旧関係は土層の状態からは確認できなかった。

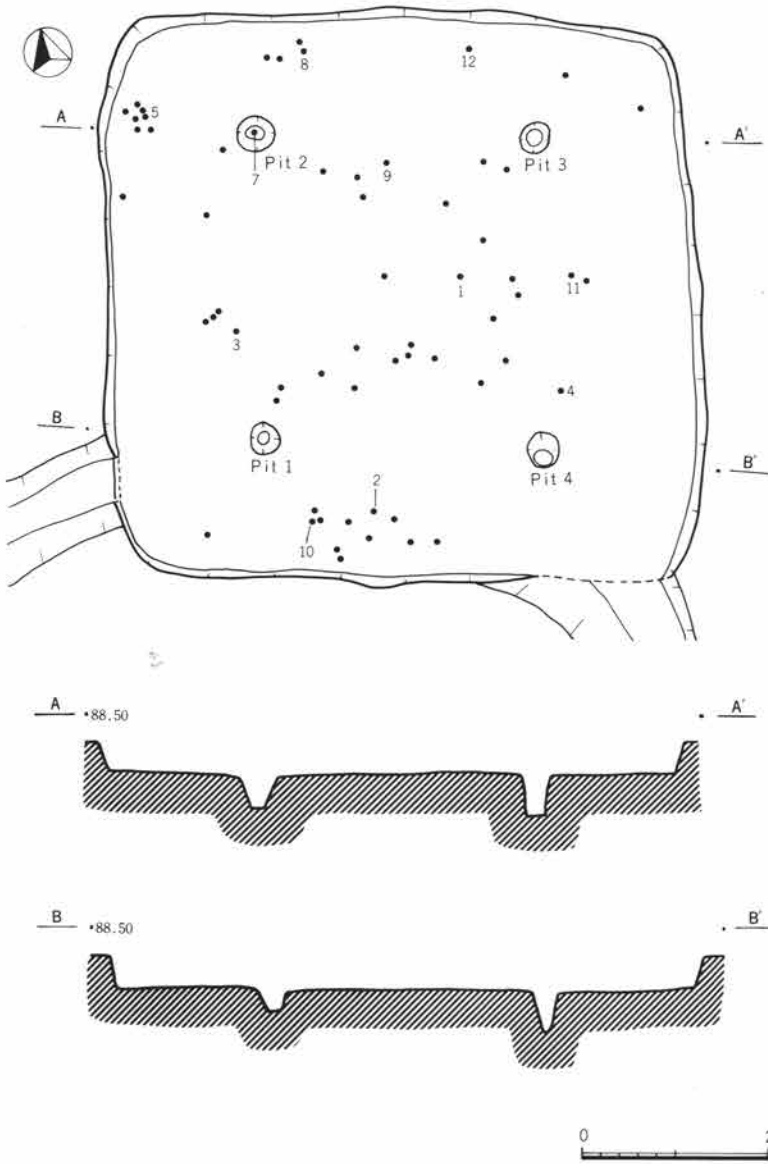
平面形は東西6.44m、南北6.16mとやや東西に長い隅丸方形を呈する。南北軸の方位はN17°Eである。

壁面は砂壤土を掘り込んでつくられているが残存壁高は32cmと浅かった。床面は壁と同じ土層中につくられていたが特に踏み固められた部分はなかった。

柱穴は支柱穴が4本検出された。それぞれの深さはピット1が24cm、ピット2が32cm、ピット3が44cm、ピット4が40cmであった。

貯蔵穴・炉址を確認することはできなかった。

埋土は浅間C軽石混りの黒褐色土であったが純堆積層は確認されていない。遺物は甕形土器を中心に住居址内全体から細片を多く出土したが床面密着のものは少なかった。

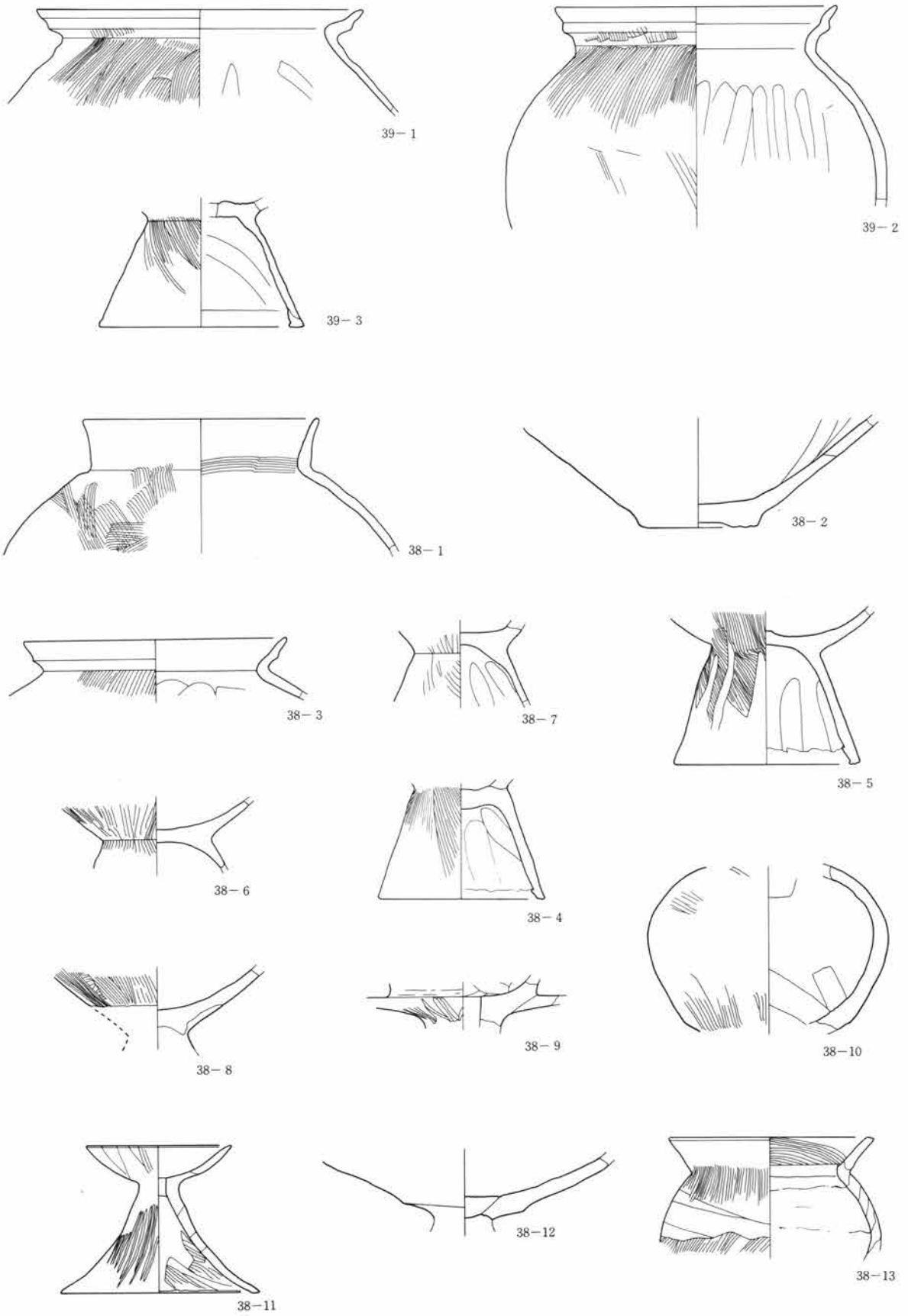


第152図 第38号住居址平面図・断面図

第5表 第39号住居址 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	S字台付甕形	口 (17.1) 高 (5.1)	砂粒を多く含む にぶい褐色 軟調	口縁部は頸部から短く立ち上がり屈曲部より上で大きく外反する。内面の屈曲は不明瞭。	外 口縁部のヨコナデ、胴部はハケメノ (7本/cm)	残存率1/2
2	S字台付甕形	口 (14.8) 胴 (20.0) 高 (10.2)	砂粒をわずかに含む にぶい褐色 軟調	口縁部は頸部から屈曲部までの幅が大きく、外反も小さい。胴部の張りが弱い。	外 口縁部ヨコナデ、胴部上半はハケメノ (6本/cm) 下半部のハケメは部分的にあり、他はヘラケズリ 内 胴上位に指頭によるオサエ	比重が他に比して軽い
3	S字台付甕形	底 10.8 高 (6.5)	砂粒を多く含む にぶい褐色 軟調	ほとんど内彎はなくのびる。端部の折り返しも弱い。全体の器肉は薄い。	外 上半部はハケメノ、下半部ナデ 内 指頭によるナデ	埋土中から出土

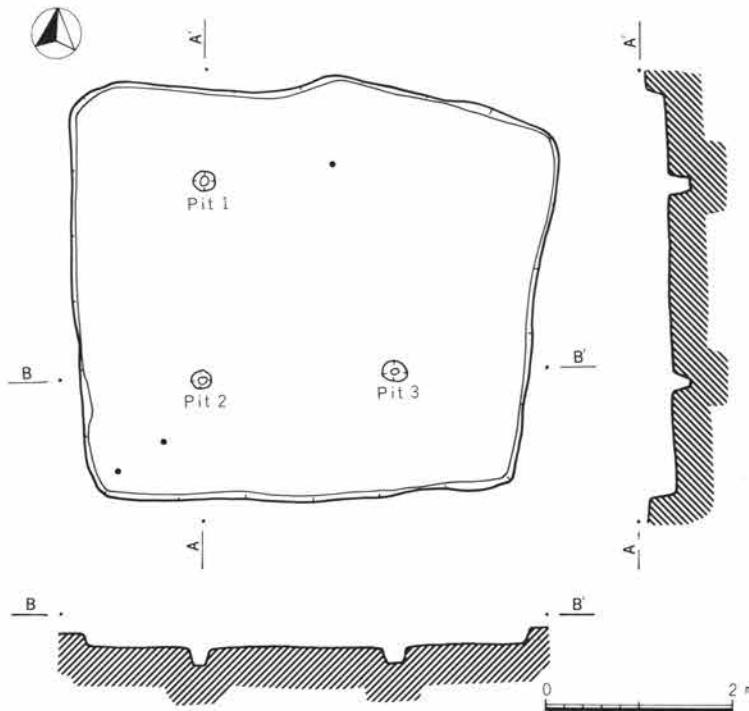
第2章 検出された遺構と出土遺物



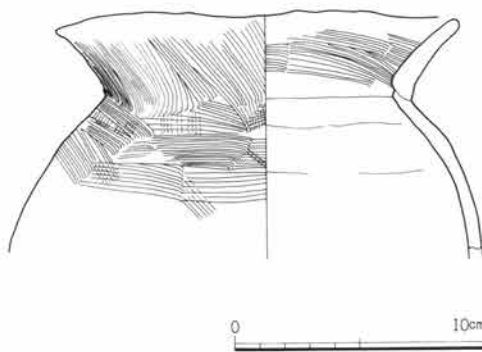
第153図 第38・39号住居址 出土遺物

第6表 第38号住居址 出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	甕形	口 12.4 胴 (20.4) 高 (7.0)	細砂粒を含む にぶい橙色 普通	口縁部は鈍角で直線的に 立ち上がる	外 口縁部ヨコナデ、胴部はハケメ、不 定方向 内 稜の部分にハケメ←、胴部ナデ	
2	壺形	胴 (18.4) 底 6.3 高 (5.2)	細砂粒を含む にぶい橙色 普通	底部は凹状、周縁部はリ ング状になる。胴部は大 きく張る	外 ナデ 内 斜方向のヘラナデ 粘土帯の接続痕が残り、器面が波うつ	柱穴内出土 底部に木葉痕
3	S字台 付甕形	口 (13.7) 高 (2.7)	砂粒を含む にぶい橙色 軟調	口径は小さく、口縁部先 端は屈曲でやや外反する	外 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ✓ (7 ~8本/cm) 内 口縁部ヨコナデ、胴部指頭によるオ サエ	破片
4	S字台 付甕形	底 (8.7) 高 (5.7)	細砂粒をわずかに 含む 明赤褐色 軟調	やや内彎する円筒形、端 部は内側に折返し	外 上半部にやわらかいハケメ\ (1単 位14本、7~8本/cm)部分的に指頭によ るナデ 内 指頭によるナデ	残存率 $\frac{1}{2}$
5	S字台 付甕形	底 (8.8) 高 (6.0)	細砂粒を多く含む 明赤褐色 軟調	やや内彎する円筒形、下 半部はやや波うつ、端部 は内側に折り返し	外 台部ハケメ↓、後指頭によるナデ、 胴部ハケメ↑ (10本/cm) 内 指頭によるナデ	
6	S字台 付甕形	高 (3.4)	細砂粒を含む にぶい橙色 軟調	基部のみ	外 ハケメ (5~6本/cm) 内 胴部ヘラによりオサエジメ	内面の一部に炭化 物附着
7	S字台 付甕形	高 (4.0)	細砂粒を多く含む にぶい橙色 軟調	基部のみ	外 ハケメ後指頭によるナデ(6~7本/ cm)	
8	S字台 付甕形	高 (3.3)	細砂粒を多く含む 褐色 軟調	胴部の最下位	外 ハケメ\ 内 ナデ	台部をソケット状 に接続したと考え られる。
9	特殊器 台形	高 (2.3)	細砂粒をわずかに 含む にぶい赤褐色 硬調	受け部は皿状になる。杯 部の立ち上がりは垂直に 近い	外 受け部は棒状工具によるミガキ 内 ミガキ	破片
10	壺形	胴 (12.6) 高 (8.5)	細砂粒を含む 赤褐色 軟調	球形の胴部は最大径を中 位やや上にもつ。器肉は 厚く9mmを計る。小型	外 ハケメ後ヘラナデ、部分的にハケメ 残存 内 斜方向のヘラナデ	比重軽い 破片
11	器台形	受部 (7.7) 脚部 (10.4) 高 (7.7)	細砂粒を多く含む にぶい橙色 普通	受け部は皿状で内彎して 立ち上がる。脚部は端部 になり大きく外反、透孔 は4孔と思われる。	外 受け部ヘラナデ、脚部、棒状工具に よるミガキ 内 受け部ヘラミガキ、脚部ハケメ\、端 部はヨコナデ	残存率 $\frac{1}{2}$
12	高杯形	高 (3.3)	砂粒を多く含む にぶい橙色 普通	やや内彎しながら立ち上 がる。脚部との接続部近 くで弱い稜をもつ	内外 ヘラミガキ	内面はあれている
13	壺形	口 (10.7) 高 (6.0)	細砂粒を多く含む にぶい橙色 普通	口縁部は短くくの字状に 立ち上がる。胴部は張ら ない。小型	外 口縁部ヨコナデ、胴上部にハケメ↓、 下半部ヘラナデ 内 口縁部ハケメ、胴部には接合痕が残 る	最下部の剥離面に はハケメが残る 炭化物附着 残存率 $\frac{1}{2}$



第154図 第40号住居址平面図・断面図



第155図 第40号住居址 出土遺物

第40号住居址

(第154図 P L20)

g-23グリッドにあり、円形溝状遺構の南側に位置する。円形周溝状遺構を挟んで北東に1.6mで第39号住居、北に4.8mで第39号住居が近接する。また、北東隅は縄文時代の第9号土坑と重複していた。平面形は北辺を底辺とする台形状を呈する。北辺は壁面の出入りが著しいが5.28mを測る。西辺は4.4m、東辺は3.84m、南辺は4.60mであった。南北軸の方位はN6°Wで、標高は88.3mである。

壁面は小円礫を含む砂壤土を切り込んで形成されており、垂直に近い立ち上がりであった。

床面も砂壤土中につくられていた貼り床、踏み固められた部分は認められなかった。南東隅に向かって緩やかに傾斜していた。柱穴は3本のみ検出できたが径、深さとも不安定な規模である。ピット1、径22、深さ21cm、ピット2、径21、深さ19cm、ピット3、径24、深さ15cm。

埋土は黒色土である。遺物は南西隅の床面にやや集中して出土した。

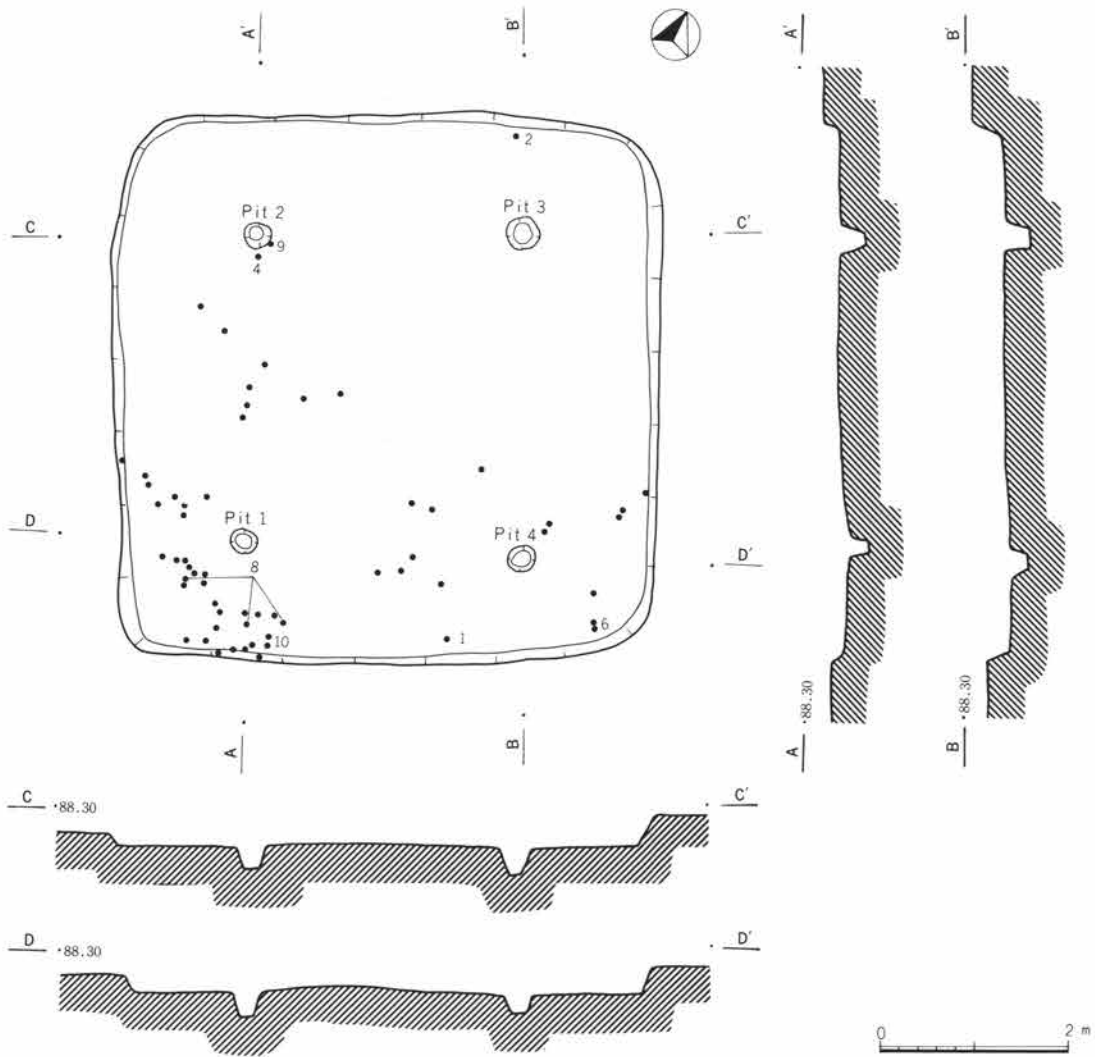
第7表 第40号住居址 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	甕形	口 16.3 胴 (17.3) 高 (10.0)	軽石、砂粒を多く含む にぶい橙色 軟質	口縁部はくの字状に外反し、端部は外側に面をもつ。胴部は丸味が強い。	外 口縁端部ヨコナデ、口縁部ハケメ↑、 胴部は不定方向のハケメ 内 口縁部ハケメ→、胴部ナデ	内外面に黒斑あり

第41号住居址 (第156図 P L20)

h-16グリッドに中心を置き、斜面東側の平坦面上の住居址中最南部に位置する。支線211号道路下に当たり試掘調査時に検出する。

平面形は正方形に近い隅丸矩形を呈しており、南北5.92m、東西5.96mを測る。南北軸の方位はN23°Wである。



第156図 第41号住居址平面図・断面図

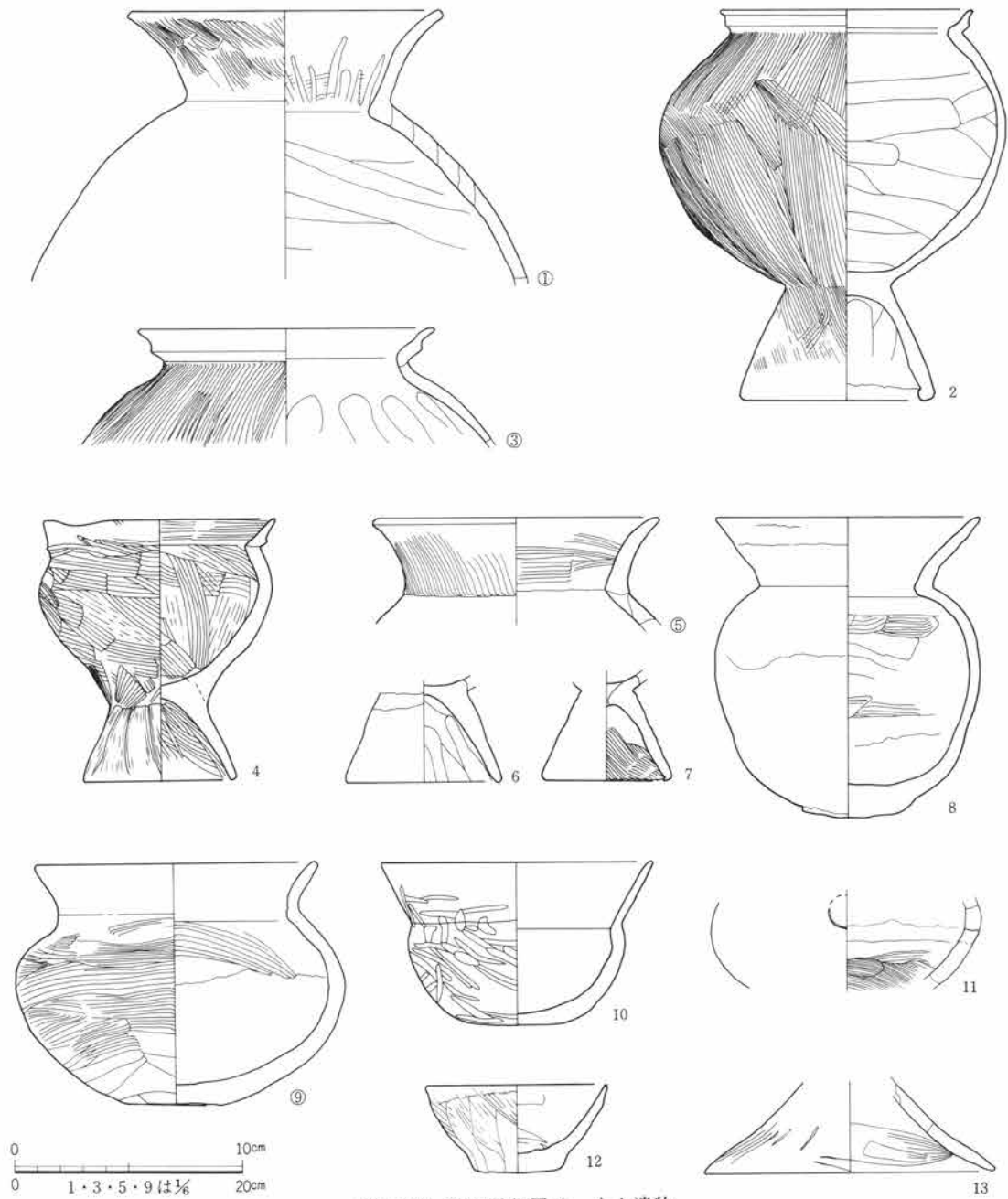
壁面は小円礫を多量に含む暗褐色砂壤土を切り込み垂直に近い状態である。床面もこの層中に形成されていた。遺構確認面が低く、残存壁高は9～29cmを測った。

床面は貼り床や踏み固められた部分はなかったが、南側やや下がる他はほぼ水平の面を形成していた。

柱穴は支柱穴4本が確認できたが次に示すよう浅く小規模なピットである。規模はピット1、径28、深さ22cm、ピット2、径28×25、深さ25cm、ピット3、径34×32、深さ29cm、ピット4、径30×28、深さ13cm。

貯蔵穴、炉址、周溝等の施設は検出できなかった。

埋土は浅間C軽石混りの黒褐色土であるが純堆積層は認められなかった。出土遺物は細片が大部分を占めたが、北隅を中心に壁際から出土している。1は壺形土器の上半部であるが、北西壁中央際の床面から口縁を下にして出土している。8と10も北隅の床面直上からの出土であるが、8は大片が3ヶ所から出土している。4・9はピット2の掘り方近くの埋土中から出土している。4は台付甕形土器で出土レベルは床面から20cm。5は甕形土器で12cm上である。



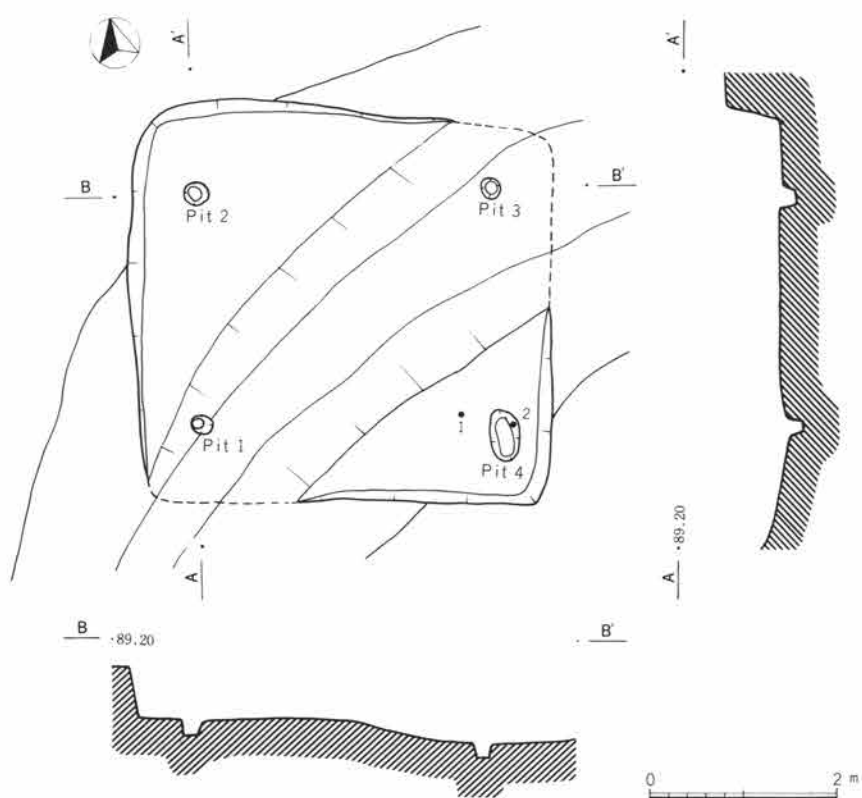
第157図 第41号住居址 出土遺物

第8表 第41号住居址 出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	壺形	口 13.8 胴 20.0 高 (10.5)	砂粒を多く含む にぶい褐色 普通	口縁部はくの字状に立ち上がり先端でラップ状に外反する。胴部は球形をなし、頸部は細い。	外 口縁部は最終的にヘラミガキ、ハケメをよく残す。胴部ヘラミガキ 内 口縁部ハケメ後ミガキ、胴部ハケ後、丁寧なナデ、接合痕を残す	
3	S字台付甕形	口 13.0 胴 18.0 高 (5.0)	砂粒を多く含む にぶい橙色 軟調	口縁部は大きく外反し、内側の屈曲は不明瞭	外 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、(5本/cm) ザックリしている 内 口縁部ヨコナデ、胴部指頭によるオサエ	炭化物付着 比重が軽い 残存率 $\frac{1}{2}$

第3節 古墳時代の住居址と出土遺物

2	S字台付壺形	口 11.1 胴 15.2 高 12.0	細砂粒を多く含む にぶい橙色 軟調	小型、胴部は器高に比して径が大きく横に張った球形、口縁部は屈曲部より上が直立ぎみに立ち上がり先端が尖る	外 口縁部ヨコナデ、胴部2~3回に分けてハケメ(6本/cm)左回り、台部ハケメ 内 胴部ヘラナデ、台部指頭によるナデ↓	
4	台付形	口 10.2 胴 10.3 高 11.3	輝石を多く含む にぶい橙色 軟調	口縁は短く直立ぎみに立ち上がる。最大径は胴上位にあり、台部に向い急速にしまる。台部はやや内彎ぎみ。器肉は厚い	口縁部に接合痕を残す 外 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、上位←、中位へ、下位く、台部ヘラナデ 内 口縁部ハケメ←、胴部ハケメ↑後上位はヘラナデ、台部ハケメへ	口縁部の接合痕は意識して残したとも考えられる。
5	壺形	口 12.6 高 (4.5)	細砂粒を多く含む にぶい褐色 軟調	口縁部は短く、外反する	口縁部に接合痕を明瞭に残す 外 口縁部ハケメへ、先端はその後ヨコナデ 内 ハケメ←、頸部に指頭による圧痕	表面磨耗が著しい 残存率½
6	台付形	底 6.9 高 (4.4)	細砂粒を多く含む 褐色 軟調	ハの字状にのびる、胴部とソケット状に接合していたと思われる	外 ナデ↓ 内 指頭によるオサエ後ナデ↓	残存率½
7	台付形	底 5.8 高 (4.1)	軽石、細砂粒も含む にぶい橙色 軟調	ハの字状にのびる、底径に比して基部径が小さい	外 ナデ 内 上位ナデ、下位ハケメへ	残存率½
8	壺形	口 (11.5) 胴 (11.6) 高 13.0	軽石を多く含む 明赤褐色 軟調	口縁は大きく外反する。胴部は最大径を上位にもつ。底部は弱い凹状になり不安定である。小型	接合痕を内外面に明瞭に残す 外 ナデ 内 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後ヘラナデ←	残存率½
9	壺形	口 12.4 胴 14.5 高 10.5	細砂粒をわずかに含む 明赤褐色 軟調	口縁部は短くゆるやかに立ち上がる。底部平底、器高に比して径があり、最大径を胴部中位にもつ。小型	外 口縁部ヨコナデ、胴部上位へ中位ハケメ←、下位ヘラケズリ←、底部ヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、胴上部ハケメ後ヘラナデ、下半部ヘラケズリ	
10	埴形	口 12.0 高 7.1	細砂粒をわずかに含む 橙色 普通	口縁部はやや内彎しながら立ち上がる。頸部のしまりがない。平底	外 口縁部横方向のミガキ、胴部ナデ後斜方向のミガキ、頸部を最後に細くミガク 内 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ	残存率¼
11	壺形	胴 (11.9) 高 (3.5)	細砂粒を含む 明褐色 普通	胴部の張った器形、残存の最上部に径1.4cmの穿孔がある。小型	外 ヨコ方向ミガキ 内 輪積痕を残す、指頭によるナデ	残存率½
12	小型鉢形	口 (8.0) 高 3.8	細砂粒を含む にぶい橙色 普通	内彎しながら立ち上がり、先端は尖っている。	外 胴部ハケメへ後ヘラナデ↑、底面ヘラケズリ 内 横方向のミガキ	残存率½
13	器台形	底 (12.7) 高 (3.9)	細砂粒を含む 明赤褐色 軟調	大きく外反するが裾部でやや内彎ぎみになる 透孔は1つ残存	外 ハケメ後タテ方向のナデ、ミガキ 内 上半部ハケメ、端部ヨコナデ	破片



第158図 第42号住居址平面図 断面図

第42号住居址

(第158図 P L20)

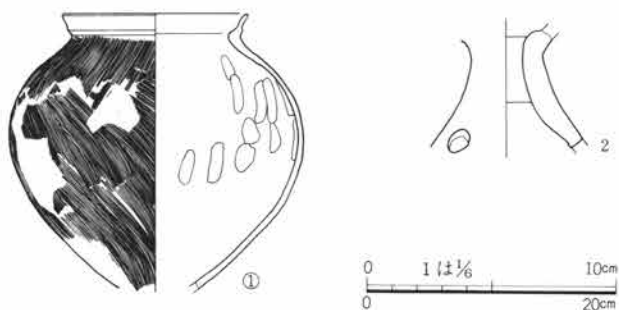
V-32グリッド、西から東へ低くなる斜面の東端に位置する。第14号古墳と重複したため、北西、南東隅を除いて極めて残存状態は悪い。

平面形は東西4.4、南北4.02mと東西に長軸をもつ長方形である。四隅の整然とした掘り方である。長軸の方位はN12°E。

壁面の残存高は北西隅で0.57m、南東で0.67mで、ソフトロームを掘り込みハードロームに達する垂直に近いものである。周溝はなかった。

床面はハードローム中にあるが貼り床はなく、特に踏み固められた部分も認められなかった。

ピットは柱穴と思われるものが3本検出できた。図中のピット1から3である。小径で壁より穿ってあった。深さはピット1が18cm、ピット2が14cm、ピット3が13cmであった。ピット4は深さ9cmと浅く柱穴とは考え難いものである。埋土中から2を出土した。



第159図 第42号住居址 出土遺物

第9表 第42号住居址 出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	S字台付甕形	口 15.0 胴 23.7 高 21.8	軽石、細砂粒を多く含む 淡橙色 軟調	口縁部は屈曲部より先端が長く大きく外反する。器高に比して胴径が大きく丸みのある形	外 口縁部ヨコナデ、胴下半部は2回に分けてハケメ(6本1単位、12本/cm)へ、上半部ハケメノ 内 指頭によるオサエ、頸部には接合痕を明瞭に残す	
2	器台形	高 (5.9)	細砂粒を含む にぶい橙色 軟調	透孔は3つ	外 タテ方向のヘラミガキ 内 ナデ	

第43号住居址

(第160図 P L 20)

V-24グリッドに中心を置き、斜面の東端、平坦面との移行部に位置する。東西に走行する第5号溝との重複により北部分は欠失する。

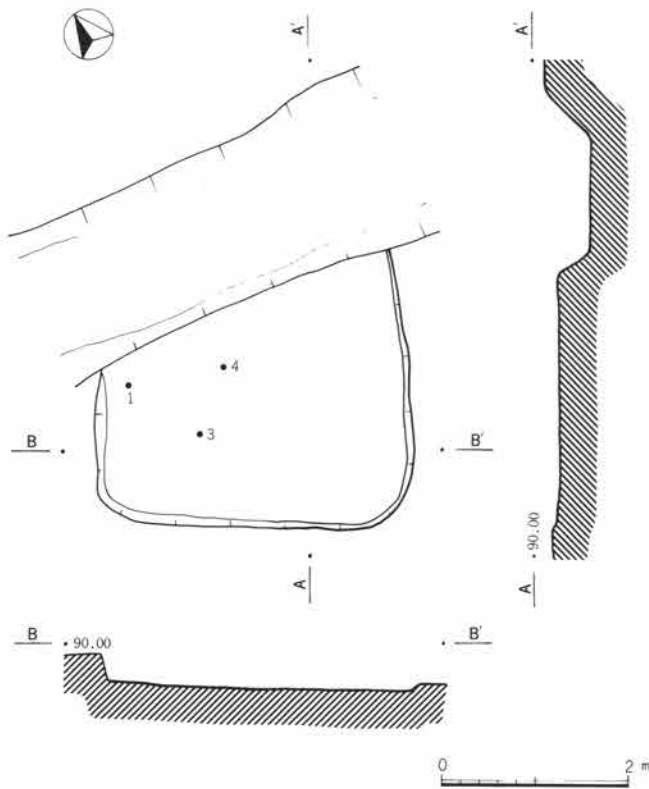
隅丸の矩形を呈していたと考えられるが東西で3.37m、南北の残長2.95mを測った。東西軸の方位はN33°Wである。

壁面はソフトローム層を掘り込んでおり、南西隅の残存壁高は0.30m。

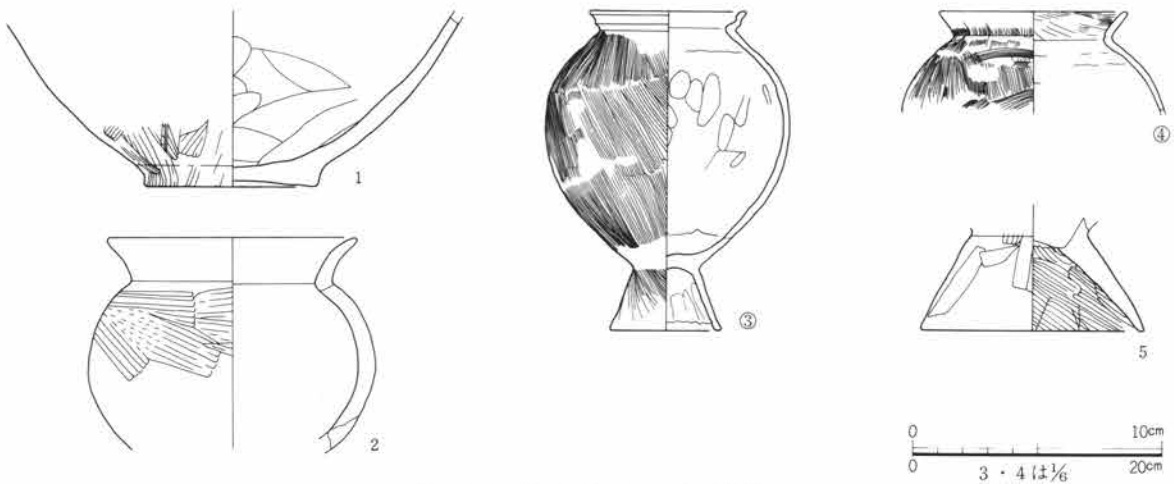
床面はソフトローム層中にありほぼ水平の軟らかい面であった。

柱穴、貯蔵穴、周溝、炉等の施設は検出できなかった。

遺物は埋土中からの出土が多い。3は床面上16cm、4は10cmであった。床面直上からは多孔石が出土した。



第160図 43号住居址平面図・断面図



第161図 第43号住居址 出土遺物

第10表 第43号住居址 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	壺形	胴 (18.0) 底 7.0 高 6.5	細砂粒を多く含む にぶい橙色 普通	胴部は球形を成す。底部は平底であるが、周縁部はリング状になっている	外 全面不定方向のハケメ 内 粗いナデ、輪積痕を残す	外面は剝離が著しい

2	壺形	口 (10.0) 胴 (11.5) 高 (8.4)	細砂粒を含む にぶい橙色 軟調	口縁部は短く外反する 胴部は球形をなし、最大 径は中位やや下。小型	外 口縁部はハケメ↑後ヨコナデ、胴上 半部ハケメ、下半部ナデ 内 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	残存率1/3強
3	S字台 付壺形	口 (12.6) 胴 (19.6) 底 9.0 高 25.2	細砂粒を多く含む にぶい褐色 軟調	口縁部は屈曲部より先端 が大きく外反する。最大 径を胴上半部にもち、無 実果状を成す	接合痕をよく残す。特に胴部と台部の接 合部は明瞭な段差を成す。外 口縁部は ヨコナデ、胴部は下半部を2回に分けて ハケメ↑(6~7本/cm)上半部もハケメ ↓、台部ハケメ。内 全面ナデ、台部は 指頭によるナデ	器面の一部分に炭 化物付着 残存率1/2
4	甕形	口 15.1 胴 (21.0) 高 (7.8)	輝石をはじめとし た砂粒を含む にぶい橙色 軟調	口縁部は短く外反し、先 端は丸い、胴部は丸みを もつ。	外 ハケメ↑後ヨコナデ、胴部不定方向 のハケメ 内 口縁部はハケメ、胴部ナデ	台部の有無は不明 炭化物付着
5	単口台 付壺形	底 8.9 高 4.5	白色砂粒を多く含 む にぶい褐色 軟調	胴部がソケット状に接合 されていたと考えられる ハの字状に外反	外 粗いナデ↓ 内 ハケメ(11本/cm) ↓、粗いタッチ	埋土中から出土

第44号住居址

(第162図)

N-14グリッド、第4号古墳の墳丘部内に位置する。縄文時代の第4号住居址、第16号住居址と重複する。

平面形は隈丸の方形に近い矩形を呈していたと考えられるが上端は壁面の崩落が著しく各辺の中位が外方に張り出して丸味を帯びていた。南北3.88m、東西4.14mを測る。南北軸の方向はN27°Eである。

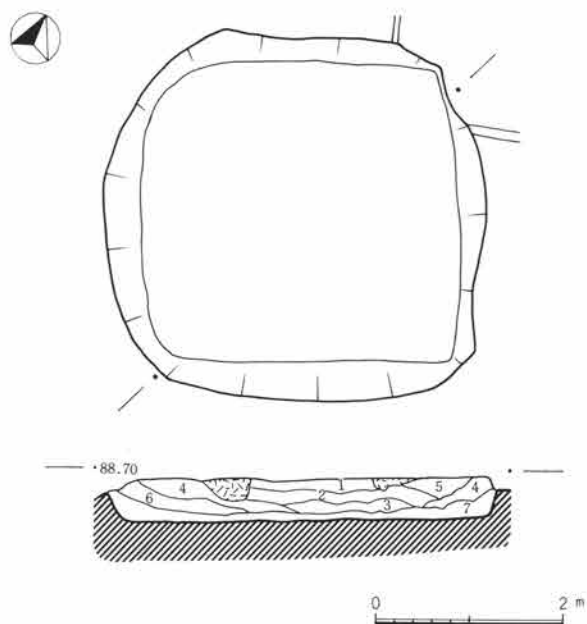
壁はソフトローム層を掘り込みハードローム層に達していた。残存壁高は25~30cmで、垂直に近い面を成していたと考えられる。

柱穴、周溝等の施設は検出できなかった。

埋土は図示したとおりである。出土遺物は図示した土器が唯一のもので第7層中より出土している。

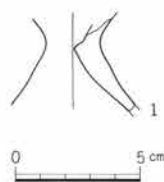
これは、小型の器台形土器の破片と考えられる。残

長4.8cm、裾部の最大残径は5.2cmである。胎土は細砂粒を含み、色調はにぶい橙色を帯びていた。外面はタテ方向のヘラ研磨が施こしてあった。内面はナデ調整である。



1. 黒色土層 径3~8mmの白色軽石を多量に含む。砂質
2. 黒色土層 径1~5mmの軽石の純層をブロック状に含む
3. 黒色土層 径1~5mmの軽石を多量に含む
4. 褐色土層
5. 黒褐色土層 4に類するが軽石が多くなる
6. 褐色土層 径1~8mmの軽石を若干含む
7. 褐色土層 軽石をまったく含まない。砂質

第162図 第44号住居址平面図・断面図



第163図 出土遺物

第45号住居址 (第164図 PL22)

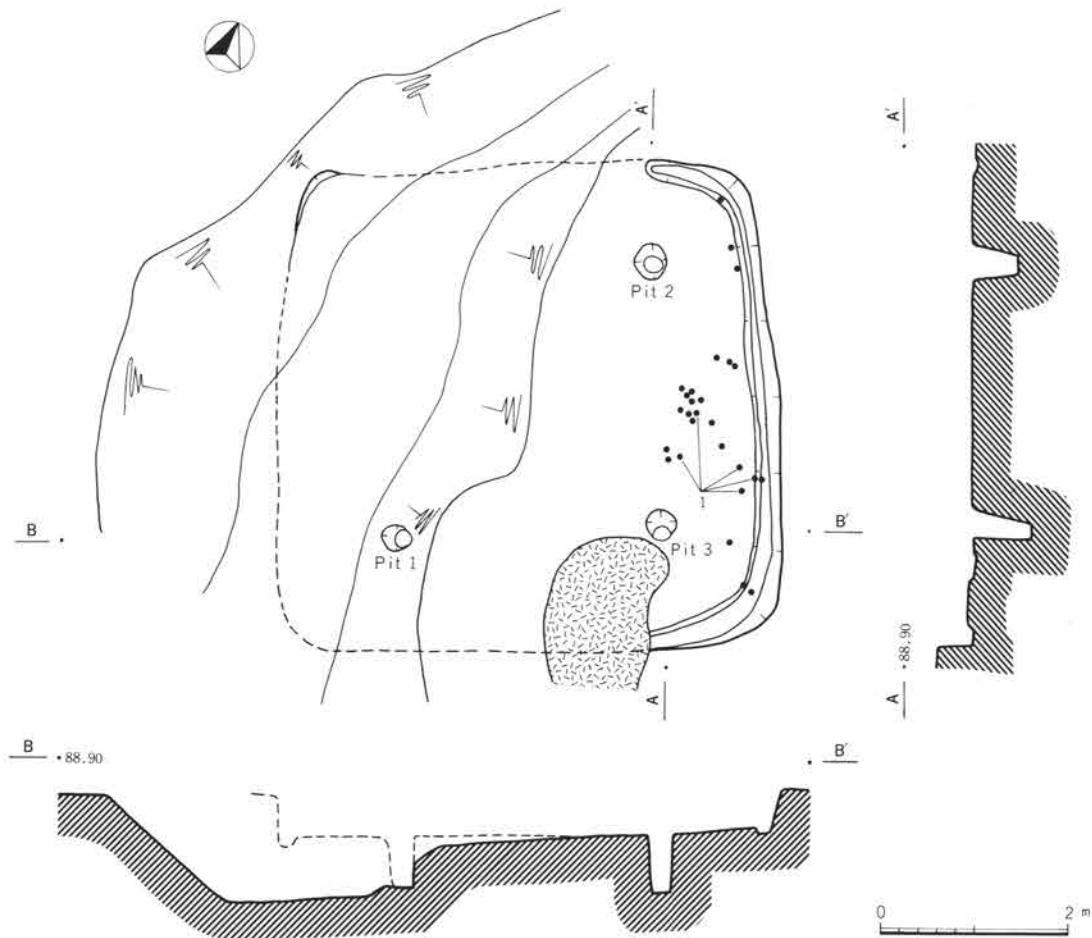
H-1 グリッドにその中心を置く。第3号古墳の西側の周堀との重複により、遺構の西側半分を欠失している。北西から南東に緩やかに下る斜面の中位に位置する。標高は88.65mを測る。

住居址の規模は東辺で5.08mを測る。また、第3号古墳の周堀の外壁に住居址の北西隅の最下部が残存しており、それから推定すると東西も4.87mとなり、平面形は隅丸の正方形に近い矩形を呈していたと考えられる。南北軸の方位はN24°Wである。

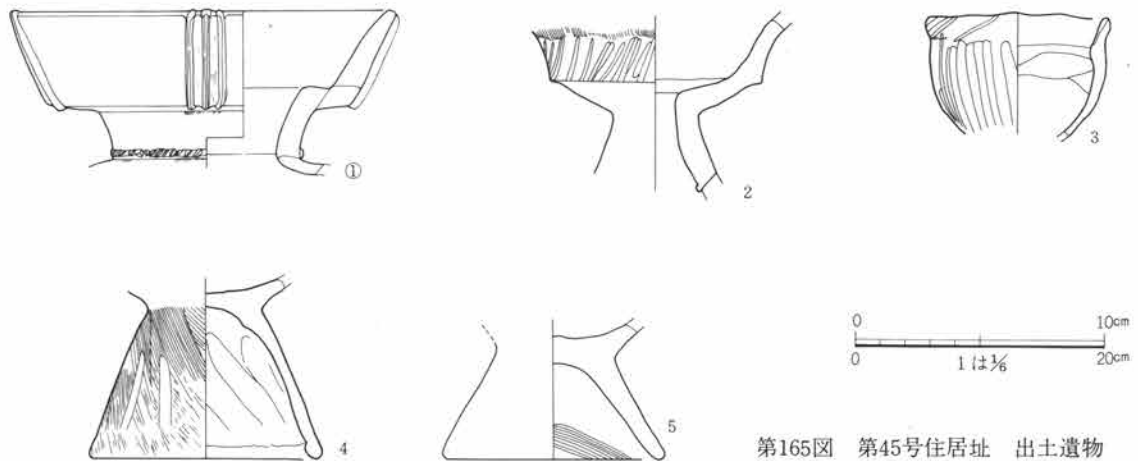
壁面はソフトローム層を掘り込みハードローム層に達している。残存壁高は0.35~0.41m、壁中央では垂直に近いが両隅においては崩落のためやや外反している。

床面はハードローム層中につくられているが特に踏み固められた部分はなかった。壁際には周溝が巡っており、幅9~18cm、深さ7cmを測る。箱形の断面形を呈していた。柱穴は主柱穴と考えられるものが3本検出できたがピット1は古墳の周堀により削平が著しかった。ピット2の深さは49cm、ピット3は60cmであった。貯蔵穴と炉は検出できなかった。

出土遺物は細片のみが出土しており、1の壺形土器の口縁部を始めとして、床面から5cm程離れた状態で広範囲に検出された。



第164図 第45号住居址平面図・断面図



第165図 第45号住居址 出土遺物

第11表 第45号住居址 出土土器観察表

No	器種	法 量(cm)	胎土・色調・焼成	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	壺 形	口 31.0 頸 15.0 高 (13.0)	細砂粒をわずかに含む 明赤褐色 軟調	二段口縁、3本1単位の棒状浮文が4カ所につく、頸部の貼付紐はヘラ状工具により刺突されている	内外ともに丁寧なミガキ	器面の剝離、磨減が著しい
2	特殊器台 形	高 (10.3)	細砂粒をわずかに含む にぶい橙色 普通	受け部は皿状の部分から著しく外反、裾部の貫通孔は3単位、径1.37cm	外 丁寧なミガキ、部分的にハケメを残す 内 受け部ヨコナデ後ミガキ、脚部ナデ	埋土中から出土
3	椀 形	口 (7.4) 高 (4.9)	細砂粒を多く含む にぶい橙色 普通	半球状の体部に短い口縁がつく	外 ヘラミガキ 内 横方向のナデ	
4	S字台付甕形	底 (7.1) 高 (9.4)	細砂粒を多く含む 明赤褐色 軟調	コップ状の裾部はやや内彎、端部は折り返し	外 ハケメ\ (8本/cm) 部分的に指頭により打ち消す 内 指頭によるナデ	部分的に炭化物付着
5	単口台付甕形	底 (9.0) 高 (5.4)	砂粒をわずかに含む 明赤褐色 軟調	ハの字状に外反、底径に比して器高が低い	外 丁寧なナデ 内 ハケメ\後ナデ	

第46号住居址 (第166図 P L22)

本住居址はI-3'グリッドに中心をおき、北に6mで第45号住居址に達する。第3号古墳と重複し、遺構の北半分近くは失なわれていた。標高は87.2mである。

平面形はコーナーにやや丸味のある矩形で、規模は東西軸の長さが4.24m、南北の残長が3.8mであった。

壁はソフトローム層を掘り込んでおり、確認面が北西から南東に向かって緩やかな傾斜をつくっているため残存壁高は北西端で0.28m、南東隅で0.15mを測る。周溝はなかった。

床面は特に堅い部分はなかった。柱穴は支柱穴のうち3本を検出したがいずれも浅かった。ピット1は深さ6cm、ピット2は9cm、ピット3は10cmである。炉址は検出できなかった。

出土遺物の多くは壁際の埋土中からの出土である。2つの台付甕形土器は床面から21cm離れて出土している。

第47号住居址 (第166図 P L22)

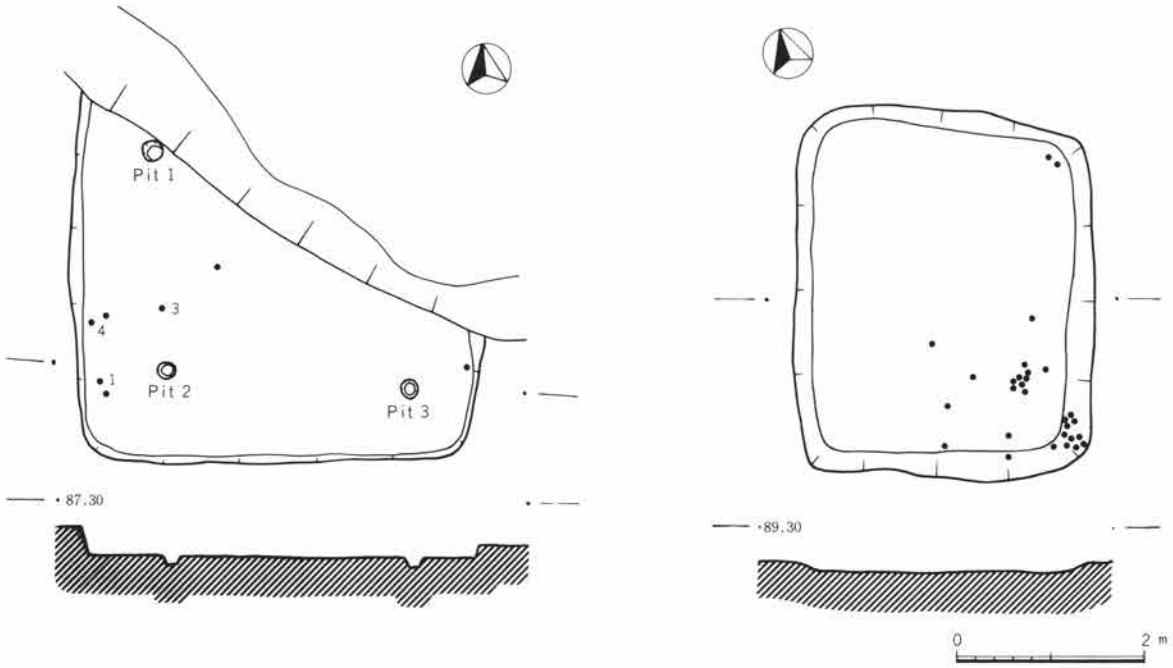
A-0グリッドに位置し、西側3.4mに第48号住居址が近接する。標高88.9mを測る。

第3節 古墳時代の住居址と出土遺物

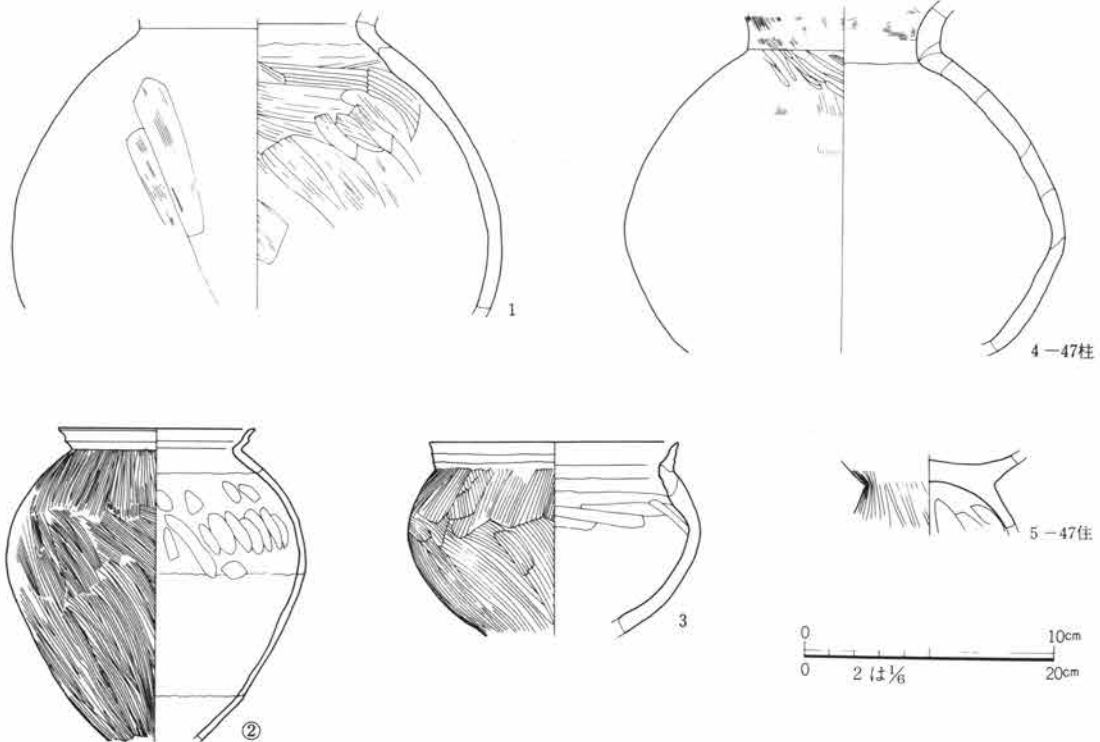
平面形は南北に長軸をもつ隅丸長方形で、南北3.87m、東西3.17mを測る。壁はソフトローム層を掘り込んで形成されているが、残高は0.09~0.12mと極めて浅い。断面形もハの字状に外反してしまっていた。

柱穴、炉、貯蔵穴等の施設は検出できなかった。

遺物は南東隅を中心に細片が出土したが、床面から5cm程離れているものが大部分であった。



第166図 第46号・47号住居址平面図・断面図



第167図 第46・47号住居址 出土遺物

第12表 第46号・47号住居址 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	壺形	頸 (9.5) 胴 (19.6) 高 (11.3)	細砂粒を多く含む におい褐色 軟調	胴部は球形を呈する	外 口縁部ヨコナデ、ハケメ後ヘラミガキ 内 ナデ、上半部はハケメが残る	破片
2	S字台付甕形		細砂粒を多く含む におい橙色 軟調	口縁部は段部より上で大きく外反。胴部は径が小さく接合部が明瞭に残る	外 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ(8~9本/cm)胴下半分は2回にへ、上半部は↓ 内 ナデ、上部に指頭によるオサエ	床面から離れて出土 残存率 $\frac{1}{2}$
3	椀形	口 (10.1) 胴 (11.8) 高 (7.6)	細砂粒を含む 橙色 軟調	最大径は胴部中位にある。口縁はS字状をなすが段部が不明瞭、先端は尖る	外 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ(7本/cm)、下半部へ、上半部↓ 内 下中部ナデ、上部指頭によるオサエ	台付甕形土器の可能性もある 残存率 $\frac{1}{2}$
4	壺形	頸 (7.8) 胴 (17.7) 高 (13.1)	砂粒をやや含む におい橙色 普通	頸部はよくしまる、胴部は中位やや下に最大径をもつ	外 ハケメ後丁寧なミガキ 内 器面の剝離が著しい、頸部はミガキ一、胴部はナデ	破片
5	S字台付甕形	高 (2.5)	砂粒を多く含む におい褐色 軟調	甕の基部	外 ハケメ、内 胴部ヘラによるオサエ、台部指頭によるオサエ	破片

第48号住居址 (第169図 PL21)

Y'-0グリッドにあたり、調査区の南西端、北から南に向って下る緩やかな斜面の中位に位置する。東へ3.4mで同時期の第47号住居址に達する。標高は87.7mを測る。

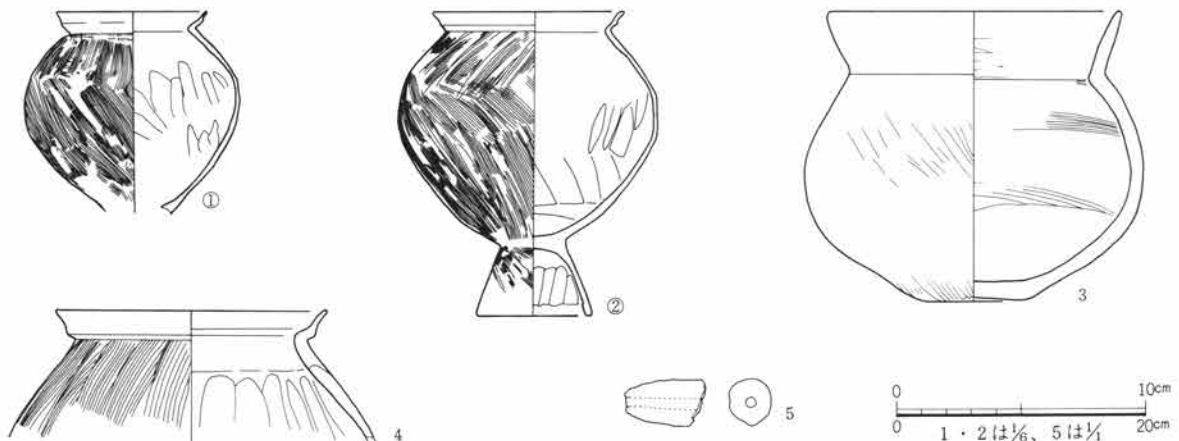
平面形は隅丸方形に近い矩形を呈している。規模は南北4.68m、東西4.77mを測る。南北軸の方位はN29°Eである。

壁はハードローム層を掘り込み形成されており、残高は0.37~0.151mであった。周溝はない。

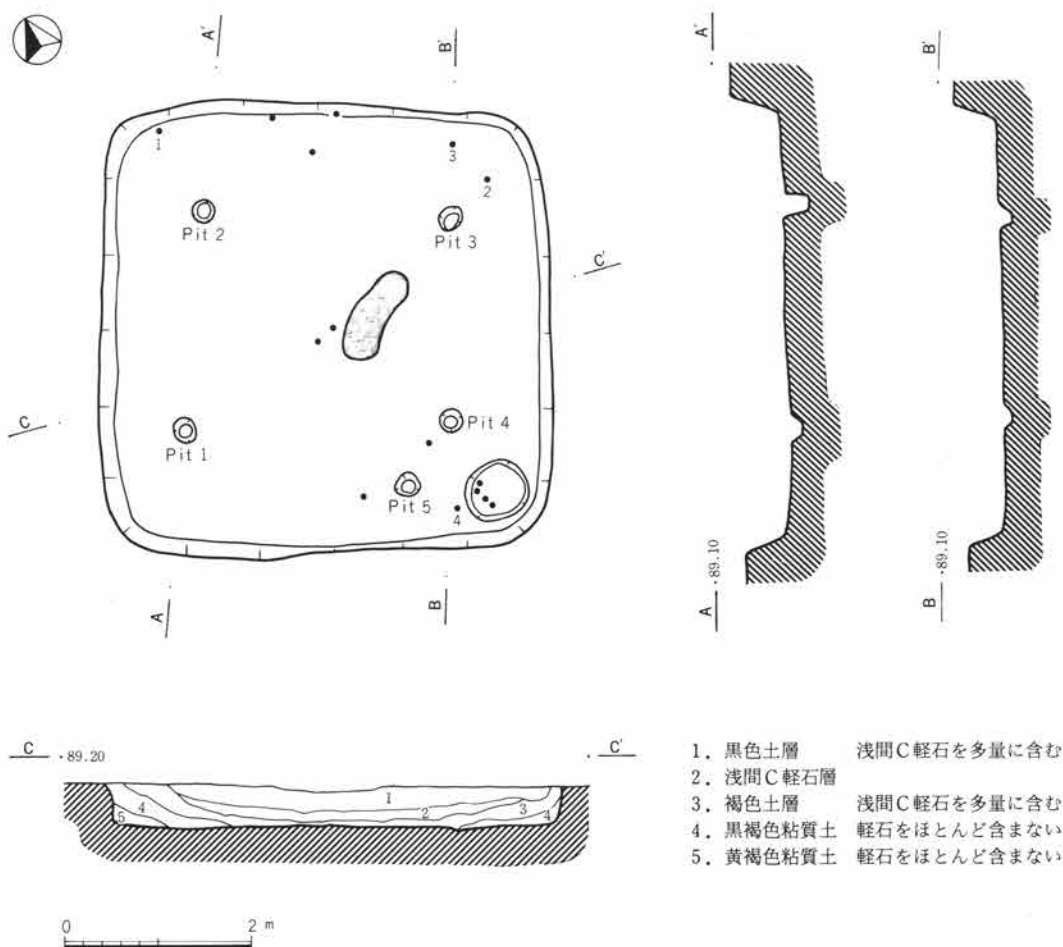
床面はハードローム層中につくられており、貼り床や踏み固められた部分はなかった。

柱穴は5本を検出した。ピット1~4が支柱穴と考えられる。個々の深さはピット1、12cm、ピット2、30cm、ピット3、14cm、ピット4、11cmであった。ピット5は南壁から47cm離れており深さ32cmを測る。

南東隅には長径67、短径60cm、深さ17cmの皿状の掘り込みがあり、埋土中に土器の細片を含んでいた。貯蔵穴と考えられる。炉址は中央やや東よりにあり、焼土と炭化物を散見した。



第168図 第48号住居址 出土遺物



第169図 第48号住居址平面図・断面図

遺物は浅間C軽石層の上下両方から出土しているが、上層からはまとまった個体は認められなかった。C軽石層下の遺物は北西隅の壁面際床面直上から1が横倒したかたちで出土している。また、北東隅近くからは2と3が出土している。2は台部を床面に付けているが、3は床面上10cmの出土である。埋土中からは4の土錘が出土している。

第13表 第48号住居址 出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	S字台付甕形	口 12.1 胴 9.9 高 20.6	白色砂粒を多く含む にぶい褐色 軟調	中型。胴部最大径がやや下位にある。口縁部は先端が尖り、頸部と屈曲部の幅が大きい。器肉厚い	外 全面に柔かいタッチのハケメ(8~9本/cm)、胴部は2回に分けて↑、その後頸部から↓、台部↓ 内 丁寧なナデ、胴下部に指によるオサエ	浅間C層下
2	S字台付甕形	口 15.2 胴 20.7 高 24.3	白色砂粒を多く含む にぶい褐色 軟調	体部の器高に比して胴部径が大きい。口縁部は先端が長く外反する。段部の成形は丁寧	外 全面にハケメ(6~7本/cm) 胴上部↓、胴下部へ、台部↓、整形順序は台部胴下部、胴上部の順 内 最下部ヨコナデ、胴下部はナデ、胴中位から上位にかけて指頭によるオサエ	浅間C層下

第2章 検出された遺構と出土遺物

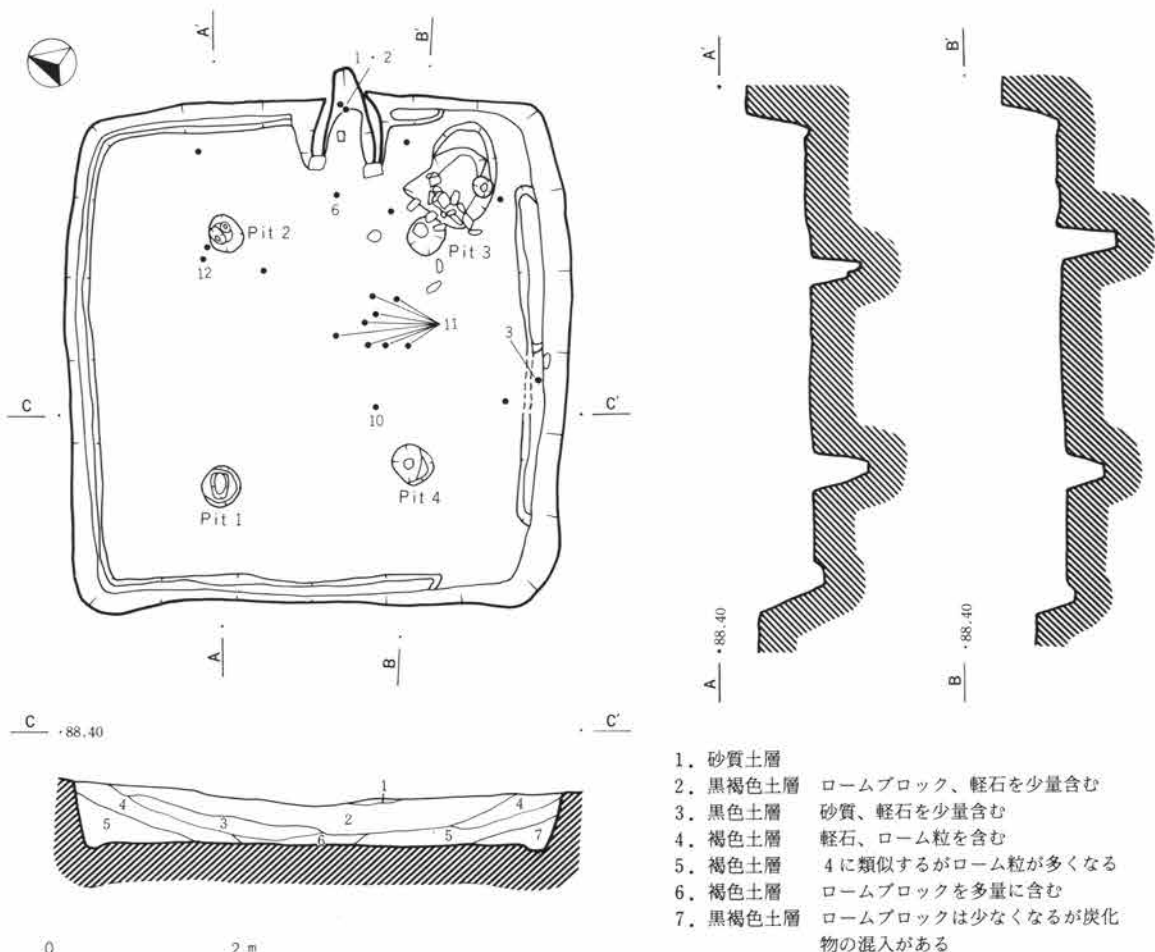
3	S字台 付甕形	口 (10.9) 高 (4.5)	輝石と砂粒をやや 含む にぶい橙色 軟調	口縁部は屈曲部が不明瞭 である。小型	外 ハケメ(10本/cm)↓、左回りに施す 内 頸部に接合痕を残す。底部には指頭 によるオサエ	破片
4	甕形	口 (12.0) 胴 13.6 高 11.5	砂粒を多く含む にぶい橙色 軟調	口縁は短く直立ぎみに立 ち上がる。胴部は中位に 最大径をもつ球形。平底	外 口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ、底面 はハケメ 内 ハケメ後ナデ、部分的にハケメ残る	浅間C層下
5	土錘	径 0.7 内径 0.2	茶褐色			

第49号住居址 (第170図 P L23)

本住居址はG-4'グリッドに位置し、西壁は第1号古墳の周堀と重複する。

平面形はやや隅の丸い正方形に近い矩形を呈する。カマドの付設された東西で5.26m、南北5.30mを測る。

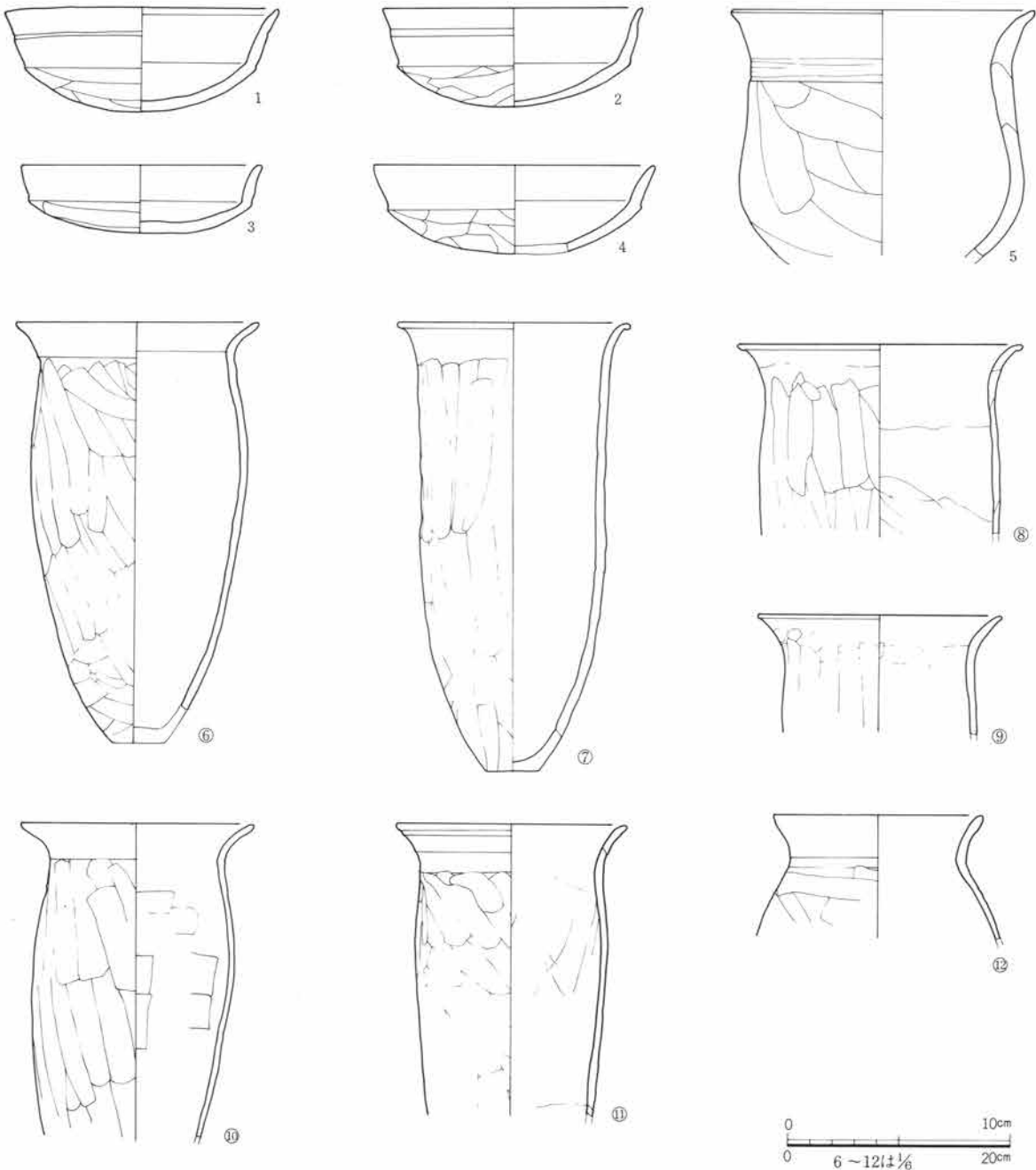
壁面はハードローム層を掘り込んで垂直に近い角度で形成されており、残高は0.53~0.72mである。床面



第170図 第49号住居址平面図・断面図

は部分的に踏み固められていた。支柱穴は4本である。壁際には周溝がめぐり、南壁下の一部を除きほぼ全周していた。南東隅には貯蔵穴がつくられていた。規模は長径101、短径64cmで、楕円形に近い矩形であった。

カマドは東壁につき、壁内にローム土を用いた袖部を構築し、先端には角礫を据えていた。遺物はカマドの焚口部に6が横倒していたのをはじめ、カマドとその周辺に集中していた。



第171図 第49号住居址 出土遺物

第14表 第49号住居址 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	杯形	口高 12.4 4.7	砂粒をわずかに含む 明褐色 軟調	底部は口縁に比して浅い。口縁は外反しながら立ち上がり、先端はやや尖る	外 口縁部ヨコナデ、底部、中央部を一方方向にヘラナデケズリ後、周縁部を左回りにヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラミガキ	残存率 $\frac{1}{2}$
2	杯形	口高 12.4 4.7	細砂粒を含む 赤褐色 軟調	底部は口縁部に比して浅い。口縁部は中位にも弱い稜をもつ	外 口縁部ヨコナデ、底部、不定方向のヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラミガキ、オサエの痕がのこる	残存率 $\frac{1}{2}$
3	杯形	口高 10.7 3.0	細砂粒を含む 橙色 軟調	底部は浅い、口縁と底部の間の稜は顕著	外 口縁部ヨコナデ、底部幅の広いヘラケズリ、周縁部は右回りのヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	器面はやや粗れている
4	杯形	口高 12.8 4.0	細砂粒を含む 明褐色 軟調	口縁部と底部の深さは同一、口縁部は直線的に開く	外 口縁部ヨコナデ、底部中央は一方方向のヘラケズリ、周縁部は右回りのヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	破片
5	壺形	口高 (13.7) (11.0)	砂粒を多く含む にぶい褐色 軟調	口縁部に最大径をもち、胴部はあまり張らない	外 胴部、下半部ヘラケズリ、後上半部ヘラケズリへ、その後口縁部のヨコナデ 内 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	残存率 $\frac{1}{2}$
6	壺形	口高 22.0 (34.7)	砂粒を多く含む 明褐色 軟調	口縁部は短く直線ぎみに開く、胴部の最大径は上位にある。	外 口縁部のヨコナデ後、胴部を3回に分けてヘラケズリ、調整は下位→、中位↓、上位↑の順 内 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	底部のみ欠失
7	壺形	口高 21.2 40.2	砂粒を多く含む 明褐色 軟調	頸部のしまりがなく口縁部はゆるやかに外反、端部は外面に丸みをもつ胴部はほとんど張りが無い	外 口縁部をヨコナデ後、胴部を3回に分けてヘラケズリ↑ 内 ヘラナデ	内面は粗れている
8	壺形	口高 (25.9) (17.0)	砂粒を多く含む にぶい褐色 軟調	口縁部は緩かに外反し、頸部はしまりが無い	外 口縁部のヨコナデ後、胴部ヘラケズリ↓ 内 ヘラナデ、中位にヘラの単位をよく残す	破片
9	壺形	口高 22.0 (10.6)	砂粒を多く含む にぶい褐色 軟調	口縁部は緩かに外反し、端部は外面に丸みをもつ	外 口縁部のヨコナデ後、胴部ヘラケズリ↓ 内 口縁部には指頭によるオサエの痕が残る	破片
10	壺形	口高 21.1 (28.1)	砂粒を多く含む 明褐色 軟調	口縁部は短いが強くと外反する。胴部最大径は上位になり、序々に小さくなる	外 口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリ、下位、中位、上位の順に上から下に向けて調整している	
11	壺形	口高 21.0 (26.0)	砂粒を多く含む 明褐色 軟調	口縁部は直立ぎみに立ち上がる。胴部は最大径を上位にもつが、径の変化はあまりない。	外 口縁部、2回に分けてヨコナデ、その後胴部にヘラケズリ、ケズリの始まりが一定していないが、下から上の方向で底部から先に調整を加えている 内 ヘラナデ	
12	壺形	口高 (18.9) (11.0)	砂粒を多く含む 明褐色 軟調	口縁部は頸部から直立ぎみに立ち上がり、上半はやや外反する	外 胴部にヘラケズリ→後、口縁部のヨコナデ 内 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	

第50号住居址 (第172図 P L23)

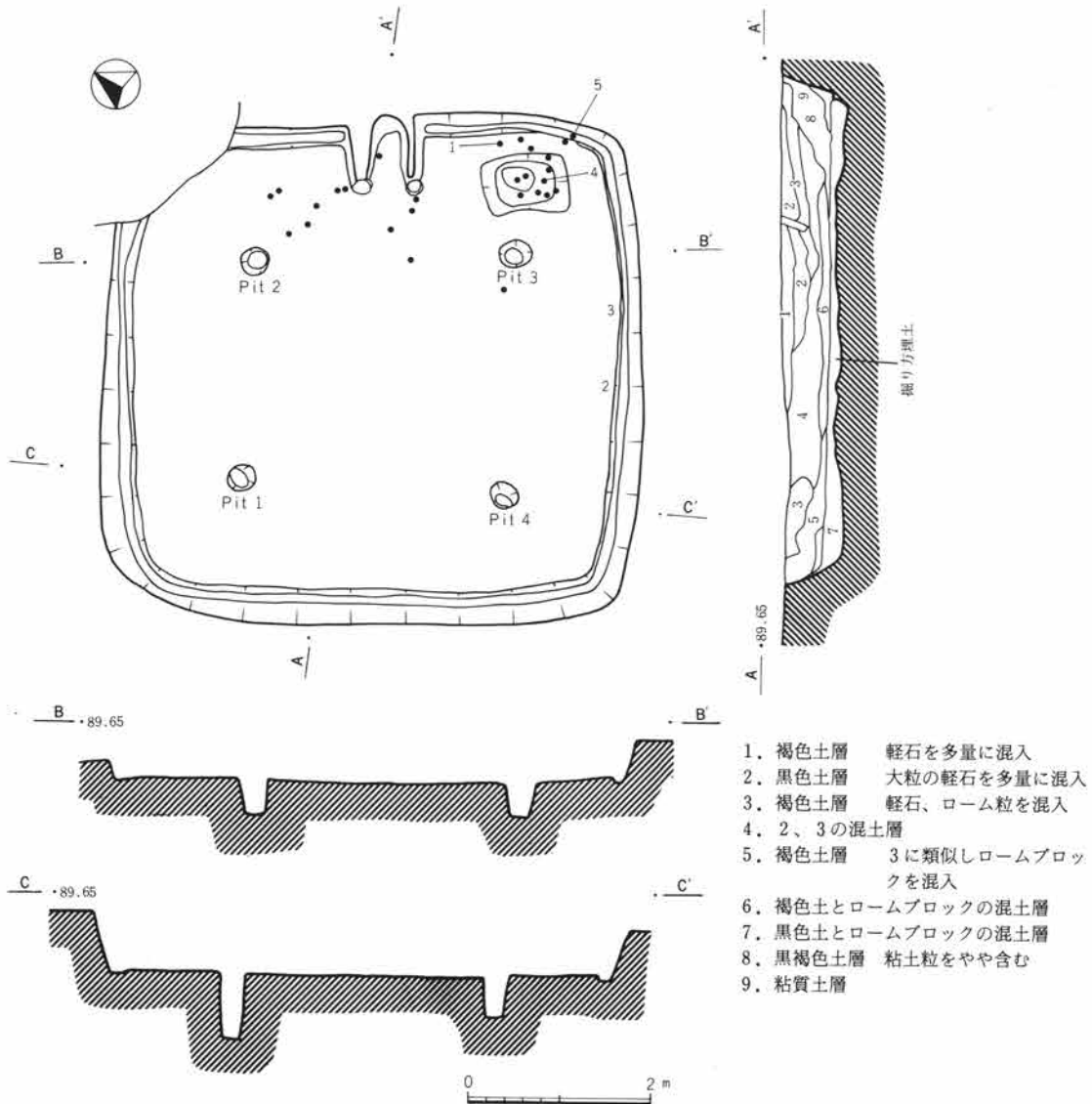
本住居址はD-1グリッドにあり、第49号住居址からは北西へ4.7mの距離に位置している。北隅は第2号古墳との重複により失なわれている。

平面形は隅丸の矩形を呈しており、長軸は南北方向にある。規模は南北5.83m。カマドの付設された東西で5.12mを測る。東西軸の方位はN57°Eである。

壁面はハードロームの層を掘り込んでおり、残存壁高は0.40~0.64mである。壁際には、幅15、深さ10cmの周溝が全周している。床面は薄い貼り床の層があり、ほぼ水平に整えられていた。主柱穴は4本である。

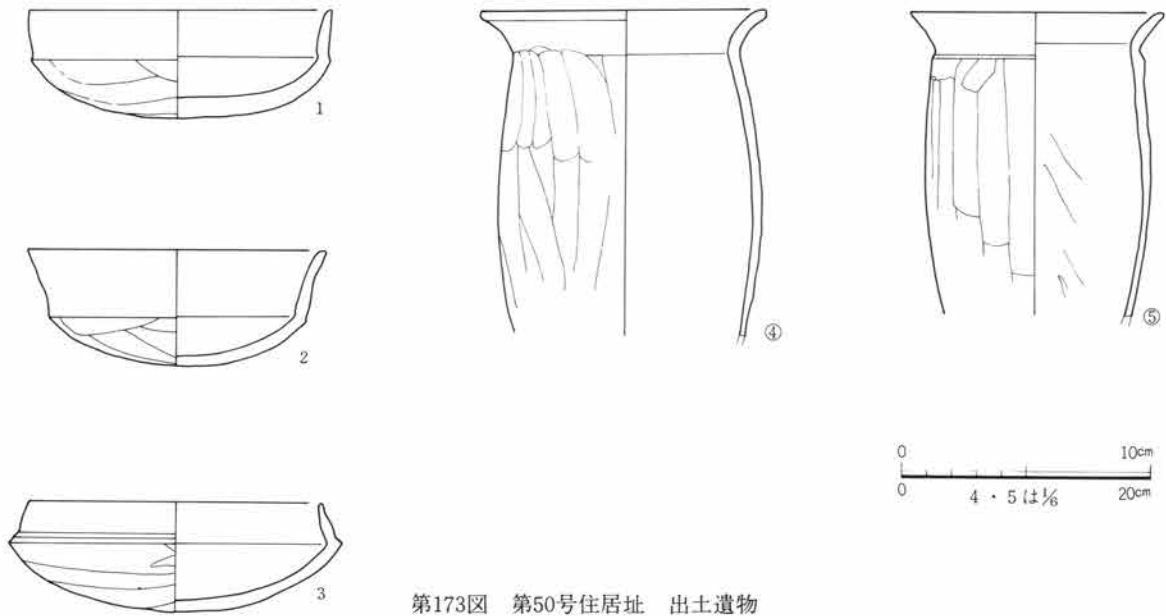
カマドは東北壁中央に位置し、住居内に焚口部があり、ローム質の粘質土で作られた袖の先端には長甕が倒立して置かれていた。カマドの右側には貯蔵穴がある。深さ58cmの矩形を呈し、壁際から流れ込むように多数の土器が出土した。

遺物は貯蔵穴の他にはカマドの周辺に集中していたが床面に近いものは細片が大部分であった。



第172図 第50号住居址平面図・断面図

第2章 検出された遺構と出土遺物



第173図 第50号住居址 出土遺物

第15表 第50号住居址 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	杯形	口高 12.2 4.3	細砂粒を含む 明褐色 軟調	口縁部は直立ぎみに立ち上がる。底部は器肉が厚い	外 口縁部ヨコナデ、底部は中央部を一方方向、周縁部を左回りヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	
2	杯形	口高 12.0 4.6	細砂粒を含む 明褐色 軟調	底部は浅い 口縁部はやや外反する	外 口縁部ヨコナデ、底部、中央部一方方向にヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	残存率1/2 内外面とも磨耗
3	杯形	口高 11.7 4.4	細砂粒を含む にぶい橙色 普通	口縁部はかえりをもち内斜傾する。端部は細く尖る	外 口縁部ヨコナデ、底部二方向にヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	須恵器杯の模倣杯
4	甕形	口高 (22.6) (25.5)	細砂粒を多量に含む 明褐色 軟調	口縁部は短く大きく外反する。器肉は全体に厚い	外 口縁部のヨコナデ後、胴部を2回に分けてヘラケズリ↑ 内 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胴部下半の表面は剝離が著しい
5	甕形	口高 (20.2) (24.0)	細砂粒を多量に含む 明褐色 軟調	口縁部はくの字状に外反する。胴部の径はあまり変化なく序々に小さくなっている	外 口縁部ヨコナデ、胴部は2回に分けてヘラケズリ↑、強いタッチで面をとるように調整している 内 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	口縁部のヨコナデで出来た段はヘラで調整をうけて面が出来ている

第51号住居址 (第174図 P L23)

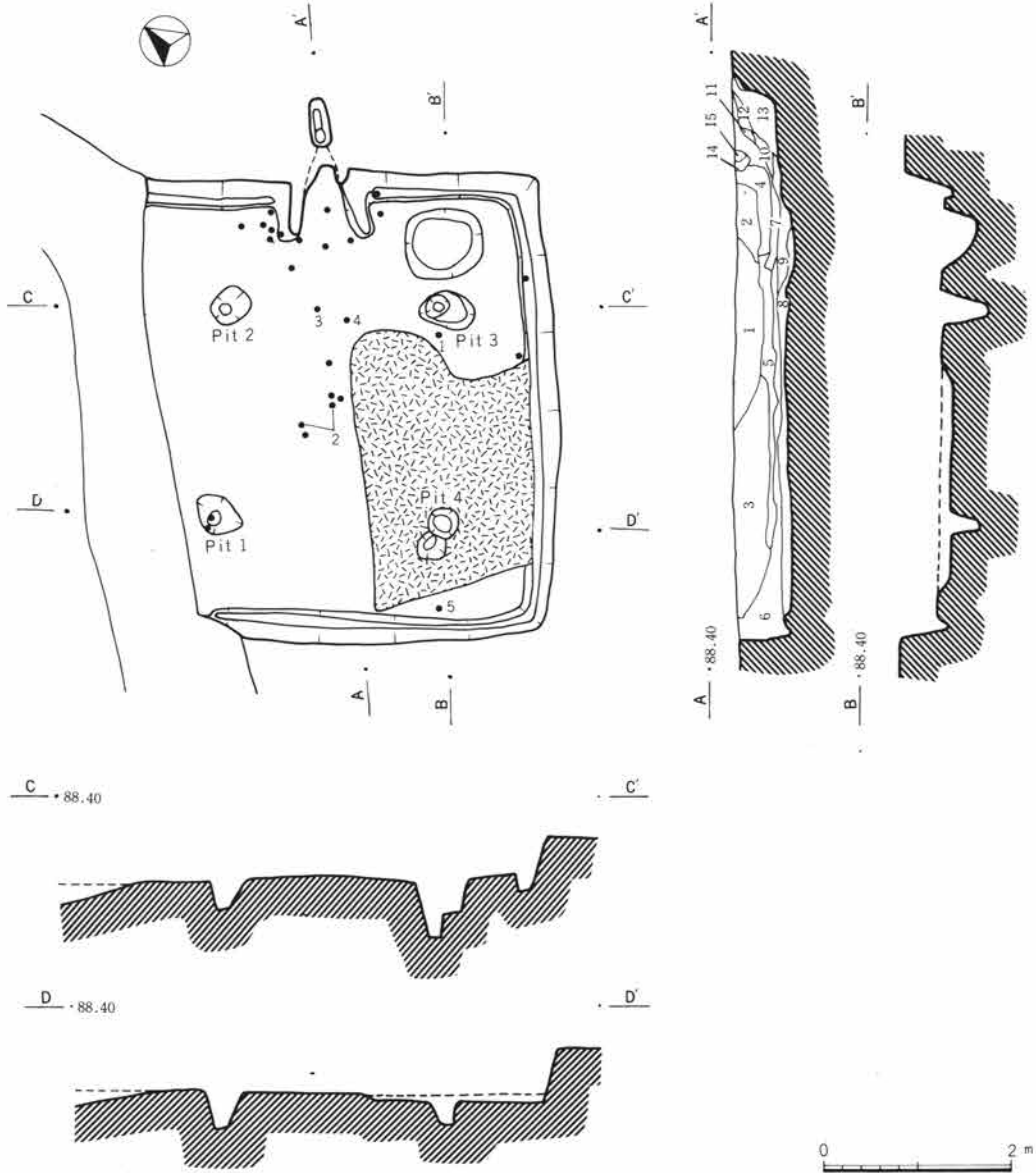
N-1 グリッドに中心を置く。第46号住居址の西、6.5mに位置する。第3号古墳の周堀との重複により北壁とその周辺を欠失する。

平面形はコーナーの鋭い矩形を呈していたと考えられる。カマドの付設された東西軸が、4.9m。南北の残長が4.2mを測った。東西軸の方位はN53°Eである。

壁はハードロームの層に達しており、残存壁高は0.38~0.51mを測る。掘り方は、垂直に近い面が形成されていたと考えられるが検出時には各辺の中位の崩壊が進行しやや外方に張り出していた。壁際には幅15、

深さ10cm前後の周溝が全周していたと考えられる。

床面は貼り床で、掘り方の底面までの間は汚れたロームであった。南西部は床面が確認できなかった部分である。柱穴は6本確認できた。南側の2本は建てかえであろう。柱穴の深さはピット1、41cm、ピット2、



- | | | | |
|-----------|-------------------------------|----------------|---------------------------------|
| 1. 暗茶褐色土層 | 軽石を多量に含む。締りが無い | 8. 黒色土と灰の混土層 | 焼土、ローム粒、軽石を多く含む |
| 2. 暗茶褐色土層 | 軽石、ロームブロックを多量に、焼土炭化物粒を少量含む | 9. 灰茶褐色土層 | 混入物は8と同様 |
| 3. 暗茶褐色土層 | 黒色土を多量に含む | 10. 黄灰褐色土層 | 褐色土中に粘土ブロックを多量に含む。8と同様の混入物が含まれる |
| 4. 黄茶褐色土層 | 暗灰色味が強い、ロームの小ブロックを多量に、焼土を少量混入 | 11. 黒色土と灰の混土層 | 砂質、混入物を多く含む |
| 5. 黒色土層 | 粘性あり | 12. 黄灰褐色土層 | 灰、焼土、ロームブロックを多量に含む |
| 6. 暗茶褐色土層 | 黒色味が強い。ローム粒を多量に混入 | 13. 粘土層 | 焼土、ロームは14より少量 |
| 7. 褐色土層 | 焼土のブロック、粒子を多量に含む | 14. 粘土と黒色土の混土層 | 焼土を多量に含む |
| | | 15. 粘土層 | 焼土化している |

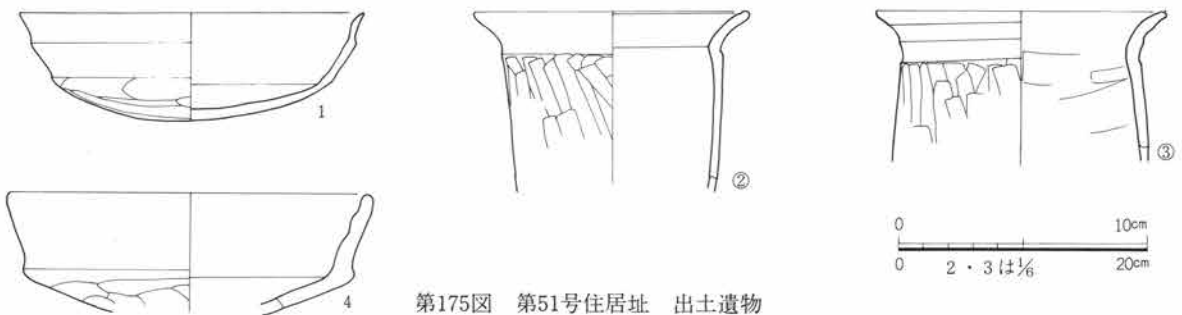
第174図 第51号住居址平面図・断面図

51cm、ピット3、52cm、ピット4、27cm、ピット5、14cm、ピット6、28cmである。

カマドは東壁に付設されていた。焚口部は住居内につくられており、煙道のみが壁外を掘り込んでいた。天井部の一部が残っていたが、袖は崩壊が進行していた。袖はロームと暗灰色の粘質土、黒色土を混土したものを用いて構築しており、生活時の使用により内壁は焼土化していた。焚口内の灰層は薄かった。煙道は筒状の最下部のみ残存していた。

カマドの右側、住居の南東隅には貯蔵穴が設けられている。矩形を呈し深さ46cmを測った。

遺物はカマド周辺を中心に出土したが細片が多く、床面直上からは良好な資料を得ることはできなかった。



第175図 第51号住居址 出土遺物

第16表 第51号住居址 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	杯形	口 13.8 高 4.3	細砂粒をわずかに含む ぶい橙色 軟調	底部は浅く、口縁部との間に稜をもつ。口縁は内彎ぎみに大きく開く	外 口縁部ヨコナデ、底部不定方向にヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	残存率1/2
2	杯形	口 (14.6) 高 (4.6)	軽石の小粒を含む ぶい橙色 軟調	口縁部は厚く、直立ぎみに立ち上がる。底部は浅い	外 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	内面に布目痕あり
3	甕形	口 (22.2) 高 (13.2)	細砂粒を多量に含む 淡橙色 軟調	口縁部は厚く、頸部から強く外反、胴部はほとんど張らない	外 口縁部ヨコナデ後、胴部に細かいヘラケズリ↑ 内 丁寧なナデ	
4	甕形	口 (23.4) 高 (10.6)	細砂粒を多量に含む 明褐色 軟調	口縁部は厚く、ヨコナデの単位が器面に現われている	外 口縁部を3回に分けてヨコナデ、その後胴部にヘラケズリ↑ 内 口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ方向のヘラナデ	

第52号住居址 (第176図 PL24)

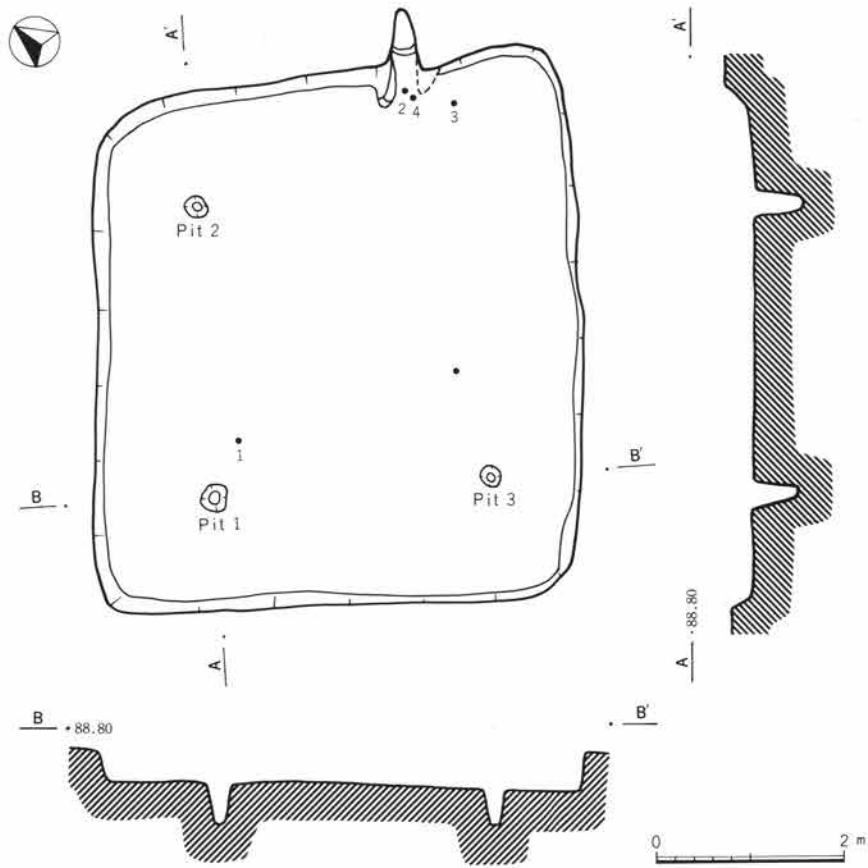
T-11グリッドに中心をおき、西から東へ下る斜面の下位に位置する。北西隅が第5号古墳の周堀と重複する。土層観察からの新旧関係は判定できなかったが他の例からすると住居址を古く考えたい。

平面形は南東隅が張った矩形で各コーナーはやや丸味を帯びていた。南辺5.84m、西辺5.24mを測る。

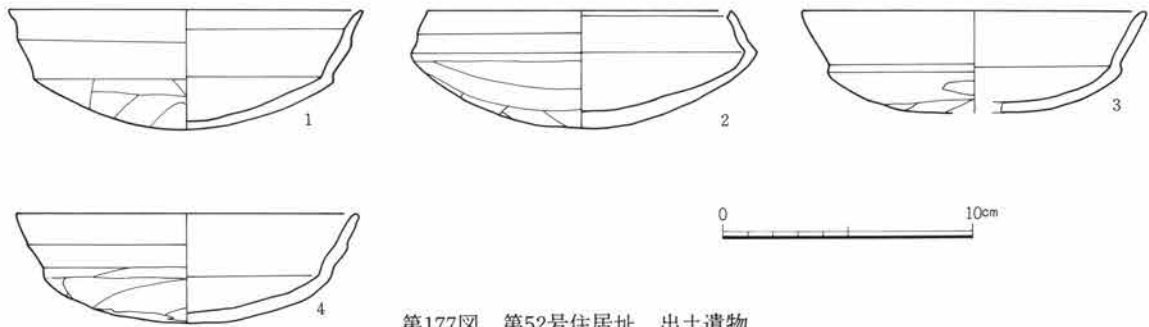
床面は特に堅い部分は無く、柱穴3本が検出された。壁面はソフトローム層を掘り込み、ハードローム層に若干達していた。残高は0.28~0.40mである。周溝は全く無かった。

カマドは焚口部を住居内につくっているが、小規模で、やや狭ばまりながら壁外の煙道に続いている。床面には焼土が散見できた。カマドの付設されていた東西軸の方位はN53°Eである。

遺物は焚口内から2個体、右袖の先端にあたる場所から1個体の杯形土器が出土している。



第176図 第52号住居址平面図・断面図



第177図 第52号住居址 出土遺物

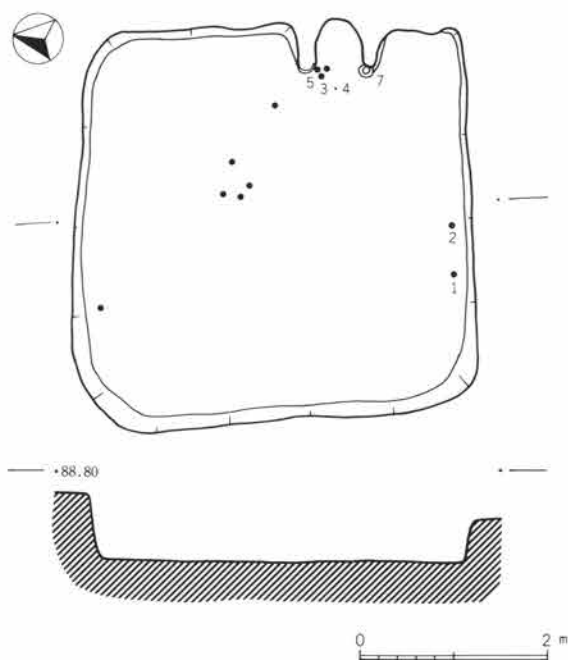
第17表 第52号住居址 出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	杯形	口高 14.2 4.7	砂粒を少量含む にぶい橙色 軟調	口縁部は中位に稜をもち、先端は鋭い。 やや大型	外 口縁部ヨコナデ、底部中央は一方方向のヘラケズリ、周縁部細かいヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	完型

第2章 検出された遺構と出土遺物

2	杯形	口高 12.1 4.6	砂粒を少量含む にぶい橙色 軟調	口縁は内斜し底部との間に受部の稜をもつ。端部は内傾する凹面	外 口縁部ヨコナデ、底部中央一方向のヘラケズリ、周縁部は右まわりに大きな単位でヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整を施す	完型 須恵器杯模倣杯
3	杯形	口高 (13.7) (4.0)	細砂粒を少量含む にぶい橙色 軟調	口縁部は底部に比して長く、直線的に立ち上がる端部は丸い	外 口縁部ヨコナデ、中央一方向のヘラケズリ、周縁部は右回りヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ	内面は剥離が著しい
4	杯形	口高 13.7 4.3	砂粒を少量含む にぶい橙色 軟調	底部は浅い、口縁部は中位に稜をもち、大きく外反する。端部は丸い	外 口縁部ヨコナデ、底部不定方向のヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整を施す	外面の稜の部分に焼成前のヘラの当たった痕がある

第53号住居址 (第178図 P L24)



第178図 第53号住居址平面図・断面図

V-16グリッドに位置する。

平面形は北西隅がやや張るが正方形に近い矩形を呈する。コーナーはやや丸味を帯びている。南北4.32m、東西4.2mを測る。カマドの付設されている東西軸の方位はN82°Eである。

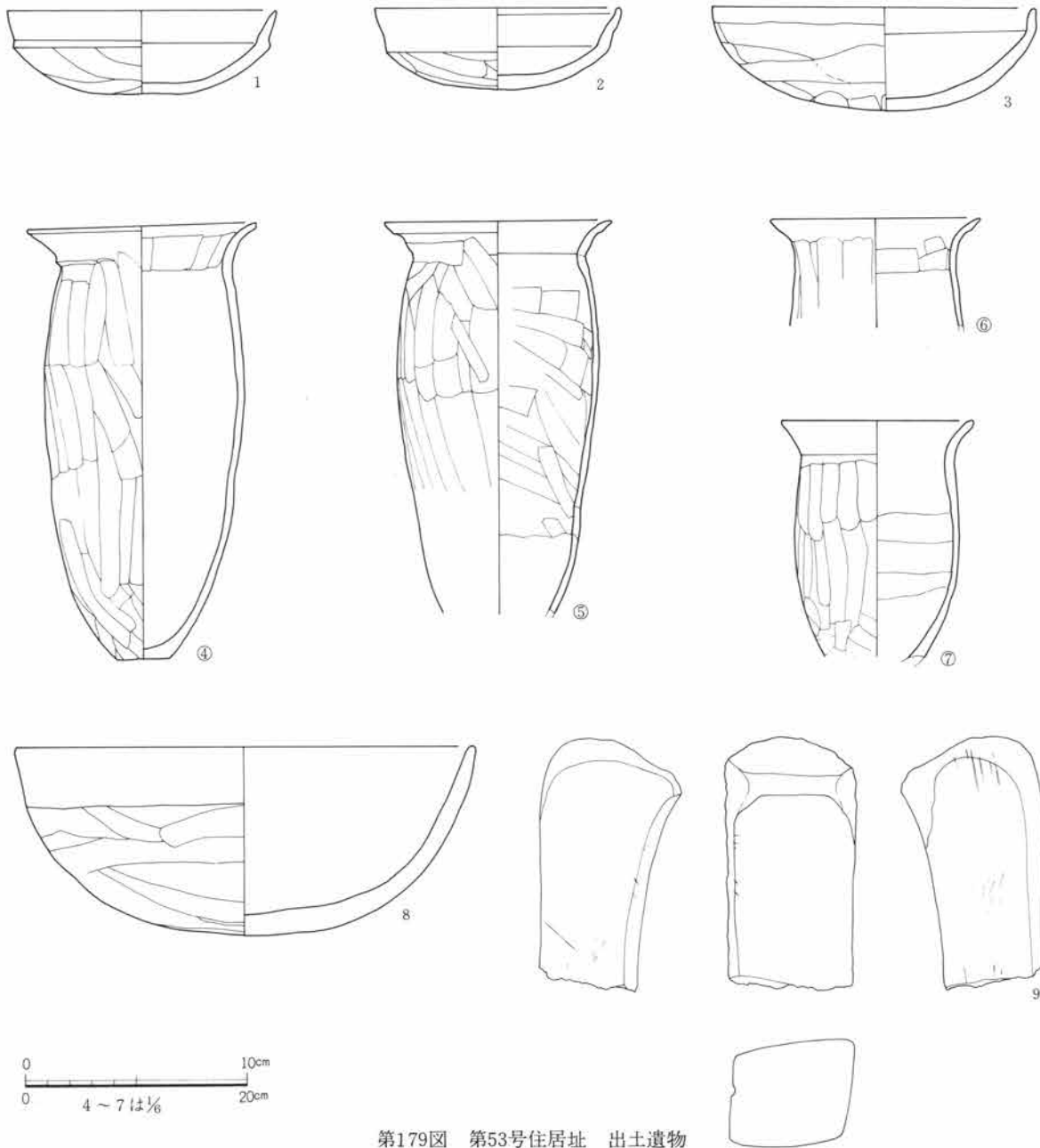
壁は暗褐色土層を掘り込みハードローム層に達していた。残存壁高は0.72mである。周溝はない。床面はほぼ水平で柱穴は確認できなかった。西壁際の埋土中位に多量の焼土を認めたが第18号住居の炉址との重複関係からの崩落土と考えられる。

カマドは東壁のやや南よりに位置し、焚口は住居内に構築されていた。煙道部は削平されていた。袖はローム混りの粘質土を使用して築かれており、左袖の先端には5、右袖には7が倒置してあった。

出土遺物としては、4がカマドの両袖の間から横位で出土しており、その下に3があった。9は砥石で左袖脇の床面から出土している。

第18表 第53号住居址 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	杯形	口高 12.2 3.7	砂粒を多く含む 明褐色 軟調	口縁部は底部に比して短く、直線的に立ち上がる。端部は鋭い	外 口縁部ヨコナデ、底部は2方向にヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	残存率1/2



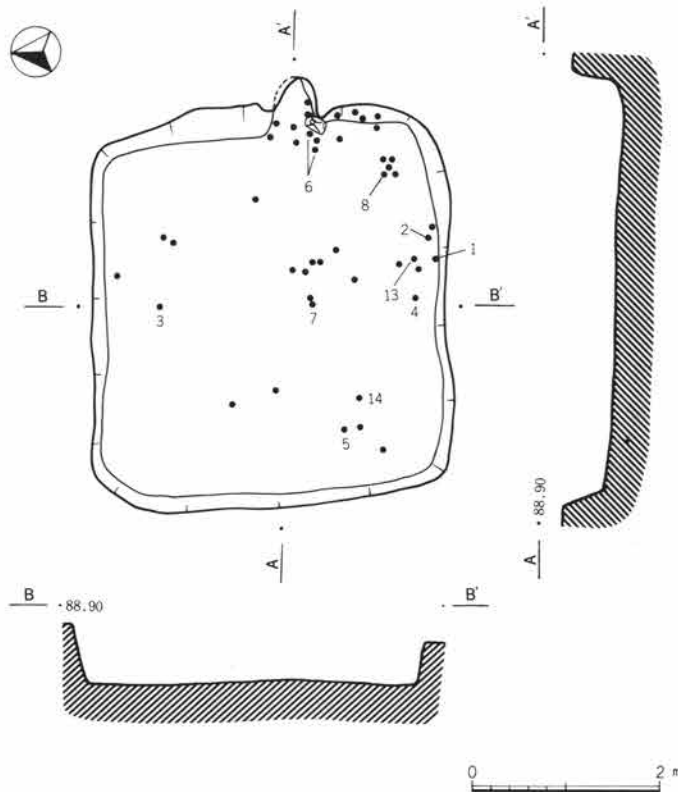
第179図 第53号住居址 出土遺物

2	杯形	口径 11.2 3.6	底部に砂粒が多い 明褐色 軟調	底部は浅く、外面の稜も 弱い、口縁端部は内側に かえる。やや小型	外 口縁部ヨコナデ、底部中央一方向の ヘラケズリ、周縁部左回りヘラケズリ	完形
3	杯形	口径 14.6 4.6	砂粒を少量含む 明褐色 軟調	器高の低い偏平な器形 口縁部は直立ぎみで短い	外 底部を一方向のヘラケズリ後、口縁 部を指頭によりヨコナデ 内 ナデ	残存率% 鉢形に近い器形
4	甕形	口径 20.7 18.6 胴高 38.5	砂粒を多く含む 明褐色 軟調	口縁部は大きく外反す る。端部は丸い。胴部は 最大径を中位やや上にも つ。底部はヘラ調整	外 口縁部ヨコナデ、胴部の調整痕が一 部延びる。胴部は下半部から3回に分けて ヘラケズリ↑、最下位は↓、底部ヘラ ケズリ。内 口縁部に左回りのヘラナ デ	完形 外面に磨耗が著し い

第2章 検出された遺構と出土遺物

5	甕形	口高 20.5 (34.9)	軽石、その他砂粒を多く含む 赤橙色 軟調	口縁部直立ぎみに立ち上がり、先端で強く外反する。胴部最大径は胴上部にあり、4に比して重心が高い	外 口縁部ヨコナデ後、胴部を3回に分けてヘラケズリ↑、頸部にヘラを止めた痕を明瞭に残す 内 ヘラナデへ	外面に炭化物付着 カマドの左袖に使用されていた
6	甕形	口高 18.9 (9.5)	軽石、細砂粒を多く含む にぶい橙色	頸部のくびれは不明瞭 口縁部は先端で大きく外反	外 口縁部ヨコナデ後、胴部ヘラケズリ↑ 内 口縁部ヨコナデ、胴部は左回りにヘラナデ	破片
7	甕形	口高 17.3 (21.0)	砂粒を多く含む にぶい橙色 軟調	口縁部はゆるやかに外反し端部は丸みをもつ。胴部は砲弾形をなす	外 口縁部ヨコナデ、胴部は3回に分けてヘラケズリ、中位までは↑、その後最下位に↘ 内 口縁部ヨコナデ、胴部指頭によるナデ	
8	鉢形	口底 20.9 8.5	細砂粒を多く含む にぶい橙色 軟調	半球形の器形、口縁端部は丸みをもつ。器肉は厚い	外 底部にヨコ方向のヘラケズリ、下半部に←、その後上半部→、口縁部は2.5cm程ヨコナデ 内 ナデ	残存率 $\frac{1}{2}$ 内面の剝離が著しい

第54号住居址 (第180図 P L24)



第180図 第54号住居址平面図・断面図

g-40グリッドを中心に、斜面下東側の平坦面に位置する。標高は88.75mを測る。北側は縄文時代の第21号住居址と重複する。

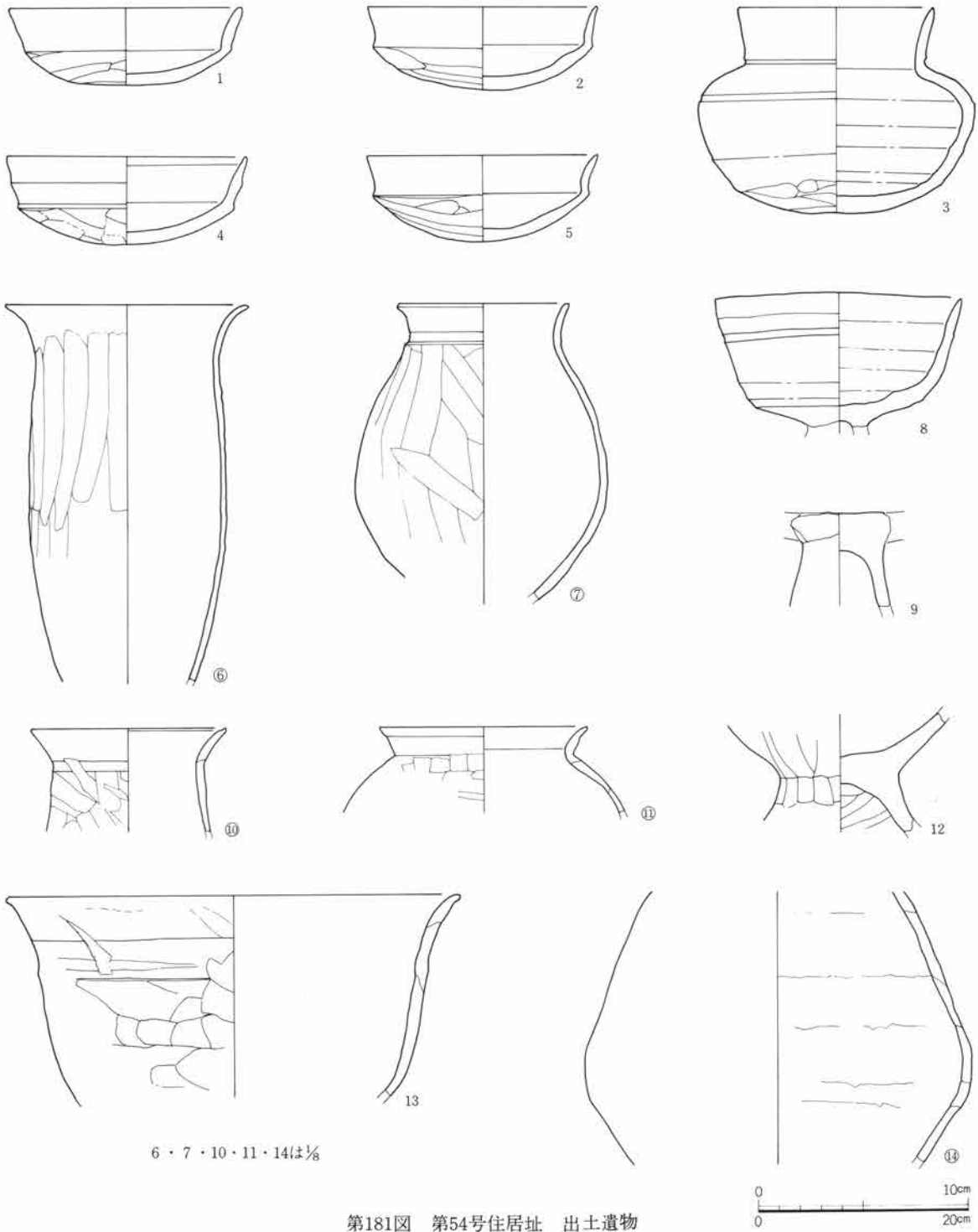
平面形は隅丸方形に近い矩形で東壁の一部は崩落が進んでいた。南北3.88、カマドの付設された東西は4.16mで軸線の方位はN89°Eである。

壁は小円礫を多量に含む、暗褐色砂壤土を掘り込んでおり残高は0.44~0.64mである。周溝はない。

床面も砂壤土で堅い部分はなかった。柱穴も確認できなかった。

カマドは東壁にあり、焚口部は壁外に築かれていた。左袖には倒立した長甕が、右袖には角礫が置かれていた。

遺物は多量の礫とともに全体から出土しているが床面直上のものは少なかった。



第19表 第54号住居址 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	杯形	口 11.2 高 3.7	砂粒を少量含む 明褐色 軟調	底部の浅い形状、口縁部は厚く、あまり外反しない	外 口縁部ヨコナデ、底部中央部一方向のヘラケズリ、周縁部右回りに細かいヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	ほぼ完形

第2章 検出された遺構と出土遺物

2	杯形	口高 11.1 3.9	砂粒を少量含む 明褐色 軟調	口縁部は底部との稜から内彎ぎみに立ち上り、先端で外反する。底部の器肉は厚い	外 口縁部ヨコナデ、底部中央部一方向のヘラケズリ、周縁部右回りに幅広いヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	残存率 $\frac{1}{2}$
3	壺形	口高 9.4 13.2 9.7	砂粒を少量含む 灰色 硬調	口縁部は直立ぎみに立ち上る。胴部は偏平で横に強く張る。底部は丸底	右回転ロクロ成形。外 胴の上部に沈線一条。底部は外面に不定方向にヘラケズリ。内 ナデ	須恵器、完型
4	杯形	口高 (11.4) 4.2	砂粒を少量含む 軟調	底部の浅い形状。口縁部は中位に弱い稜をもち、先端は尖る	外 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ、周縁部は右回り 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	底部の中央部は磨減が著しい 内外ともススを受けている
5	杯形	口高 (11.1) 4.1	砂粒を少量含む 明褐色 軟調	口縁部は稜から直立後、大きく外反する	外 口縁部ヨコナデ、底部一方向のヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ヘラ調整	残存率 $\frac{1}{2}$
6	甕形	口高 23.3 (35.5)	砂粒を多く含む 軟調	口縁部は大きく外反し、先端は外に面をもつ。胴部は張りが弱く、ゆるやかに底部につながる	外 口縁部ヨコナデ、胴部は2回以上に分けてヘラケズリ↑ 内 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
7	甕形	口高 16.2 胴高 (24.3) 28.0	砂粒を多く含む にぶい橙色 軟調	口縁部は直立ぎみに立ち上り、先端で外反する。端部は内傾して尖る。胴部は中位やや下に最大径をもつ	外 胴部にヘラケズリ↑後、口縁部にヨコナデ 内 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
8	高杯形	口高 12.3 (5.3)	黒色の混入物をわずかに含む 灰白色 硬調	鶏卵状に歪む 口縁先端は細く尖っている	右回転のロクロ整形。 外 口縁中位やや上に一条の沈線、底面との接点にはヘラ調整を加えている	須恵器 口縁の短径、10.0
9	高杯形	高 (4.4)	石英粒を多く含む にぶい橙色 軟調	脚部のみ残存。柱状をなす	外 ヘラミガキ 内 指頭によりしぼり込んだ後ナデ	
10	甕形	口高 18.8 9.3	軽石を多く含む 明褐色 軟調	胴部の膨らみは緩やか。口縁部も緩やかに外反する。端部はヘラ調整により疑似沈線がつけられている	外 胴部に細かい単位でヘラケズリへ、後口縁部にヨコナデ、頸部に段が出来る 内 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	破片
11	甕形	口高 (19.9) (8.2)	軽石を多く含む 赤褐色 軟調	胴部は丸みをもち、大きく膨らむ。口縁部は短くくの字状に立ち上り先端で更に外反する	外 口縁部ヨコナデ、胴部は上半をタテ方向↑、下半をヨコ方向←のヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	破片
12	台付甕形	高 (5.6)	細砂粒を多く含む にぶい橙色 軟調	台部は緩やかに立ち上り、端部が強く外反するものと思われる	外 胴部ヘラナデ↑、台部ヘラナデ↓ 内 胴部ナデ、台部ハケメ後ナデ	
13	鉢形	口高 (21.8) (9.0)	細砂粒を多く含む にぶい赤褐色 軟調	胴部は緩やかな丸みをもつ。口縁部は先端で外反する	外 口縁部ヨコナデ後、胴部にヘラケズリ→ 内 口縁部ヨコ方向、胴部タテ方向のナデ	内面に黒色の付着物
14	壺形	胴高 (25.7) 36.9	細砂粒、特に石英粒を含む 赤橙色 軟調	胴部はそろばん形で、最大径は下位にある	内外ともに丁寧なヘラナデ	器形、時期ともに不詳

第4節 方形周溝墓と出土遺物

方形周溝墓は2地点に分かれ9基が検出されている。第1～4号の4基は台地の頂部に位置し、居住域から見上げる場所に占地している。軸線の方位はほぼ一定しており、第2号と第3号の関係がやや不明確であるが近接しながらも重複関係はないものと思われる。第5～9号は台地、北東の平坦面上に占地しており、台地上と同様、近接して構築されている。第2号や第4号は他遺跡と比較しても大型の範疇に入れることができると考えられる。遺物は第7号を除いて少量であった。

円形周溝状の遺構は古墳時代前期の住居址と重複しているが遺構の性格等を明確にすることは困難である。

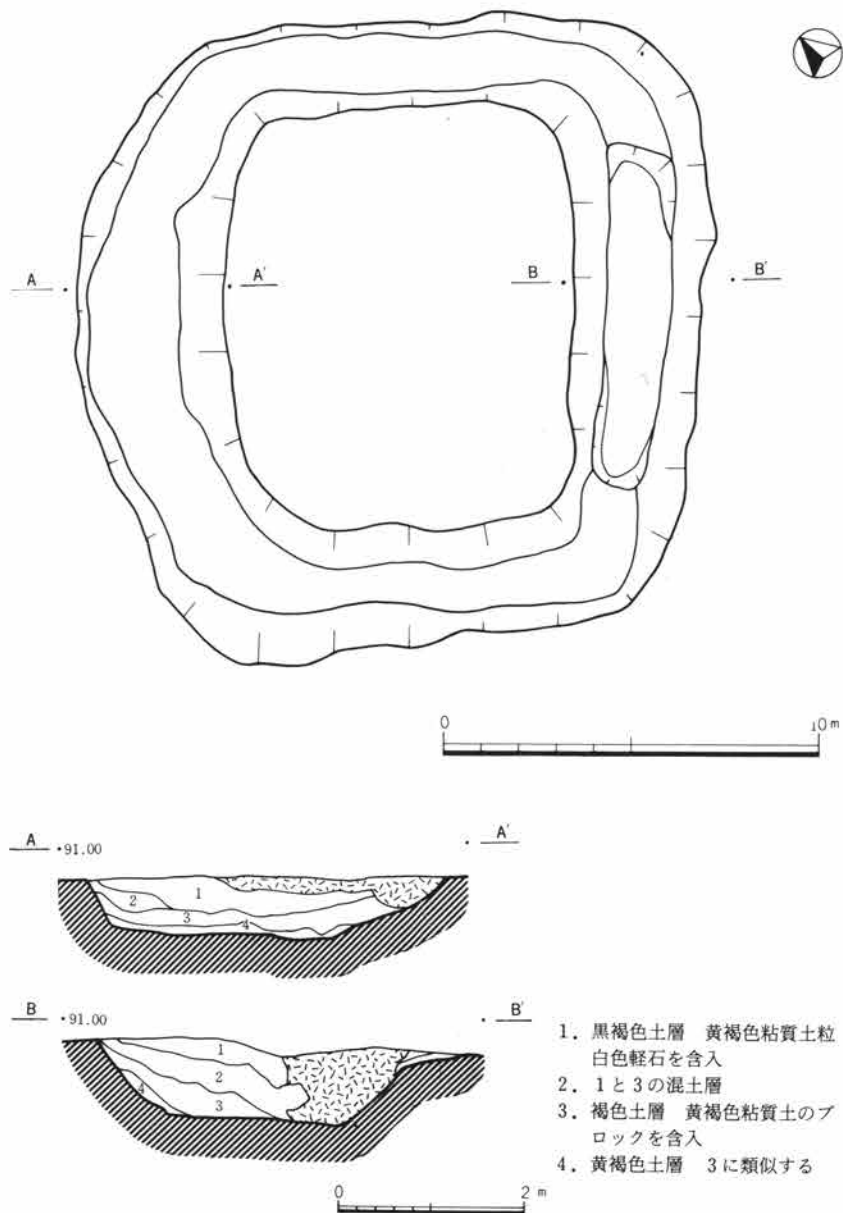
第1号方形周溝墓 (第182図 P L25)

Y'-13グリッドを
中心に位置し第2号方
形周溝墓と近接する。
確認面のソフトローム
層は北東から北西に
向って緩斜面を作っ
ていた。

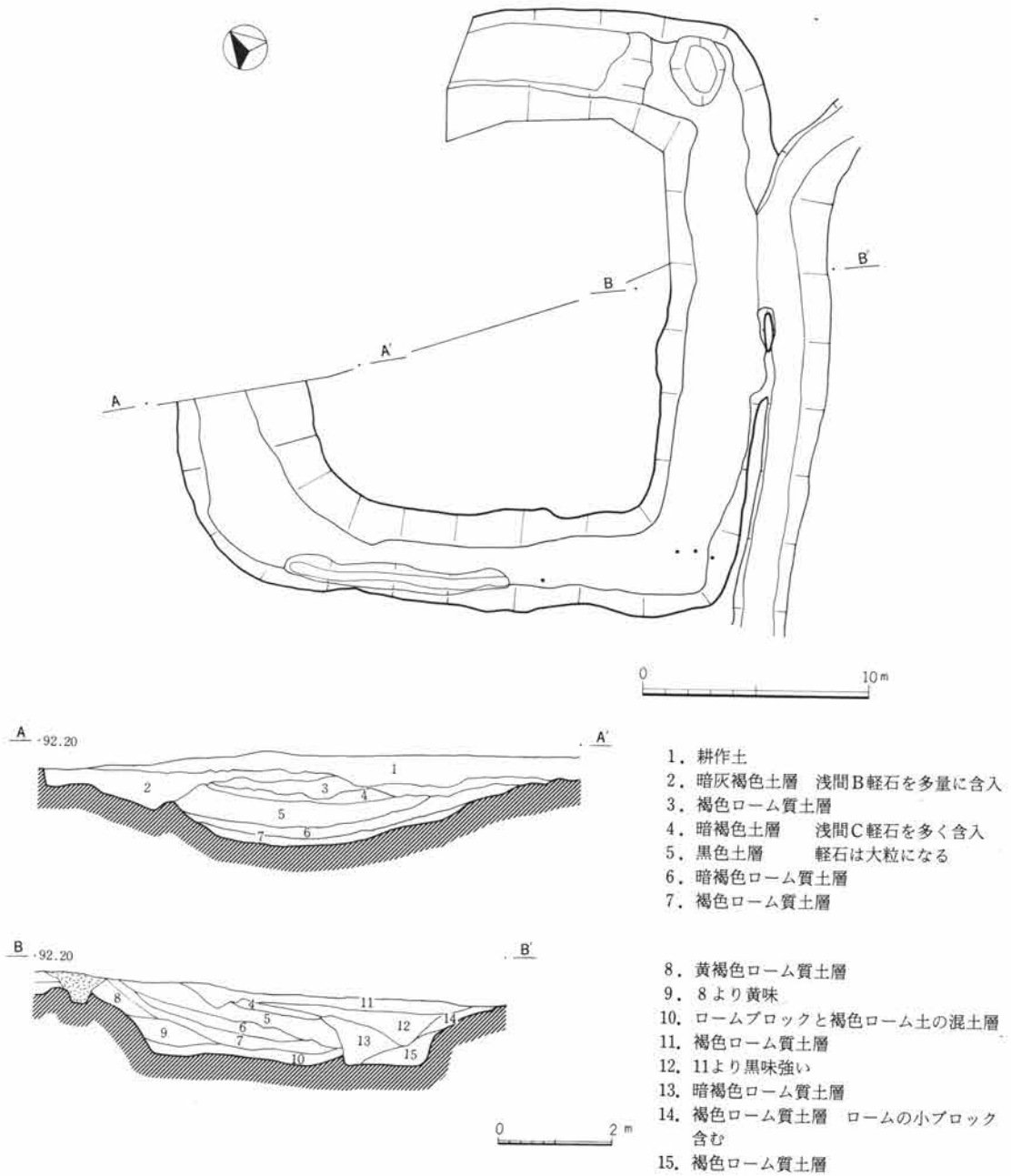
周溝を含めた規模は
南北16.58m、東西16.
66m、台状部は南北11.
66m、東西9.22mとや
や矩形に近い。南北中
軸線の方位はN46°E
である。台状部の盛土
や主体部の確認はでき
なかった。

周溝の西側は外に丸
味を持って張り出し上
端も4.32mと最大に
なっている。壁面の立
ち上がりは外側がやや
急、内側は緩やかな傾
斜であった。残存壁高
は西側で40、南側で80
cmを測る。底面は南
コーナーに向って序々
に下がっていた。

出土遺物は無い。



第182図 第1号方形周溝墓平面図・土層断面図



第183図 第2号方形周溝墓平面図・土層断面図

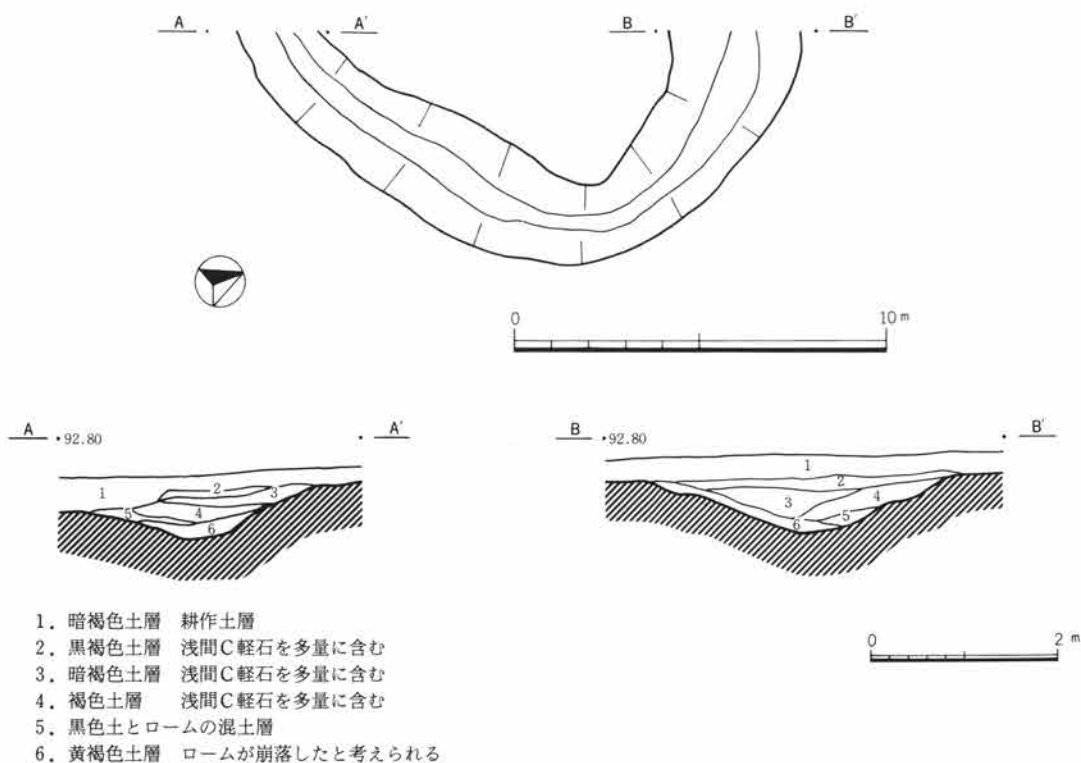
第2号方形周溝墓 (第183図 P L25)

A-22グリッドを中心に第1号と第3号方形周溝墓の中間に位置する。周溝の東側部分は第5号溝と重複している。また、北東コーナーとそれに続く部分は未調査である。

平面の規模は南北26.6、東西25.4m、台状部は南北17.4、東西15.3mで南北にやや長い矩形を呈する。南西コーナーはやや丸味を持っている。

周溝は急な傾斜の逆台形状で、北部分での上端は4.78m、残高は約0.8~0.9mを測った。南側の周溝底面には幅1.1mの溝状の掘り込みがあった。また、底面には各コーナーで一様になくなっていった。

出土遺物は東と南の周溝底面から出土している。第192図1~4である。1は壺で口縁部を下にして検出された。4は高杯の破片であるが北側の周溝、埋土中の出土である。



第184図 第3号方形周溝墓平面図・土層断面図

第3号方形周溝墓 (第184図 P L25)

B-29グリッドを中心に位置し、第2号方形周溝墓と近接する。調査区域の西端にあたり北東コーナーを中心に東側周溝と北側の東半部を検出するにとどまった。

平面の形状や規模を把握することは困難であるが、東側の辺は10.1mを測った。上端の内周は直角に近い形をつくっているが外周はやや丸味を持って張り出している。

周溝は東側で上幅2.88m、深さ0.8m、北側で2.08m、0.6mで孤状の断面形を呈していた。埋土は底面直上に黄褐色のローム質土層、その上に浅間C軽石を多量に含む土層が3層堆積していた。

東側周溝の南端から第192図6の壺が出土している。

第4号方形周溝墓 (第185図 P L25)

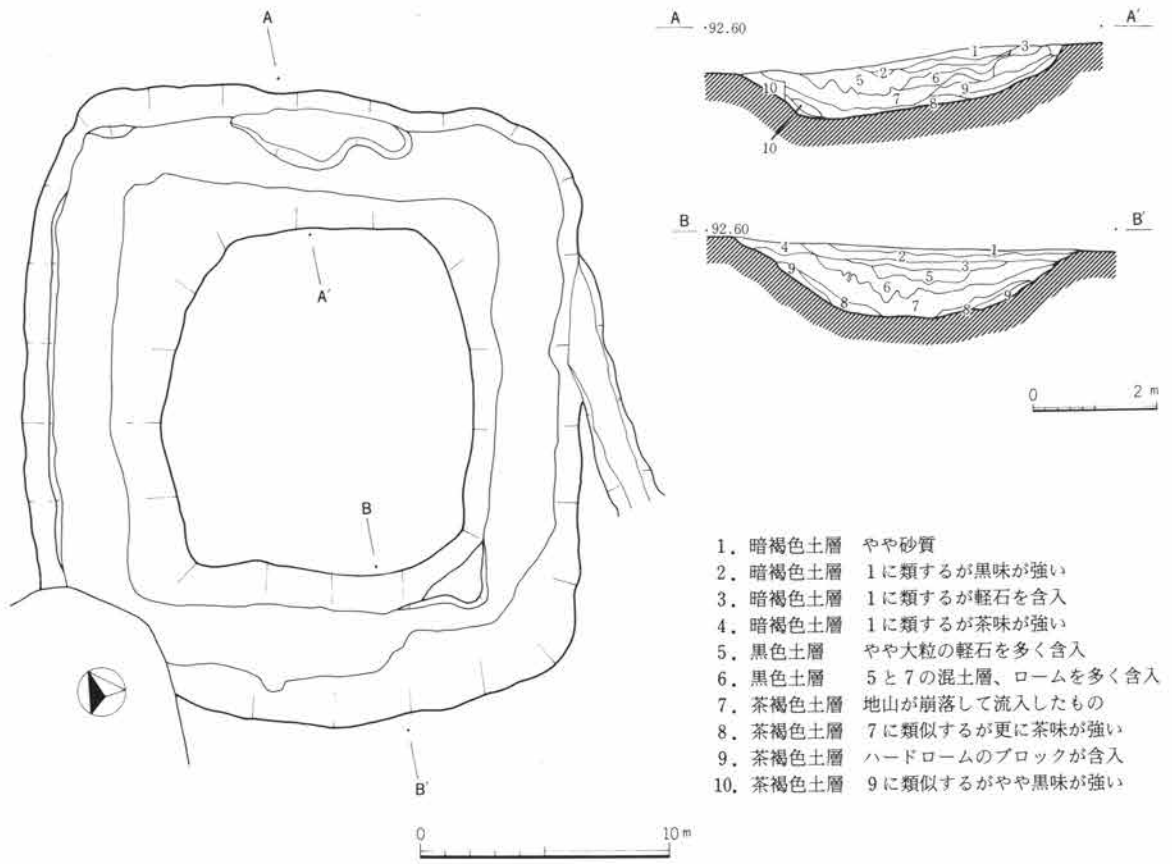
F-38グリッドを中心に位置する。台地上に並ぶ4基の中で最北端にある。南北コーナーの一部は調査区域外にあり未発掘である。また、内周の南東コーナーは第7、8号住居址と重複している。

平面形の規模は南北25.1、東西22.24m、台状部は南北13.3m、東西12.3mとやや南北に長い。南側の周溝の外周がやや外側に張り出していた他は直線を保っている。

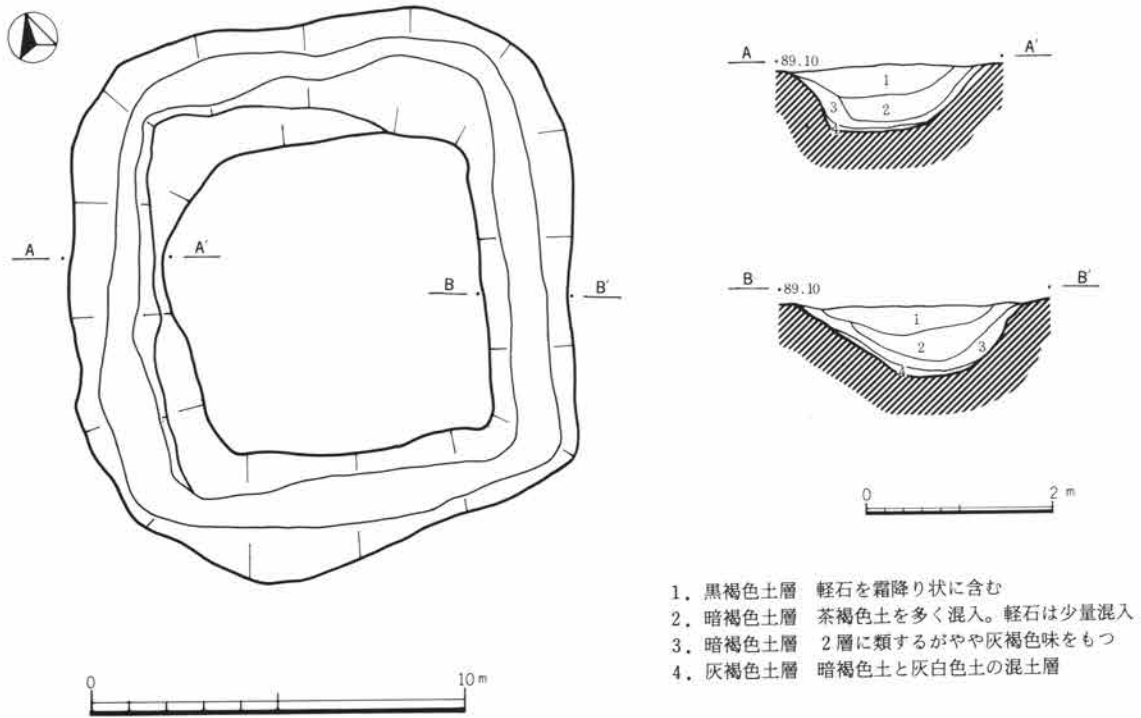
周溝は東側が第9号溝との重複で狭くなっているが南側で上端の幅5.5m、下端2.8m、深さ1.35m、北側で上端5.2m、下端3.16m、深さ0.95mを測る。断面形は逆台形状を呈し、底面に近い部分に弱い稜をもつ。底面は各コーナーが浅く、各辺の中央に向かって徐々に深くなっている。

台状部の盛土や主体部の有無は確認できなかった。

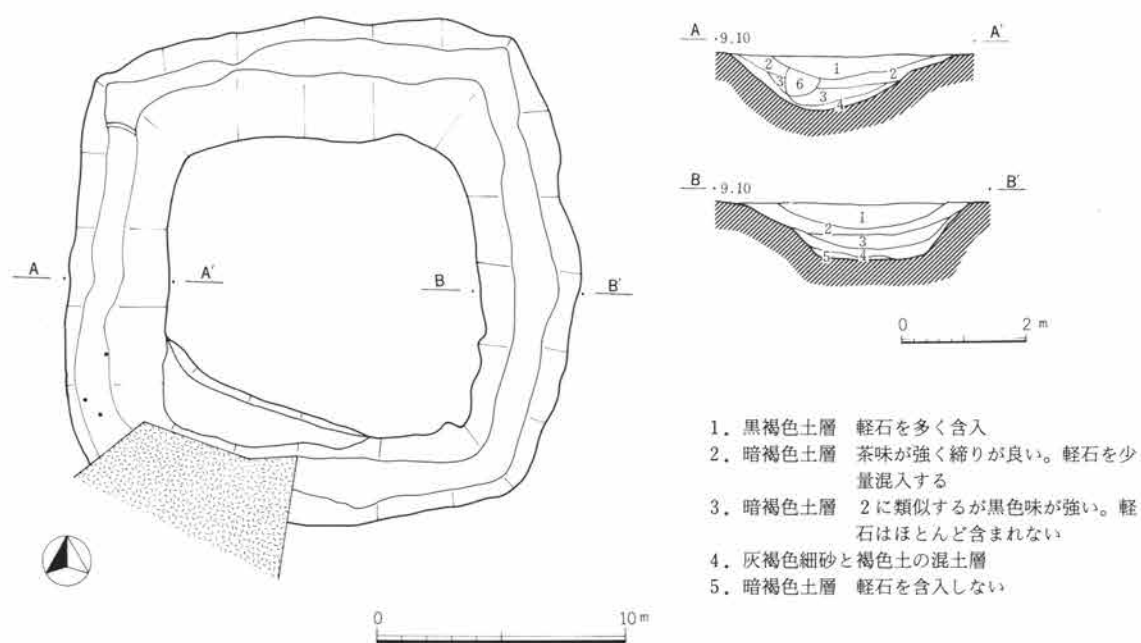
出土遺物も全く無かった。



第185図 第4号方形周溝墓平面図・土層断面図



第186図 第5号方形周溝墓平面図・土層断面図



第187図 第6号方形周溝墓平面図・土層断面図

第5号方形周溝墓 (第186図 P L25)

第4号方形周溝墓の立地する台地の北東、緩斜面下の平坦面上にある。T-61グリッドに中心をすえ、5基の中で南西端、第8号方形周溝墓の南側に位置する。

平面形は南側のコーナーよりがやや張り出している他はやや隅丸の矩形を保っている。規模は南北14.3、東西13.5m、台状部は南北8.9、東西8.4mと9基の周溝墓中で最も小型である。南北の中軸線の方位はN12°30'Eである。台状部は北西隅が大きく崩れていた。

周溝の規模は南側の張り出し部分と北側がやや広がっており2.2~2.5mを測る。断面形は底面の幅が狭くV字形を呈していた。底面のレベルはほぼ一定である。

出土遺物は少量で、東側の周溝の中央、埋土の中位から口縁部を下にして埴が出土している。

第6号方形周溝墓 (第187図 P L25)

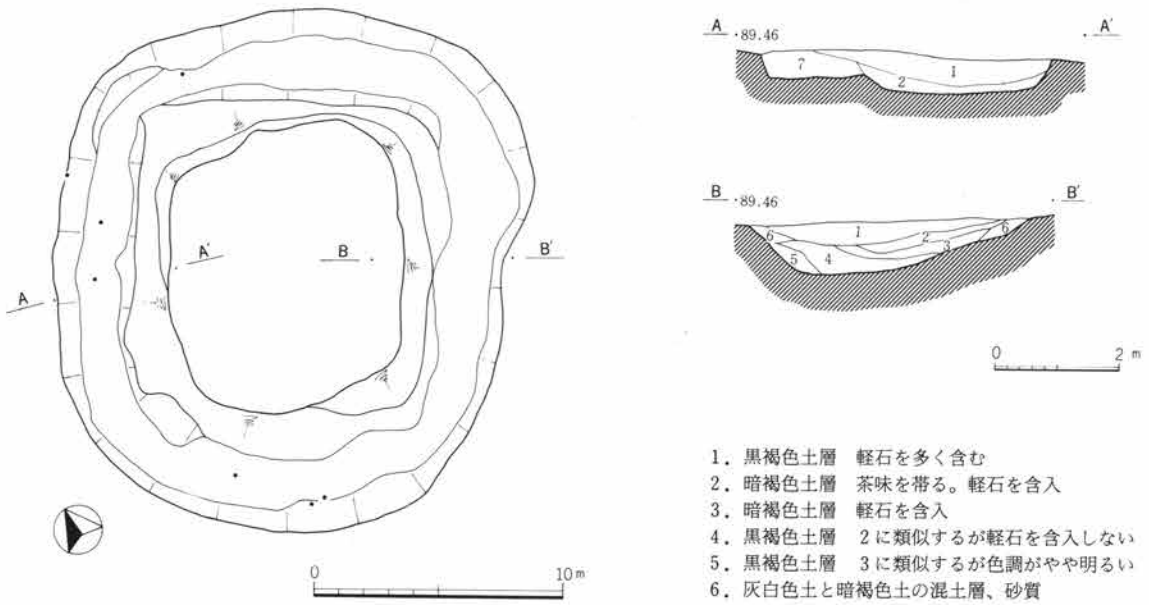
第5号方形周溝墓の東側、C-58グリッドに中心をおく。

平面形の規模は南北20.1、東西20.6m、台状部は南北12.2、東西12.4mを測る。形状は周溝の中央部がやや張り出し、東西に長軸を持つ矩形を呈する。南北の中軸線の方位はN1°Eである。台状部は崩落が著しく、コーナーの形状は丸味をもち、壁面も緩やかな立ち上がりとなっている。南側周溝の中央から南西コーナーにかけては攪乱を受けている。

周溝は上端の幅が4m前後とほぼ一定であるが、北側の中央で4.8mとやや広がっている。底面の幅は狭く、V字形に近い断面形を呈す。立ち上がりは外側が急で、内側は前述のように緩やかである。残高は0.8~0.9mであるが、西側は北西コーナーのやや南部分で1.65mと深くなっている。

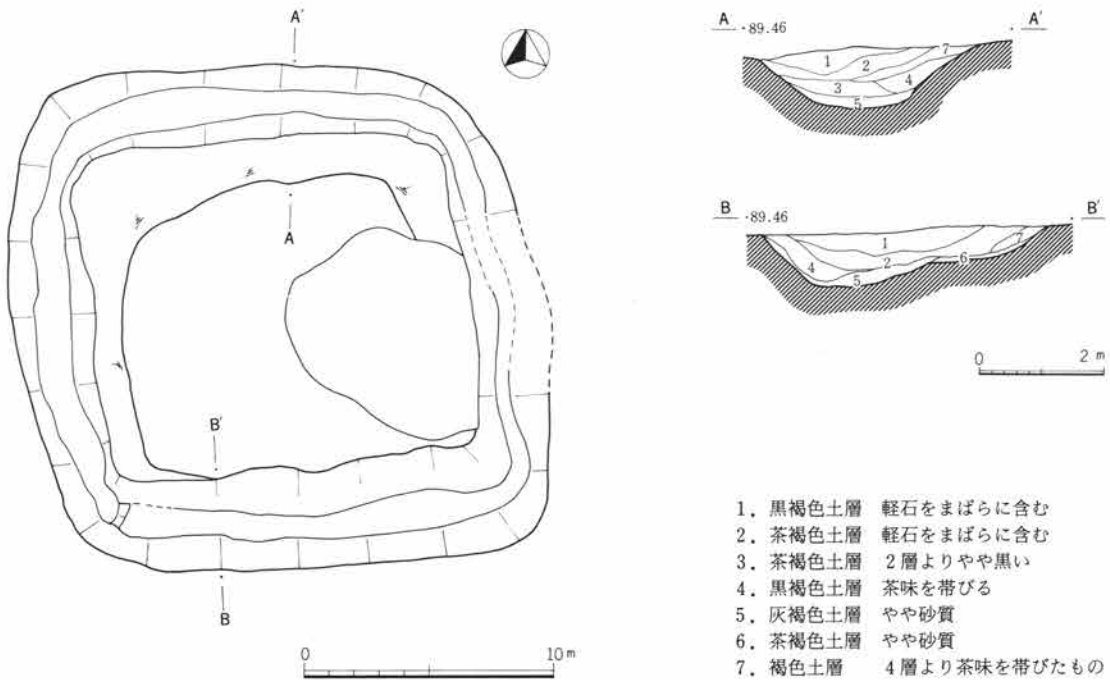
台状部の盛土、主体部の存在は確認できなかった。

出土遺物としては第192図の5、S字状口縁台付甕が南西コーナー近くの外壁よりの底面から3片に分かれて検出された。



第188図 第7号方形周溝墓平面図・土層断面図

1. 黒褐色土層 軽石を多く含む
2. 暗褐色土層 茶味を帯る。軽石を含入
3. 暗褐色土層 軽石を含入
4. 黒褐色土層 2に類似するが軽石を含入しない
5. 黒褐色土層 3に類似するが色調がやや明るい
6. 灰白色土と暗褐色土の混土層、砂質



第189図 第9号方形周溝墓平面図・土層断面図

1. 黒褐色土層 軽石をまばらに含む
2. 茶褐色土層 軽石をまばらに含む
3. 茶褐色土層 2層よりやや黒い
4. 黒褐色土層 茶味を帯びる
5. 灰褐色土層 やや砂質
6. 茶褐色土層 やや砂質
7. 褐色土層 4層より茶味を帯びたもの

第7号方形周溝墓 (第188図 P L 26)

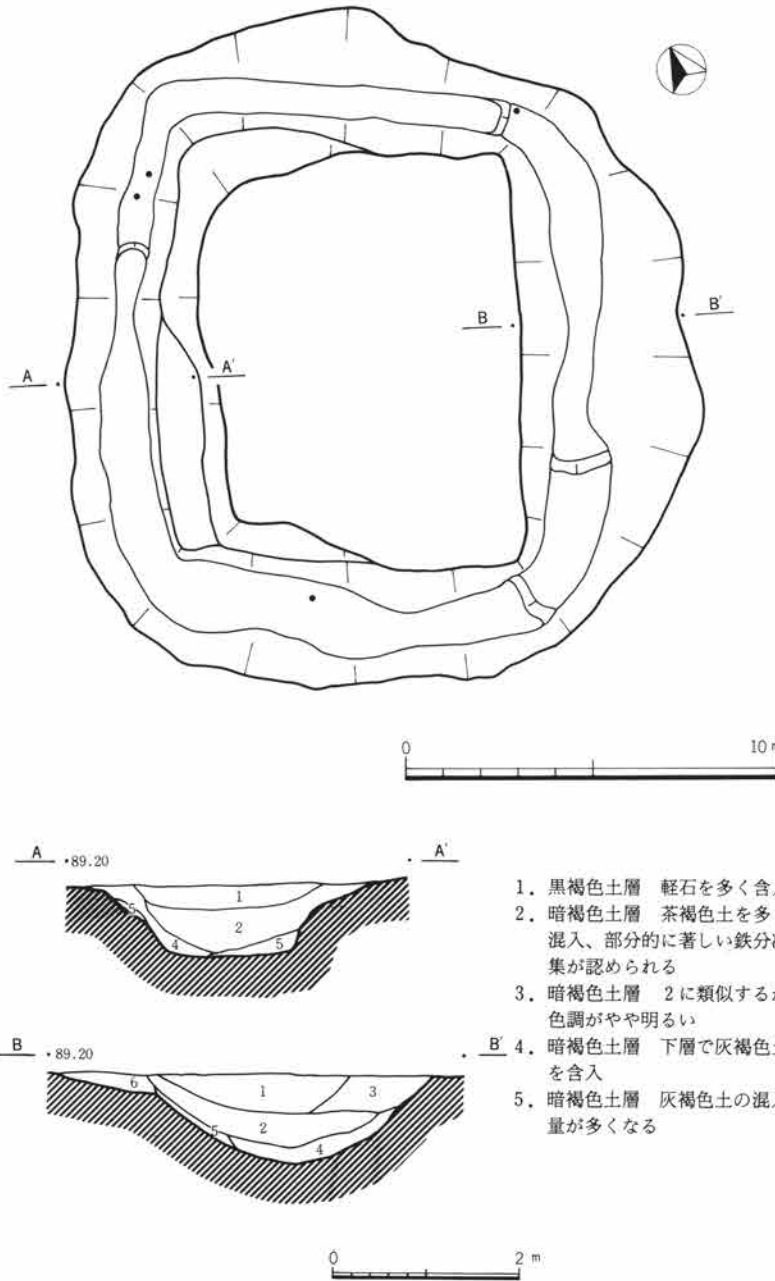
b-44グリッド、第8号方形周溝墓の北側、第9号方形周溝墓の西側に位置する。

平面形の規模は、南北20.8、東西18.9m、台状部で南北15.1、東西16.8mを測った。コーナーに丸味をもつ隈丸の矩形を呈する。南北の中軸線の方位はN44°30'Eである。

周溝は東側の中央部が不明確であったが上端の幅は4.5~4.8mを測った。外周側の立ち上がりは比較的緩

やかである。台状部側の壁面もローム層の崩落が著しく緩やかな斜面をつくり、逆台形状の断面形を呈していた。残存壁高で約0.8m、東西の両側で約0.9mを測った。底面は各コーナーで幅が狭くなるほか北東コーナーは段差をもって東側に深くなっている。

出土遺物は西側の周溝を中心に7ヶ所から出土しており、第193図の11~16がこれにあたる。11・15・16を除いては床面密着の状態出土している。11は外周の上端に横倒した状態で出土した。15・16は近接しており、16は横倒していた。13は底部穿孔の壺で北西コーナーの底面が一段低くなった部分から口縁部を上にして置かれたような状態で出土した。土器の内部は土粒で充填されていたが、周溝の埋土との相違はなく、内部からの出土物もなかった。



第190図 第8号方形周溝墓平面図・土層断面図

第9号方形周溝墓

(第189図 P L26)

e-69グリッドを中心に5基の中で最も北側に位置する。

調査前は地膨れ状に周囲よりも0.4~0.6m程高くなっており、『上毛古墳綜覧』掲載の荒砥村第256号古墳と想定し調査を開始した。

しかし、古墳の封土と考えられた高まりは後世の土砂の移動によるものであった。

平面形の規模は外周が南北20m、東西20.8m、台状部が南北11.6m、東西14.2mである。南東コーナーが突出して方形の形を崩している。南北の中軸線の方位はN7°30'Eである。

周溝は台状部の崩壊が著しく、内周側の立ち上がりは緩やかになっている。上端の幅は北側で4.72mと広がっているが他は4m前後である。深さもほぼ一定であるが南西コーナーの部分が一段低くなっており、残高1.24mを測る。

主体部は確認できなかった。周溝内からの遺物の出土も認められなかった。

第8号方形周溝墓 (第190図 P L26)

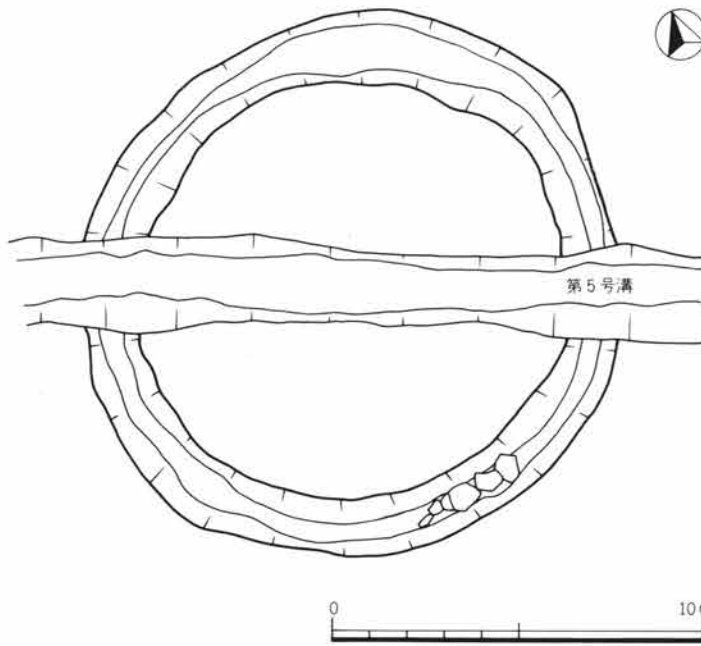
U-66グリッドに中心をすえ、第5号方形周溝墓と第7号方形周溝墓の中間に位置する。

平面形の規模は南北16.7m、東西16.7mで、周溝の底面の走向からは矩形を想定できるが、外周は形状が著しく崩れ、東側と北側は外に向って大きく張り出している。また、台状部も四隅が崩れ、西側の立ち上がりは中段に平坦面ができています。台状部の規模は南北11m、東西8.2mを測る。南北の中軸線の方位はN26°Eである。

周溝の上端の幅は南側で3.8m、西側で4m、北側で3.8m、東側で4.2mである。下端は南側が1.7m、と広がっていたが他は0.9m前後である。底面は灰褐色の砂質土層にまで達しているが、深さは著しく異なりコーナーの部分で段差がついている。西側の中央の段差は約0.5mあった。

台状部の封土や主体部の存在は確認できなかった。

周溝内の2カ所から底面密着の状態で見物が出土している。南側からは第192図10の壺が潰れた状態で見物している。また、西側の北西コーナーよりからも第192図9の壺が出土している。2地点に分かれ、上半部は口縁部を下にしていた。



第191図 円形周溝状遺構平面図

円形周溝状遺構

(第191図 P L26)

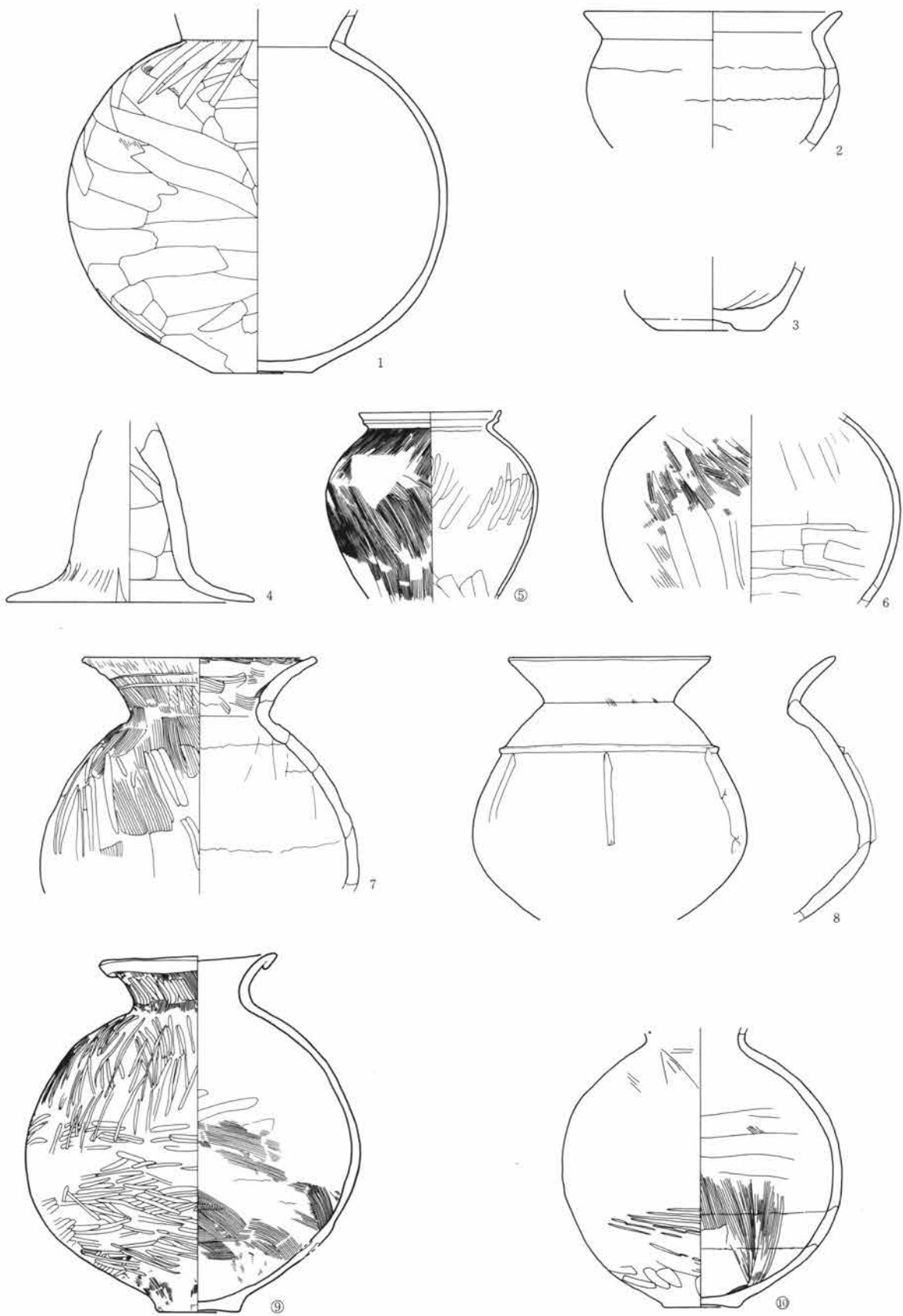
g-26グリッドを中心に位置する。東西に走行する第5号溝、南西で第38号住居址、北側で第39号住居址と重複する。平面形の規模は南北10.9m、東西11.2mである。

周溝は上端の幅は平均1.2mで、壁面の立ち上がりは急である。残存壁高は東側で0.48m、西側で0.55mである。

出土見物は床面密着のものは少なく、埋土の上～中層に集中していた。

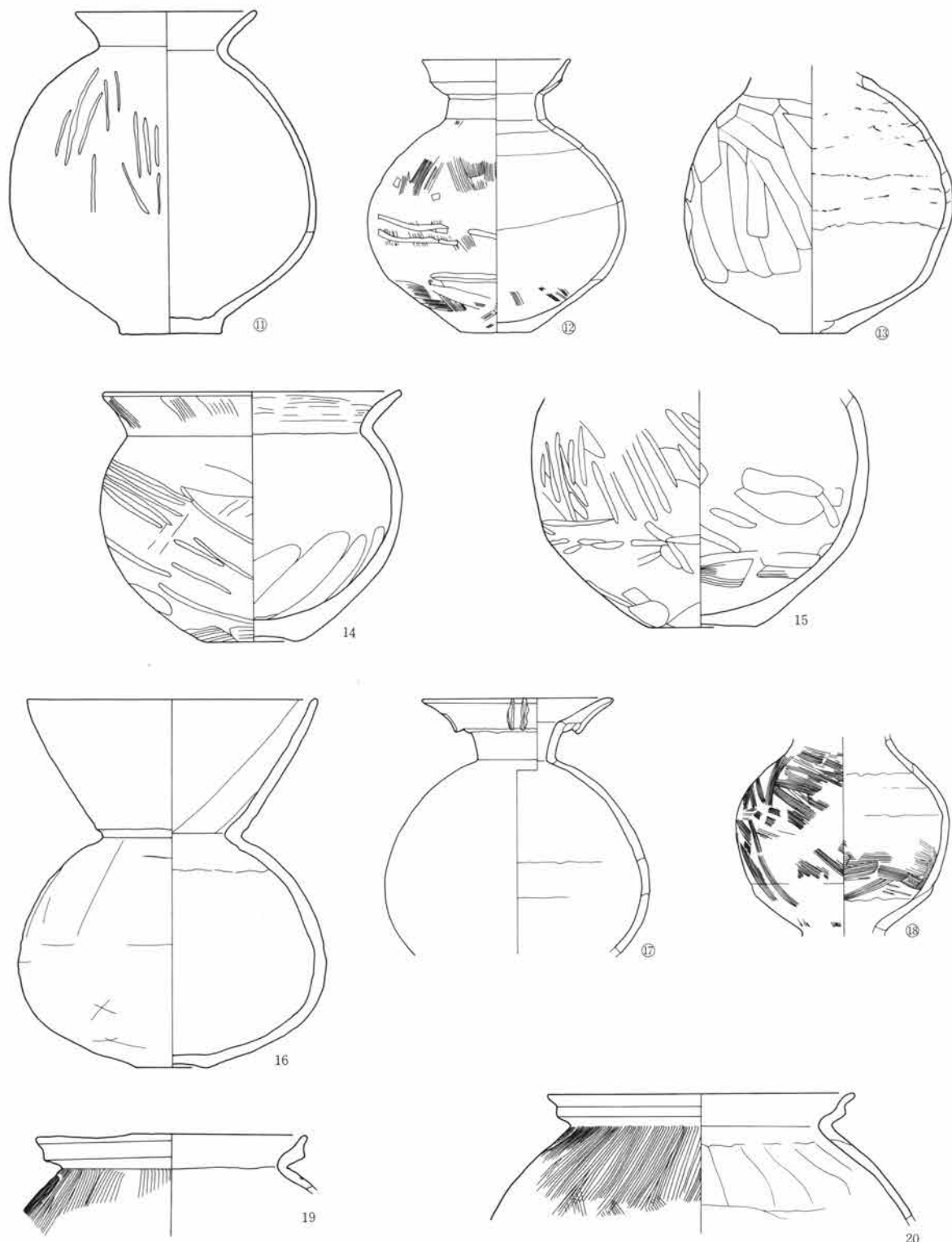
南東部分からは最大0.60m、最小0.32mの輝石安山岩が6石、底面に密着した状態で見物された。

第4節 方形周溝墓と出土遺物



第192図 方形周溝墓出土遺物(1)

0 5・9・10 $\pm\frac{1}{6}$ 10cm
0 20cm



第193図 方形周溝墓出土遺物(2)

0 11~13・17・18は $\frac{1}{6}$ 10cm
0 20cm

第20表 方形周溝墓 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	壺形	胴高 19.7 (18.3)	砂粒を多く含む 外面 橙色 内面、黒色 軟調	胴部は球形、口縁部はくの字状に立ち上がる 底部は平底	外 全面ハケメ後ヘラナデ、胴中位は←、上位は↓、部分的にハケメを残す 内 丁寧なナデ	
2	椀形	口高 (13.3) 高 (6.8)	細砂粒を多く含む 橙色 やや硬調	口縁部は短く直線的に開く。胴部は丸く張る。 器肉は全体に厚い	外 口縁部、胴上半部はヨコナデ、下半部は不定方向のナデ 内 口縁部、胴上半部のヨコナデ、下半部は斜方向のナデ	
3	柑形	底高 5.2 (3.2)	細砂粒をわずかに含む 硬調	胴部は丸みがある。底部は丸底、粘土帯をリング状につけている	外 丁寧なナデ 内 ヘラでオサエた後、指頭によるナデ	器形は不詳
4	高杯形	底高 (12.4) 高 (8.8)	混和材はほとんど明褐色 硬調	柱状の脚部は内彎ぎみにのび、裾部は大きく外反する	外 ナデ、裾部には暗文状のヘラミガキ 内 上半部にしほり込んだ痕を残す。下半部はヨコナデ	埋土中
5	S字台付甕形	口高 14.7 (21.9) 胴高 (19.0)	細砂粒を多く含む にぶい橙色 やや硬調	口縁部は段部の屈曲が弱く、先端は丸みをもつ。 胴部は張りが弱い	外 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ(下半部に調整面をよく残す)後ハケメ。(8-7本1cm) タッチが弱く部分的には施されていない部分もある。 内 下半部ヘラナデ、中位は指頭によるナデ、上半部は指頭によるオサエ	
6	壺形	胴高 (30.8) (19.4)	細砂粒を多く含む 明赤褐色 硬調	球形の胴部、大型のものと思われる	外 ハケメ後ナデ、ミガキ、上半部にハケメをよく残す 内 上半部ナデ、下半部ヨコナデ	埋土中
7	壺形	口高 (12.2) 胴高 (16.5) 高 (16.6)	細砂粒をわずかに含む 橙色 硬調	口縁は大きく外反する。胴部は最大径を下位にもち、肩のおちた形状	外 胴部は上から下へのハケメ後、部分的にナデ、その後口縁部にハケメ↑ 内 口縁部ハケメ←、胴部ナデ	埋土中
8	壺形	口高 (10.8) 胴高 (13.7) 高 (13.3)	細砂粒を多量に含む にぶい橙色 軟調	口縁部はくの字状に立ち上り、端部は丸い。胴部は最大径を中位やや下にもつ	外 ハケメ後丁寧なナデ 内 口縁部ハケメ、胴部の中位には指頭によるナデ。胴上部には横方向に粘土紐をつけている。タテ方向にも同様の紐を3本つけている	
9	壺形	口高 18.2 胴高 34.4 高 34.9	砂粒を多量に含む 内面黒色 普通	口縁部は丸みをもって立ち上がり、先端は折返し口縁をなす。胴部は球形で中位に最大径をもつ	外 全体にハケメ後ヘラミガキ。口縁部、胴上半部にタテ方向、下半部ヨコ方向 内 口縁部ミガキ、胴上半部ナデ、下半部ハケメ	
10	壺形	胴高 28.8 (22.8)	砂粒を多量に含む 淡黄色 普通	底部は平底でややへこむ。頸部は底径よりやや大きく緩やかに立ち上がると思われる	外 全面ヘラミガキ、下半部はヨコ方向 内 上半部にヨコ方向のナデ、下半部ハケメ↑	表面に著しく磨耗
11	壺形	口高 (17.9) 胴高 (30.1) 高 31.5	砂粒を多量に含む 明褐色 普通	胴部は肩の張りがなく最大径は底部から1/3の所にある。頸部は大きい。口縁部は短かく外反する	外 口縁部ナデ、胴部にヘラミガキ	内外面ともに剝離が著しく調整の観察が困難
12	壺形	口高 (14.6) 胴高 (25.2) 高 26.6	砂粒を含む 明褐色 軟調	口縁部は二重口縁で、頸部から内傾ぎみに立ち上がり、段部もゆるやか。	外 口縁部ナデ。胴部、タテ方向のハケメ後、ヘラナデをしているがハケメを多く残す。 内 底部にハケメを残す他はナデ、接合。	

第2章 検出された遺構と出土遺物

13	壺形	胴高 26.5 (25.9)	細砂粒を多く含む 橙色 普通	球形を基本にしているが下半部の接合部分で段をもち上げる。底部は小さい	外 ヘラケズリ後ヘラミガキ、上半部はタテ方向、下半部はヨコ方向 内 ナデ、上半部には幅2cm程の粘土帯の接合痕が残る	外面はあれている。底部に焼成後の穿孔がある
14	甕形	口高 14.8 高 12.2	細砂粒を多く含む 明褐色 やや硬調	口径が大きく、胴部は半球状、底部は凹状	外 口縁部はハケメ後ヨコナデ、胴部斜方向のヘラミガキ 内 口縁部ヘラミガキ、胴上半分ヘラナデ、下半部指頭によるナデ	
15	壺形	胴高 16.6 高 11.2	細砂粒を多く含む 明褐色 普通	底部はやや凹状	外 全面ヘラナデ後、上半部斜方向、下半部ヨコ方向のミガキ 内 底部にハケメを残す。他はヘラナデ	内面、剥離が著しい
16	小型壺形	口高 (14.4) 高 18.0	混和材はほとんど含まれていない 明褐色 軟調	口縁部は内彎ぎみに立ち上がる。胴部は高さに対して径が大きく重心が低い形状。底部は凹状	外 口縁部と胴上半部にタテ方向のヘラミガキ、胴下半部にヨコ方向のヘラミガキ 内 ヘラミガキの上に斜方向の暗文状ヘラミガキ、胴上部はナデ	
17	壺形	口 (18.6) 胴 (26.0) 高 (25.0)	砂粒を多く含む 橙色 軟調	口縁部は複合口縁で大きく外反する。段部は粘土帯の貼りつけ方で波状になっている。内面は平坦な面をもち、斜になっている。2本1単位で4単位の棒状浮文が付されている	外 口縁部はハケメ後、棒状付文の粘土紐をつけ、その後ナデを施す。胴部ナデ後ミガキ 内 ミガキ	
18	壺形	胴高 (20.9) 高 (18.9)	軽石、砂粒を多く含む 橙色 軟調	頸部はゆるやかな口縁を想定させる。胴部は径が小さく張りが少ない	輪積痕をよく残し、器面の凹凸が激しい。特に胴下半部の接合部は明瞭な段をつくる。 外 不定方向のハケメ、下半部には施されていない 内 ヘラナデ	内面に黒色の炭化物付着
19	S字台付甕形	口高 13.3 (5.1)	砂粒を多量に含む 淡黄色 軟調	口縁部の段部外側は稜をつくるが、内側はゆるやか。先端はやや丸い	外 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ✓(7~8本/cm) 内 口縁部ヨコナデ	
20	S字台付甕形	口高 (15.1) 高 (6.1)	砂粒を多量に含む 淡黄色 軟調	口縁部の段部はゆるやかな立ち上がり。先端は丸い	外 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ✓(8~9本/cm) 内 口縁部ヨコナデ、胴部指頭によるナデ	

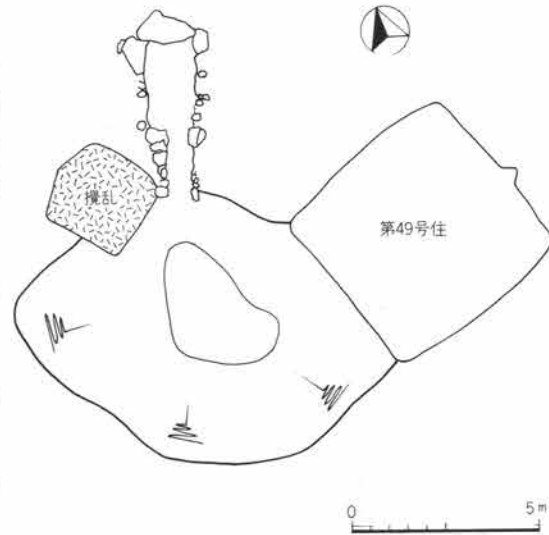
第5節 古墳と出土遺物

古墳は21基が検出された。1938（昭和13）年編纂の『上毛古墳綜覧』には荒砥村大字飯土井字二之堰に前方後円墳1基を含む15基の存在が記されている。今回の調査は『綜覧』掲載内容と必ずしも一致していないが調査区域の設定、遺構の検出状況から古墳群の全域を確認できたと考える。また、21基が規模の上から大型、小型の2つに分類でき、これが同一群中に占地することも確認できた点の1つである。

第1号古墳（第194・195図 P L29）

当古墳は調査区の南側の緩斜面上、E-5'グリッドに位置している。石室開口部から北に13.3mで第2号古墳の石室掘り方の南端に、また、11.2mで第3号石室開口部に達する。本調査で検出された古墳の中で最も南に位置するものである。

外部施設としては封土の削平が著しく進行していたため確認することはできなかった。また、周堀は回らず、石室開口部前に「前庭」状の遺構があった。この掘り込みは右側が第49号住居址との重複で不明確になっている他に左袖と接する部分は攪乱を受けていたが、外方に向かって開く鈍角の扇状を呈していた。規模は最大幅が10.12m、奥幅1.8m（いずれも推定）である。深さは1.0mを測り、急な傾斜をかたち作っている。



第194図 第1号古墳平面図

内部構造は、天井石を除去されていたが両袖型の横穴式石室で輝石安山岩の割れた石を用いた乱石積みであった。主軸の方向はS17°30'Wである。

石室の規模は下記の表のとおりである。玄室は中央で幅1.47mを測り弱い胴張り型の平面形を呈している。奥壁は1石で1.39×1.01mの割れ石を用いている。上端面が平坦になるよう意識して据え置かれており、下面には小礫が補填されていた。側壁は右壁の残存状態が著しく悪く、第2石目は内側にずれ込んでいた。両壁とも奥壁よりに大型の石材を据えていたが他の根石は0.4~0.5mの比較的大きな礫を使用していた。

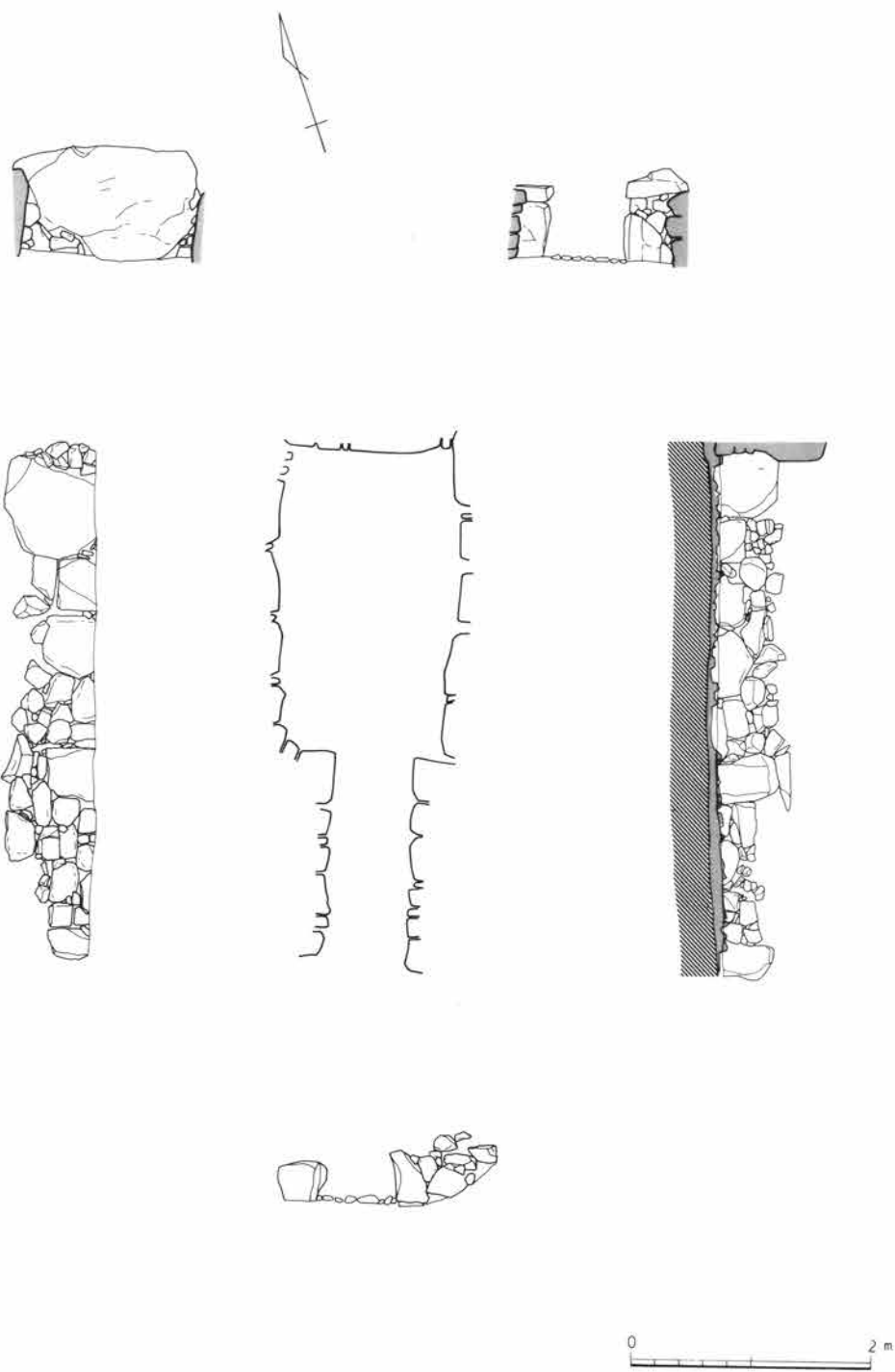
玄室と羨道の間には框状の石積状態は認められなかったが、袖部には柱状の石を直立させて据え置きその上に平石を積んでおり、高さ0.42mを測り、玄門を意識していると思われる。また、左袖がややずれて奥に位置している。

羨道も右壁の残存が悪いが左壁は整っており、0.2×0.3mの礫が使用されている。残存の良好な部分で3石確認できた。石室開口部は袖部と同様、用石を直立させており羨門を意識していると考えられる。

床面には、0.1~0.2mの小礫が敷きつめてあり、羨道と玄室の間も同一レベルである。構築面までの厚さは約0.15mであった。玄室床面から鉄器片1つを出土している。

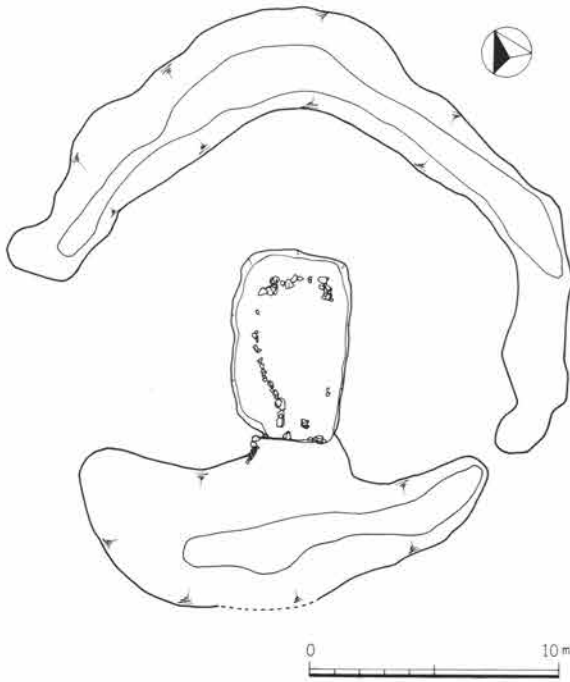
石室の構築状態はローム層を切り込んで逆台形状の堅穴を掘り根石をおいている。この穴は上端で大きく開き稜をつくっており規模は長さ5.16m。幅は玄室中央の上端が3.8m、底面で2.88m、奥部の上端で3.08mを測る。羨道部の裏込側底面からは径0.4mの小ピットが検出されている。

石室の壁用石と堅穴の壁面との間隔は0.1~0.7mであり、裏込はその間に6~9層の埋土が多量の小礫と混在して入れられていた。特に最下層は黒色土で強く固められていた。

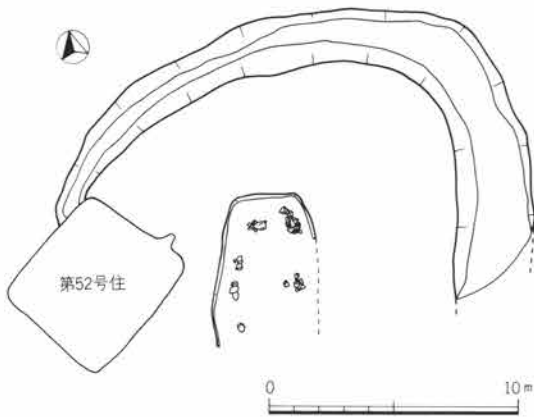


第195図 第1号古墳 石室展開図

全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前	左	右
494	244	247	249	132	147	118	29	24	166	167	171	65	73	—	—



第196図 第2号古墳平面図



第197図 第5号古墳平面図

第2号古墳 (第196図 PL29)

D-5グリッドに中心をおく。北側の周堀は1.5mで第8号古墳の「前庭」状遺構に、東側の周堀は1mで第3号古墳の周堀と接し、密集状態をつくっている。また、開口部の南側のたちあがり部分では第50号住居址と重複していた。

周堀は残存状態からみると東西両側に立ち上がりが見られるが、実際は全周していた可能性もある。規模は北側部分で上幅4.0m、下幅1.96mのレンズ状の断面を呈す。

石室開口部前の浅い「前庭」状の遺構に三日月状の周堀がついたもので緩やかな傾斜をつくってたちあがる。周堀の左右は、確認面から最深部までは0.48mを測る。

内部施設は耕作による攪乱が進行しており、大部分の構築石材が抜き取られ裏込に用いられたと考えられる5~30cmの小礫が残っている程度であった。礫の状態から両袖型の横穴式石室があったと思われる。但し、開口部よりには左壁の根石と考えられる礫が3石、右壁のそれが1石残っていた。大きさは0.4×0.3mであった。

また、羨道開口部の左袖の一部と右袖から直交してやや外方に開く小礫を使用した石積の一部(0.4m)が残存していた。掘り方内の小礫内部から鉄製の楔、刀子の破片、大刀の小片、鏝(第242図)が出土しているが埋葬時の原位置とは考えられない。

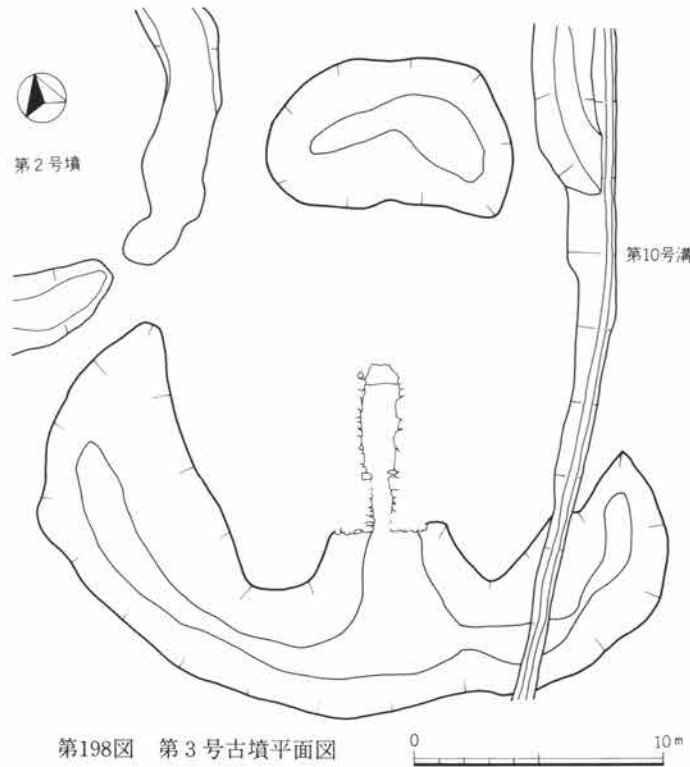
石室の構築状態はソフトローム層を切り込んで隅丸方形堅穴を掘りその底面に根石を据えたと考えられるが、当古墳は他に比べて、掘削深度が浅く、残存壁高も0.1~0.3mである。規模は長軸の上幅が7.36、下幅で7.12m。短軸の最大上幅4.72、下幅4.32mを測った。長軸の方向はS33°Wである。

第5号古墳 (第197図 PL29)

W-11グリッド、緩斜面の東端部にその中心をおく。南西に5.5mで第3号古墳の周堀、北西に2.2mで第6号古墳の周堀と接する。周堀は北側の半周を確認し、墳丘の内径は推定で19.1mとなる。北側から西半分はローム層を、東半分は円礫混りの砂壤土を切り込んでつくられており、逆台形状の断面形を呈している。規模は上幅で2.8~1.0m、下幅で1.76~0.34mを測る。主軸の方位はS31°W。

石室の用材は裏込の礫を数個除いて、全く残存していないが構築方法は他の古墳同様、隅丸長方形の堅穴を掘りその底面に根石を置いたものと思われる。

石室の北西の周堀内には投棄されたような状態で杯が10個体分以上出土している。



第198図 第3号古墳平面図

第3号古墳

(第198図～200図 P L27・28)

J-1グリッドに中心をおき石室開口部から北東に21mで第4号古墳、北東22.5mで第2号古墳の石室開口部に達する。

耕作土を除去する段階で多少の隆起が認められたが石室の東側で榛名山ニツ岳軽石(FP)を含む黒褐色土層の上位に黄褐色土層が暗褐色土層を挟み3層確認されており、これが封土の残存部と思われる。

周堀は石室開口部前の「前庭」状の掘り込みに稜があり、これが左右に翼状に延びるが半周ほどで立ち上がっている。また、

石室の北側には三日月状の掘り込みがある。このような周堀の形状は、古墳構築が第2号古墳や第4号古墳の周堀との重複をさせておこなわれた為と考えられる。周堀の埋土の最上層には浅間B軽石が堆積していた。墳丘の規模は東西約24.8m、南北25.4mである。

周堀の規模は西側で上幅5.6～4.0m、下幅1.5～0.5m。東側で上幅4.5m、下幅1.2m、北側の最大部で上幅5.7m、下幅2.08mである。

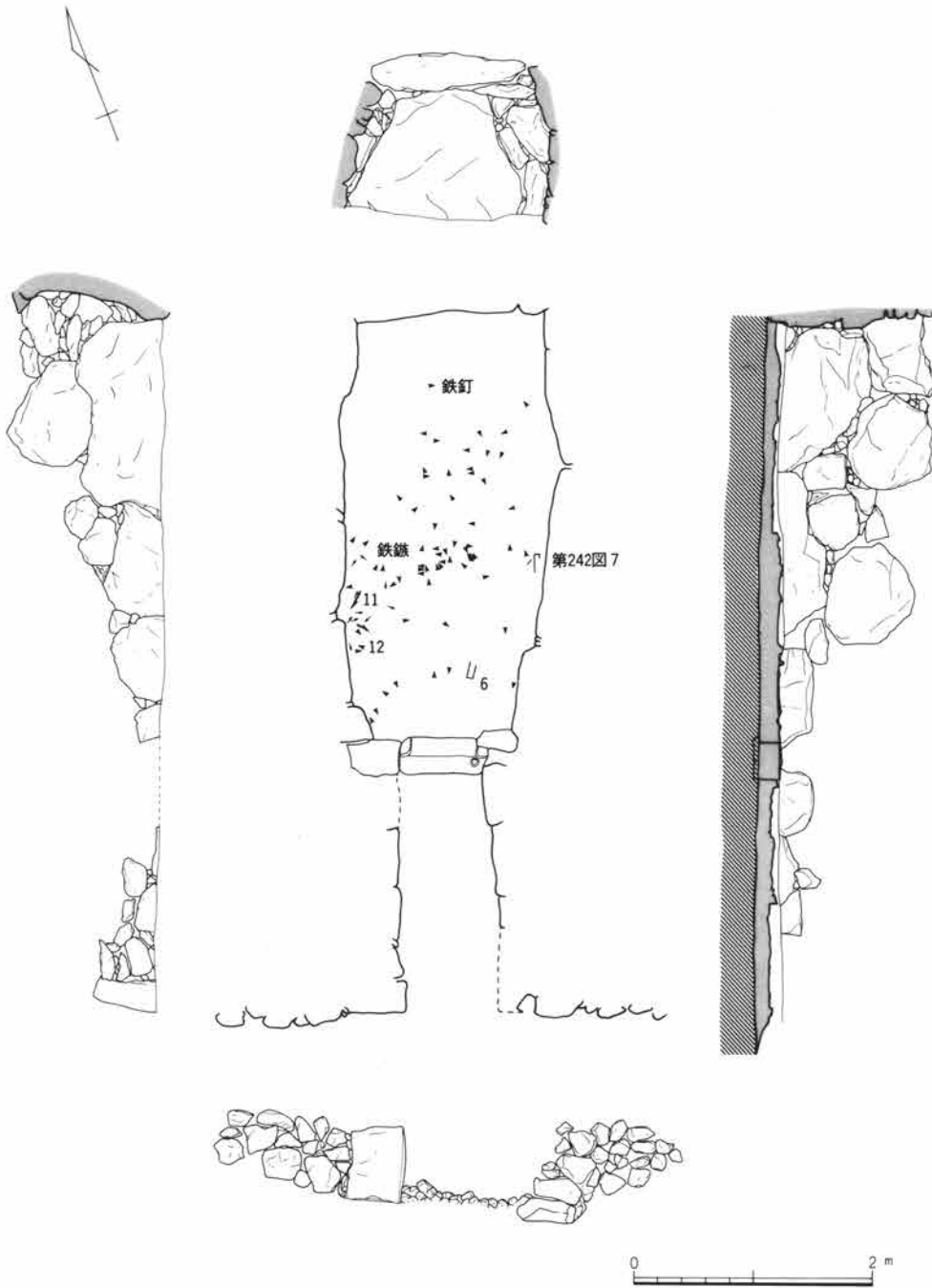
石室は玄室、羨道とも崩壊が著しいが、輝石安山岩の割れ石を乱石積した両袖型の横穴式石室と考えられる。規模は右記のとおりであるが、本調査の古墳中最大規模のものであった。玄室は大型の石材を用いてつくられており、やや胴張り型を呈している。奥壁は1石でつくられ、上部の側壁には小礫が補填されている。この上には偏平な石材が積まれ上端は平坦にレベルが保たれている。側壁は大きな石材が用いられており、奥壁より大型のものがみられる。左右両壁とも多少のころびがある。床石には小礫を舗石状に置き、その上に更に小さな礫を敷きつめており、厚さは平均0.25mであった。

羨道は崩壊が著しく残存状態が悪いが0.5×0.4m前後の割れ石を根石に据え小口積している。床石については玄室と同様の状態であった。

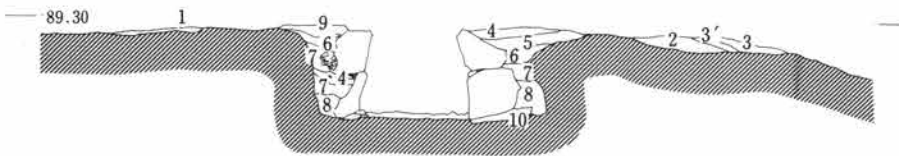
羨道と玄室の境には框石がある。他の用石と同じ輝石安山岩を加工したもので玄室側の左右の角には浅い切り込みが加えられている。上端面の中央には小さな段差がつくられ、右側羨道よりには径5cmのくり込み穴がもうけられている。この古墳は加工石材を用いた玄門があり、扉状の施設があったことが考えられる。

石室開口部左側は角柱状の礫を直立させており羨門を意識している。また、開口部の左右には石積の袖がある。礫の大きさは、幅10～30cmで開口部に近く、下位になるほど大型の石材を用いている。

遺物は周堀内から須恵器の大甕片、土師器の杯等の破片が出土している。石室内からは鉄製品が93点出土した。内訳は釘72、鉄鏃14、刀子2、用途不明品5であった。出土位置は全て玄室であるが、羨道よりの床面から鉄鏃が多く出土しており、奥壁より釘がやや集中する傾向があった。最高位出土と最下位出土レベル



第199図 第3号古墳 石室展開図



- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| 1. 暗褐色土層 ロームを多く含む | 6. ロームブロックと黒色土の混土層 |
| 2. ロームと黒色土ブロックの混土層 | 7. 黒褐色土層 |
| 3. 汚れたローム土 | 8. ロームブロックの層 |
| 3'. 色調がやや暗い | 9. ロームブロックと少量の黒色土粒の混土層 |
| 4. ロームを主体にした黒色・黄色土のブロックとの混土層 | 10. ロームと黒色土の混土層 つき締められている |
| 5. ローム・黒色土・黄色土ブロックの混土層 | |

第200図 石室構築状態断面図



差は18cmである。コの字型の用途不明品は、左壁框石よりの床面から2つ出土している。

石室の構築状況はF P混りの黒色土層を切り込み上端が大きく外反する逆台形状の竪穴を掘りその底面に根石を据えている。平面的には隅丸の矩形を呈するが羨道部分ではやや幅を狭めている。規模は上幅が長軸で6.82m、横軸は玄室部分で5.3m、羨道部分で3.0m、残存壁高は0.95~1.7mである。

全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前	左	右
580	346	355	346	157	176	117	(22)	(28)	225	225	(225)	70	76	162	156

第4号古墳 (第201~203図 P L 29)

P-5グリッドに位置し、第3号古墳、第15号古墳と近接する。石室開口部から北西に14mで第7号古墳の開口部に達する。墳丘の規模は東西で22.56m、南北25.20mである。封土は確認することができなかった。周堀は全周しているが、西側で第10号溝と重複している。断面形は東側や北側ではレンズ状を呈しているが西側はV字形に近い掘り方になる。規模は北側の最大部分で上幅2.52m、下幅1.52m。西側で上幅2.44m、下幅0.84mである。開口部前には逆台形をした「前庭」状の遺構をもっており、外周の上端まで7.52m、開口部の部分で幅3.6mを測る。

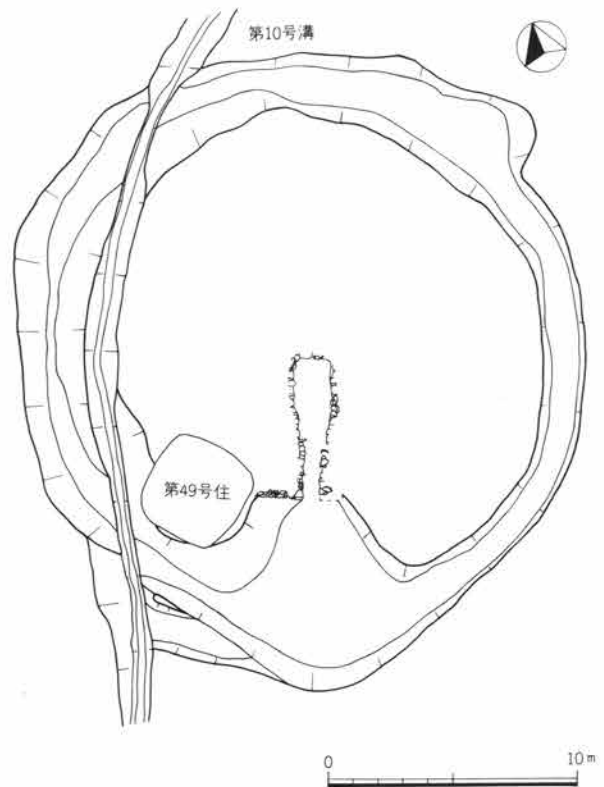
内部構造は輝石安山岩乱石積の両袖型横穴式石室であるが、開口部の右側を欠失するほか残存状態が著しく悪く、側壁も根石と2段目の数石が残るのみであった。石室の規模は下記のとおりである。

玄室は羨道よりの幅が狭く胴張りを意識している。奥壁は2石で一段を構成している。側壁は0.4×0.5m前後の割れ石を小口に据えており、また、上端面を平坦にするため掘り方底面を掘り込んだり、小礫をさし込んでいる。羨道部の側壁の用石も同様の形状、構築方法をとっている。

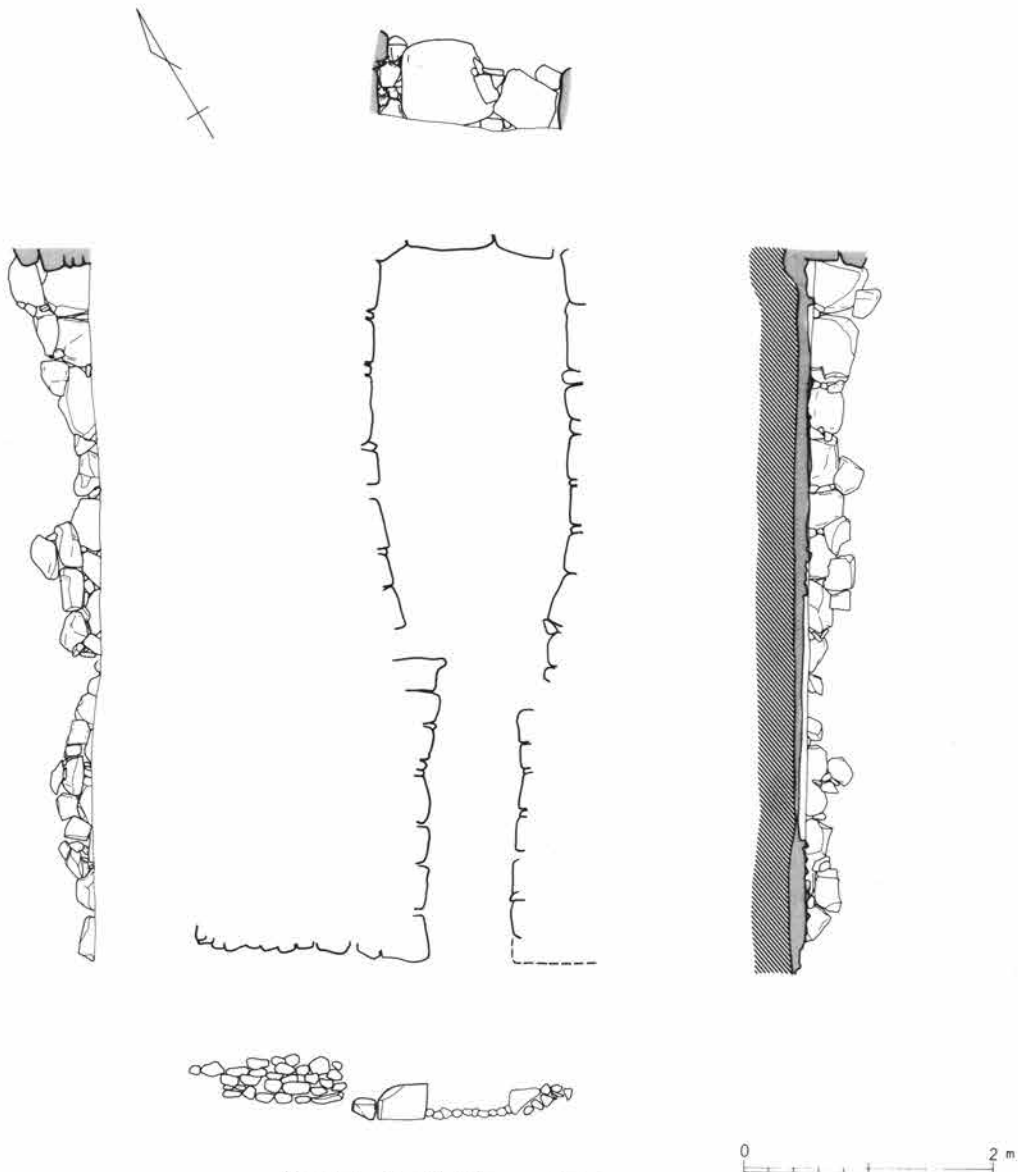
袖部分は右側は欠失しているが柱状の割れ石を直立させ据えたと考えられる。

床面は、玄室、羨道とも欠失している部分が多いが10~20cmの礫を舗石状に敷いている。厚さは10cm前後である。羨道部分では床石の下に黄褐色の汚れたローム土が敷かれていた。開口部の左側には石積の袖があり、15~20cmの割れ石が使われている。

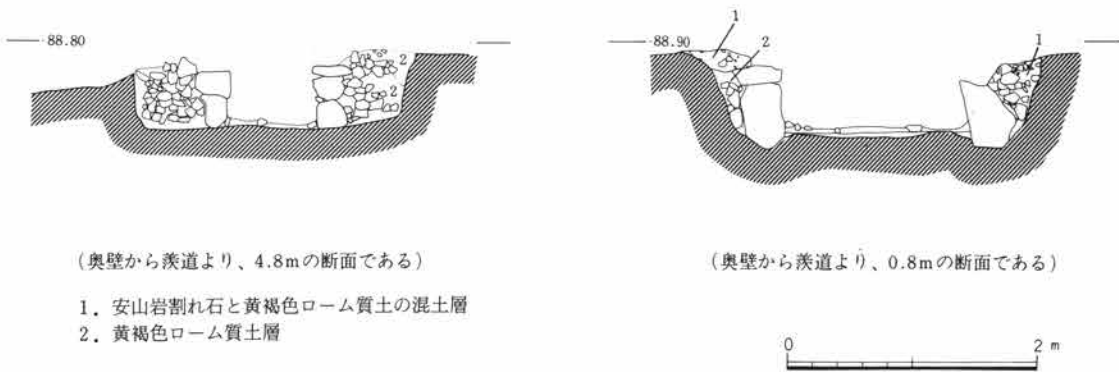
石室の構築状態は他の古墳同様ローム層を切り込



第201図 第4号古墳平面図



第202図 第4号古墳 石室展開図



(奥壁から羨道より、4.8mの断面である)

(奥壁から羨道より、0.8mの断面である)

1. 安山岩割れ石と黄褐色ローム質土の混土層
2. 黄褐色ローム質土層

第203図 第4号古墳 石室構築状態断面図

んで堅穴を掘る方法がとられていた。掘り方の規模は長軸の上幅6.29m、短軸の上幅は玄室奥壁よりで、2.94m、羨道部で2.14mを測り、長さに対して幅の狭い矩形のプランを呈している。

全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖		前庭壁石積	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前	左	右	左	右
557	322	—	(313)	142	159	114	33	—	235	—	(178)	64	66	184	—	184	—



第204図 第6号古墳平面図

第6号古墳 (第204～206図 P L29)

P-15グリッドに中心を置く。東へ下がる斜面の中位に構築されており、検出面において、石室の西側と東側の周堀の間で1m以上のレベル差がある。墳丘の規模は東西で25.52m、南北で22.64mを測る。

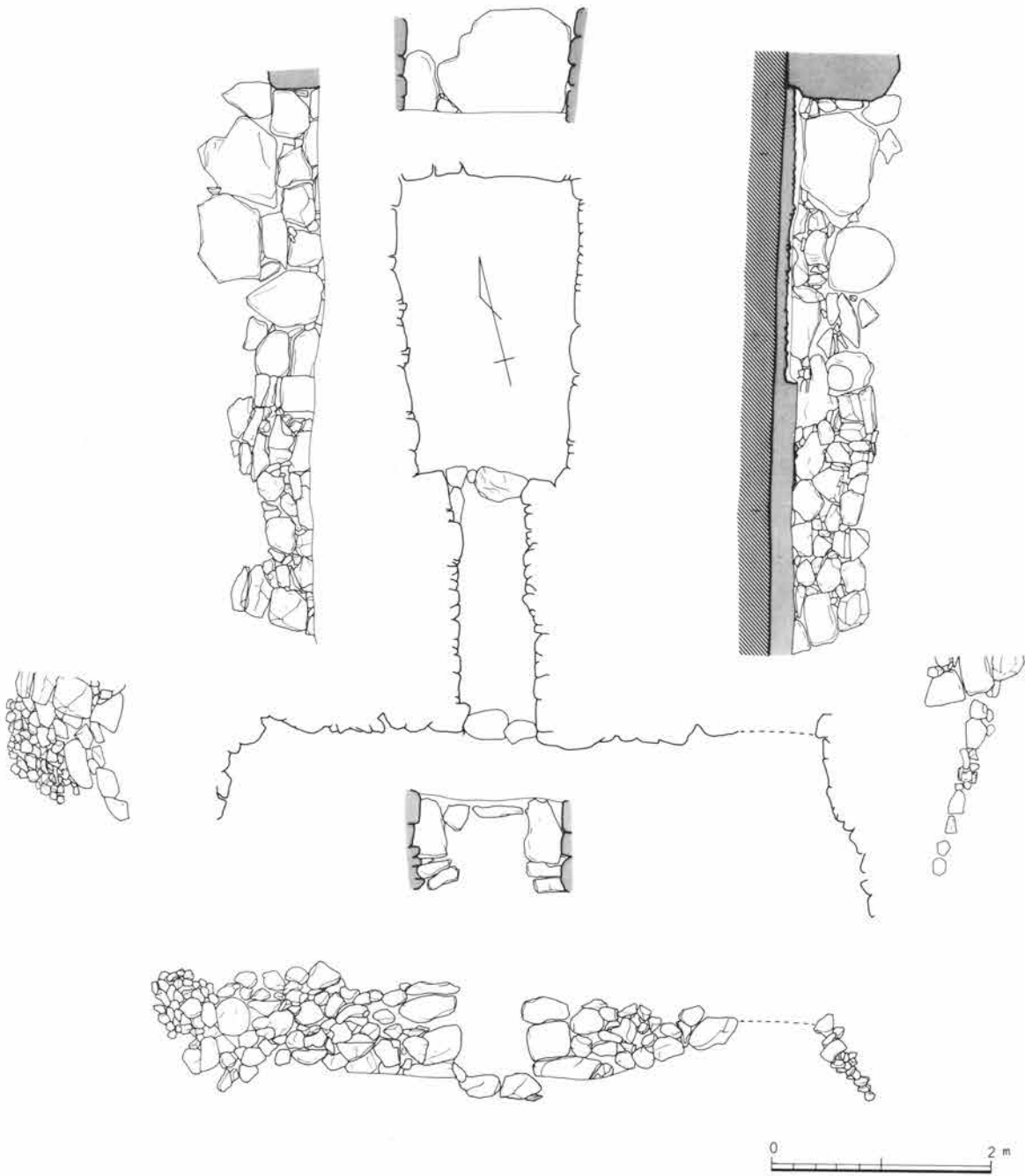
周堀は全周せず、東側と西側に分離し円弧状に掘られている。北側が掘り残してあることはこの古墳が第10号古墳の後構築されたためと考えられる。西側の周堀の外周は中位で内側にくびれている。最大値は上幅で7.8m、下幅で3.56mである。東側の掘り込みは第10号溝によって分断されている。ローム層への掘り込みは0.1～0.2mと浅かった。上幅2.2m、下幅1.32mを測った。

石室開口部前には外方に向って開く台形状の「前庭」状遺構を持つ。また開口部の左右には30cm以下の割れ石をほぼ直立に積んだ石積みの袖を持っていた。この袖の外端からは南側にやや開いてこれと直交する石積が左右に積まれていた。右側は大多数の礫が崩落していたが根石の部分のみ残っていた。左側は攪乱を受け1m程が残存していた。この部分の上位では約10cm前後の礫が使用されていた。「前庭」状の掘り方の規模は玄室中頃で東西7.32m、奥部分の東西2.04mであった。

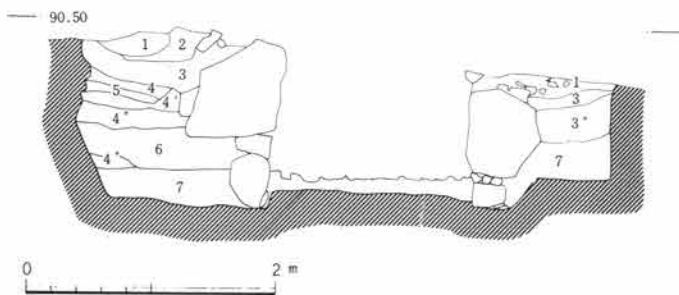
内部施設は輝石安山岩の割れ石を乱石積した両袖型横穴式石室である。玄室の平面形は右壁がほぼ直線であるのに対し左壁は羨道に向かって狭くなっている。奥壁には2石でつくられ1.15×1.05mの大型の用石を据え、左壁との間を小型のもう1石で埋めている。左壁の根石は6石であり0.3×0.2m前後の礫を据えている。

床面は0.1m前後の小礫を舗石状に置き、その上に小礫、小円礫を敷きつめている。厚さは10cm前後である。

羨道も玄室も同規模の用石を根石に据えていたが上段のものは0.2×0.1m程度が多かった。床面も玄室同様の石材であるがレベル差が高くなり玄室床面に段差をつくっている。羨道入口部にも他より大型の礫を据えている。羨道と玄室の境には50×30cm程の割れ石を長軸に対して小口積し框状の石積をつくっている。



第205図 第6号古墳 石室展開図



1. 褐色土層
2. 褐色土層 ローム質土を混入
3. 茶褐色土層 ロームブロックを多量に混入
4. 褐色土とロームブロックの混土層、黒色土も少量混入
- 4'. 黒色土は含まれない
- 4''. 黒色土の混入が多い
5. 黒色土のブロックと少量のロームブロックの混土層
6. 茶褐色土層 ロームを多量に混入
7. ハードロームブロックを充填した層

第206図 第6号古墳 石室構築状態断面図

第2章 検出された遺構と出土遺物

また、両袖とも最下位に柱状の割れ石を直立させ、その上に偏平な礫を積みあげ玄門を意識している。
石室の構築状況は榛名山ニツ岳降下火山灰（FP）混りの黒褐色土層を切り込んでつくった、竪穴の底面に根石を据えている。規模は上幅の長軸6.25m、横幅4.56mを測り、残高は0.6～1.2mであった。
周堀内から須恵器の大甕 $\frac{1}{2}$ 個体分が出土している。

全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖		前庭壁石積	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前	左	右	左	右
495	258	264	265	153	155	120	20	30	235	231	232	75	66	204	252	(100)	(166)

第7号古墳（第207・208図 P L 29）

H-11グリッドに位置する。南側には第2号古墳、第4号古墳が位置し、北東に第6号古墳がある。また、周堀の東側には第15号古墳、両側には第18号古墳が近接する。

周堀は確認時に北側が跡切れて袂状を呈していたが実際は全周していたと考えられる。規模は東側で上幅1.52m、下幅1.10m。両側で上幅1.16m、下幅3.2mと狭く、溝状の掘り込みである。石室開口部前で著しく広がり、開口部から外周の立上りまで11.4mを測る。開口部の左側には土壇状の掘り込みがあり底面が一段低くなっていた。墳丘の規模は南北16.64m、東西15.0mであった。内部施設は輝石安山岩の割れ石を乱石積した横穴式石室である。玄室と羨道は主軸の方向に食違いがあり玄室の主軸方位がN17°Eであるに対し羨道はN20°20'Eである。玄室は奥壁、側壁ともに他の石室と比較して大型の用石を使用している。奥壁は1石を据えており、横幅1.2m、高1.35mと大型である。側壁は左が3石、右が3石の根石で構成されている。奥壁の一对はともに偏平な礫をやや内傾気味に直立させている。袖部の右側は薄い長形状の割れ石を直立させ玄門を意識させているが左袖は側壁の壁面の内彎曲を利用して羨道につなげており片袖状になっている。床面には5～10cmの小礫を敷きつめており厚さ約10cmであった。

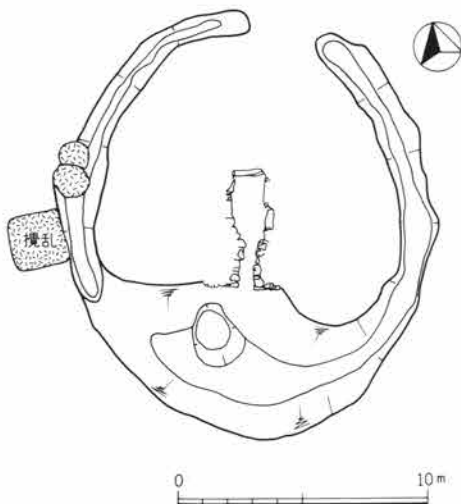
羨道は左壁に4石、右壁に5石を根石に据え横積している。用石の面積は0.3～0.5×0.3m位である。

石室開口部の用石は柱状のものを直立させており羨門を意識したものであろう。床石には玄室のそれよりもやや大きな10～20cmの礫をあてている。また、玄室との境には0.5×0.3mの礫を2石据えており框石の体裁をとっている。

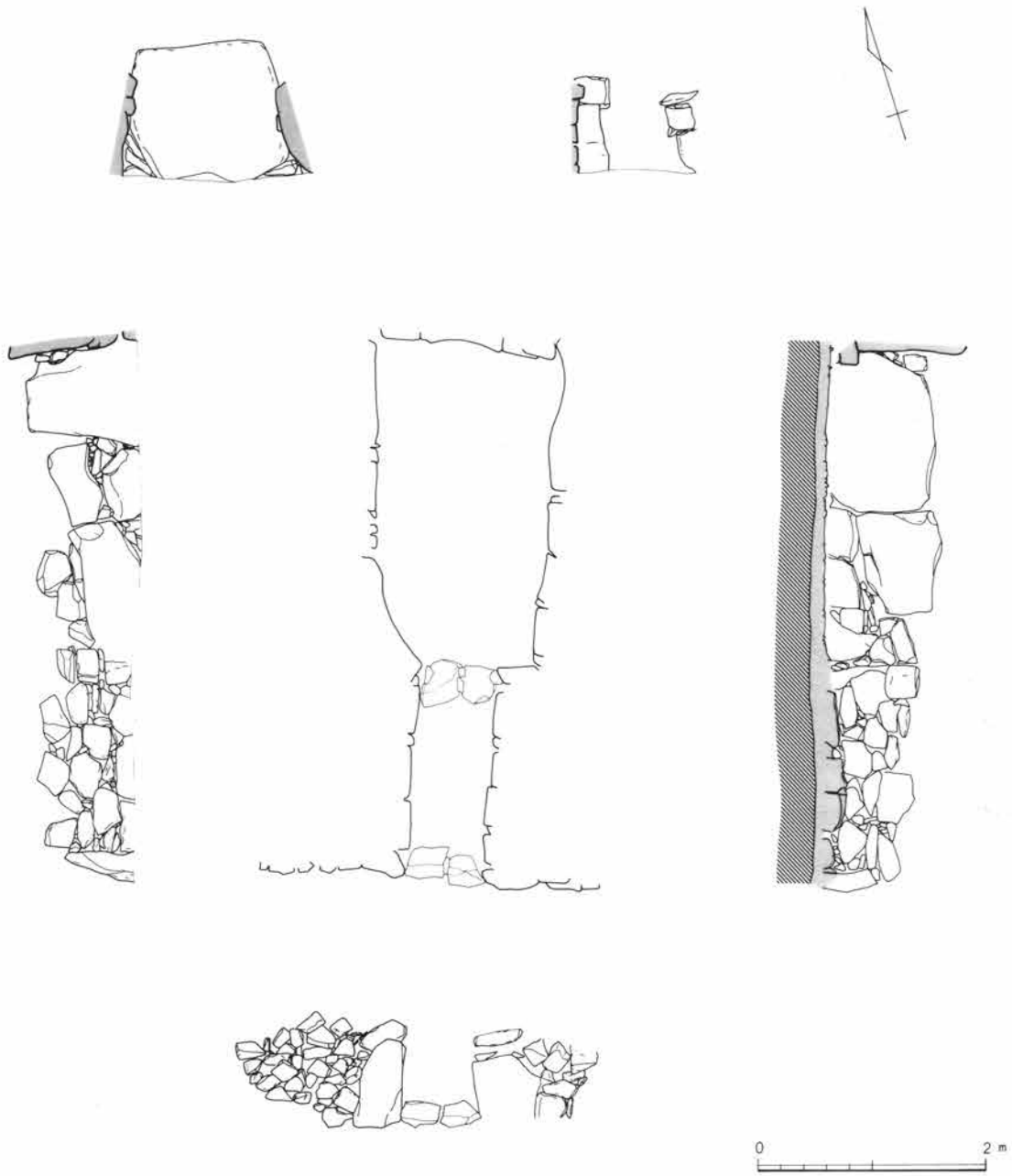
玄室内からの遺物の出土は見られなかったが石室開口部前の埋土中から須恵器の蓋、杯の破片を出土している。

石室の構築状況は逆台形状の竪穴を掘りそこに根石を置くものである。規模は主軸の上端が5.10m、玄室部分で3.68m、羨道部分で2.55mと開口部で狭くなる矩形で残高は0.9～1mである。

裏込めは用石の隙間に小礫を多くさし込んでいるが、その他は、20cm程の厚さのロームと黒色土の混土層が重層していた。

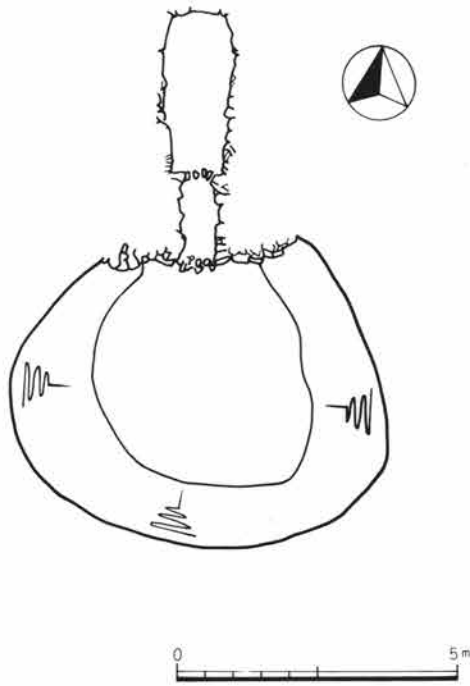


第207図 第7号古墳平面図



第208図 第7号古墳 石室展開図

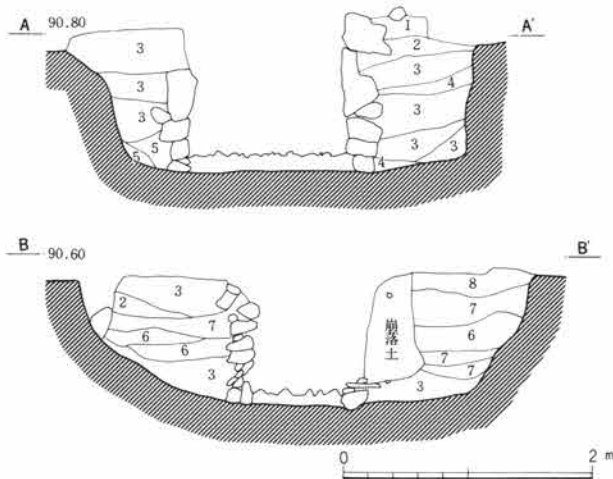
全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前	左	右
456	273	276	262	162	152	98	—	32	179	180	180	15	70	147	109



第209図 第8号古墳平面図

封土は確認できなかった。周堀の施設はなく開口部前に「前庭」状の遺構がある。これは逆台形状の掘り込みで、最大幅は6.72m、主軸方向の長さは4.88mで深さ1mである。

石室の構築状況は竪穴を掘り根石を据える方法である。規模は長軸方向の上端が5.2m、横幅は玄室部分で3.22m、羨道部分で3.68mである。残高は1m前後、断面形は逆台形を呈しており羨道部分の下端の幅は2.48mである。



- | | | | |
|----------|-----------------|------------------------|----------------|
| 1. 黄褐色土層 | ロームブロックを多く混入 | 5. 褐色土層 | 黒色土・ロームブロックを混入 |
| 2. 黒褐色土層 | 黒色土とロームブロックの混土層 | 6. 黒褐色土層 | 黒色土のブロック混入 |
| 3. 黄褐色土層 | ロームブロックと褐色土の混土層 | 7. 褐色土とロームブロックの混土層 | |
| 4. 黒色土層 | 締めりあり | 8. 黒色土とロームブロック・褐色土の混土層 | |

第210図 第8号古墳 石室構築状態断面図

第8号古墳 (第209・210図 PL30)

D-12グリッドに中心をおき、石室開口部から南に6mで第2号古墳の周堀に、奥壁から東に4.5mで第15号古墳に達する。

封土は確認できなかった。周堀の施設はなく開口部前に「前庭」状の遺構がある。これは逆台形状の掘り込みで、最大幅は6.72m、主軸方向の長さは4.88mで深さ1mである。

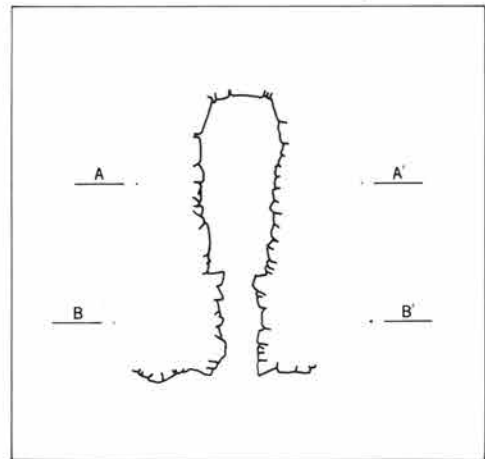
内部施設は輝石安山岩を乱石積した両袖型横穴式石室であるが、崩落が著しく、玄室の両壁中央部分と羨道の左壁は根石を確認できただけである。主軸の方位はS 0°Wである。

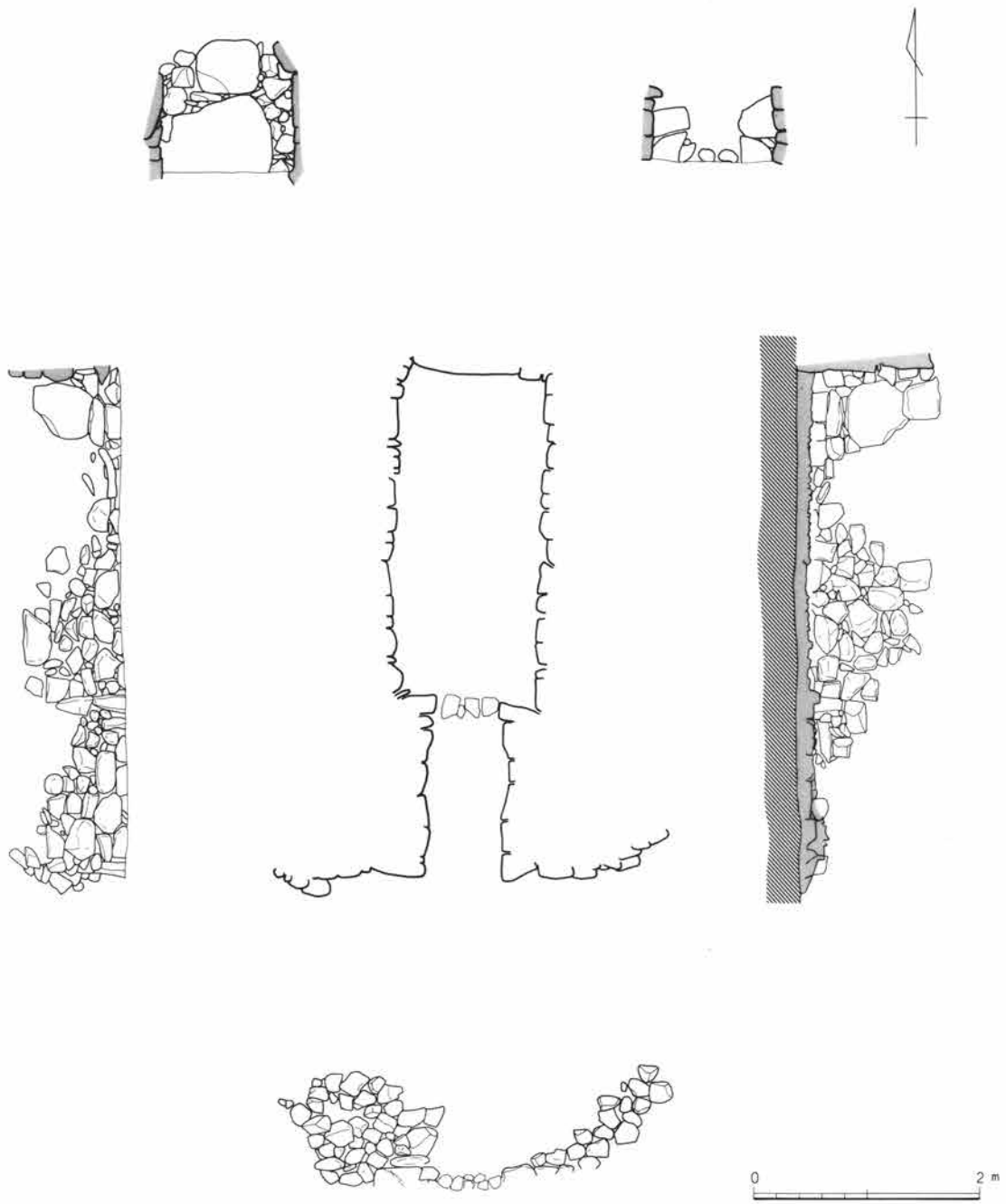
玄室は他の古墳と比較すると小型の用石を使用しており、側壁は0.3×0.2m前後のそれを根石にしその上に同様の割れ石を横積している。奥壁は2段残っていた。下段には、1.0×0.6mの割れ石を置き右壁との隙間を小礫で充填している。床石には円礫をふくむ小礫が敷かれており15~20cmの厚さを測る。

羨道の用石も同規模のものが使用されていた。羨道の床石には、円礫は含まれず、玄室よりやや大型のものが使用され

ており、床面のレベルも5cm程上がっていた。また羨道と玄室の境には20×10cmと床石よりもひと回り大きな石が3石置かれていた。框石と考えられる。

石室の構築状況は竪穴を掘り根石を据える方法である。規模は長軸方向の上端が5.2m、横幅は玄室部分で3.22m、羨道部分で3.68mである。残高は1m前後、断面形は逆台形を呈しており羨道部分の下端の幅は2.48mである。





第211図 第8号古墳 石室展開図

全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前	左	右
426	285	270	284	124	121	110	32	31	156	156	153	56	68	117	151

第9号古墳 (第212~214図 P L30)

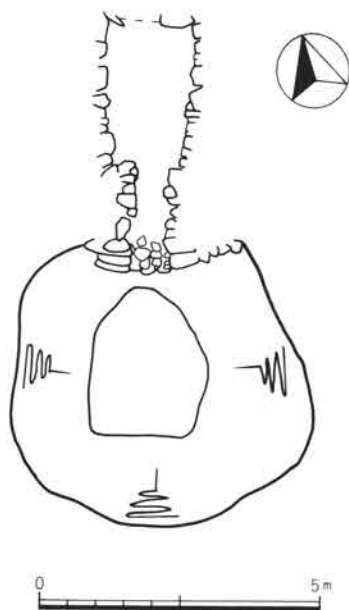
J-16グリッドに位置し、石室開口部から南東に6.5mで第6号古墳の西側の周堀。

周堀は存在せず石室開口部前に「前庭」状の遺構がある。最大幅5.4m、奥行4.4m、深さ1.0mを測る。したがって底面は開口部の床面よりも18cm程低くなっている。埋土の最下層は汚れたローム層の土層であったがこれは石室構築時には人為的に埋め戻された土層とも考えられる。

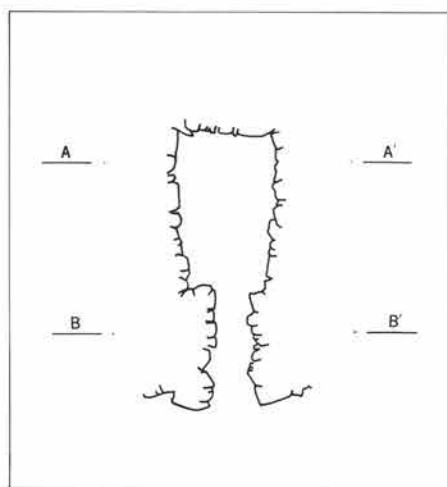
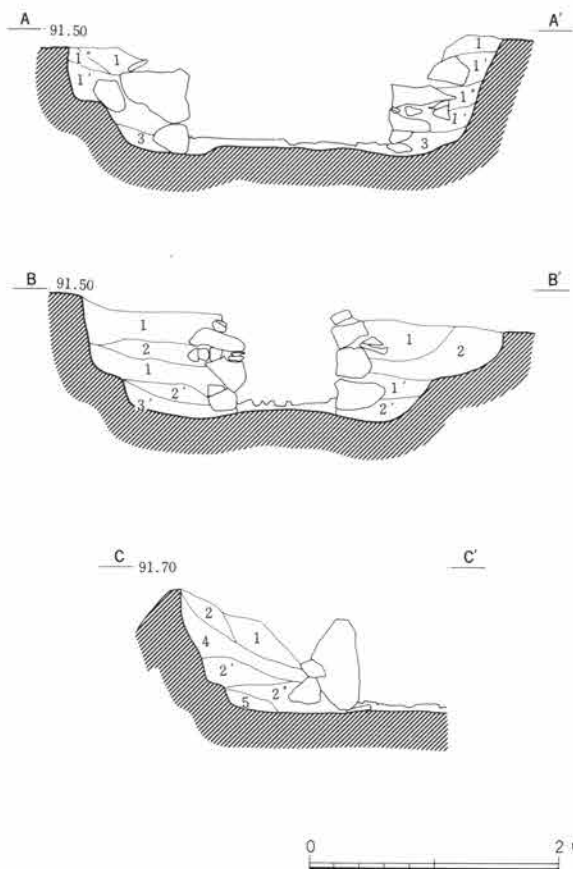
内部構造は輝石安山岩の割れ石を使用した両袖型の横穴式石室である。玄室は乱積ながら面をよく整えた積み方で多少ころびを計算している。奥壁は2石以上で構成されていたと思われるが左側の用石は攪乱で抜かれていた。床面には偏平な礫を一面に敷きつめていた。厚さは20~25cmである。羨道の用石はばらつきが大きく0.6m以上のものも用いられている。床石には10~20cm前後の礫が使用されていた。また、開口部では左壁で3石、右壁で2石を小口積し、正面感を強調している。

遺物は鉄鏃が玄室中央、左壁よりから出土している。

石室の構築状況は逆台形の竪穴で長軸の長さ5.7m。玄室部分の横幅3.4mを測る。深さは0.8m前後であった。

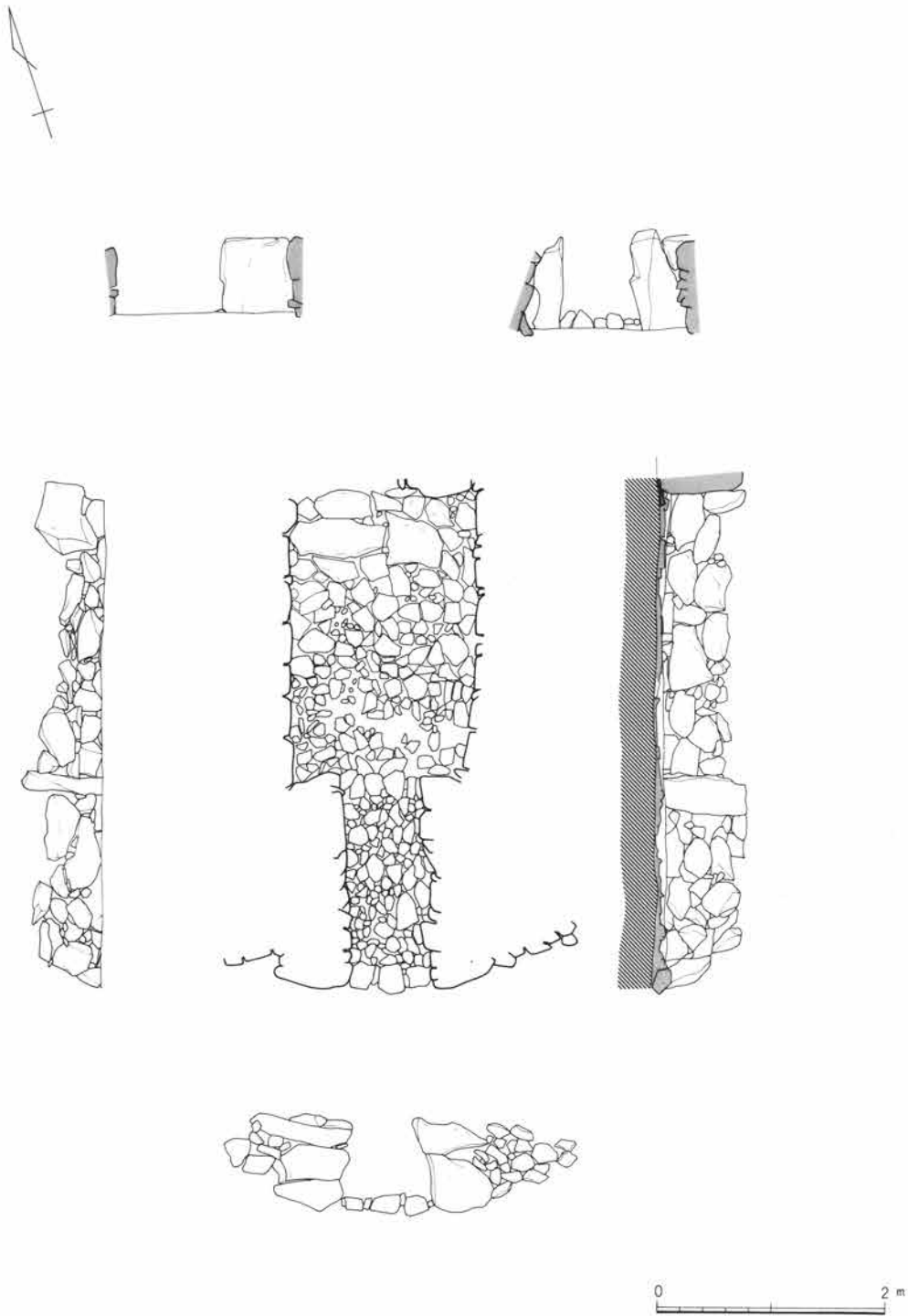


第212図 第9号古墳平面図



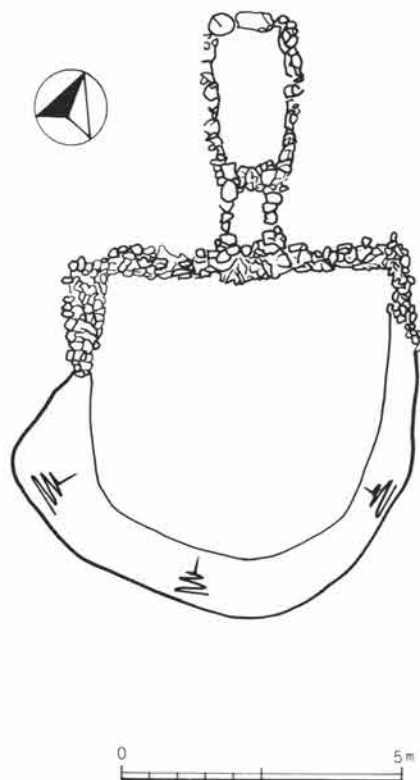
1. 暗褐色土を主体とした黒褐色土との混土層
- 1'. 黒褐色土の混入の割合が1よりも多くなる
- 1''. 1に類するがやや粘りがある
2. 暗褐色土の混入の割合が1よりも多くなる
- 2'. 1よりも黒味が強くなりロームブロックも散見される
- 2''. 2よりも粘りが増す
3. 暗茶褐色土層 地山であったハードローム・ソフトロームが再度埋め戻されたもの
- 3'. 1に類するがやや粘りがある
4. 3と黒褐色土との混土層
5. 黒色土層 ブロック状に混土

第213図 第9号古墳 石室構築状態断面図



第214図 第9号古墳 石室展開図

全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前	左	右
431	(238)	244	245	155	159	146	43	32	184	186	178	69	70	109	126



第215図 第11号古墳平面図

第11号古墳 (第215～217図 P L 32)

H-26グリッドに位置する。石室開口部から南へ15mで第9号古墳の開口部に、西に7mで第12号古墳の「前庭」遺構に達する。確認面の標高は92mで調査した20基中、最高部に位置する。

周堀はなく開口部前に「前庭」状の掘り込みをもつ。逆台形状の平面形を呈するが、第1号や第8号古墳に比して開口部前の横幅がある。奥行は6.0m、最大幅7.12m、開口部幅4.94m、深さ0.95mを測る。開口部の左右には20×15cmほどの割れ石を使用した袖石積がある。この袖に交わるように前庭の左右壁にも石積列がある。袖部よりもやや小型の礫が使用されている。いずれも横口積であり直立に近い積み方である。

内部構造は輝石安山岩の割れ石を使用した両袖型横穴式石室である。主軸はS19°Eである。玄室は胴張りを意識したプランである。奥壁は2石からなり2段残っていた。側壁は幅0.3～0.4mの用石を使って根石にしており、その上にも同規模の用石を小口積している。ころびは羨道よりで顕著に確認できた。床面にも他の石室よりもやや大きな割れ石が敷かれていた。厚さは約10cmである。

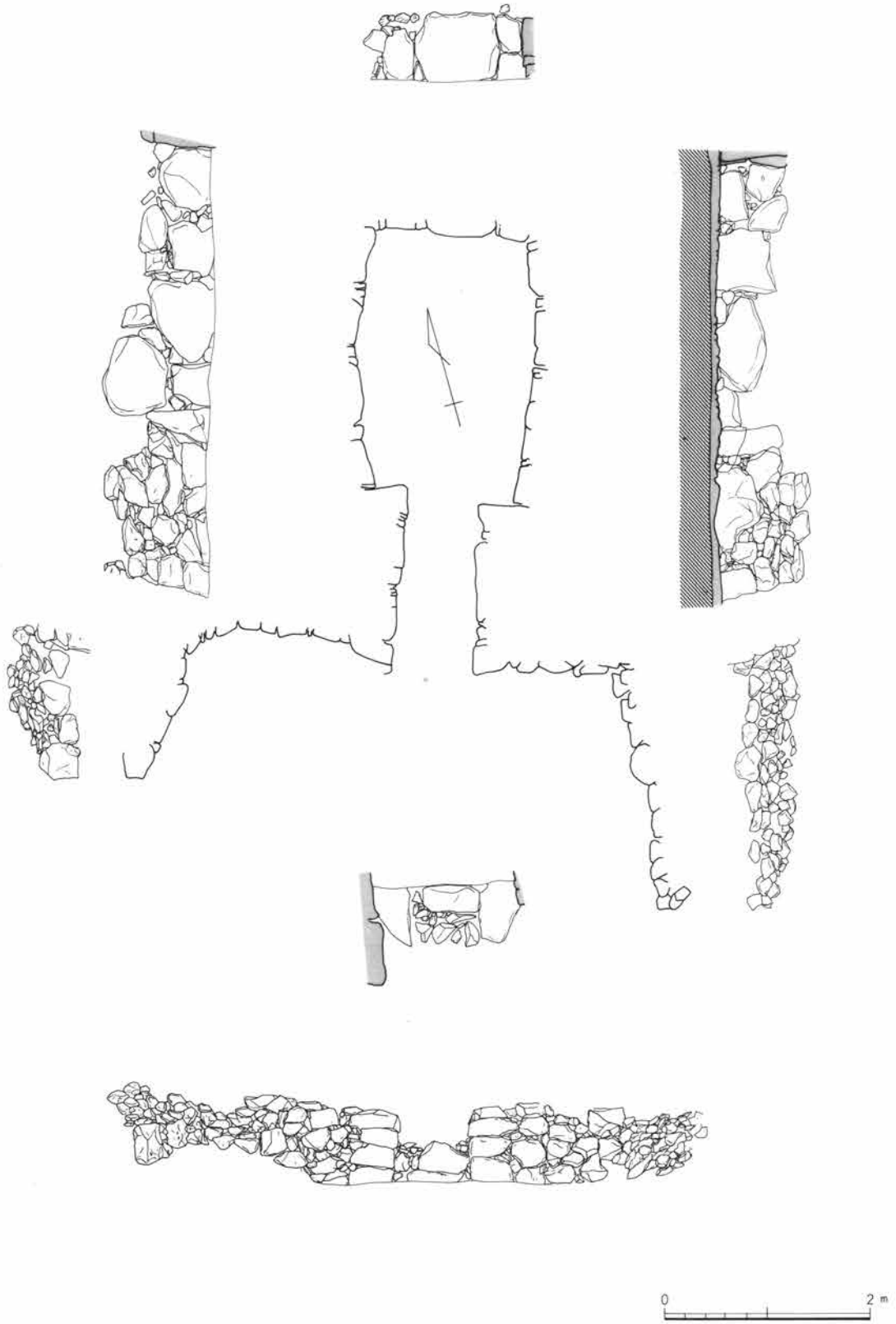
袖部は両袖とも柱状の割れ石を直立させその上に偏平な用石を横積しており玄門を意識している。羨道の根石も玄室と同様であるが、上段の用石にはやや小型のものが使用されている。床石は玄室よりもやや小さい。厚さは20cm。玄室入口部には框石状の施設は認められなかったが、段差がつき底面は玄室床面よりも10cm程高くなっている。

出土遺物は「前庭」の埋土中から須恵器の大甕片を出土している。玄室の奥壁よりの左手から刀子を1点出土した。また、玄室の中央には人骨が一部残存していた。

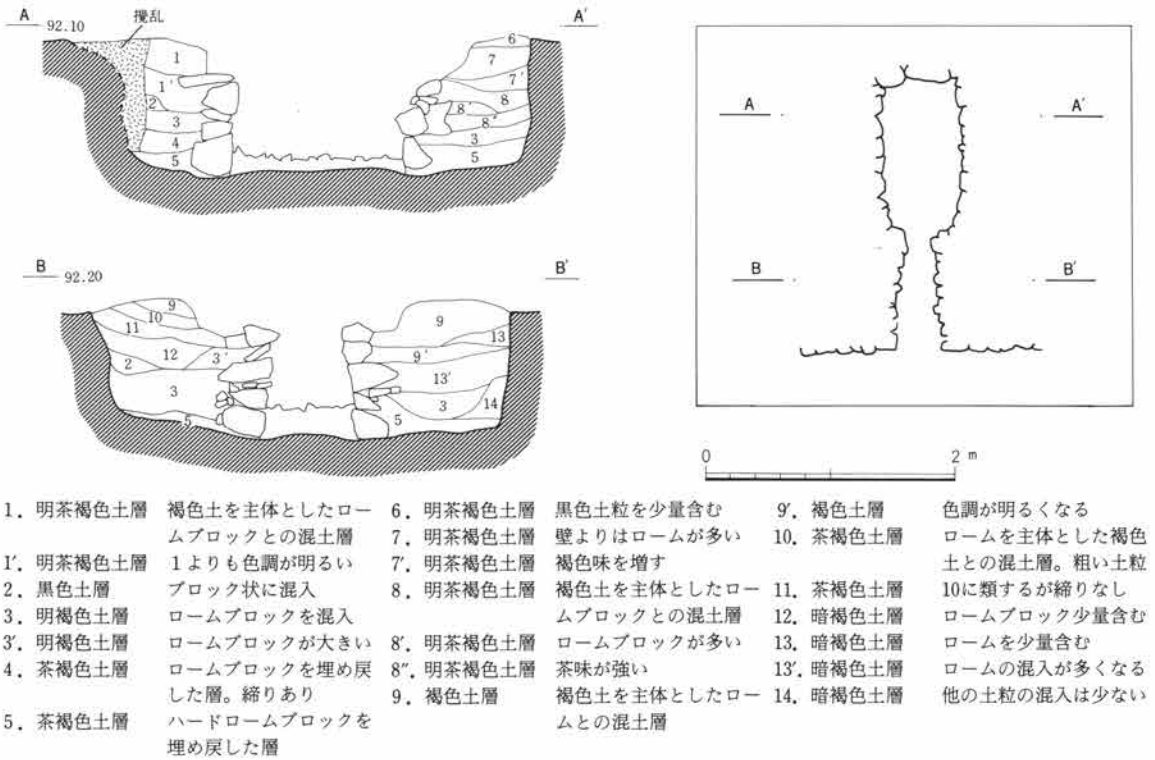
石室の構築状況は他同様、ローム層を掘り込み堅穴の底面に根石をおくものである。堅穴の規模は主軸方向で上端5.2m、横幅は3.25～3.30m、深さは1.1m前後で根石の設置面より内側は更に0.2m前後掘り下げられて段差ができています。奥壁の用石は堅穴から内側0.8mの位置に据えられている。裏込には小礫の混入は少なくロームブロック混りの褐色土が4層に分けて埋め戻されている。裏込の状況は側壁部分も同様である。

石室の構築状況は他同様、ローム層を掘り込み堅穴の底面に根石をおくものである。堅穴の規模は主軸方向で上端5.2m、横幅は3.25～3.30m、深さは1.1m前後で根石の設置面より内側は更に0.2m前後掘り下げられて段差ができています。奥壁の用石は堅穴から内側0.8mの位置に据えられている。裏込には小礫の混入は少なくロームブロック混りの褐色土が4層に分けて埋め戻されている。裏込の状況は側壁部分も同様である。

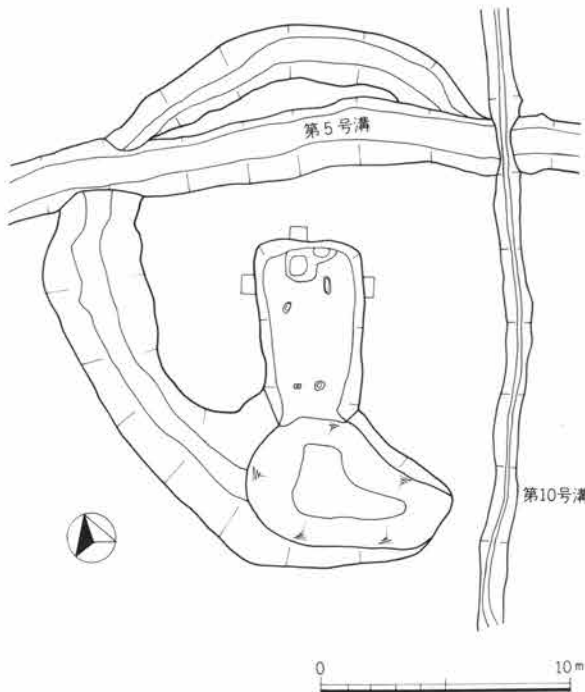
全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖		前庭壁石積	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前	左	右	左	右
431	245	252	247	121	134	100	19	17	186	200	279	65	69	211	154	186	154



第216図 第11号古墳 石室展開図



第217図 第11号古墳 石室構築状態断面図



第218図 第10号古墳平面図

第10号古墳 (第218・219図 P L 30)

R-22グリッドにその中心をおいている。斜面の東側端部に位置し、確認時の墳丘の西側と東側の端部の比高差は1.5mあった。外周の南側の立ち上がりは第6号古墳の周堀と約1.5mと近接する。

周堀は東側には検出できなかった。規模は西側で上幅3.76m、下幅10.4m、北側で上幅2.16m、下幅0.96mであった。石室開口部前には「前庭」状の掘り込みがある。形状は外周に向かって開放する扇型を呈しているが右辺は嘴状に東側へ延びて立ち上がっている。奥行5.92m、深さ0.9mである。

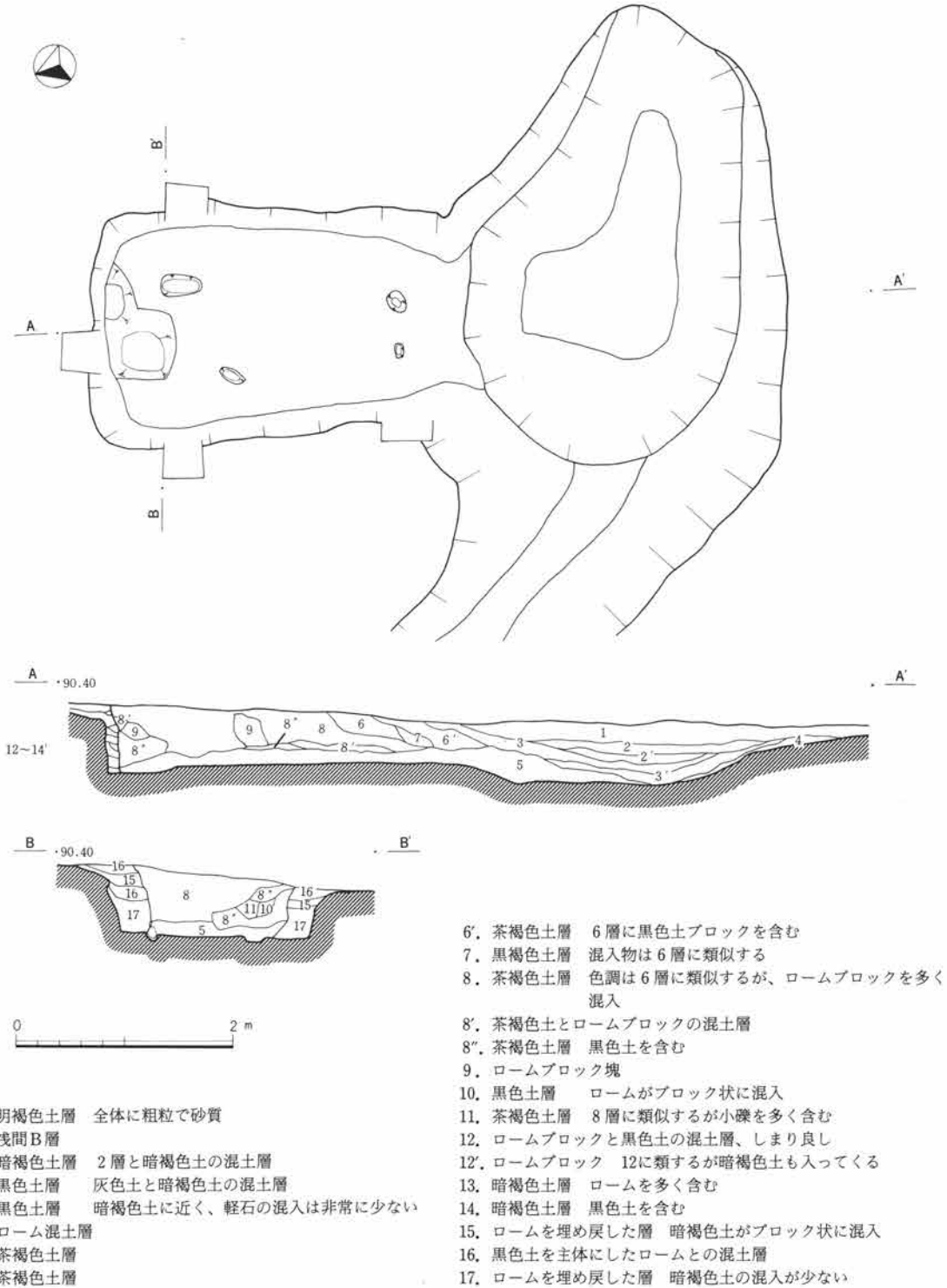
墳丘の規模は南北で21.4m。東西の残長は18.32mである。

石室構築状況は逆台形状の竪穴を掘り根石を置き始めたものと考えられるが用石が全て抜き取られており内部構造については全く資料を得ることができなかった。

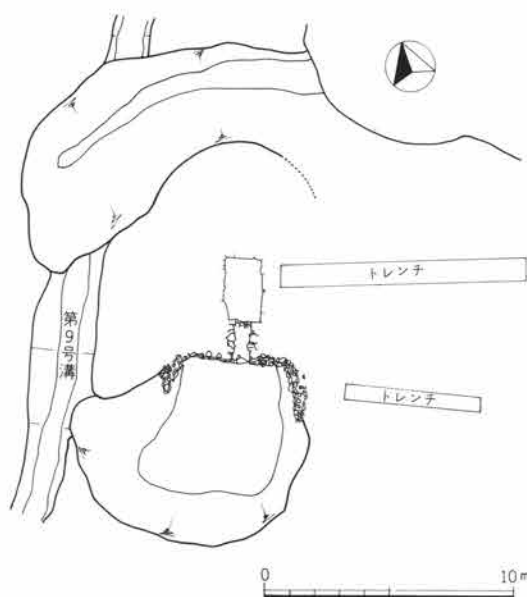
竪穴は榛名山二ツ岳降下軽石 (FP) を含む黒褐色土層を切り込みつくられており、長軸の上幅7.64m、下幅6.96m。横は奥よりで上幅4.24m、下幅3.60m、開口部よりで上幅3.52m、下幅2.72mを測る。長軸の方

位はS16°W。残存壁高は、0.7～1mであった。底面はほぼ水平であったが、北側の奥壁の位置、玄室、羨道の側壁に各2つ痕跡が明らかになった。

石室開口部の埋土中には浅間B軽石の堆積が確認できこれが竪穴内にも延びていることから、本古墳は浅間B軽石降下時には既に破壊されていたことが推定できる。



第219図 第10号古墳掘り方平面図・断面図



第220図 第12号古墳平面図

第12号古墳（第220・221図 P L31）

M-28グリッドに中心をおき、西側に第11号古墳、北側に第13号古墳が隣接する。

周堀は石室の北側に三日月状に掘り込まれているだけで全周しない。これは第13号古墳の「前庭」状遺構と重複している。東側の斜面には縄文時代の住居址が重複して構築され黒色土が厚く堆積していた。トレンチを設定して精査をおこなったが周堀の有無は未確定である。墳丘の規模は南北で19.6mである。北側の周堀の規模は上幅3.92m、下幅1.2mである。石室開口部前には「前庭」状の掘り込みがあり、西南隅が第9号溝と重複し、強く張り出している。奥行7.44m、最大幅9.2m、開口部分の幅4mである。深さは0.55mと立ち上がりは緩斜面である。

開口部の左右には、石積の袖がある。また、これと交わるように「前庭」の左右の壁にも石積列がある。これらは

10～20cm前後の割れ石を使用し、横積を基本としているようであるが、第11号古墳のそれと比較すると礫の規格や積み方に乱れが著しいものがある。また、開口部前には幅2m、奥行1.5mの広さに小礫が敷かれていた。

内部構造は輝石安山岩の割れ石を乱石積した両袖型の横穴式石室である。玄室は胴張り型に近いもので特に左壁は彎曲が強い。奥壁は中央に0.7×0.8mの大型の用石を据え、両側壁との間には幅25～30cmの小石を置いている。側壁は左右ともに50～70cm幅の大型の石材を用いている。床面には舗石が敷かれた上に円礫を混ぜた小礫が敷かれていた。主軸の方位はN3°Eである。

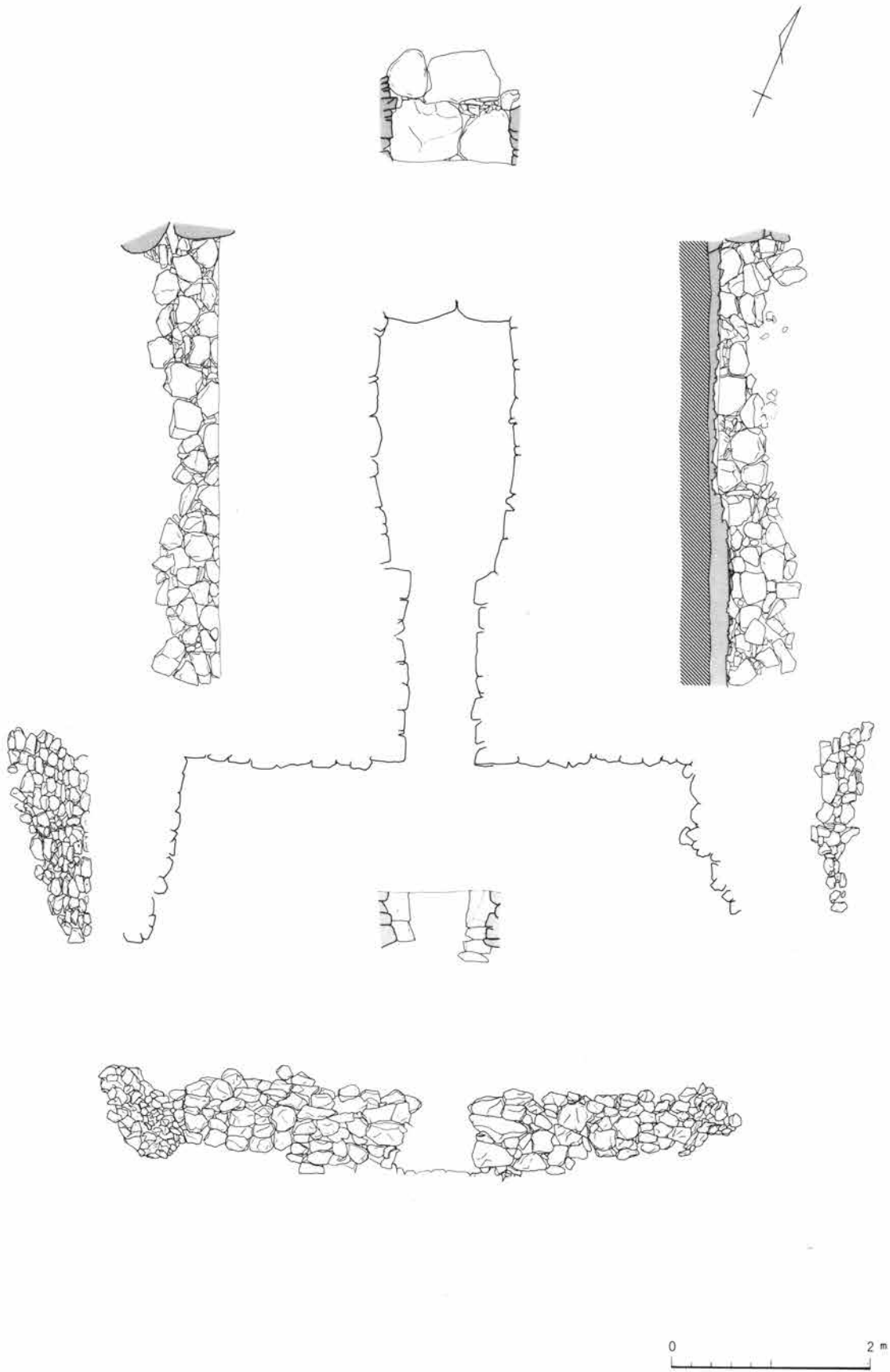
羨道は根石に大型の用石を据え上段には小型の石材を用いている。両壁とも面をていねいに整えた積み方をしている。開口部は両壁とも偏平な割れ石を横積（主軸からみると小口積）して正面感を整えている。玄室入口には幅50cmの割れ石を主軸と直交する方向で置き框石としている。

両側の袖部は偏平な割れ石を直立させ玄門を意識している。但し、右袖が開口部より18cmずれている。

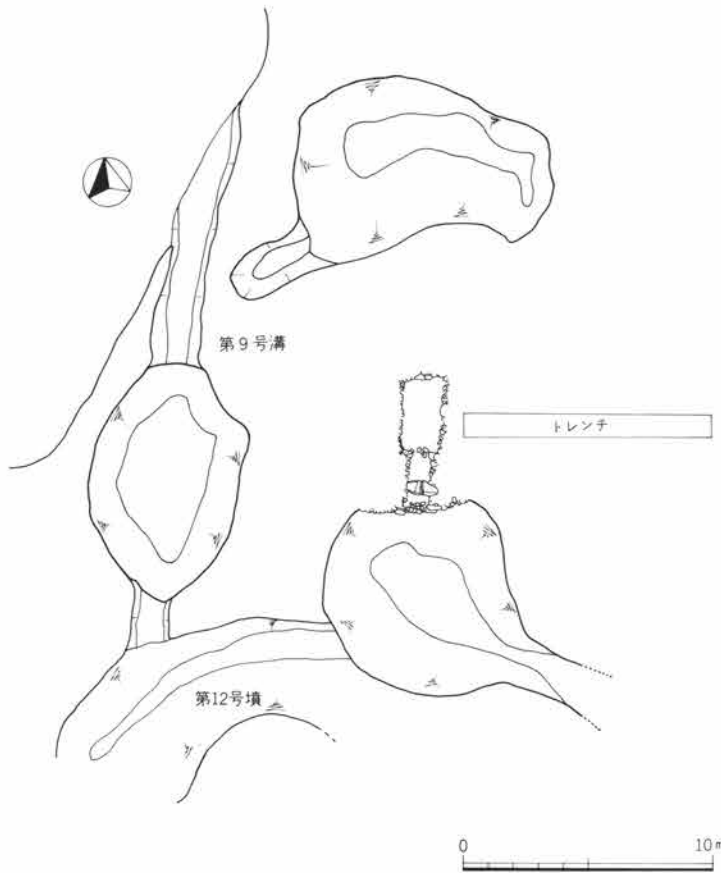
出土遺物としては玄室内の中央右壁よりの床面から刀子が1点、奥壁より西側の隅から刀子1点と鉄鏃数個体が検出された。また、前庭の埋土中からは土師器杯を出土している。

石室構築のために掘削された竪穴は主軸方向で上幅5.16m、下幅4.48mを測る。羨道部分の横幅は上端で4.48m、下端で2.92mである。左壁は2段に掘削されており、主軸から1.4m位でテラスをもっている。また、玄室あるいは羨道の掘り方底面より根石の据えられた下の底面が5cm位低い。

全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖		前庭壁石積	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前	左	右	左	右
417	245	—	255	148	165	132	30	36	180	—	162	68	77	185	135	143	232



第221図 第12号古墳 石室展開図



第222図 第13号古墳平面図

第13号古墳 (第222・223図 P L 31)

M-35グリッドに中心を置き調査を実施した古墳群中の最北に位置する。斜面に立地するため確認面は東西の両端で約2mの比高差があった。

周堀は全周せず、石室の西側と北側にあり三日月形を呈している。規模は西側の最大部で上幅3.3m、北側で5.3mである。埋土の上層には浅間B軽石が多く混入していた。東側の斜面には周堀を検出することはできなかった。

墳丘は封土を確認することはできなかった。規模は南北で24mを測った。

石室開口部前には「前庭」状の掘り込みがあり、台形状を呈しているが、東南隅は溝状に斜面下に開口している。奥行7m、深さは0.7mである。

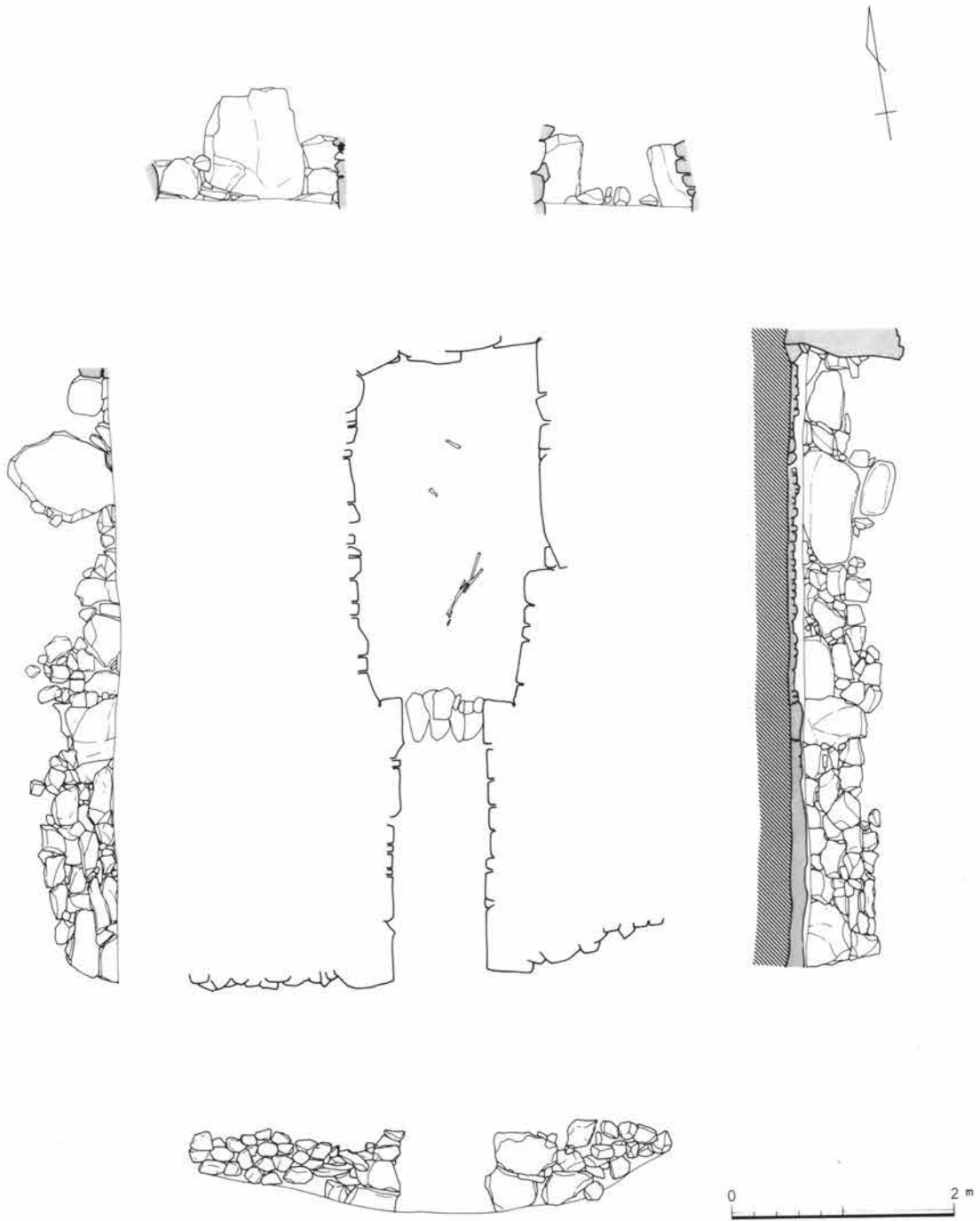
内部構造は輝石安山岩の割れ石を使用した両袖型石室である。奥壁には偏平な大型の用材を立積にし、両側の側壁との間は幅20~30cmの割れ石で充填していた。

側壁は根石に幅20~30cmの割れ石を使用し安定させた上で大型の用石を重ねている。床石には10~20cmの割れ石が充てられていた。主軸の方向はS 7°Wである。

袖部は柱状の割れ石を直立して据え玄門を意識している。羨道には開口部から第2石目と考えられる天井石が残存していた。奥行50cmの偏平な割れ石で左右壁とも根石から5段目に載る。高さは石室構築面から0.75m、床面から0.6mであった。壁を構成する用石は開口部を除いて幅30~40cm、厚さ10~20cmの小型のものを小口積していた。玄室の入口部には割れ石を3石据え框石としている。

出土遺物はなかったが、玄室内に人骨が3地点に分かれて残存しており、北東隅からは歯も10個分検出された。聖マリアンナ医科大学の森本岩太郎教授に人骨の分析鑑定を依頼したところ、成人男女各1個体、不明1体の計3体分であるとの結果を得ることができた。

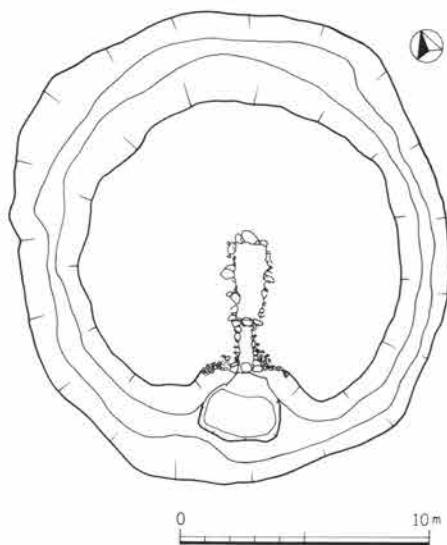
石室構築状況は逆台形状の竪穴を掘削して根石を置くものであり、ソフトロームより上層の黒褐色土層を切り込んでいる。主軸方向の長さは5.75m、横幅は上端で3.3~4.4mであった。残存壁高は西側が深く、1.2m前後、東側は0.9m前後であった。裏込め部分には小礫の混入は少なく、20~30cmの厚さで黒色土とローム質の土層が充填されていた。



第223図 第13号古墳 石室展開図

全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前	左	右
588	284	295	312	120	170	156	22	26	253	238	236	71	82	186	165

第14号古墳 (第224～226図 P L 31)



第224図 第14号古墳平面図

X-29グリッドに中心をおく。斜面の東端に位置し、斜度は極端に小さくなっている。調査前の耕作土上面には盛り上がりを確認できなかったが試掘調査時に石室の存在を確認できた。

墳丘の封土は残存していない。周堀は全周している。全古墳中最も整然とした形状をしている。周堀の幅は上端で2.0～3.36m、下端で0.4～0.84m。深さ0.4～0.6mを測る。埋土の最上層に浅間B軽石を多く混入する。石室開口部前には東西3.2m、南北3.64m、「前庭」状の遺構があり、周堀の底面より更に10～20cm程掘り込まれている。

開口部の左右には小礫を横積した石積の袖がある。また、この袖の端に交わるように「前庭」の壁面にも石積列があり、右壁で4石確認された。主軸の方位はS26°Eである。

内部構造は輝石安山岩割れ石乱石積の両袖型横穴式石室である。

玄室は崩壊が進み奥壁1段、側壁2段のみ残存していた。平面プランはやや胴張りを意識して設けられている。奥壁は中央に0.75×0.65mの大型のものを置き、両側壁との間はやや小ぶりの割れ石を使用している。

側壁は奥壁よりの2石の根石は0.6×0.6mであるが、羨道よりは0.4×0.3mの小型のものである。やや転びを計算しているようである。床石には10～20cmの割れ石が敷かれており厚さは20cm前後である。

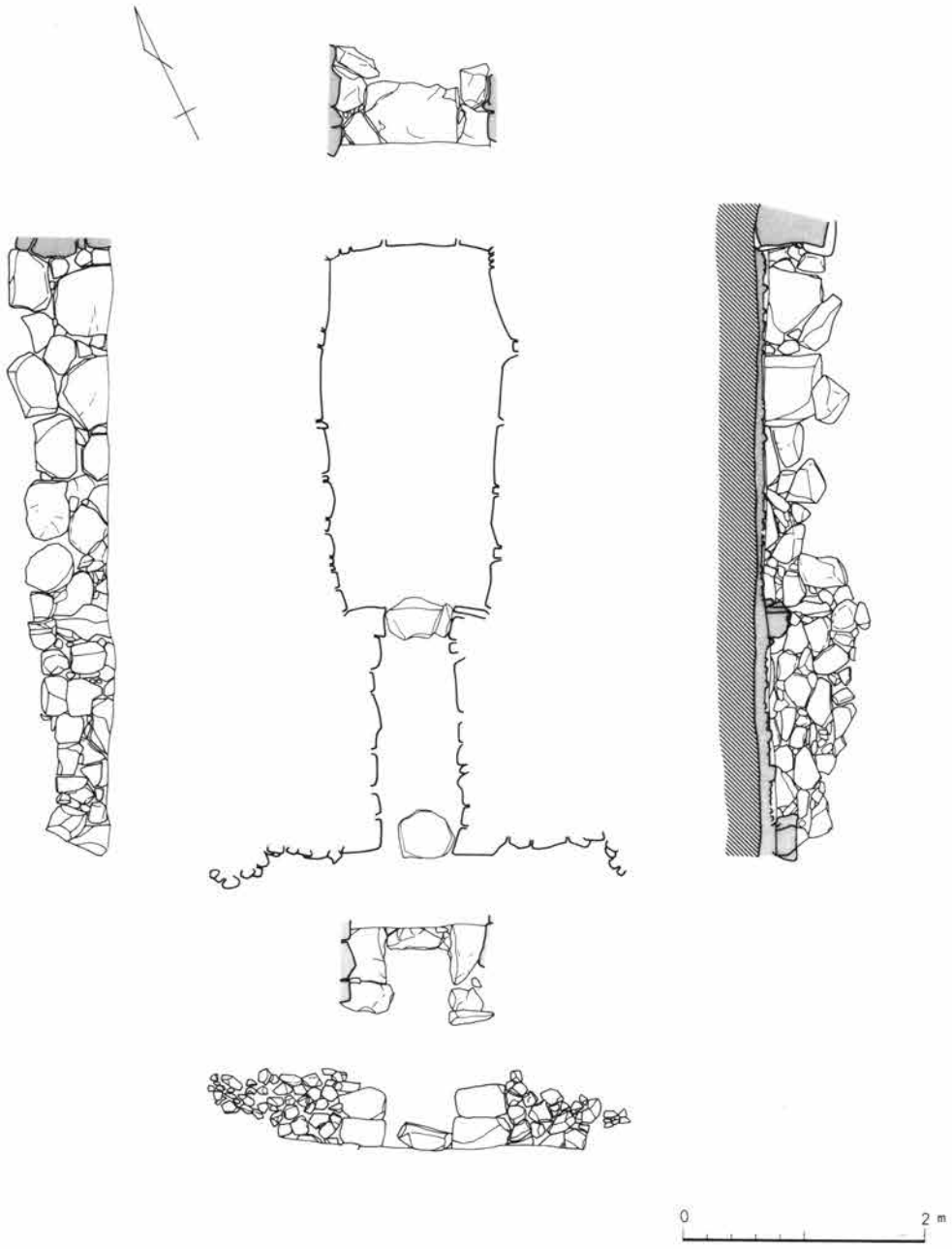
羨道は玄室よりもやや小型の石材を用いている。床石は玄室と変わらないがレベルは5cm程高くなっている。玄室入口には幅0.45mの偏平な割れ石が置かれ框石の役割をしている。また、開口部入口にも幅0.4m程の割れ石を梱石状に置く。袖部は左右とも偏平な割れ石を立石させ据えており玄門を意識している。

出土遺物は玄室中央右壁際に集中していた。刀子片と鉄鏃数個体分である。小片のため床石内に転落していたものも多い。

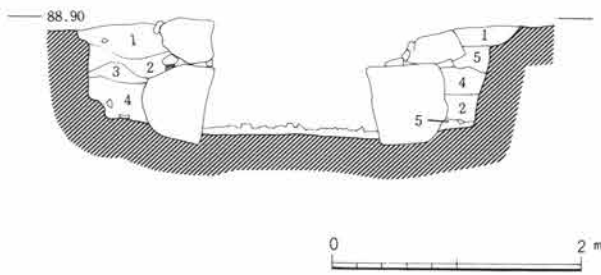
石室の構築状況は逆台形状の竪穴を掘り根石を据えている。規模は主軸方向で5.87m、横幅が玄室部分で3.18m、羨道部分2.92mと開口部に至りやや狭くなっている。残存壁高は0.75m前後である。

裏込は羨道部で石材の裏側から30cm程にわたって小礫が多くふくまれており、それより外側は黒色土、暗褐色土、ロームブロックが比率を変えて混土された土層が10～20cm程の厚さで確認できた。また、玄室の根石の下には小さなくぼみがあり、羨道の床面下の構築面よりも下がっている。

全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖		前庭壁石積	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前	左	右	左	右
494	285	292	288	130	140	113	33	26	197	202	202	57	57	142	122	(45)	(30)

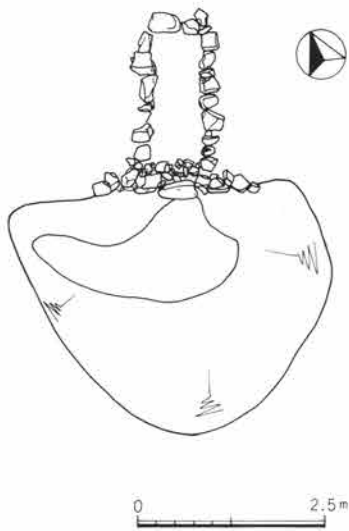


第225図 第14号古墳 石室展開図



1. 灰褐色土と黒褐色土ブロックの混土層
 2. 灰褐色土と黒褐色土ブロックの混土層、ブロックの混入が多い
 3. 黒色土ブロックを主体とした灰褐色土との混土層
 4. 灰褐色土を主体とした黒色土ブロックとの混土層
 5. 灰褐色土と黒褐色土ブロックの混土層。黒味がうすれる
- (奥壁から羨道より、0.3mの断面である)

第226図 第14号古墳 石室構築状態断面図



第227図 第15号古墳平面図

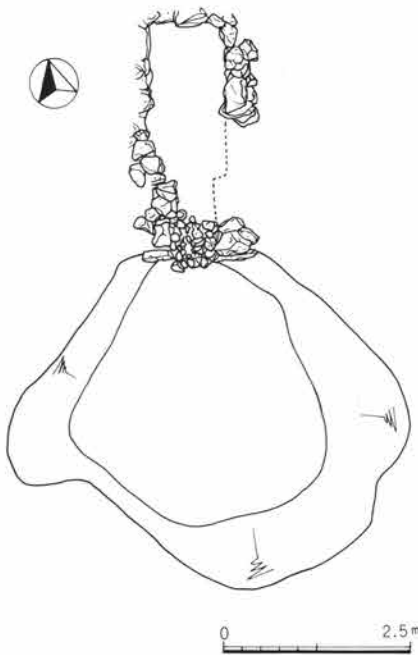
第15号古墳 (第227・229図 P L33)

F-13グリッドに位置する。東へ2mで第7号古墳の西周堀に、西へ6mで第8号古墳の石室に達する。

封土は全て削平されていた。周堀はなく石室開口部前には開口部を底辺として半円形に近い形状の浅い掘り込みがある。最大幅は3.30m、奥行は1.93mである。深さは0.28mで皿状の底面をなす。

内部構造は輝石安山岩の割れ石を石材に用いた袖無型の横穴式石室を模したと考えられる石室である。側壁は、幅20~30cmの割れ石を平積していたが、両壁とも崩壊が著しく2段目まで確認できたのみである。奥壁は2石で構成していた。開口部は偏平な円礫で封じられており、左右には大型石室のそれ同様石積の袖が延びていた。主軸方位はS26°Wである。床面には10~20cmの小礫が敷かれていた。

石室は地表面を掘り下げて堅穴の底面に根石を据えるという方法を採用しており、堅穴の規模は主軸方向で2.20m、横幅で2.1mを測った。



第228図 第17号古墳平面図

第17号古墳 (第228・230図 P L33)

G-17グリッドに位置し、西へ7mで第16号古墳、南へ6mで第7号古墳の周堀に達する。

開口部前に「前庭」状の掘り込みがある。南側に開く扇型を呈しているが、南西隅を中心に攪乱を受けている。

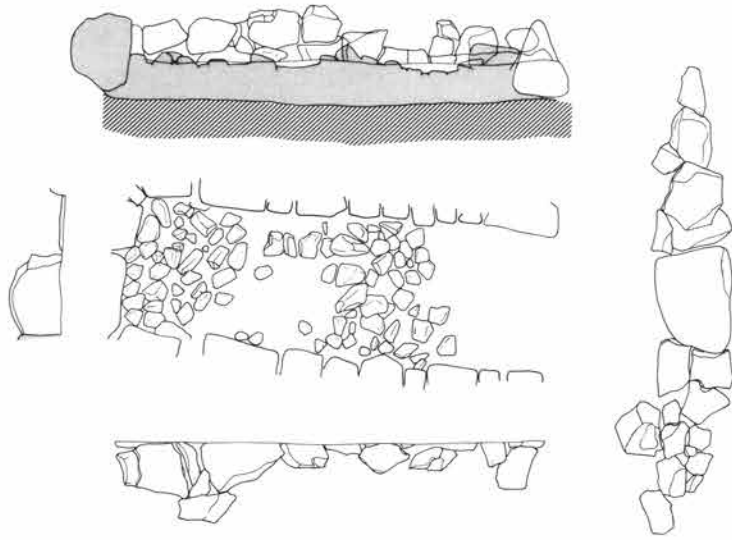
右袖を中心に右側壁は攪乱を受け用石が抜き取られていた。

内部構造は輝石安山岩乱石積の両袖型横穴式石室である。壁の石材は部分的に2段、大部分は根石のみの残存であった。玄室の奥壁は2石を横積に並べている。側壁の根石については最大面を内側に向けて立石されているがその上の段については小口積の方法を取っている。羨道の開口部には長形の整えられた割れ石を置き大型石室と同様に正面感を強調していた。

左袖は高さ55cmの偏平な割れ石を直立させ玄門を意識している。また、床面は第16号古墳同様5~10cmの円礫を含む小礫を敷いていた。

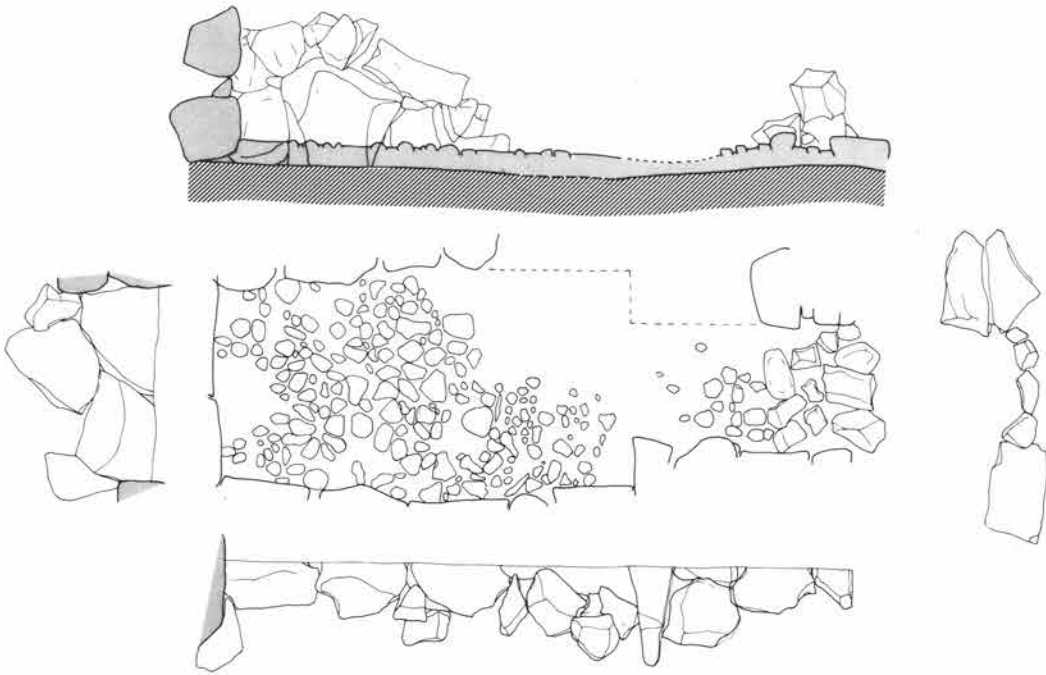
石室の構築状況は堅穴を掘り根石を据えるもので、規模は主軸方向で3.05m、横の幅は1.7~1.75mである。深さは奥壁の外側で0.65mを測る。石材と壁面の間はハードロームとソフトロームの混土層であった。

全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前
264	165	—	112	74	93	—	19	—	101	—	38	—	49



第229図 第15号古墳 石室展開図

0 2 m



第230図 第17号古墳 石室展開図

0 2 m

第16号古墳 (第231・223図 P L 33)



第231図 第16号古墳平面図

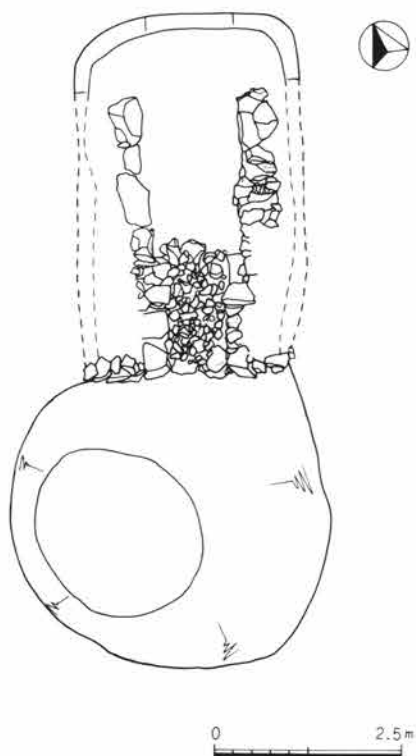
D、E-16グリッドに位置する。南東へ約10mで第15号古墳、東へ7mで第17号古墳に達する。いずれも小型の石室を有する古墳である。

石室開口部前には第15号古墳と同様楕円形を呈した掘り込みがある。規模は最大幅2.2m、奥行1.1m、深さ0.15mと小さく皿状の断面形をなす。

内部構造は輝石安山岩の割れ石を使用した石室で、袖無し型の横穴式石室を模した形態をとっている。奥壁は2石、左右の側壁は各4石で構築されており、割れ石を平積のように直立させている。規模は主軸が1.73m、幅は奥壁よりで0.48m、開口部よりで0.32mである。床石には5～10cmの円礫を混ぜた礫が使用されていた。主軸の方位はS 3°30'Wである。

石室の構築状況は堅穴を掘り根石を立てているが、壁面は用石のすぐ後ろで立ち上がり裏込め等はなかった。堅穴の規模は主軸方向で1.87m、横幅0.95～1.2m、深さ14～16cmである。

第18号古墳 (第232・234図 P L 33)



第232図 第18号古墳平面図

M-12グリッドに位置する。石室開口部から西へ2mで第7号古墳の周堀に、北東へ15mで第6号古墳の開口部に達する。

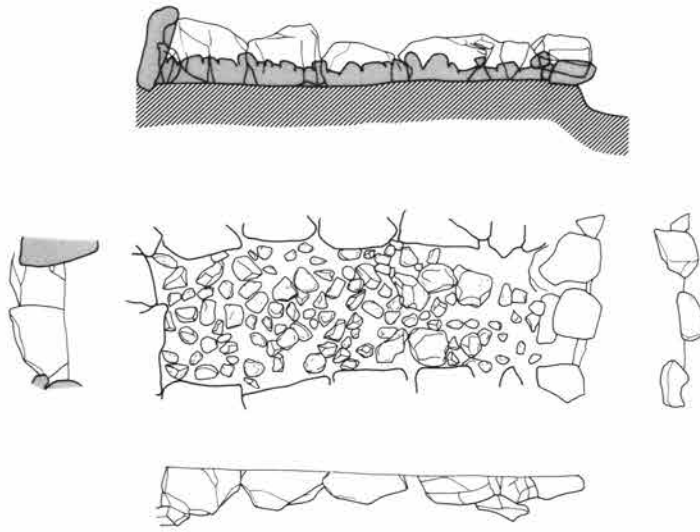
周堀は存在せず、開口部前に「前庭」状の掘り込みがある。これは楕円形を呈しており、中心を左袖側に置いている。規模は最大上幅が3.67m、奥行2.88m、深さ0.3mである。

内部構造は輝石安山岩を使用した両袖型の横穴式石室であるが、攪乱を受け、開口部から3.17m以降、奥壁までの用石を欠失している。玄室の側壁は両壁とも根石が4石ずつ残っていた。幅30～60cmの割れ石である。袖には両袖とも大型のものを据えており、特に左袖は柱状のものを直立させている。羨道の根石は2石であり、隙間には小礫がさし込まれていた。玄室の入口には30×20cm程の割れ石を3個置き框石にしている。床面には厚さ15cm程小礫が敷きつめられており、羨道部分のそれは5cm程厚い。

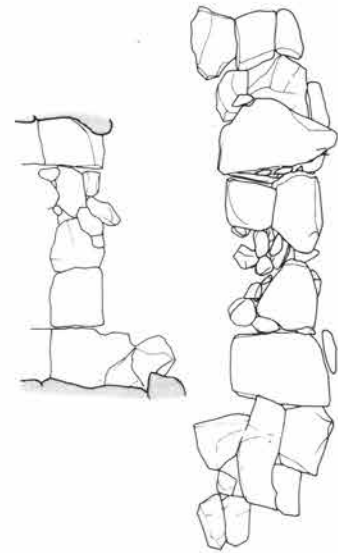
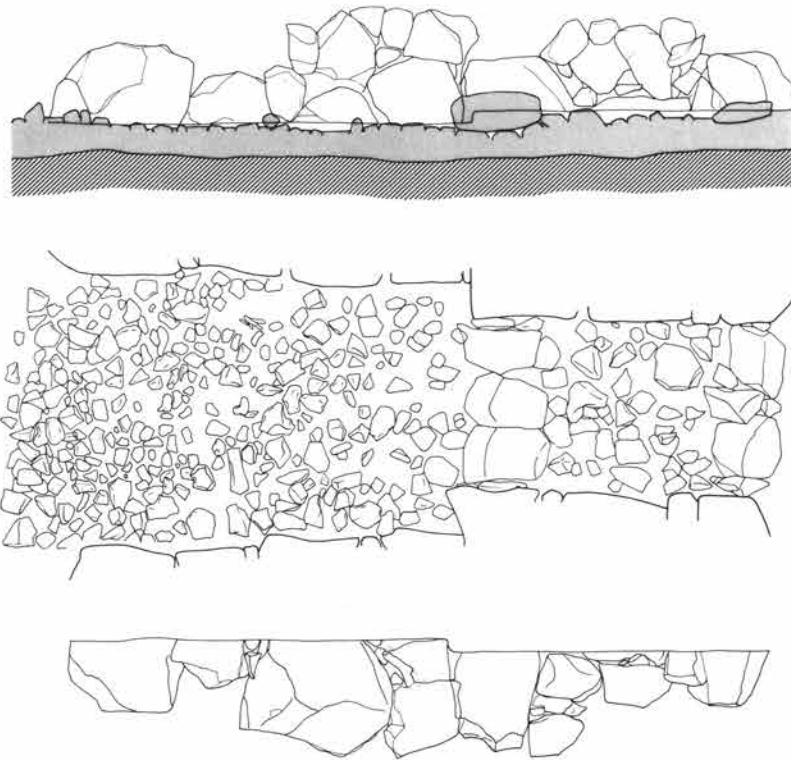
出土遺物は「前庭」状遺構の埋土中から小礫に混じり須恵器の蓋を出土している。(第241図)

石室構築状況は堅穴を掘り根石を置いている。堅穴は隅丸長方形で長軸が3.9m、短軸が玄室部分で2.4m、羨道部分で2.25m。残存高は0.5～0.72m、直立に近い壁面をもっている。

全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖	
	左壁	中	右壁	奥	中	前	左	右	左壁	中	右壁	奥	前	左	右
315	152	183	165	—	111	99	17	15	132	127	128	67	68	86	64



第233図 第16号古墳 石室展開図



第234図 第18号古墳 石室展開図

第19号古墳 (第236図 PL33)

Q-34グリッドに位置する。第13号古墳の東側、斜面途上に構築されている。構築面は第35号住居址の埋土である黒色土層である。

内部構造は破壊が進行しており、奥壁と両側壁の一部が残存していたのみである。奥壁は3石を置いており幅0.75mを計る。左壁は4石の根石と奥壁より2段目が3石残っていた。右壁は根石が6石残っていた。ともに横幅25~30cmの割れ石を用いていた。左壁で1.1m、右壁で1mを測る。

石室の構築状況については地山の関係から検出できなかった。また、石室の前方1.6mから杯を1点出土している。周辺に当該する住居址等がないことから当古墳に付するものと考えられるが「前庭」状の遺構等は検出できなかった。

第20号古墳 (第237図)

T-10グリッドに位置する。第5号溝との重複により左奥北西隅を残すのみであったが、第16、17号古墳等と同規模の石室と考えられる。

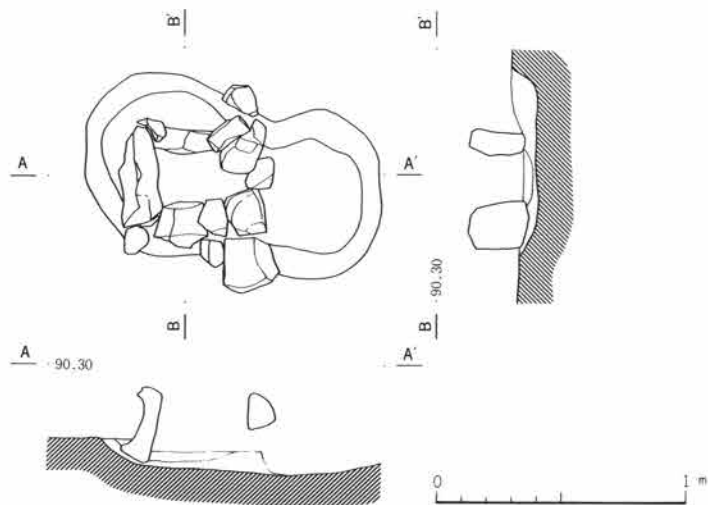
内部構造、左壁は根石が4石残っている。石材の大きさは20×10cmである。上段にはこれよりもやや小さな石材が用いられている。奥壁は1石のみの残存である。残長は側壁が0.66m、奥壁が0.18mである。

石室の構築状況は他と同様に竪穴を掘っており、残長は主軸方向で1.6m、横幅0.7m。残存壁高は0.4mである。石材との間は小礫と暗褐色土が混土状をなしていた。

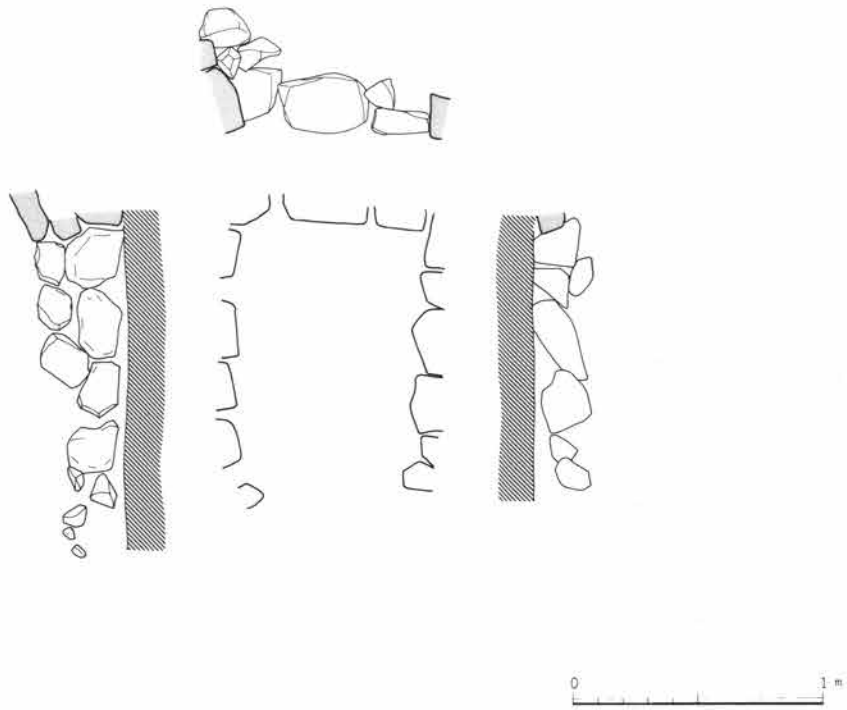
第21号古墳 (第235図)

S-9グリッドに位置する。偏平の石を直立させコの字状の施設を作っている。小さな箱形を呈していたと考えられるが南側は開口部を意識している。また、その左右には小礫が2石ずつ並べ立ててあり、大型石室の開口部左右の石積を模倣しているかのようであった。長軸0.4m、短軸0.19mである。

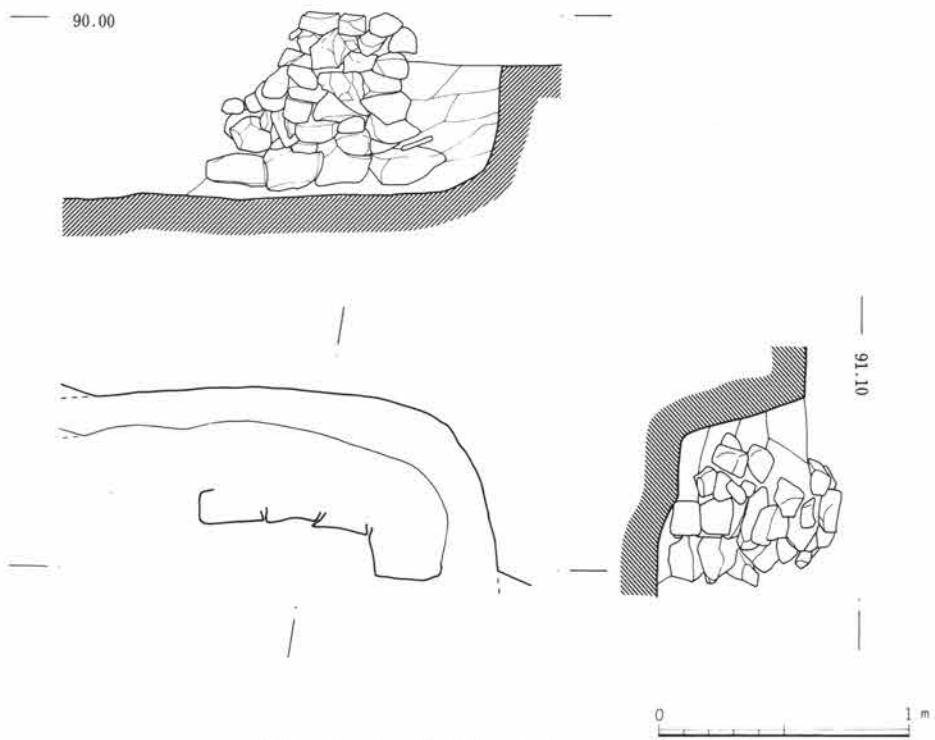
開口部の前には幅0.65m、奥行0.5mの皿状の掘り込みがあり、これも他の古墳の開口部前の施設と共通していた。



第235図 第21号古墳 平面図・石室展開図



第236図 第19号古墳 石室展開図



第237図 第20号古墳 石室展開図

第21表 古墳 石室計測値一覧表

(単位：cm)

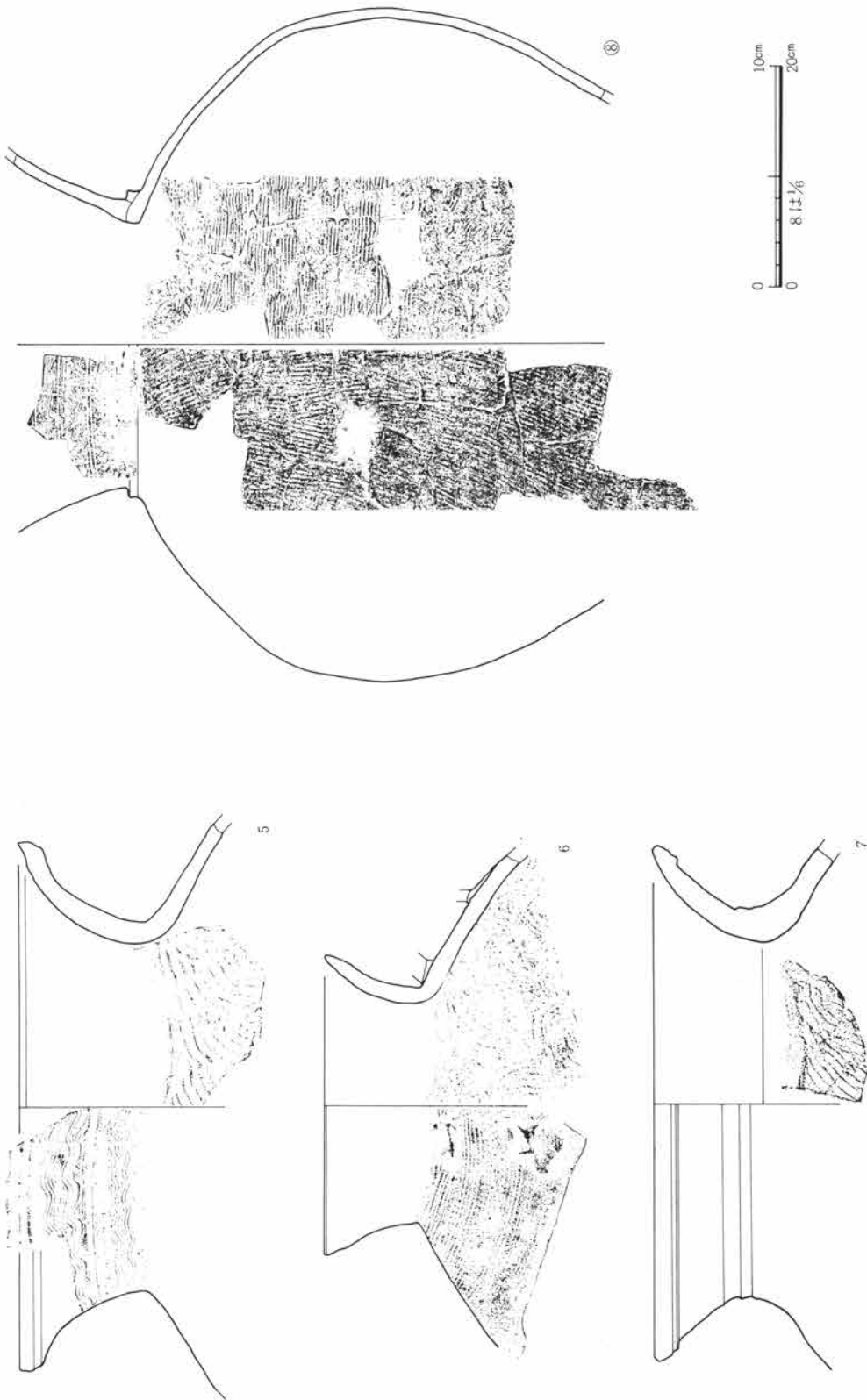
No	全長	玄室長			玄室幅			袖長		羨道長			羨道幅		開口部袖		前庭壁石積		玄室の長さ幅
		左壁	中央	右壁	奥	中央	前	左	右	左壁	中央	右壁	奥	前	左	右	左	右	
1	494	244	247	249	132	147	118	29	24	166	167	171	65	73	—	—			1.68
3	580	346	355	346	157	176	117	(22)	(28)	225	225	(225)	70	76	162	156			2.01
4	557	322	—	(313)	142	159	114	33	—	235	—	(178)	64	66	184	—			2.03
6	495	258	264	265	153	155	120	20	30	235	231	232	75	66	204	252	(100)	(116)	1.66
7	456	273	276	262	162	152	98	—	32	179	180	180	75	70	147	109			1.80
8	426	285	270	284	124	121	110	32	31	156	156	153	56	68	117	151			2.23
9	431	(238)	244	245	155	159	146	43	32	184	186	178	69	70	109	126			1.53
11	431	245	252	247	121	134	100	19	17	186	200	179	65	69	211	154	186	154	1.88
12	417	245	240	255	148	165	132	30	36	180		162	68	77	185	135	143	232	1.51
13	533	284	295	312	120	170	156	22	26	253	238	236	71	82	186	165			1.81
14	494	285	292	288	130	140	113	33	26	197	202	202	57	57	147	122	(45)	(30)	2.08
15	168	—	168	—	53	54	54								77	73			3.11
16	175	—	175	—	50	49	47												3.57
17	264	165	—	(112)	74	93	—	19	—	101	—	38	—	49					1.48
18	(315)	(152)	(183)	(165)	—	111	99	17	15	132	127	128	67	68	86	64			—
19	(131)	(131)	—	(101)	74	71	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			—
20	(63)	(63)	—	—	(15)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			—
21	50				—	24	—												—



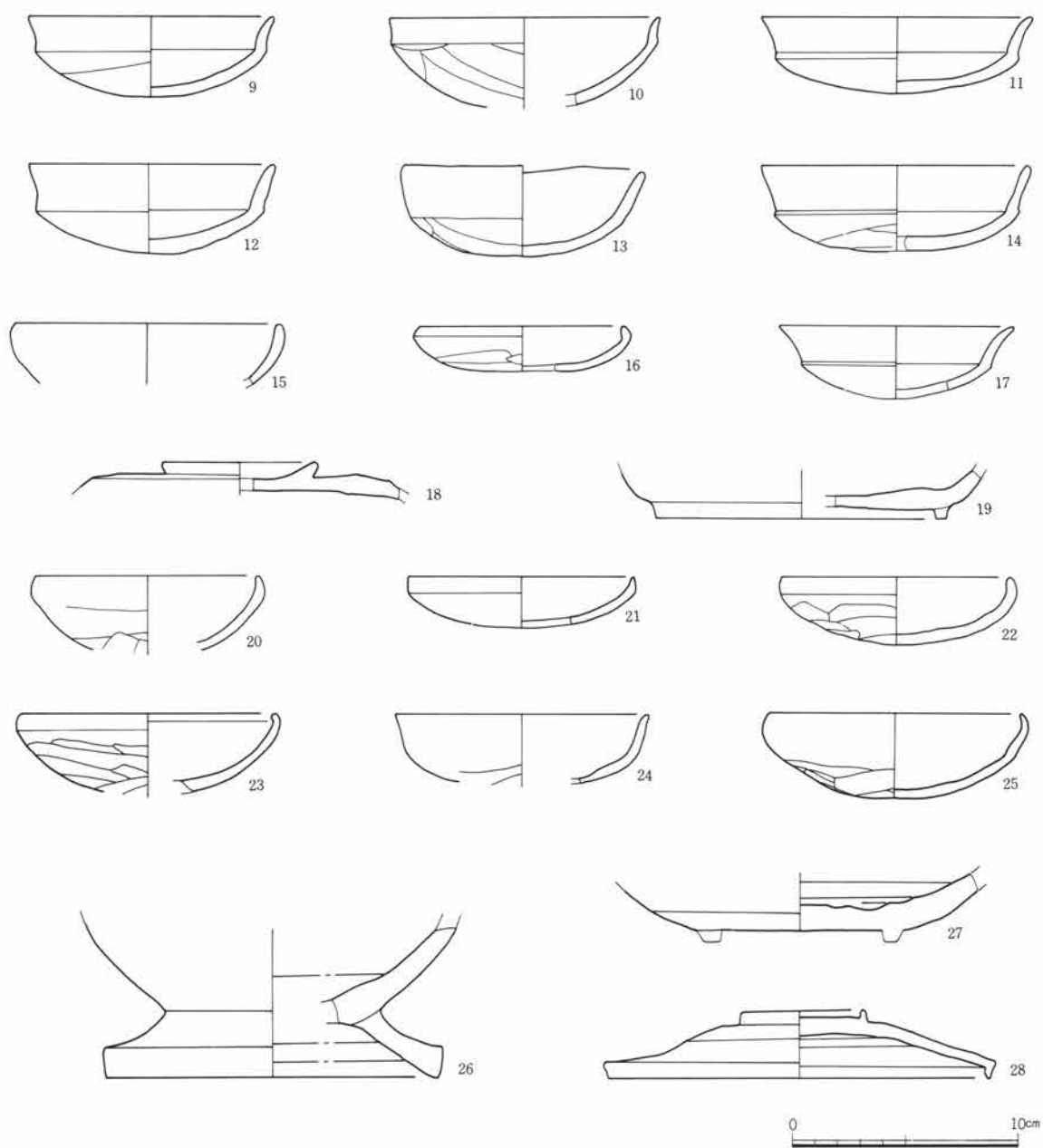
第238図 古墳 位置図



第239図 古墳 出土遺物(1)



第240図 古墳 出土遺物(2)



第241図 古墳 出土遺物(3)

第22表 古墳 出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	甕形	口 (25.7) 高 (7.4)	白色砂粒・黒色鉱物を含む 灰白色 硬調	口縁部は外反しながら短く上外方にのび、先端で少し下方に屈曲し強い凹凸を成して垂直にのびる	内外面ともにロクロ回転によるナデ	須恵器 第2号墳前庭出土 破片
2	甕形	口 (25.8) 高 (10.8)	白色砂粒を多く含む 暗灰色 硬調	口縁部は外反ぎみに上外方にのびる	外 口縁部、ロクロ回転によるナデ、胴部、格子目状アテ目 内 口縁部ロクロ回転によるナデ、胴部 青海波アテ目	須恵器 第2号墳北周堀出 破片
3	甕形	口 (18.3) 高 (3.3)	砂粒を多く含む 灰白色 一部黄味を帯る 硬調	口縁部は短く、直線的に外反する。胴部は肩の張りが弱い	外 口縁部、ロクロ回転によるナデ、胴部 格子目状タタキ 内 口縁部、ロクロ回転によるナデ、胴部、 青海波アテ目、下部ナデ	須恵器 第2号墳前庭出土 残存率1/2
4	甕形	口 (24.6) 胴 (48.6) 高 (45.0)	砂粒を多く含む 灰白色 硬調	口縁部は短い、大きく外反、先端は折り返される。肩部が張る。焼きゆがみがある	外 口縁部ロクロ回転によるナデ、胴部 タタキ後、カキ目 内 胴部青海波アテ目	須恵器 第2号墳前庭出土 底部に焼成後の穿孔あり
5	甕形	口 (24.3) 高 (9.3)	白色鉱物を多量に含む、内部は赤褐色味帯る 暗灰色 硬調	口縁部は外反ぎみに上外方にのびる。先端はつままれて尖る	外 口縁部2段の波状文、胴部タタキ目。 内 口縁部上半にロクロ回転によるナデ、 下半は指頭によるナデ、胴部青海波アテ目、 ロクロ右回転	須恵器 第3号墳出土 破片
6	甕形	口 (13.7) 高 (9.0)	白色砂粒を多く含む うすい暗灰色 硬調	口縁部は短く直立ぎみに立ち上がる。先端は丸い。肩部に把手がつく	外 口縁部ロクロ回転によるナデ。胴部 カキ目状の横線 内 胴部青海波アテ目	須恵器 第3号墳出土 破片 ロクロ右回転
7	甕形	口 (23.6) 高 (8.3)	白色砂粒を含む 暗灰色 硬調	口縁部は短くやや外方に立ち上がる。先端は丸い。	外 ロクロ使用のナデ 内 胴部青海波アテ目	須恵器、破片 第6号墳前庭出土 自然釉がかかる
8	甕形	胴 (61.2) 高 (54.6)	砂粒をやや含む 黒味の強い暗灰色 やや硬調	口縁部は直線的に外上方にのびる。頸部に凸帯を付す。胴部は球状を呈し最大径を中位にもつ	外 口縁部2段の波状文。胴部縦方向の タタキ目 内 口縁部ナデ。胴部上半、横方向の タタキ目。下半、青海波アテ目	須恵器 第6号墳北側周堀 出土 残存率1/2
9	杯形	口 (10.7) 高 (3.5)	砂粒をやや含む 明褐色 軟調	底部が深く、口縁の高さを上回る。口縁部の先端は尖る	外 口縁部ヨコナデ、底部一方向からの ケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ナデ	土師器 第4号墳出土 破片
10	杯形	口 (11.9) 高 (4.0)	細砂粒を含む 明褐色 軟調	丸味のある底部に短い口縁が接続する	外 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部丁寧なナデ	土師器 第4号墳出土 破片
11	杯形	口 (12.9) 高 (3.3)	細砂粒を含む 明褐色 軟調	口縁部は大きく外反し先端は尖る。底部は浅い	外 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ナデ	土師器 第4号墳出土 破片
12	杯形	口 10.9 高 3.9	細砂粒を含む 明褐色	口縁部と底部の間の稜は不明瞭。口縁先端は丸い	外 口縁部ヨコナデ、底部不定方向への ヘラケズリ 内 底部ナデ	土師器 第4号墳 出土歪んでいる
13	杯形	口 10.7 高 4.0	砂粒を多く含む 灰白色 軟調	口縁部はやや内彎して立ち上がる	外 口縁部ヨコナデ、底部不定方向への ヘラケズリ 内 底部ナデ	土師器 第4号墳 出土歪んでいる

第2章 検出された遺構と出土遺物

No	器種	法量(cm)	胎土・色調・焼成	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
14	杯形	口高 (12.0) (3.7)	砂粒を含む 明褐色 軟調	全体に器肉が厚い。口縁部先端は丸味がある	外 口縁部ヨコナデ、底部中央部は一方からのヘラケズリ、その後周辺部にケズリ	土師器 第4号墳出土 残存率1/2
15	杯形	口高 (12.2) (2.6)	輝石を多く含む 明褐色 軟調	先端は器肉が厚くなり丸味を帯びる	外 口縁部先端ヨコナデ、他はケズリ 内 ヨコナデ	土師器 第3号墳 出土 破片
16	杯形	口高 (9.0) (2.0)	砂粒を含む 明褐色 軟調	口縁部の先端はつままれて内彎する	外 口縁部先端ヨコナデ、底部ヘラケズリ。 内 ヨコナデ	土師器 第6号墳 出土 破片
17	杯形	口高 (10.4) (3.2)	砂粒を多く含む 明褐色 軟調	口縁部は底部との間に弱い稜をもった後、強く外反	外 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ナデ	土師器 第7号墳 出土 破片
18	蓋形	口高 (14.1) (1.6)	黒色鉱物粒を多く含む 灰白色 硬調	天井部は平らで外部中央にリング状のつまみを付す	外 天井部にロクロ使用によるヘラケズリ	須恵器 第7号墳前庭出土 ロクロ右回転
19	杯形	底高 (12.8) (1.9)	白色鉱物粒を含む 暗灰色 硬調	底部端よりやや内側に高台を付す。端部は凹面を有する	外 ロクロ使用によるナデ 内 底部指頭によるナデ	須恵器 第7号墳出土 ロクロ右回転
20	杯形	口高 (9.9) (3.3)	細砂粒を含む 明褐色 軟調	口縁先端はやや内彎する。底部は深く丸味を有する	外 口縁部先端ヨコナデ、底部ヘラケズリ。 内 丁寧なナデ	土師器 第12号墳 前庭出土 破片
21	杯形	口高 (10.0) (2.1)	石英、長石を含む 明褐色 軟調	口縁部の先端は尖りやや内彎する	外 口縁部先端ヨコナデ、底部ヘラケズリ。 内 ヨコナデ	土師器 第14号墳 前庭出土 破片
22	杯形	口高 (10.1) (3.0)	細砂粒を含む にぶい橙色 軟調	口縁部は先端が厚く丸い内彎ぎみに立ち上がる	外 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内 口縁部ヨコナデ、底部ナデ	土師器 第19号墳 前庭付近出土
23	杯形	口高 (11.2) (3.4)	輝石を多く含む にぶい橙色 軟調	口縁部は短く内彎する	外 口縁部ヨコナデ、底部上半はヨコ方向のナデ。 内 ヨコナデ	土師器 第12号墳 前庭出土 破片
24	杯形	口高 (11.1) (3.0)	砂粒を多く含む 明褐色 軟調	口縁部はゆるやかに立ち上がり、先端はやや尖る	外 口縁部の先端から中、1.2cm程までをヨコナデ、その下はヨコ方向のナデ 底面はヘラケズリ 内 ナデ	土師器 第12号墳前庭出土 破片
25	杯形	口高 (11.2) (3.7)	砂粒を多く含む 明褐色 軟調	底部は深く、口縁部は短く内彎する	外 口縁部は幅5~6mmをヨコナデ、それより下はナデと不定方向のヘラケズリ 内 上半部ヨコナデ、下半部ナデ	土師器 第12号墳前庭出土
26	長頸壺形	底高 (14.7) (6.5)	黒色鉱物をやや含む 灰白色 硬調	高台はハの字型。体部は丸味をもっている	マキアゲ、ミズヒキ成形。内外面ともロクロ使用によるナデ	須恵器 第17号墳出土 ロクロ右回転
27	長頸壺形	高 (2.5)	白色砂粒を含む 暗灰色 硬調	底部のみ残存。高台は剥落しているが、面は平ら	外面はロクロ使用によるヘラケズリ。底部を胴下半部を接合した時に底部内面に指頭による凹凸を残す	須恵器 第12号墳出土 ロクロ右回転
28	蓋形	口高 (17.0) (3.0)	黒色、白色の砂粒を含む 灰白色 硬調	口縁の先端部は内側に折れ曲がっており鋭い。天井部外面の中央にリング状のつまみを付す。焼きゆがみあり	マキアゲ、ミズヒキ成形。天井部の外面はロクロ使用によるヘラケズリ	須恵器 第18号墳出土 ロクロ左回転

古墳出土の鉄製品 (第242～245図 P L65・66)

1は第2号古墳出土の鉄地銀象嵌の鏝である。錆化膨脹等により遺存状態は極めて悪く2片になる直前であった。倒卵形で6つの梯形窓を有する。長幅7.8cm、短幅6.5cm、厚さは5mmを測る。

遺物整理時に錆の除去をおこなったところ象嵌の一部を確認した。象嵌の文様や施されている範囲を把握するために群馬県工業試験場に依頼しX線透析を実施した。そして、透過写真をもとに当事業団保存処理室で錆落しをした。

象嵌は鏝の表裏と縁の全面に施されていたと思われる。面の部分は窓と外縁の間と窓の間に1～2mmの間隔で径5～6mmの渦巻形の文様がある。この渦巻は最後を窓側に向けて終わっている。穴と窓の間の象嵌の有無については残存状態からは判断をすることはできない。側面上には両縁を弦に弧を背中合わせにした径2mmのC字状の文様が、交互に規則的に施されていた。

2は第1号古墳の出土である。刀子の茎端部と考えられるが破片であり詳細は不明。残長5.5cm、幅0.8cmである。木質が錆着していた。

3は第5号古墳の出土の刀子である。刃部の大部分を欠損する。現存長6.0cm。茎部長5.2cmを測る。刃関は錆のため明瞭でないが逆「へ」の字型に切り込み茎部へと続いている。

4は第2号古墳出土。切先部を欠損する刀子である。現存長9.4cm、茎部長5.6cm、厚さ3.5mm。区は弱い段がつく。刃関部は幅1.7cm、逆「へ」の字型に切れ込む。背は平棟で厚さ4mmである。

5は第2号古墳出土の楔である。全長5.7cm、頭部の幅3.2cm、厚さ3.8cmである。頭部は使用により反りがでている。刃部の幅は2.8cm、先端はつぶれて丸味をもっている。現在の重量は192g。

6～10は第3号古墳の出土であるが用途が不明のものである。

6、7はコの字状を呈しており、6は完形である。最長13.4cm、幅6～7mm、厚さ3mmを測る。両先端は尖っており、図の左側の2.8cmと右側の2.5cmには木目が直交するように残っていた。また、上端の外縁には敲打痕があった。7は最長11.1cm、幅6mm、厚さ3mmを測る。両軸とも先端は欠損している。6と同様上端に敲打痕がある。8は両端を欠損し棒状を呈しているが幅6mm、厚さ3mmと7に類似する。残長6.7cmを測る。

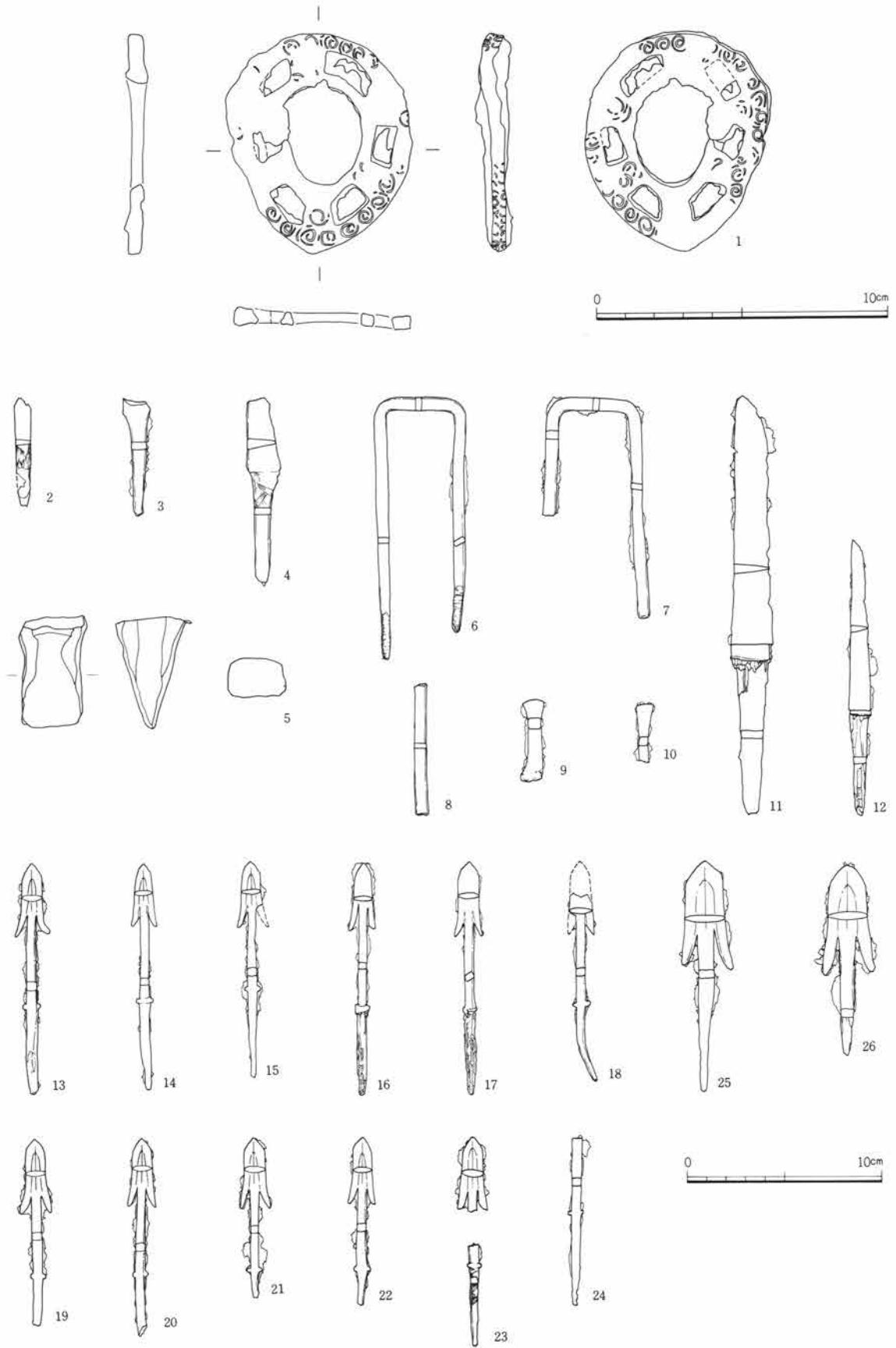
9は破片である。両端の幅がやや広がっている。残長4.2cm、幅7～12mm、厚さ6mmである。10も破片である。残長3.0cm、幅4～9mm、厚さ5mmである。

11は刀子で、茎端をわずかに欠損する。全長21.1cm、刃部長12.6cm、茎部長8.5cmである。刃関部の幅2.1cmである。背は平棟で厚さ4mmである。区や刃関については緑金具が残存しているため不明瞭であるが、2～3mmの段がある。茎部に木質が錆着する。

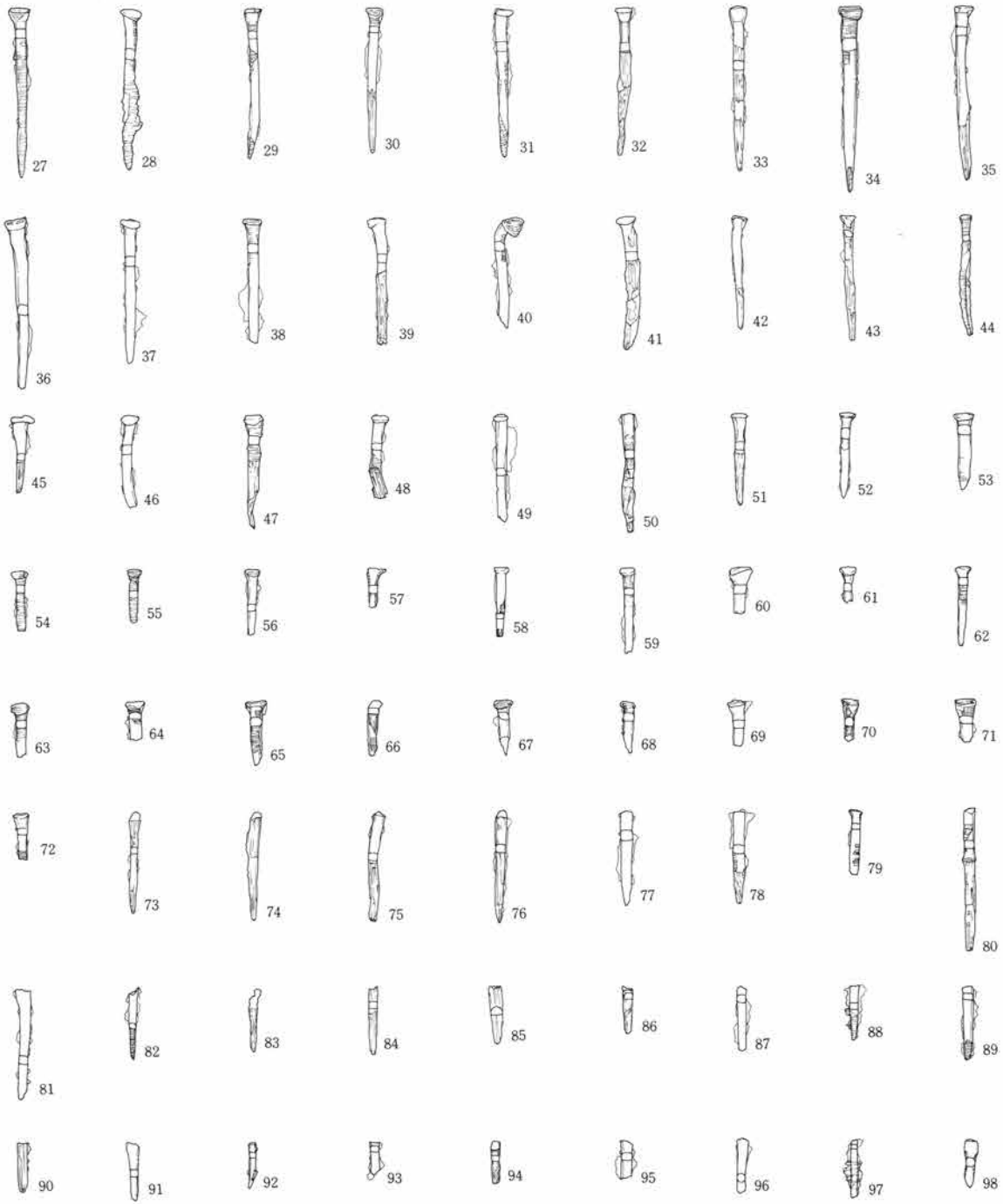
12も刀子である。完形品で全長13.8cm。刃部長8.6cm、茎部長5.2cmである。刃関部の幅1.1cm、背は平部に木質が錆着する。銀装の緑金具である。

13～26は第3号古墳出土の鉄鏃である。13～24までは有茎腸袂式である。14・16・17は完形品、24は茎部のみを残す。断面は矩形を呈している。15は腸袂の片側を欠く。18は鋒の先端を、13・19～22は茎端部を欠損する。個々については次表の示すとおりである。25・26は有茎腸袂式であり、鋒は幅が広い。25は、腸袂の端を欠損するがほぼ完形である。全長は11.7cm。鋒はあまり「ふくら」は無く偏平な断面形を呈す。幅2.1cm、厚さ3mm。茎部の長さは8.2cm、幅8mm、厚さ4mmである。13等に比して茎部の長さが短い。26は茎端部を欠損する。残長9.7cm、鋒の幅2.0cm、厚さ4mm、茎部の長さ5.9cm、幅6.5cm、厚さ4mmである。

第243図の鉄製品は第3号古墳の玄室床面から出土したものである。全て鉄釘と考えられ72点を数えたが細



第242図 古墳 出土遺物(4)



第243図 古墳 出土遺物(5)



片が多く実際の個体数は不明である。好例である27と35について説明する。他については表のとおりである。27は全長8.4cm、頭部は敲打により変形している。断面は長辺7mm、短辺5mmの矩形を呈する。表面には頭部端に至るまでの全面に長軸と直交する方向に木目状の錆の沈着が認められる。現状で10gを計る。35は全長7.2cm、幅5mmである。先端の3.2cmには長軸と同じ方向の木目で木質が錆着している。現状で5g。

第244図の99～108は第9号古墳出土の鉄鏃である。残存状態が極めて悪く正確な個体数は不明である。

第2章 検出された遺構と出土遺物

第23表 第3号古墳 出土鉄鏃計測値一覧表

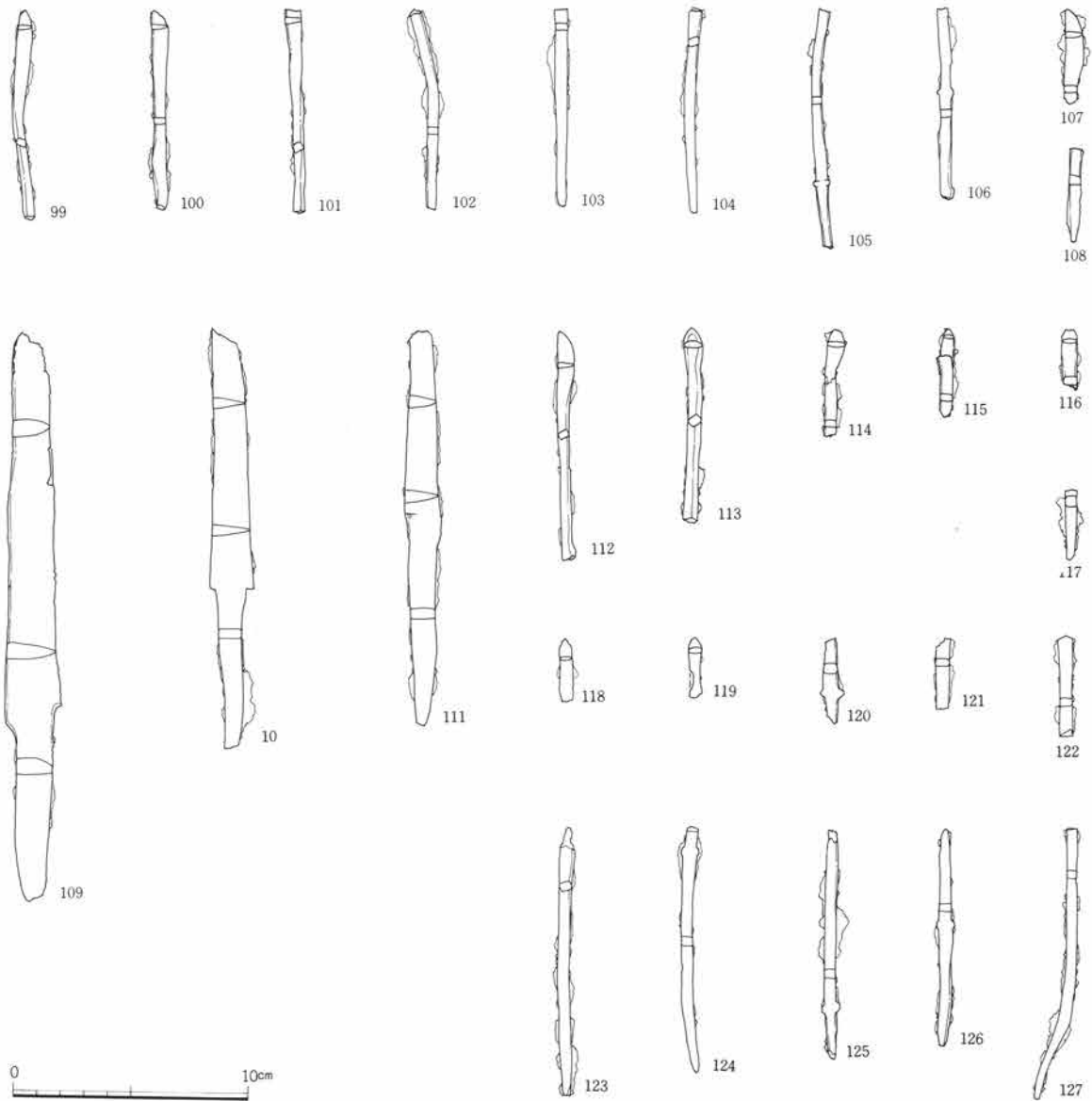
(単位：mm)

No	全長	鏃身部				鏃部			基部	No	全長	鏃身部				鏃部			基部
		長	最大幅	身幅	厚さ	長	幅	厚さ				長	長	最大幅	身幅	厚さ	長	幅	
13	117	37	19	11	3	41	5	4.5	41	19	(95)	38	17	11	3	40	5	4	25
14	115	32	13	10	2	44	5	4	45	20	(100)	36	14	10	2.5	42	5	4	(30)
15	110	33	16	10	25	38	5	4	49	21	82	36	15	11	3	39	4	4	14
16	117	34	14	10	3	50	4	3.5	41	22	84	34	14	11	2.5	40	5	4	12
17	119	37	15	10	3	43	5	4	43	23	—	37	15	10	4	—	5	4	41
18	94	(21)	(12)	10	3	39	5	4	38	24	—	—	—	—	—	—	5	4	41

第24表 第3号古墳 鉄釘計測値一覧表

板目痕のヨは横方向、タは縦方向を表わす (単位：mm)

No	長	幅	厚さ	板目痕	No	長	幅	厚さ	板目痕	No	長	幅	厚さ	板目痕	No	長	幅	厚さ	板目痕
27	76	6	4	ヨ	45	(36)	4	3.5		63	(24)	5	4	ヨ	81	(49)	4	4	
28	72	4	5	ヨ	46	(42)	5	4.5		64	(17)	5.5	2.5	ヨ	82	(32)	2	2	ヨ
29	68	4	4	ヨ	47	(52)	5	5	ヨ・タ	65	(28)	5	4	ヨ	83	(28)	4	3	タ
30	65	4	3	ヨ・タ	48	(38)	4	3	タ	66	(24)	4.5	2.5	ヨ・タ	84	(30)	4	3	タ
31	67	5	4.5	ヨ	49	(49)	5	4		67	(25)	4	3		85	(25)	6	4	タ
32	67	4	4.5	ヨ・タ	50	(53)	4	4	ヨ・タ	68	(25)	4	3.5	ヨ・タ	86	(22)	3.5	3	ヨ
33	75	5	4		51	41	4	3	ヨ・タ	69	(21)	5	4	ヨ	87	(29)	3.5	3.5	
34	84	7	6	ヨ	52	40	4	5	ヨ	70	(18)	4	4	ヨ	88	(25)	4	3	
35	79	5	4	タ	53	34	5	4	ヨ	71	(20)	6	3.5		89	(33)	5	3	ヨ
36	77	5	5		54	(27)	4	4	ヨ	72	(21)	5	3.5	ヨ	90	(22)	5	5	ヨ
37	66	4.5	4		55	(25)	4	3.5	ヨ	73	(46)	3	3	タ	91	(26)	3	3	タ
38	(56)	6	4	ヨ	56	(31)	4	4		74	(49)	5	5	タ	92	(22)	3	3	タ
39	(58)	4.5	4	タ	57	(17)	4	4	ヨ	75	(50)	4	3	タ	93	(15)	3.5	2	
40	(50)	4.5	4	ヨ	58	(32)	3.5	2	ヨ	76	(50)	4	3.5	タ	94	(19)	3	2.5	ヨ・タ
41	61	6	5	タ	59	(38)	4	3.5	ヨ	77	(43)	5.5	5		95	(17)	5	4	
42	52	4	4	ヨ・タ	60	(21)	6	5.5		78	(41)	5	4	ヨ・タ	96	(25)	4	3.5	
43	57	3	3	ヨ・タ	61	(16)	3	4		79	(30)	4	3	ヨ	97	(27)	2.5	2	ヨ
44	55	3	3	ヨ	62	35	4	3	ヨ	80	64	4.5	4	ヨ・タ	98	(21)	4	4.5	ヨ



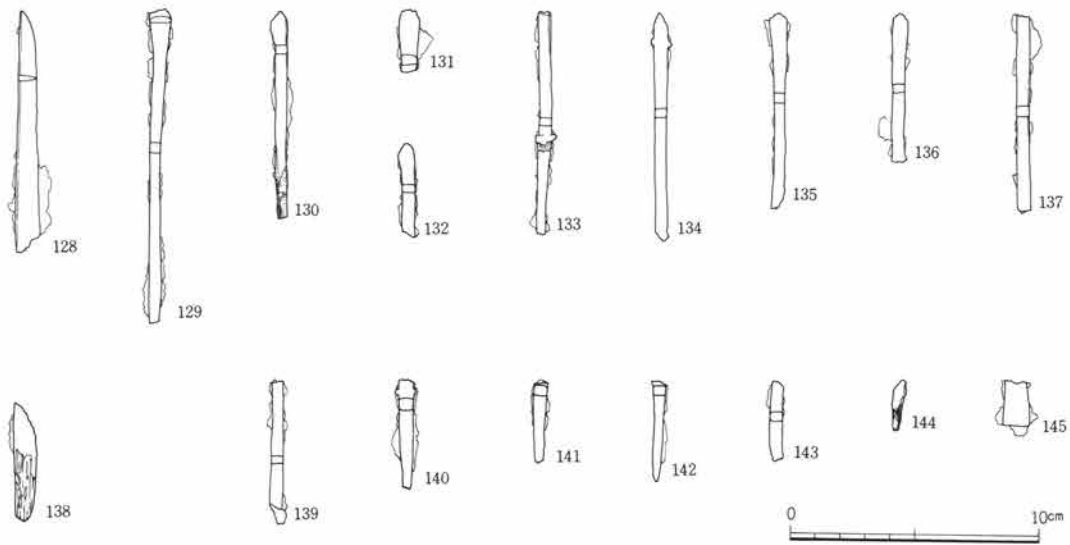
第244図 古墳 出土遺物(6)

99~101・107は関無片刃箭式又は端刃箭式にあつたと考えられる。99は残長8.8cm、刃の幅は6mm、背の厚さは2mmである。107は先端のみの残存で刃の部分が99・100に比して8mmとやや広い。105・106は篋被と茎の部分である。断面は幅4mm、厚さ3mmの偏平な矩形を呈する。

109は第11号古墳出土の完形品の刀子である。全長23.8cm。刃部長15.6cm、茎部長8.2cm。刃関の幅は2.3cm、背は平棟で厚さ6mmを測る。区には6mm、関には4mmの段がつく。茎部は関側が尖った断面形を呈し、縁金具の一部と木質が錆着している。

110・111は第12号古墳出土の刀子である。110は鋒を欠損するがほぼ完形である。残長17.7cm、刃部長10.9cm、茎部長6.8cm。刃関の幅1.7cm、背は平棟で厚さ5mmを測る。区、関とも2mmの明瞭な段がつく。111は刃部先端を欠損する。残長16.5cm、茎部長8.7cm。刃関の幅は1.5cm、背は平棟で厚さ5mm。区、関とも段は不明瞭。茎部には縁金具の装着痕、木質の錆着があつた。

第244図112~127は第12号古墳出土の鉄鏃である。112は関無片刃箭式で、残長9.7cm、刃の幅5mm、厚さ2



第245図 古墳 出土遺物(7)

mmである。113・119は関無片丸造棘筥被鑿箭式の鋒部である。113は残長8.2cm、鋒部幅8mm、厚さ2.5mmを測る。119は幅6mm、厚さ2.5mm。113より細みで筥被への移行部も不明瞭である。筥被は矩形の断面を呈す。114は幅8mm、厚さ2mmを測る。115～118も同様で鋒の幅は狭い。120～122は筥被又は茎部の破片と思われる。123～127は茎部である。123は残長11.2cm、幅4mm、厚さ3mmで偏平な矩形を呈する。

第245図128と138は第14号古墳出土の刀子の破片である。同一個々の判定は困難である。128は刃部で残長9.6cm。背は薄い平棟で厚さ2mm。138は茎端部である。残長4.6cm、幅10mm、厚さ2mmを測る。木質の錆着がある。

129～137、139～144は第14号古墳出土の鉄鏃の破片である。129～132・136は鋒で関無の鑿箭式に属すると考えられる。129は鋒の先端を欠損しているが片丸造である。残長12.2cm、幅9mm、厚さ2mmを測る。茎部はやや偏平な厚さ3mmの断面形を呈している。131は129と同様である。130・132・136は鋒の幅が1より狭く6mmである。錆化が進行しており、両丸、片丸の判定は困難である。130の残長が8.2cm、136は5.9cmである。133～135・139～144はいずれも茎部と思われる。端部は尖痕である。133は残長8.2cmで棘筥被の部分が残っていた。

145は用途不明品である。破片で残長1.7mm、幅1.1cm、厚さ3mmであった。

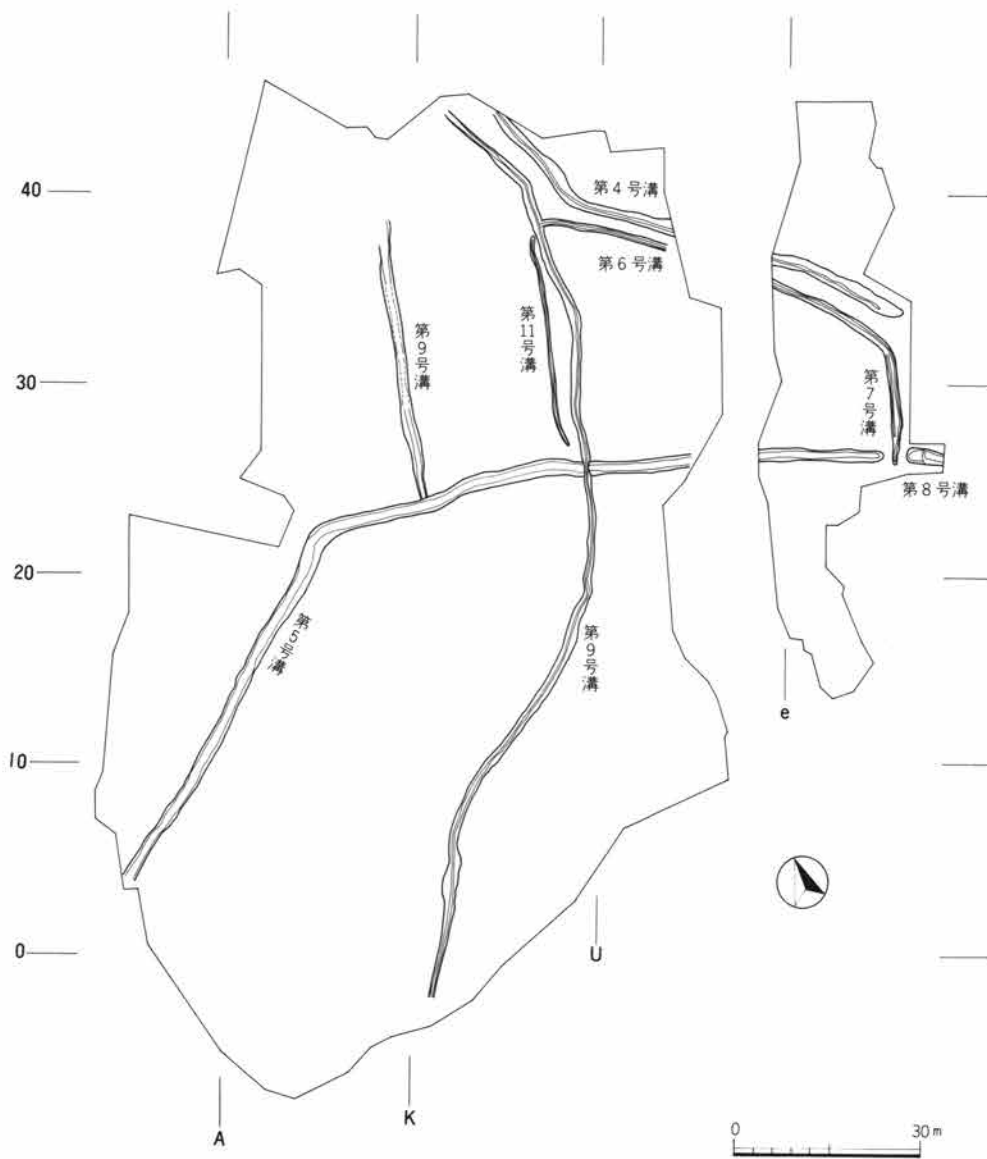
第6節 溝と出土遺物

第1号溝・第2号溝 (第247図 P L34)

F-57グリッドを中心に位置する。支線602号道路と支線607号排水路部分で検出された。重複関係にあり、第1号溝が新しい。走向はほぼ平行しているが、残存壁高は1号が44cm、2号が26cmである。埋土中から古式土師器の破片が出土したが、掘削の時期は不明である。第12号溝が東側に位置している。

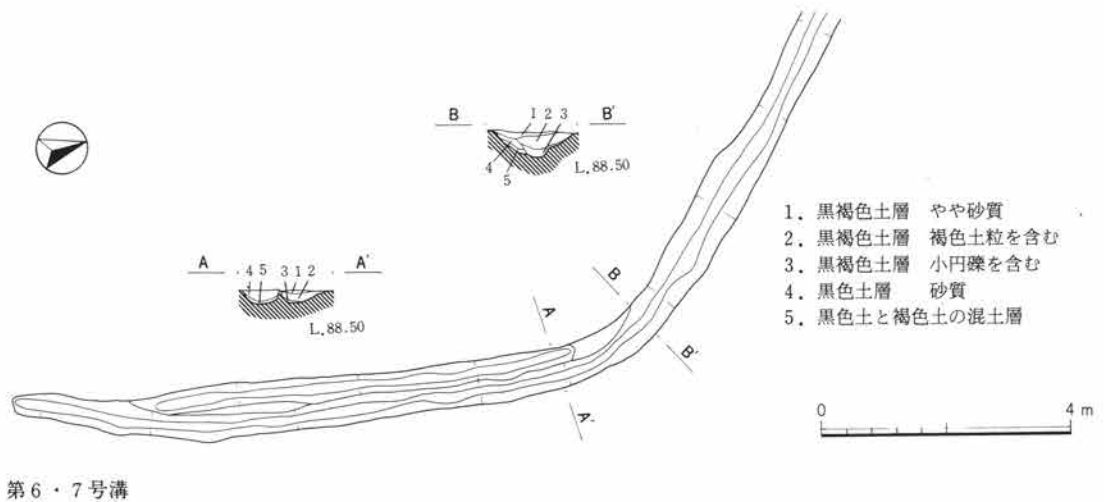
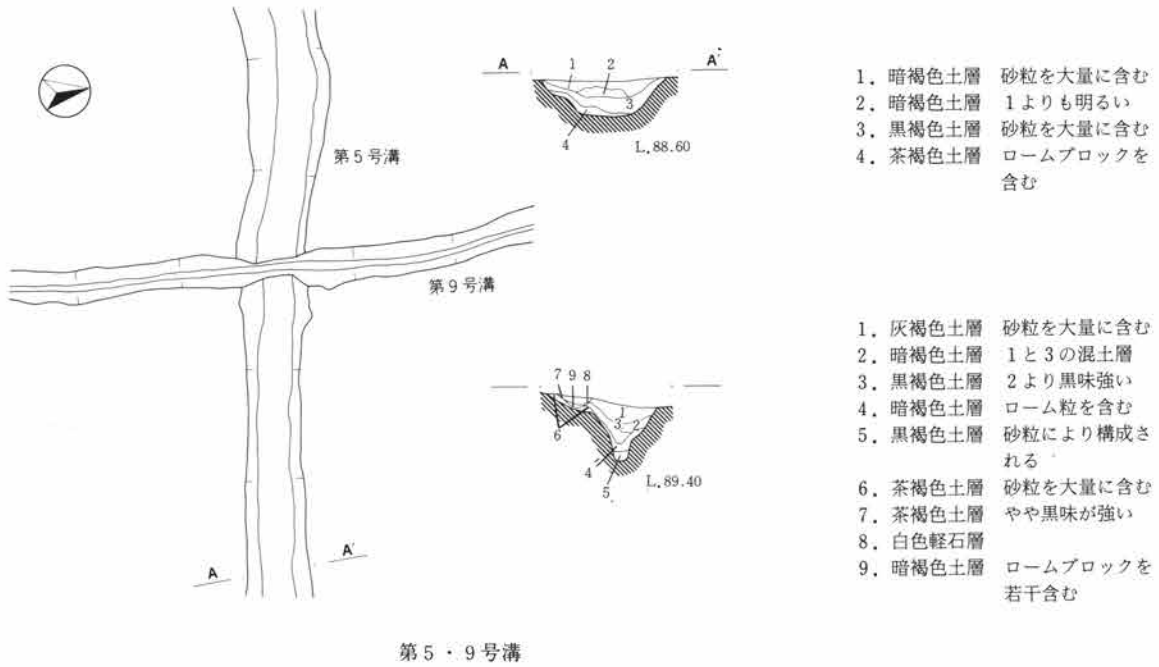
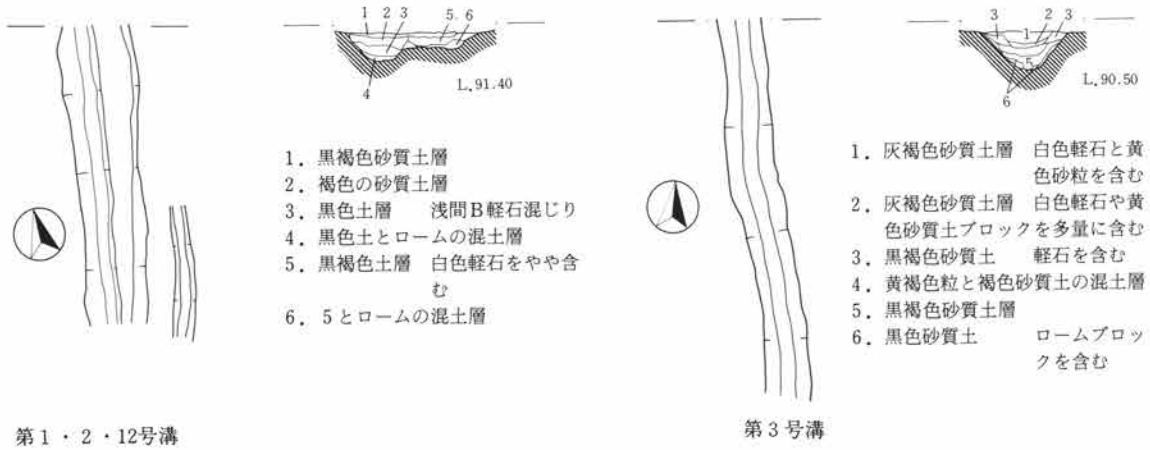
第3号溝 (第247図 P L34)

M-57グリッドを中心に位置する。上端の幅1.38m、下端0.38mを測り、立ち上がりは緩やかな斜面である。走向はN10°30'Wで第4号溝と同一の遺構と思われる。時期不明。



第246図 溝 位置図

第2章 検出された遺構と出土遺物



第247図 溝 平面図・断面図

第4号溝 (第246図 PL34)

P-42グリッド付近では台地に縁辺を等高線に沿って走り、第31号住居址と重複する地点で走向を東に変えK-34グリッドに達している。東端は遺構が完結するのか削平を受けたのかの判断はできなかった。

第5号溝 (第246図 PL34)

西端はU-3グリッドに認められた。走向はN47°Eで、途中、第20号古墳等の遺構と重複しこれらを破壊している。G-22グリッド、第2号方形周溝墓の東側周溝と重複する地点で東に走向を変え台地斜面を下っている。第9号溝より新しく、第10号溝より古いが時期は不明である。U-3グリッドでは箱形の断面形を呈し、上端の幅2.1m、下端1.2mである。水の流れた痕跡はなかった。

第6号溝・第7号溝 (第246図)

第4号溝と併行するように東走り、j-32グリッドで南に向きを変え、第5号溝と第7号溝の間に至っている。南に走向する部分で2本に分離しているが、埋土の堆積状況から第7号溝を掘り返して第6号溝が掘削したものと考えられる。北端、第10号溝との新旧関係も不明である。

第8号溝 (第246図)

第5号溝の東側に走向をほぼ同じくして一部分を検出した。東端は削平を受けて消滅していた。上端の幅2.2m、下端1.8mである。

第9号溝 (第246図)

K-23グリッドからI-38グリッドに達している。南端は第5号溝によって切られている。走向はN8°30'Eである。第12号・第13号古墳の周溝と重複するが新旧関係は不明である。逆台形の断面形を呈しており、底面には黒褐色土が踏み固められたように付着していた。時期不明。

第10号溝 (第246図)

台地の縁辺を地形に則して巡っている。古墳の墳丘裾部を走っており、掘削時には墳丘が残存していたと考えられる。断面形は矢研状を呈し、立ち上がりの下部に稜をもつ。残存壁高は1~1.2m前後を測る。埋土中から開元通宝(966~)を出土している。

第11号溝 (第246図)

第10号溝の西側をS-26グリッドからQ-37グリッドにかけて掘削されている。北端は第10号溝と重複している。埋土中に浅間B軽石の薄い純層が堆積していた。また、埋土中に石錐2個が混入していた。

第3章 成果と問題点

第1節 縄文時代

1 住居地の時期について

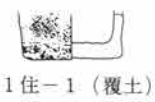
二之堰遺跡における縄文時代の住居址は35軒検出され、台地端部の斜面にほぼ地形に即して弧状に展開している。しかし、これらの住居址は同一時期ではなく、前・中・後期にわたっており、炉体や埋設・床面直上などの明確な伴出土器によって、型式別に時期区分^{註1}すると次のようになる。

諸磯b式期 1～8号住居址の8軒が該期に属する。このうち、床面直上からの伴出土器をもつものは4・5号住居址のみであるが、他の住居址も埋土中からの出土土器がほとんど諸磯b式であり、該期に位置するとみて問題ないであろう。これらの出土土器は細かい集合沈線によって文様構成され、第248図の6号住居址No.8や7号住居址No.3・9などは、浮線土器に多用される渦巻文が胴部に残存している。また、各土器ともに器面の整形→縄文施文→沈線施文の順となっており、1号住居址No.13や4号住居址No.4・No.19（第15図）および7号住居址No.5などは、集合沈線の施文の後に貼付文が施されている。こうした点からみて、これらの土器は諸磯b式の中でも新しい段階に位置づけられるものであり、ほとんど同一時期とすることができよう。しかし、7・8号住居址の重複関係にみられるように、これらの住居址の全てが同時存在したものではないと思われる。

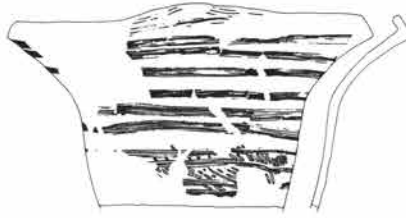
加曾利E3式期 9～17・19・22～25号住居址の13軒が該期に属する。加曾利E3式土器は、口縁部の渦巻文・楕円区画文や胴部の磨消縄文によって特徴づけられるが、そのあり方の相違によって少なくとも新旧の2段階に細分できると考えられる。上記の住居址は、全てこの新段階に位置づけられる土器を出土しており、この段階には口縁部の渦巻文や楕円区画文の簡略・消失化した土器が伴出する例も多い。例えば、14・16・22・24号住居址では、第248・249図のように口縁部文様帯の存在するA類土器と、消失しているB類土器とが共伴している。また、このほかに明確な共伴関係をもたないが、9・13・19号住居址などでも完形に近いB類土器が埋土中より出土している。

このB類土器は、口縁部文様帯の簡略・消失化と併行して、胴部文様帯に新たな変化がみられるものである。つまり、口縁部では渦巻文や楕円区画文等が口唇下の横位の沈線文へと集約化されてゆくが、胴部では平行懸垂文の上端が連結して∩字状の懸垂文や波状の区画文を形成し、胴部文様を中心とした文様構成となる。しかし、こうしたB類土器の文様変化はA類土器の中に見い出せるのであり、形式的にはA類からB類という変遷をたどることができる。例えば、A類の13号住居址No.1、14号住居址No.2、17号住居址No.2、19号住居址No.2、24号住居址No.1などの土器の口縁部文様を省略したならば、B類と全く同様の文様構成となる。また、B類においても9号住居址No.1・3や14号住居址No.6（第39図）、15号住居址No.5～7（第42図）などは、口唇下の縄文が横位に施文されることによって羽状を呈しており、A類の口縁部縄文の施文方向のなごりをとどめている。このB類土器については、口縁部文様帯の消失をもって加曾利E4式とするならば、同式の範中として考えなければならないものであるが、単独で出土することが少なくA類と共伴する事例が多い点からすると、一概に加曾利E4式として把握することも問題があろう。これについての詳細な検討は今

諸
磯
b
式



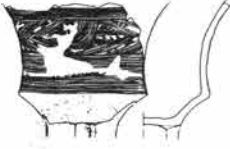
1住-1 (覆土)



4住-4 (床直)



5住-7 (床直)



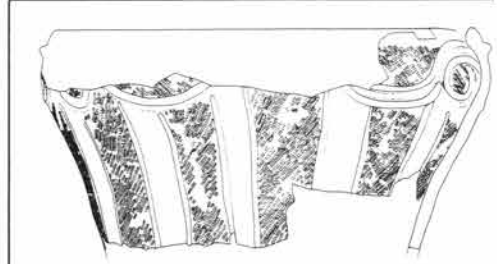
6住-8 (覆土)



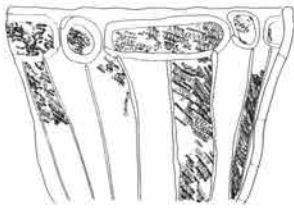
7住-3 (覆土)



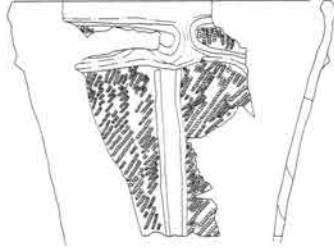
7住-5 (覆土)



9住-2 (炉埋)



10住-1 (床直)



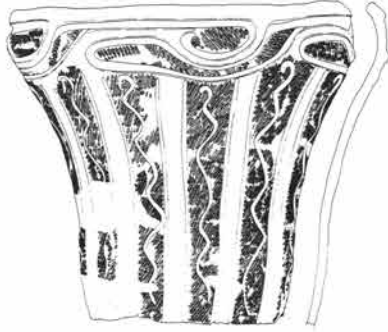
12住-1 (床直)



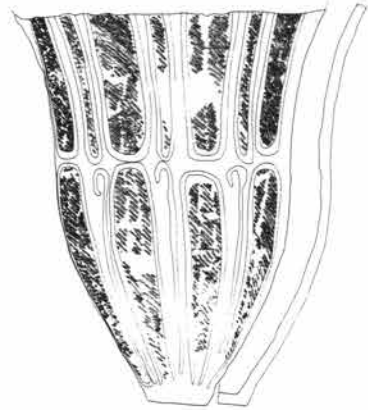
12住-2 (床直)



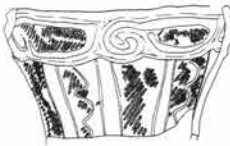
13住-1 (床直)



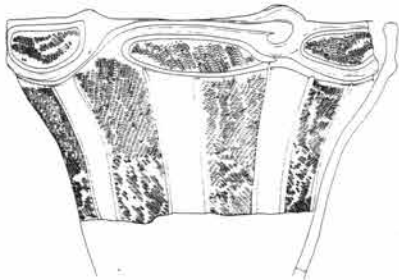
16住-7 (床直)



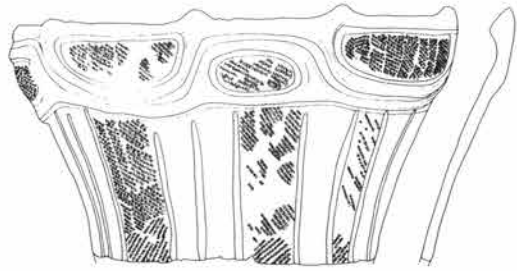
16住-6 (床直)



14住-1 (埋甕)



19住-3 (炉埋)



22住-1 (炉埋)

加
曾
利
3
式
(
A
類
)

第248図 住居址出土土器の型式

後にゆずるが、ここでは加曾利E 3式の最も新しいものとしてとらえておきたい。

したがって、前述の13軒の住居址のうち、このB類を確実に共伴する14・16・22・24号住居址は、より新しい時期に位置すると考えられる。また、12・13号住居址のように、相互に重複するものもみられることから、共存する住居の数は更に少なくなるものと思われる。

加曾利E 4式期 20・21号住居址が該期に属する。加曾利E 4式は、同3式のB類の文様が更に簡略化され、断面三角形の微隆起帯によって文様構成されることの多い土器である。20号住居址No 2や21号住居址No 1には区画内充填縄文の手法がみられるが、21号住居址No 1では口唇下にめぐる微隆起帯に渦巻文が4箇所^{註2}に施され、加曾利E 3式の口縁部文様のなごりをとどめている。該期の住居址は残存状態が悪く、平面プランも明確でない。特に21号住居址の場合、炉や柱穴などが検出できないため、住居址ではない可能性もある。

称名寺I式期 32号住居址が該期に属する。今村啓爾氏の^{註2}編年に従えば、称名寺I_c式に比定される土器を埋甕として使用しており、称名寺I式の中でも比較的新しい段階に位置するものであろう。また、26号住居址でも32号住居址と同様の土器が出土しているが、埋土中からの出土であることや加曾利E 4式も含まれていることから、時期的には確定できない。

称名寺II式期 27・28・33号住居址が該期に属する。いずれの出土土器も文様の簡略化が進み、地文を持たないものが多い。33号住居址では、床面より14cm程度浮いてNo 6が出土したが、この土器は口縁部に縦・横位の連鎖状隆帯をもち、福島県を中心とした東北南部の綱取I式に類似した特徴を有している。この土器が綱取I式そのものであるかどうかは検討を要するが、少なくとも同式併行とみて良いだろう。また、ほぼ床面密着に近く押しつぶされた状態でNo 1(第114図)の土器が出土しているが、これは加曾利E 4式に比定されるものであり、これを含めて同時期とするには問題がある。その出土状態からみた限り、共伴していると判断されるが、これが確実に共伴関係にあるとすれば加曾利E 4式が称名寺II式期まで残存していることになる。このことについては、称名寺式土器そのものの型式変化のテンポや存続期間とも関係すると思われる、その共伴関係の有無も含め今後の分析にゆずりたい。30・31号住居址は、埋土中より称名寺I・II式土器を出土しているが、明確な伴出土器がなく、時期決定が難しい。ただ、31号住居址は称名寺I式期の32号住居址を切っており、こうした点からみると称名寺II式期に位置する可能性が強い。

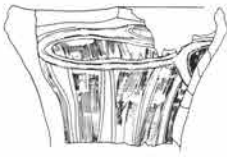
堀之内I式期 34・35号住居址が該期に属する。該期は地文の無いものが多く、称名寺II式の要素を強く残している。地文に縄文をもつ35号住居址のNo 4・6・7などは、比較的新しい要素をもつものであり、こうした点からみれば34号住居址よりも35号住居址の方が、より新しい段階に位置づけられよう。また、明確な伴出土器をもたないが、埋土中の出土土器からみると、29号住居址も該期に属すると考えられる。

以上、各住居址の時期について出土土器の型式から概観した。二之堰遺跡の縄文時代の集落は諸磯b式期に始まり、その後一時途絶えながらも加曾利E 3式期に至って再び出現し、堀之内I式期までほぼ継続している。しかし、その間には、集落の断続や規模の拡大・縮小および柄鏡形住居址の出現など、注目すべき変化がある。こうした集落の変遷については、出土土器の型式細分や近隣の遺跡との関連を考慮する必要があり、これらの分析を含め、今後の研究課題としておきたい。

註1 二之堰遺跡の集落変遷については、すでに昭和59年度日本考古学協会秋期大会のシンポジウム「縄文集落の変遷」の資料集に掲載してある。しかし、本報告をまとめるにあたって再検討した結果、一部の住居址について、その所属時期の訂正を行なった。そのため、シンポジウムの資料と若干異なる点もあるが、それについては本報告を参照されたい。

註2 今村啓爾(1977)、文献73・74を参照。

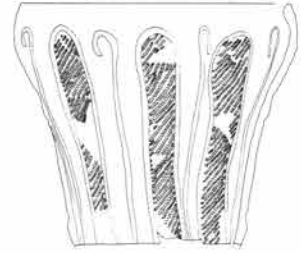
(A類)



24住-2 (床直)



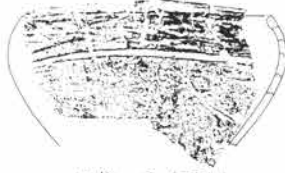
9住-1 (覆土)



9住-4 (覆土)



9住-3 (覆土)



9住-9 (覆土)

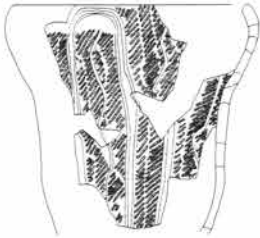


9住-11 (覆土)



13住-2 (覆土)

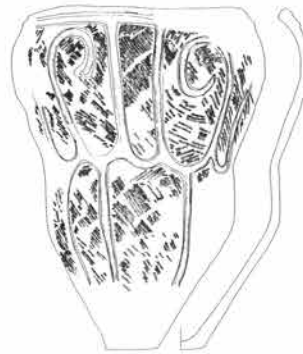
加曾利E3式 (B類)



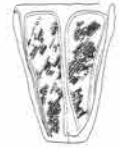
14住-3 (床直)



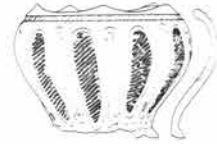
15住-2 (床直)



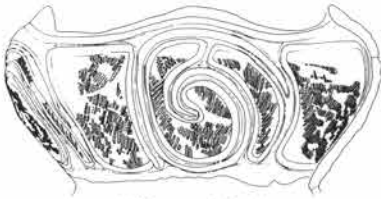
15住-1 (埋裏)



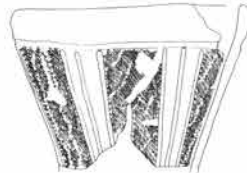
19住-5 (覆土)



19住-7 (覆土)



23住-1 (床直)



22住-2 (床直)



24住-3 (床直)

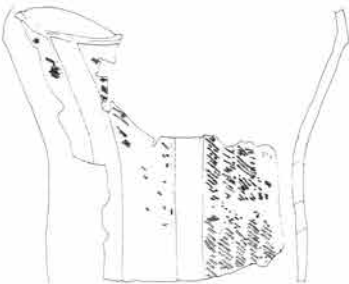
加曾利E4式



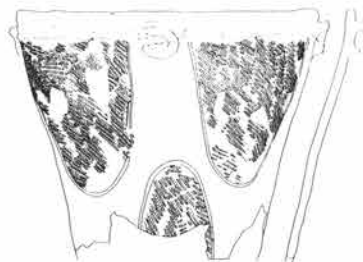
20住-2 (炉埋)



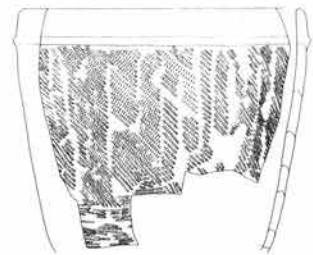
24住-1 (床直)



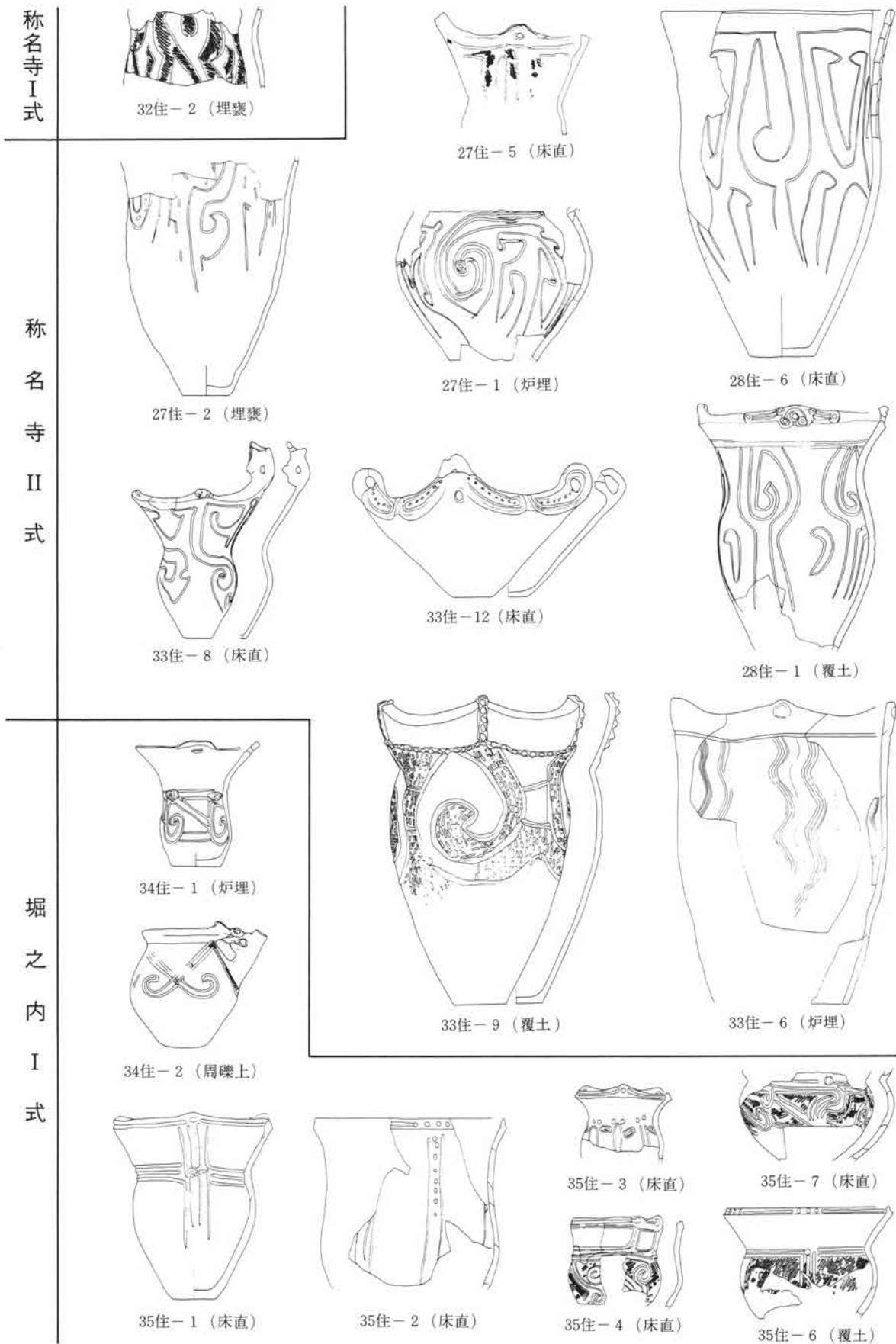
20住-1 (炉埋)



21住-1 (床直)



21住-2 (床直)



第250図 住居址出土土器の型式

2 柄鏡形住居址について

床面に敷石を施した敷石住居址を含め、張出部を有するいわゆる柄鏡形住居址は、縄文時代中期末から後期後半にかけて関東山地寄りの関東・中部地方に広く分布している。こうした柄鏡形（敷石）住居址は、群馬県内でも多くの検出例があり、現在までに74遺跡の総数約160軒にも達している。

この住居址については以前より多くの研究者の注目を集め、またこれに対する論考も数多く重ねられてきている。最近では、村田文夫氏や山本暉久氏らによる一連の論考があり、特に山本氏によってその研究史や出現および変遷過程、機能および性格、縄文時代における柄鏡形（敷石）住居出現の歴史的意義等について詳細に論じられている。

本稿では、そうした研究者による論考を踏えつつ、二之堰遺跡における柄鏡形（敷石）住居址について、若干の考察を加えたい。

(1) 二之堰遺跡における柄鏡形（敷石）住居址の特徴とその変遷

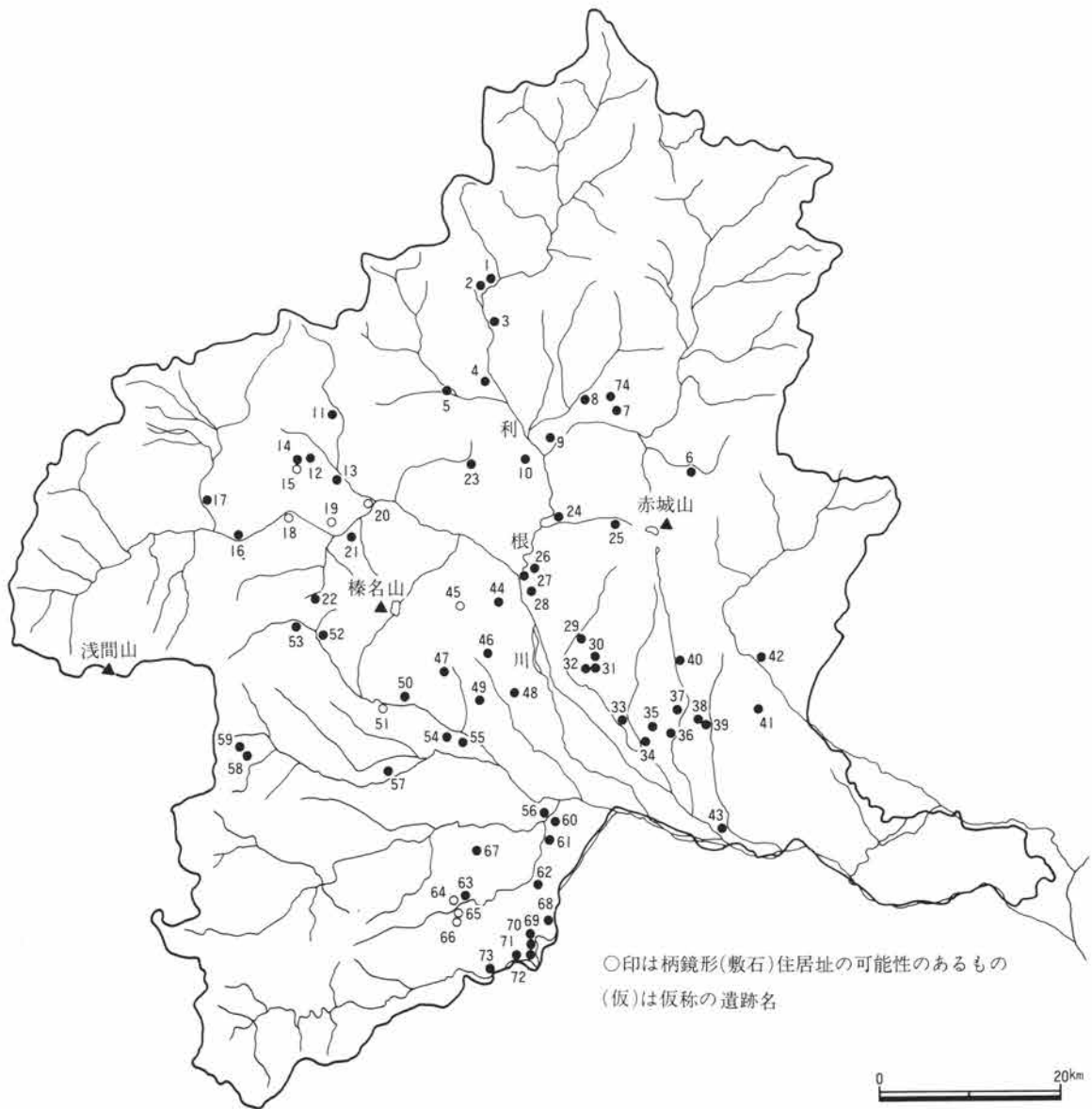
二之堰遺跡の柄鏡形（敷石）住居址は、後期称名寺Ⅰ式期から堀ノ内Ⅰ式期にかけて存在している。しかし、前項でも述べたように、その中には伴出土器の僅少さから、時期判定のやや困難なものもあり、ここでは明確な埋甕や床面直上からの出土土器などを有した柄鏡形（敷石）住居についてのみ取り上げ、各々の出土土器型式による時期区分に従い、その特徴と変遷過程を記してみたい。

加曾利E4式期 該期は20・21号住居址が存在している。しかし、これらは後世の攪乱や他遺構との重複によって平面プランが明瞭に確認できず、柄鏡形（敷石）住居址であるか否かの判定が難しい。特に21号住居については住居址でない可能性もあることから、該期では分析の対象となるものが存在していない。

称名寺Ⅰ式期 31号住居址の1軒が存在する。張出部を欠損するが、主体部にはほとんど敷石が見られない。竪穴の主体部平面プランは円形で、柱穴の配列も壁に沿うように円形となる。出入口部に埋甕をもち、炉は方形石組炉である。周縁部環礫（以下、周礫と略す）は柱穴の配列とほぼ重複するように、床面から10～20cmほど盛り上げられて、幅40～50cmの帯状にめぐらされる。

称名寺Ⅱ式期 27・28・33号住居址が存在するが、いずれの住居址も下記の共通した特徴をもっている。
①ほとんど敷石を施さない。②竪穴の主体部平面プランおよび柱穴の配列が円形となる。③周礫は柱穴の配列とほぼ重複するように、床面より20～40cm、幅40～50cmの規模で帯状に盛り上げられる。④円形の地床炉をもつ。こうした共通点の他に、③の周礫に関しては28号住居址の場合、その下部の床面に部分的ではあるが溝状の掘り込みが柱穴を連結するようにめぐり、33号住居址の周礫は張出部にまで広がる傾向をもつ点で注目される。また、④については33号住居址が炉内に埋甕をもつ点で異なる。埋甕は27・33号住居址で張出部に、また出入口部の土壇は27・28号住居址にそれぞれ認められる。27号住居址は埋甕と土壇の両者を有しているが、この土壇上面は貼床状となっている。

堀之内Ⅰ式期 34・35号住居址が存在するが、両者ともに次の共通した特徴をもっている。①ほとんど敷石を施さない。②出入口部・張出部に埋甕をもたない。③周礫は柱穴の配列とほぼ重複するように、床面より高さ10～20cm、幅30～40cmの規模で帯状に盛り上げられる。④円形の地床炉をもつ。これらのうち、③に関しては35号住居址の周礫が床面よりあまり盛り上げられず、その下部に各柱穴を連結するような幅30～50cm、深さ5～15cmの溝状の掘り込みをもつことや、④では34号住居址が炉内埋甕を有する点で若干異なっている。その他の相違点としては、34号住居址は竪穴の主体部平面プランおよび柱穴・周礫の配列が円形で、



1. 水上石器時代住居 2. 水上石器時代住居 3. 乾田 4. 梨ノ木平 5. 布施 6. 高泉石器時代跡
7. 高平 8. 宮山(仮) 9. 諏訪 10. 篠尾 11. 四万 12. 久森 13. 清水敷石住居跡 14. 棚界戸
15. 有笠山 16. 横壁東平 17. 赤岩(仮) 18. 上郷 19. 笹原 20. 須郷沢(仮) 21. 玉科 22. 堀井戸
23. 中山敷石遺構 24. 藤木住居跡 25. 中山の集落跡 26. 大久保 27. 三原田 28. 小室 29. 西所皆戸(仮)
30. 芳賀北部団地 31. 九料 32. 小神明 33. 筑井 34. 前原 35. 二之堰 36. 五目牛洞山 37. 柳田
38. 曲沢 39. 東村曲沢 40. 安通 41. 阿佐美 42. 千網谷戸 43. 北米岡G 44. 空沢 45. 薬師(仮)
46. 新井第II 47. 中善(仮) 48. 花園(仮) 49. 保渡田II 50. 高権 51. 矢ノ沢 52. 長井大島敷石住居跡
53. 川浦 54. 若田 55. 大島原 56. 田端 57. 築瀬炉跡 58. 入山暮井 59. 入山仁田 60. 西原
61. 中大塚縄文時代敷石遺構 62. 高木(仮) 63. 坂野 64. 馬渡戸 65. 細谷戸A(仮) 66. 細谷戸B(仮)
67. 比良(仮) 68. 八塩 69. 金剛寺下 70. 橋下 71. 譲原石器時代住居跡 72. 保美濃山 73. 坂原
74. 寺谷

第251 図 群馬県内における柄鏡形(敷石)住居址の分布

出入口部付近に土壇を有するのに対し、35号住居址は隅丸方形に近い竪穴プランおよび柱穴・周礫の配列をなし、出入口部の土壇をもたない点が上げられる。

柄鏡形（敷石）住居址の変遷過程 称名寺Ⅰ式期から堀之内Ⅰ式期の柄鏡形（敷石）住居址について、その特徴を列記してみたが、その中には各期を通じて共通するものとそうでないものの二様が認められる。共通する要素としては、②敷石をほとんど施さない。⑥周礫を有し、柱穴とともに竪穴の平面プランに沿って配列される。の2点がある。一方、変化する要素としては、①出入口部・張出部の埋甕。②出入口部土壇。③竪穴および柱穴・周礫配列の平面プラン。④方形石組炉。⑤炉内埋甕。の5点を上げることができる。このうち、⑤を除いた①～④については、時間的な変遷をたどることが可能である。

まず、①の埋甕については称名寺Ⅰ式期から称名寺Ⅱ式期にかけて認められるが、称名寺Ⅱ式期段階ですでにそれを持たないものも現われ、堀之内Ⅰ式期には全く存在しなくなる。こうした埋甕の衰退から消滅の過程と付合するように②の土壇の出現が称名寺Ⅱ式期にあり、堀之内Ⅰ式期まで認められるが、それも堀之内Ⅰ式期の新しい段階で消滅する傾向にある。この土壇については、その設置箇所や埋甕との時間的前後関係からみて、埋甕の転化したものであって、かつそれと同様の機能・性格^{註4}を有するものと考えられる。ただ、27号住居址の上面貼床の例でみると、通常は閉口していたものであろう。また、③の方形石組炉は称名寺Ⅰ式期のみ認められ、称名寺Ⅱ式期・堀之内Ⅰ式期では小円形の地床炉へと変化している。④の竪穴平面プランは、柱穴や周礫の配列形態と一体不離の関係にあることが理解されるが、称名寺Ⅰ式期から同Ⅱ式期にかけては円形であるのに対し、堀之内Ⅰ式期の新しい段階には方形に近い形態も見られ、円形から方形への変遷傾向が窺える。①～④の変化を総体的に見れば、称名寺Ⅱ式期より始まるものが多く、堀之内Ⅰ式期に至るとその変化がより際立ったものになっている。

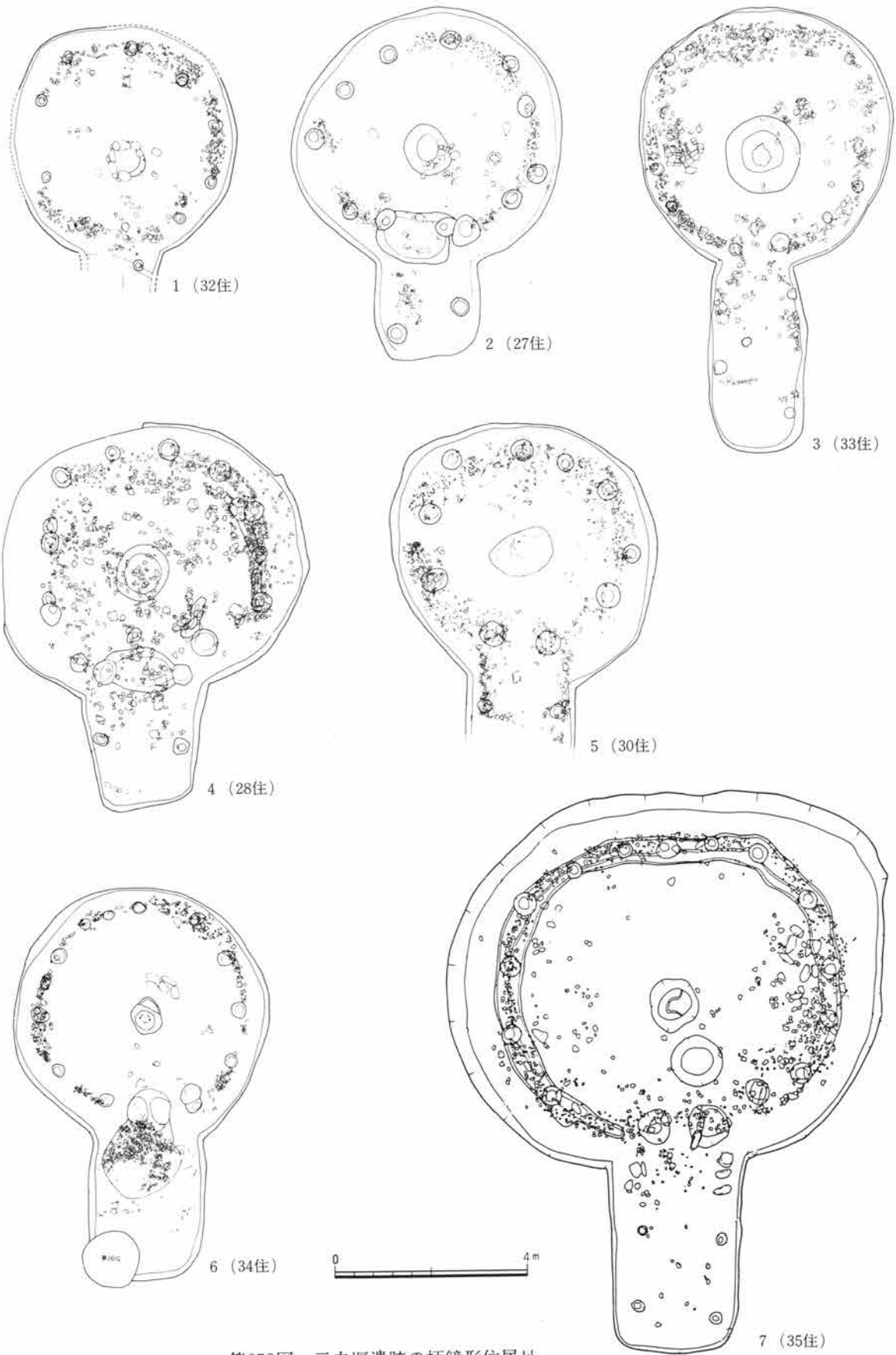
つまり、称名寺Ⅰ式期から堀之内Ⅰ式期にかけての二之堰遺跡の柄鏡形（敷石）住居は、②・⑥という共通要素を継承しつつも、その一方で埋甕の廃用に端的に見られるような衰退化の方向をたどっているといえよう。こうした敷石行為の稀薄性や出入口部埋甕風習の衰退という方向性は、後期初頭という枠内でみれば、県内をはじめ柄鏡形（敷石）住居の中心的分布地域である南関東でのあり方と基本的には大差ないものと思われるが、周礫の継続性については他地域とその様相を異にしている。

この周礫をもつ柄鏡形（敷石）住居址は、現在のところ加曾利E4式より知られており、県外にもいくつかの類例を見出すことができる。しかし、その機能および性格については、これまでもいくつか論じられてはいるものの、必ずしも明確にされているとは言えない。そこで、二之堰遺跡をはじめとして県内・外の事例を分析する中で、その位置づけを行なってみたい。

(2) 周縁部環礫を有する柄鏡形（敷石）住居址について

周縁部環礫の特徴 二之堰遺跡では、10軒の柄鏡形（敷石）住居址の全てに周礫が認められた。この周礫は、径5cm前後の小礫（土器片や石器を含む）と土とを混合して、床面から高さ20～40cm、幅50cm前後の規模で盛り上げられ、各柱穴の配列とほぼ同一位置を帯状にめぐらるものである。多くの場合、出入口部の埋甕（土壇）部分を除いた主体部にのみ施されるが、30・33号住居址のように張出部にもわずかではあるが施される例や、34号住居址のように出入口部土壇の上面にまで施されている例もある。

県内では二之堰遺跡のほかに、乾田（No.3）、三原田（No.27）、小室（No.28）、芳賀北部団地（No.30）、曲沢（No.38）、若田（No.54）、中大塚（No.61）、譲原（No.71）等の遺跡で10数例知られており、時期的には加曾利E4式期を中心として堀之内Ⅰ式期にまでわたっている。また、県外での事例は少ないが、管見にふれたところ



第252図 二之堰遺跡の柄鏡形住居址

では東京都下の前原遺跡4号住居址（加曾利E4式期）、御殿山遺跡4号住居址（加曾利E4式期）、平尾台原遺跡A地区7号住居址（加曾利E4式期?）、新山遺跡19・20号住居址（加曾利E4式期）と神奈川県荏田第2遺跡15号住居址（称名寺式期）を上げることができる。

二之堰遺跡をはじめ他遺跡のこうした柄鏡形（敷石）住居址は、敷石の施されないものが多く、この周礫と敷石との関係を知る手がかりは少ない。しかし、第253図1の小室遺跡1号住居址（加曾利E4式期）や同図2の三原田遺跡4区6号住居址（称名寺I式期?）のあり方をみると、屋内敷石行為とはまた異なる性格をもつことが判る。特に全面敷石をもつ小室遺跡の例では、縁石状の周縁部敷石の外側を帯状にめぐることから、敷石の一部とは考えられないし、またその周礫の上面に柱穴の確認できるものがあることからみて、この周礫は少なくとも敷石部外隣の柱の立てられた各間隙に施されていたものと判断される。こうした小室遺跡での周礫と柱穴との関係については、二之堰跡34号住居址でも確認できたが、他の事例においても柱穴の存在する部分の周礫が稀薄となることが多く、こうした点からも周礫と柱穴との同時性は明らかであろう。

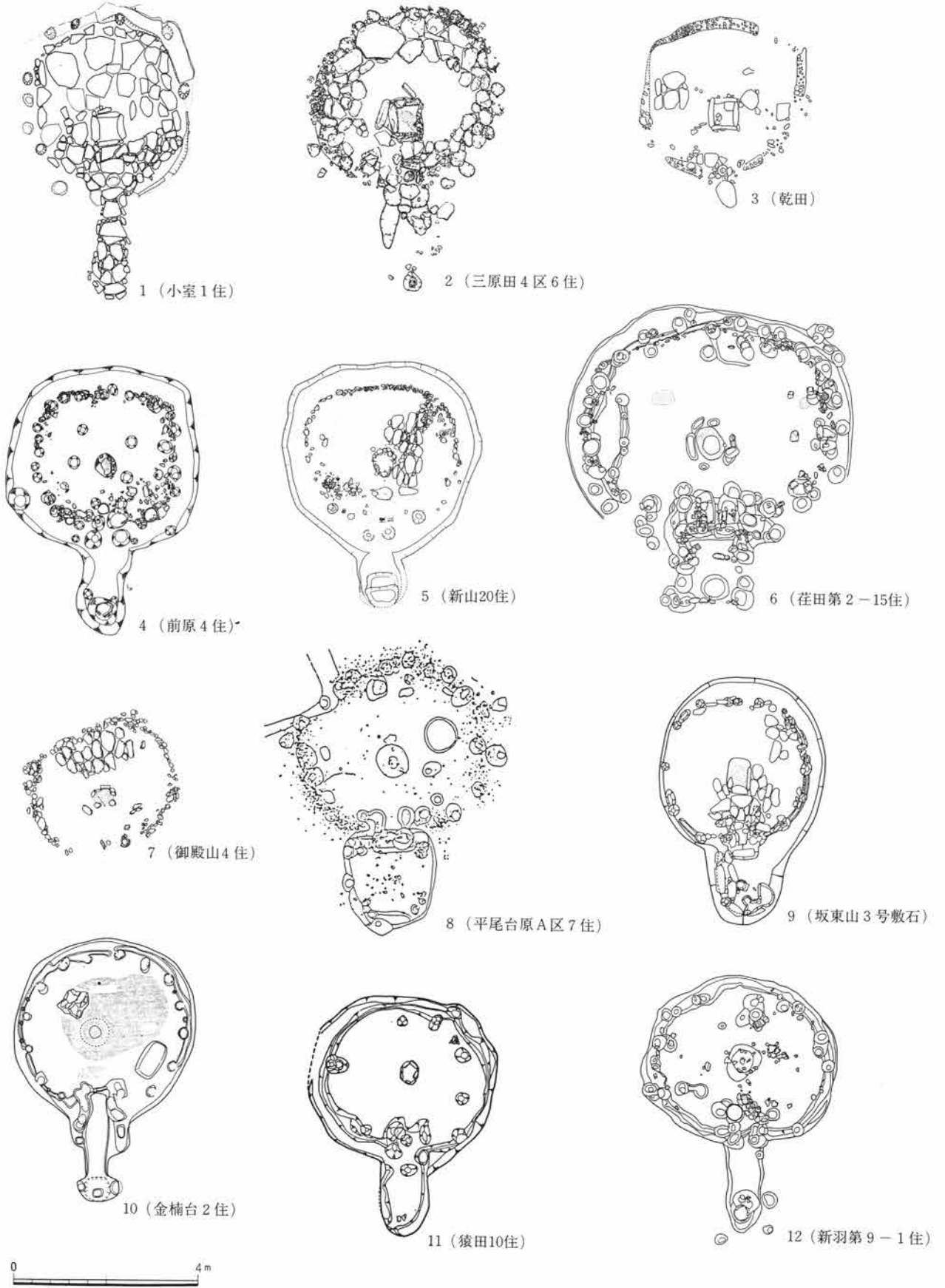
また、二之堰遺跡の28・35号住居址では、周礫下に各柱穴を連結するような周溝状の掘り込みがみられるが、その内部からも周礫が検出されており、周礫と何らかの関係を有すると考えられる。これと同様のケースは、新山遺跡20号住居址（第253図5）や荏田第2遺跡15号住居址（第253図6）にも認められる。

周縁部環礫の機能・性格 周礫のもつ意味については、いくつかの報告書や論文の中で述べられている。それらを大別すれば、柱穴・炉などと同様の住居構造の一部とみる機能論的な解釈と、住居の廃棄に関わる祭祀的性格を有するとする解釈の二つがある。前者の立場をとるのは、尾崎喜左雄、小谷田政男、小林公明の各氏がおり、後者では山崎丈氏がいる。前者の尾崎氏は小室遺跡の報文中で、この周礫について「明らかに土手状遺構の造られる以前に柱が立てられていた状態が知られ、柱を立てて、土手状のものをづくりつけた」とし、「防水装置」の可能性を示唆している^{註5}。また、小谷田氏は平尾台原遺跡を分析する中で「少なくとも、柱穴または壁面の構築に関係する配石であることは予想できる。柱を立てた場合、これを強化するための使用や壁面強化のための配石などが考えられる」としている^{註6}。小林氏は「後期縄文文化における北太平洋的要素とメソアメリカ要素」と題する論文の中で、小金井市前原遺跡4号住居址を引照しながら「上屋を復元すると、屋根は上屋に沿って地面に葺きおろされ、しかも住居内には支柱が木柵のごとく並び、その合間には割材などで充填されて木壁をなす」という状態を想定し、しかもこの「木壁」とふきおろされた屋根によって「住居の壁は二重となる」という見解を示している^{註7}。

一方、後者の立場をとる山崎氏は、新山遺跡の報文中で20号住居址の周礫が柱穴の撤去後に配置されたと考え、「住居の廃棄に関わる何らかの祭式の存在」を想定している^{註8}。

これらの説は、前者では周礫が柄鏡形（敷石）住居址と同一時期で、共伴すると判断しているのに対し、後者の場合、周礫の構築が柄鏡形（敷石）住居址の使用時期に伴わないとする点で大きく異なっている。

山崎氏がその非同時性を認定した理由として「柱穴は配石列下部に存在する可能性」を上げている。しかし、この新山遺跡20号住居址の場合、保存措置が構じられたため、周礫下の調査はその一部分を対象としてトレンチで行なわれており、その所見から上記の想定を行なうことはやや無理な面もある。実際に、小室遺跡1号住居址や二之堰遺跡34号住居址のように周礫上面より柱穴の確認できる例は少なく、中には周礫が柱穴上面を完全に覆ってしまう例も見られる。しかし、これについては住居廃棄後の柱の腐食、および人為的な除去に伴う周礫の移動を考慮する必要があり、これが住居と周礫との非同時性を証明することにはならない。また、同19号住居址については明言されていないが、19号住居址の周礫が20号住居址に比べて床面より浮いていることから、覆土層からの出土と考えていることが窺える。しかし、これは周礫が土と混合されて



第253図 周縁部環磔および周溝をもつ柄鏡形(敷石)住居址

盛り上げられることが多いために、調査時にこの土を除去した場合、あたかも床面より浮いている状態となるものであり、これが覆土層出土との誤認を与えているものと思われる。

いずれにしても、この周礫が柄鏡形住居構造の一部であることは先述した通りであり、特に新山遺跡20号住居址の場合、周礫下に柱穴と周溝状の掘り込みを有するという二之堰遺跡28・35号住居址や荇田第2遺跡15号住居址との共通点からみても、柄鏡形（敷石）住居に伴うものであることは明らかであろう。

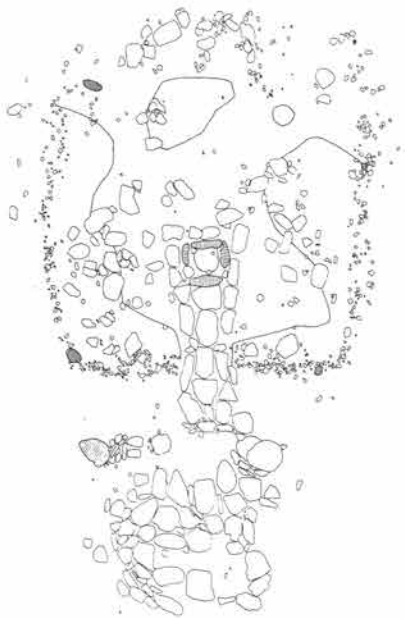
では、この周礫は住居構造の一部として、どのような機能・性格を有しているのだろうか。まず、その前に再度周礫の特徴を要約すると、①各柱穴の間に帯状に盛り上げられる、②周礫下に各柱穴を連結する周溝状の掘り込みを有する例もある、の2点を上げることができる。このうち、特に注目されるのは②についてである。この周溝状の掘り込みは、先述したように二之堰遺跡28・35住居址や荇田第2遺跡15号住居址、新山遺跡20号住居址等で認められ、各柱穴を連結するようにめぐるのが共通した特徴である。こうした周溝状のものは、周礫を伴わない埼玉県坂東山遺跡3号敷石住居址（第253図9）、志久遺跡8号住居址、神奈川県猿田遺跡10号住居址（第253図11）、下北原遺跡5号住居址、新羽第9遺跡1号住居址（第253図12）、荇田第5遺跡2号住居址、千葉県金桶台遺跡2号住居址（第253図10）にも認められ、そのあり方は上記の例とほとんど同じである。

竪穴住居址の周溝については、最近青森県近野遺跡や三内遺跡および大阪府芝谷遺跡等で、平安時代・弥生時代の竪穴住居址周溝内より周壁の土留材が検出され、その下部を埋め込むための小溝であることが明らかとなってきた。柄鏡形（敷石）住居址に認められる周溝もこうした性格を有するものと仮定するならば、周礫はそれに付随した施設と考えることもできる。しかし、周溝および周礫の位置が周壁よりも20～40cm間隔をあけるといふ点からすると、これが周壁の土留材を補強するための施設と見ることはできない。とは言うものの、尾崎氏の「防水装置」説は、周礫が竪穴内にあることから合理的な説とは言えないし、また小谷田氏の「柱穴または壁面の構築に係る配石」説も、前述したような周溝の存在や周壁より若干の間隔をおくことを考慮した場合、やはり問題が残る。こうしてみると、②だけではなく①の柱穴との関係を含めた説明がなされなければならないのである。そうした意味では、小林氏の想定したような「木壁」であったかどうかは別問題としても、少なくとも木柱間の構造物に関連した施設とみるのが、最も可能性の高いものと言えよう。つまり、周溝状の掘り込みはその素材を埋め込んだ小溝であって、更にその下端を周礫で補強した^{註11}ものと思われる。

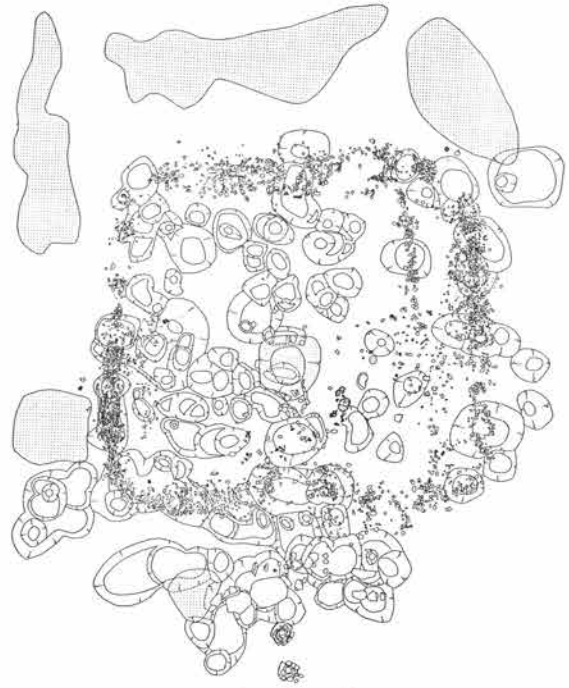
周礫の系譜 では、周礫の出現は何に求められるのであろうか。柄鏡形（敷石）住居成立期以前の竪穴住居について、若干の検討を加えてみたが、周礫の初源的なものは現在のところ見あたらない^{註12}。結論的に言うならば、加曾利E4式期の柄鏡形（敷石）住居構造の中に求めざるを得ないのである。

柄鏡形（敷石）住居については「かなり冷涼湿潤な気候に適応した住居構造^{註13}として出現するのか、あるいは「奥壁部石壇・石柱という祭祀空間の面的拡大と出入口部埋甕を中心とする埋甕祭祀の場の拡大^{註14}」によって成立したのか意見の分かれるところである。しかし、その住居構造については、前時期の主柱穴を中心としたものから、周壁に隣接した小柱穴列（壁柱穴ではない）への転換によって、上屋構造の変化したことが想定されており、その構造変化の一環としてこうした周礫も同時に出現すると考えられる。したがって、周礫の祖源形態が柄鏡形（敷石）住居成立期以前には存在しないことも、同時に理解できよう。

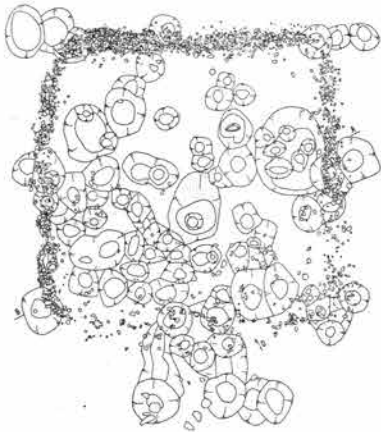
いわゆる「環礫方形配石遺構」について 県内における周礫を有した柄鏡形（敷石）住居址は、加曾利E4式期から堀之内式期まで認められるものであるが、堀之内II式期以降については調査事例そのものが少ないこともあり、今のところ検出されていない。



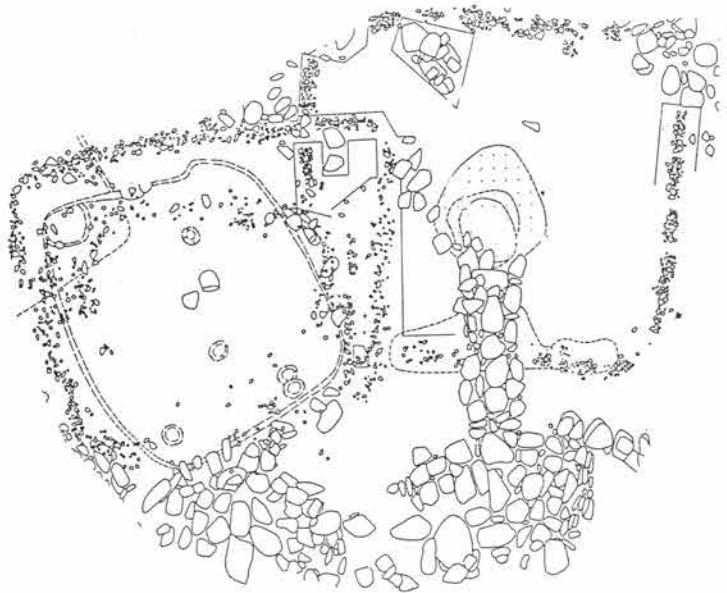
1 (下北原3号)



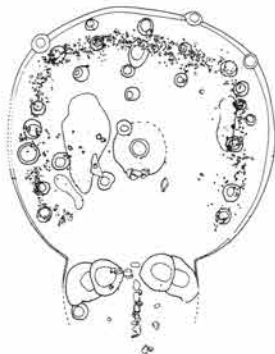
2 (東正院2号)



3 (東正院3号)



4 (下谷戸)



5 (平台北第5)



第254図 神奈川県内の「環礫方形配石遺構」

こうした柄鏡形（敷石）住居址と非常に良く似たものに、神奈川県を中心に分布する、いわゆる「環礫方形配石遺構」と呼ばれるものがある。この遺構は後期堀之内Ⅰ式期から加曾利BⅡ式期にかけてみられるもので、次のような特徴を有している。

- ① 方形プランをもち、柄鏡形（敷石）住居と類似した張出状の施設を有する。
- ② 主体部の中央に小円形の火焚場（炉）をもつ。
- ③ 周縁部に直径5cm内外の小礫を25～45cmの幅で帯状にならべ、1辺5～6mの方形にめぐらせる。また、その環礫は盛り上げられるように施されるため、柱穴や炉の掘り込み面よりも高いレベルをもつ。
- ④ 柱穴は環礫と重複する位置に方形に配される。
- ⑤ 張出部に埋甕をもつ例がある。
- ⑥ 炉や遺構内から鳥獣骨の小破片が検出されることが多く、中には小児の歯の検出された例もある。
- ⑦ 環礫は火を受けている。
- ⑧ 周礫内より石棒や石製小玉などの特殊遺物が出土する例もある。

鈴木保彦氏は、この遺構の性格について、「建築物そのものは一般住居と同じように構築されたものであり、機能的にも住居として耐えうるものであった」としながらも、上記の特徴によって「環礫方形配石遺構が特別な意義のもとにつくられた遺構であることを示しているとともに、その特色を最も良く表している小礫による配石列や火焚場、それに張出部が特殊な場所であったことを示しているものと思われる」と結論づけている。^{註15}

一方、これについて山本暉久氏は「プラン的には、方形にめぐる小礫（それに伴う火入れ行為）を除けば竪穴住居や敷石住居に近いことから、この遺構をいちがいに特殊な施設として住居と区別することはできないかもしれない」と論じ、鈴木氏の考え方に疑問を呈している。^{註16}

実際に、この「環礫方形配石遺構」の特徴のうち、①～⑤については東京都下の前原遺跡4号住居址、新山遺跡20号住居址などに見られるものであり、また周礫および柱穴が方形に配される点を除けば、二之堰遺跡の各柄鏡形住居址にも全くあてはまる特徴と言える。また、鈴木氏が4形態に分類した張出部を含めた平面プランも、堀之内Ⅰ・Ⅱ式期の「第Ⅲ発展期」とされる柄鏡形（敷石）住居址より認められる形態である。^{註17}更に、⑧の石棒等の出土についても、南関東地方を中心とする柄鏡形（敷石）住居址においては、その出土例が広く知られているものであって、すでに山本氏によっても「これは特殊住居の裏づけとして評価するのではなく、一つの時代特性として、ますます石棒のもつ意味が重要視されてきたことを示していると理解すべきである」と指摘されている通りであろう。^{註18}

こうしてみると、⑥・⑦などの火入れ行為に伴う特徴を除けば、「環礫方形配石遺構」と柄鏡形（敷石）住居址とを区別するものはなくなる。この火入れ行為については、平台北遺跡第5地点の「環礫方形配石遺構」では、遺構全体に木炭・焼土粒が混在しており、火焚場とされる炉内やその周辺から鳥獣骨の出土もなく、焼失家屋の可能性も示唆している。^{註20}また、二之堰遺跡34号住居址や新山遺跡20号住居址でも平台北遺跡と同様の状態が看取されており、やはり焼失家屋であると想定される。

「環礫方形配石遺構」にほぼ共通して認められる火入れ行為は、小児の歯骨を伴出する例もあることから一概に断定することはできないが、上記の例などからみて焼失家屋としての可能性も考慮する必要があるのではなかろうか。

いずれにしても、「環礫方形配石遺構」が特殊な遺構と判断される理由の一つに上げられている「環礫」については、加曾利E4式期から堀之内Ⅰ式期の柄鏡形（敷石）住居にみられる周礫と酷似している。特に「環

磔」が5cm内外の小磔によって、柱穴の位置と重複するように施される点や、盛り上げられるように施されるために、炉や柱穴などの床面レベルよりもやや高い状態となる点に関しては、両者とも全く同一のあり方を示していると言えよう。また「環磔」が方形に配されることや張出部敷石の形態についても、前述したように、堀之内Ⅰ・Ⅱ式期の柄鏡形（敷石）住居の主体部プランや張出部敷石の変化と軌を一にしていることが窺える。

つまり、こうした「環磔方形配石遺構」は突如として出現するのではなく、加曾利E4式期の周磔を有した柄鏡形（敷石）住居より後づけられるのであり、こうした周磔の存在からは「環磔方形配石遺構」に特殊な性格を付与することはできないと考えたい。

以上、二之堰遺跡における柄鏡形住居址の特徴とその変遷、およびそれから派生したところの周縁部環磔を有する柄鏡形（敷石）住居址について、若干の見解を述べてみた。しかし、該当する資料の少ないこともあり、分析不十分な点も多く、必ずしもそれらの問題が解明されたとは言えない。特に周縁部環磔の意味については、一部の柄鏡形（敷石）住居址にのみ認められる点や、周溝状の掘り込みを伴わない例もあることから、問題を残している。しかし、これを逆に考えれば、周縁部環磔および周溝が柄鏡形（敷石）住居の構造上、必要不可欠な要素としてなかったとも言える訳である。いずれにしても、今後において検討を要する問題であろう。また、二之堰遺跡における柄鏡形住居址の変遷過程については、本遺跡内でのあり方を中心に分析したものである。今後、県内をはじめ県外のあり方と対比する中で、その特性やそうした変遷過程をもたらす社会的背景についても分析を行なってゆきたい。

註1 柄鏡形住居や敷石住居の名称については「敷石をもたない（あるいは部分的な敷石にとどまる）柄鏡形住居も多いことと、敷石住居の基本形態は柄鏡形を呈するという認識」から敷石住居を「柄鏡形（敷石）住居」と総称している山本暉久氏の見解（文献95）に従い、ここでもこれを使用した。

註2 160軒のうち、その30%を占める50軒が三原田遺跡で検出されたものである。三原田遺跡では、赤山谷造氏により、柄鏡形（敷石）住居址をH型式として分類されているが、その中には形態不明なものも含まれており、数の上では若干少なくなる可能性もある。

註3 文献92～96を参照。

註4 出入口部の埋甕については、これまで幼児埋葬、胎盤収納、建築儀礼等に関わる施設とされており、その性格付けは一定していない。しかし、いずれも屋内祭祀施設とする点では、ほぼ一致している。

出入口部に土壇をもつ例として埼玉県坂東山1・3号敷石住居址がある。また、出入口部ではないが、千葉県下の木戸作遺跡28号住居址、小金沢遺跡4・9・10号住居址、祇園原遺跡33・38・44・46・58号住居址、金楠台遺跡2号住居址、曾谷遺跡E-33号住居址などは、張出部先端に土壇をもつ例である。こうしたものも二之堰遺跡と同様、「埋甕」より派生したものと考えられる。

註5 文献129を参照。

註6 文献104を参照。

註7 文献103を参照。

註8 文献105を参照。

註9 文献145・146・147を参照。

註10 小室遺跡1号住居址は平地式の柄鏡形（敷石）住居址と判断されているが、これは竪穴の掘り込みが黒色土中にあるために土層的に周壁が確認できないものと考えられるのであり、平地式とするには問題がある。

註11 小林公明氏は、この周磔について小金井市前原遺跡4号住居址の分析の中では明言していない。しかし、本論をまとめるにあたって、小林氏と意見を交わす機会を得てこの点を確認したところ、「木壁」の根固めとしての機能を考えている。

註12 長野県井戸尻遺跡6号住居址や増野新切遺跡D-15号住居址などでは、一部の周壁沿いに「石垣状に並べた土止石組」とされるものや、縁石状の敷石を有している。時期的には柄鏡形（敷石）住居成立期以前に属するものであるが、これらは径10～20cmの石材を用いている点やその配置のあり方は、先に上げた周礫の特徴とは異なる。

註13 註7と同じ。

註14 文献96を参照。

註15 文献97を参照。

註16 註14と同じ。

註17 註14と同じ。

註18 周礫内からの出土遺物については、二之堰遺跡でも凹石を中心として、石斧、石皿破片、石錘、などが多数検出されており、東京都下の前原遺跡4号住居址、新山遺跡20号住居址などでもそうした事例がみられる。こうした遺物は、意識的に置かれたと見ることもできるが、周礫の一素材として転用されたことも考慮しなければならない。仮りに転用されたとの判断がつかずば、こうした遺物が当初保有していた機能・性格は消失していると考えられるのであり、慎重な判断を必要としよう。

註19 文献94を参照。

註20 文献107を参照。

註21 「環礫方形配石遺構」が、加曾利E4式期段階の周礫を有する柄鏡形（敷石）住居址に系譜をもつとする考え方は、すでに戸田哲也氏によって提示されている。戸田氏は、横浜市平台北遺跡第5地点の「環礫方形配石遺構」について、小金井市前原遺跡4号住居址との間に「何らかの系統的関連を推測」しているが、そうした結論に至るプロセスに若干問題がある。平台北遺跡第5地点の「環礫方形配石遺構」は加曾利BⅠ式期に属し、第254図5に示したように柄鏡状の堅穴の掘り込みを有したものである。しかし、戸田氏が「環礫方形配石遺構」と呼んでいるのは、堅穴を除外した周礫部分であり、この堅穴状の柄鏡形住居の廃棄後に構築されたとしている。つまり、両者の間に「①柄鏡形堅穴住居の構築——使用、②柄鏡形堅穴住居の廃棄、③廃棄後の堅穴住居址中に土砂の流入（覆土第1次堆積）、④方形配礫の構築」という時間的変遷を考えているのである。

こうした結論に達した背景には、周礫が「床面より2～15cm程浮いた状態で検出され、帯状に7本の主柱穴を覆うように配置されている」という状態を「配礫が下部堅穴住居址の柱穴部に作られている」と判断したことが窺える。しかし、こうした検出状況が、柄鏡形住居址と周礫との同時性を否定する根拠にならないことは、新山遺跡での山崎丈氏の見解に対する批判として述べた通りである。戸田氏の主張する前原遺跡4号住居址との系譜は、「環礫方形配石遺構」が柄鏡形堅穴住居址に付属する施設と見なすことによって、初めて明解なものとなる。

第2節 古墳時代

1. 古墳時代前期の遺構と遺物

古墳時代前期の遺構としては住居址13軒と方形周溝墓9基を検出した。既述のとおり遺構相互の重複関係は認められず、居住域と墓域が近接しながらも画された状態で存在するといえる。

住居址は第48号住居址のように浅間C軽石が埋没土中に堆積したのもあり集落形成に時間的な幅があることがうかがえる。

また、方形周溝墓は立地的に台地上と、微高地上の2つのグループに分けることが可能である。台地上の第1号方形周溝墓から第4号方形周溝墓のうち、第2号からは高杯が出土している。周溝埋没土中から出土した破片であるが他の土器に比して後出的様相が認められる。第3号の周溝埋没土中には浅間C軽石の堆積が確認されている。これからすると第3号、構築後、一段階おいて第2号が構築されたと考えられる。第4号は形状が第2号と類似するが第1号とともに出土遺物が皆無のためその継続性は不明である。しかし、この4基が1つの集団の有力者層により継続して構築されたと考えられないだろうか。

荒砥地域（この場合、旧荒砥村地内をさす）周辺では方形周溝墓の検出例が10遺跡におよび約70基の調査がおこなわれている。遺構の個々については本報告のおこなわれていない遺跡が多く詳細については今後検討されると思われる。そこで、立地、居住域との関係について簡単にふれたのが第25表である。

また、古墳時代前期の住居址を調査した遺跡は21例を教える。これらの遺跡ではいずれも沖積地を臨む台地縁辺を中心に住居址が立地している。沖積地からは浅間B軽石の降下により埋没した水田址の検出例も多く、住居址の変遷と考え合わせると古墳時代から伝統的な水田耕作がおこなわれていたことが推測できる。

荒砥上ノ坊遺跡や荒砥諏訪西遺跡では住居址に近接して、浅間C軽石に埋没した畠址が検出されている。これらの集落の立地傾向については既に『信濃』第35巻4号^{註1}において分析がおこなわれており、小河川の流域ごとに河川灌漑による水田耕作地を生産基盤とした拠点的な集落が存在していたと考えられている。

方形周溝墓はこれらの遺跡の全てから検出されたわけではない。しかし、調査区域が限定されていることや遺構が通常の分布調査等で確認することが困難な性格であることを考えると拠点的な集落には居住域と近接して墓域が設定され、方形周溝墓が構築されたことが考えられる。

田口一郎氏は『鈴ノ宮遺跡』^{註2}の報告で前方後方形周溝墓の集成をおこなうとともに「集落との関連」・「方形墳墓との群集性」^{註3}の2つの観点から、立地傾向を2大別4分類している。堤東遺跡の例は単純に考えればⅡaになるが、調査担当者の所見からは集落が近接していることが予想される。その他の遺跡の周溝墓は多少の相違はありながらも居住域に近接していることが表からよみとれる。

周溝内から出土する土器は樽IV期、赤井戸III期、土師器で、現在までに確認されている周溝墓はいずれも古墳時代の造墓と思われる。それぞれの土器の系譜が集団の系譜を反映するとすれば、荒砥地域周辺では古墳時代の前期には集団の系譜は異なりながらも、方形周溝墓が有力者層の墓制として採用されていたことが示されているといえよう。また、遺構個別の検討からは大型の規模の遺構からは土師器が、上縄引遺跡のように小型のものや荒砥上ノ坊遺跡のように周溝を共有する形態をとるものから赤井戸式や櫛描文系の系譜を引く土器が出土していることは集団の内容が出土土器に反映されているようにも思われる。しかしながら、土器の詳細な検討も必要であり堤東遺跡の前方後方形周溝墓の位置づけとともに今後の課題となろう。

また、これらの方形周溝墓と古墳との関係であるがこの地域には現在のところ前期古墳が確認されていない

い。近接する古墳としては伊勢崎市の華蔵寺裏山古墳と前橋市の前橋天神山古墳がある。また、中期の古墳としては今井神社古墳をあげることができる。しかしながらこれらの古墳を築造した首長層と方形周溝墓を造墓した集団の有力者との関係については詳細な分析はできない。ただし、方形周溝墓が居住域に近接している点は、背景の相違もあると思われるが後期古墳と同時期の居住域の立地関係に類似する点であると思われる。

註1 参考文献の90

註2 『鈴ノ宮遺跡』高崎市教育委員会 1978（昭和53）年のP55～57

註3 『昭和58年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報』群馬県教育委員会 1984（昭和59）年のP27

註4 ここでいう樽IV期、赤井戸III期とは『第三回三県弥生シンポジウム群馬県資料—弥生終末期の土器 4世紀の土器』1982（昭和58）年の三宅敦気、相京建史氏の樽式土器の細分、小島純一氏の赤井戸土器の細分による。

第25表 荒砥地域周辺の方形周溝墓検出遺跡

出土土器の項の樽は樽式、赤は赤井戸式、土は土師器

方形周溝墓検出の遺跡名	検出数	出土土器			立地傾向・その他	住居址検出の遺跡	検出数	出土土器			距離	生産域について	備考
		樽	赤	土				樽	赤	土			
荒砥二之堰	9			○	台地と微高地の2つのグループからなる。	荒砥二之堰	13			○	接	遺跡地の北東が水田可耕地か。	住居址との重複関係なし。後期古墳群形成。
荒砥島原	6		○	○	沖積地に接した微高地2つのグループに分かれ、埋没土にC軽石。	荒砥島原	6			○	接	近接する宮川の沖積地と考えられる。	弥生中期、平安時代住居址と立地が同じ。
荒砥上ノ坊	6	?	?	○	2つに分かれる。一部周溝を共有。C軽石堆積。調査区外に広がる。	荒砥上ノ坊	27	○	○	○	近	C軽石に埋没した畠址。近接する沖積地は水田可耕地。	住居址とは立地する台地がことなる。住居址は弥生後半から継続。
荒砥北原	4			○	1基からは焼成前底部穿孔の土器出土。	?						荒砥川よりの沖積地か。	近接する集落の検出はないが、遺跡西側に立地していた可能性あり
荒砥宮田	1			○	1期単独で検出。	荒砥宮田	20				接	周溝墓の立地する台地の両側の沖積地が水田可耕地。	荒砥諏訪西遺跡と近接する。
荒砥諏訪	13			○	2つのグループに分かれる。別の集団の構築か。	荒砥諏訪西	49			○	近	住居址に接して畠址を検出。沖積地は水田可耕地である。	住居址とは立地をことにする。
堤東	3	○	?	○	前方後方形周溝墓1基	?						遺跡西縁に沖積地あり	
上縄引	12	○	○	○	C軽石降下前後に分かれる。一部周溝を共有。	?						調査区の東側に沖積地が広がる。	古墳が築造され、墓域として継続。
北山	8	?	○	?	2つのグループに分かれ、別の集団によるか。	北山	28	○	○	○	接	調査区の両側に沖積地がある。	住居址は弥生後半から継続。
荒砥上川久保	6			○	少なくとも2つのグループに分かれる。焼成前底部穿孔土器出土。	荒砥上川久保	2			○	接	調査区の東側に沖積地がある。	前期の住居址は調査区外に立地か。居住域として平安時代まで継続

註1 この他に荒砥北三木堂遺跡、川籠皆戸、荒砥二之堰遺跡で円形状周溝を検出。

註2 荒砥島原、上縄引、北山遺跡を除いては詳細な報告がおこなわれておらず、今後その成果の報告とともにこの表も修正の必要がある。

2 古墳時代後半の遺構と遺物

古墳時代後半の遺構としては、5軒の竪穴住居址と21基の古墳を調査した。ここではいくつかの問題点をまとめておきたいと思う。

(1)古墳の築造について 本遺跡における古墳の築造方法についてまとめると以下の点があげられる。

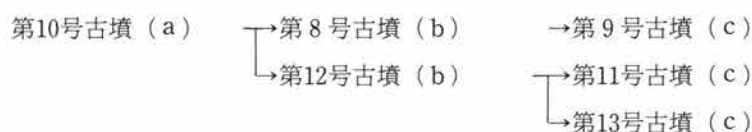
- a 主体部は輝石安山岩の割れ石を使用し乱石積した両袖型の横穴式石室である。
- b 石室は南側を向いて開口し、羨道開口部前には、いわゆる「前庭」状遺構を有する。
- c 石室の構築に際しては「掘り方」（逆台形状の竪穴）を掘り、その底面に根石を置く方法をとる。

これらの特徴は、周辺の赤堀村、伊勢崎市所在の古墳からも看取できるものであり、これらの古墳の築造時期は7世紀後半のものが多い。また、構築にあたっては尺が用いられており、本遺跡の古墳もなんらかの尺度が用いられたと思われるが細部の検討については今後の課題としたい。

(2)古墳の群構成について 通例は、出土遺物を中心に石室の構築状況や周堀等の外部施設の特徴を組み合わせて分析が進められているようであるが、本遺跡では石室内からの出土遺物が少量であるので、周堀の形状を中心に述べてみたい。

周堀の形状は、a全周するもの b一部掘られているもの c「前庭」状の掘り込みのみのものの3つに分類できる。後の二者は古地にあたり既存の古墳の周堀と接することを避けるために周堀が変形した例が報告^註されている。この観点から本遺跡の古墳個々の立地と形状を検討すると次のような変化がわかる。

第4号古墳（a全周）→第3号古墳（b、一部）→第1号古墳（c、「前庭」状）



このようにしてみると、a、周堀の全周するもの→b、一部掘られるもの→c、「前庭」状といった形状の変遷が考えられる。このことは一定の区域の内に古墳を築造しなければならないような規制と、土工量を少なくして古墳の築造に必要とする労力を削減してゆく方向が一致し、墓域として、主体部の周囲を画していた周堀が、低い墳丘を構築するための封土確保の為の掘削坑へ変化していったとも推定できる。

本遺跡の古墳は構築方法や周堀内に堆積した浅間B軽石の堆積状態等から7世紀の後半にその形成が開始されたと考えられる。また、その終焉については判断するにたりる資料が少ない。「前庭」状遺構からの出土遺物により墓域としては8世紀前半まで継続していたことが確認できた。また、小規模の石室6基は横穴式石室の形状を有しているものの、追葬の機能は失なわれており、本遺跡の中で最終段階に位置づけられると思われる。

(3)古墳と住居址の重複について 住居址6軒のうち4軒が古墳と重複する。住居址は出土土器から6世紀後半から7世紀初頭の時期が考えられ、廃棄後、長い時間をへないで居住域から墓域へと変化していったことがわかる。本遺跡は中期の遺構が認められないものの前期から後期にかけて居住域になっていたものが7世紀後半から墓域にあてられ、以後、居住域になることはなかったと思われる。神沢川をはさんで対峙する牛伏・中畑遺跡においても同様の変化が認められる。原因については自然環境の変化や計画的な移動を想起できるが、このような土地利用の変遷については、調査区域内の分析で解決できない問題であり今後の課題としたい。

註 『赤堀村地蔵山の古墳2』の中で松村一昭氏が周堀については分析をおこなっている。

〈参考文献〉

- 1 平野進一 「群馬県荒砥前原遺跡—赤城山における弥生中期から後期にかけての住居址とその出土遺物について—」
『信濃』第28巻第4号 1976（昭和51）年
- 2 原田恒弘・能登 健 「二之宮遺跡群緊急発掘調査概報」 群馬県教育委員会 1976（昭和51）年
- 3 能登 健・内田憲治・石坂 茂 「前原遺跡・白井遺跡・赤石城跡」 群馬県教育委員会 1977（昭和52）年
- 4 細野雅男 「青柳遺跡」 『年報 1』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982（昭和57）年
- 5 石坂 茂・小島敦子・徳江秀夫・新井悦子 「島原遺跡」 1984（昭和59）年
- 6 能登 健・西田健彦 「宮川遺跡」 群馬県教育委員会 1980（昭和55）年
- 7 細野雅男・石坂 茂・小島敦子・徳江秀夫 「二之宮遺跡群」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981（昭和56）年
- 8 細野雅男・菊地 実・斉藤利昭 「大日塚遺跡」 『年報 1』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981（昭和56）年
- 9 鹿田雄三・小島敦子・斉藤利昭 「上ノ坊遺跡」 『年報 2』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982（昭和57）年
- 10 井上唯男 「前橋市城南地区の土師使用遺跡」 荒砥史談会 1968（昭和43）年
- 11 松本浩一・福田紀雄・木部日出男・池田茂則・田口正美 「鶴谷遺跡群」 前橋市教育委員会 1981（昭和56）年
- 12 木部日出男・鶴木晋一・田口正美 「鶴谷遺跡群II」 前橋市教育委員会 1982（昭和57）年
- 13 鹿田雄三 「女堀遺跡・前田遺跡・荒砥北三木堂遺跡」 『年報 1』 1981（昭和56）年
- 14 柿沼恵介 「荒口前原遺跡」 『まえあし』14 1973（昭和48）年
- 15 小林行雄・杉原荘介 「弥生式土器集成」 日本考古学協会 1958（昭和33）年 他多数
- 16 尾崎喜左雄 「前橋市史」 第1巻 1971（昭和46）年
- 17 細野雅男・鹿田雄三・下城 正・相京建史・中沢 悟・藤巻幸男・菊地 実・小島敦子・斉藤利昭・徳江秀夫 「荒砥荒子遺跡・荒砥宮田遺跡・荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984（昭和59）年
- 18 井野誠一・入内島裕美 「富田遺跡」 前橋市教育委員会 1981（昭和56）年
- 19 福田紀雄・松村親樹・杉浦つや子・木部日出男・井野誠一・飛田野正佳 「富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群」
前橋市教育委員会 1980（昭和55）年
- 20 木部日出男・前原照子・松村親樹・岸田治男・江部和彦・鶴木晋一・入内島裕美 「富田遺跡群・西大室遺跡群」 前橋市教育委員会 1982（昭和57）年
- 21 井上唯雄・神保侑史・徳江 紀・西田健彦・松田 猛 「昭和58年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報」 群馬県教育委員会 1984（昭和59）年
- 22 「荒砥下押切I遺跡・舞台西遺跡・中屋敷遺跡」 『年報 2』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983（昭和58）年
- 23 相京建史・中沢 悟・菊池 実 「荒砥中屋敷II遺跡・下押切II遺跡」 『年報 2』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983（昭和58）年
- 24 鹿田雄三・相京建史・中沢 悟・小島敦子・菊池 実・斉藤利昭 「荒砥荒子遺跡」 『年報 2』 1983（昭和58）年
- 25 鹿田雄三・相京建史・中沢 悟・小島敦子・菊池 実・斉藤利昭 「荒砥荒子遺跡の方形区画遺構」 『研究紀要 1』
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983（昭和58）年
- 26 能登 健・飯田陽一 「荒砥東原遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1979（昭和54）年
- 27 井上唯雄・須田 茂・内田憲治 「荒砥五反田遺跡」 群馬県教育委員会 1978（昭和53）年
- 28 井上唯雄 「荒砥上諏訪遺跡」 群馬県教育委員会 1979（昭和54）年
- 29 能登 健・飯田陽一 「荒砥上諏訪遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981（昭和56）年
- 30 前原照子・林喜久夫・松村親樹・江部和彦 「西大室遺跡群」 1983（昭和56）年
- 31 松本浩一・飯塚 誠・杉浦つや子・近藤昭一・須田まさえ 「西大室遺跡群II」 前橋市教育委員会 1981（昭和56）年
- 32 松村一昭 「下触向井遺跡発掘調査概報」 赤堀村教育委員会 1980（昭和55）年
- 33 松村一昭 「今井南原遺跡発掘調査概報」 赤堀村教育委員会 1980（昭和55）年
- 34 松村一昭 「川上遺跡・女堀遺構発掘調査概報」 赤堀村教育委員会 1980（昭和55）年
- 35 松村一昭 「五目牛洞山遺跡発掘調査概報」 赤堀村教育委員会 1980（昭和55）年
- 36 松村一昭 「五目牛遺跡群及び赤堀村8号墳発掘調査概報」 赤堀村教育委員会 1979（昭和54）年
- 37 相沢忠洋 「群馬県赤堀石山遺跡」 『考古学ジャーナル』6 1967（昭和42）年
- 38 「文化財調査報告書第12集—昭和56年度—」 前橋市教育委員会 1981（昭和56）年

参考文献

- 39 石坂 茂・飯田陽一・岩崎泰一 「牛伏遺跡」『年報 2』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 (昭和58) 年
- 40 中澤貞治 「牛伏第1号墳・祝堂古墳・大沼上遺跡」 伊勢崎市教育委員会 1982 (昭和57) 年
- 41 中澤貞治・村田喜久夫 「蟹沼古墳群・宮貝戸下遺跡」 伊勢崎市教育委員会 1978 (昭和53) 年
- 42 中澤貞治・村田喜久夫 「大沼下・西稲岡遺跡」 伊勢崎市教育委員会 1977 (昭和52) 年
- 43 村田喜久夫 「中組遺跡」 伊勢崎市教育委員会 1982 (昭和57) 年
- 44 相沢貞順 「八坂遺跡調査概報」 東国古文化研究所・前橋育英高校郷土部・伊勢崎市教育委員会 1973 (昭和48) 年
- 45 村田喜久夫・平田喜孝・須長泰一 「西太田遺跡」 伊勢崎市教育委員会 1983 (昭和58) 年
- 46 尾崎喜左雄 「上野国の信仰と文化」 1970 (昭和45) 年
- 47 峰岸純夫・山本隆志・山本良知・能登 健 「女堀」 群馬県教育委員会 1980 (昭和55) 年
- 48 峰岸純夫・能登 健 「赤城山南麓の開発と遺構《女堀》」『アーバンクボタ』19号 1981 (昭和56) 年
- 49 山本良知 「御富士山古墳」『群馬県史』資料編3 1981 (昭和56) 年
- 50 「群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)」 群馬県教育委員会 1971 (昭和46) 年
- 51 細野雅男 「今井神社古墳群」『年報 2』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 (昭和57) 年
- 52 「群馬の遺跡」 群馬県教育委員会 1963 (昭和38) 年
- 53 柴田常恵 監修 「群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告」第1輯 1928 (昭和3) 年
- 54 後藤守一 「上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳」『帝室博物館学報』6 帝室博物館 1932 (昭和7) 年
- 55 松村一昭 「南原B号古墳」『群馬県史』資料編3 1981 (昭和56) 年
- 56 石塚久則・飯田陽一 「今宮遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981 (昭和56) 年
- 57 中澤貞治 「蟹沼古墳群」 伊勢崎市教育委員会 1982 (昭和57) 年
- 58 中澤貞治・村田喜久夫 「蟹沼東古墳群」 伊勢崎市教育委員会 1979 (昭和54) 年
- 59 中澤貞治・村田喜久夫 「蟹沼東古墳」 伊勢崎市教育委員会 1982 (昭和57) 年
- 60 中澤貞治 「宮貝戸古墳群・蟹沼東古墳群」 伊勢崎市教育委員会 1983 (昭和58) 年
- 61 松村一昭 「赤堀村地藏山の古墳」1 赤堀村教育委員会 1978 (昭和53) 年
- 62 松村一昭 「赤堀村地藏山の古墳」2 赤堀村教育委員会 1979 (昭和54) 年
- 63 梅沢重昭 「群馬県地域における初期古墳の成立(1)」『群馬県史研究』2 群馬県史編さん室 1975 (昭和50) 年
- 64 山崎 一 「群馬県古城墓の研究」上巻 1971 (昭和46) 年
- 65 白石浩之・小林譲一・出居 博 「細田遺跡」 神奈川県教育委員会 1981 (昭和56) 年
- 66 若月省吾 「笠懸村稲荷山遺跡」 笠懸村教育委員会 1980 (昭和55) 年
- 67 今村啓爾 「諸磯式土器」『縄文文化の研究3』 1982 (昭和57) 年
- 68 松本浩一・井上唯雄・桜場一寿・原 雅信・石坂 茂・石北直樹・大塚昌彦 「空沢遺跡」 渋川市教育委員会 1979 (昭和54) 年
- 69 能登 健・下城 正 「梨の木平遺跡」 群馬県教育委員会 1977 (昭和52) 年
- 70 谷井 彪 「称名寺式土器の推移について」『埼玉県立博物館 紀要』3 埼玉県立博物館 1976 (昭和51) 年
- 71 鈴木保彦 「東正院遺跡調査報告」 神奈川県教育委員会・東正院遺跡調査団 1972 (昭和47) 年
- 72 郷田良一・小宮 孟 「千葉南部ニュータウン」7 日本住宅公団・首都圏宅地開発本部・財団法人 千葉文化財センター 1979 (昭和54) 年
- 73 今村啓爾 「称名寺式土器の研究(上)」『考古学雑誌』第63巻第1号 1977 (昭和52) 年
- 74 今村啓爾 「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌』第63巻第2号 1977 (昭和52) 年
- 75 柳澤清一 「称名寺土器論(前篇)」『古代』第63号 1977 (昭和52) 年
- 76 柳澤清一 「称名寺土器論(中篇)」『古代』第65号 1979 (昭和54) 年
- 77 柳澤清一 「称名寺土器論(続)」『古代』第66号 1979 (昭和54) 年
- 78 柳澤清一 「称名寺土器論(結篇)」『古代』第68号 1980 (昭和55) 年
- 79 青沼博之編 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村 その4—昭和51・52年度」 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 1981 (昭和56) 年
- 80 能登 健 「縄文文化解明における地域研究のあり方」『信濃』第27巻第4号 1975 (昭和50) 年
- 81 能登 健・石坂 茂 「重孤文土器の系譜」『信濃』第27巻第4号 1980 (昭和55) 年
- 82 「(シンポジウム'80) 縄文時代中期後半の諸問題——とくに加曽利E式と曾利式との関係について—— 土器資料

集成図集『神奈川考古』第10号 1982(昭和57)年

- 83 後藤守一 「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号 1939(昭和14)年
- 84 松村一昭 『赤堀村峯岸山の古墳』1 赤堀村教育委員会 1976(昭和51)年
- 85 松村一昭 『赤堀村峯岸山の古墳』2 赤堀村教育委員会 1977(昭和52)年
- 86 飯塚恵子・田口一郎編 『元島名將軍塚古墳』高崎市教育委員会 1981(昭和56)年
- 87 渡辺 寛・岩井淳之他 『南山古墳発掘調査報告』伊勢市教育委員会 1982(昭和57)年
- 88 塩野 博他 『鹿島古墳群』埼玉県教育委員会 1972(昭和47)年
- 89 白石太一郎・亀田 博・千賀 久・河上邦彦・関川尚功他 『葛城・石光山古墳群』奈良県立橿原考古学研究所 1976(昭和51)年
- 90 能登 健・石坂 茂・小島敦子・徳江秀夫 「赤城山南麓における遺跡群研究—農耕集落の変遷と溜井灌漑の出現—」『信濃』第35巻第4号 1983(昭和58)年
- 91 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一編 「特集・火山堆積物と遺物」『考古学ジャーナル』157 1979(昭和54)年
- 92 村田文夫 「柄鏡形住居址考」『古代文化』第25巻4号 1975(昭和50)年
- 93 村田文夫 「続・柄鏡形住居址考」『考古学ジャーナル』No170 1979(昭和54)年
- 94 山本暉久 「敷石住居出現のもつ意味」『古代文化』第28巻2・3号 1976(昭和51)年
- 95 山本暉久 「縄文時代中期終末期の集落」『神奈川考古』第9号 1980(昭和55)年
- 96 山本暉久 「敷石住居」『縄文文化の研究』8 1982(昭和57)年
- 97 鈴木保彦 「環礫方形配石遺構の研究」『考古学雑誌』第62巻第1号 1976(昭和51)年
- 98 鈴木保彦 「下北原遺跡」神奈川県教育委員会 1977(昭和52)年
- 99 笹森健一 「縄文時代住居址の一考察——張り出し付住居址・敷石住居址について——」『情報』2・3 1977(昭和52)年
- 100 桐原 健 「縄文中期にみられる室内祭祀の一姿相」『古代文化』第21巻3・4号 1969(昭和44)年
- 101 水野正好 「縄文式文化期における集落構造と宗教構造」『日本考古学協会 第29回総会研究発表要旨』1963(昭和38)年
- 102 米田耕之助 「縄文時代後期における住居形態の一樣相」『伊知波良』3 1980(昭和55)年
- 103 小林公明 「後期縄文文化における北太平洋的要素とメソアメリカ要素」『どるめん』29 1981(昭和56)年
- 104 小谷田政夫 「稲城市平尾台原遺跡の敷石住居址」『多摩考古』16 1979(昭和54)年
- 105 戸沢充則・山崎 丈・他 『新山遺跡』新山遺跡調査会・東久留米市教育委員会 1981(昭和56)年
- 106 郷田良一 「いわゆる柄鏡形住居址について」『研究紀要』7 (財)千葉県文化財センター 1982(昭和57)年
- 107 戸田哲也・田村良照・麻生順司 『平台北遺跡群』1984(昭和59)年
- 108 武藤雄六・宮坂光昭 「長野県諏訪郡富士見町井戸尻遺跡第二次調査概報」『信濃』第20巻第10号 1968(昭和43)年
- 109 遮那藤麻呂・金井正彦・他 「増野新切遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——下伊那高森町地内その二——』1973(昭和48)年
- 110 谷井 彪・他 『坂東山遺跡』埼玉県教育委員会 1973(昭和48)年
- 111 笹森 健一・他 『志久遺跡』1976(昭和51)年
- 112 沼沢 豊 『松戸市金楠台遺跡』松戸市教育委員会 1973(昭和48)年
- 113 堀越正行 『曾谷貝塚E地点』1978(昭和53)年
- 114 郷田良一・他 『千葉東南部ニュータウン10——小金沢貝塚——』(財)千葉県文化財センター 1982(昭和57)年
- 115 小田静夫・伊藤富治夫・C. T. キリー編 『前原遺跡I』国際キリスト教大学考古学研究中心 1981(昭和56)年
- 116 吉田 格・他 「武蔵野市御殿山遺跡調査報告」『武蔵野市史資料篇』1965(昭和40)年
- 117 桜井清彦 「縄文中期の集落跡——横浜市洋光台猿田遺跡」『考古学ジャーナル』7 1965(昭和40)年
- 118 坂上克弘・石井 寛 「縄文時代後期の長方形柱穴列」『調査研究集録』第1冊 1976(昭和51)年
- 119 山崎義男 「群馬県長井敷石住居址調査報告」『考古学雑誌』第39巻第2号 1954(昭和29)年
- 120 松島栄治 「権田敷石住居跡調査報告」『上毛史学』第5輯 1953(昭和28)年
- 121 園田芳雄 『千網谷戸』両毛考古学会 1954(昭和29)年
- 122 山崎義男 「群馬県碓氷郡築瀬遺跡」『日本考古学年報』7 1957(昭和32)年
- 123 相沢貞順 「乾田縄文住居跡調査記録」『コイノス』XIV 1959(昭和34)年
- 124 尾崎喜左雄 「群馬県利根郡乾田住居跡」『日本考古学年報』12 1962(昭和37)年
- 125 塚越甲子郎 『藤岡市中大塚縄文式敷石遺構調査概報』藤岡市教育委員会 1974(昭和49)年

参考文献

- 126 松村一昭 『曲沢遺跡発掘調査概要』赤堀村教育委員会 1978 (昭和53) 年
- 127 松村一昭 『曲沢遺跡発掘調査概要2』赤堀村教育委員会 1979 (昭和54) 年
- 128 松村一昭 『今井柳田遺跡発掘調査概要』赤堀村教育委員会 1981 (昭和56) 年
- 129 尾崎喜左雄・相沢貞順・他 『小室遺跡』北橋村教育委員会 1968 (昭和43) 年
- 130 田島桂男・川合 功「高崎市若田縄文遺跡」『まえあし』第11号 1972 (昭和47) 年
- 131 小林敏夫・桜場善又・坂爪久純 『境町北米岡G、H地点遺跡発掘調査報告書』境町教育委員会 1976 (昭和51) 年
- 132 小島純一『稻荷山K1・安通、洞A3』粕川村教育委員会 1981 (昭和56) 年
- 133 水田 稔 『寺谷遺跡発掘調査報告書(図版編)』白沢村教育委員会 1981 (昭和56) 年
- 134 五十嵐至 『保渡田II遺跡』群馬町教育委員会 1982 (昭和57) 年
- 135 前原照子・小暮 誠・前原 豊・他 「九料遺跡」『小神明遺跡群II』前橋市教育委員会 1984 (昭和59) 年
- 136 山崎義男 『先史遺跡考』1973 (昭和48) 年
- 137 相沢貞順・川合 功 「芳賀北部団地遺跡」『日本考古学年報』26 1975 (昭和50) 年
- 138 田島桂男 「大島原遺跡」『日本考古学年報』28 1977 (昭和52) 年
- 139 関 晴彦 「田端遺跡」『年報』1 (財群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 (昭和57) 年
- 140 赤山容造 『三原田遺跡(住居篇)』群馬県企業局 1980 (昭和55) 年
- 141 「古代の倉渕」『倉渕村誌』1975 (昭和50) 年
- 142 相沢貞順 「小神明遺跡」『前橋市史』第1巻 1971 (昭和46) 年
- 143 唐沢定市 「縄文文化のひろがり」『中之条町誌』第1巻 1976 (昭和51) 年
- 144 依田治雄 「原始・古代の鬼石」『鬼石町誌』1984 (昭和59) 年
- 145 山道紀郎・三浦圭介・成田滋彦 『近野遺跡発掘調査報告書(II)』青森県教育委員会 1975 (昭和50) 年
- 146 桜田 隆・塚谷健二・他 『青森市三内遺跡』青森県教育委員会 1978 (昭和53) 年
- 147 都出比呂志 「竪穴式住居の周堤と壁体」『考古学研究』第22巻2号 1975 (昭和50) 年
- 148 梅沢重昭 「坂原遺跡」『保美濃山遺跡』『下久保ダム水没地埋蔵文化財発掘調査報告書』1968 (昭和43) 年
- 149 横塚四郎 「藤岡市坂野縄文遺跡」『南毛文化』第1輯 南毛史学会 1959 (昭和34) 年

写 真 图 版



1 第1号住居址（東から）



2 第1号住居址遺物出土状態



3 第2号住居址（北から）



4 第3号住居址（南から）



5 第4号住居址（西から）



6 第4号住居址遺物出土状態



7 第5号住居址（南から）



8 第5号住居址遺物出土状態



1 第6号住居址（北から）



2 第6号住居址遺物出土状態



3 第7・8号住居址（北から）



4 第7・8号住居址遺物出土状態



5 第9号住居址（北東から）



6 第9号住居址遺物出土状態



7 第10号住居址（東から）



8 第10号住居址炉址



1 第11号住居址（東から）



2 第11号住居址（西から）



3 第12号住居址（西から）



6 第13号住居址（西から）



4 第12号住居址炉址



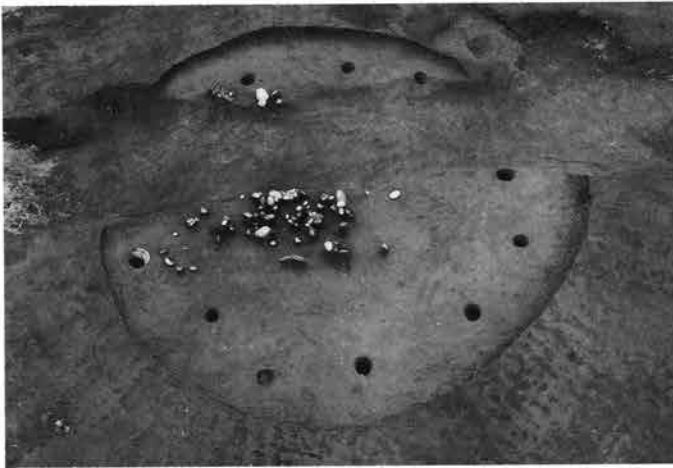
7 第13号住居址遺物出土状態



5 第12号住居址遺物出土状態



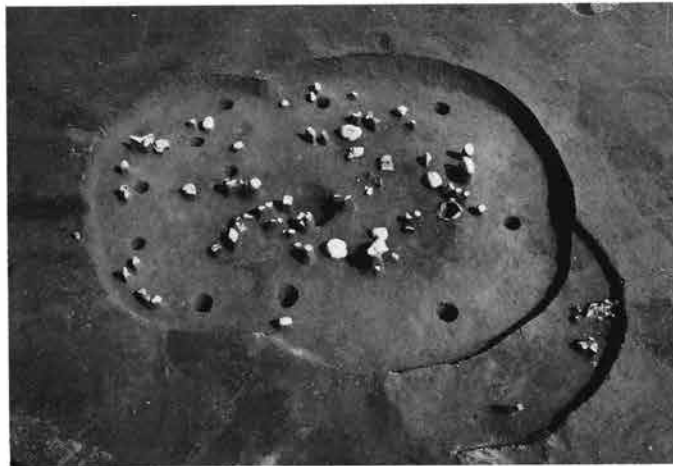
8 第13号住居址遺物出土状態



1 第14号住居址（東から）



2 第14号住居炉址



3 第15号住居址（西から）



4 第15号住居址遺物出土状態



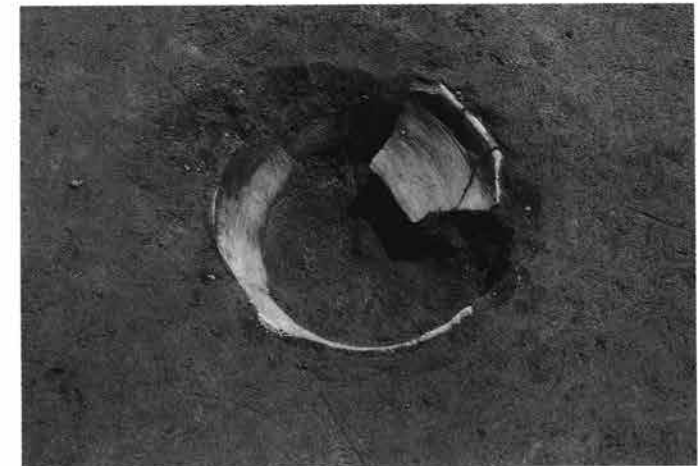
5 第15号住居址遺物出土状態



6 第15号住居址埋壙の状態



7 第16号住居址



8 第16号住居址炉址



1 第17号住居址（東から）



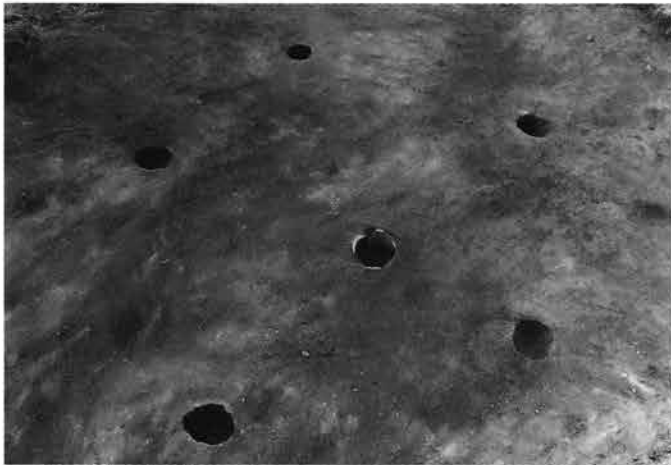
2 第17号住居址遺物出土状態



3 第19号住居址（北東から）



4 第19号住居址炉址



5 第20号住居址（南から）



6 第20号住居址炉址



7 第21号住居址（西から）



8 第21号住居址遺物出土状態



1 第22号住居址 (東から)



2 第22号住居址炉址



3 第23号住居址 (北東から)



4 第23号住居址炉址



5 第24号住居址 (東から)



6 第24号住居址炉址



7 第25号住居址 (南東から)



8 第25号住居址遺物出土状態



1 第26号住居址（北東から）



2 （南東から）



3 張り出し部



4 周礫の状態



5 第27号住居址（西南から）



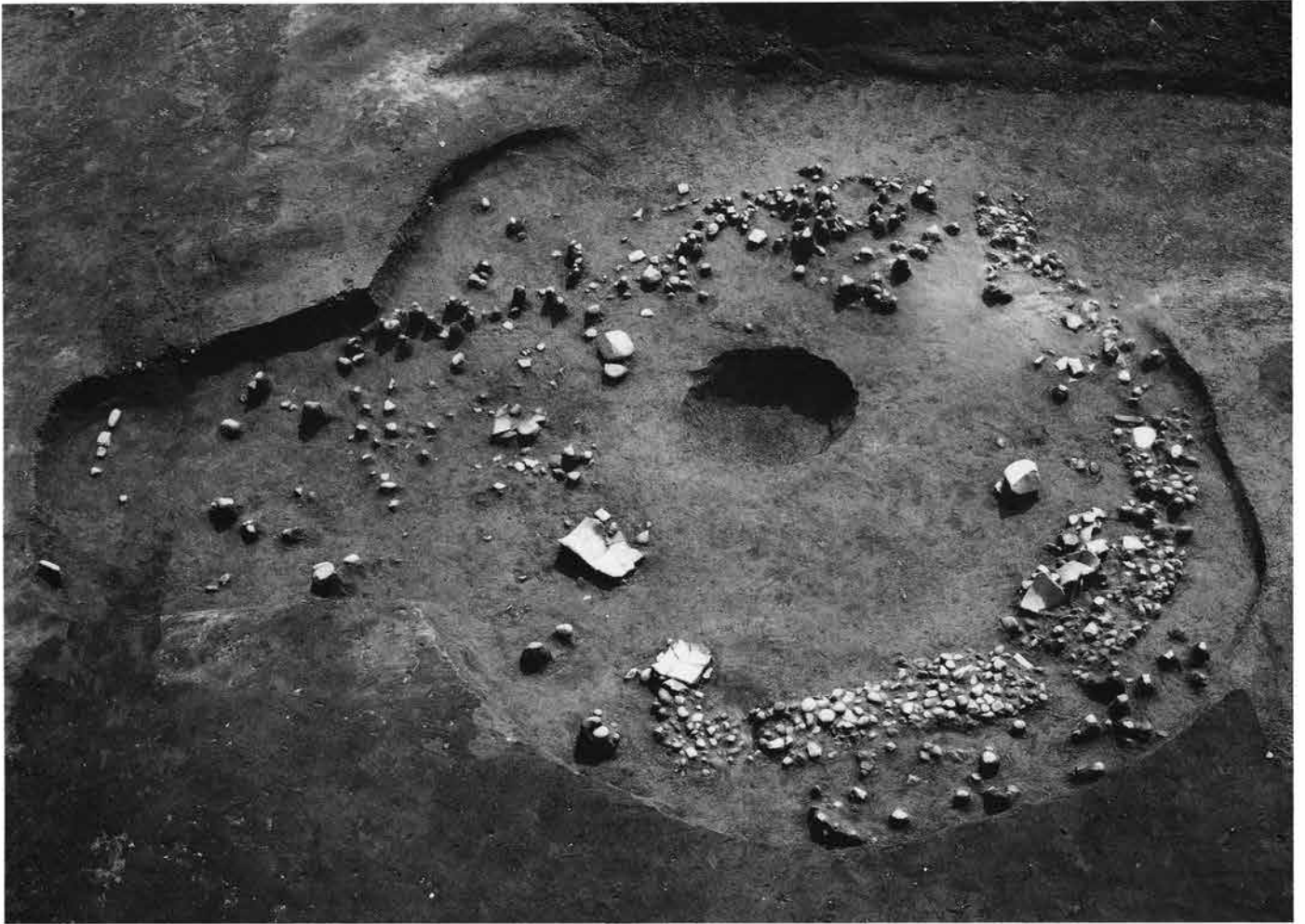
6 （南から）



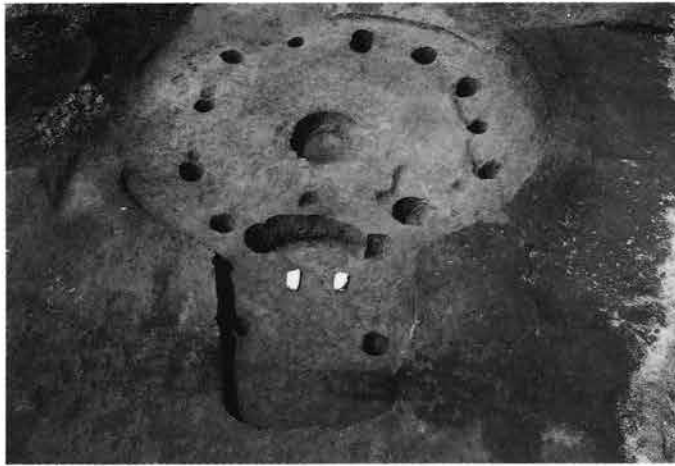
7 張り出し部



8 炉址



1 第28号住居址（北から）



2 （東から）



3 周礫の状態



4 遺物出土状態



5 遺物出土状態



1 第29号住居址（北から）



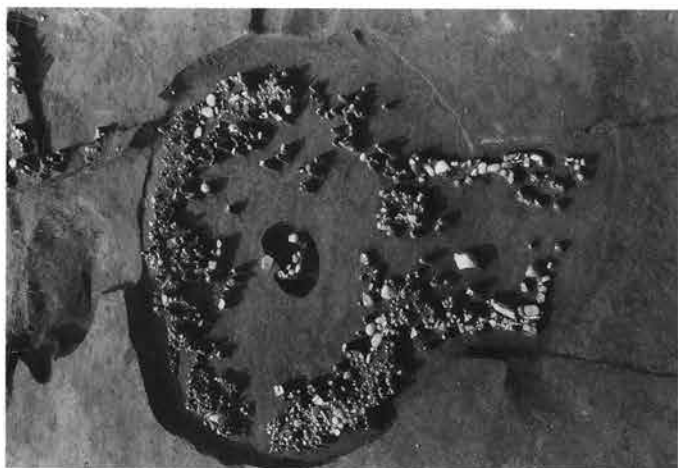
2 （東から）



3 周礫の状態



4 炉址



5 第30号住居址（南から）



6 （東から）



7 周礫の状態



8 炉址



1 第31号住居址 (南から)



2 (南から)



3 遺物出土状態



4 炉址



5 第32号住居址 (南から)



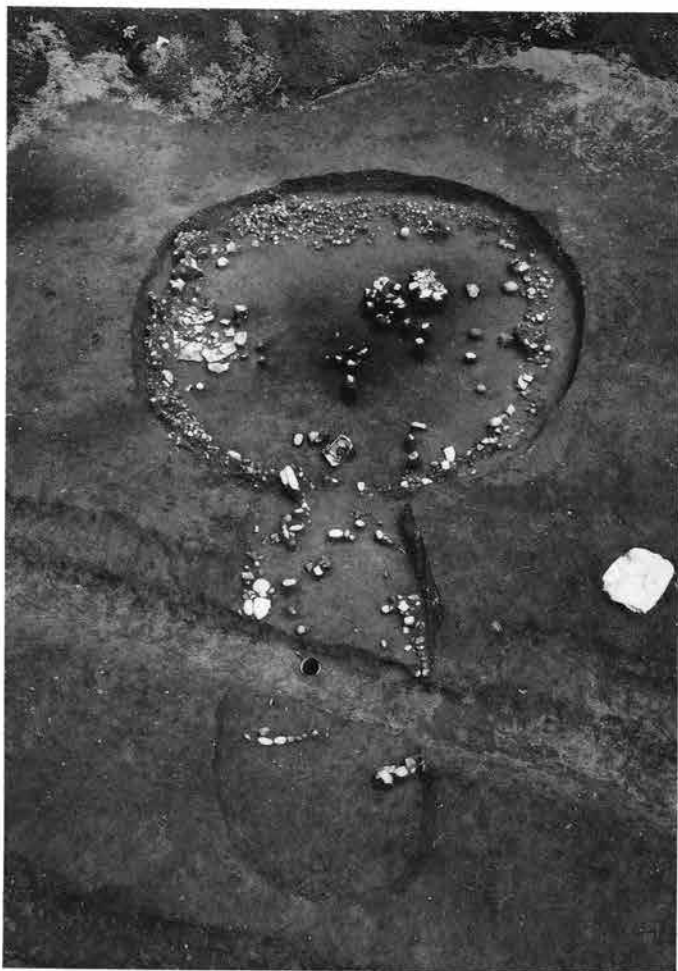
6 (南から)



7 埋藏の状態



8 炉址



1 第33号住居址 (南から)



2 (南から)



3 遺物出土状態



4 遺物出土状態



5 張り出し部 (西から)



6 炉址



1 第34号住居址 (南東から)



2 (南西から)



3 炉址



4 周礫の状態



5 張り出し部 (南から)



1 第35号住居址（北から）



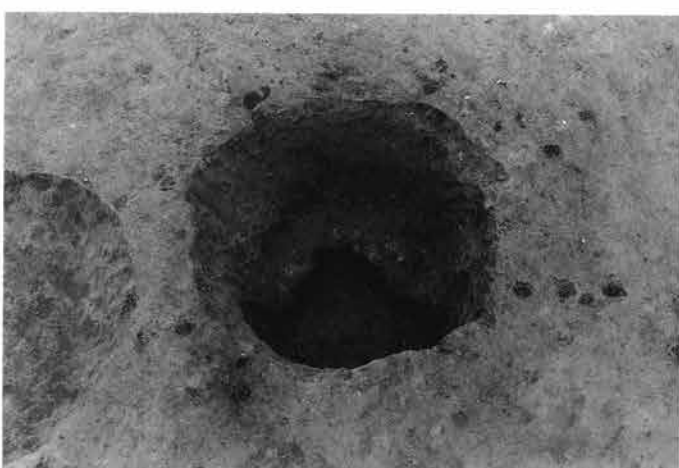
2 （北から）



3 （北から）



4 遺物出土状態



5 炉址



1 第1号土坑



2 第2号土坑



3 第4·5号土坑



4 第6号土坑



5 第8号土坑



6 第9号土坑



7 第10号土坑



8 第12号土坑



1 第11号土坑



2 第11号土坑遺物出土狀態



3 第14・15号土坑



4 第14・15号土坑遺物出土狀態



5 第13号土坑



6 第16号土坑



7 第17号土坑



8 第19号土坑



1 第21号土坛



2 第25・26号土坛



3 第22号土坛



4 第22号土坛遺物出土状态



5 第24号土坛



6 第24号土坛遺物出土状态



7 第27号土坛



8 第28号土坛



1 第29号土坛



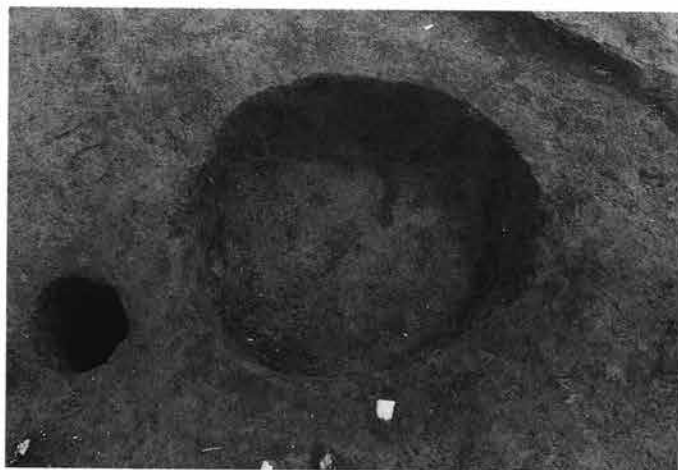
2 第30号土坛



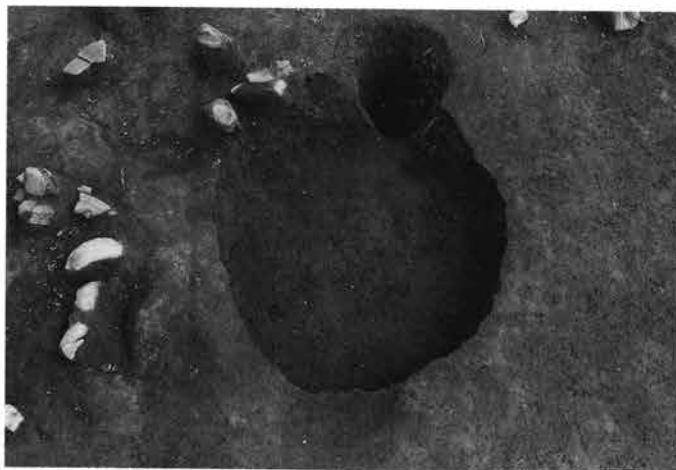
3 第32号土坛



4 第32号土坛遗物出土状态



5 第34号土坛



6 第35号土坛



7 第36号土坛



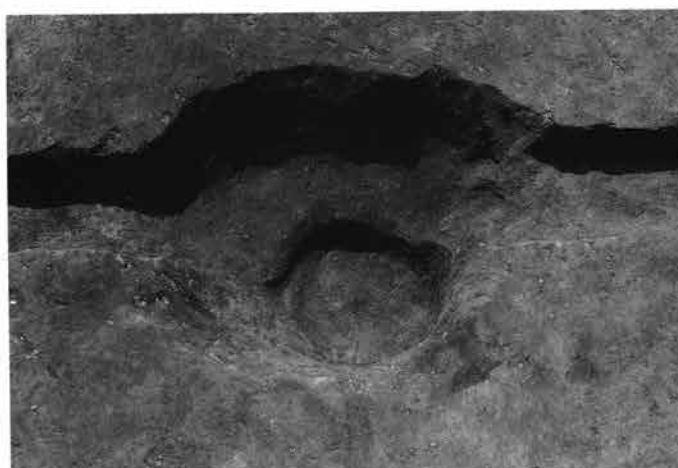
8 第37号土坛



1 第38号土坛



2 第39·40号土坛



3 第41号土坛



4 第42号土坛



5 第43号土坛



6 第44号土坛



7 第45号土坛



8 第46号土坛



1 第36号住居址（北西から）



2 第36号住居址遺物出土状態



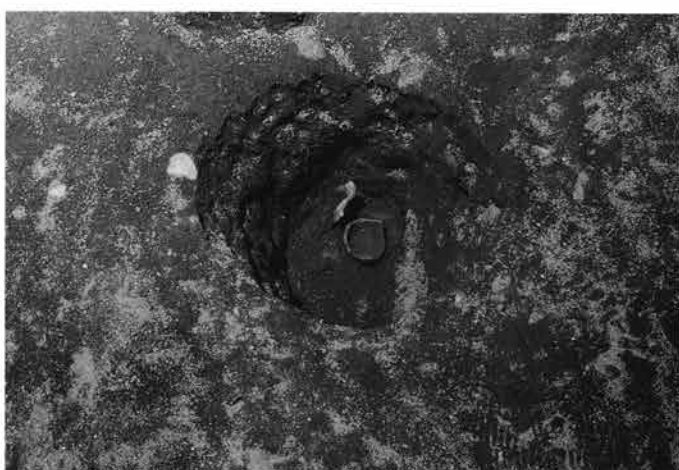
3 第37号住居址（西から）



4 第37号住居址遺物出土状態



5 第37号住居址遺物出土状態



6 第38号住居址柱穴内遺物出土状態



7 第39号住居址（西から）



8 第39号住居址貯蔵穴



1 第40号住居址（西から）



2 第41号住居址（北東から）



3 第41号住居址遺物出土状態



4 第41号住居址遺物出土状態



5 第42号住居址（北から）



6 第42号住居址遺物出土状態



7 第43号住居址（北から）



8 第43号住居址遺物出土状態



1 第48号住居址 (南から)



2 (南から)



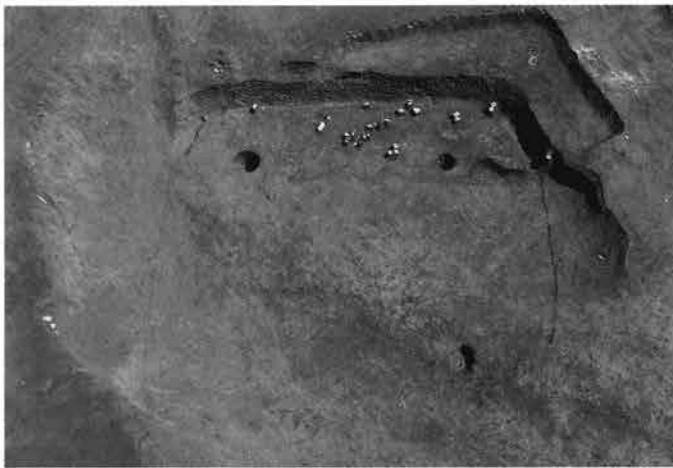
3 遺物出土状態



4 土層断面



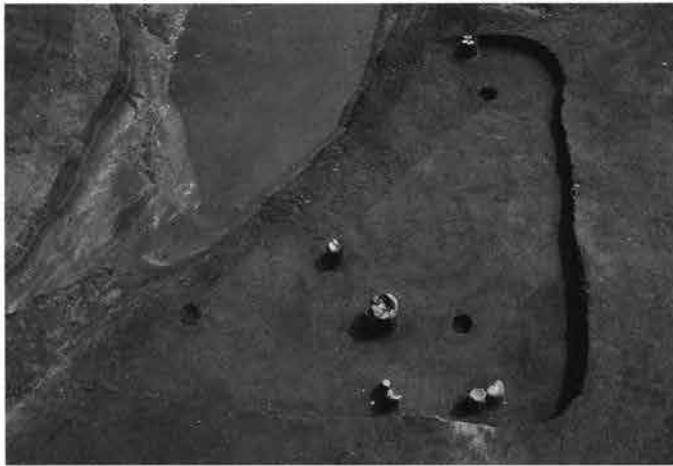
5 遺物出土状態



1 第45号住居址（西南から）



2 第45号住居址遺物出土状態



3 第46号住居址（西から）



4 第46号住居址遺物出土状態



5 第47号住居址（南から）



6 第47号住居址遺物出土状態



7 第49号住居址（西から）



8 第49号住居址遺物出土状態



1 第49号住居址カマド周辺



2 第49号住居址遺物出土状態



3 第50号住居址（西南から）



4 第50号住居址カマド



5 第50号住居址貯蔵穴



6 第50号住居址遺物出土状態



7 第51号住居址（南西から）



8 第51号住居址カマド



1 第52号住居址（南西から）



2 第52号住居址カマド



3 第53号住居址（南西から）



6 第54号住居址（西から）



4 第53号住居址カマド



7 第54号住居址カマド



5 第53号住居址カマド土層断面



8 第54号住居址遺物出土状態



1 第1号方形周溝墓（南から）



2 第2号方形周溝墓（南から）



3 第2号方形周溝墓遺物出土状態



4 第3号方形周溝墓（東から）



5 第4号方形周溝墓（南から）



6 第6号方形周溝墓（南から）



7 第5号方形周溝墓（西から）



8 第5号方形周溝墓遺物出土状態



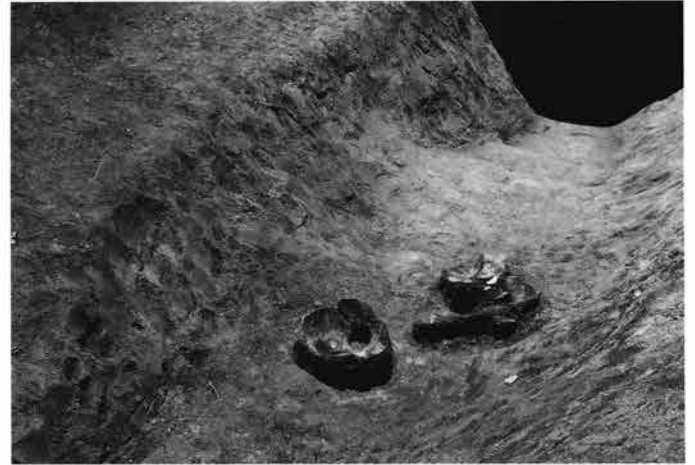
1 第7号方形周溝墓(西から)



4 第8号方形周溝墓(西から)



2 第7号方形周溝墓遺物出土状態



5 第8号方形周溝墓遺物出土状態



3 第7号方形周溝墓遺物出土状態



6 第8号方形周溝墓遺物出土状態



7 第9号方形周溝墓(南から)



8 円形周溝状遺構(南から)



1 二之塚古墳群全景



2 第3号古墳(南から)



1 第3号古墳石室構築状態（左壁）



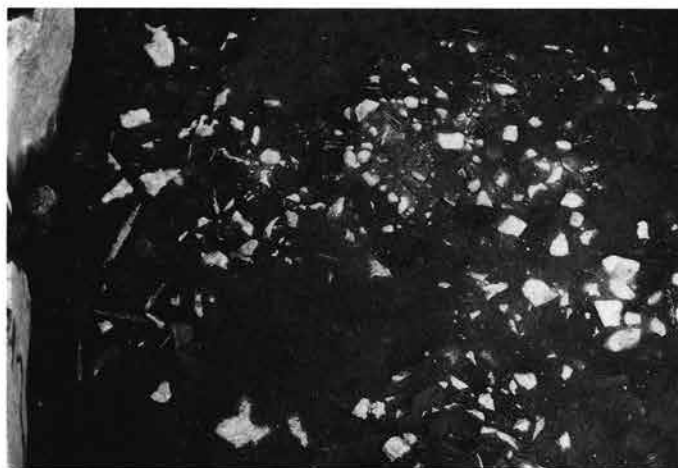
2 玄門の状態



3 遺物出土状態



4 遺物出土状態



5 遺物出土状態



6 遺物出土状態



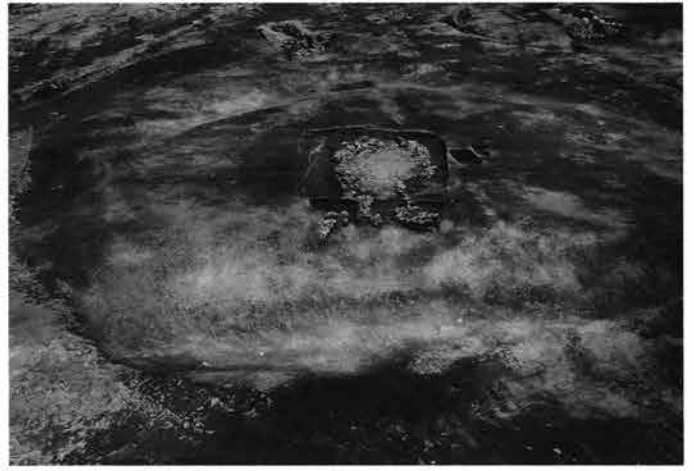
7 遺物出土状態



8 遺物出土状態



1 第1号古墳（南から）



2 第2号古墳（南から）



3 第4号古墳（南から）



4 第5号古墳（南から）



5 第6号古墳（南から）



6 「前庭」状遺構



7 第7号古墳（南から）



8 石室構築状態（左壁）



1 第8号古墳（南から）



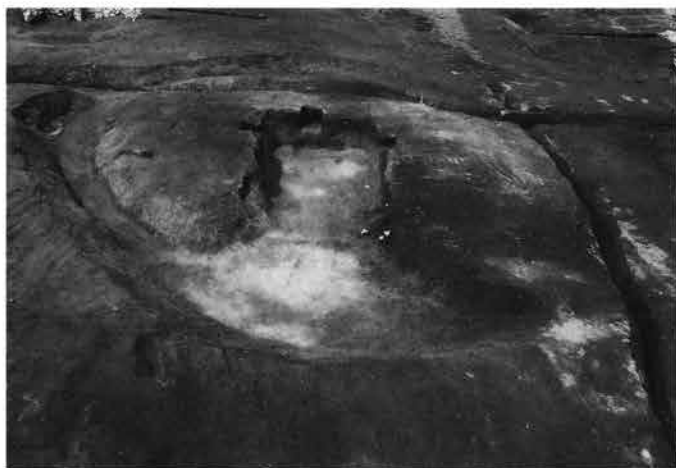
2 羨道部



3 第9号古墳（南から）



4 遺物出土状態



5 第10号古墳（南から）



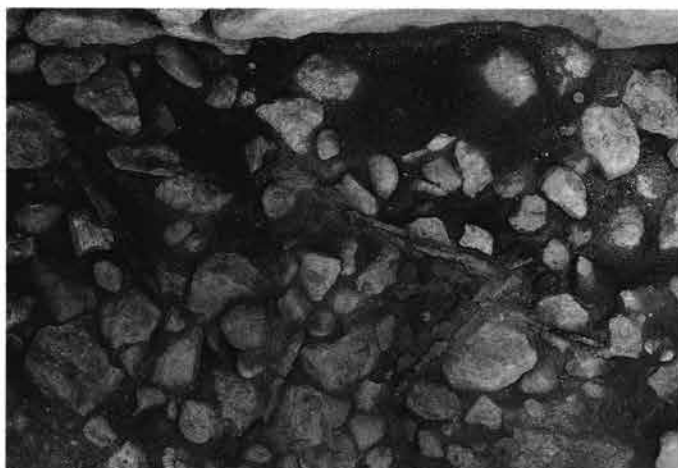
6 掘り方底面（西から）



7 第12号古墳（南から）



8 石室構築状態（左壁）



1 第12号古墳遺物出土状態



2 遺物出土状態



3 第13号古墳（南から）



4 玄室、人骨出土状態（西から）



5 第14号古墳（南から）



6 遺物出土状態



7 第20号古墳（東から）



8 第21号古墳（南から）



1 第11号古墳（南から）



2 「前庭」状遺構



3 石室構築状態（左壁）



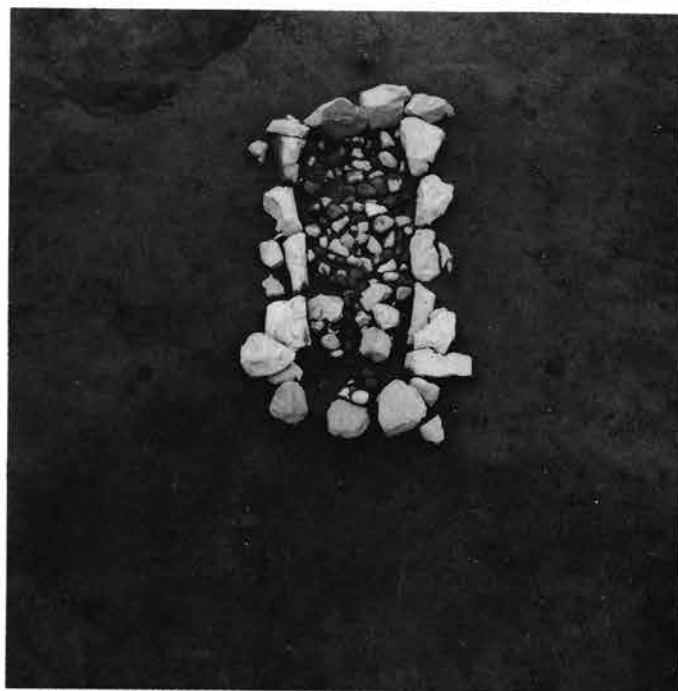
4 遺物出土状態



5 石室構築状態（右壁）



1 第15号古墳（南から）



2 第16号古墳（南から）



3 第17号古墳（南から）



4 第18号古墳（南から）



5 第19号古墳（西から）



6 遺物出土状態（石室の南側）



1 第1・2・12号溝 (南から)



2 第3号溝 (南から)



3 第4・6号溝 (西から)



4 第5号溝 (西から)



5 第4・6号溝 (西から)



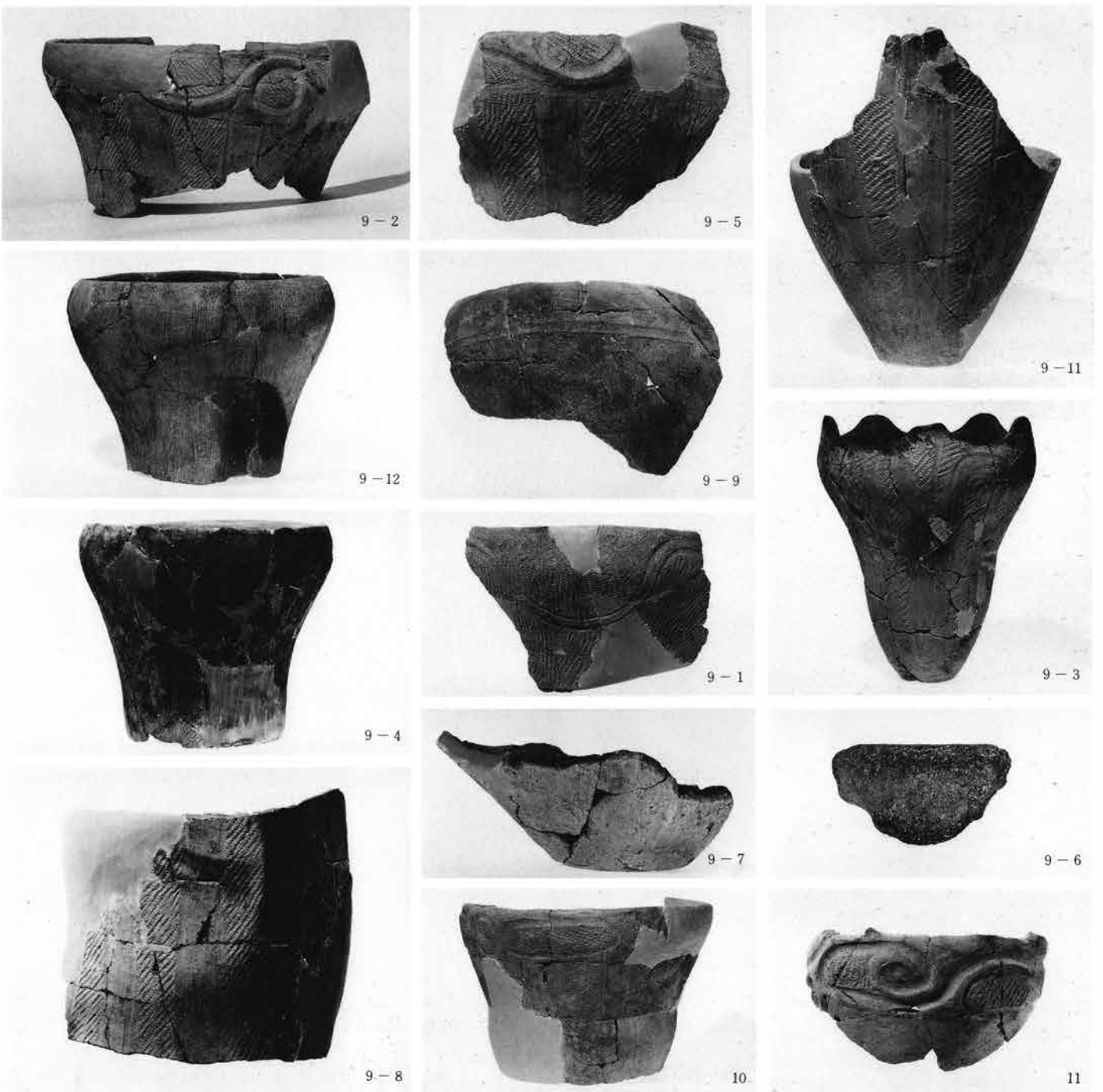
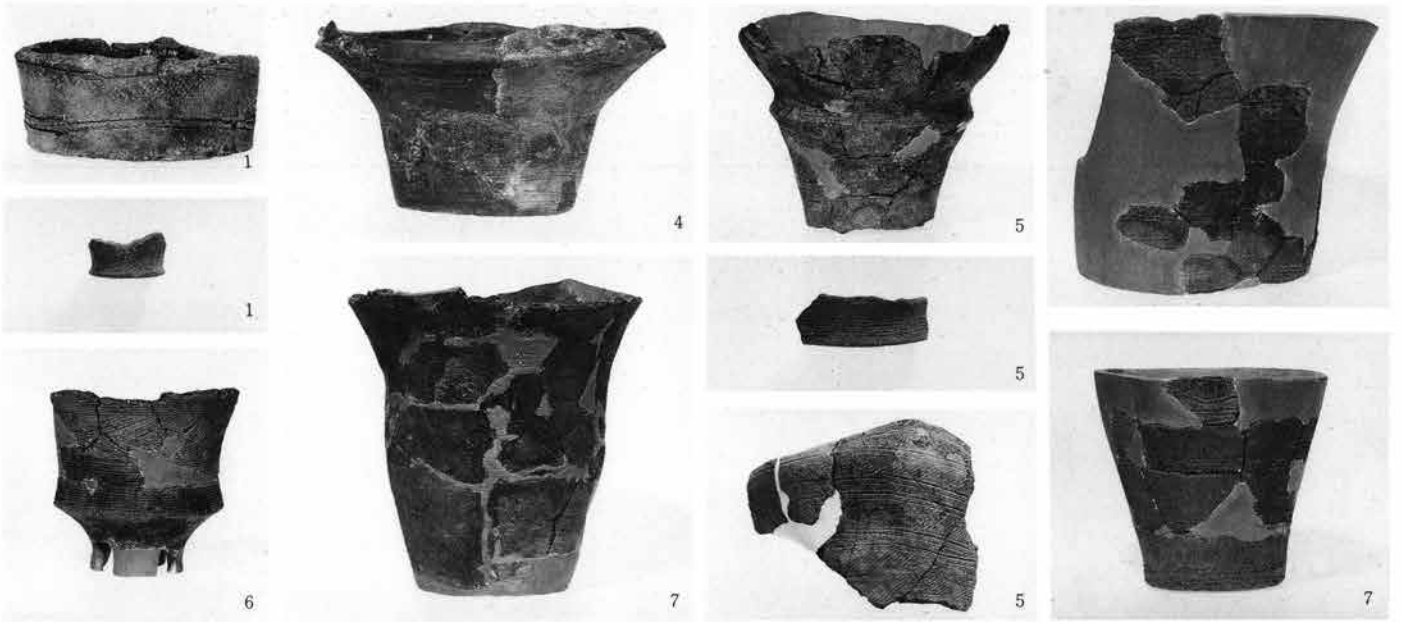
6 第11号溝 (北から)



7 第10号溝 (北から)



8 第10号溝 (南から)



第1・4～7・9～11号住居址出土遺物



12-2



12-1



13-1



14-2



12-5



12-4



13-2



14-4



14-1



14-3



15-1



14-5



15-2



15-3



16-3



16-1



16-4



16-2



17-1



17-3



17-2



19-6



19-4



19-3



19-2



19-1



19-5



20-2



20-1



21-2



21-6



21-1



21-3



21-4



21-7



22-1



22-3



22-2



22-4



24-1



24-2



24-3



23



26-1



25-1



26-2



30-2



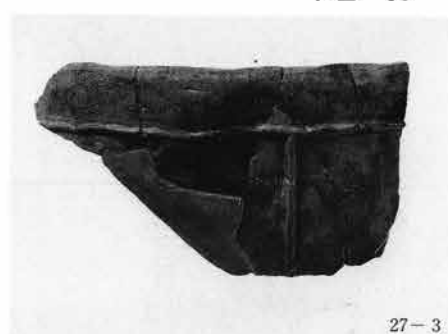
30-1



27-5



27-1



27-3



27-2



27-7



27-6



28-8



28-6



28-1



28-2



28-3



28-4



28-5



28-9



32-2



32-1



29-2





34-2



34-2



34-1



34-4



35-2



34-3



35-7



35-1



35-4



35-3



35-6



35-5



35-8



28-39



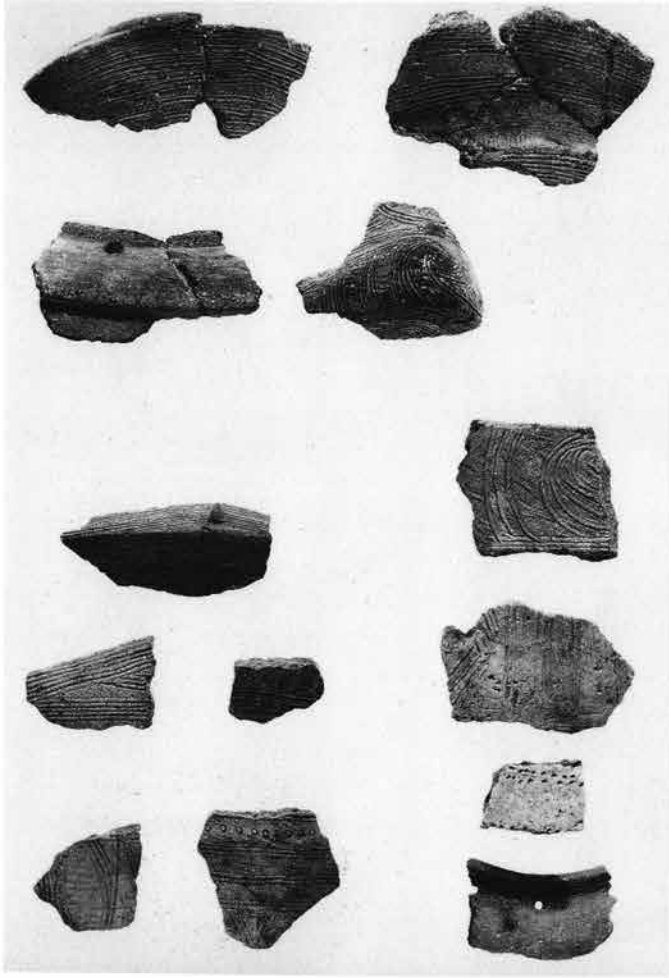
12-10



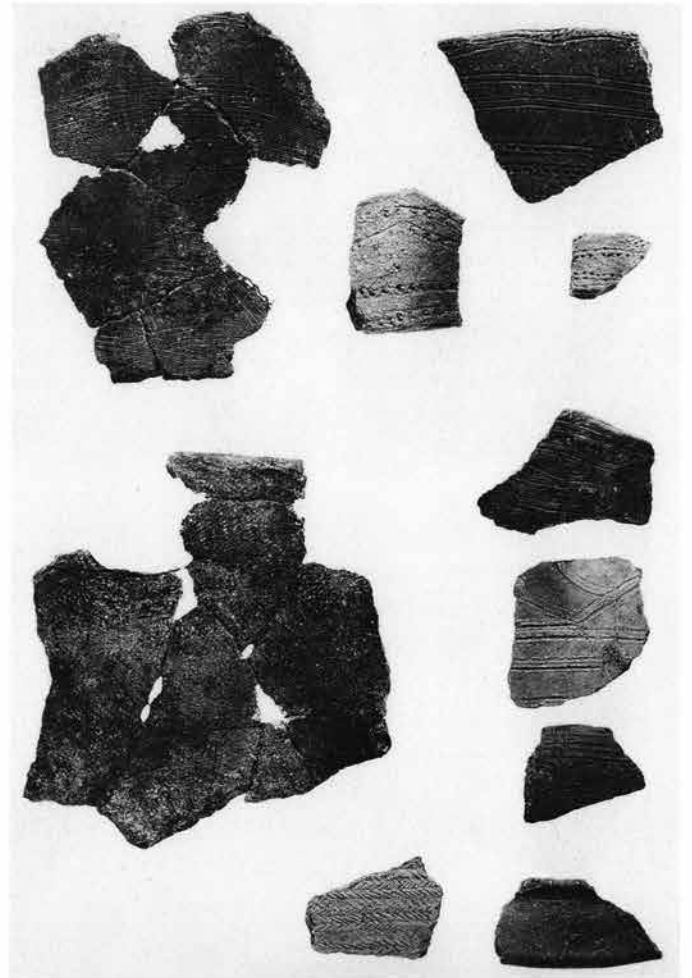
27-16



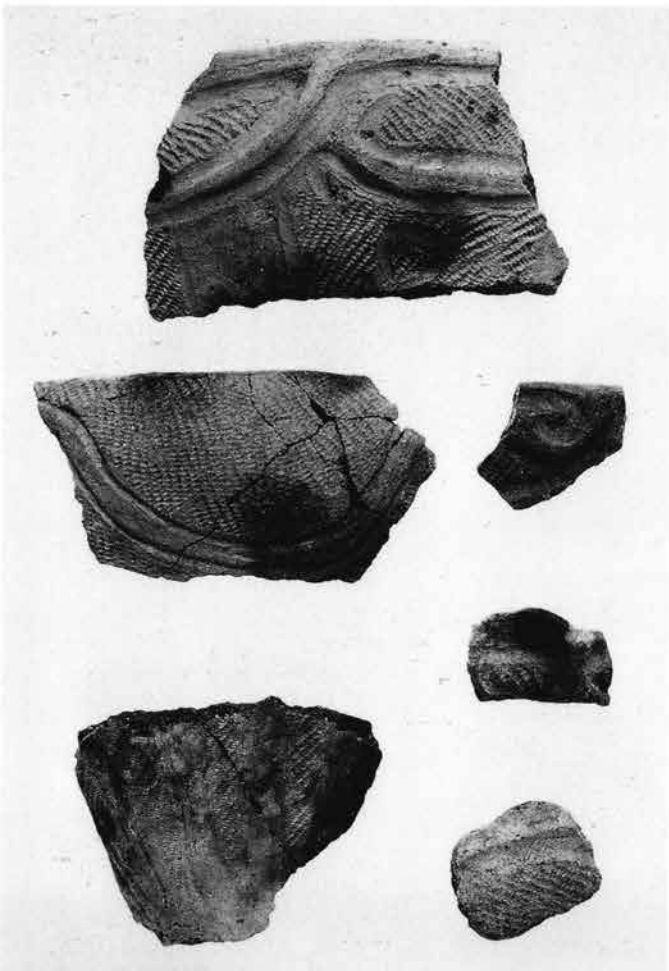
34



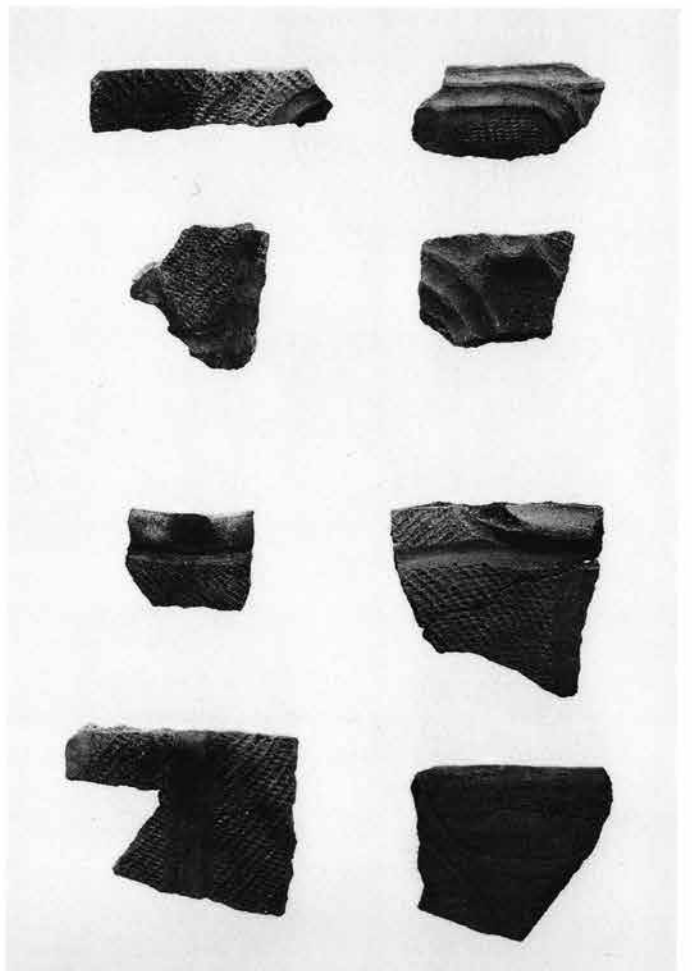
1 第1・3・4号住居址出土遺物



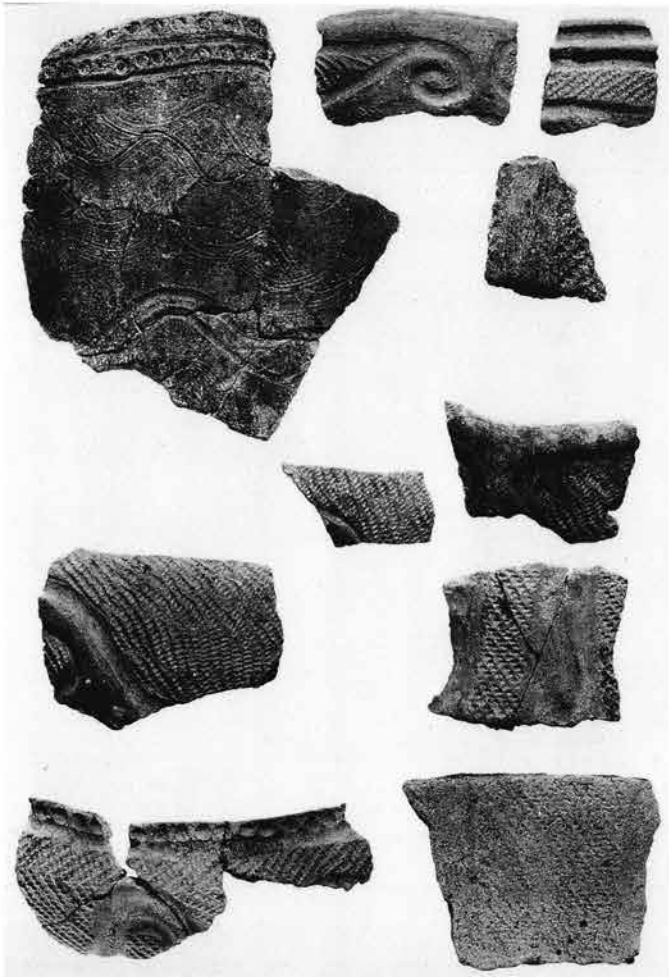
2 第4・5・7・8号住居址出土遺物



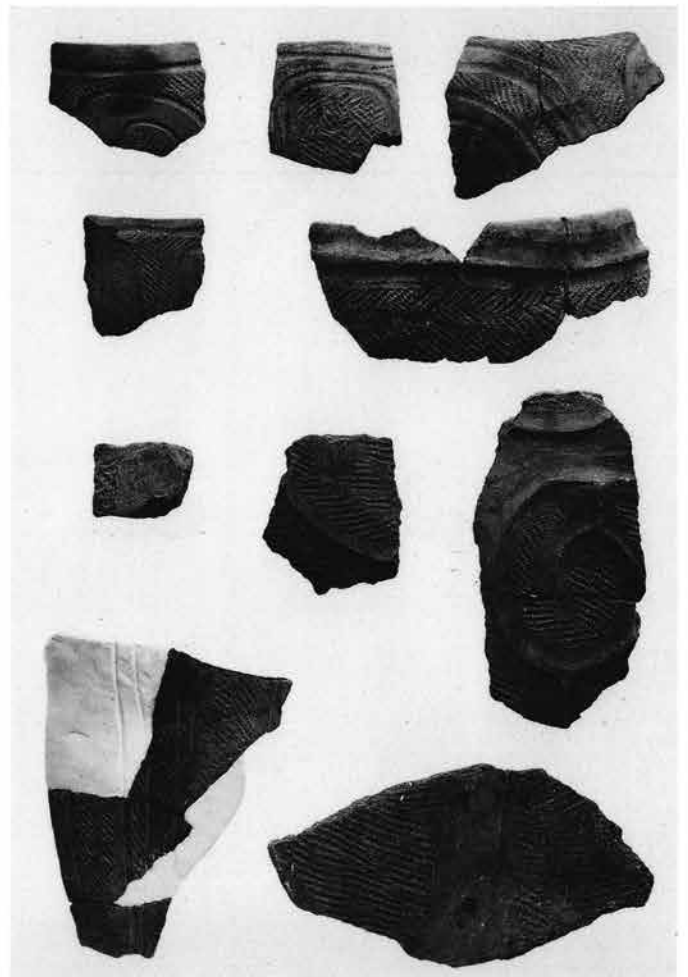
3 第9号住居址出土遺物



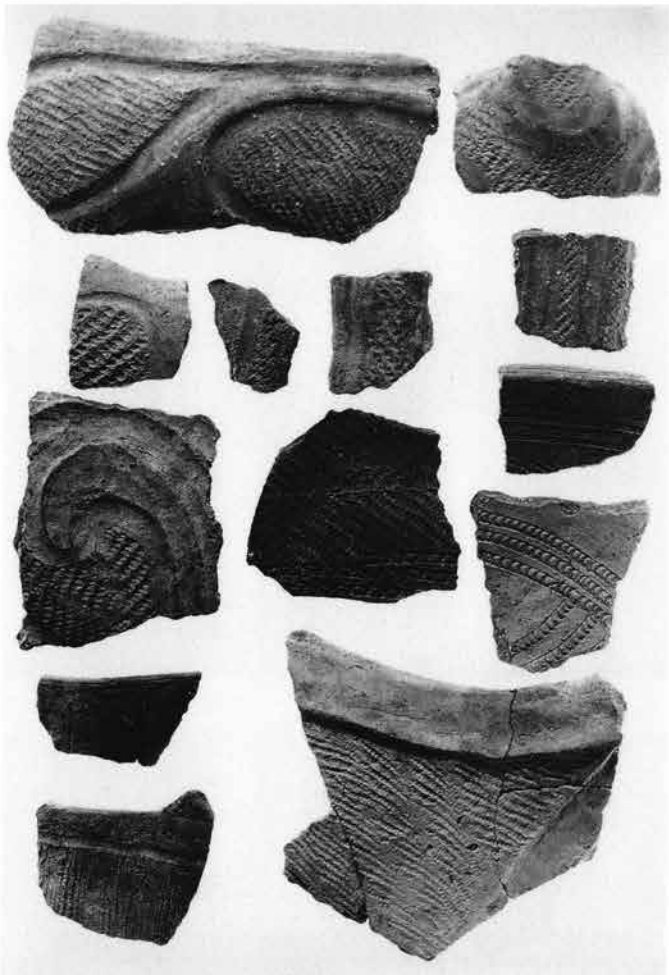
4 第10・11号住居址出土遺物



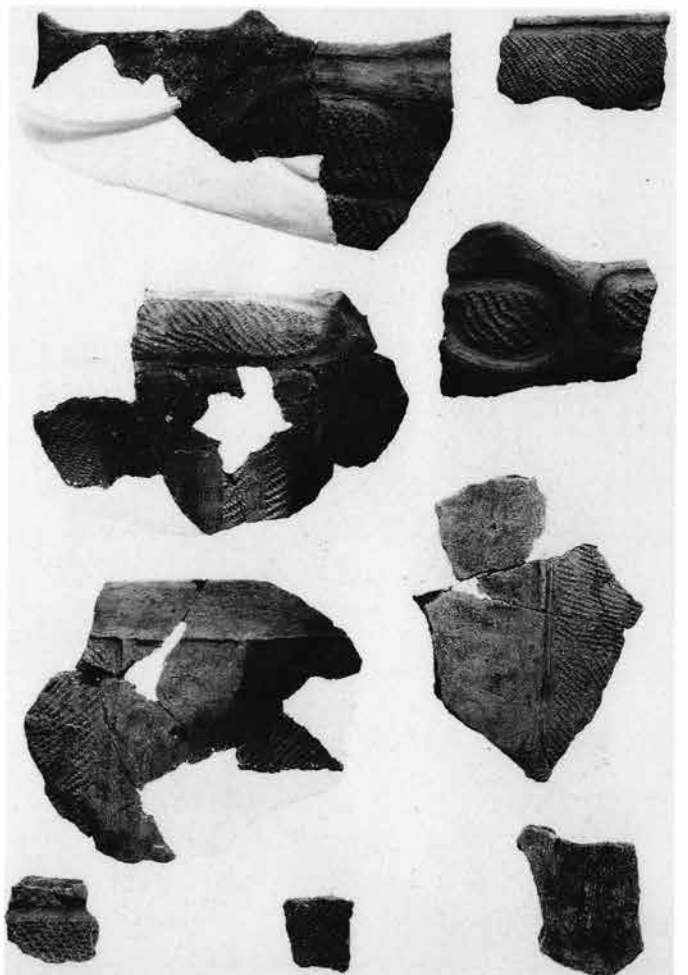
1 第12~14号住居址出土遺物



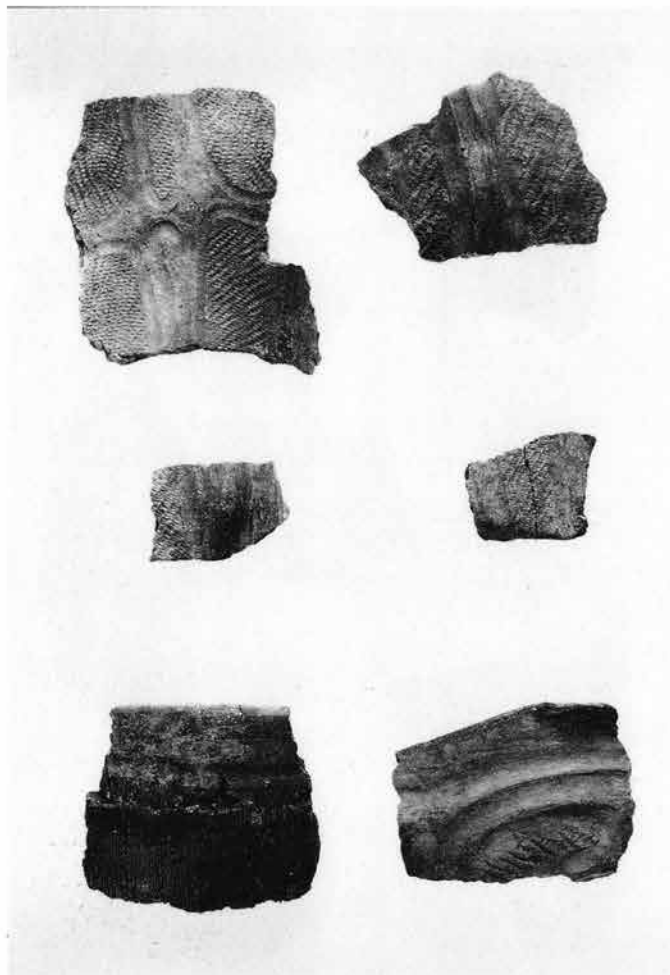
2 第15号住居址出土遺物



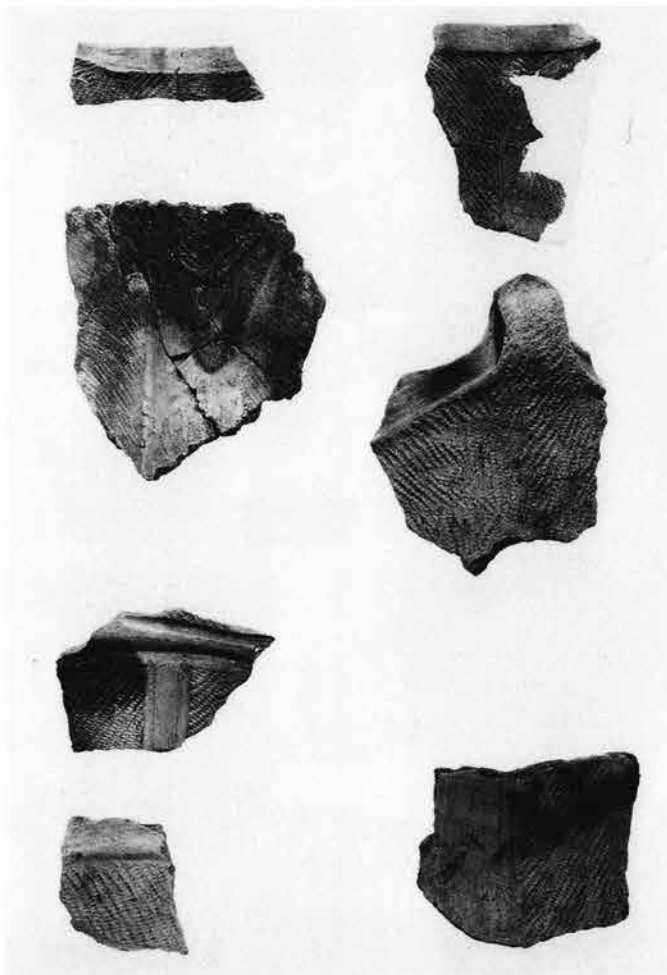
3 第16・17・20号住居址出土遺物



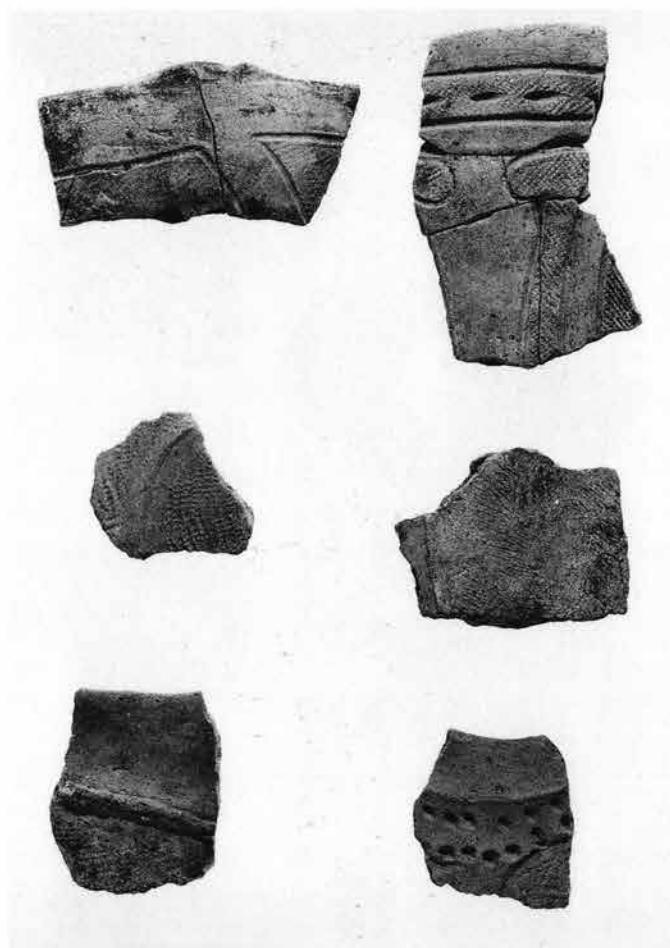
4 第19号住居址出土遺物



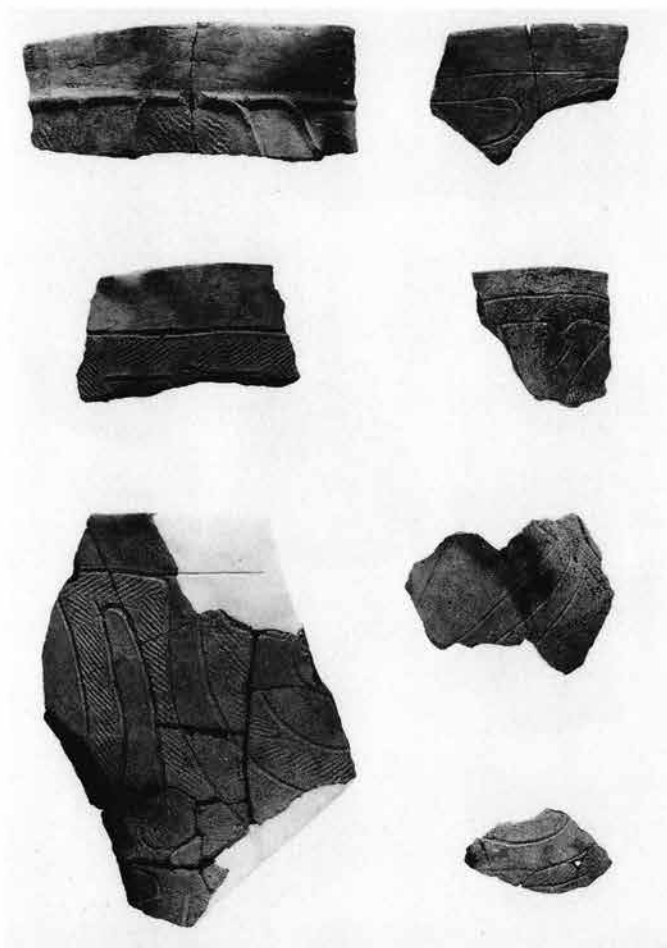
1 第22・23号住居址出土遺物



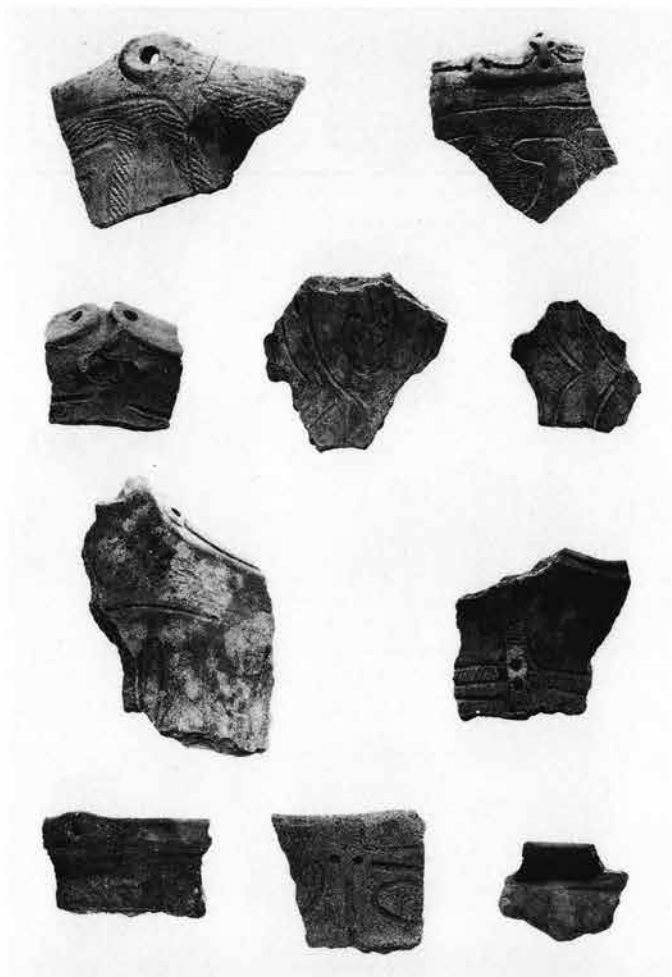
2 第21・24・25号住居址出土遺物



3 第26・27号住居址出土遺物



4 第27号住居址出土遺物



1 第28号住居址出土遺物



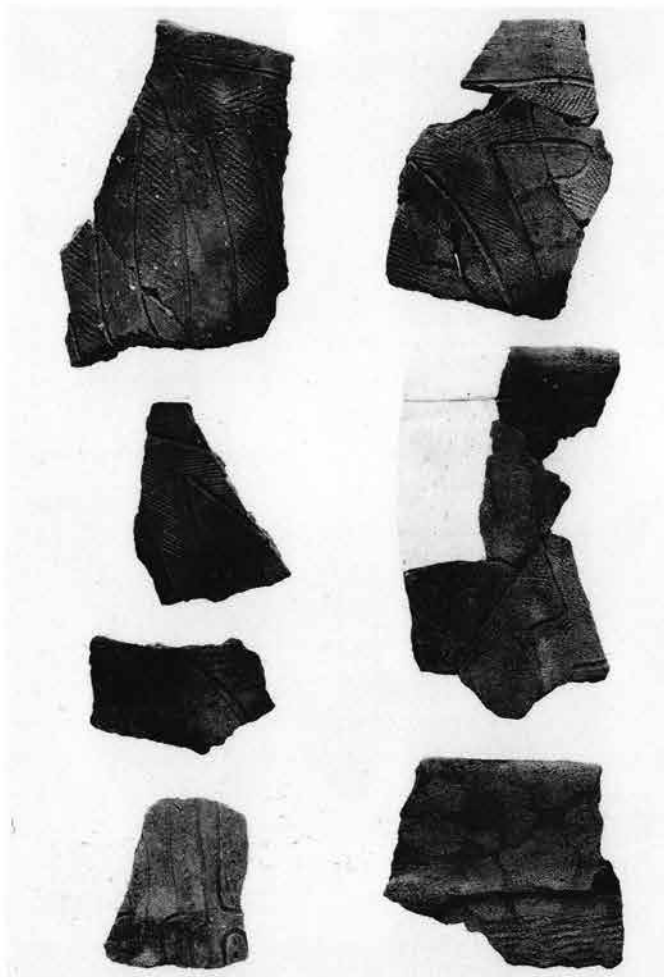
2 第28号住居址出土遺物



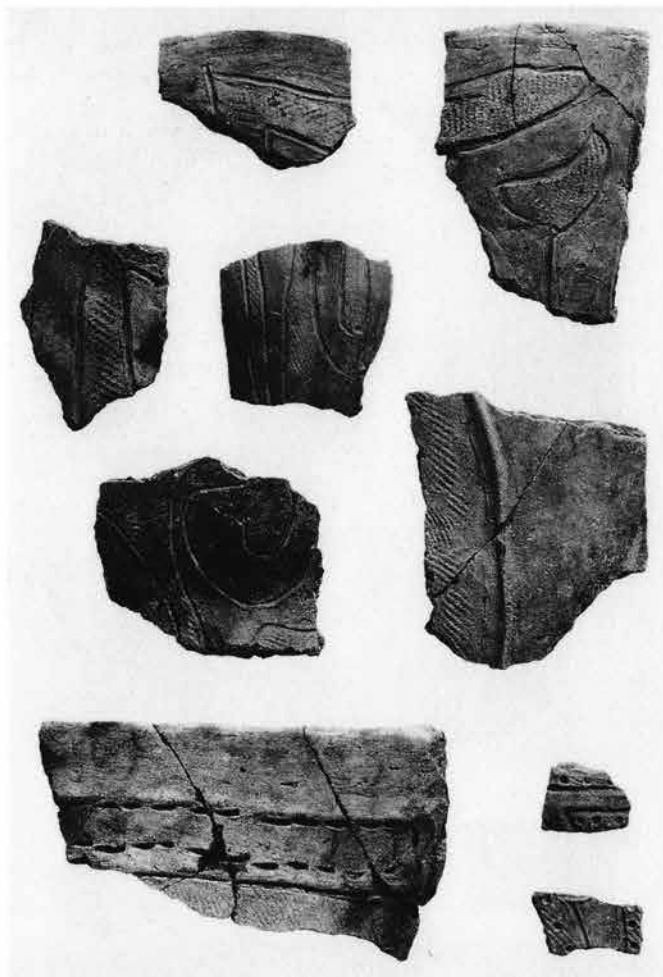
3 第29・30号住居址出土遺物



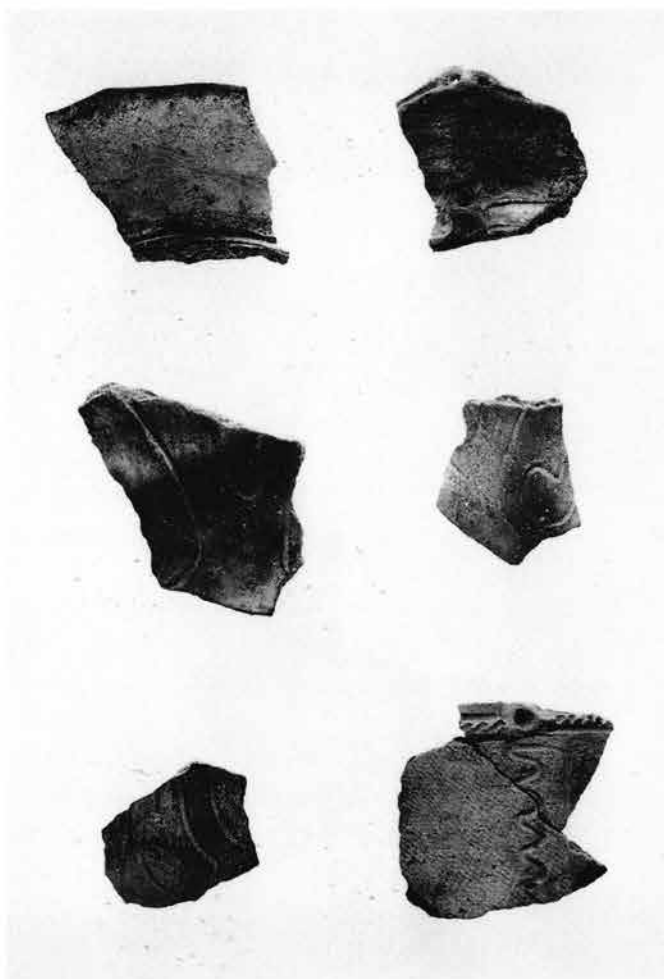
4 第30号住居址出土遺物



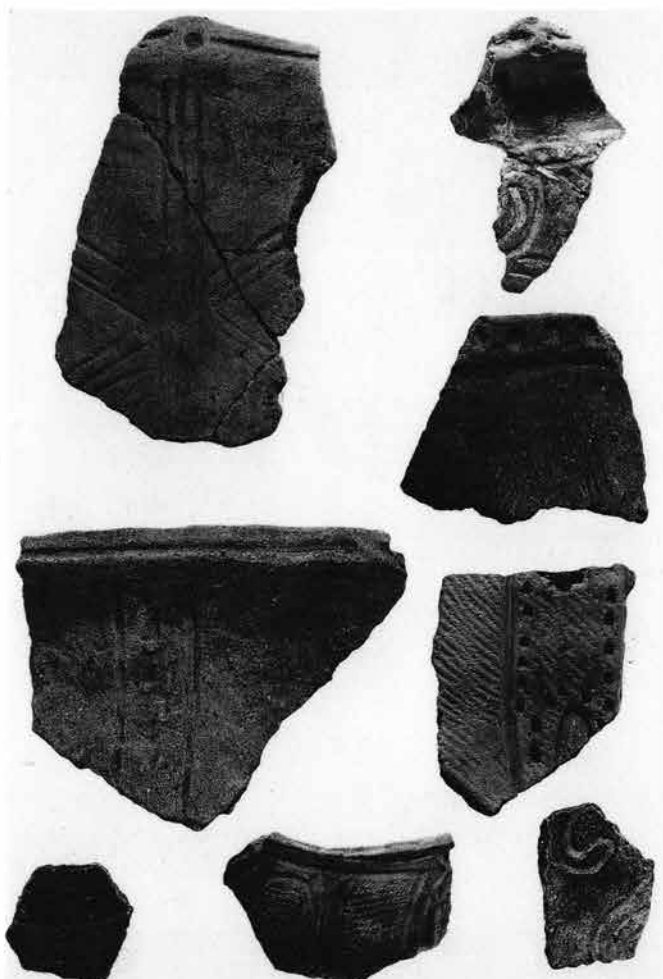
1 第31号住居址出土遺物



2 第32号住居址出土遺物



3 第34号住居址出土遺物



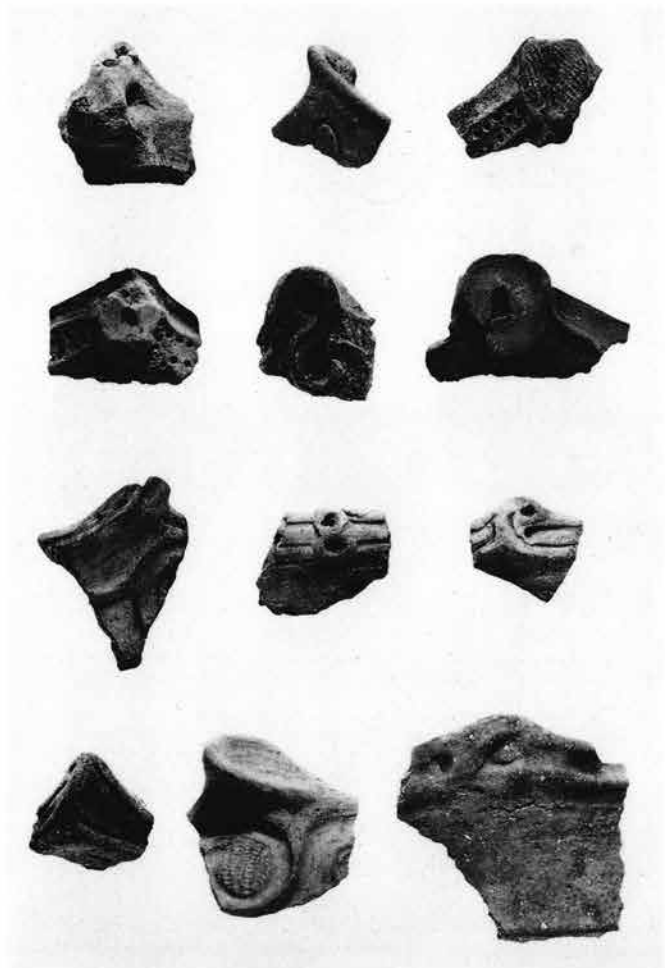
4 第35号住居址出土遺物



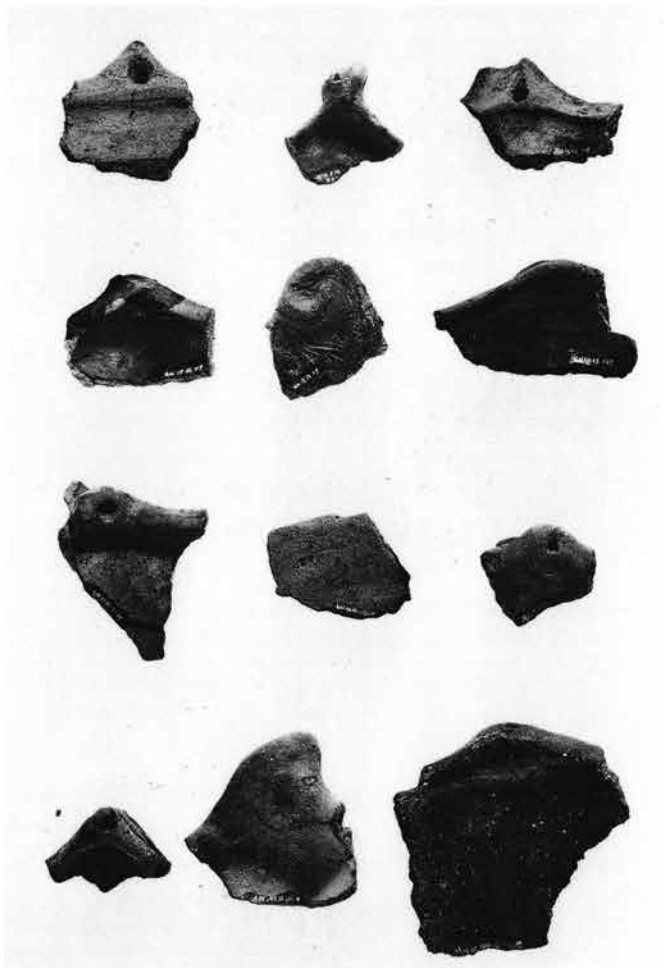
1 縄文時代住居址・土坑出土遺物（外面）



2 （内面）



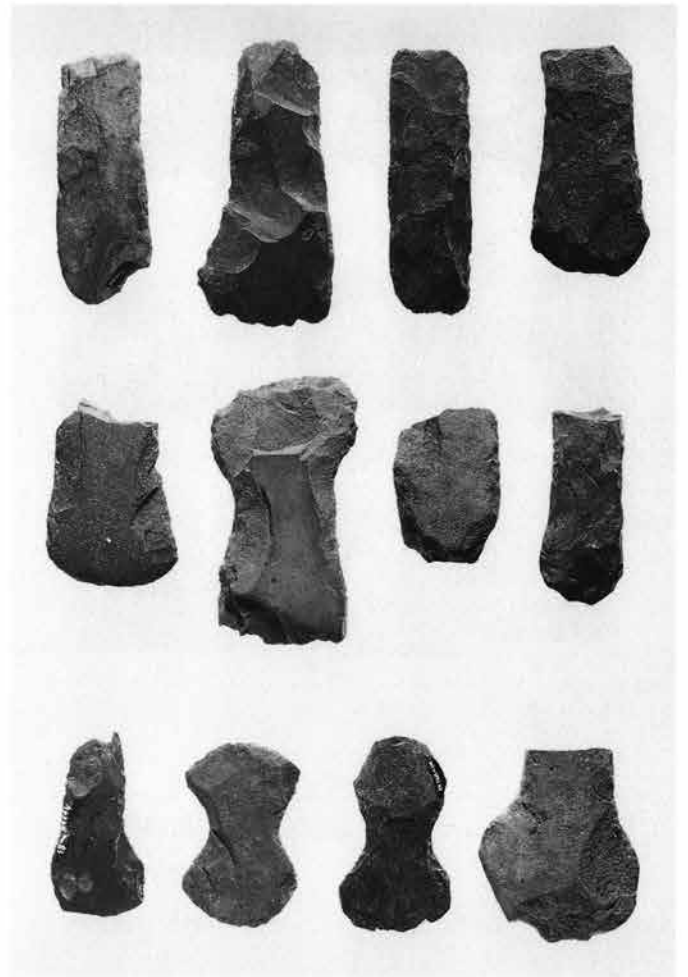
3 縄文時代住居址・土坑出土遺物（外面）



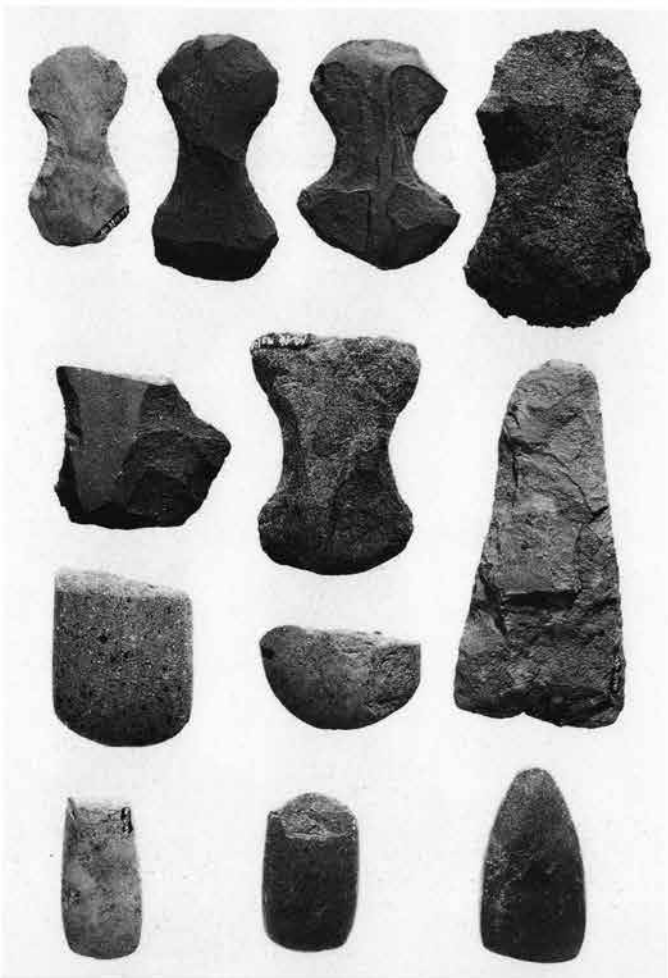
4 （内面）



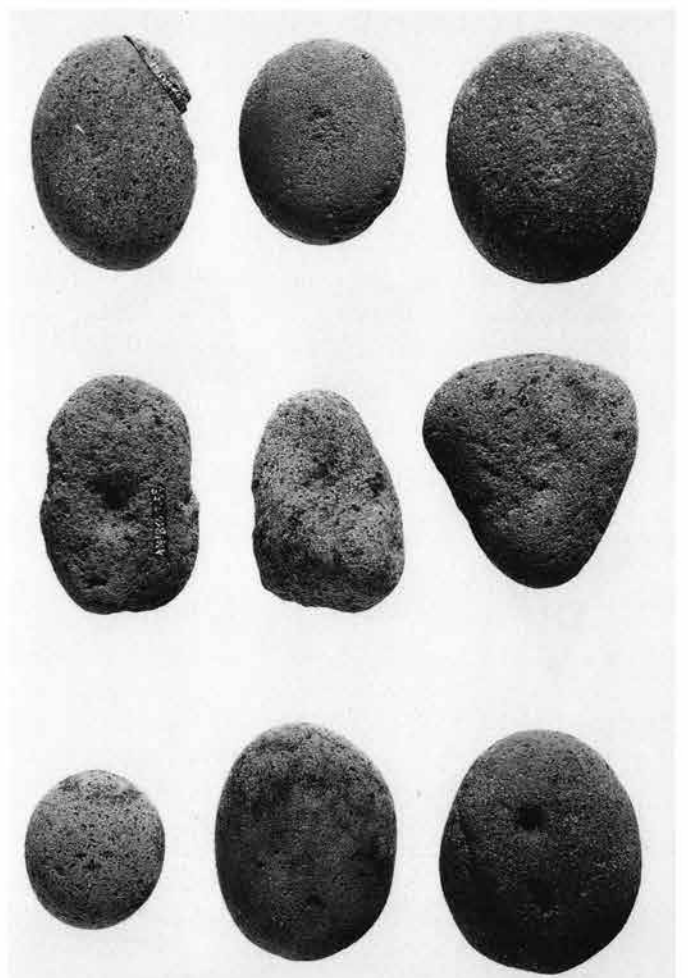
1 縄文時代住居址出土遺物



2 住居址出土遺物



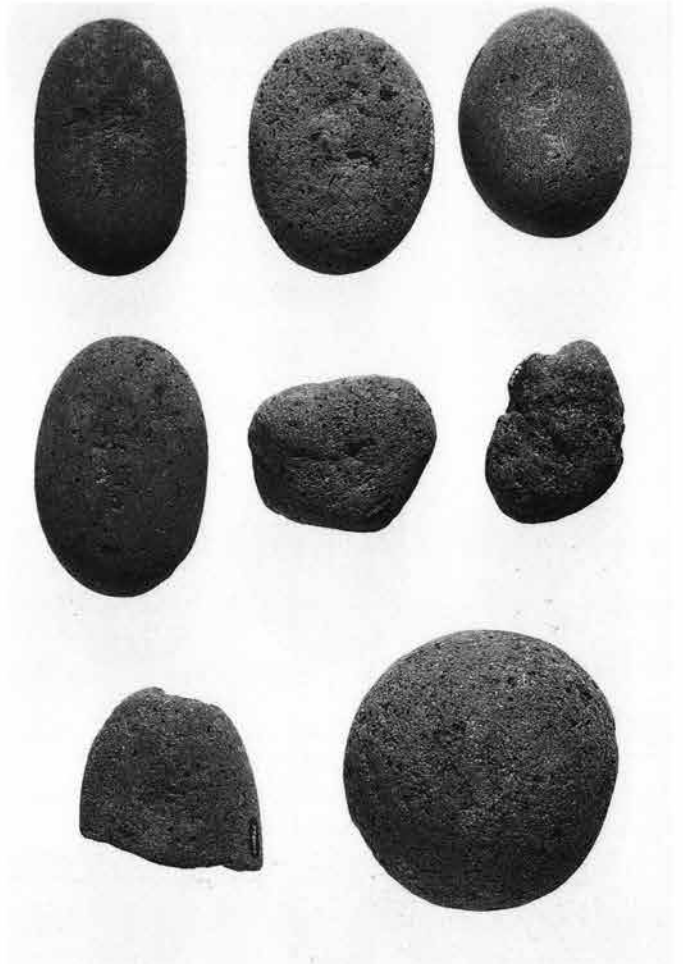
3 住居址出土遺物



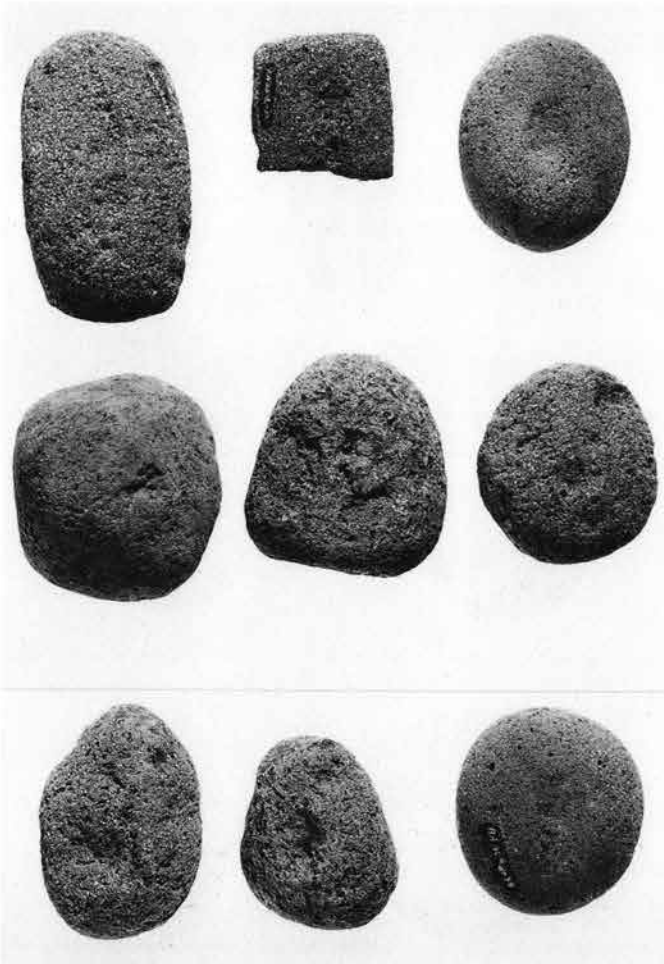
4 第2～8号住居址出土遺物



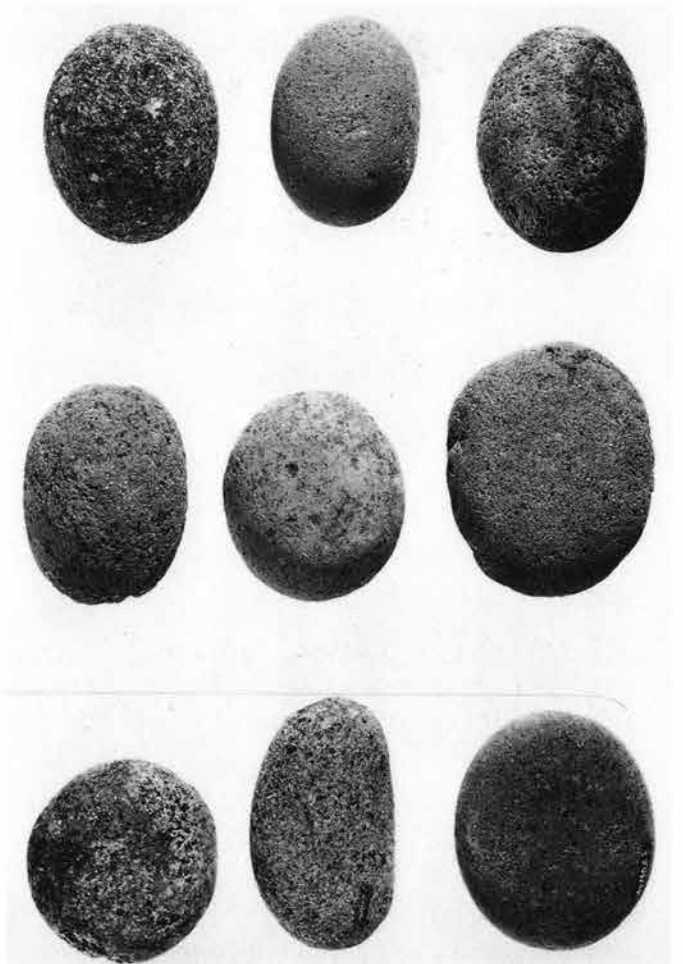
1 第9・10・12・14~16・23号住居址出土遺物



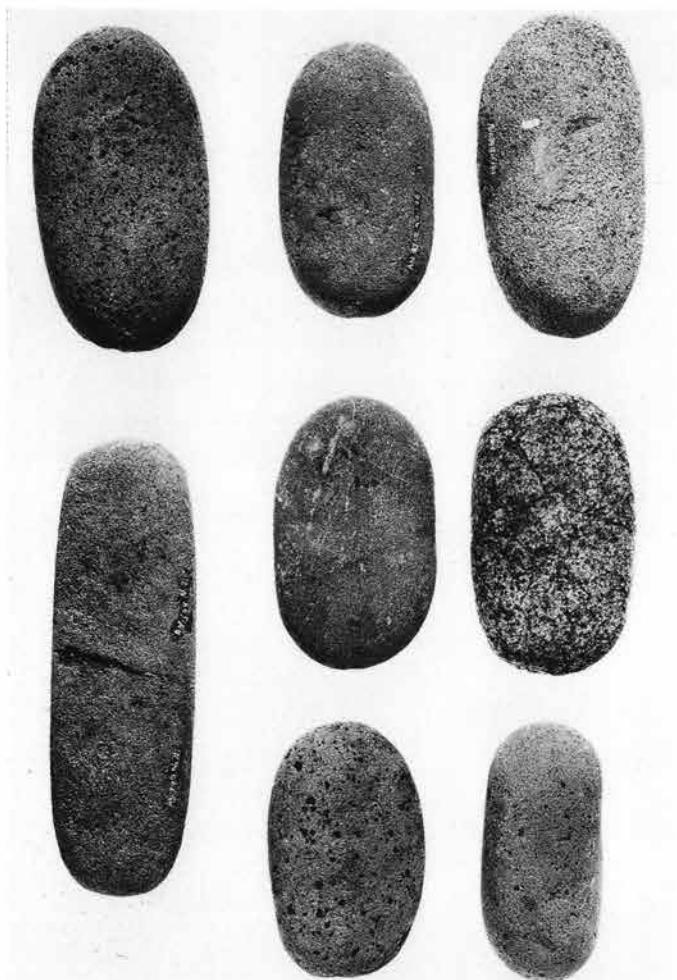
2 第26号住居址出土遺物



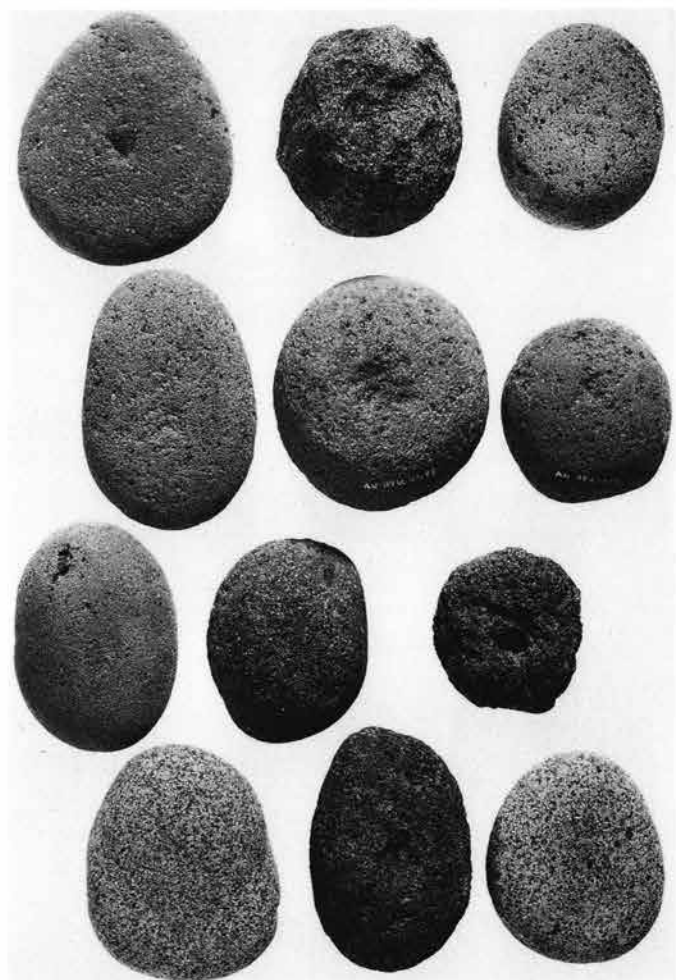
3 第28号住居址出土遺物



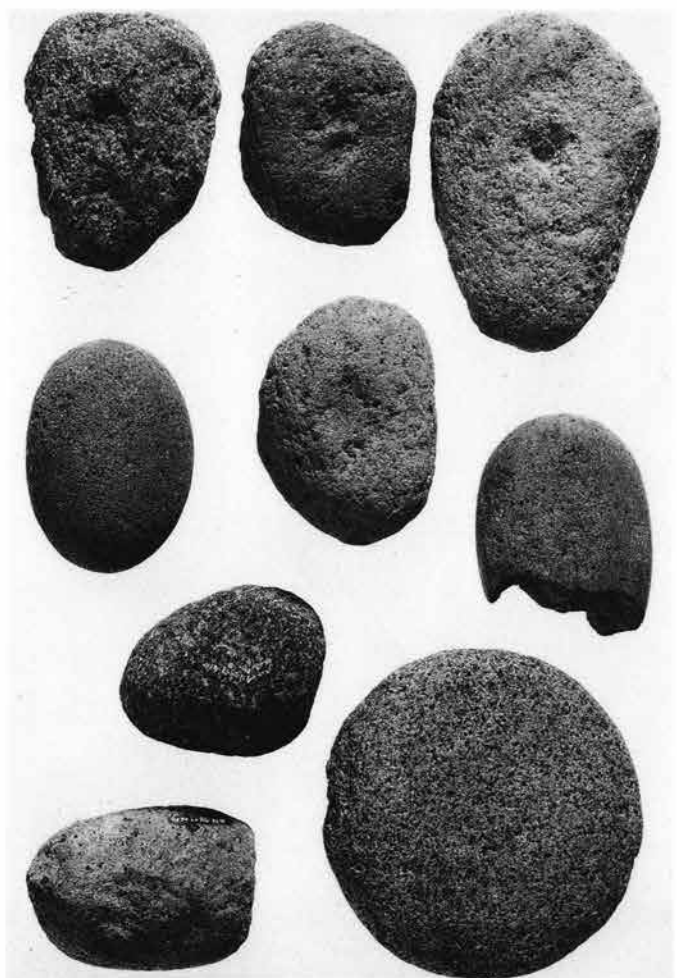
4 第28号住居址出土遺物



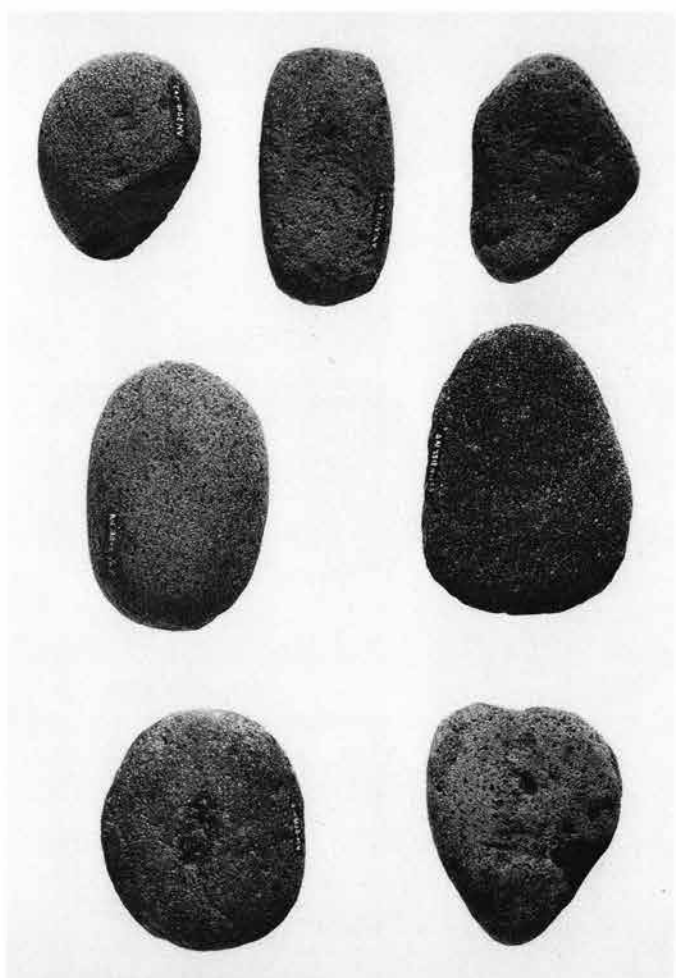
1 第30号住居址出土遺物



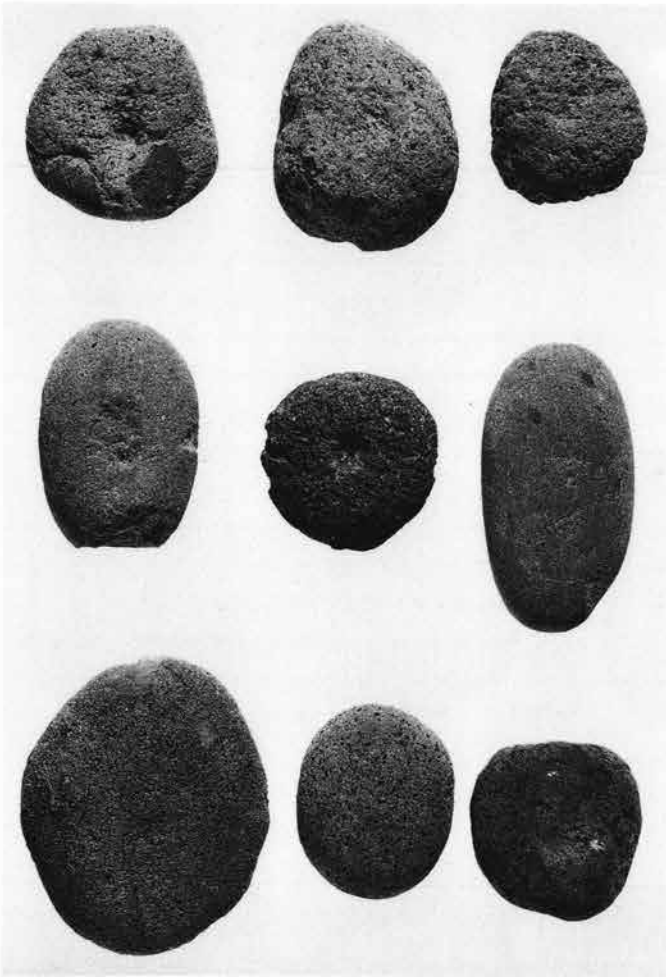
2 第30号住居址出土遺物



3 第27号住居址出土遺物



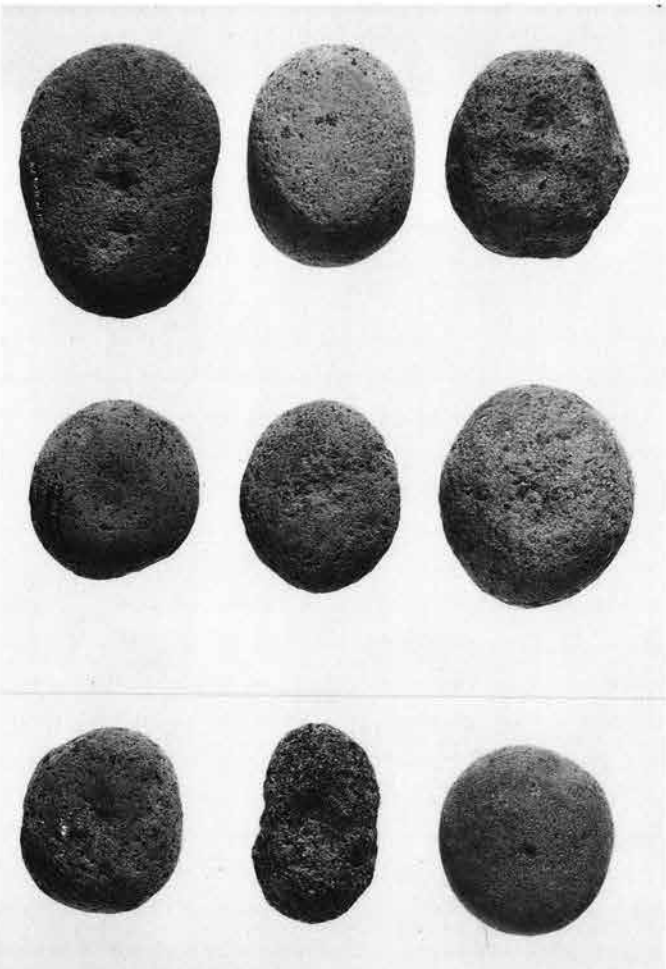
4 第25・29・32号住居址出土遺物



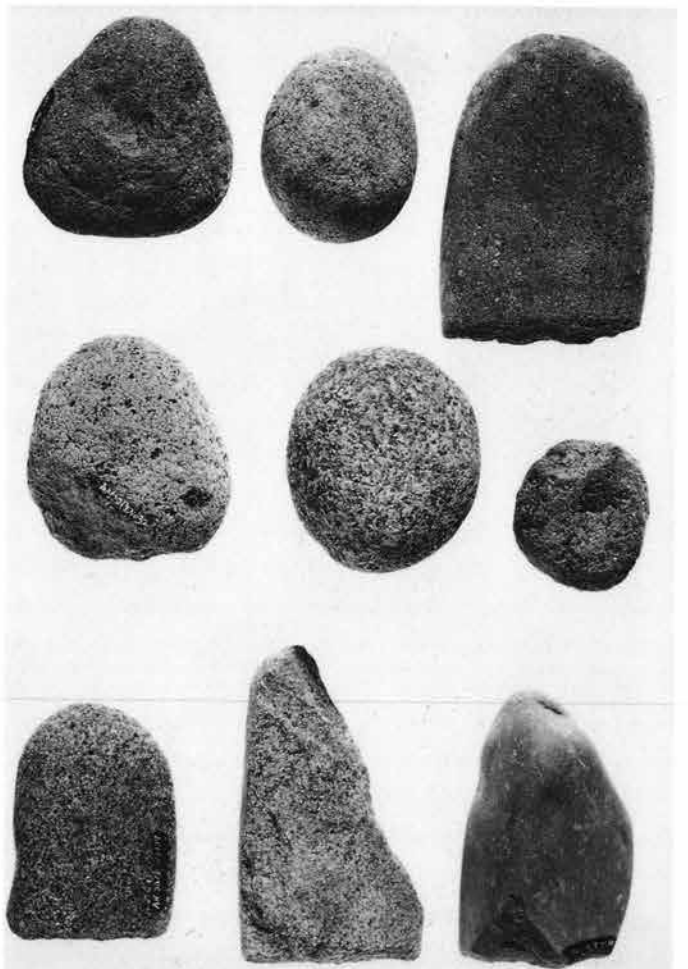
1 第31・32号住居址出土遺物



2 第33号住居址出土遺物



3 第35号住居址出土遺物



4 第28・32・34号住居址出土遺物



6-14



6-15



9-6



9-4



9-3



9-6



10-2



13-1



15-9



15-7



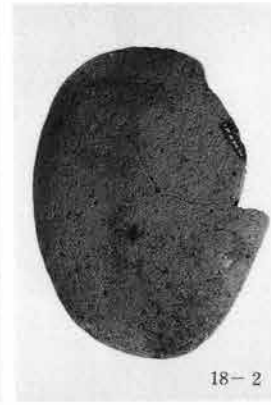
15-8



15-6



16-2



18-2



18-3



21-2



22



23-3



26-5



26-4



27-5



30-3



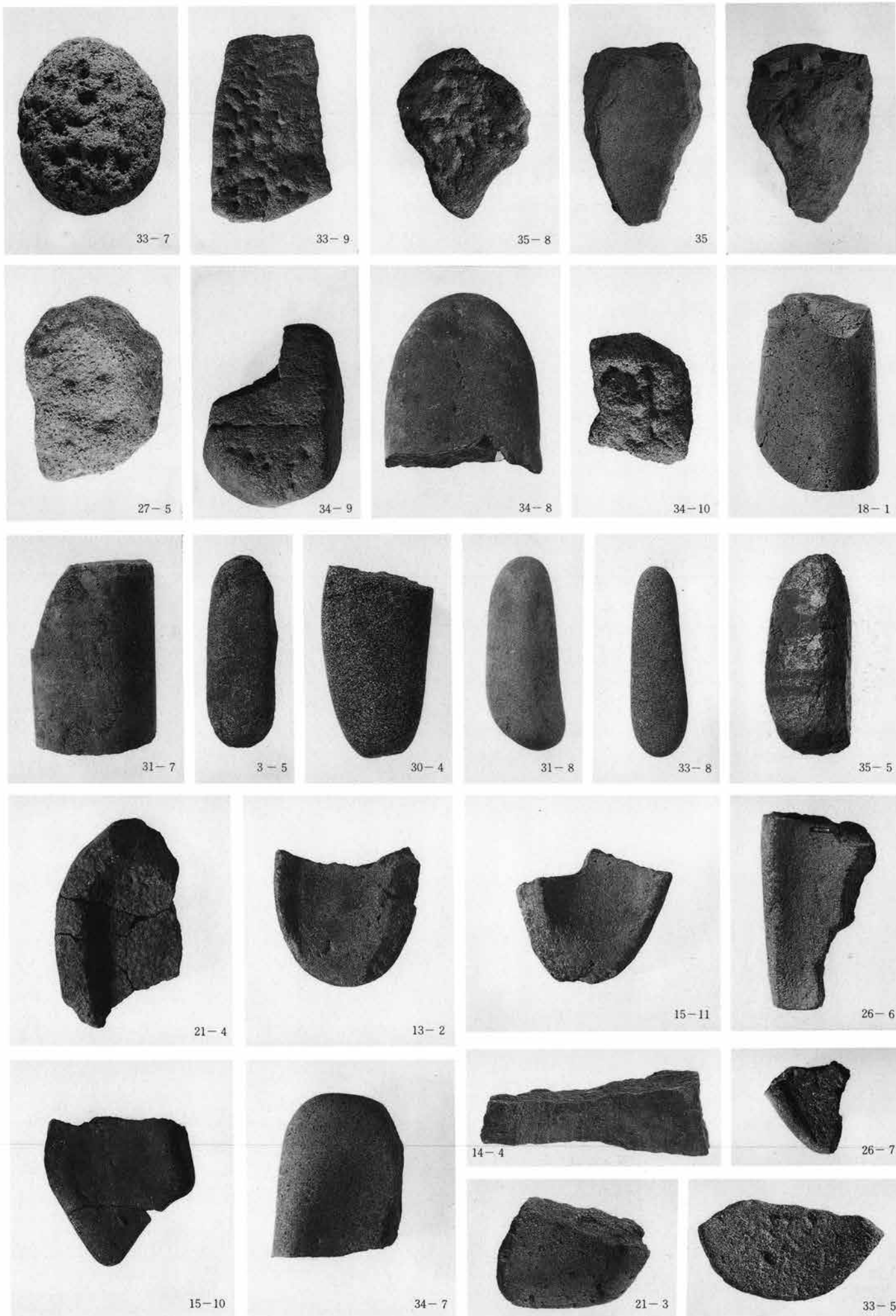
31-6



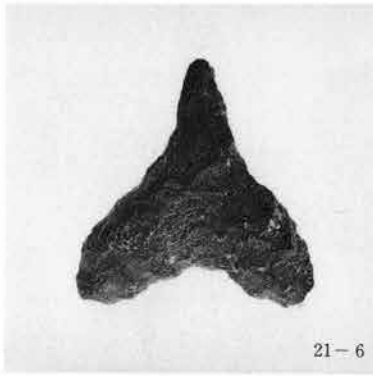
32-4



32-4



縄文時代住居址出土遺物



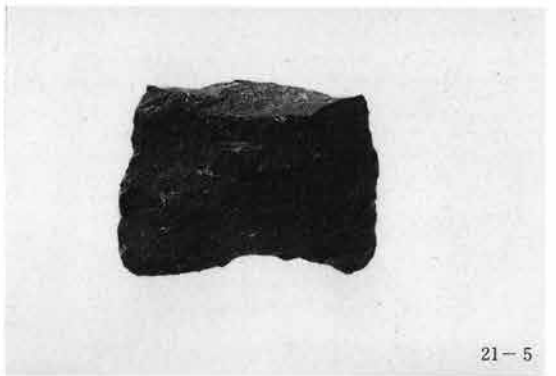
21-6



21-8



35



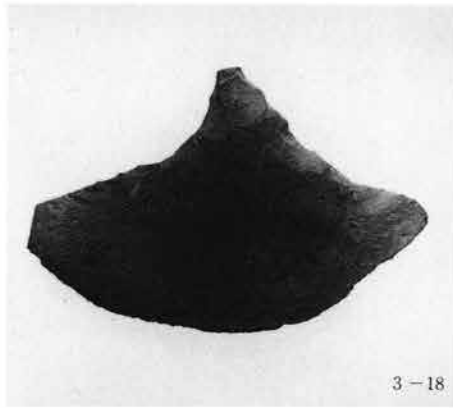
21-5



21-7



31-10



3-18



3-17



29-2



30-10



30-11



33-10



31-9



15-12



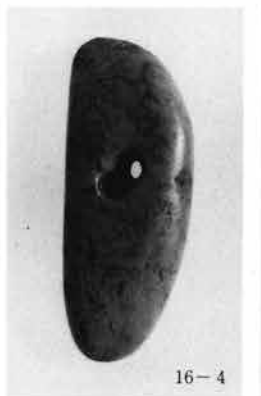
34-11



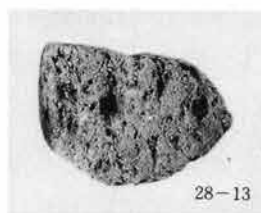
33-11



14-5



16-4



28-13



30-12



1-19



8 塚



8 塚



26 塚



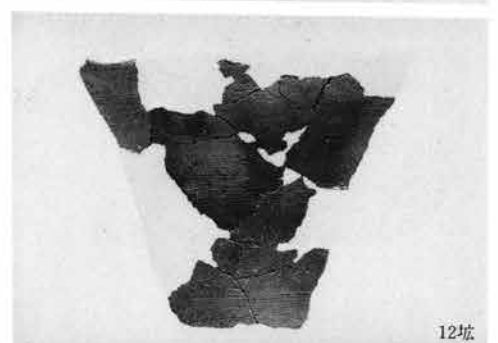
11 塚



9 塚



9 塚



12 塚



22 塚



14 塚



14 塚



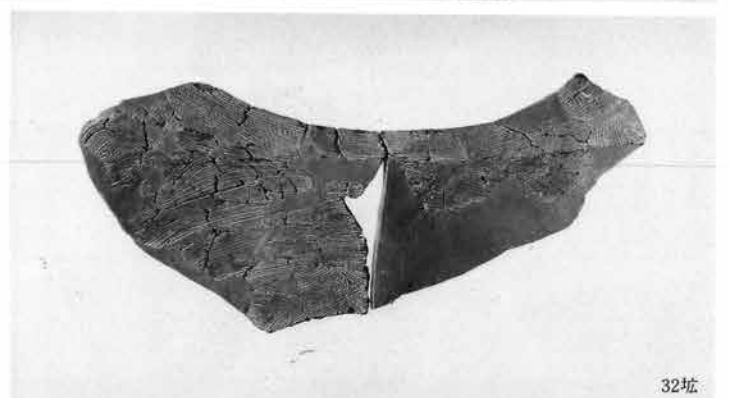
34 塚



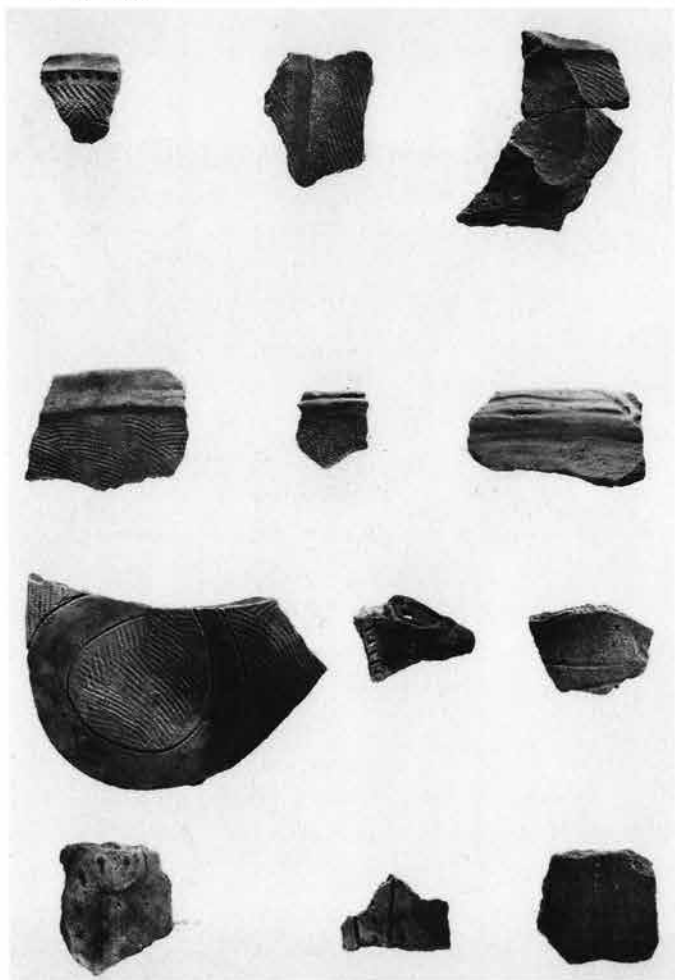
32 塚



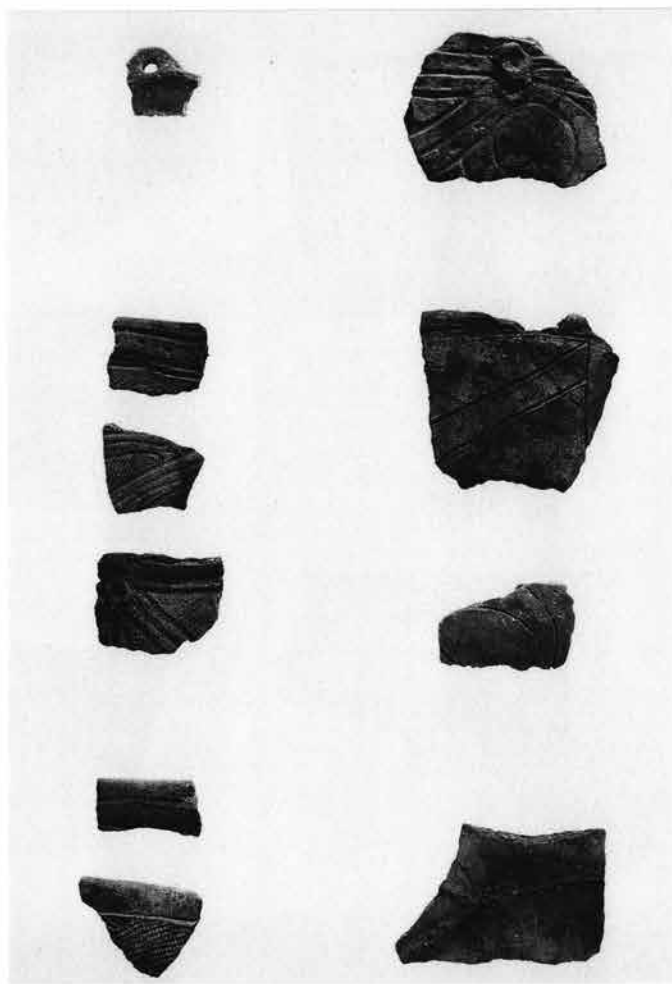
37 塚



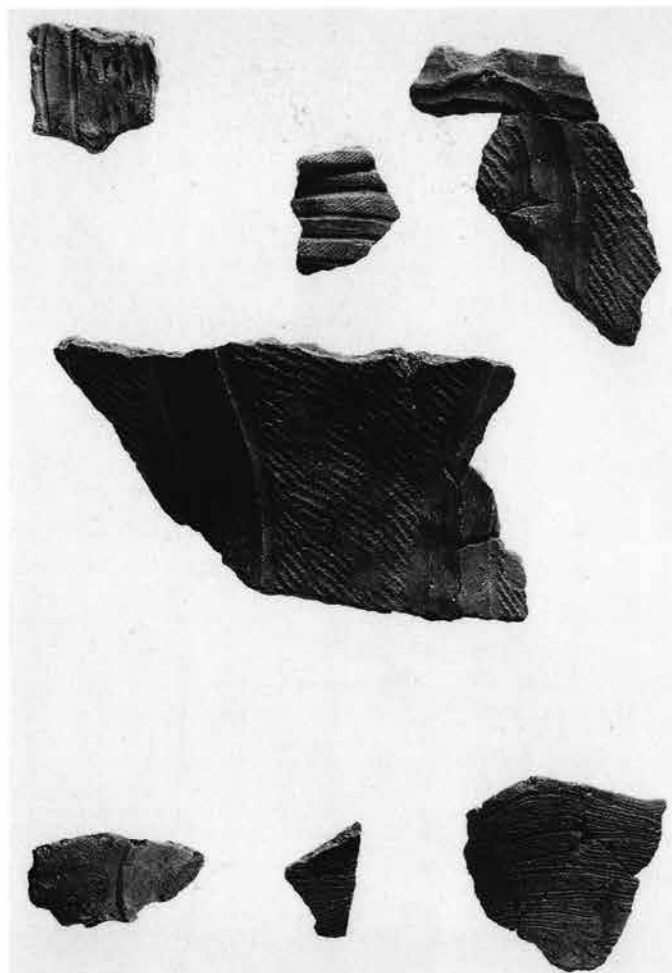
32 塚



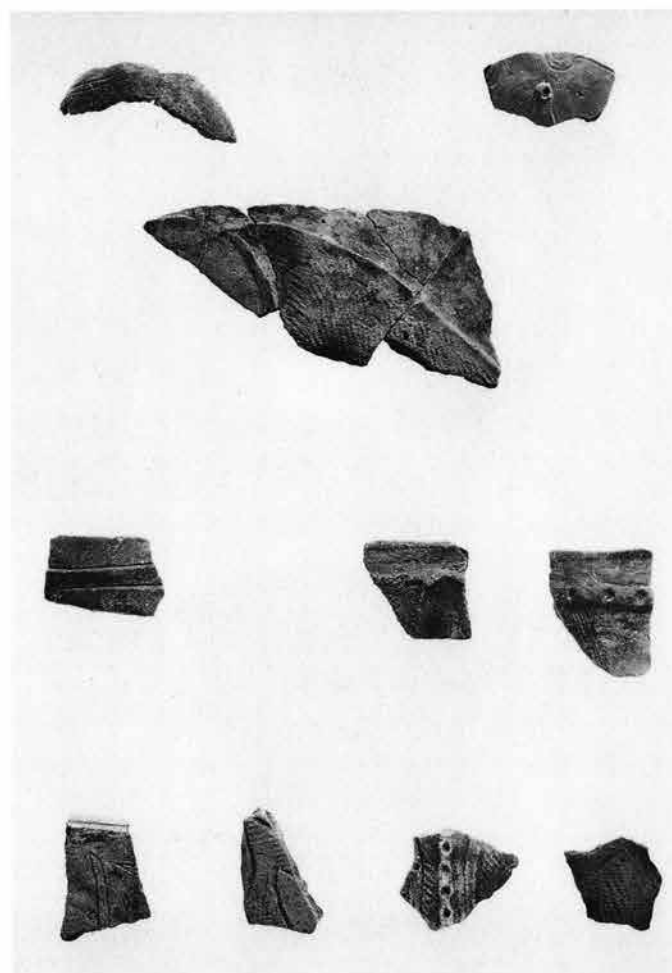
1 第1・2号土坑出土遺物



2 第3・4・6号土坑出土遺物



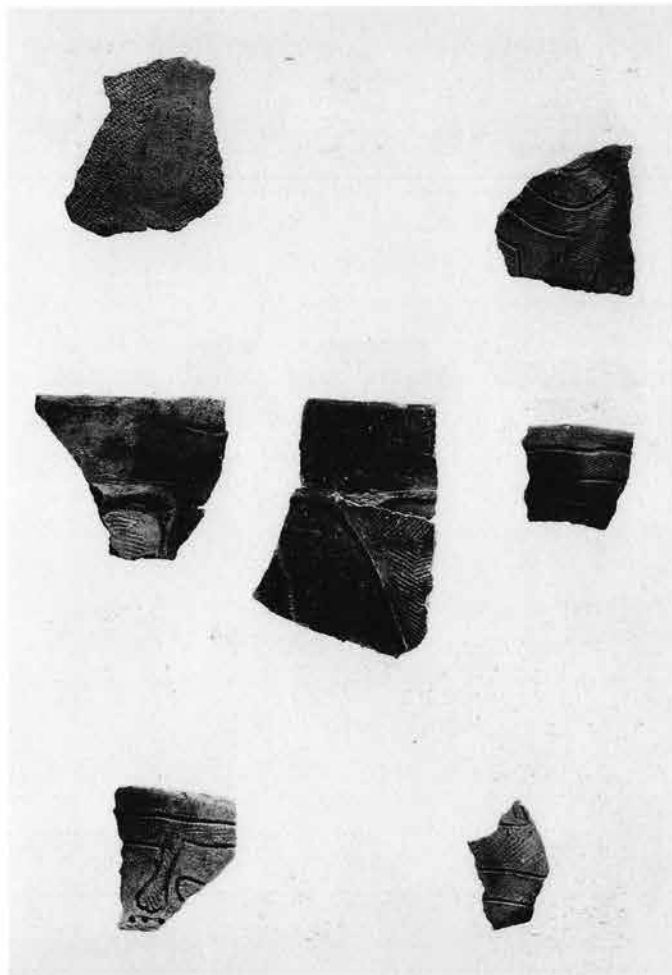
3 第8・10・12号土坑出土遺物



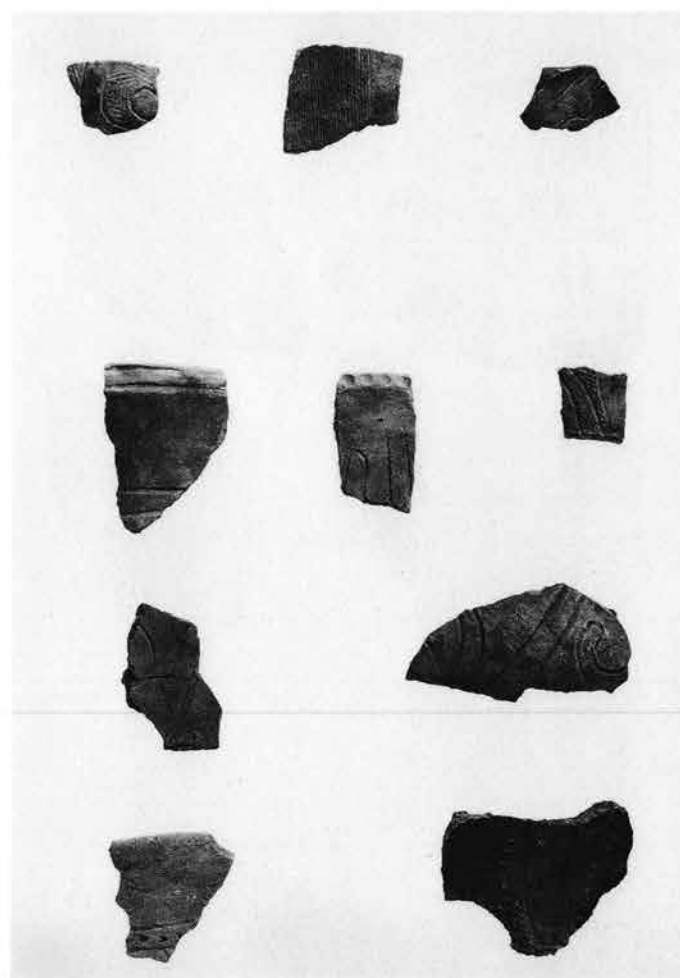
4 第9・13号土坑出土遺物



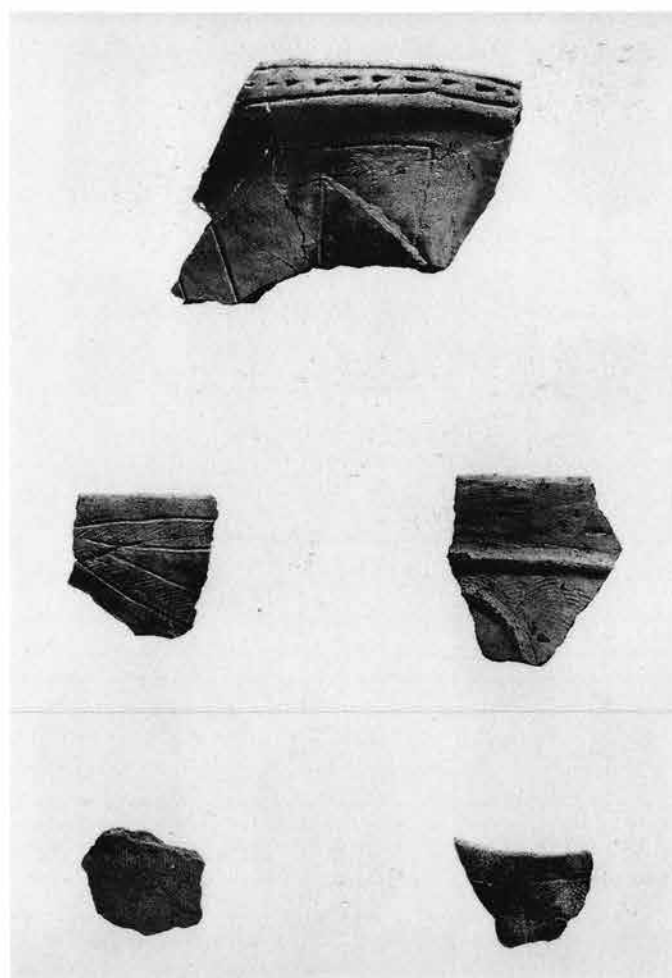
1 第14·16~18号土坑出土遗物



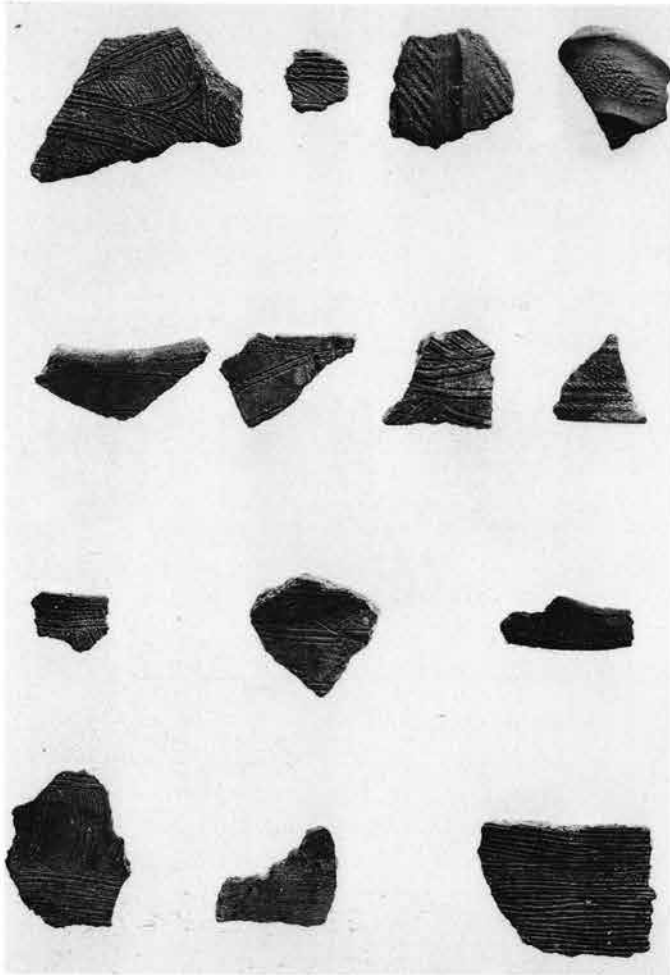
2 第19~21号土坑出土遗物



3 第22·23·25号土坑出土遗物



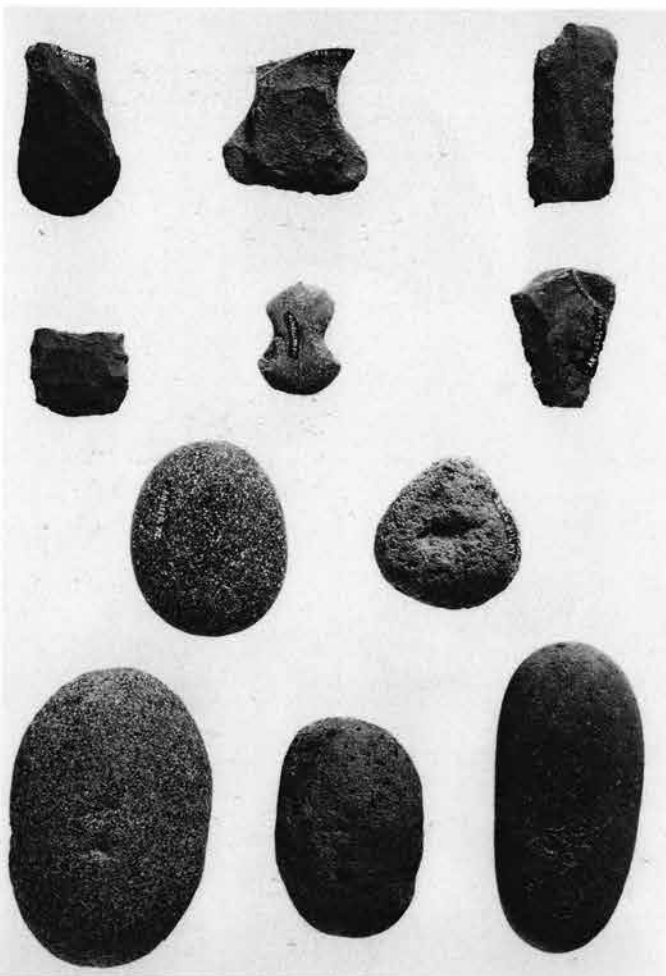
4 第24·27·29号土坑出土遗物



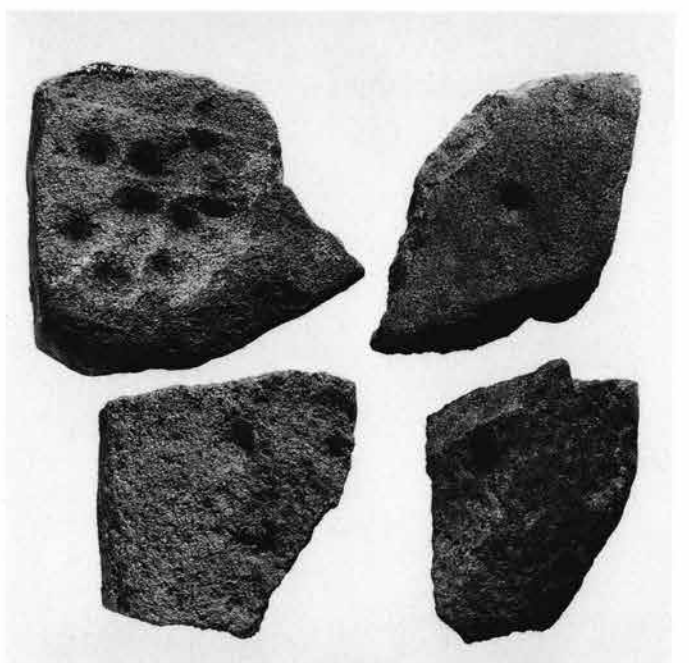
1 第32・34・37・38・40・42-44号土坛出土遺物



2 第44・46号土坛



3 土坛出土遺物



4 土坛出土遺物



I 第36~40号住居址出土遺物



41-1



41-4



41-2



41-5



41-3



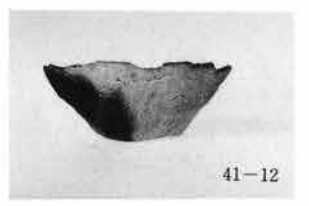
41-8



41-7



41-6



41-12



41-9



41-10



42-1



43-3



43-1



42-2



43-5



43-4



45-1



45-5



44



46-2



48-2



48-1



46-3



48-4



48-3



49-1



49-2



49-3



49-4



49-5



49-12



49-6



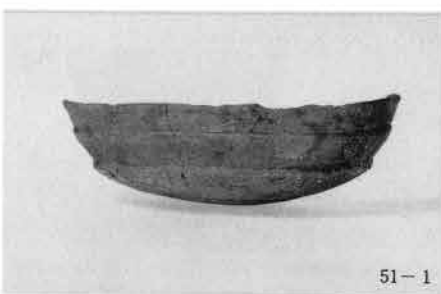
49-7



49-10



49-11



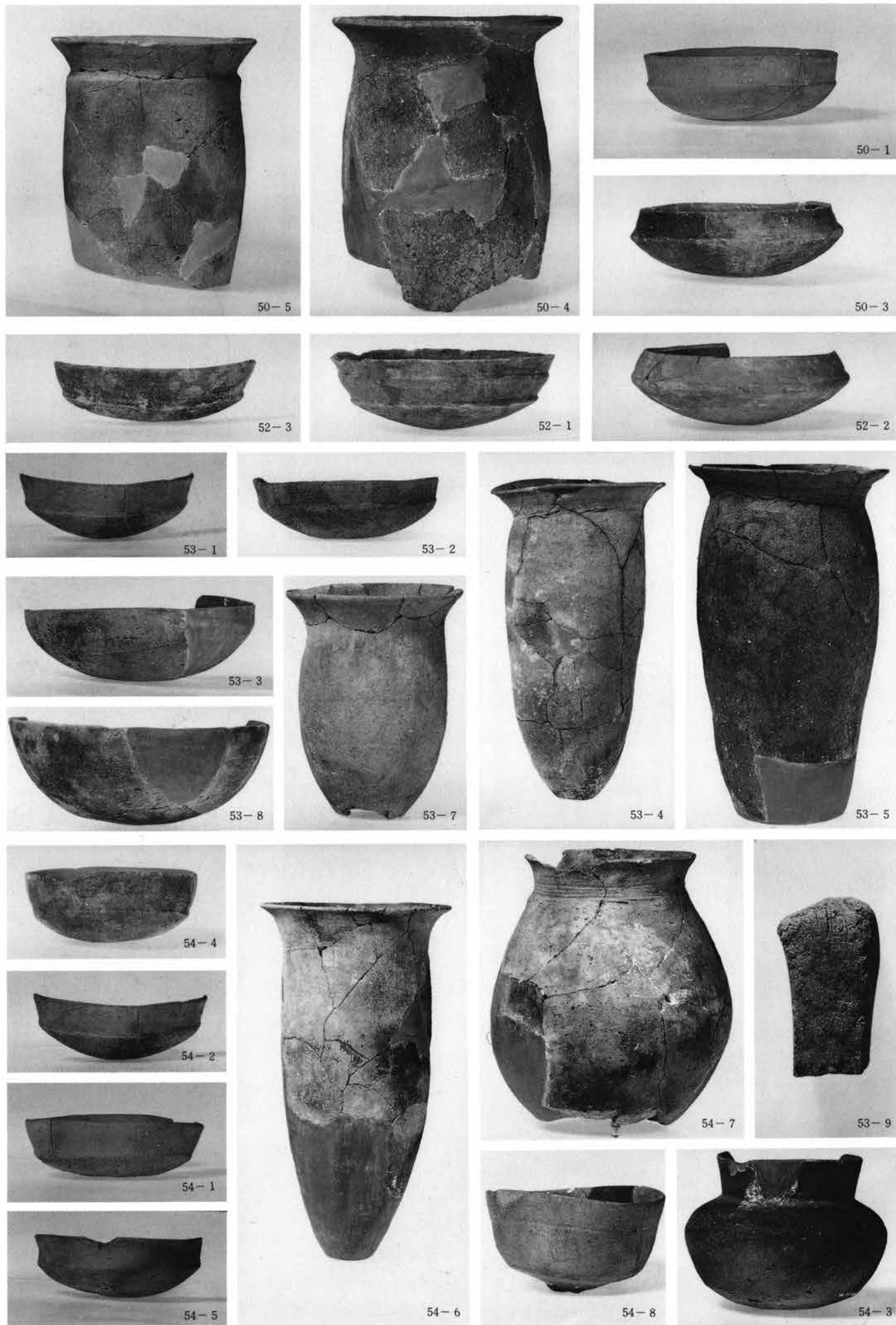
51-1



51-3



51-2





1-1周



2-1周



3-1周



4-1周



5-6周



9-8周



10-8周



7-11周



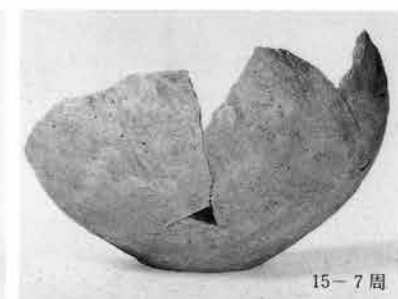
8-8周



7-8周



14-7周



15-7周



12-7周



13-7周



16-7周



17-9周



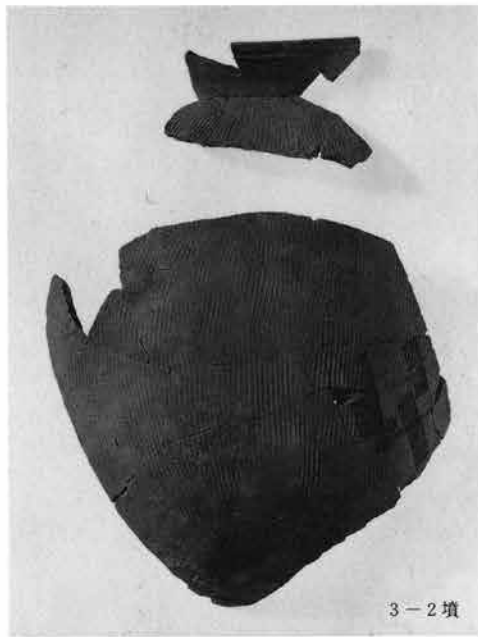
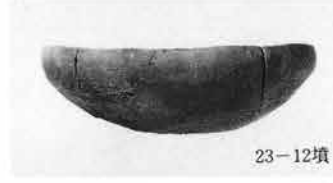
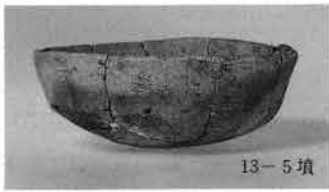
18-9周

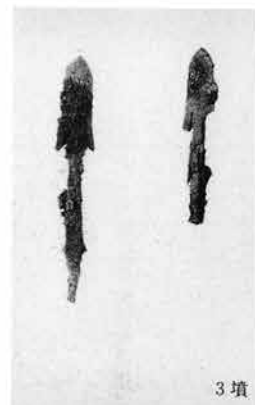
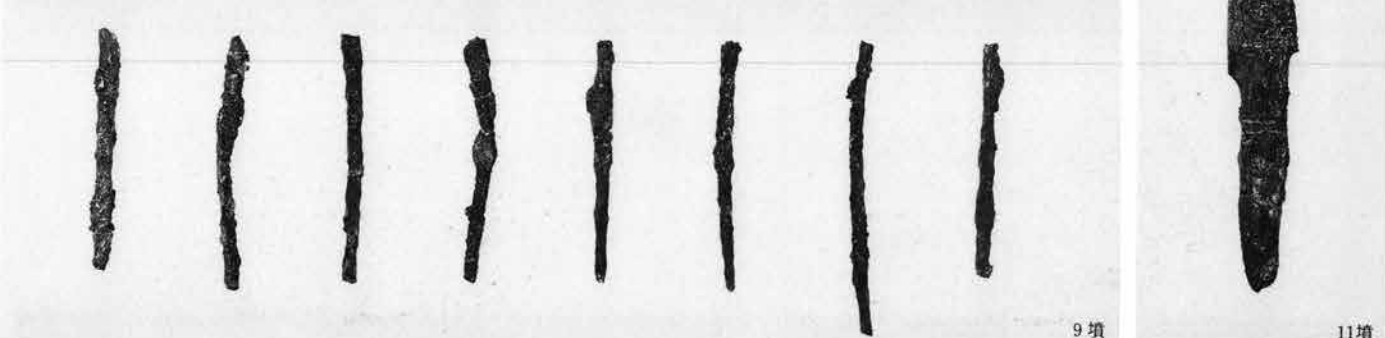
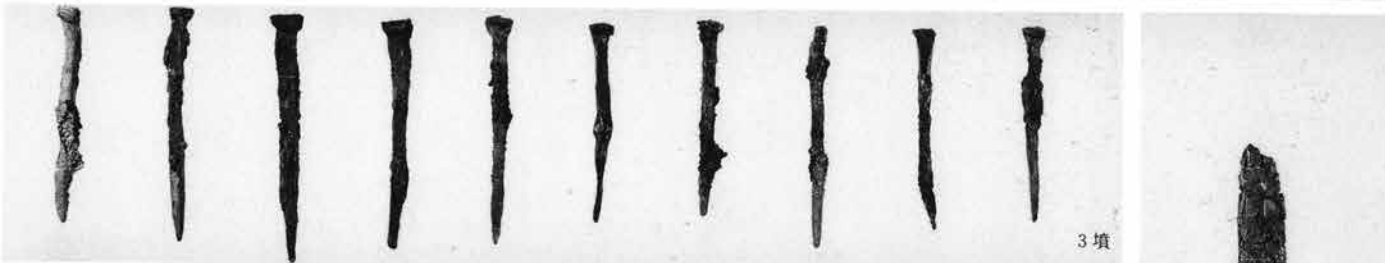
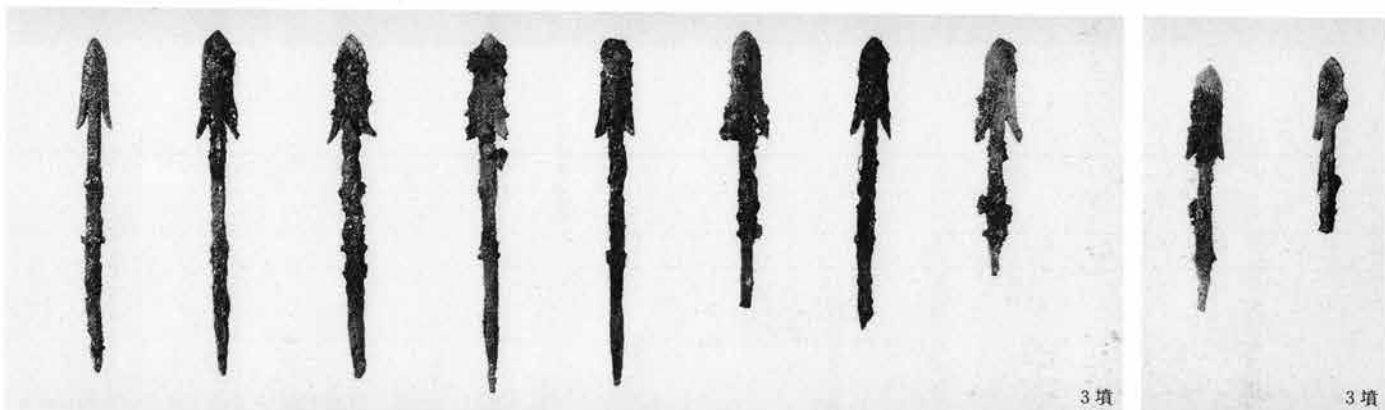
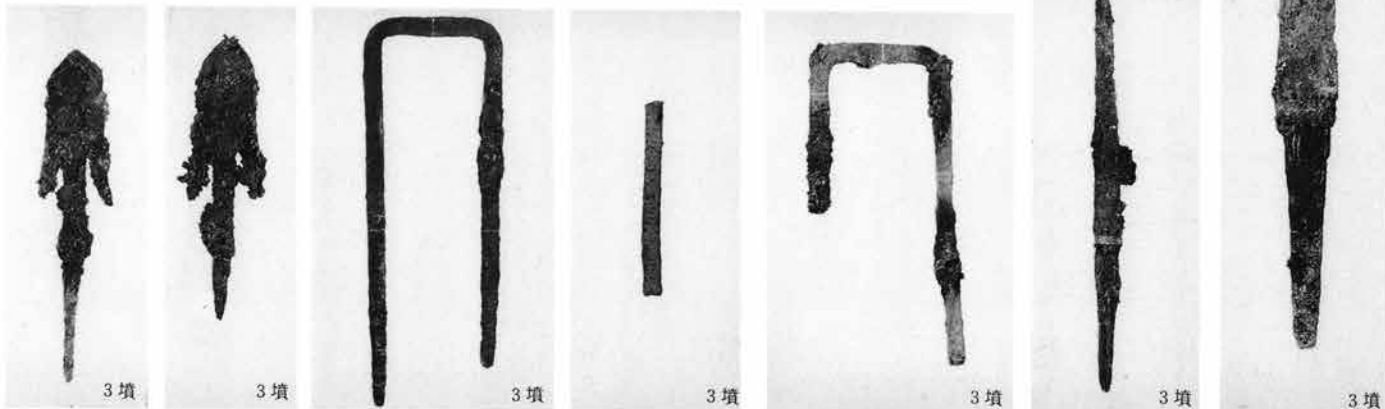
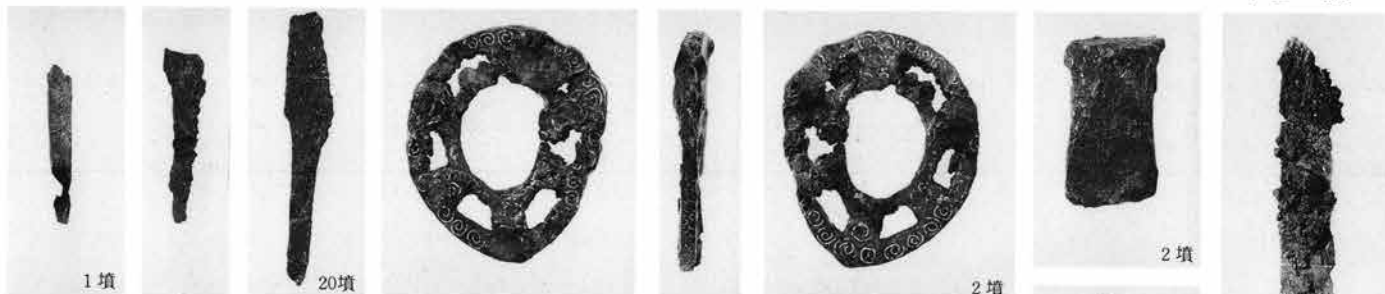


20-9周



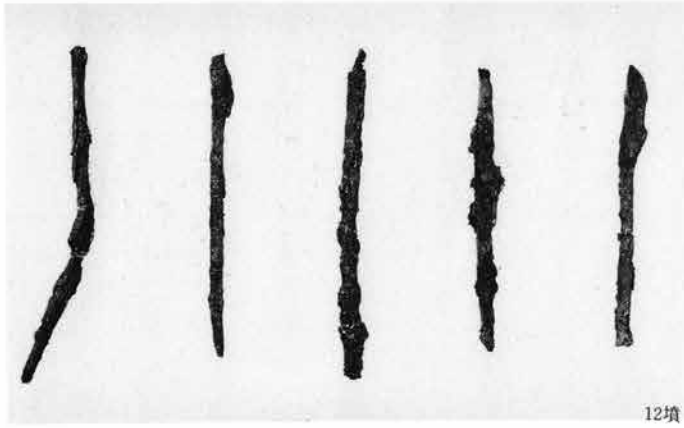
19-9周



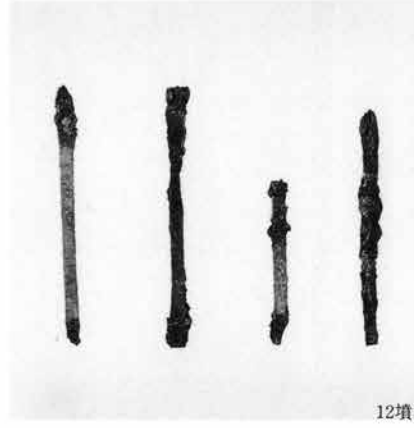




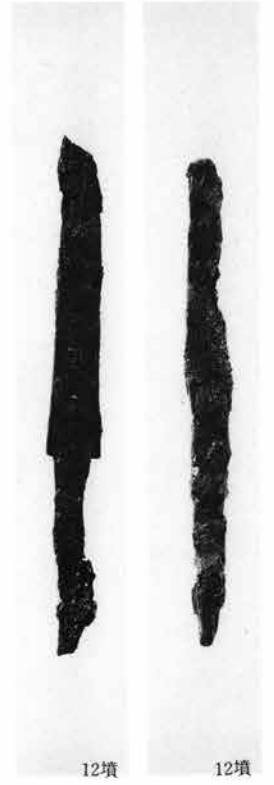
12墳



12墳

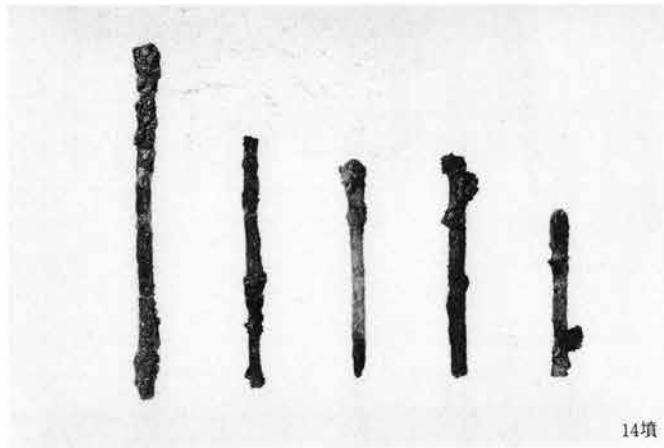


12墳

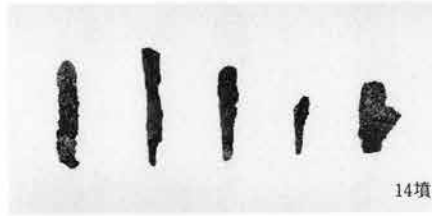


12墳

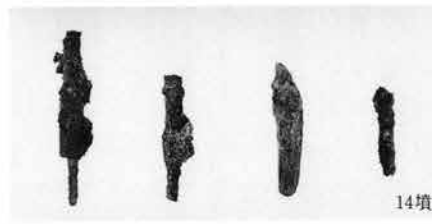
12墳



14墳



14墳



14墳

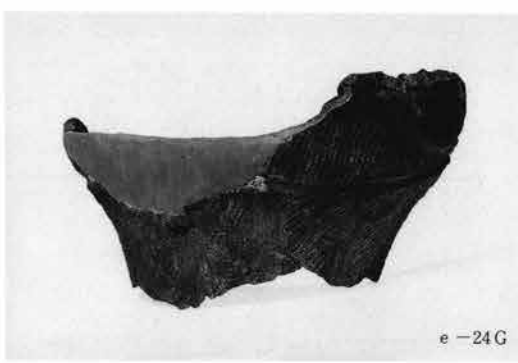


14墳

古墳出土遺物



e-24G



e-24G



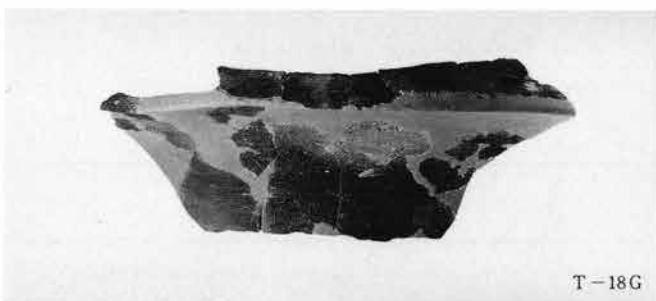
e-24G



R-32G



O-28G



T-18G



T-18G



35住



Q-31G



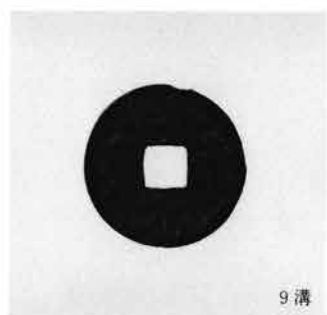
11溝



11溝

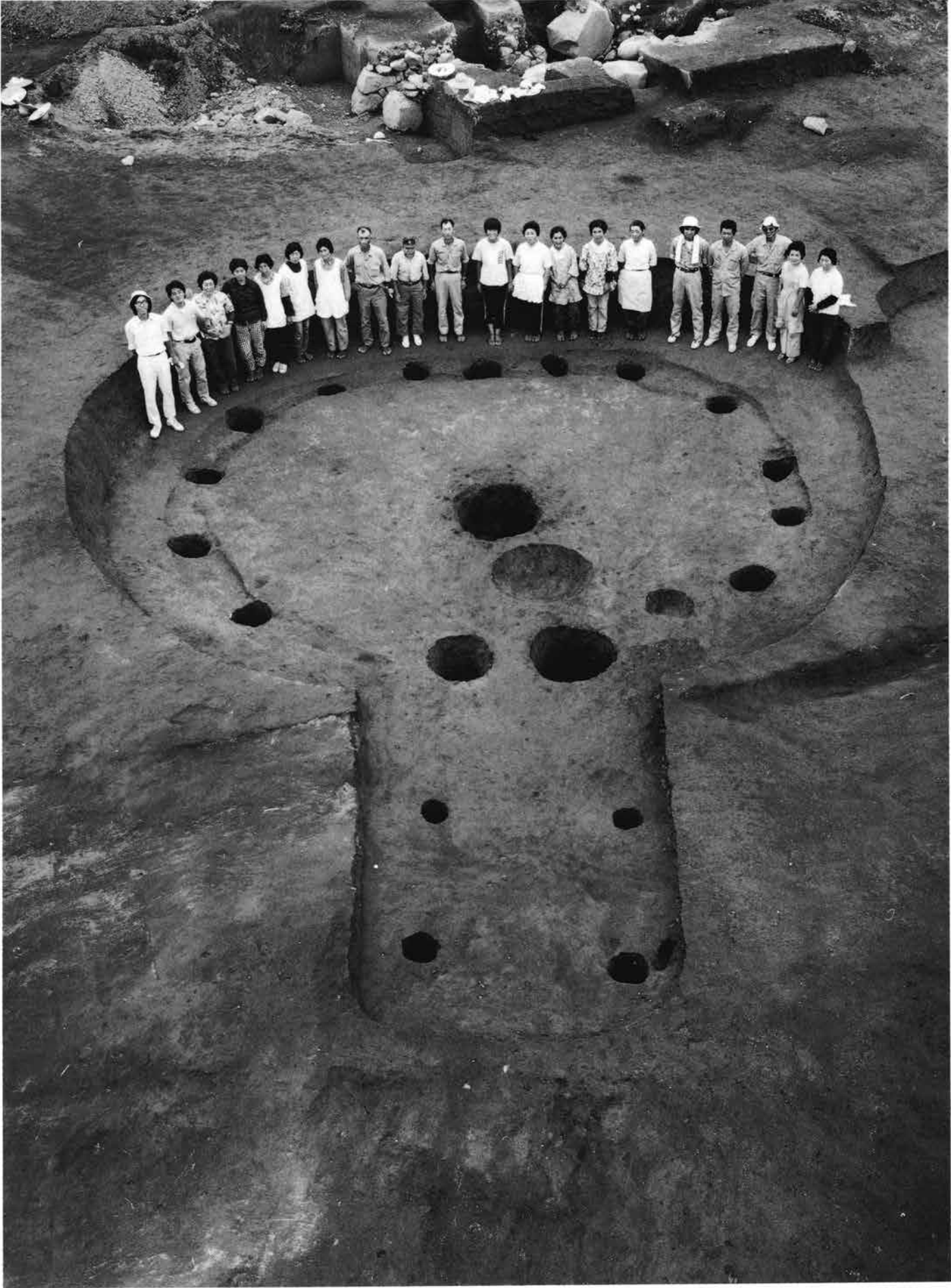


9溝



9溝

溝・遺構外出土遺物



荒砥二之堰遺跡 昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和60年3月26日 印刷

昭和60年3月30日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

付図1 荒砥二之堰遺跡発掘区域全体図

